

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第66集

おお け おき  
大 毛 沖 遺 跡

1996

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

愛知県一宮市は木曾川の左岸、愛知県と岐阜県の県境に位置しています。古代では美濃国の東山道から尾張国に入る交通の要所として重要な土地でもありました。現在のように河川改修が行き届くまでの木曾川は、幾度も洪水が起きその周辺に住む人々にとって苦勞の耐えない土地であったと思われます。

今回調査した大毛沖遺跡では遺跡のほぼ中央を縦断する流路が見つかりました。流路には古代の護岸施設が確認され、古代河川工事の高度な土木技術を垣間みることができました。流路から見つかった遺物には、古代の木製鐙や鉄製羽釜など全国的に見ても類例の少ない貴重な資料を得ることができました。このほか古代の集落、中世の集落、墓、道など豊富な遺構、遺物が見つかりました。

本書に掲載した調査結果が学術的に重要なものとして、地域誌研究に利用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、地元住民の方々をはじめ、関係者および関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成8年8月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター  
理事長 安部 功

# 例 言

1. 本書は愛知県一宮市大字大毛に所在する大毛沖遺跡（愛知県遺跡番号02100）の調査報告書である。
2. 調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として実施し、日本道路公団・愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成5年（1993）～平成7年（1995）まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査区担当者などは別表を参照。
3. 調査にあたっては以下の関係機関のご協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団、愛知県土木部、一宮市博物館。
4. 発掘調査においては以下の方々の協力を得た。（敬称略）  
寺沢なつ江（発掘調査補助員、現知立市教育委員会）、五藤そのみ・堀坂智美（以上発掘調査補助員）
5. 本書の執筆は高橋信明（調査課課長補佐兼主査）、小池一徳（同調査研究員、現県立東郷高等学校教諭）栗林典昭（同調査研究員、現木曾川町立木曾川西小学校教諭）、牧謙治（同調査研究員、現県立木曾川高等学校教諭）、服部俊之・堀木真美子・鬼頭剛・永井宏幸（以上同調査研究員）、竹ノ脇智子（調査研究補助員）が担当し、その分担は目次に記した。また、4. 6は久保禎子氏（一宮市博物館学芸員）より、5. 2. 4は森勇一氏（県立明和高等学校教諭）より、5. 3. 1は三辻利一氏（奈良教育大学教授）より玉稿を賜った。さらに5. 3. 2には矢作健二氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）による分析結果を掲載することができた。なお出土遺物の写真撮影には牛嶋茂氏、深川進氏の手を煩わせた。
6. 遺物整理および本書の作成においては以下の方々の協力を得た。（敬称略）  
竹ノ脇智子（調査研究補助員）、加藤明美・竹川裕美子・土井てる子・中村たかみ・早川久美（以上整理補助員）
7. 本書の作成にあたっては、以下の方々、関係機関のご教示、ご協力を賜った。（以下敬称略）  
工楽善道・斉藤孝正・城ヶ谷和広・藤澤良祐・光永真一・土本典生・渡辺博人・中嶋隆  
・岡本直人・久野正博・北野信彦・中野晴久・立松彰・森達也・下村信博  
奈良国立文化財研究所・岡山県古代吉備文化財センター・静岡県浜北市教育委員会  
・静岡県新居町教育委員会・岐阜県各務原市埋蔵文化財調査センター・小牧市教育委員会  
・元興寺文化財研究所
8. 調査に使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠する。
9. 調査記録・出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管。
10. 編集は永井が担当した。

# 総目次

---

序

例言

挿図目次

挿表目次

- 1. 調査の概要 . . . . .
- 1. 1 調査の経緯 (3)
- 1. 2 環境 (4)
- 1. 3 調査の概要 (9)
- 2. 遺跡の概要 . . . . .
- 2. 1 基本層序 (15)
- 2. 2 遺跡の概要 (17)
- 3. 遺構 . . . . .
- 3. 1 古代の遺構 (23)
- 3. 2 中世の遺構 (30)
- 3. 3 旧流路 (45)
- 3. 4 その他の遺構 (53)
- 4. 遺物 . . . . .
- 4. 1 古代以前の土器 (57)
- 4. 2 古代の土器 (58)
- 4. 3 中世の土器 (77)
- 4. 4 旧流路の土器 (101)
- 4. 5 文字・記号表記資料 (110)
- 4. 6 貿易陶磁器 (116)
- 4. 7 加工円盤、陶丸 (118)
- 4. 8 土 錘 (122)
- 4. 9 木製品 (129)
- 4. 10 石製品 (136)
- 4. 11 金属製品 (137)
- 4. 12 その他、特殊遺物 (140)
- 5. 自然科学 . . . . .
- 5. 1 自然環境 (143)
- 5. 2 歴史時代の自然環境 (154)
- 5. 3 生活環境 (160)
- 5. 4 樹木の利用 (185)
- 5. 5 愛知県一宮市大毛沖遺跡より得られた昆虫群集について (188)
- 5. 6 生産活動 (蛍光X線・重鉍物) (195)
- 6. まとめ (231) . . . . .
- 7. 付論 . . . . .
- 7. 1 古代の木製鏡について (237)
- 7. 2 大毛沖遺跡からみた古代の土器 (244)

付表

図版

あとがき

報告書抄録

## 挿図目次

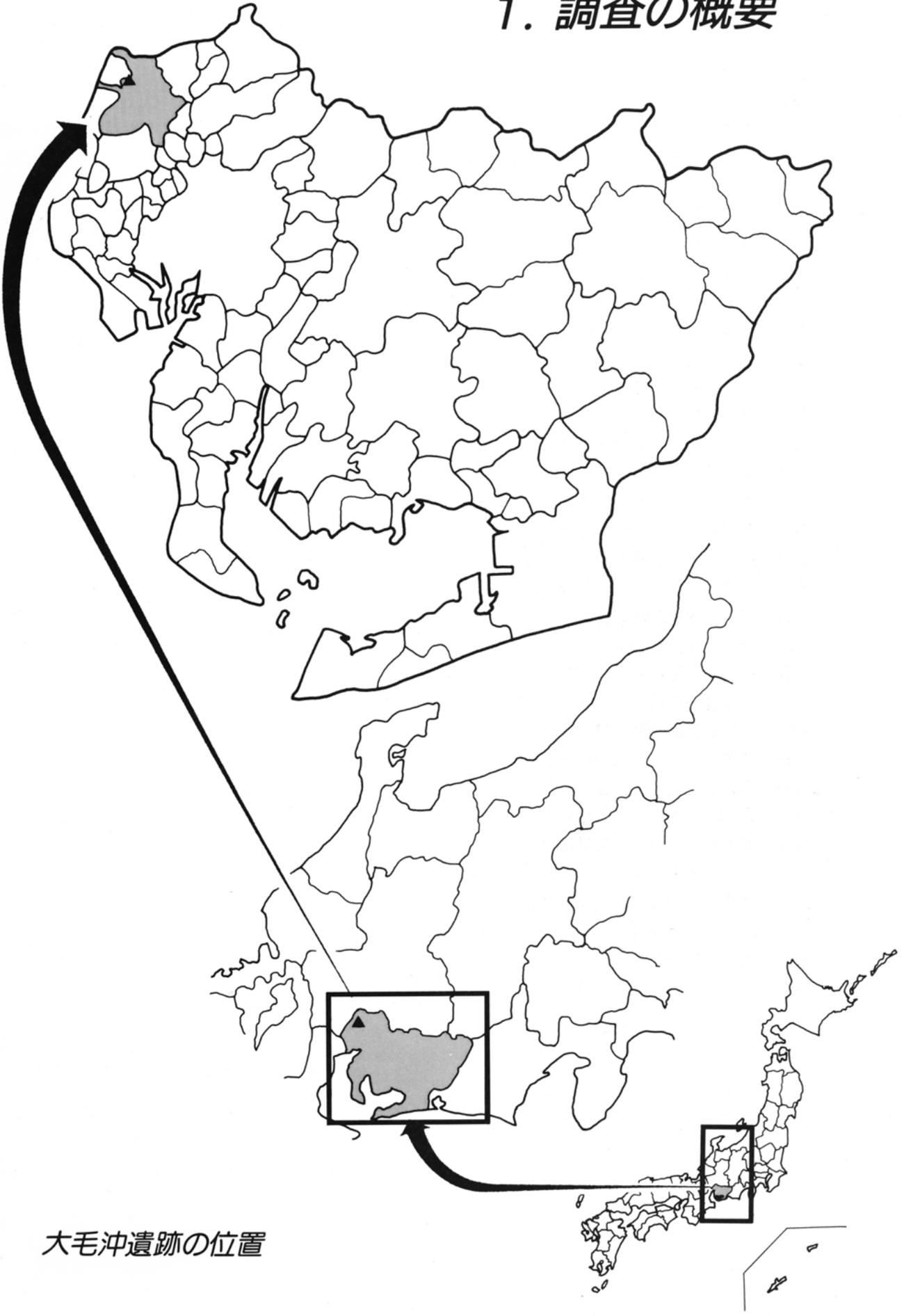
- 図1 遺跡の調査前と調査後(写真)  
図2 遺跡周辺の地形図  
図3 大毛沖遺跡と周辺の遺跡  
図4 調査区位置図  
図5 調査風景1(写真)  
図6 調査風景2(写真)  
図7 沖、池田の遺構面模式図  
図8 古代の住居集成図  
図9 古代主要遺構全体図  
図10 93ASB09実測図(古代I期)  
図11 94CSB06実測図(古代II期)  
図12 94ISB02実測図(古代III期)  
図13 94FSB03実測図(古代IV期)  
図14 93ASD07実測図  
図15 中世「ミチ」のイメージ  
図16 中世主要遺構図(1)・(2)  
図17 93F墓域区画溝、集石A実測図  
図18 94HSB01実測図  
図19 木組み井戸模式図  
図20 93ASK04・93GSE05実測図  
図21 94ISE02実測図  
図22 94HSE07・93CSE03実測図  
図23 居住域I遺構変遷図  
図24 居住域II・III遺構図  
図25 畝状遺構と昆虫土坑  
図26 方形土坑長軸の方位  
図27 93ASX01実測図  
図28 旧流路の位置と断面図  
図29 旧流路層序模式図と主要出土遺物  
図30 河川構造図とそだ沈床工法図  
図31 94GSX01実測図  
図32 低水位護岸施設(写真)  
図33 94GSX02出土状況写真と断面図  
図34 94GSX02実測図  
図35 島畑状遺構(写真)  
図36 島畑状遺構と『明治17年地籍図』  
図37 古代以前の土器実測図  
図38 古代の土器分類図  
図39 古代I期土器実測図  
図40 古代II期土器実測図  
図41 古代IIIa期土器実測図(1)  
図42 古代IIIa期土器実測図(2)  
図43 古代IIIa期土器実測図(3)  
図44 古代IIIb期土器実測図(1)  
図45 古代IIIb期土器実測図(2)  
図46 古代II~III期土器実測図  
図47 古代IVa~IVb期土器実測図(1)  
図48 古代IVa~IVb期土器実測図(2)  
図49 古代IVb~IVc期土器実測図  
図50 遺構外出土の古代土器実測図(1)  
図51 遺構外出土の古代土器実測図(2)  
図52 中世土器の分類図  
図53 中世0~I期土器実測図  
図54 中世Ic期土器実測図  
図55 中世Ic~II期土器実測図  
図56 中世IIa期土器実測図(1)  
図57 中世IIa期土器実測図(2)  
図58 中世IIa期土器実測図(3)  
図59 中世IIa期土器実測図(4)  
図60 中世IIb期土器実測図(1)  
図61 中世IIb期土器実測図(2)  
図62 中世IIb期土器実測図(3)  
図63 中世II期土器実測図(1)  
図64 中世II期土器実測図(2)  
図65 中世III期土器実測図  
図66 中世IIIc~IV期土器実測図  
図67 中世IV期土器実測図(1)  
図68 中世IV期土器実測図(2)  
図69 中世IV期土器実測図(3)  
図70 遺構外出土の中世土器実測図  
図71 旧流路I~IIa層土器実測図  
図72 旧流路IIb層土器実測図  
図73 旧流路IIc層土器実測図  
図74 旧流路II層土器実測図(1)  
図75 旧流路II層土器実測図(2)  
図76 旧流路IIIa層土器実測図(1)  
図77 旧流路IIIa層土器実測図(2)  
図78 旧流路IIIb層土器実測図  
図79 卒塔婆・ヘラ記号土器実測図  
図80 墨書土器実測図

- 図81 貿易陶磁器実測図  
 図82 貿易陶磁器器種構成図  
 図83 陶丸・加工円盤実測図  
 図84 陶丸・加工円盤グラフ  
 図85 民俗資料の地曳網に装着された漁網錘  
 図86 土錘の計測値の傾向－長さ／幅  
 図87 土錘の計測値の傾向－孔径／重量  
 図88 12世紀後半の土錘計測値の傾向  
 図89 民俗資料の夜川網  
 図90 民俗資料の刺網  
 図91 土錘実測図  
 図92 鏡各部位名称図  
 図93 木製鏡実測図  
 図94 木製品実測図（1）  
 図95 木製品実測図（2）  
 図96 木製品実測図（3）  
 図97 木製品実測図（4）  
 図98 砥石実測図  
 図99 小刀実測図  
 図100 鉄製羽釜実測図  
 図101 銭貨拓影図  
 図102 特殊遺物実測図  
 図103 大毛沖遺跡および旧流路位置  
 図104 大毛沖遺跡模式層序断面図  
 図105 94A・94B南北断面図  
 図106 94B・94E・94F東西断面図  
 図107 94H東西および南北断面図  
 図108 旧流路断面図（1）  
 図109 旧流路断面写真  
 図110 旧流路断面図（2）  
 図111 濃尾地震による砂脈の分類  
 図112 94Dの地震痕  
 図113 93Gの地震痕  
 図114 94Gの地震痕  
 図115 93Cの地震痕  
 図116 ボーリング柱状図  
 図117 地層の変形過程の模式図  
 図118 分析試料採取位置図  
 図119 各調査区試料採取層序および位置図  
 図120 93A主要珪藻化石の層位分布  
 図121 93ASX01珪藻分析結果  
 図122 94G旧流路堆積物珪藻分析結果  
 図123 93A花粉化石群集の層位分布  
 図124 94G旧流路堆積物花粉化石の層位分布  
 図125 94G護岸施設の植物珪酸体組成  
 図127 Rb-Sr およびK-Ca分布図（1）  
 図128 Rb-Sr およびK-Ca分布図（2）  
 図129 Rb-Sr およびK-Ca分布図（3）  
 図130 Rb-Sr およびK-Ca分布図（4）  
 図131 遠江地域の窯出土遺物  
 図132 美濃須衛窯出土遺物（1）  
 図133 美濃須衛窯出土遺物（2）  
 図134 美濃須衛窯出土遺物（3）  
 図135 美濃須衛窯出土遺物（4）  
 図136 尾北窯出土遺物（1）  
 図137 尾北窯出土遺物（2）  
 堀之内花ノ木遺跡出土遺物  
 図138 清洲城下町遺跡出土遺物  
 図139 名古屋城三の丸遺跡出土遺物  
 図140 大毛沖遺跡出土遺物（1）  
 図141 大毛沖遺跡出土遺物（2）  
 図142 大毛沖遺跡出土遺物（3）  
 図143 大毛沖遺跡出土遺物（4）  
 図144 大毛沖遺跡出土遺物（5）  
 図145 大毛沖遺跡出土遺物（6）  
 図146 大毛沖遺跡出土遺物（7）  
 図147 土師器甕分類図  
 図148 試料の胎土重鉱物組成  
 図149 試料の胎土重鉱物組成（分類別）  
 図150 鏡に共伴する旧流路Ⅱb層出土資料  
 図151 木製鏡集成図（1）  
 図152 木製鏡集成図（2）  
 図153 木製鏡集成図（3）  
 図154 古代の土器基準資料（1）  
 図155 古代の土器基準資料（2）  
 図156 古代の土器基準資料（3）  
 図157 古代の土器基準資料（4）  
 図158 古代の土器基準資料（5）  
 図159 古代の土器基準資料（6）  
 図160 古代の土器基準資料（7）  
 図161 古代の土器基準資料（8）

## 挿表目次

- 表1 大毛沖遺跡関連年表
- 表2 調査進行表
- 表3 古代大毛沖編年と関連編年対比表
- 表4 中世大毛沖編年と関連編年対比表
- 表5 墨書土器一覧表(1)
- 表6 墨書土器一覧表(2)
- 表7 貿易陶磁器一覧表
- 表8 陶丸・加工円盤(1)一覧表
- 表9 加工円盤一覧表(2)
- 表10 土錘の形態分類表
- 表11 土錘一覧表(1)
- 表12 土錘一覧表(2)
- 表13 試料採取場所および分析対象
- 表14 科・属レベルに含まれる種群
- 表15 93A珪藻分析結果
- 表16 93ASX01珪藻分析結果
- 表17 94G旧流路珪藻分析結果(1)
- 表18 94G旧流路珪藻分析結果(2)
- 表19 94G旧流路珪藻分析結果(3)
- 表20 94G旧流路珪藻分析結果(4)
- 表21 93A花粉分析結果
- 表22 94G旧流路花粉分析結果
- 表23 94G護岸施設トレンチ南壁プラントオパール分析結果
- 表24 出土木製品樹種一覧
- 表25 遺跡から産出した昆虫化石
- 表26 遺跡より産出した昆虫群集と古環境
- 表27 窯跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(1)
- 表28 窯跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(2)
- 表29 遺跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(1)
- 表30 遺跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(2)
- 表31 遺跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(3)
- 表32 試料の胎土重鉍物分析結果
- 表33 木製鏡出土遺跡一覧表

# 1. 調査の概要



大毛沖遺跡の位置

## 要 旨

大毛沖遺跡は、愛知県一宮市大字大毛一帯に広がる木曾川とその支流によって形成された自然堤防およびその後背湿地に所在する遺跡。遺跡は、平成4年度に東海北陸自動車道建設に伴い実施した範囲確認調査によって遺跡の性格が判明し、その成果を受けて平成5年度から平成7年度にかけて発掘調査を行った。総面積は37,612㎡、ちょうど仮称一宮北インター建設予定地に当たる部分。東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査は、現在も継続して実施しており、尾張北西部における考古学的成果が空白地域であった場所だけに、今後の発掘調査により新たな歴史像が加えられるであろう。

## 目 次

- 1. 調査の概要
  - 1. 1 調査の経緯 ……………高橋信明
  - 1. 2 環 境
    - 1. 2. 1 地理的側面 ……………永井宏幸
    - 1. 2. 2 歴史的側面 ……………牧 謙治
  - 1. 3 調査の概要
    - 1. 3. 1 調査の経過 ……………栗林典昭
    - 1. 3. 2 93A～G区 ……………永井
    - 1. 3. 3 94A～I区・95A区…永井

## 1.1 調査の経緯

大毛沖遺跡は、愛知県の北西部に位置する一宮市大毛から葉栗郡木曾川町門間にかけて広がる古代から中世の集落遺跡。大毛は一宮市と木曾川町の接する地区に位置し、遺跡付近では標高9m前後を測る。現況は水田を中心に住宅、工場が点在する。また、遺跡を南北に縦断する「名岐バイパス」は朝夕問わず交通量が多く、名古屋と岐阜をつなぐ重要な幹線となっている。

遺跡は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査で、平成4年度に大毛地区の遺跡確認調査によって判明した。調査は日本道路公団、県土木部から県教育委員会を通じ、大毛沖遺跡の発掘調査および報告書の作成を(財)愛知県埋蔵文化財センターが委託した。

調査の対象となった大毛地区はちょうど仮称一宮北インターにあたり、そのほぼ全面に遺跡が広がっていることが確認調査によって判明していた。大毛沖遺跡と北西に隣接する大毛池田遺跡の間には大きな谷地形(調査の結果、旧流路と判明)の存在が想定され、遺跡を暫定的に二分した。

東海北陸自動車道建設に伴う事前調査は、平成2年度の西上免遺跡を皮切りに断続的に行われ、平成5年度に行った大毛沖、大毛池田遺跡などの調査により調査面積が激増した。平成8年度現在も八王子遺跡など自動車道建設路線内の事前調査は続いている。



調査前



調査後

図1 遺跡の調査前と調査後

## 1.2 環 境

### 1.2.1 地理的側面

大毛沖遺跡は、一宮市大字大毛に所在する。一帯は、「せんの街」一宮の郊外にあたり、田畑、工場あるいは住宅地などが広がる名古屋市のベッドタウンである。ちょうど大毛沖遺跡を北西から南東に縦断するように国道22号（新名岐国道）が走り、愛知と岐阜を結ぶ大動脈として、トラックなどが昼夜を問わず往来する。東名・名神高速道路が昭和40年に全線開通し、新名岐国道が翌年開通する。昭和30年代、この地域一帯が耕地整理を契機に、交通網の整備が拍車をかけ、中世から近世まで続いたのどかな田園風景は消えようとしている。

**河成平野** 大毛沖遺跡の位置する地形的景観は、木曾川によって形成された河成平野として捉えられる\*1。この河成平野である濃尾平野は、扇状地、自然堤防-後背湿地およびデルタという地形要素の組み合わせからなる。大毛沖遺跡は、扇端部辺りから始まる自然堤防-後背湿地に立地する。標高は現況で9m前後を測る。木曾川水系には幾つもの旧流路がある。北西から順に示せば、1986年以前の木曾川本川（現境川）、1607年以前の黒田川、一之枝川、二之枝川、三之枝川などがあり、これらはすべて旧木曾川派川に沿うものである。このうち黒田川と一之枝川に挟まれた自然堤防-後背湿地に大毛沖遺跡は位置している。大毛沖遺跡は、おそらく黒田川の氾濫原、“カワ”\*2の中に位置し、網の目状に発達した流路によって形成された自然堤防が居住域、後背湿地が水田を中心とする生産域として捉えられよう。

**“カワ”の  
生い立ち** では、大毛沖遺跡の“カワ”はどのように捉えられるのであろうか？まず、その成り立ちを追いながら見てゆこう。“カワ”の始まりは、出土遺物から7世紀代まで遡ることが可能である。そして、大毛沖遺跡の北西に隣接する大毛池田遺跡との間にある谷地形の始まりを右岸、大毛沖遺跡を縦断する8世紀から12世紀まで続く流路を左岸として捉えた場合、その横断幅は約200~250mとなる。

流路の変遷は右岸から左岸へ移行する過程がみられ\*3、その際形成された自然堤防上に7世紀から10世紀代の集落が展開する。9世紀以降は流路も安定していたようで、8世紀後半として捉えた護岸施設から大規模な河川改修が行われた可能性も示唆できる。また、12世紀末以降、中世段階には“カワ”から湿地化へ移行する。そしてこの窪地は湿原となり、中世以降水田として利用され、周辺の自然堤防では「内畑」が広がる景観となる。

---

\*1大矢雅彦『河川地理学』1993を参考にした。

\*2“カワ”とは、ある河川をとりまく流路・自然堤防・後背湿地を含めたものとして捉えたい。

\*3詳しくは5.1.1「大毛沖遺跡の地形・地質」を参照。

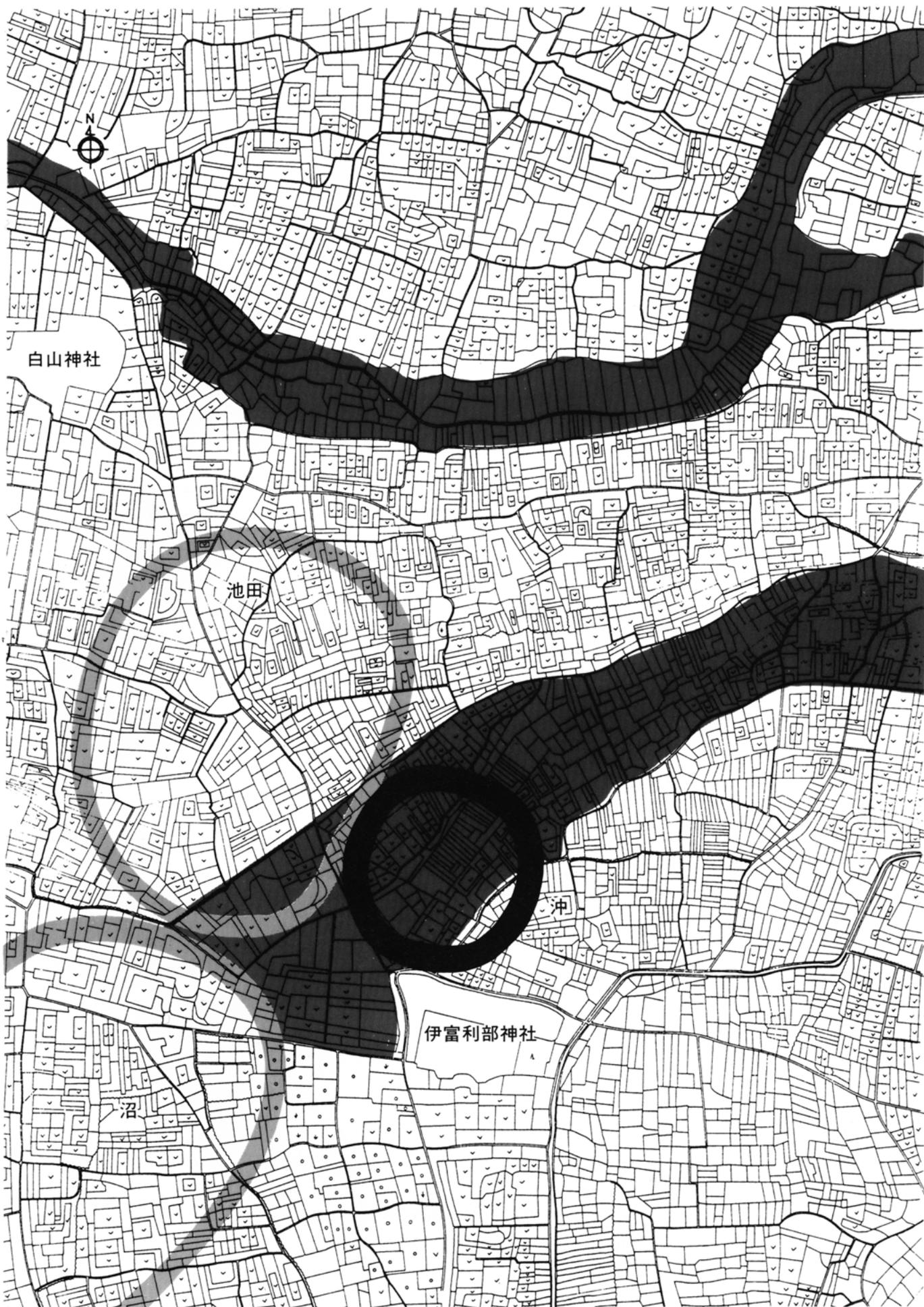


図2 遺跡周辺の地形図 S=1/5,000

※明治17年地籍図より作成

## 1. 2. 2 歴史的側面

**浅井古墳群** 大毛沖遺跡近辺には門間古墳（伊富利部神社内）や門間沼遺跡の円墳群、今伊勢古墳群、浅井古墳群などがある。特に浅井古墳群については後期の群集墳という性格だけでなく、当時における葉栗郡の中心部（郡豪）があったのではないかと考えられている。この古墳時代の発展を支えていたのは河川であったと思われる。5世紀後半に凡海郡や敢石郡などの漁労を行う部民がいたことや水運などにより浅井古墳群の被葬者が権力を得ていたと推測されることからそれはうかがえる。しかし河川は必ずしも繁栄をもたらすだけのものではなかった。

**黒岩廃寺** 『日本書紀』のなかには洪水の記事がみえる。678年に葉栗巨人曆によって建立された光明寺とされている黒岩廃寺は、洪水により壊滅したことが知られている。また大毛沖遺跡だけでなく周辺の遺跡でも洪水性の堆積により遺構が消滅している時期があることが確認されている。つまり720年以前に葉栗郡内の郷は成立（大毛郷も含まれる）してはいたが河川の氾濫により不安定な要素を抱えていたといえよう。

**葉栗庄** 生産の基盤である田畠もかなり荒廃していたらしく、752年に成立した東大寺領葉栗庄の田畠の面積は4町と近隣の東大寺領と比べ低い数値を示している。尾張国における東大寺領は墾田を各郡が開き東大寺へ施入していたことが知られている。その性格から考えると4町の田畠しか開くことができなかつたと見て取ることができよう。

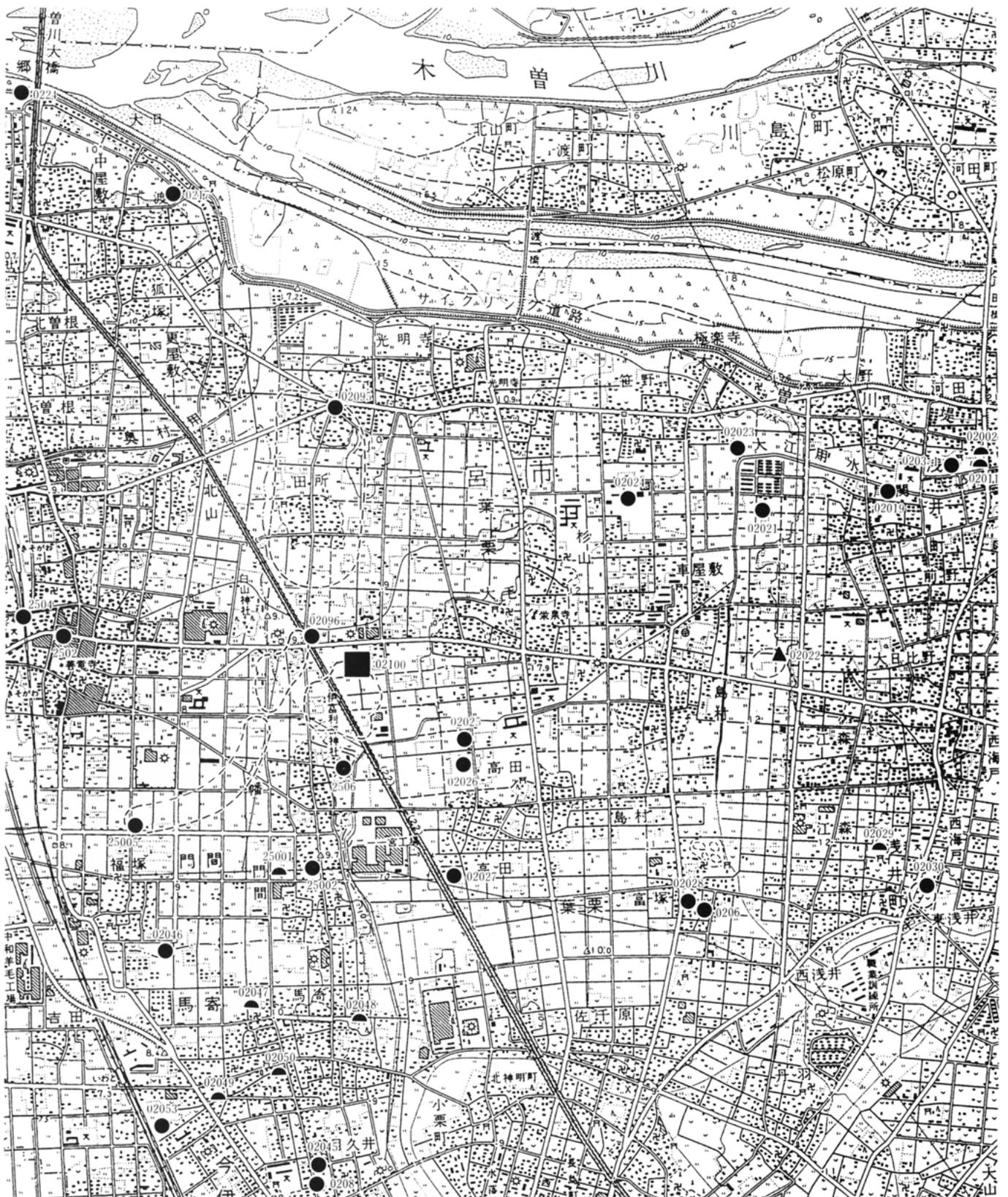
**河川改修** このように洪水の影響が生産に及んでいたため河川改修工事が行われ、その形跡が大毛沖遺跡にも見られる。この河川改修を指揮していたのは郡司であったことは広野河事件からも推測され、土木事業をきっかけに郡司が支配権を拡大していた様子がうかがえる。後に葉栗庄の面積は数倍に増えるものの、東大寺は現地の管理者や農民を把握してなかつたので葉栗庄は消滅していく。おそらく、郡司などの現地における支配者が河川改修などを通じて土地、農民を支配し私有化していったためであろう。

**上門真庄** そういった私有地（荘園）が権力者の下に集積し大規模な寄進地系荘園が成立する。長講堂領上門真（間）庄である。上門真庄は12世紀末に成立しており、四至は明らかではないが現存する文献より広範囲におよぶ荘園であったことが知られている。また、「長講堂領目録」より上門真庄から京に送られていた品物がみえる。「瓷器」すなわち灰釉陶器。上門真庄付近で窯業生産の行われた形跡はないので近隣する窯業生産地（尾北窯など）より購入して運び込まれた可能性が高い。

**鎌倉街道** 交通路としては古代より整備されてきた街道が使われていたのであろう。特に鎌倉街道は上門真庄の中を通過していたと推定されている。大毛沖遺跡でも13世紀後半から集落が鎌倉街道に近い大毛池田遺跡に移動していることから流通の中心が大毛池田遺跡の方であったと考えられる。現地支配においては御家人の尾塞氏が大毛を含む数カ所の名主職を得ていたように在地武士による支配が行われていた。そして上門真庄の支配権が六角高頼・臨川寺と移り、現地における影響力が低下するのに伴い在地領主による荘園の領地化が進んでいったと考えられる。

西 曆	年 号	事 項
5c後半～		葉栗郡に凡海部・敢石部・石作部・穴太部・伊富利部などの部が設置される。
5c末～		尾張連、尾張国造に任じられる。
672	天武元	壬申の乱。尾張の兵2万が大海人皇子方に参加。
678	7	この頃、葉栗臣人麿、光明寺（黒岩廃寺？）を建立と伝える。
684	13	壬申の乱の功績に対し天武天皇、尾張・伊賀・伊勢・美濃に、以降調年に役を、役年には調を免除することと定める。
7c後半～		葉栗郡に、この頃から奈良時代にかけて黒岩廃寺、東流廃寺、音楽寺が建立される。
706	慶雲3	笠朝臣麻呂、美濃守に任ぜらる。この前後に国名「美濃」が用いられる。この頃に老洞・朝倉窯で刻印須恵器が生産される。
710	3	平城京遷都。
720	養老4	12- 「尾張國葉栗郡若栗郷□□里敢石部赤猪」と記された年米納入木簡が奈良県平城宮跡から出土している。
733	天平5	尾張国正税帳この年の葉栗郡の定穀18,657石8斗7升。郡の主帳は伊福部大磨。
752	天平勝宝4	8-27 尾張の知多郡を除く6郡、田地を東大寺に勅施入。東大寺領葉栗庄のはじまり。
769	神護景雲3	鶺鴒沼川（木曾川）大洪水。河道没して葉栗・中嶋・海部郡の百姓の田宅に被害をおよぼす。尾張守、旧河道開掘の申請を求める。
775	宝亀6	伊勢・尾張・美濃の河川、台風により氾濫。百姓300余人・馬牛1000余匹死没。国分寺などの堂塔19が倒壊。
793	延暦12	6- 諸国に新宮の門を造らせる。尾張美濃2国は股富門を造る。門名は伊福部氏に由来。
866	8	7- 広野河事件おこる。これより以前、広野河（木曾川）の流路尾張側に変更。このため旧河道掘削の作業中、美濃国各務郡領各務吉雄・厚見郡大領各務吉宗等、兵衆七百余人を率いて襲来し、工事を妨害。尾張の郡司・役夫を殺傷。
988	永延2	11-8 尾張国郡司・百姓等、守藤原元命の非法濫行を訴える。この頃、国司弾劾事件多発。
1180	治承4	源平の争乱はじまる。
1181	5	3-10 墨俣河合戦おこる。尾張の在庁官人の多くは平家に従い、大屋中三安資のみ源氏に従う。
1182～1195	寿永～建久	長講堂領上門真莊成立。
1190	建久元	平家没官領松枝保等に地頭を補任、葉栗・丹羽の御家人大毛を領する。
		源頼朝、京都からの帰途黒田宿に宿泊。
1220	承久2	11-29 西園寺公経、松枝莊を仲資王の所領と交換。
1238	4	10-13 尾塞季重、本領の相続につき、子息季親および衛門尉の間で折半すべき置文を記す。
1272	文永9	正-23 沙弥某、尾塞兵衛入道に対し尾塞の所領は嫡男松鶴に渡すべきよしを書き送る。
1274	11	文永の役。
1281	4	弘安の役。
1322	元亨2	西園寺実兼、黒田庄領家職を孫大宮季衡に処分。
1325	正中2	延暦寺、上門間庄の領家職半分の本加納を慈光寺仲経に返付。
1333	元弘3	後醍醐天皇の綸旨により黒田庄本家職、後伏見上皇管領下になる。
1351	2	土岐頼康、尾張守護となる。
1382	永徳2	2-22 業定王、松枝莊内破田郷を大徳寺如意庵に寄進。
1388	嘉慶2	5- 黒田宿合戦。尾張守護の座をめぐる土岐氏内訌。尾張守護土岐満貞、松枝庄破田郷本所半済を源頼康追善のため如意庵に寄進。
1390	明德元	6-14 松枝莊破田郷内の一宮領につき社家の現地立ち入りをめぐり社家と大徳寺の間で紛争おこる。
1395	2	足利義満、大宮実尚が相園寺に寄進した黒田庄南方を安堵。
1396	3	今川仲秋、尾張守護となる。
1400	7	斯波義重、尾張守護となる。以降斯波氏の尾張支配は戦国時代まで続く。
1407	14	慈光寺光仲・日野町資藤、上門間庄領家職を折半。
1418	25	正徹、黒田の知人を訪れ、しばらく当地に滞在。
1441	嘉吉元	後伏見院聖忌法事用途を黒田庄が行う。
1467	応仁元	応仁の乱おこる。斯波義敏は東軍、義廉は西軍に属し対立。
1473	5	これより以前、守護段銭が尾張で実施された。
1478	10	東軍の守護斯波義良（のち義寛）の代官織田敏定、尾張に入国し清須城に入る。清須城攻防戦ののち、岩倉方と和睦。以降、岩倉・清須両織田氏による尾張分割支配はじまる。
1487	長享元	10-22 足利義尚、六角高頼を討ち、没収した上門真莊を臨川寺に寄進。
1536	5	河野十八徒、親鸞絵像の安置をめぐる内紛。
1551	20	4- 嶋住人兼松弥四郎秀吉、熱田社に太刀を奉納。
1552	21	織田信秀病没。信長襲領。
		織田信長、齊藤道三と刈安賀聖徳寺で会見。
1555	弘治元	織田信長、清須城を奪い、ここに本拠を移す。

表1 大毛沖遺跡関連年表



- |       |        |       |        |       |       |        |       |               |        |
|-------|--------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|---------------|--------|
| 02100 | 大毛沖遺跡  | 0224  | 北方代官所跡 | 0217  | 下渡遺跡  | 02095  | 田所遺跡  | 02024         | 氏神東遺跡  |
| 02023 | 東出野立遺跡 | 02021 | 東高見遺跡  | 02019 | 奥屋敷遺跡 | 0203-1 | 浅井古墳群 | 浅井1号墳(小塞神社古墳) |        |
| 02002 | 浅井2号墳  | 02011 | 浅井24号墳 | 2504  | 黒田城跡  | 2502   | 善光寺跡  | 02096         | 大毛池田遺跡 |
| 25005 | 門間沼遺跡  | 2506  | 伊富利部古墳 | 02025 | 高田遺跡  | 02026  | 瓦ヶ野遺跡 | 02022         | 清郷遺跡   |
| 25001 | 門間古墳   | 25002 | 門間遺跡   | 02027 | 前田遺跡  | 02028  | 富塚遺跡  | 0206          | 富塚古墳   |
| 02029 | 浅井神社古墳 | 02030 | 森下遺跡   | 02046 | 福塚前遺跡 | 02047  | 稲荷山古墳 | 02048         | 岩戸遺跡   |
| 02050 | 西宮社古墳  | 02053 | 中切遺跡   | 02049 | 上野屋古墳 | 02045  | 目久井遺跡 | 0208          | 車塚古墳   |

国土地理院発行1:25000地形図(岐阜、一宮)使用

## 1.3 調査の概要

### 1.3.1 調査の経過

調査は、平成4年度の4・6・12月に行った試掘調査\*1を皮切りに、平成5年度～7年度の3か年にわたって実施した。調査区は、東海北陸自動車道の仮称一宮北インター建設予定地を南北に横断する国道22号線を境に、おおむね東側を平成5年度分、西側を平成6年度分とし、前者をA～Gの7調査区に、後者をA～Iの9調査区にさらに分割した。

調査区の総面積は、上記の調査区に平成7年度分のA区を含めて37,612㎡である。

調査方法は、現地表面から表土のみをバックホウで除去した後、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。また、各調査区とも湧水が激しいため、地下水を強制的に汲み上げるウェルポイントを使用して調査を行った。それぞれの調査区の担当者・調査期間等は下図に示すとおりである。遺構の測量にあたっては、各調査区ごとにヘリコプターによる航空写真測量を実施し、重要部分については手測りによる補助測量を行った。

なお、平成6年3月19日にはそれまでの成果をもとに現地説明会を開催し、地元の住民をはじめ研究者・発掘関係者等約400名の参加を得ることができた。

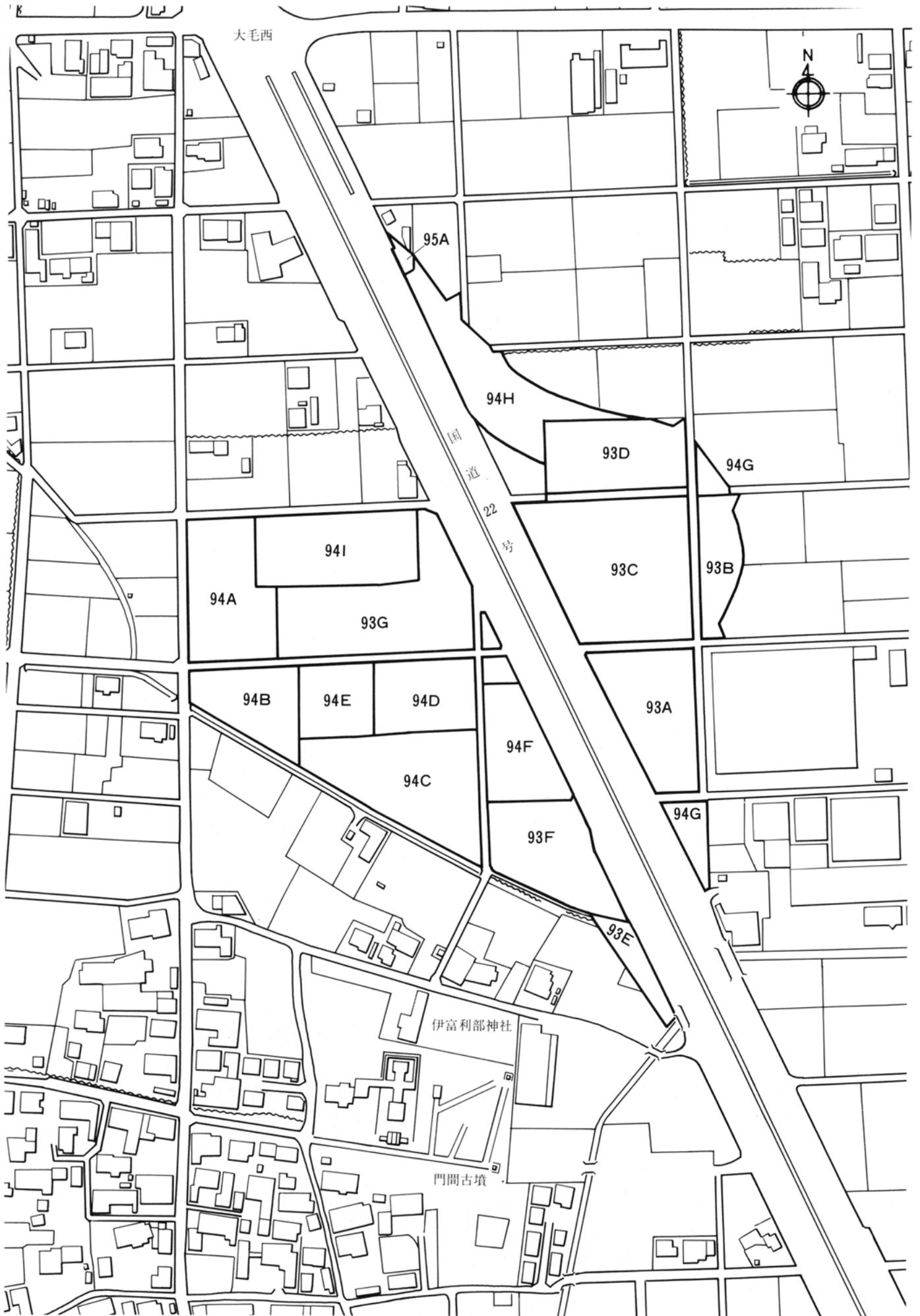
調査期間

調査面積

年度	調査区	調査担当者	調査期間(月)				面積(㎡)	備考
			6	9	12	3		
平成5	93A	服部信・永井・小池・栗林		■			2,697	計 17,112㎡
	93B	太田・高橋・栗林				■	1,177	
	93C	服部信・永井・小池・栗林	■				3,830	
	93D	太田・高橋・栗林				■	2,449	
	93E	太田・高橋・栗林・西原			■		653	
	93F	太田・高橋・栗林・西原			■		2,566	
	93G	服部信・永井・小池・牧			■		3,740	
平成6	94A	大竹・今西・飴谷・鬼頭	■				2,800	計 20,100㎡
	94B	前田・酒井・西原	■				1,800	
	94C	高橋・永井・小池・牧	■				3,600	
	94D	高橋・永井・小池・牧			■		2,000	
	94E	大竹・今西・飴谷・鬼頭		■			1,400	
	94F	高橋・小澤・増澤	■				1,800	
	94G	高橋・永井・小池・牧				■	1,300	
	94H	前田・酒井・西原		■			2,500	
	94I	高橋・小澤・増澤				■	2,900	
平成7	95A	前田・小澤・小池・早野		■			400	計 400㎡

表2 調査進行表

\*1 試掘調査の結果、凹地状の地形の両側に古代～中世の集落関係の遺構がそれぞれ展開していることが推定されたため、遺跡名を「大毛沖遺跡」と「大毛池田遺跡」とに分けて調査することにした。これ以前には、昭和39年5月、隣接する一宮市大字高田字前田地内において、畑の土取り作業中に灰釉陶器の椀と短頸壺が出土しているが、発掘調査は行っていない。『新編一宮市史資料編四』を参照。



### 1. 3. 2 93A～G区

古代Ⅰ期の竪穴住居と畝状遺構などを検出した。大毛沖遺跡のなかで最も古い遺構群に 93A区  
あたる。古代Ⅰ期とⅡ期の遺構面の間には洪水性の堆積が見られ、その上に古代から中世  
の遺構群が展開することがわかった。中世については、中世Ⅱ期の区画溝を伴う屋敷地を  
検出した。また、屋敷地の西側に広がる畝状遺構からは、昆虫土坑を確認した。害虫駆除  
に関連するものと考えられる。屋敷地の北西コーナーに位置するSX01からは、卒塔婆・梅  
檀の種子や煤が全面に付着した土器・河原石などが出土し、非日常的な遺物の廃棄状況が  
考えられる。

B区からは、11世紀前半の竪穴住居が検出された。なかでも、SB02に隣接した位置から 93B～D区  
出土した砥石は「五徳」として転用されており、特筆できる。

C区からは、長軸約12m・短軸約8mを測る方形遺構が4カ所で確認できた。これを取り  
巻くように中世Ⅱ期の溝がめぐる。また、方形遺構は明治17年の『地籍図』から読みと  
れる「内畑」表記に一致することから「島畑状遺構」と認定した。島畑状遺構の東側に隣  
接して、石組遺構（SE03）が検出された。側面観が逆四角錐形、径10～20cmの河原石を用  
いた遺構である。調査区のはぼ中央からは、旧流路の左岸と自然堤防との境目からは大規  
模な地震痕が確認できた。

D区では、旧流路上に流路が湿地化した時期に相当する方形土坑が展開し、左岸には旧  
流路に沿う状況で道路状遺構が検出された。

E区では、遺跡の南端を確認した。ほとんど遺構がなく、南北に長い調査区の中央を縦 93E・F区  
断する中世Ⅱ期に属する溝が南限を示す遺構と思われる。

F区では、古代Ⅱ期からⅢ期まで続く大溝（SD06）と古代Ⅲ期に属する縦穴住居のほか、  
中世Ⅲ期の集石墓がある。蔵骨器として利用したと思われる古瀬戸の四耳壺と骨片が確認  
された集石Aのほか2例ある。また、集石に相前後する時期のL字状に屈曲する溝が数状、  
調査区の南北を縦断するように検出されている。

93C区と同様にG区でも、島畑状遺構が2例確認できた。特筆すべき遺構としては、方 94G区  
形の木組みを持つ井戸（SE04）や、大量に碗・皿類の一括投棄された井戸（SE05）があげ  
られる。



検出状況93A区



雪中の作業風景（93D）

### 1. 3. 3 94A～I区・95A区

94A～F・I区 A・B・E区は特筆すべき遺構・遺物がほとんどない。ただ、I区からA区を縦断する数本の溝は中世Ⅳ期の遺構で隣接する遺構に同時期のものはなく、約100m北東に位置するH区の屋敷地との関連性が示唆される。また、旧流路に直交する方形土坑列がE区やI区で確認でき、旧流路上に展開する方形土坑との関連性が課題となる。

旧流路右岸域でまとまって確認された竪穴住居は、I区に集中する。計7棟の縦穴住居が確認された。なかでも古代Ⅲ期のSB02は3ヶ所に石製支脚を持つ造付カマドがある。

CからD区にかけて展開する旧流路は両岸が確認できた唯一の調査区であった。したがって、旧流路の堆積も観察しやすく、河川の堆積時期を知るために、河川を幅10mで縦断する部分の遺物を全点ドットで取り上げた。その結果、遺物の相対年代から河川の堆積状況を大きく3期区分し、さらに6小期区分を可能にした。特筆すべき遺物としては、古代Ⅲ期の木製鏡と中世0期の鉄製羽釜があげられる。

中世の遺構としては、旧流路上に展開する方形土坑群と93D区へと北上する道状遺構がある。方形土坑から出土した遺物のなかで、D区SK13の常滑産の三筋壺は、拳大の河原石とともに出土し、特筆される。

旧流路の左岸域に相当するC・F区からは、古代Ⅳ期の竪穴住居を検出した。この時期に併行する一括資料は余り類例がなく重要な資料となった。また、住居の掘り方が判然としないため平地住居の可能性が高いこともわかってきた。

94G・H区 94G区では、流路に関わる施設(SX01・03)と集石遺構(SX02)を検出した。SX01・03は流路の変換点に位置し、「低水位護岸施設」と呼ばれる遺構である。また、今回の調査では、堤防施設や水制施設などは確認できなかった。SX02は、全調査区のなかでは北東端に位置する。流路の左岸から弓状に広がる集石で、出土遺物のなかには「呪符状木簡」がある。94H区では、大毛池田遺跡の方一町を測る居館跡と関連する居住域を確認した。

95A区 大毛沖遺跡の調査区では北端に位置し、大毛池田遺跡に一番近い調査区でもある。したがって、大毛池田遺跡にみられる古墳時代前期の水田跡が大毛沖遺跡まで拡がるか否か、あるいは中世Ⅳ期の遺構の展開に関連性はあるのか、といった課題を持つ調査区であった。調査の結果は、上層に中世Ⅳ期の遺構群と下層に古墳時代前期の水田跡を検出した。

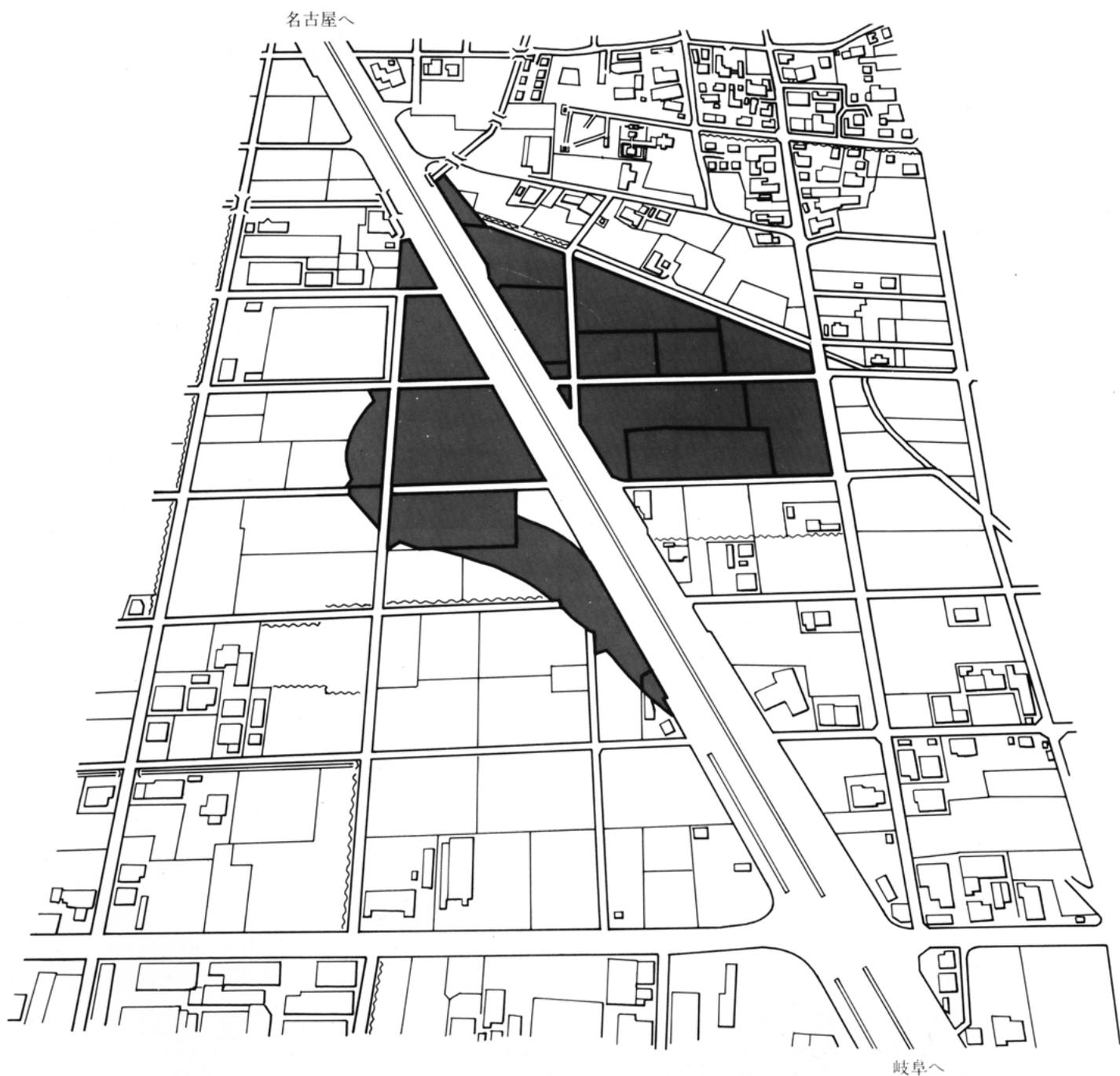


作業風景(94D)



完掘状況(93A)

## 2. 遺跡の概要



大毛沖を北から望む

## 要 旨

古代の主な遺構は堅穴住居と旧流路に関わる施設があげられる。

堅穴住居については、造付カマドを持つ住居から持たない住居へ、堅穴住居から平地住居への変化が窺える。これらの画期は古代Ⅲ期に認められる。

流路に関わる施設は、流路の変換点に設けられた低水位護岸施設と河道左岸に結束する集石遺構がある。低水位護岸施設は河川の滑走斜面側（左岸）の遺存状態が良く、逆に攻撃面（右岸）は悪く痕跡を残すのみであった。時期は古代Ⅲ期で、ちょうど堅穴住居が右岸域に展開する時期でもある。集石遺構は先に存在する溝を再掘削した折りに溝の底部を中心に河原石を敷き詰めた遺構であった。出土遺物に呪符状木簡が出土していることから、祭祀遺構の可能性もあり注目される。

中世の主な遺構は区画溝を伴う居住域と卒塔婆を含む廃棄土坑、さらに畝状遺構に伴う昆虫土坑があげられる。

居住域は確実なものとしては3例ある。可能性のあるものを含めると5例ある。これらの内中世Ⅰ期からⅡ期に属する居住域Ⅰは、区画溝の西側と北側に道路状遺構、さらに西側の道を挟んで畝状遺構が展開し、中世的世界の復元に寄与するものと思われる。また、中世Ⅳ期に属する居住域Ⅲは、北西に隣接する大毛池田遺跡の方一町区画の居館跡との関連性が注目される。

遺構の展開から中世Ⅱ期までは区画溝を伴う居住域が展開するものの、中世Ⅲ期には全く見られなくなる。ちょうどこの時期、大毛池田遺跡では居住域が展開することから、大毛池田遺跡への“ムラ”の移動が指摘できる。さらに中世Ⅳ期にいたって再度居住域が展開する現象は、大毛池田遺跡の居館跡を中心とする“武家屋敷”の展開と深く関わっていたことを物語っている。

## 目 次

- 3. 遺構……………永井
  - 3. 1 古代の遺構
    - 1. 建物 2. その他の遺構
  - 3. 2 中世の遺構
    - 1. 溝（道路状遺構・区画溝・墓域）
    - 2. 建物 3. 井戸 4. 居住域
    - 5. 畝状遺構 6. 方形土坑 7. その他の遺構
  - 3. 3 旧流路
    - 1. 堆積状況
    - 2. 流路に関わる施設（低水位護岸施設・集石遺構）
  - 3. 4 その他の遺構（鳥畑状遺構）

## 2.1 基本層序

### 2.1.1 遺跡と周辺

大毛沖遺跡は河成平野に位置する。したがって、流路の氾濫によって少し離れた地点でも基本層序がかなり異なってくる。北西の隣接する大毛池田遺跡と比較した場合、その違いが歴然となる。大毛池田遺跡の場合、その大部分が自然堤防上に立地する。一方、大毛沖遺跡の場合、12世紀代まで流路が存在するため、自然堤防と後背湿地に遺跡が広がる。もちろん大毛池田遺跡の場合も後背湿地が遺跡の範囲にないわけではない。実際、遺跡の北側には野府川が存在し、その後背湿地も確認できる。

さて、大毛沖遺跡と大毛池田遺跡を二分して捉えることに関しては、次のような条件がある。 沖と池田

まず、下層に相当する古墳時代の水田遺構の有無があげられる。大毛池田遺跡では調査 大毛下層  
区はほぼ全域に渡って古代から中世の遺構面の下に水田遺構が確認できる。大毛沖遺跡は95A区、すなわち大毛池田遺跡に一番近い調査区で水田遺構を検出したのみで、ほかには認められない。

つぎに、中層に相当する古代の遺構について。大毛沖遺跡では7世紀前半に遡る遺構は 大毛中層  
確認できない。これには理由がある。試掘調査の段階で大毛沖遺跡と大毛池田遺跡の間に大きな谷地形があると認識していた地区がある。その後、本調査で大毛沖遺跡の95G区西端から大毛池田遺跡95B区にかけて中層にあたる部分の流路が確認された。時期的には7世紀前半代が想定でき、この流路が徐々に南下して、大毛沖遺跡の流路に落ち着くことがわかってきた。したがって、もし7世紀前半に遡る遺構・遺物はその当時大毛沖遺跡に展開していたとしてもすべて流路の変更によって破壊されたと考えるのが妥当であろう。一方、大毛池田遺跡は6世紀から8世紀初頭の遺構・遺物が連綿と続く。

最後に上層に相当する、古代から中世にかけては細かい時期的なことを抜きに考えれば 大毛上層  
基本的には大差はない。特に自然堤防の堆積状況は似通っている。砂質シルトから中粒砂、あるいは灰褐色シルト層に遺構が展開する。ただ、大毛沖遺跡の場合は旧流路に相当する部分が湿地化することから自然堤防とは異なる堆積をする。

以上、おおまかに大毛池田遺跡から大毛沖遺跡にかけての堆積状況を遺構の展開に併せて記した。結果は大毛沖遺跡の中央を分断する河道に左右されていたことが確認できた。細かな堆積状況や7世紀以前の堆積については、後述に譲る\*1。

---

\*1 5.1「自然環境」を参照。

## 2. 1. 2 旧流路右岸域から左岸域へ

### 右岸域

右岸域は大毛池田遺跡との層序が同じ地区から旧流路の移動に伴う削剝により層序が変動する地区へと移行する。大毛池田遺跡と同一層序の地区は95Aから94Hの北部が相当する。古代Ⅱ期～中世の包含層および遺構検出面（大毛下層）の下位には古墳時代前期の包含層および水田面（大毛下層）が展開する。94Hの南部から93Dにかけて層序は激変する。すなわち旧流路の氾濫原の北西端に相当する層序が認められる。大毛下層を削剝し流水性の堆積構造が見られる。この堆積層には7世紀代の遺物が見られる。旧流路は7世紀代から徐々に南東方向に移行し、最終的には護岸施設の確認された位置に左岸、右岸が道1の辺りで落ち着く。旧流路の堆積については3. 3「旧流路」で記す。

### 左岸域

左岸域は旧流路が南西に移行する過程で堆積した層序（大毛中層）となる。93Cから94Cを結ぶ帯状のラインは自然堤防の堆積構造となる。すなわち、砂質シルト～砂層が大毛上層を形成する。遺構としては古代Ⅱ・Ⅳ期が比較的多い。さらに南東地区、93Aと93Fを結ぶ帯状のラインにはシルト～砂質シルトの互層（大毛中層）が堆積する。旧流路の削剝を受けなかった堆積のため、7世紀後半の遺構群が93Aには展開する。この大毛中層の上位に堆積する大毛上層の間には洪水性の堆積が認められる。これが古代Ⅰ期と古代Ⅱ期の遺構面の断絶する堆積層となる。この砂質シルト層の堆積の上位には古代Ⅱ期～中世にかけての包含層および遺構検出面にあたる大毛上層（シルト層）が堆積する。

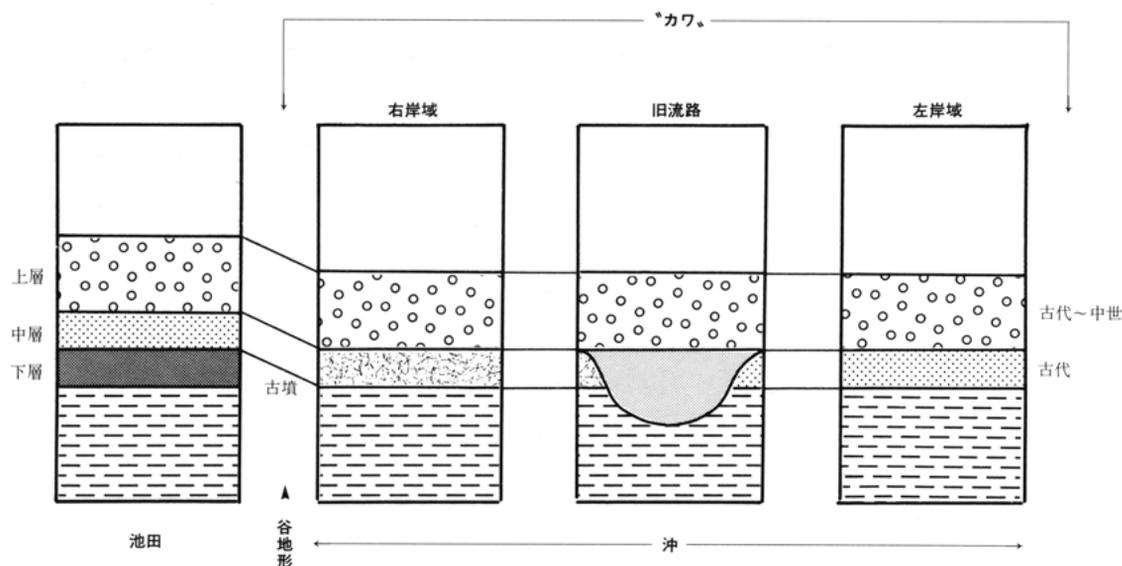


図7 沖、池田の遺構面模式図

## 2.2 遺跡の概要

### 2.2.1 時期区分

遺構の変遷から4期に大別、さらに8小期の細別を加える。

古代

I期は7世紀後半を中心とする時期。遺構は93A区の下層のみ。造付カマドの堅穴住居が2棟、十文字に交差する大溝、大溝の南北方向に縦列する畝状遺構などがある。

I期

I期とII期の間には30～40cmの洪水性の堆積が見られる。これをもってI期とII期の大別とした。II期は8世紀前葉から中葉を中心とする時期。隣接する池田遺跡では美濃刻印須恵器が出土する時期。大毛沖遺跡の場合、旧流路が流路として機能し始め、さらに堅穴住居が流路の両岸に展開する時期。遺構の構成は堅穴住居のみで、堀立柱建物や居住域を区画する溝などはない。

II期

II期とIII期の大別は、窯様式で示すと鳴海32号窯式の遺物がほとんど見られないことから区分した。洪水性の堆積は確認できなかったものの、『続日本紀』の記事には「鵜沼川（木曾川）大水。葉栗中嶋海部の3郡水に浸る。」と見え、遺構・遺物の断絶との関連性からも示唆できる。

III期は8世紀後半から9世紀代までを中心とする時期。III期は3小期の細別をする。III a期は流路に護岸施設（94G・SX01、03）が築造され、堅穴住居も7棟確認でき、古代のなかでは最も遺構が存在する時期に当たる。III b期は流路が流水性と止水性を繰り返す流れの緩やかな時期。堅穴住居はこの時期から造付カマドが見られなくなる。代わって、簡易カマド\*1とも言うべき施設が代替する。III c期は流路の右岸に遺構が見られなくなる時期。また、遺物からは次のIV期を含む遺構がみられる。したがって、III期とIV期の大別は遺構からは判別できない。遺物からはちょうど須恵器から灰釉陶器に移行する時期、土師器甕\*2がD類からE類に移る時期であり、遺構の変遷よりは遺物の変化に主眼をおいて大別した。

III期

古代IV期は10世紀から11世紀前半を中心とする時期。IV期は3小期の細別をする。IV a期は流路に繋がる集石遺構（94G・SX02）とIII c期から続く堅穴住居からなる。さらに、特筆すべき遺物としては呪符状木筒（94G・SX02）などがある。IV b期は古代の遺構がほとんどなくなる衰退期に当たる。堅穴住居が2棟のみ、ただ旧流路から出土する遺物は比較的多い。調査対象地とは別の空間に集落が移動したのであろうか。IV c期もIV b期同様、遺構が少ない。ただ、流路に繋がる集石遺構との関連で、隣接する空間に堅穴住居が2棟存在する（93B・SB01、02）のは特筆できる。

IV期

\*1 追付カマドから簡易カマドへの移り変わりは、永井1995を参照。

\*2 P58～59を参照。

- 中世 遺構の変遷から5期に大別、遺物などからさらに11小期に細別を加える。
- 0期 0期は、11世紀後半から12世紀前半の灰釉陶器から灰釉系陶器(山茶碗)への移行期が相当する。生産地遺跡の土器(窯)編年では、藤澤編年第3型式と第4型式(古)の資料が相当する。大毛沖遺跡に限らず尾張部の集落遺跡など、いわゆる消費地遺跡に遺構がほとんどみられない時期。0期とした理由もこれにある。型式学的には先行する灰釉陶器の最終窯式(百代寺窯期)は前後する窯期(東山72窯期と第Ⅶ期第1型式)と共伴する。したがって、約100年間の遺物が共伴することになる。出土する遺物は、碗・皿類の器種がそのほとんどで、とても伝世品とは思えない消耗品が共存することになる。一方、煮沸具からみると、10世紀後半から「清郷型鍋」が伊勢湾北・東岸域に流行する。この「清郷型鍋」とその後主流器種となる「伊勢型鍋」への移行過程の時期がまさしく「中世0期」である。
- 今回は窯式編年を軸に時期設定しているため、「中世0期」が存在するか否かは言及しない。しかし、今後当該期の資料的裏付け、すなわち供膳具(碗・皿)の型式変化と考えられていたものが、系統差ということになれば中世0期は存在しないことになろう。
- 中世Ⅰ期 藤澤編年第4型式(新)～第5型式が相当する。0期と比べ遺構数が急激に増加する。窯式編年と遺構出土遺物の対比から、さらに3期に小別する。Ⅰa期は第4型式(新)、Ⅰb期は第5型式(古)、Ⅰc期は第5型式(新)が各々相当する。Ⅰ期は区画溝を伴う居住域が出現する時期にあたる。
- 中世Ⅱ期 藤澤編年第6型式～第7型式が相当する。大毛沖遺跡のなかで最も遺構数が多い時期。窯式編年と遺構出土遺物の対比から、さらに2期に細別する。Ⅱa期は第6型式、Ⅱb期は第7型式が相当する。Ⅱ期は大毛沖遺跡に区画溝を伴う居住域が盛行する時期で、確定できるのは93A区の「居住域1」のみであるが、ほかに93B・94H・93Iに各1区画認められる。
- 中世Ⅲ期 藤澤編年第8型式～第10型式が相当する。遺構が減少し、屋敷地が衰退する時期。ただし、旧流路上には方形土坑が連綿と築かれる。窯式編年から3期に小別する。Ⅲa期は8型式、Ⅲb期は第9型式、Ⅲc期は第10型式が相当する。
- 中世Ⅳ期 藤澤編年第11型式～大窯Ⅱ期が相当する。94H区を中心に遺構が展開し、隣接する大毛池田遺跡と密接な関わりが指摘できる時期。窯式編年と遺構出土遺物の対比から、さらに2期に小別する。Ⅳa期は第11型式あるいは古瀬戸後期Ⅳ古、Ⅳb期は古瀬戸後期Ⅳ新～大窯Ⅰ期が相当する。94H区に遺構が増加するのはⅣb期で、Ⅳ期に唯一居住域が確認できる空間。

陶 呂 窯		猿 投 窯		美 濃 窯		美 濃 須 衛 窯		大 毛 沖		都 城 編 年		斎 宮 編 年		
I 型 式	第1段階	第 I 期	第1小期 (+)			I 期								
	2		2 (H-111)				後							
	3 <sup>450</sup>		3 (H-48)											
	4		4 (城山-2)											
	5 <sup>500</sup>		5 (H-11)											
II 型 式	第1段階	第 II 期	第1小期(H-61)			II 期								
	2		2 (+)				後							
	3 <sup>550</sup>		3 (H-44)											
	4													
	5 <sup>600</sup>													
	6 <sup>650</sup>													
III 型 式	第1段階	第 III 期	第1小期(H-50)			III 期	前		古代 I					
	2		2 (I-17古)				後							
	3		2 (I-17新)											
IV 型 式	第1段階	第 IV 期	3 (I-41)			IV 期	前		古代 II					
	2		4 (C-2)				後							
	第1小期(I-25)		700											
	2		2 (NN-32)					730						
	3		3 (0-10古)					750						
	4		3 (0-10新)					770						
	第1段階		4 (IG-78) (K-14①)					800						
	2		第1小期 (K-14②)					820						
V 型 式	第1段階	第 V 期	2 (K-90①)			V 期	前		古代 III a					
	2		2 (K-90②)				後							
	2 (K-90③)		光ヶ丘-1	前										
	第1小期 (0-53①) (0-53②)		大原-2					後						
	2 (H-72)		虎溪山-1											
	3 (百代寺①)		丸石-2											
	3 (百代寺②)		明和-27											
	第1型式 (古)		西坂-1											
	第1型式 (新)													
	第2型式 古													
VI 期	第1小期		0-53① 0-53②				前		古代 IV a					
	2 (H-72)		虎溪山-1				後							
	3 (百代寺①)		丸石-2											
	3 (百代寺②)		明和-27											
	第1型式 (古)		西坂-1											
	第1型式 (新)													
第2型式 古														
VII 期	第1型式 (古)		西坂-1				前		古代 IV b					
	第1型式 (新)						後							
	第2型式 古													
第1型式 (古)		西坂-1												
第1型式 (新)														
第2型式 古														

齊藤1995に補足改変

表3 古代大毛沖編年と関連年対比表

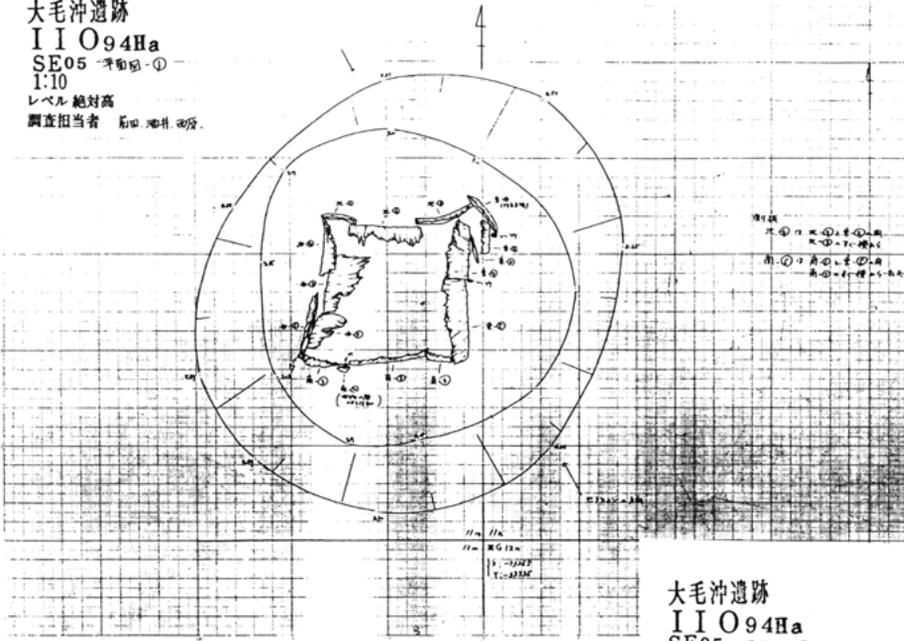
尾張型			東濃型	古瀬戸	大毛沖
瀬戸	猿投	常滑			
1100	第3型式	古 Ⅶ 1 新			○期
	第4型式古	Ⅶ 2 古	1130 I a 1150 I b		
1150	第4型式新	Ⅶ 2 新	2 1175	谷迫間	I a 期
	第5型式古	Ⅶ 3 古	3	浅間窯下	I b 期
1200	第5型式新	Ⅶ 3 新	1190	丸石 3 窯洞	前 I a 前 I b
	第6型式	Ⅷ 1	1220	4 白土原	前 II a 前 II b
1250	第7型式	Ⅷ 2	1250	5 明和	前 II c 前 III
			1275	6 a	
1300	第8型式	Ⅷ 3	1300	6 b 大畑大洞	前 IV 中 I
				7	中 II
1350	第9型式		1350	大畑大洞新	中 III 中 IV
				8	1360 後 I
1400	第10型式		1400	大洞東	1380 後 II
				9	1420 後 III
1450	第11型式		1450	脇之島	1440 後 IV (古)
				生田	1460 後 IV (新)
					1485 大窯 I

藤澤1994ほかに補足改変

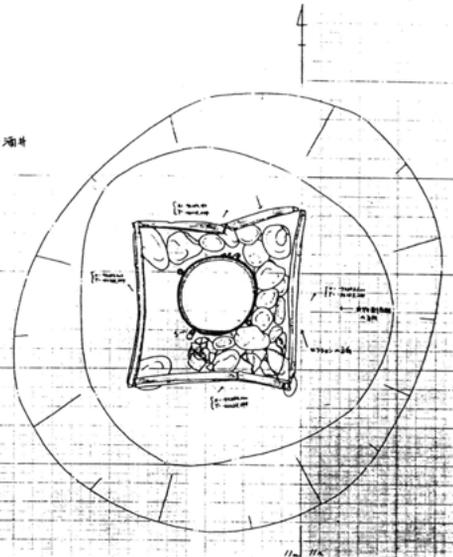
表4 中世大毛沖編年と関連編年対比表

# 3. 遺 構

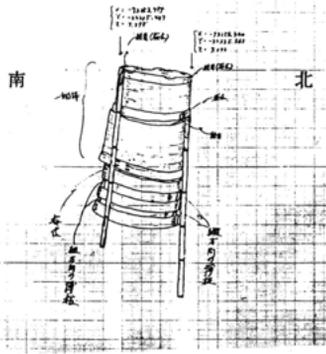
大毛沖遺跡  
 I I O 94Ha  
 SE05 平面図-①  
 1:10  
 レベル 絶対高  
 調査担当者 前田 洋村 西澤



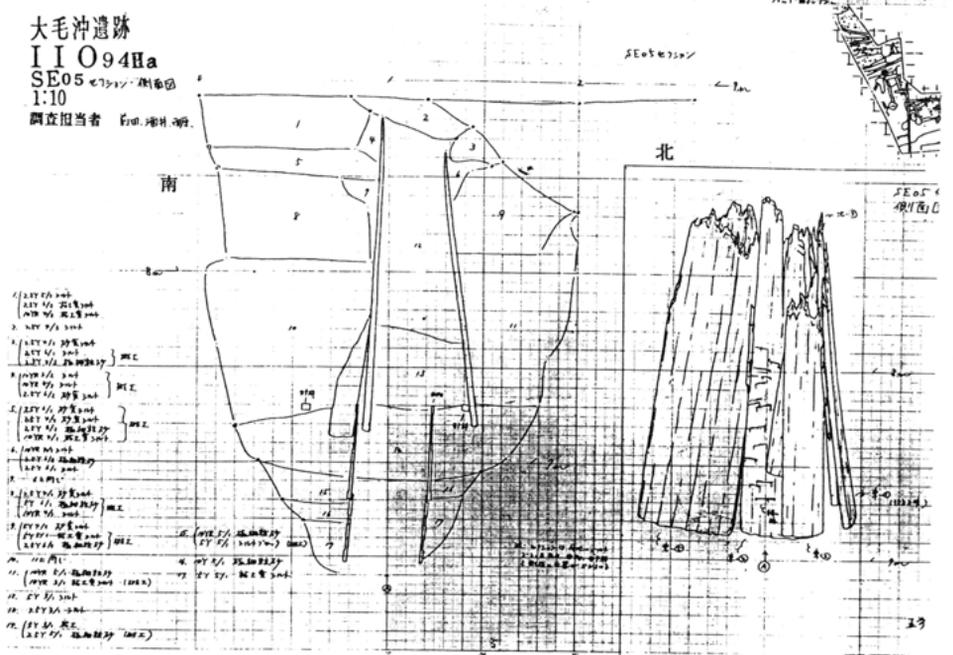
大毛沖遺跡  
 I I O 94Ha  
 SE05 平面図-②  
 1:10  
 レベル 絶対高  
 調査担当者 前田 西澤 洋村



大毛沖遺跡  
 I I O 94Ha  
 SE05 断面図  
 1:10  
 調査担当者 前田 洋村 西澤



大毛沖遺跡  
 I I O 94Ha  
 SE05 断面図  
 1:10  
 調査担当者 前田 洋村 西澤



94H SE05  
 遺構実測原図

## 要 旨

大毛沖遺跡は木曾川によって形成された河成平野に位置する。古代から中世は、網の目状に流路が幾筋も流れる状況であった。大毛沖遺跡は流路の変遷を考える上で重要な遺跡といえる。洪水などの自然災害や、当時の人々による河川改修や生活の痕跡がつかみやすい遺跡といえよう。しかし、河川の氾濫原の上にある遺跡であるため、遺跡の基本層序を一律に捉えることは難しい。そこで、流路の安定した位置を基準に右岸と左岸に分けて基本層序を捉える。右岸は流路が北西から南西に移行する過程で形成された自然堤防の堆積、遺構の展開する部分の堆積は粗粒砂から中粒砂層と砂質シルトの堆積である。左岸は基本的に右岸と同様の堆積であるものの、流路の移動による浸食を受けながら堆積する、砂質シルトとシルト層の堆積である。

このような堆積の中に古代から中世の遺構が展開する。古代は、7世紀後半から8世紀の間に洪水性の堆積が確認でき、遺構の断絶が認められる（古代Ⅰ期とⅡ期）。また古代から中世への移行期、11世紀後半から12世紀前半に遺構がほとんどない（中世0期）。さらに中世末、15世紀末から16世紀初頭を境に生活遺構がなくなる（中世Ⅳ期）。これら遺構の展開を基準にの時期区分を行った。古代は7世紀後半から11世紀前半までを4期区分、中世は11世紀後半から16世紀初頭を5期区分した。

遺構と遺物については、次のような特徴がある。古代は、7世紀から10世紀の竪穴住居の変遷が追える。木製鏡や鉄製羽釜など全国的に見ても類例の少ない資料が出土した。旧流路からは、8世紀後半の護岸施設が検出された。中世は、13世紀と15世紀末を中心とする屋敷地、13世紀の畝状遺構からは害虫駆除の痕跡と思われる昆虫土坑があげられる。

## 目 次

2. 遺跡の概要	……………永井
2. 1 基本層序	
2. 1. 1 遺跡と周辺	
2. 1. 2 旧流路右岸域	
2. 1. 3 旧流路左岸域	
2. 2 遺跡の概要	
2. 2. 1 時期区分	

### 3.1 古代の遺構

#### 概要

遺跡の概要で示した通り、竪穴住居以外の遺構はほとんど見られない。ただ、93A下層遺構には、竪穴住居の東側に隣接して、十文字に交差する大溝とこの大溝のうち南北方向に延びる溝に併行して畝状遺構が展開する。

竪穴住居は、Ⅲ期以降造付カマドから簡易カマドへと移行する過程が捉えられる。また、これに伴い、Ⅲ期以降に展開する竪穴住居を区画する溝（93A・SD07）も確認できる。すなわち、居住空間を区画する意識が認められる。

#### 3.1.1 建物

建物に関する遺構は、竪穴住居のみで掘立柱建物は1棟も確認できなかった。竪穴住居 概要は合計24棟確認でき、断定できない遺構も含めるとおおよそ30棟になる。平面形はほとんどが正方形か若干の長方形である。規模は5m四方を越えるような大形住居はなく、2m前後の平面形の住居が一般的である。特徴としては、Ⅱ期とⅢ期で大きく変容する。すなわち、前者は造付カマドを有する住居で、後者は簡易カマドを有する住居である。後者の場合住居のプラン、特に掘り方が浅く、平地式住居の可能性が高い。

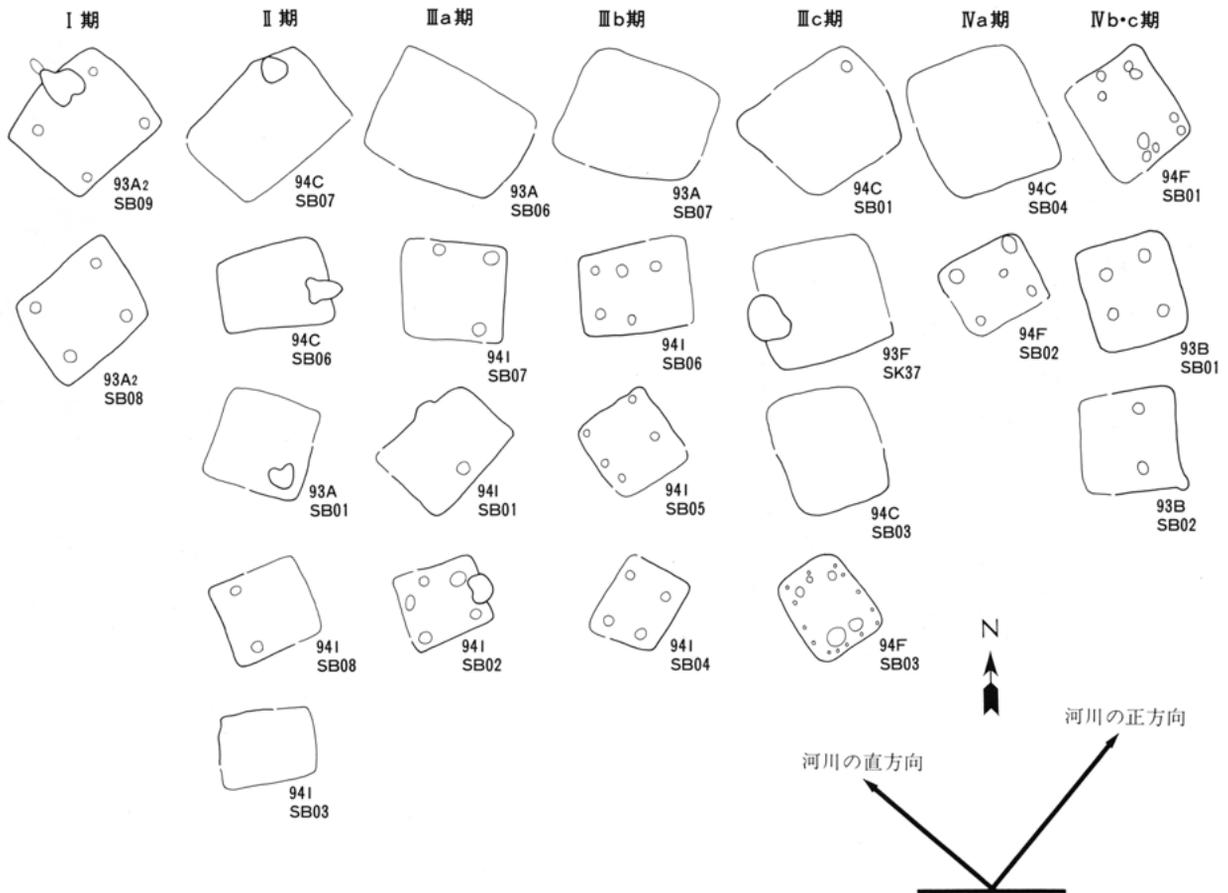


図8 古代の住居集成図

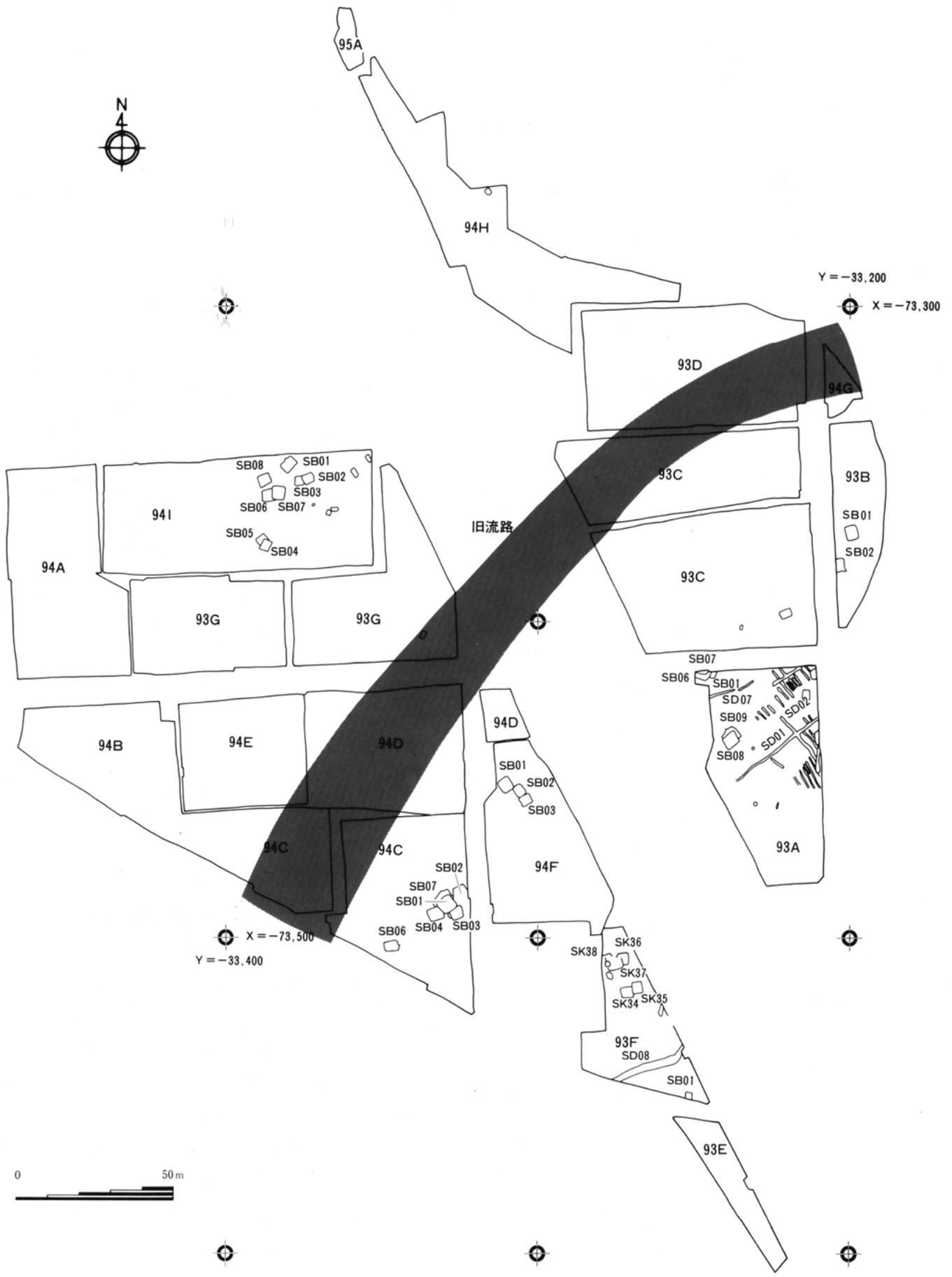


图9 古代主要遺構全体図

古代 I 期

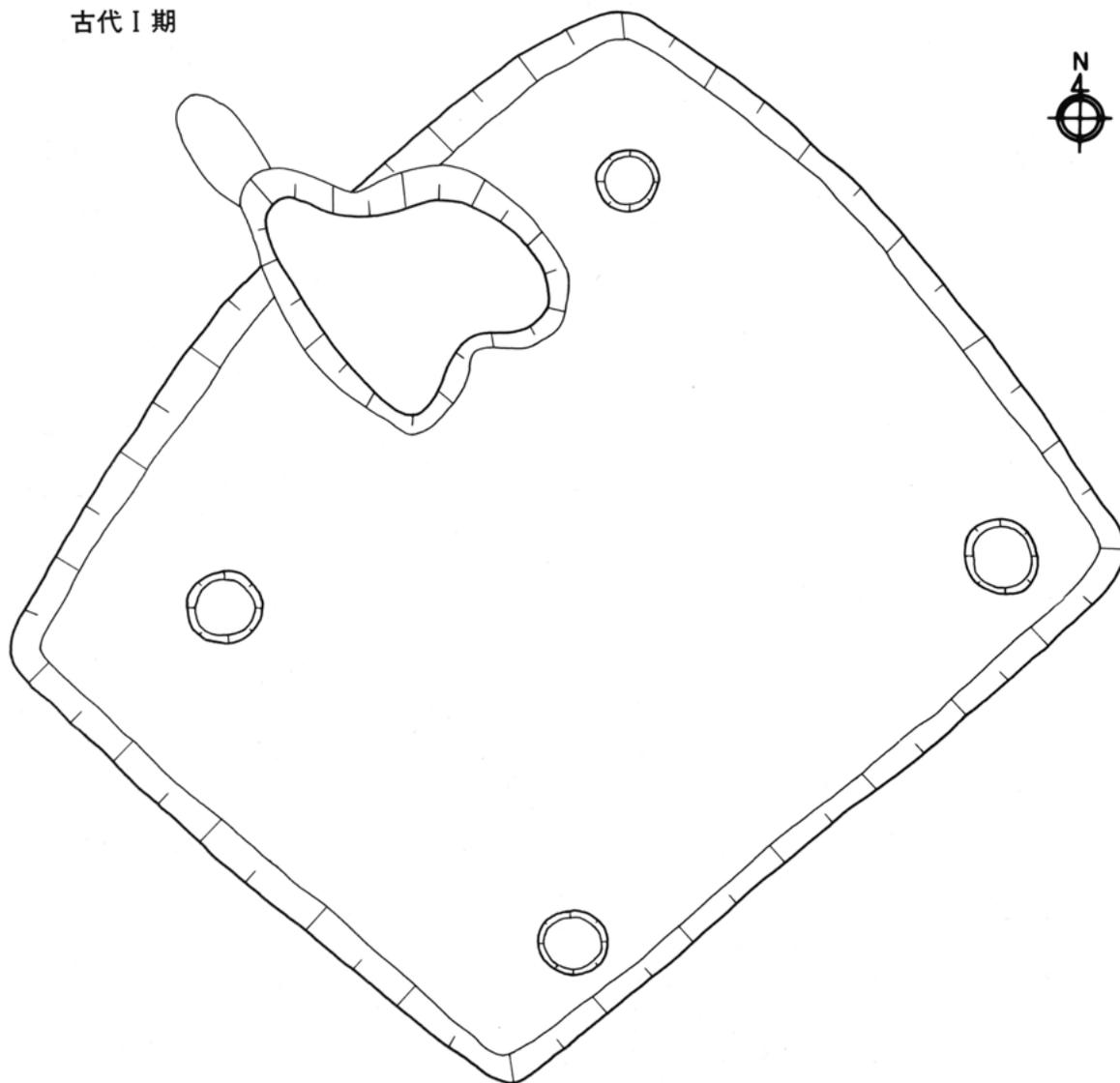


図10 93A SB09実測図(古代 I 期) S=1/40

I 期の住居は93A区下層にあるSB08・09の2棟確認されたのみ。SB08と09は切り合い関係があり、SB09のカマド部分を避けるかのようにSB08が上に重なる。したがって、住居は1ヶ所のみである。住居の東側には十文字に重なる溝とこれに規制された畝状遺構が展開する。(第9図参照)

図示したSB09は造付カマドを持つ竪穴住居。柱穴が4隅に配置された方形プランの住居になる。掘り込みは浅く15cm前後しかない。柱穴は径40cm、深さ10cm前後の円形で、断面観察からは柱跡を確認することができなかった。カマド部分についてはプランは確認できたものの、立体的には残存していなかった。しかしながら次のような構造が確認できた。煙道部と思われる部分が北西壁の先にあり、プランは両袖を持つカマドと確認できた。出土遺物から古代 I 期に廃絶した住居と思われる。また、SB08も出土遺物の内容から、時期的に近い古代 I 期の住居と判断した。

古代Ⅱ期

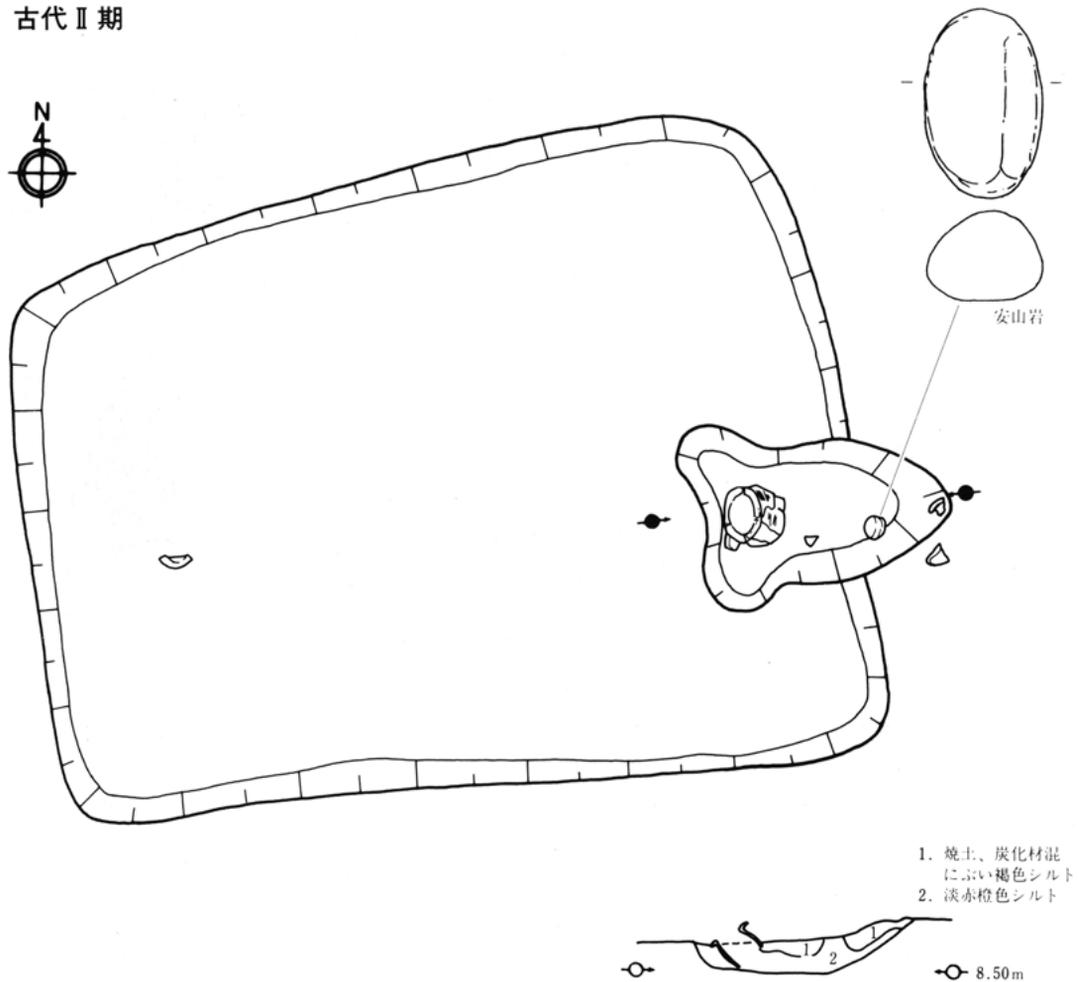


図11 94CSB06実測図(古代Ⅱ期) S=1/40

古代Ⅱ期 Ⅱ期の住居は、旧流路右岸域に2棟、左岸域に3棟、計5棟確認できた。94 I SB03・08と94CSB06・07は、旧流路を挟んで右岸と左岸にちょうど対岸に位置し、居住域の分布を考える上で興味深い。

94CSB06 図示したSB06は造付カマドを持つ竪穴住居。柱穴は確認できなかったが、長軸方向で4.4m、短軸方向で3.2mを測る長方形のプランとなる。掘り込みは浅く10cm前後。カマドについては上部構造は不明確なもの、下部構造が比較的掘みやすい。プランはⅠ期の住居と同様に両袖を持つカマドで、石製支脚と思われる河原石が2ヶ所確認できた。このうちカマドの中心線にほぼ位置する支脚は原位置を保つものと考えられる。また、焚き口部分には胴部下半が意識的に打ち欠かれた土師器甕が出土している。カマド施設に深く関わる土器として注目できる。出土遺物は前記した土師器甕以外に須恵器杯などがある。これらの遺物から古代Ⅱ期に廃絶した住居とした。

古代Ⅲ期

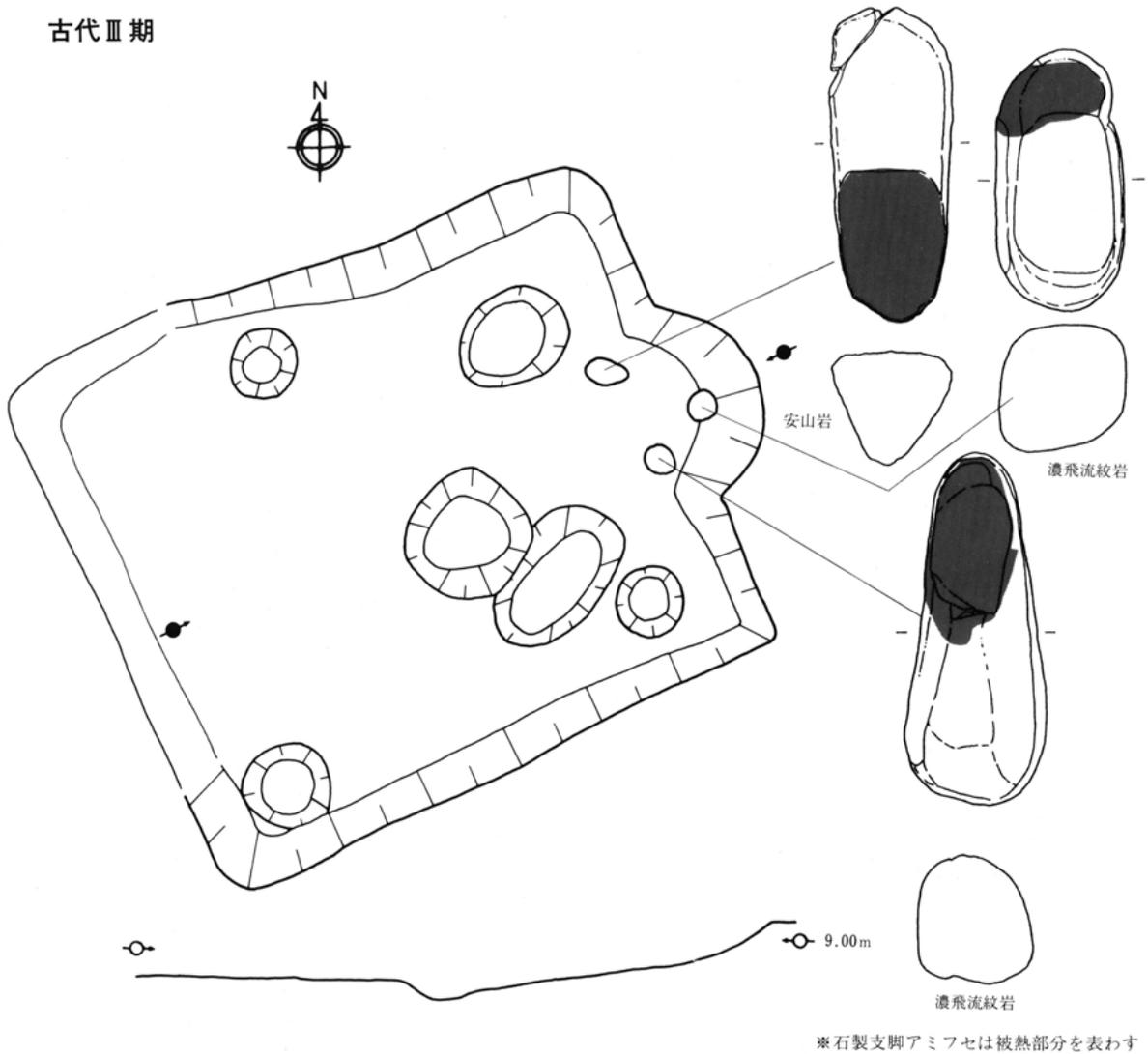


図12 94 I SB02実測図(古代Ⅲ期) S=1/40

Ⅲ期の住居は大毛沖遺跡のなかで最も棟数の多い時期。計12棟確認した。Ⅲ期は造付カ 古代Ⅲ期  
マドから簡易カマドへの移行期でもある。おそらくⅢ a期の段階で造付カマドが消滅し、  
簡易カマドへ転換してゆくと思われる。これは堅穴住居から平地住居への移行期と一致し  
注目できる。また、煮炊具の土師器甕も口縁部を摘み上げるタイプ(甕B)がⅢ期には見  
られない。これらの事象からⅢ期のなかで生活様式の変換期が想定できる。

図示したSB02は造付カマドを持つ縦穴住居。主柱穴と思われる3ヶ所の柱穴のほか、土 94 I SB02  
坑が2ヶ所、柱穴が1ヶ所ある。プランは3.4×2.9mの比較的小規模な方形プランの住居。  
掘り込みはやや深く30cm前後を測るが、壁の立ち上がりが緩やかになる特徴を持つ。カマ  
ドは上部構造が削平されてはいるものの、下部構造に石製支脚が手前に2ヶ所、奥に1ヶ  
所あり、原位置を保っている。支脚はいずれも熱を受けており、カマドと認定する要因に  
もなった。ただ、カマド部分から被熱した粘土塊が確認できず、造付カマドと断定はでき  
ない。

古代Ⅳ期

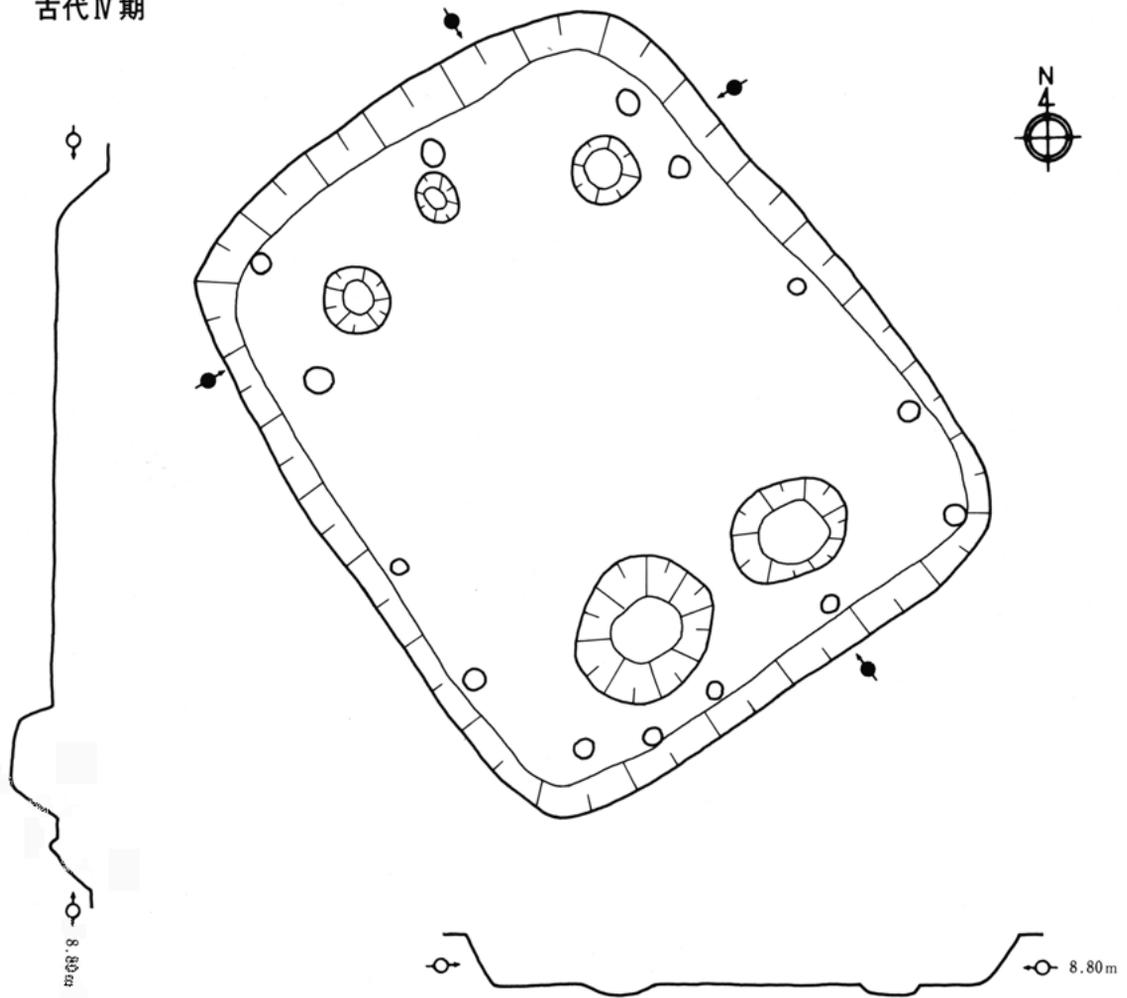


図13 94FSB03実測図(古代Ⅳ期) S=1/40

古代Ⅳ期

Ⅳ期の住居は旧流路左岸域のみに展開する。計5棟確認した。共通する特徴としては、焼土と炭化物が集中する場所が住居の壁際にある、掘り込みが5cm前後の住居であること。この2点が、平地住居と簡易カマドの痕跡として理解する第1の理由。そのほか出土遺物に関しては、特に灰釉陶器碗・皿類が窯式で約150年間のものを含む。量的には古代Ⅳc期に併行する灰釉陶器が多い。また、93BSB02に隣接して砥石を転用したと思われる石製支脚(図98-1125)が出土した。これは簡易カマドを裏付ける傍証資料として注目される。

94FSB03

図示したSB03は北側にSB01、南側にSB02が位置する平地住居。3×4mの長方形プランになる住居。プランの南東隅に炭化物が集中する、この付近に簡易カマドが付設していたと考えられる。支柱穴と考えられるピットは4ヶ所あり、プランに沿うように小穴が14ヶ所ある。これら小穴は支柱穴を補助する柱跡と思われる。遺物からⅣa期前後と判断した。

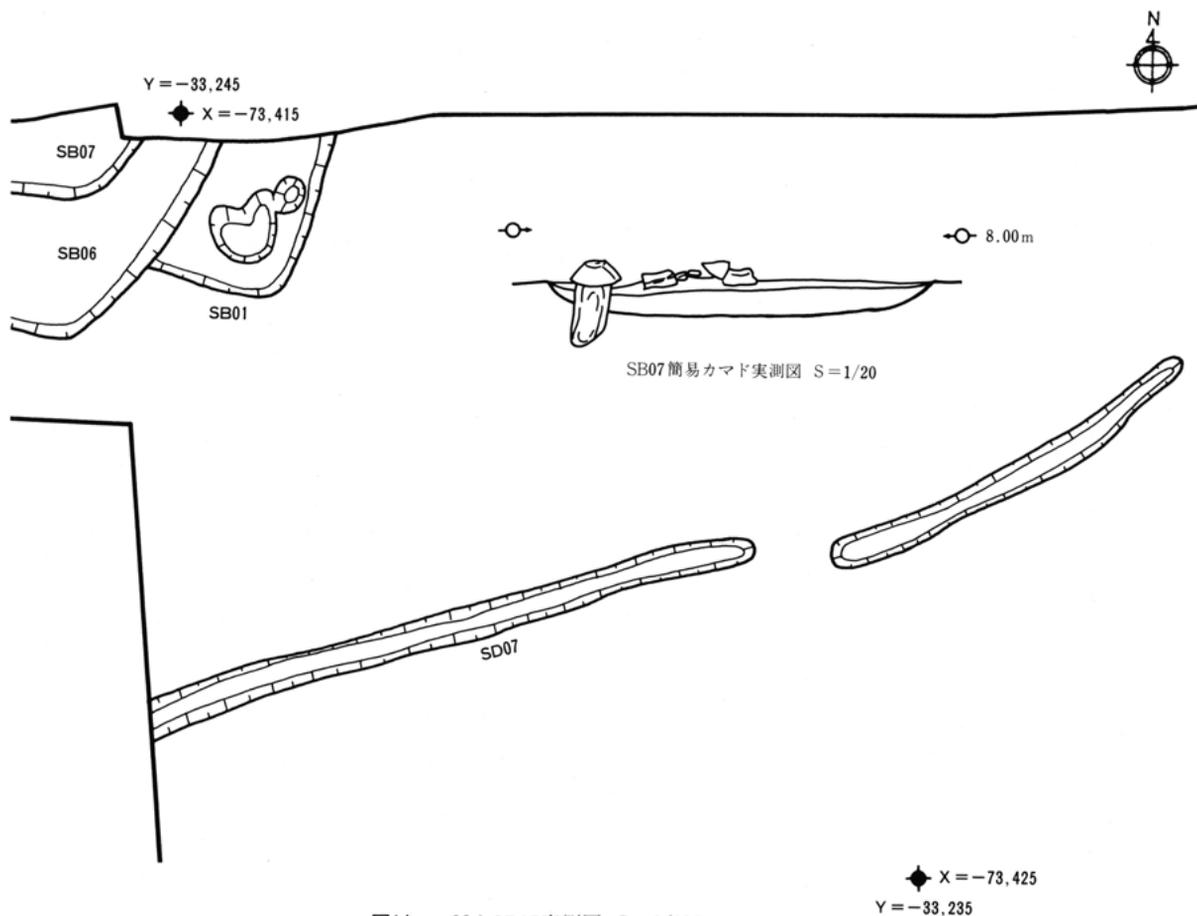


図14 93A.SD07実測図 S=1/100

### 3. 1. 2 その他の遺構

大毛沖遺跡遺跡で確認された古代唯一の下層遺構面。時期的には古代Ⅰ期に併行する遺 93A 下層  
物が多い。先に紹介したSB08・09もこの層位で確認した。上層に古代Ⅱ期から中世までの  
遺構面が確認され、下層との間に30cm前後に堆積する砂質シルトから中粒砂の間層がある。  
おそらく洪水性の堆積であろう。(図版1参照)

2棟の竪穴住居のはかに十文字に交差する溝と南北に分かれて数条の溝がある。これら 93A<sub>2</sub>  
SD01・02の溝に伴う遺物は確認できなかったものの、同一面から古代Ⅰ期に併行する遺物 SD01・02  
が2ヶ所集中して確認された。十文字になる溝は南北に位置する溝群の方向性を規制して  
いる。断定はできないが、南北の溝群は畝状に配置されていることから、畑地であった可  
能性がある。また、十文字になる溝はこれらを区画する溝、あるいは用水的機能も考えら  
れる。いずれにしても、西側に隣接する住居との関連性は否定できない。

SB06・07の南に2条の溝がある。このSD07は住居と同時期となる古代Ⅲ期に属する。住 93A<sub>2</sub>  
居の方向に並行して配置されていることから居住域を区画した溝かあるいは道になるかは SD07  
判断できないが、他の住居には見られないことから注目できる。(図14)

## 3.2 中世の遺構

### 概要

中世は大きく5期に大別、さらに11小期に細別した。遺構は溝(区画溝・道路状遺構など)、井戸、土坑(方形土坑)などによって構成されている。時期的にはⅠ期からⅡ期を中心とした、12世紀後半から13世紀の遺構が多い。また、94H区ではM期の遺構が集中する。区画溝の配置から居住域(屋敷地)と推定できる空間は、5ヶ所ある。特筆すべき遺構としては、93A区SX01と畝状遺構およびその周辺から出土した「昆虫土坑」がある。「昆虫土坑」は害虫駆除に関わる行為を示す資料として貴重な事例となった。

### 3.2.1 溝

溝には一定の規則性が認められる。すなわち、旧流路に並行する溝と直行する溝の二者に分かれる。この二者による規則性を保ちながら道あるいは区画溝が展開する。道や区画溝として認定できないものについては、耕作地への用水路や居住域からの排水溝などが推定できる。

**道路状遺構** 旧流路の右岸に沿って延びる数条の溝(道1)と93A区の居住域Ⅰの周囲を囲む溝(道2・3)がある。

**道1** 道1は『明治17年地籍図』にも見えるように近現代まで存在する道で、ちょうど字境でもある。道路とした理由は『明治17年地籍図』のほかに、2条の溝が約5mの幅を保ち並行して走り、推定200m以上確認できるからである。ただ、道にあたる部分に版築などの痕跡は確認できなかった。溝の規模は平均で幅1.5m、深さ50cmを測る。溝の断面形はV字からU字で、場所によって異なる。時期については、溝(93GSD07ほか)より出土した遺物から中世Ⅱ期まで遡ると思われる。また、側溝の断面観察などから最低3回の改修が行われている。

**道2** 道2は居住域Ⅰの西側沿いを走る。道1のように側溝が道の両側を規定するのではなく所々途切れる箇所もある。これは、居住域Ⅰとの関連性を想定すれば至極当然ではあるが、出入口との関係を捉える上で重要になる(93ASD43・44)。詳細は居住域Ⅰの項(P40参照)で述べる。側溝の規模は幅50cm、深さ5~10cmを測り、断面形はU字形になる。道幅は3.5mを測るが、テラス状になるところでは、6.5mにもなる。時期については、側溝(93ASD18・38・43・44)より出土した遺物からⅠ期と考えられる。ただし、SD18に関しては、数回に渡る掘削が確認でき、東側に近接するSD17(区画溝)との関係、あるいは道3との関連性で時期的にはⅡ期まで存続する可能性もある。

**道3** 道3(93ASD20・38・39)は道2の西側にあたる側溝(93ASD19)に接して、道2上に位置する。道3の西側溝の規模は、幅40~50cm、深さ5~10cmを測り、断面形は道2と同様にU字形となる。道3の場合、居住域Ⅰの区画溝(SD17・29)が東側の側溝を兼ねていることも考えられる。そうすると、道幅が二通り考えられる。一つはSD18を東側の側溝とした場合、幅は2m前後となる。もう一つはSD17を東側の側溝とした場合、幅は5m前後となる。したがって、居住域Ⅰの性格をどう捉えるかによって判断するしかない。

以上の道路状遺構は大毛沖遺跡の南に隣接する伊富利部神社の西側を南北に延びる旧鎌倉街道から枝道と考えられる。鎌倉街道は現在の一宮市と木曾川町との境界に沿っており、大毛池田遺跡の調査によっても確認されている。ただ、鎌倉街道の成立時期に不明な点が多く、「鎌倉街道」として認定することが正しいかは、今後の課題といえよう。

区画溝とは、屈折溝や二条以上の溝により方形に区画配置された溝を指す。したがって、区画溝居住域、墓域、生産域など様々なケースが考えられる。以下、居住域以外の事例について記す。居住域については、「3.2.4居住域」の項で詳しく触れる。

まず、93C区で検出した生産域の区画溝について触れる。SX02～SX05、すなわち島畑状遺構を取り囲む溝を指す。SD08は屈折溝で、SX04・05が南北に縦列する西側を囲む。規模は幅50cm、深さ10～20cmを測り、断面形はU字形をなす。一方、東側にはSX02に沿って島畑状遺構の東側を囲む溝が二条ある。SD05と06は4mの間隔を保ちながら並行して南北に走る。そして溝の延長上に位置するSE03・SK06・07の手前で途切れる。これら二条の溝の規模はSD08と類似している。

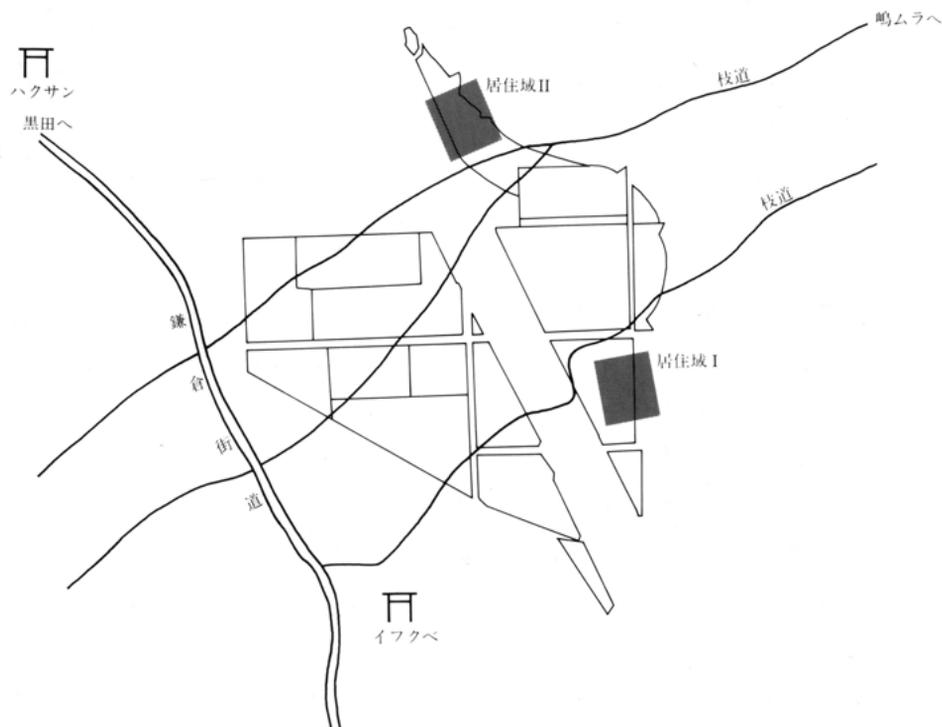
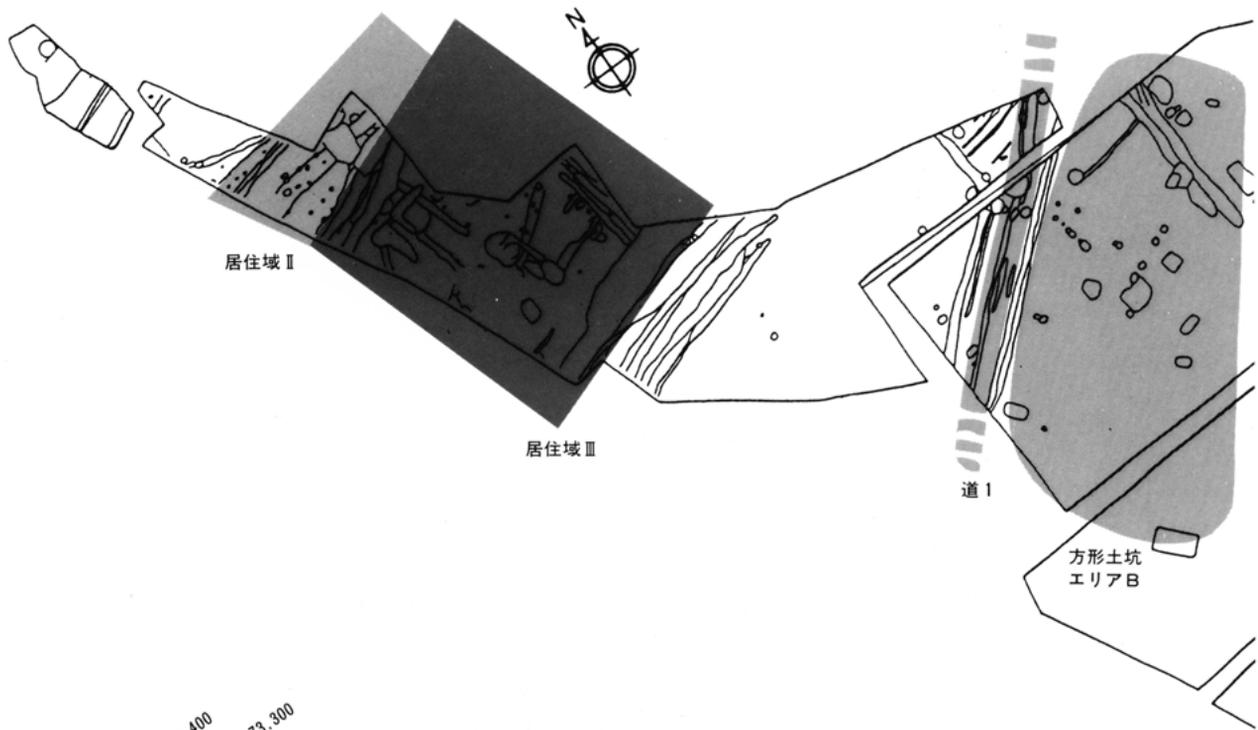


図15 中世「ミチ」のイメージ



Y = -33,400  
X = -73,300



Y = -33,300  
X = -73,400

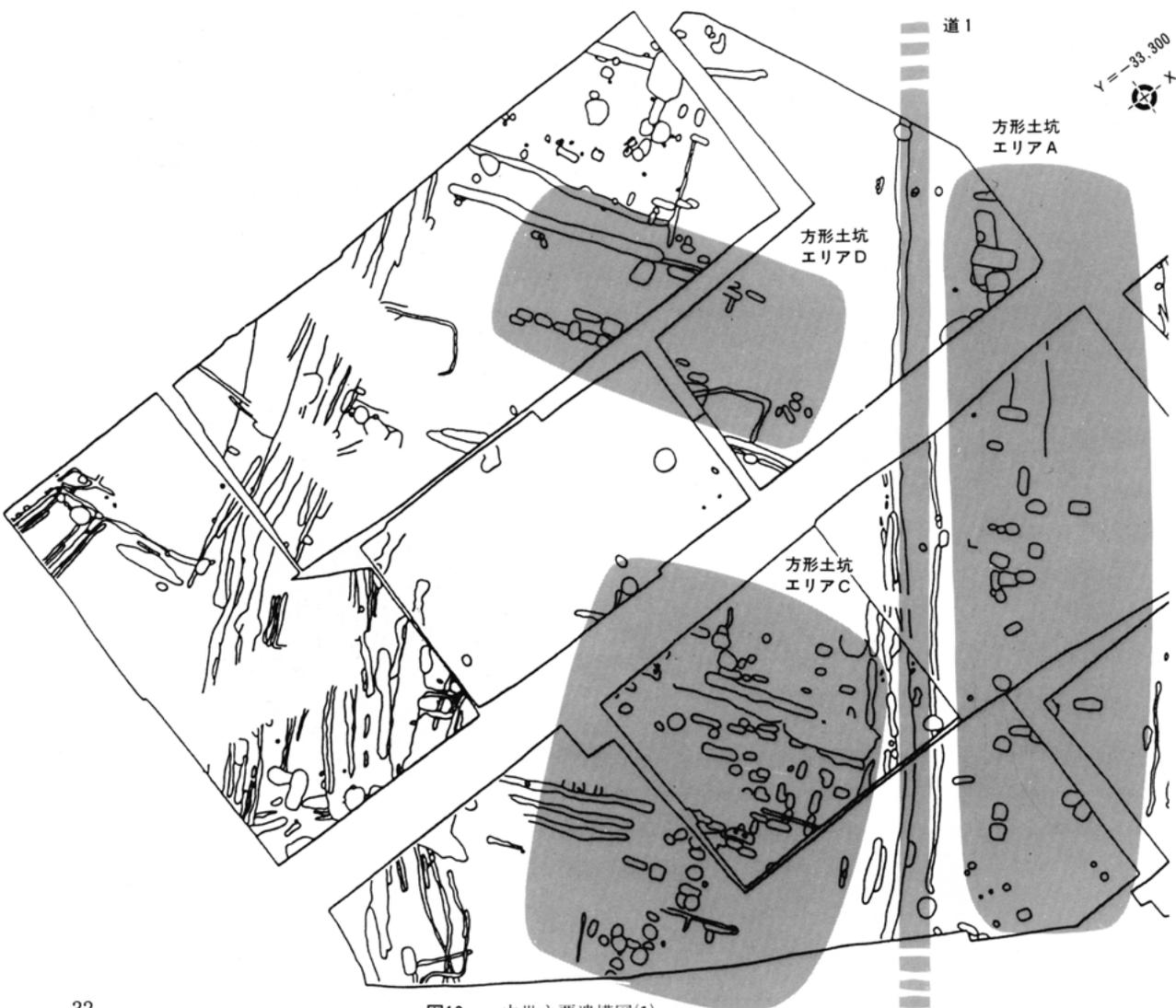


図16 中世主要遺構図(1)

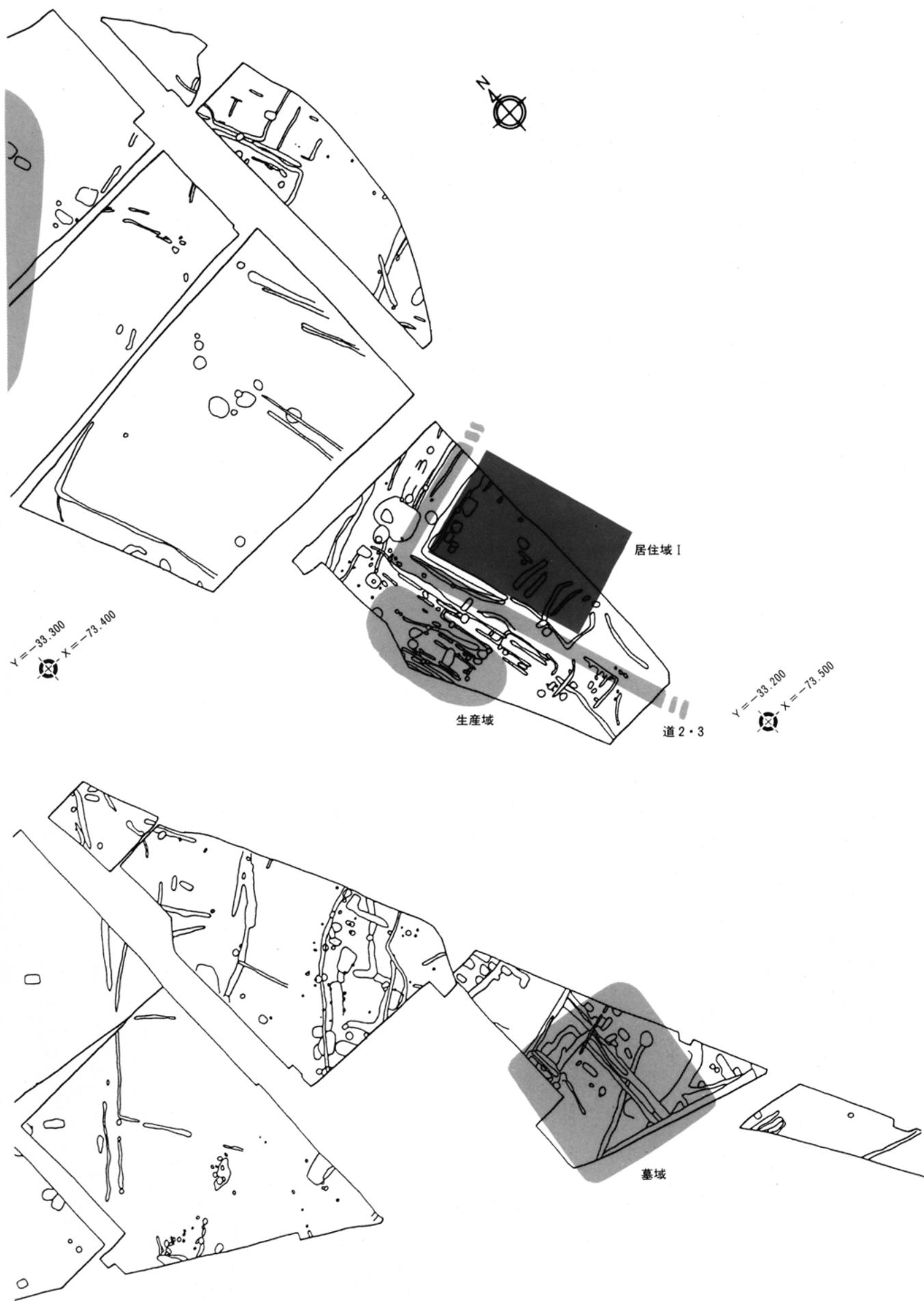


图16 中世主要遺構図(2)

## 墓域

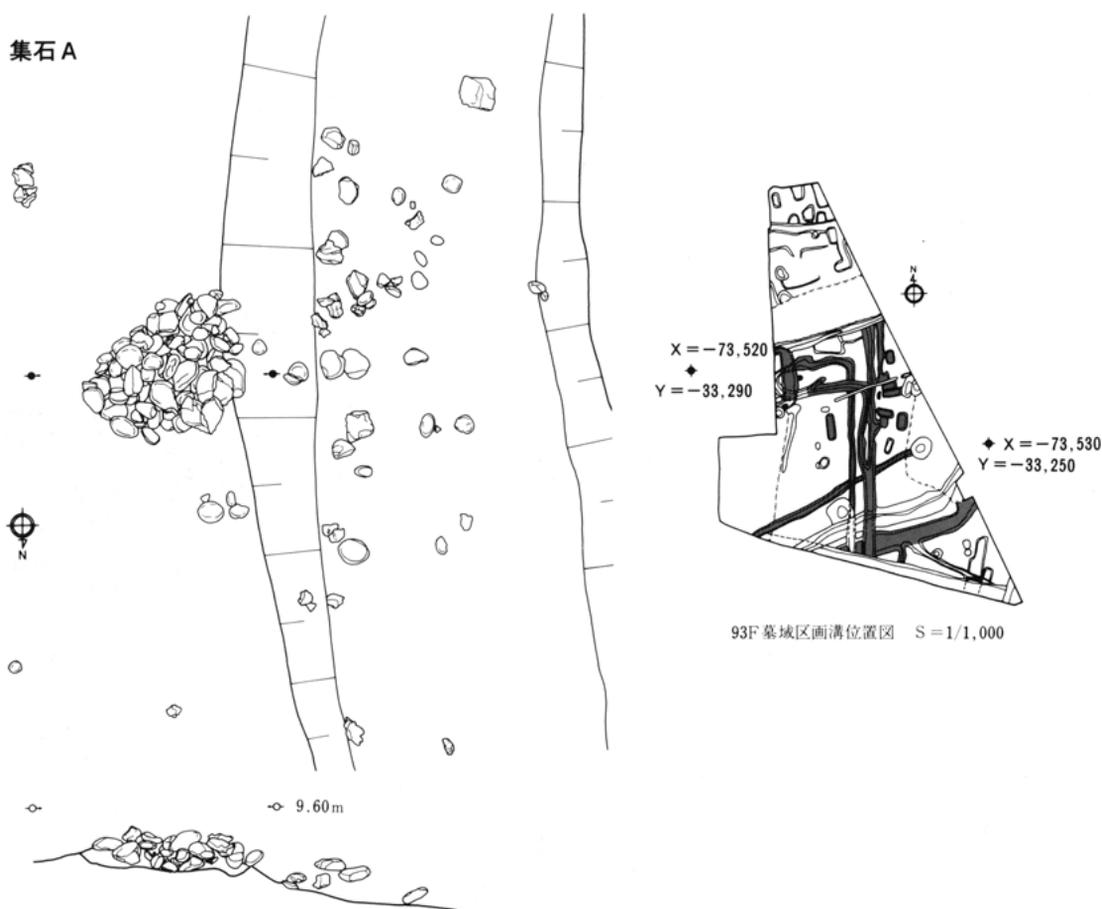
つぎに93F区で検出した墓域の区画溝について取り上げる。

墓域とした理由に、区画溝に隣接して集石墓が5ヶ所確認されていることがあげられる。集石Aは施釉陶器の四耳壺や骨片などを伴う遺構で、集石墓として捉えることができる。ほかの4ヶ所では骨片は確認できなかったものの、集石の状況などから集石墓の可能性が高い。

SD13・14はL字状に屈曲する溝。SD14はSD13に東側に隣接して北に延びる溝で、途中西側に向けて屈曲する。したがって、SD13に交差してL字状に回る。SD11はSD14の東側に並行する溝で、SD11に西側の掘形を切られながら接する。3条の溝の新旧関係はSD11→13→14となる。また、SD13・14が並行して西側に屈曲した延長上に西側に向けてコの字状に屈曲する溝がSD13・14の上にある。また、これら南北溝を区画する東西溝が2条ある。北側にSD18、南側にSD06、南側のSD06は南北溝より先に掘削されている。SD18は南北溝の後に掘削されている。

また、南北溝の両側には方形土坑が8基みられ、溝に長軸方向が直交するもの並行するものがある。墓域の範囲は南北がSD18とSD06と考えられるが、東西は不明。南北溝の間が墓道と仮定すると、東西溝のSD06のさらに南側に墓域が展開することも予想される。

いずれの溝も中世Ⅱ期を中心とする時期。



### 3. 2. 2 建物

確実に建物と認定できる遺構は3棟ある。そのうち94H区SB01を取り上げる。SK80・87 94HSB01・90・91・92によって構成される2×4mの1×2間と考えられる掘立柱建物である。このうちSK80・92は木製の礎板を持つ。礎板は柱穴の最下部、あるいは少し浮いた状態で確認された。柱穴の規模は、径40~50cm、深さ20cm前後を測る。時期は出土遺物がほとんどなく、SD08との切り合い関係からⅢ期以前と考えられる。このほか木製礎盤を持つ遺構としては、94HSK133・155があり、掘立柱建物の可能性がある。これらの掘立柱建物は居住域Ⅱに伴うものとして考えられる。

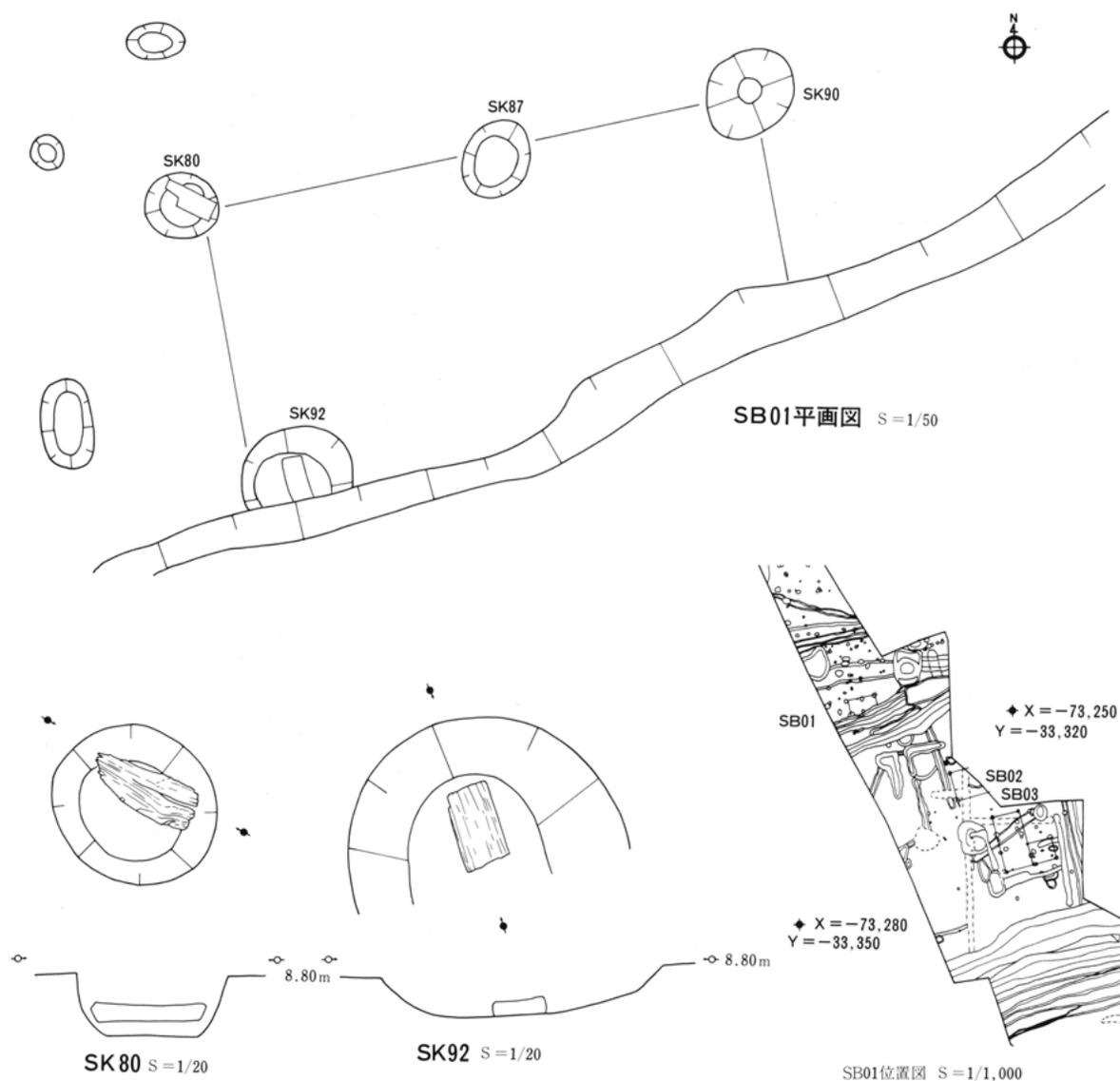


図18 94H SB01実測図

### 3. 2. 3 井戸

大毛沖遺跡では多種多様な井戸が確認できた。すべて中世期、12世紀から15世紀まで、計24基ある。これらのうち木組の井戸は、中世期の井戸築造技術を考える上で貴重な資料となった。

**分類** 井戸はその形態・素材から大きく分けて3つある。素掘り(A類)、木組(B類)、石組(C類)に分けられる。さらに、井筒からも3種確認できる。井筒なし(1類)、曲物(2類)、土器(3類)に分けられる。以下、井戸の形態・素材と井筒の種類の組み合わせを基準に分類する。

A類……………素掘りのもの。

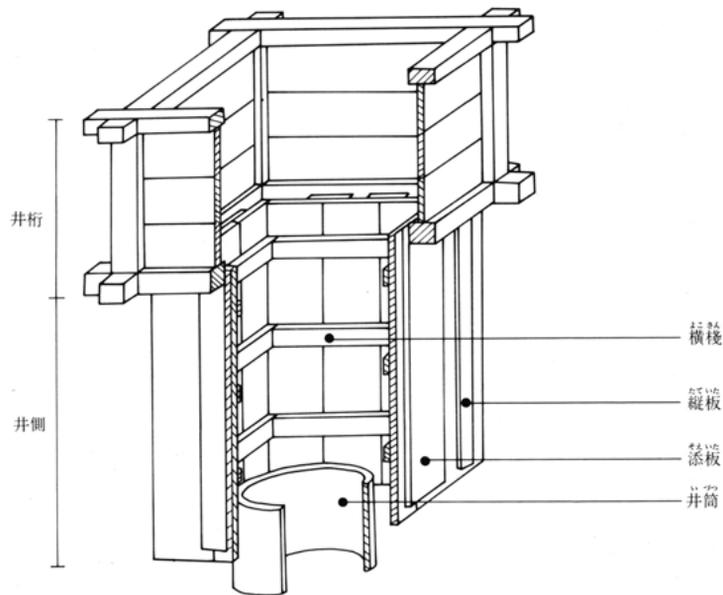
B類……………方形木組。B類は木組構造によりさらに細分できる。

B a 類……縦板組横棧どめ B b 類……縦板組無支持

B c 類……横板組隅柱どめ

井筒は2類がほとんどで、1例だけ3類がある。

C類……………石組。1例のみ。側面はすり鉢状になり、上面は四角錐状に4方向に面を持つ。井筒はなし。



井桁……………井戸の地上部分、人畜が落ちたり  
汚水の流入を防ぐ  
井側……………井戸の地下部分、井戸本体  
井筒……………井側の底に埋める小型の筒  
縦板……………井側を構成する中心的材で  
板を縦に使用

横板……………縦板と同じで板を横に使用  
添板……………縦・横板接合部を外側から補強する材  
隅柱……………縦・横板の骨組として井側四隅に立てた柱  
横棧……………縦板の骨組として横に枠組した材  
支柱……………横棧間を支える柱

図19 木組み井戸模式図 (広島県教育委員会、1995年より引用改変)

素掘りの井戸は17例あり、数量的に最も多い。なかでも井筒が曲物となるものが12例あり、A類の。図示した井戸はA 2類(93G・SE05)とA 3類(93A・SK04)。

SE05はA 2類のうち最も井筒の高さがある井戸。残存高だけでも110cmを越える。曲物 93GSE05の段数は6段を数える。平面プランはほぼ円形、掘形は深部近くに10cm前後のテラスを位1段持つ逆台形となる。井筒の位置はほぼ中央になる。

遺物の出土状態は、井戸の廃棄された後の埋土から大量の土器が出土している。遺物の時期は中世Ⅰc～Ⅱa期。したがって、井戸の廃絶時期は中世Ⅰc以前となる。

SK04は井筒に甕と甕の口縁部から上位に曲物を持つ井戸。曲物は1段のみ残存していた 93ASK04が、セクション図からは掘形の上位まで続くことがわかる。平面プランは円形、掘形の断面形は方形となる。井筒の位置は深部中央からやや北よりになる。

時期については、遺物がほとんどないため廃絶時期がつかめない。井筒の甕から中世Ⅱa期以降の時期が考えられる。

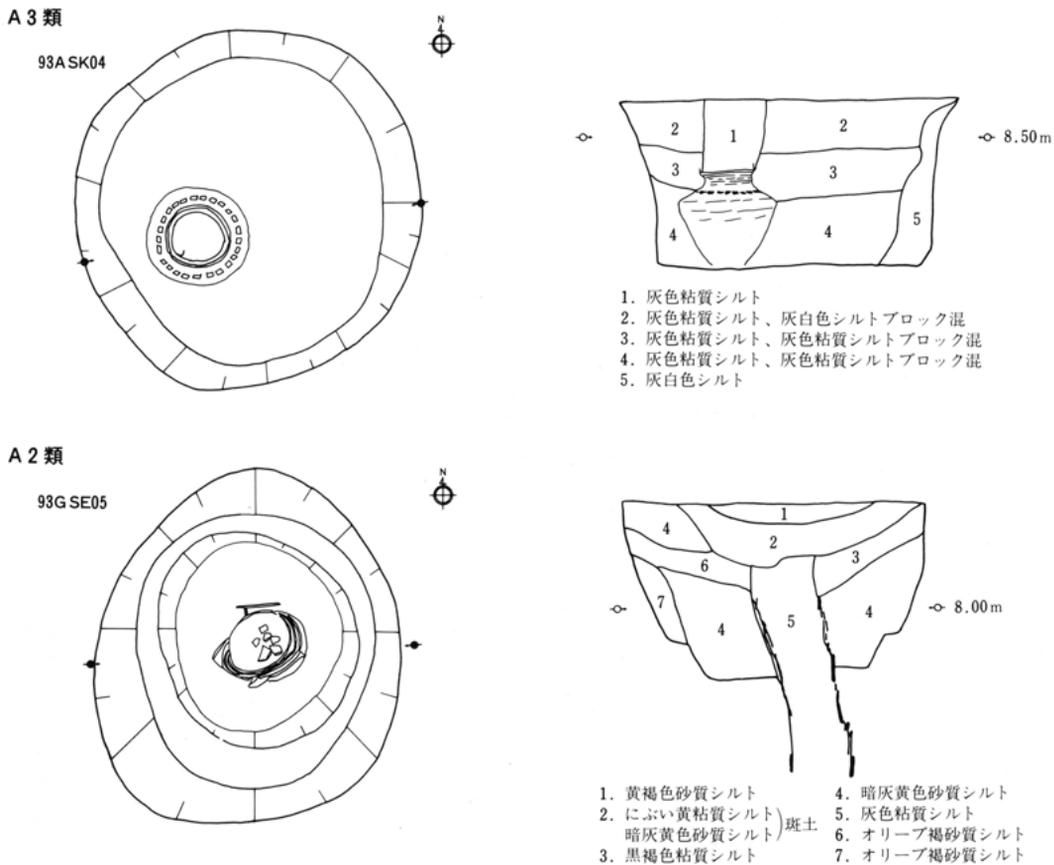


図20 93ASK04、93GSE05実測図 S=1/50

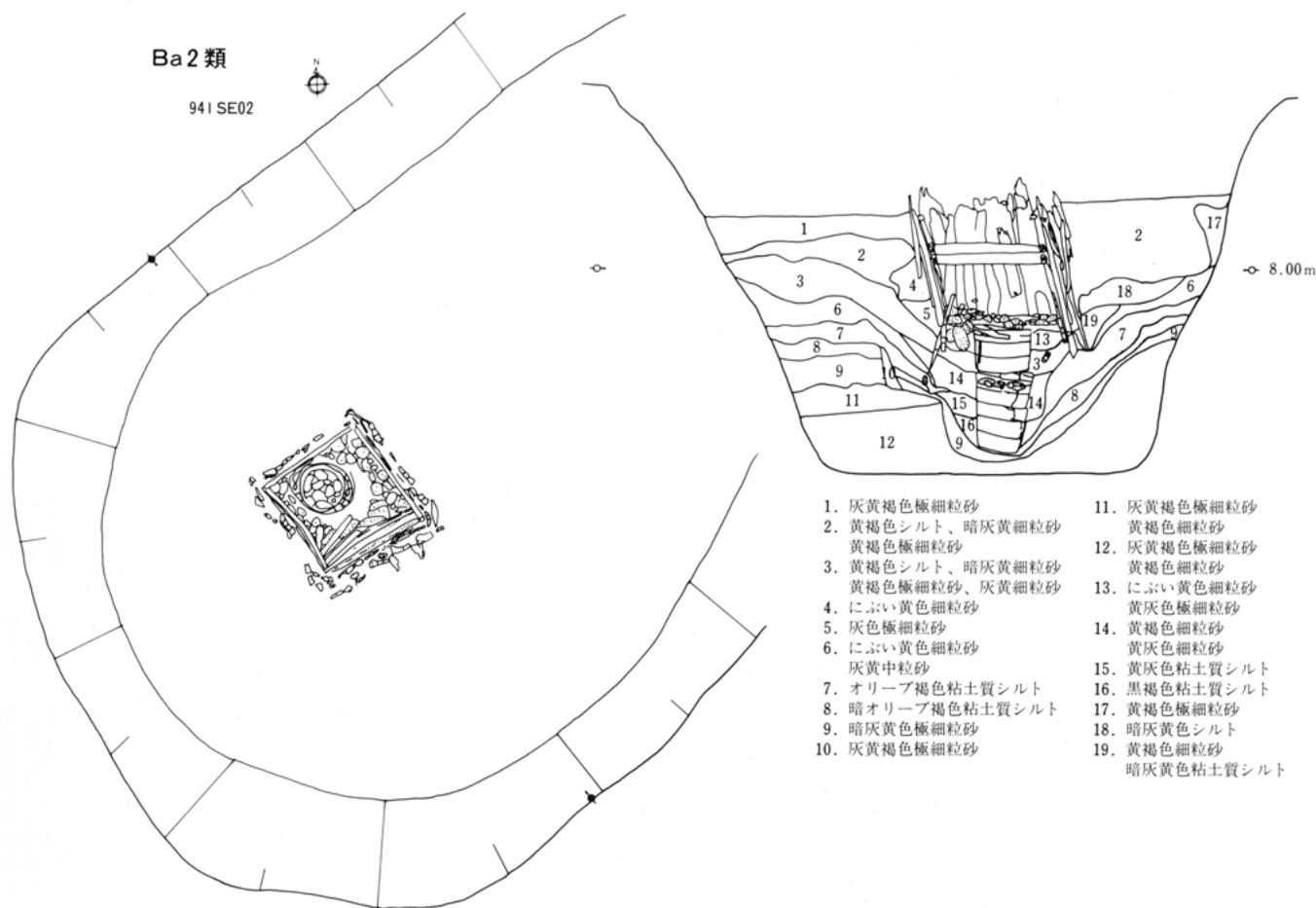
**B類** 方形木組の井戸は6例ある。細別した類型で示せば、Ba2類、Ba3類、Bc2類が各1例、Bb2類が2例となる。6例とも共通して井桁の部分は痕跡もない。しかし、井側の部分は比較的残りが良く構造が良くわかる。ここでは94I SE02(Ba2類)と94H SE07(Ba3類)を紹介する。

**94 I SE02** SE02は縦板組横棧どめで井筒に曲物を持つ井戸。掘形は隅丸の長方形プラン、規模は4.8×6.8m、深さ2.4m。井側の規模は90cm四方で、高さ約2m(推定)。井筒の規模は径30cm、高さ85cmの3段積み。

井筒・井側の構造について築造過程を追って説明を加えると次のようになる。

- ①井筒を設置。その際、中段の井筒内側に河原石を敷き、さらに井桁組みの木枠を付ける。なおこの木枠は平面的には井側の横棧と約45度方向をずらして設置している。
- ②井筒の上に井側下段の横棧を置く。井筒の上面周囲を河原石で覆う。
- ③縦板および添板を四方に配置する。
- ④縦板の内側に上中下3段の横棧を組む。中段の横棧については2段に重なっている。上段は削平により確認できなかった。

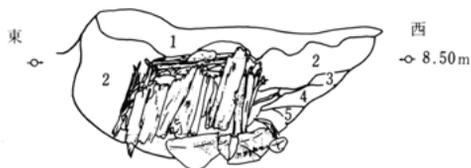
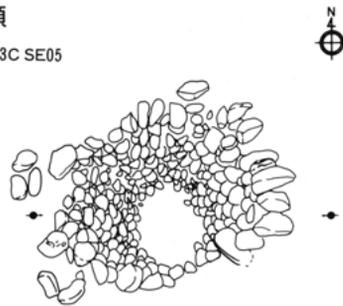
井戸の所属時期については、廃絶前の遺物が井側付近から出土しており、それらから中世Ⅱ期とした。



Ba3類  
94H SE07



C類  
93C SE05



1. オリーブ褐色細粒砂質シルト
2. 灰色細粒砂質シルト
3. にぶい黄褐色粗粒砂
4. 灰オリーブ色極細粒砂質シルト
5. 黄褐色極細粒砂

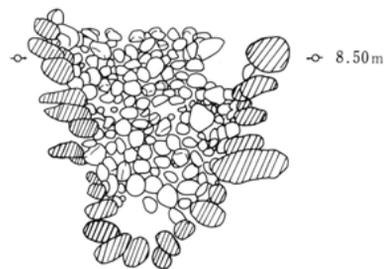


図22 94HSE07、93CSE03実測図 S=1/50

SE07は縦板組横棧どめで井筒に土器（甕）を持つ井戸。掘形は全形がつかめないものの、94HSE07隅丸の長方形プランとなる。規模は、短軸方向で2.1m、深さ1m前後を測る。井側は北方向から土圧などにより崩壊しつつも構造は比較的把握しやすかった。井側は中段と思われる横棧より上位は残存していなかった。また、中段から下位にかけて径20cm以上になる河原石が大量に廃棄されている。この時点で井側が崩壊したものと見ている。横棧の仕口は目違い柄で組んである。

所属時期については、井筒に使用されている甕からⅡa期以降と、また廃絶時期は上層にⅢc期が混入するものの、主体はⅡb期と考えられる。

SE03は石組みの井戸、井筒は確認できなかった。掘形と井側に相当する河原石を裏込めをせずにすり鉢状に積み上げている。側視面と平面の観察により、逆四角錐状に積み上げられていることがわかった。すなわち、4つの面を持ちながら積み上げている。底のあたり部分は石積みが崩れているため判然としないが、底に平面を持つというよりは尖った形態を持つ感がある。したがって、井戸以外の用途も考えておく必要がある。

所属時期については、廃絶時期がⅡb期と考えられる。

### 3. 2. 4 居住域

ここでは土器による細別した時期区分より、大別した遺構群のあり方を捉えてみる。したがって、時間幅がⅠ期、Ⅱ期など大枠で進めることになる。

**居住域Ⅰ** 居住域Ⅰは遺構の所属時期などより、Ⅰ期からⅡ期までと考えられる。そこで、Ⅰ期とⅡ期に分けて進める。

93A

Ⅰ期は居住域の西側と北側に道2に囲まれた空間を指す。その内側には区画溝1が配置する。道2は区画溝1の中央から南にかけてクランク状の溝を持つ。ここを居住域の出入口と仮定することも可能であろう。居住域の内側には建物として確認できる施設はない。しかしながら、西側に隣接して畝状遺構、北西コーナーには井戸(A1類)があり、隣接する遺構のあり方から居住域とした。

Ⅱ期は道3が道2のクランク状になる道をほぼ直線として改修された東側に展開する。区画溝はⅠ期から継続するものと思われるが北側に新たな溝(SD15)が認められる。この北西コーナーに集中する遺構は、SX01が卒塔婆や梅檀の種子などを含む廃棄土坑、SK53とSK04が井戸となる。また、畝状遺構や区画溝およびこれに隣接する場所から「昆虫土坑」が検出されるのもこの時期に多い。Ⅱ期も居住域の内側には建物施設は確認できなかった。しかし、西側に隣接する道に変化が見られ、居住域との関連で何らかの規制が想定できる。

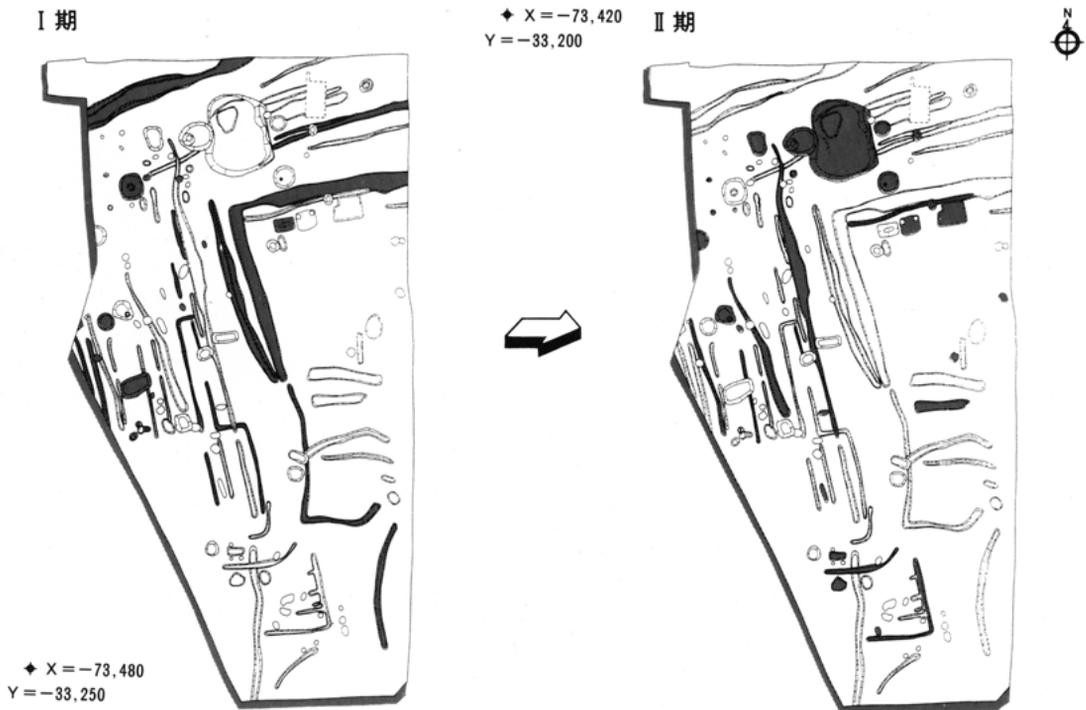


図23 居住域Ⅰ遺構変遷図 S=1/800

居住域Ⅱは94H区に展開する。基本的には居住域Ⅲと重なるが、時期的にはⅡ期とⅣ期  
居住域Ⅱ  
で遺構群として断絶がある。

南北を区画する溝はSD07とSD31。SD31は居住域Ⅲの溝の掘削により一部しか確認出来な  
い。東西を区画する溝は、東側のSD29を確認したのみ。

これら3方向に区画された内側に井戸が3基、掘立柱建物が3棟確認された。

居住域Ⅲは2時期に細分できる。Ⅳa期の遺構群とⅣb期の遺構群に分けて考える。 居住域Ⅲ

Ⅳa期は南北を区画する溝、北側にSD08、南側にSD33がある。さらに南北に区画された  
Ⅳa期  
溝の内部にL字に屈曲するSD10・24がある。

Ⅳb期は南北を区画する溝が2重になる。北側にSD09・11、南側にSD18・32がある。また  
Ⅳb期  
区画の内部には、L字に屈曲するSD25とその延長上にSD14、SK151・174などがある。

Ⅳ期は東西を区画する溝が確認できず、居住域の範囲を確定することができないが、北  
西に隣接する大毛池田遺跡に確認された方1町の居館跡とはほぼ同一の方向性を持つ区画と  
なる。また、内部施設（建物など）が判然としない点、東西に広がる構造あるいは大毛池  
田遺跡との関連性が今後の課題となる。

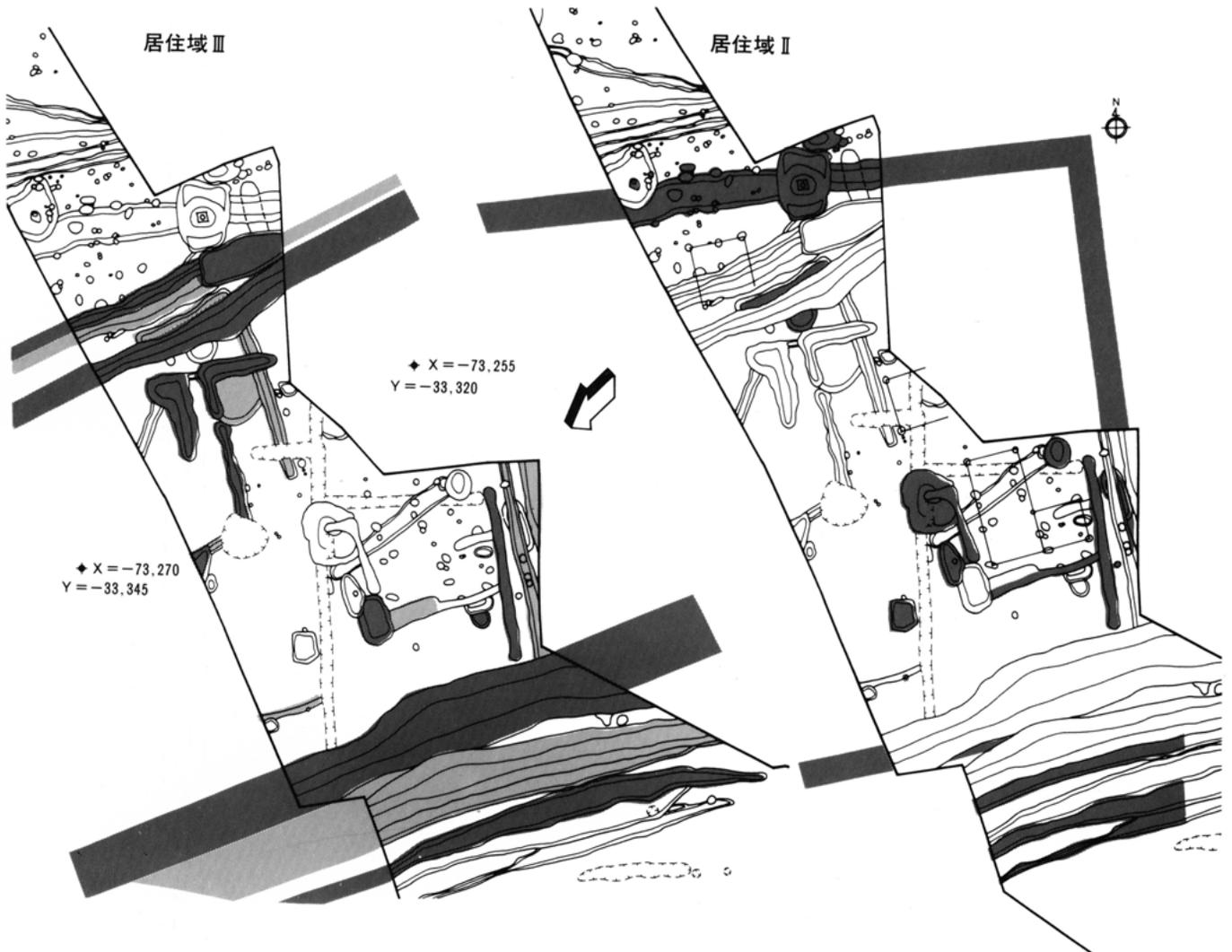


図24 居住域Ⅱ・Ⅲ遺構図 S=1/500

### 3. 2. 5 畝状遺構

93A

畝状遺構は居住域1の西側、道2・3に隣接して展開する。ただ、畝状遺構とは言うものの、整然と一定方向に均一の間隔をもって展開することはない。畝状遺構と判断した理由は3つある。まず、長さ10m前後、幅40cm前後、深さ10cm前後の溝が、ほぼ居住域の主軸方向に並行して展開すること。つぎに、大豆など畑作物の害虫と考えられるヒメコガネなどの昆虫土坑\*1が畝状遺構およびその周辺に7ヶ所見つかっていること。最後に、中世の包含層から畑作物の花粉\*2が大量に検出されたこと。以上の理由から畑地と考えた。

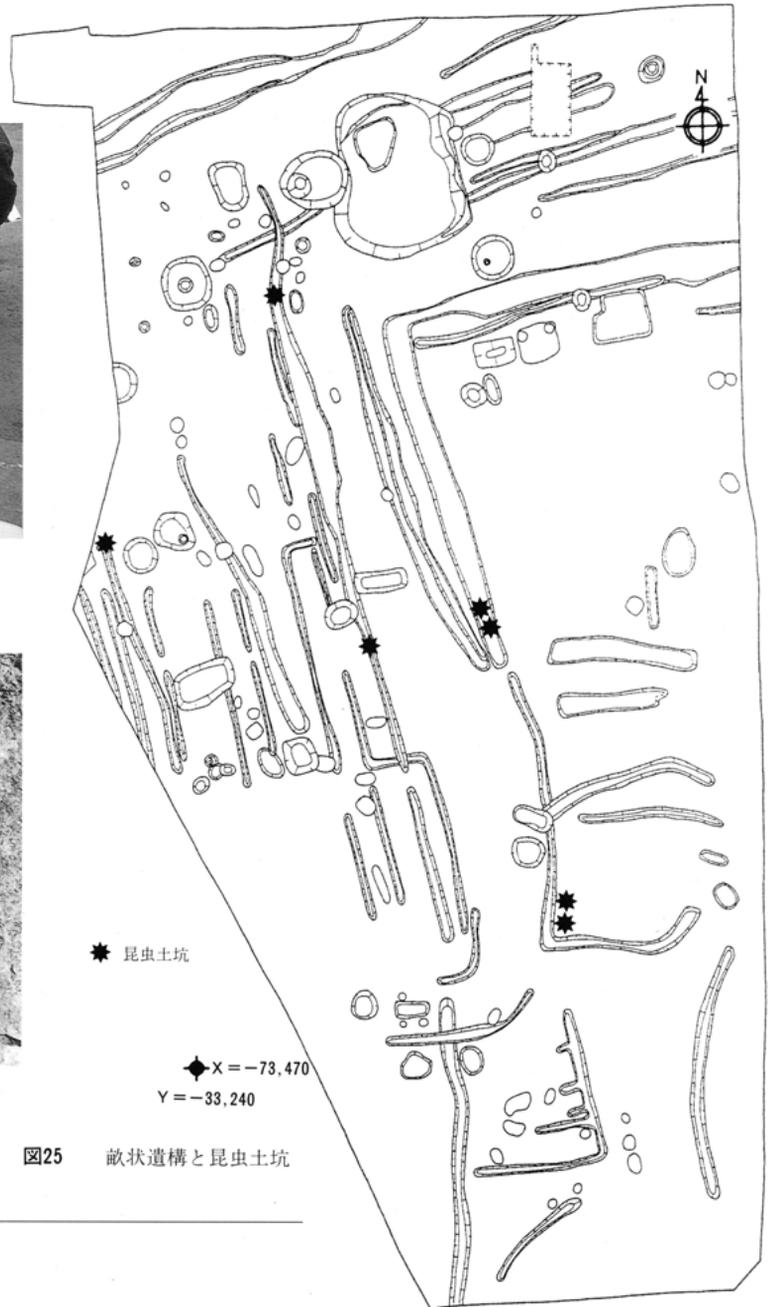
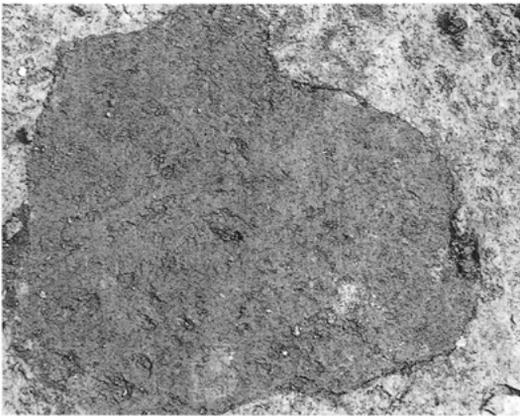


図25 畝状遺構と昆虫土坑

\*1 「5. 5」を参照。

\*2 「5. 3. 2」を参照。

### 3. 2. 6 方形土坑

方形土坑は他の遺構と同様に旧流路を基軸に一定の規則をもって配置している。尾張平野低地部に特有の方形土坑は、特に低湿地に集中することが多い。大毛沖遺跡でもこの例にもれず、旧流路上の湿地帯に集中する。また湿地帯以外、右岸域の自然堤防上にも展開する。湿地帯の方形土坑と同様な扱いをして良いかは課題として残るが、ここでは旧流路右岸域を2つ、旧流路上を2つ、計4グループに分けて進めてゆく。

旧流路のうち、93Gから94Cにまたがるエリア。まず、主軸方向は流路に直交する例が多く、河川に並行する例の約3倍ある。さらに長軸：短軸比からみると、前者は1から4までの数値がみられ、一方後者は1から2までの数値におさまる。時期については、中世0～Ⅱa期が中心となる。

旧流路のうち、93DからCにまたがるエリア。河川の方が若干東に振れる(N-E 50°)。数量的にはエリアAに比べて少ないものの、傾向としてエリアAと同様に直交する例が優位となる。長軸：短軸比については、2前後に納まり形態的には類似性を保つ。時期については、中世Ⅲ期が中心となる。

旧流路右岸域の自然堤防上のうち、94BからE区にまたがるエリア。エリアDほど土坑の配置が整然としないものの、河川に直交する土坑についてはほぼ縦列配置となる。また、直交：並行の比率は25：8で圧倒的に直交する土坑が多い。時期については、中世Ⅱ期が中心となる。

エリアCの北東に隣接するエリア。94I東側にある居住域の南西コーナーに展開する方形土坑。特に区画溝に並行する土坑列が2群あり、いずれも縦列配置となる。長軸方向はやはり直交するケースが過半数を占める。時期については、中世Ⅱ期が中心となる。

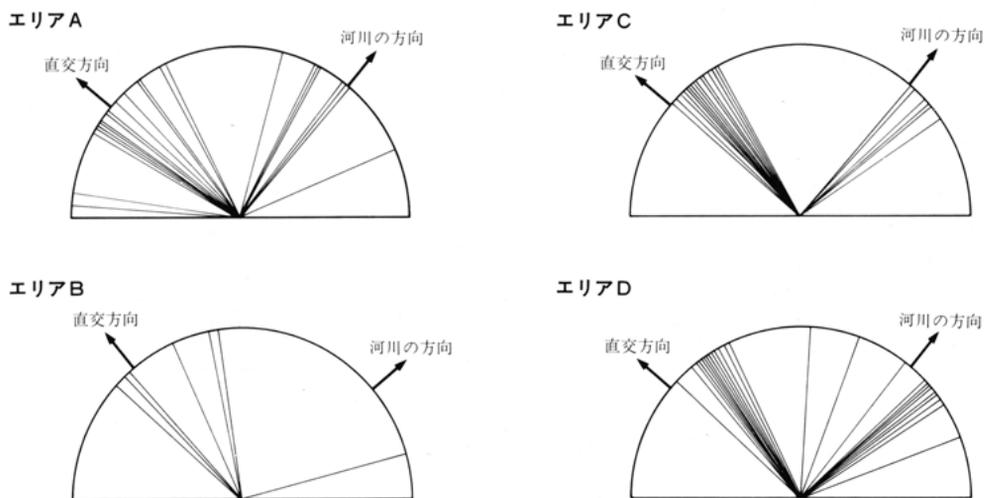


図26 方形土坑長軸の方位

以上が状況説明としてあげたデータ。しかし、遺構の埋土から分類すれば、明らかにエリアA・BとエリアC・Dとは異なる。前者が黒褐色と灰色シルトの斑土、後者は暗茶褐色砂質シルトの単一層となる。したがって、前者と後者は流路（自然地形）に規制されている点においては近い関係が想起できるが、一方で埋土からの視点では明らかに異なる性格の遺構として捉えることも可能であろう。

一方、時期的な側面からみると、エリアAは中世0～Ⅱa期が中心となり、エリアBは中世Ⅲ期が中心となり、エリアC・Dは中世Ⅱ期が中心となる。エリアA～エリアC・D～エリアBへの空間占拠の変遷が追える。

遺物の出土はほとんどない。94DSK13のように三筋壺（図53-314）がほぼ完形品で確認できる例は稀で、比較的遺物が伴うのはエリアAのみ。尾張低地部でこれまでに確認されている方形土壇の諸例は各遺構に皿1点、あるいは銭貨数枚といった出土状況が報告されている。大毛沖遺跡の方形土坑で総合的に見て「方形土壇」に相当するのはエリアA・Bのみとなる。

### 3. 2. 7 その他の遺構

93ASX01 SX01は居住域Ⅰの北西コーナーに位置する。居住域Ⅰとの関係は、ほぼ同時期に存在したものと考えている。また、西側で切り合い関係を持つSK53は、SX01より1時期新しい。規模は長軸で9m、短軸で6.5m、深さ82cmを測る。平面形は空豆形の不定形な楕円になる。断面形態は部分的に一段テラス状の平坦部分を持つ、二段のU字形をなす。

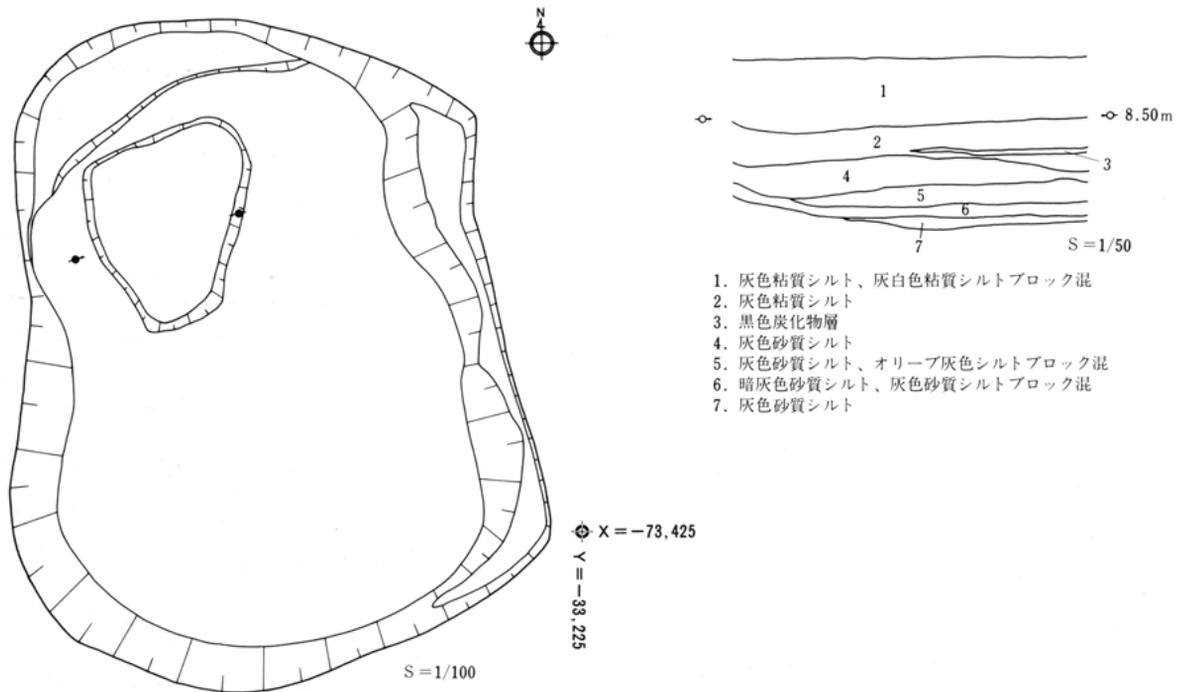


図27 93ASX01実測図

### 3.3 旧流路

大毛沖遺跡を東西に二分する旧流路は、古代から中世初めまで「カワ」として機能していたことが確認できた。その概要の規模は、最大幅20m以上、最大深度80cm以上を測る。堆積状況については、9世紀代までは流水性の堆積（流路Ⅰ期）、9世紀代から12世紀代までは流水性と止水性の堆積が交錯（流路Ⅱ期）、12世紀代以降は湿地化する堆積（流路Ⅲ期）となる。明治17年の地籍図からは、字名が「下流」など「カワ」に関する地名が見える。地目は「田」である。

流路に関わる施設として「護岸施設（94GSX01）」と「集石遺構（94GSX02）」がある。護岸施設は8世紀後半、集石遺構は10世紀前半として捉えている。流路から出土した遺物については、須恵器・灰釉陶器など土器類のほか、土錘や曲物、獣骨など多種多様な遺物が出土した。特記事項としては、流路Ⅱ期に属する木製鏝と流路Ⅲ期に属する鉄製羽釜があげられる。

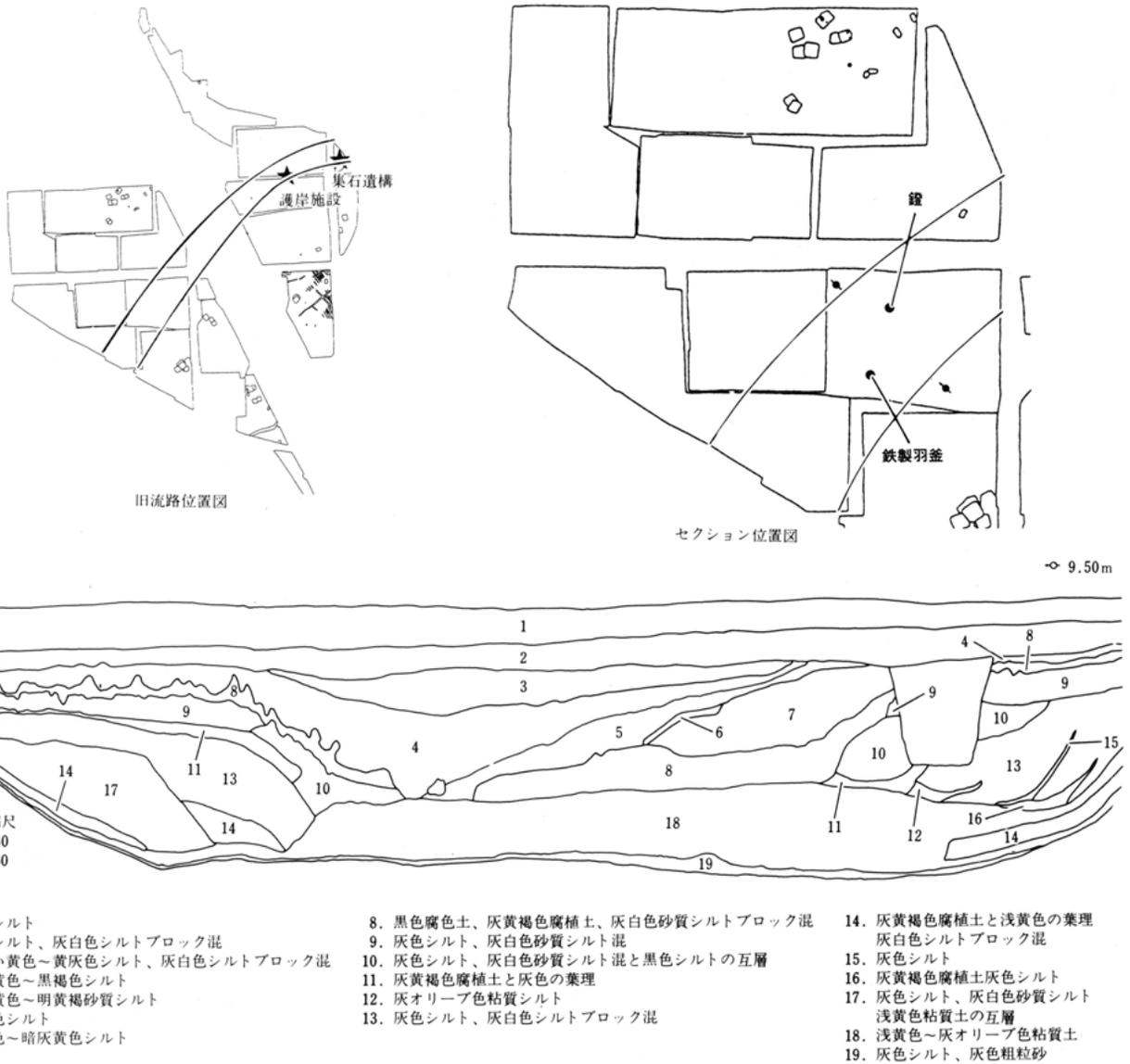


図28 旧流路の位置と断面図

### 3. 3. 1 堆積状況

**基本層序** 旧流路の堆積状況と遺物の年代観から、大きく3層に分ける。第Ⅰ層、8世紀後半から9世紀初頭まで、流水性の堆積のみ。第Ⅱ層、9世紀前半から12世紀代まで、流水性と止水性堆積を繰り返す層。第Ⅲ層、12世紀代から15世紀代にかけて堆積する止水性の堆積層。

**第Ⅰ層** 第Ⅰ層は、後述する「護岸施設」が見られる層位である。堆積土層観察は極細粒砂層から中粒砂層とシルト層の葉理。護岸施設はこの第Ⅰ層下部と下位に堆積する極細粒砂層との間に位置する。遺物はほとんど出土していないが、護岸施設に伴う須恵器と94G区から出土した土師器・須恵器より、8世紀後半から9世紀初頭までの堆積と思われる。

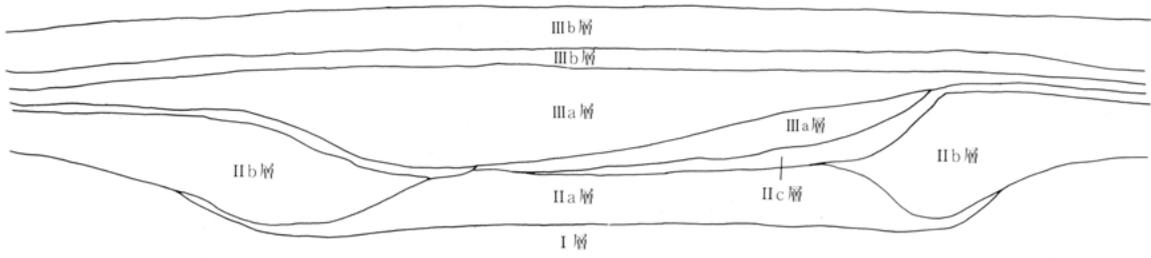
**第Ⅱ層** 第Ⅱ層は、土器・木製品をはじめ動植物遺存体など豊富な遺物を含む層位である。第Ⅱは、さらに3層に細分する。第Ⅱa層は緑色腐植質土層、第Ⅱb層は灰褐色粘質シルト層と黒色腐植質土層の互層、基本的には当時の地山から流れ込んだ土層。第Ⅱc層は黒色腐植質土層で、土層の断面観察から厚さ約1～3cmの薄い堆積をしており、この層がほぼ旧流路の範囲を覆うと思われる。すなわち、旧流路の両岸に形成される自然堤防には見られない層位である。そのほか、94G区SX02とした「集石遺構」がある。

**木製鏡** 出土遺物については、Ⅱa層は灰釉陶器を中心に須恵器などの土器類、木製品は下駄、曲物など。Ⅱb層は特筆すべき遺物が出土している。土器類はⅡa層と様相が近似する一方、木製品に特異な製品が含まれる。「木製鏡」である。詳細は後述するとして、ここでは出土状態について記す。出土地点は94D区、旧流路で言えば右岸に相当する地点から出土している。層位的には、Ⅱa層が川岸近くで途切れ、Ⅰ層とⅡb層がほぼ接する辺りから出土している。したがって、Ⅱb層のなかでも比較的古い段階に堆積した地点であろう。

**鉄製羽釜** Ⅱc層は土錘が30点ほど固まって出土している(94D)。また、土中に含まれる珪藻は比較的きれいな水に生息する珪藻であることから、漁労に適した「カワ」であったと推測できる。Ⅱc層上位には「鉄製羽釜」が出土している(94D)。出土位置は流路の左岸に横位の状態出土した。

**第Ⅲ層** Ⅲ層は、基本的に止水性の堆積をなす層で、Ⅱ層に増して遺物の多い層である。Ⅲ層はさらに2層に細分する。Ⅲa層は暗褐色粘土質シルト層で旧流路の窪地状になる落ち込みを埋めるように堆積する。Ⅲb層は暗灰黄色シルト層でⅡc層よりさらに薄い堆積でとなるようで、断面観察では比較的容易に捉えられるものの、面的な拡がりがかみにくい。

Ⅲ層の特徴としては、Ⅲ層に切り込む状態で方形土坑が検出されている点である。遺物の出土量が極端に少ない遺構が層位的に確認できる例はあまりない。

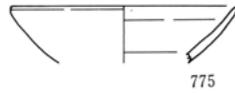


旧流路層序模式図（縮尺任意）

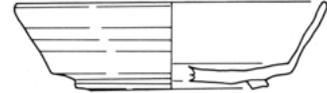
I層出土遺物



774

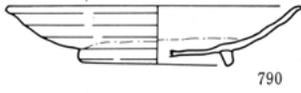


775



776

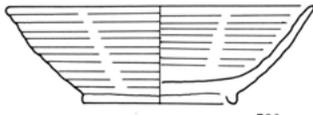
IIa層出土遺物



790

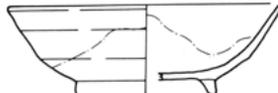


792

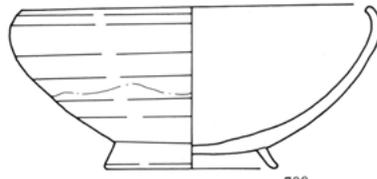


780

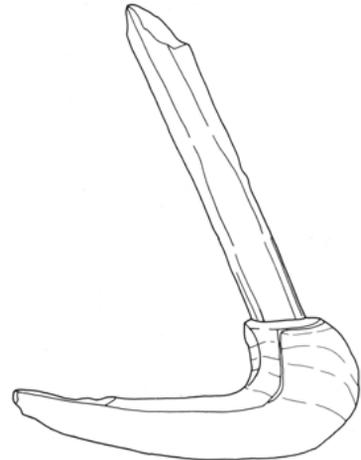
IIb層出土遺物



803

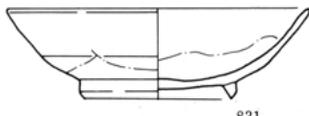


799



1066

IIc層出土遺物



831



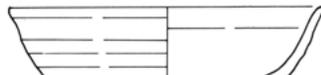
856

杏

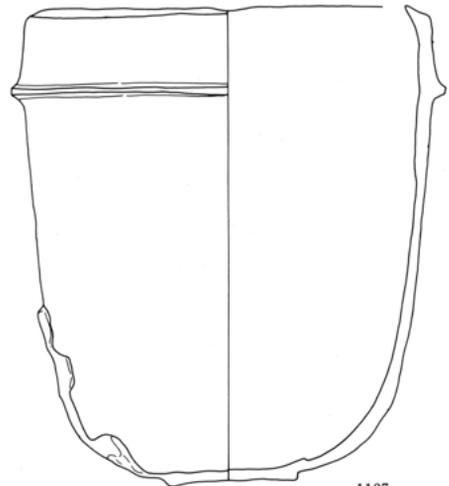
IIIa層出土遺物



877



878



1127

図29 旧流路層序模式図と主要出土遺物（S=1/4，遺物番号は「4. 遺物」と同一番号）

### 3. 3. 2 流路に関わる施設

**護岸施設** 94G区SX01は、93D区と93C区に挟まれた細長い調査区（94G区）のほぼ中央に位置する。旧流路での位置関係はちょうど流路が南方向に折れる左岸になる。層位的には第Ⅰ層**低水路護岸**が相当する。今回検出した護岸施設は、河川工学では「低水路護岸」\*1と呼んでいる施設である。以下、河川工学の用語\*2を用いながら説明を加える。

大毛沖遺跡で検出した94G区SX01は、類例として愛知県朝日遺跡（弥生時代）、愛知県室遺跡（奈良時代）のほか、岡山県津寺遺跡があげられる。この津寺遺跡の類例は7世紀初頭と最も年代的に近く、調査も保存問題にまで持ち上がったほどの大規模な護岸施設である。

**そだ沈床工法** さて、今回の類例は河川工学的用語では「そだ沈床工法」と言う。「粗朶」は「伐りった樹の枝。堤を築く材料とする。（『広辞苑』より引用）」ことである。

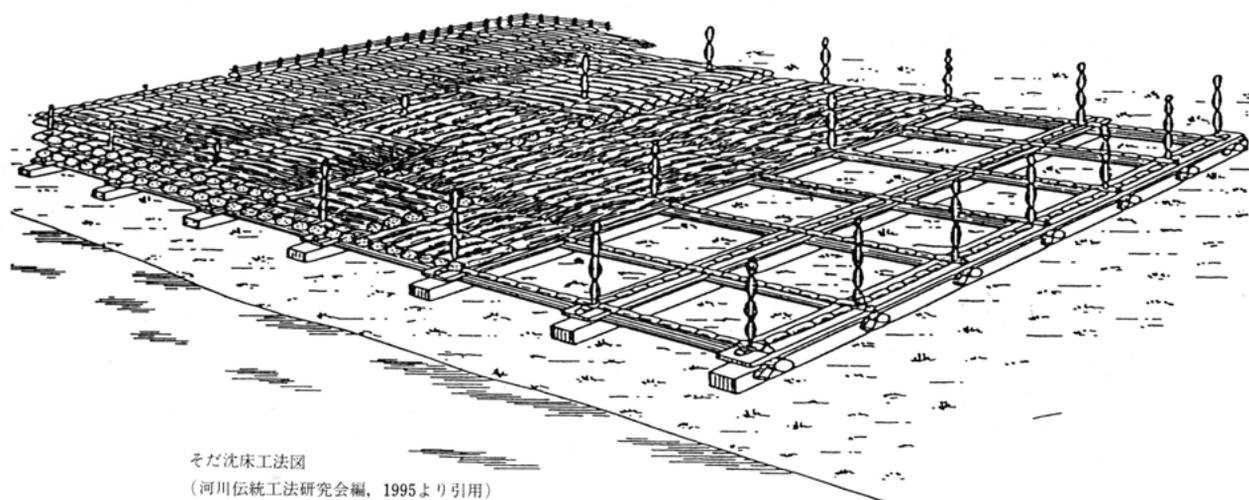
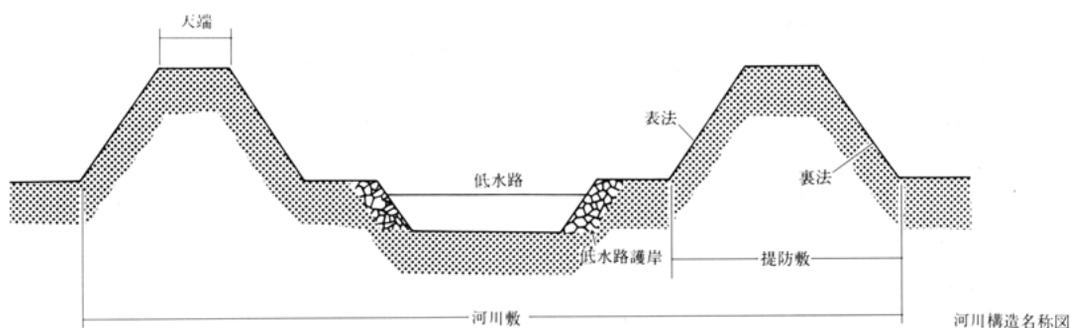
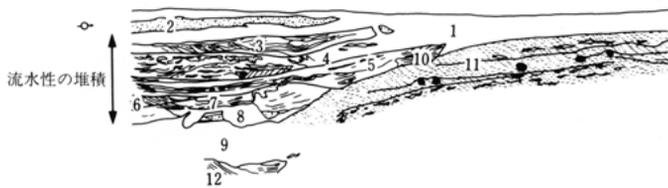
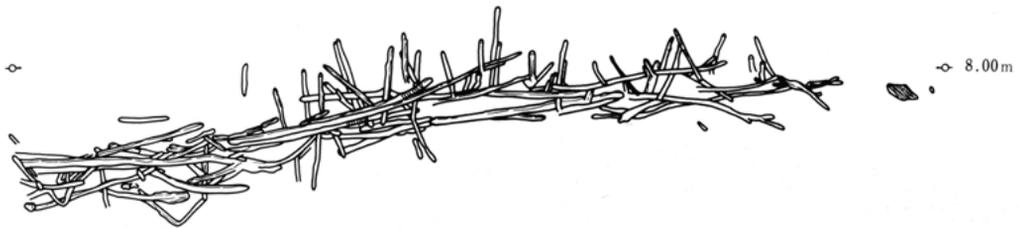
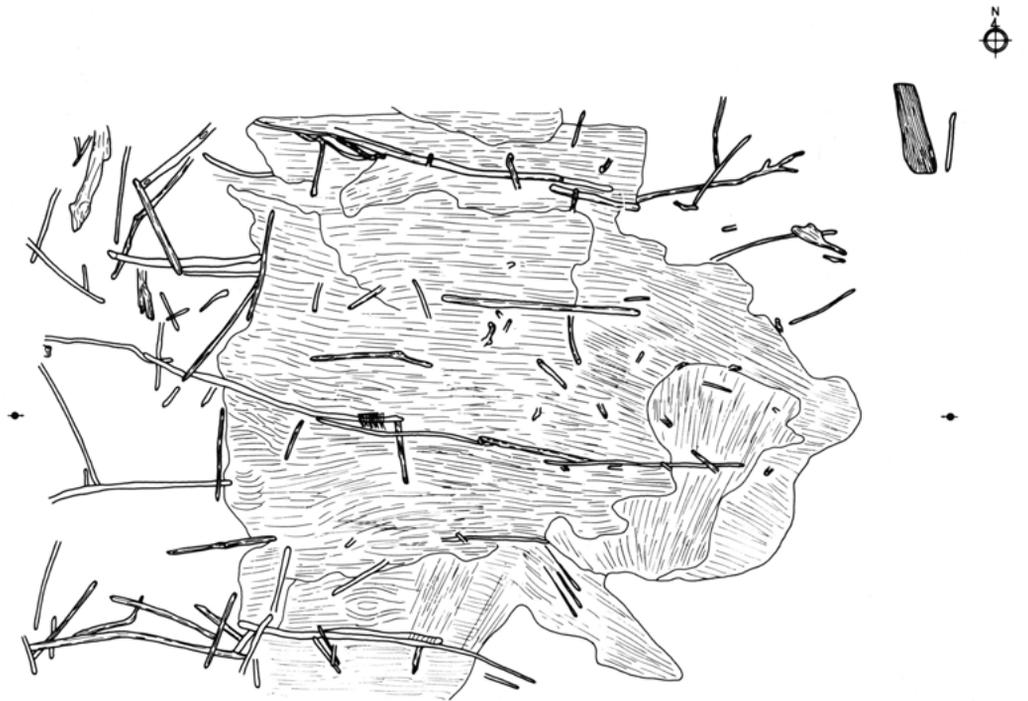


図30 河川構造図とそだ沈床工法図

\*1 高橋裕『河川工学』東京大学出版会, 1990

\*2 河川伝統工法研究会編『河川伝統工法』榊城域開発研究所, 1995



1. 黄灰色シルト
2. にふい黄色極細粒砂質シルト
3. にふい黄色極細粒砂とシルトの互層
4. 黄灰色粘土
5. 灰色シルト
6. 灰色中粒砂
7. 黒褐色未分解腐植
8. 灰色粘土
9. 黄灰色粘土
10. 黒褐色腐植
11. 黄灰色粘土
12. 明黄褐色中粒砂

図31 94G SX01 実測図 (S=1/80)

## 低水位護岸施設 (94GSX01)

**出土位置** 出土位置は先に記したように、旧流路の構造から低水路にあたる左岸に位置する。換言すれば、低水路護岸の位置となる。旧流路全体の位置関係から示せば、大毛沖遺跡の北東から南西に縦断する旧流路がちょうどやや南方向に折れ曲がる左岸域、水流から言えば水流の変換点にあたる滑走斜面に位置する。

**規模** 規模は検出した範囲で示せば、延長7m以上、水平幅9m以上を測る。施設の構造から見てみると、低水路の表法面に配置されている。施設の構造を築造過程順に示すと、次のようになる。

① まず法面に流路の深部に向かって杭列が配置される。杭の規模は現状で長さ50～120cm、径が3～8cmを測る。ほとんどの杭は、樹皮がついたままで土中に入る先端部を尖らせるだけの簡素な加工痕の杭ばかりである。杭列は現況で6列確認できる。

② 水流に平行して横木が配置される。横木の規模は杭より比較的長さを有し、1.5～2m、径が5～10cmを測る。杭と同様に樹皮がついたままの木材がほとんどである。水流に平行する横木は直行する横木より少ない。

③ 葦などの草本類の葉や茎が主材料である「敷葉」状の構造材が配置される。水流に対して平行あるいは直行するように交互に敷いている。厚さは場所によって違いがあるものの、1～10cmである。また、これら敷葉状構造材とシルトが交互に敷かれて、法面を保護している。

④ ③の敷葉状構築材の間に挟まれるように、水流に直行する横木が配置される。横木の規模は②と同様で、枝落ちさせたのみの木材である。横木は杭列に沿って配置されており、これを支えられるように杭が水流の上と下に打たれている。

以上が護岸施設の概要である。今回、良好に検出できた護岸施設は滑走斜面側の施設であり、対岸にある同様の護岸施設(SX03)は遺存状態が極めて悪い。おそらく攻撃面に相当する施設のため、破壊が進んでしまった結果であろう。ただ、一部で確認できた横木と思われる部材はSX01より規模が大きく、おそらく表法面だけではなく裏法面もあるしっかりとした護岸が築かれていたと思われる。



図32 低水位護岸施設 (写真)

集石遺構 (94GSX02)

集石遺構は全調査区の東北端に位置する。旧流路との位置関係については、左岸のやや東に振れて合流する地点である。集石の認められた範囲は幅0.7~3.5m、長さ12.5m、厚さ5~12cmである。検出状況については、溝状の落ち込みの底部から西側の立ち上がりにかけて、石を敷き詰めたような状況であった。また、集石を断ち割って断面観察を行ったところ、さらに下部より溝状の落ち込みが確認された。この溝の規模は、幅3.5m、深さ1.5mを測る。検出状況については、ほぼ集石に覆われる状況であった。したがって集石との関係は、溝が埋まっていく途中、あるいは再度の掘削をした時点で集石が配置されたと考えられよう。

時期については、集石直上に2点確認できた。一つは、灰釉陶器碗の底部、もう一つは「呪符状木筒」である。前者より集石の年代が9世紀後半であると判断した。後者の「呪符状木筒」は遺物の項で触れる。

集石遺構の性格については、以下2例の可能性を想定している。

(1) 護岸施設として捉える。理由は、東側の溝の立ち上がりから底部にかけて密に石を配置していること。さらに、護岸施設として想定するならば、水流は河道が上となり、水を引き込むための導水路として考えられる。

(2) 祭祀場として捉える。理由は、呪符状木筒の出土にある。祭祀に関わる遺物が他に出土していないため断定できないが、「河川祭祀」的な空間が想定できる。そうすると、この集石遺構は祭祀遺構として捉えることとなり、本流に向かって水流が考えられ、(1)とは全く逆の捉え方となる。

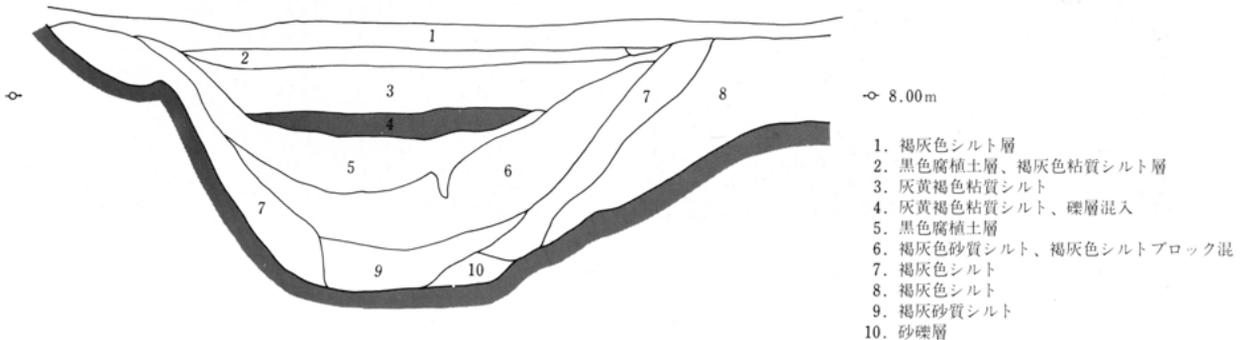


図33 94GSX02出土状況写真(上)と断面図 (S=1/40)

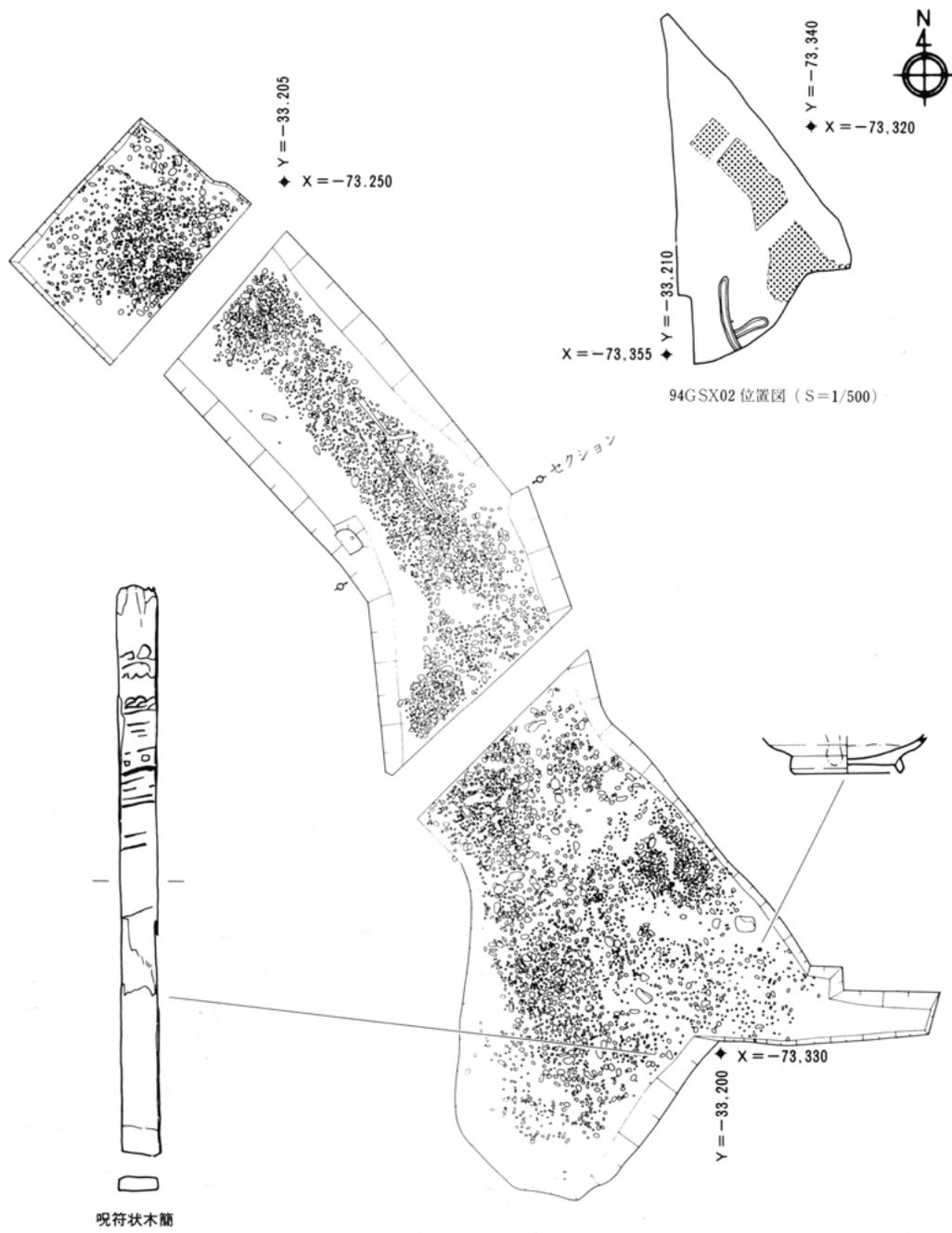


図34 94GSX02実測図 (S=1/80)

### 3.4 その他の遺構

#### 島畑状遺構

今回「島畑状遺構」と呼んでいる遺構は、そのほとんどが『明治17年地籍図』に見える「内畑」表記の区画と一致する。したがって、遺構の名称を「内畑」と限定して使用することも考えた。しかし、遺構の年代が必ずしも明治時代以降ではなく、中世まで遡る可能性が高いとの判断から、従来から使用されている「島畑」を使用した。「～状遺構」とした理由に、「島畑」の用語が考古学的用語として定義されていないからである。

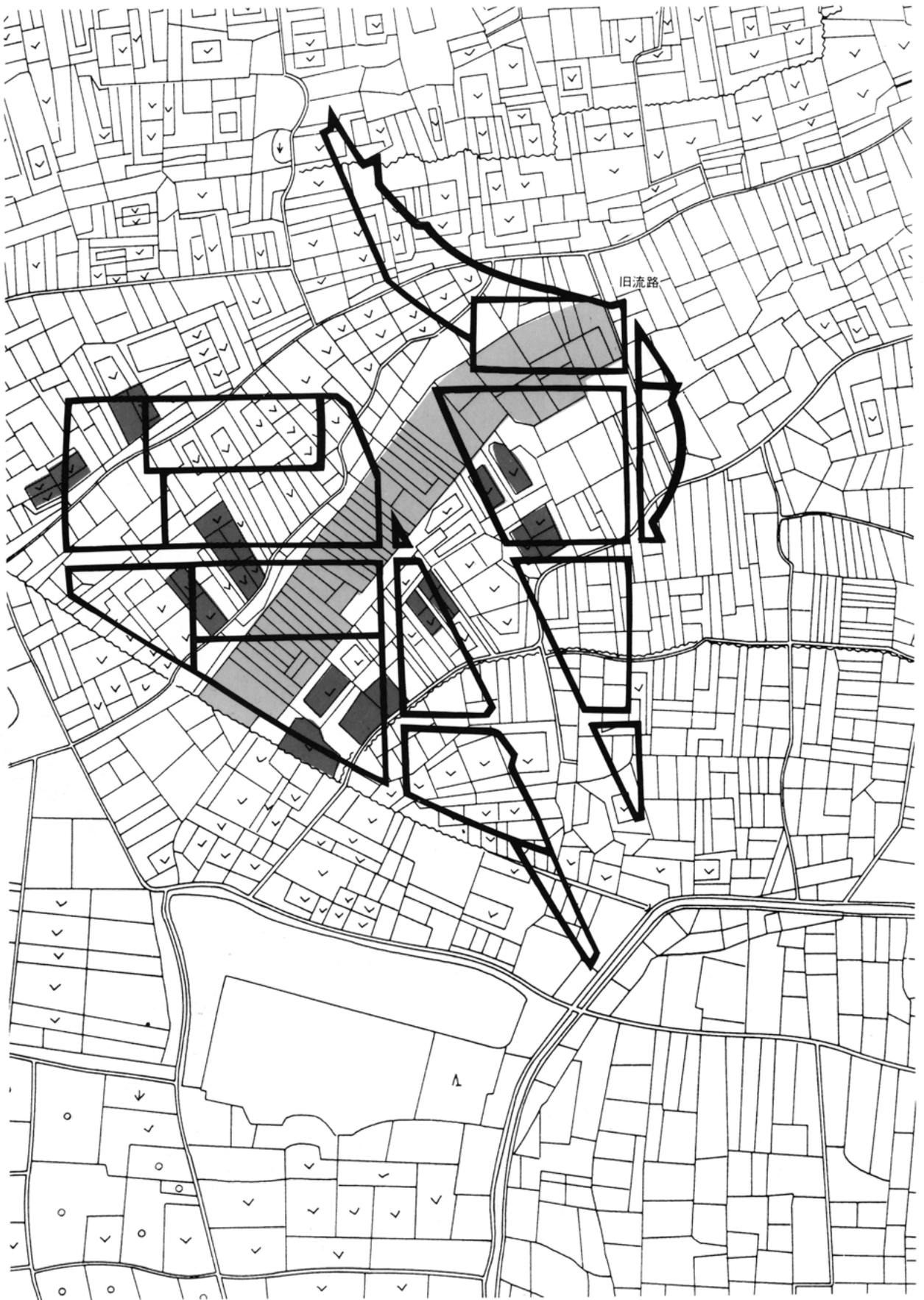
大毛沖遺跡で検出された島畑状遺構は合計13例ある。なかでも93C区SX02～05の4例は『地籍図』の「内畑」と規模も位置もほとんど誤差なく一致する。さて、島畑状遺構と判断した理由を以下に記すと、

- (1)古代から中世の遺構検出面より上面で検出できる。また、その上位のセクションではほぼ垂直あるいは逆台形となる。ただ、ほとんどの場合、遺構検出面の直上で後世の削平を受けている。
- (2)14世紀以降の遺構・遺物が全くない。したがって、居住域ではなく畑地として利用されていた可能性が高い。
- (3)93C区SX02～05は13～14世紀の遺物を含む溝により囲まれている。すなわち、意識的に島畑状遺構を区画している。

以上の理由により島畑状遺構と判断した。

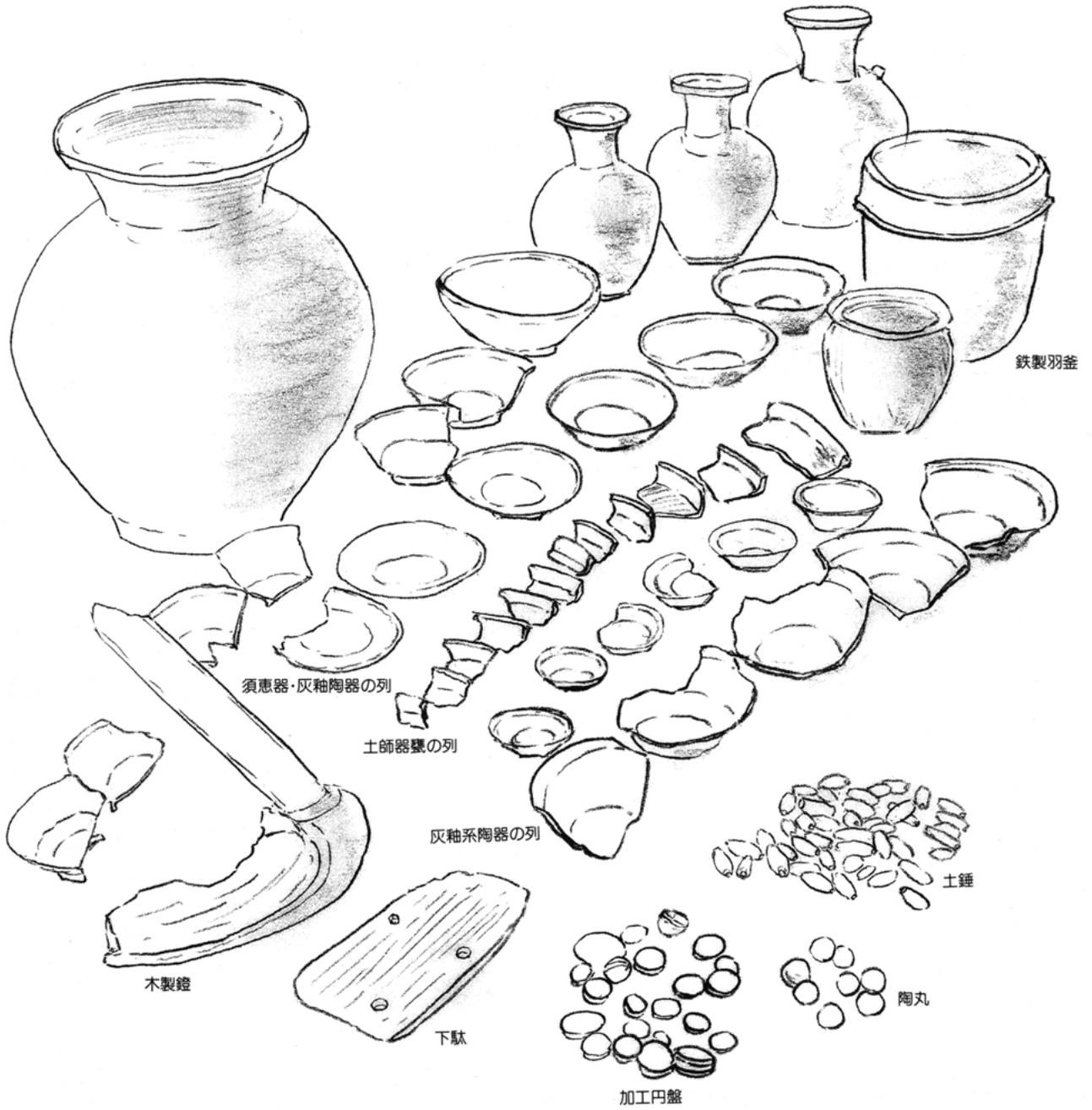


図35 島畑状遺構 (93C区)



■ 島状遺構

# 4. 遺物



旧流路出土遺物  
写真141のスケッチ

## 要 旨

大毛沖遺跡出土の土器はそのほとんどが古代から中世の範疇で捉えられる。

古代土器については、7世紀後半から11世紀前半の資料がみられる。特徴としては、須恵器・灰釉陶器など陶器に加え土師器がセットで確認でき、一括資料としての価値が高い。したがって、古代の土器編年を考える上で良好な資料を得ることができた。そこで、今回は7世紀後半から11世紀前半を大きく4期に大別、さらに8期に細別して提示する。特に注目できる土器としては、94 I SBO 1の壺G、94 CNR01の鉢があげられる。前者は湖西窯産と考えられ、都城関連遺跡で出土する。尾張平野では数例しか確認されていない。後者は鉄鉢（磁鉢）の模倣品で、高台の付く例は大毛沖遺跡の資料のみ。

中世土器については、12世紀後半から16世紀初頭の資料が中心となる。時期設定は大きく5期に大別、さらに11期に細別した。特に0期の設定は11世紀後半から12世紀前半の約1世紀を想定した。この時期大毛沖遺跡に限らず、窯式（生産地）編年と消費地編年が混沌として判然としない。注目される土器としては、古代のような珍品はない。しかしながら、廃棄状況に注目される。93 ASX01・93 GSE05資料は、土器の内外面に煤の付着が目立つ。それぞれの遺構内で焼却されたのではない点も注目できる。なにか用途が限定できる資料かもしれない。N期の資料は94 Hで集中して確認できる。西に隣接する大毛池田遺跡で検出された方一町の居館跡との関連で注目される資料となった。ここではこの時期に特徴的な大量の土師器皿の一括廃棄資料が溝状遺構を中心に確認された。

そのほか注目される資料として木製鏡・鉄製羽釜・呪符状木筒・墨書土器などがある。

木製鏡について、遺跡出土の「舌鏡」の例としては全国で2例目。鉄製羽釜も遺跡出土例は生産遺跡以外ではほとんどない。呪符木筒は、「易経」風の墨書が見られるものの、類例がない。

墨書土器については、その記載内容の共通性、分布に特徴がある。記載内容の共通性については、「公」、「まつ」と「の」などがあげられる。いずれも字体が酷似する。分布については、93 Dの道1に相当する周辺、93 ASX01など特定の空間に集中する傾向がある。

掲載方法については、遺構出土資料を優先的に、全形あるいは特殊な資料に関して別途掲載する。掲載順序は時期的に古いものから順次掲載した。特に土器資料に関しては先に、その他のものは別項に掲載した。

## 目 次

- 4. 遺物……………永井
  - 4. 1 古代以前の土器
  - 4. 2 古代の土器
  - 4. 3 中世の土器
  - 4. 4 旧流路の土器
  - 4. 5 文字・記号表記資料…………永井・小池一徳
  - 4. 6 貿易陶磁器…………竹ノ脇智子
  - 4. 7 加工円盤・陶丸
  - 4. 8 土錘……………久保禎子
  - 4. 9 木製品
  - 4. 10 石製品…………竹ノ脇
  - 4. 11 金属製品
  - 4. 12 その他・特殊遺物

## 4.1 古代以前の土器

大毛沖遺跡では7世紀以前に遡る遺構・遺物がほとんど見あたらない。その理由は遺構を縦断する旧流路に起因する。7世紀代から8世紀後半にいたる間に、包含層さらに遺構・遺物が流路によって削剝を受けているからだ。ただ、95Aから94Hにかけて大毛池田遺跡と同一の層序が確認できた。そこでは、古墳時代前期に相当する遺構・遺物が検出された。ここでは94Hに比較的まとまって出土した土器群を提示する。

1～9はすべてS字状口縁台付甕。赤塚分類\*1（赤塚1990）に拠ると、1はB類、2～5はC類、6・7はD類に相当する。これらは大毛池田遺跡の水田跡とほぼ同時期の遺物と思われ、水田域の東南端が確認できた。

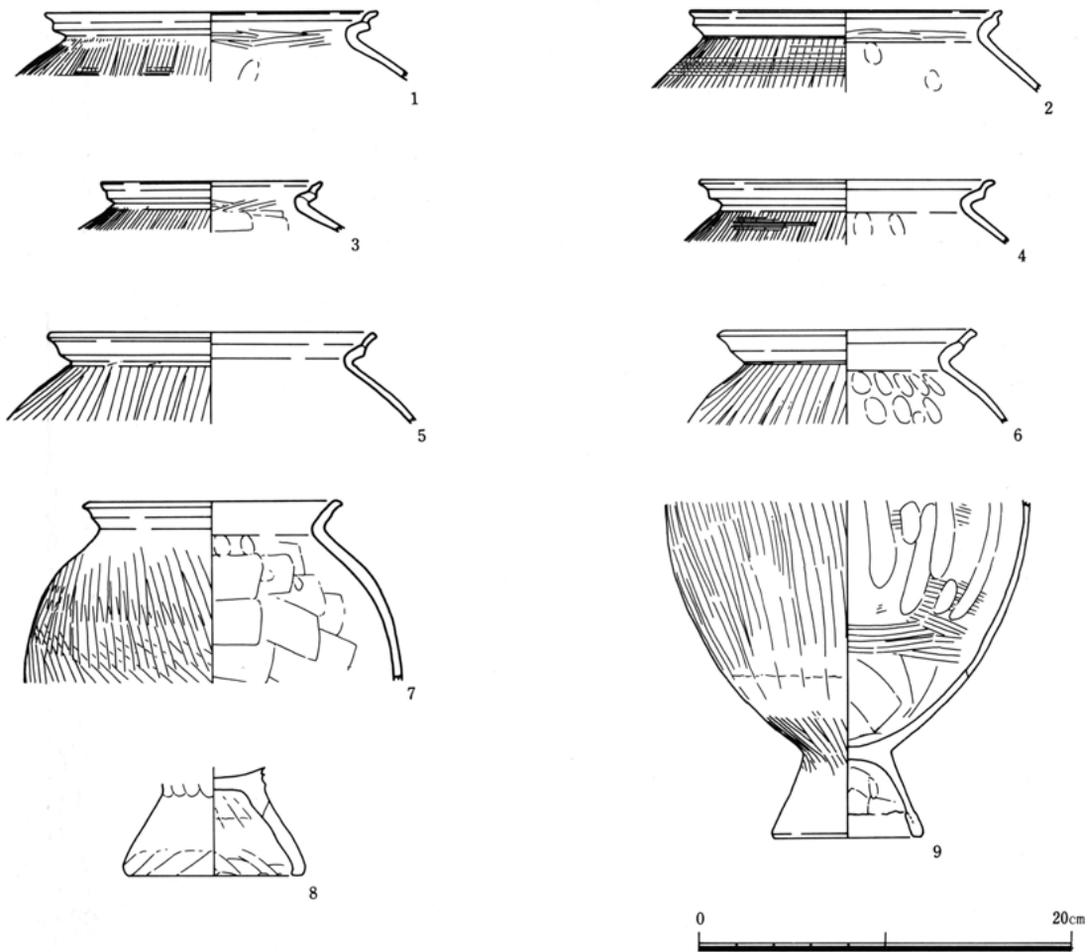


図37 古代以前の土器実測図（S=1/4）

\*1 赤塚次郎編『廻間遺跡』1990, (財)愛知県埋蔵文化財センター

## 4.2 古代の土器

### 概要

古代の土器は7世紀後半から11世紀前半までを対象とする。時期設定については齊藤編年(齊藤1995)を基軸に、分類は須恵器について城ヶ谷分類(城ヶ谷1993)を、灰釉陶器について齊藤分類(齊藤1994)を、土師器甕について永井分類(永井1995)を参考に提示する。

出土土器の様相を概観すると、特殊な器種はほとんど見られず、須恵器が蓋・杯・碗・瓶など、灰釉陶器が碗・皿など、土師器が甕を中心に確認できる。ただ、集落の性格を持つ遺跡のわりには長頸瓶が比較的多く、また大型の甕、類例のない高台付鉢などが見られる。

掲載の方針は時期別に遺構出土資料を中心に提示し、さらに包含層出土資料については、全形がつかみやすいもの、特異な土器を優先して掲載した。なお、文字・記号表記資料については遺構出土以外について別項に掲載した。

### 4.2.1 分類の基準(図38)

**土師器** 土師器はほとんどが煮炊具(甕形土器)となる。ここでは永井分類(永井1995)を中心に甕の分類

に若干の補完を行い、甕形土器(以下甕)について分類する。  
**甕A** 小型品。口径が15cm以下、器高15cm以下のもの。口縁の特徴から、摘み上げるタイプ(A1)、肥厚あるいは体部と同じ厚さのタイプ(A2)、口縁部を折り返すタイプ(A3)に分ける。

**甕B** 中型品。口径が18cm前後のもの。器形は長胴で、体部下位に最大径をもち丸底になるタイプ(B1)と体部上位に最大径をもち平底になるタイプ(B2)がある。いずれも口縁端部を摘み上げる特徴を持ち、体部外面に比較的整ったタテあるいはナナメ方向のハケ調整を行う。内面調整は頸部に横方向のやや荒いハケ調整、体部はおおむねナデ調整、下半には板ケズリを行うものもある。

**甕C** 大型品。口径が23cm以上のもの。全形を捉えるまでの資料はないが、B類と同様の特徴が想定できる。

**甕D** 中型品。口径が20cm前後のもの。器高が40cm前後でB類より長胴化が進む。底部はすべて平底となり、成形技法に特徴がある。底部に円盤状の粘土を置き、その上にやや厚めの粘土紐(帯)を積み上げる。底部内面の成形・調整痕跡から粘土積上の際、外反しすぎのを防ぐために絞り込んだ跡が残り、底部から1段目と2段目の積上の境目に積上の痕跡が明瞭に残る。外面の調整は器壁を薄くするためにケズリ調の荒々しいハケ調整を行う。ハケメもB類にくらべると深く幅広になる。内面調整は頸部に荒い横方向のハケ調整、体部内面は概ね指ナデあるいは指オサエで、板ナデも認められる。口縁部の特徴から4類に細分できる。口縁部が肥厚し「く」字になるもの(D1)、D1類よりさらに頸部からの折り返しが進み、水平に屈曲するもの(D2)、口縁部が「く」字になるものの、D1類より立ち上がるもの(D3)、D3類とほぼ同様の特徴をもち、口縁端部に面をもつもの(D4)に分類できる。

甕E 中型品。口径15cm前後、器高15～20cmのものが多い。器形は球胴で丸底となる。口縁端部を内面に折り返す特徴を持つ。口縁部の特徴、体部外面の調整から4類に細分できる。口縁部を折り返し、その後強くヨコナデを行い面を持つ、口縁部から頸部にかけてヨコナデを行い、体部と頸部の境目に稜線を持つ(E1)。E1類のように面は持たない、体部のハケ調整の単位がわかるように間隔を空けて行う、口縁部から頸部にかけてのヨコナデがE1類より弱くなる(E2)。口縁端部の折り返しが弱く丸みをもつ、体部のハケ調整もさらに弱くなる(E3)。口縁部の折り返しが痕跡程度となる(E4)。

煮炊具にはこのほか清郷型鍋と呼ばれる鍋形土器がある(永井1996)。清郷型鍋は7類 鍋形土器に分類できるが大毛沖遺跡ではC類のみしか確認できない。なお中世0期では清郷型鍋の最終段階に相当するG類が確認できる。

畿内産土師器と呼ばれる杯Aがある(林部1992ほか)。大毛沖遺跡では1点のみである その他が7～8世紀代に尾張平野部で稀に見られる。また、黒色土器と呼ばれる畿内系Ⅱ類がある(森1995)。最後に高杯形土器をあげる。類例がなく時期的な認定ができないものの、古代の包含層から出土しているのでここに含めた。

須恵器の分類に関しては城ヶ谷分類(城ヶ谷1993)を基本的には踏襲する。したがって、須恵器細かな分類基準を示さない。以下に器種を示す。

蓋(Aはかえりのあるもの、Bはかえりがなく紐のあるもの、Cは紐のないもの)、杯(Aは高台の付かないもの、Bは高台が付き杯が浅いもの、Dは高台が付き杯が深いもの) 碗(Aは高台が付かないもの、Bは高台が付くもの)、皿B、盤B、鉢B、甑、長頸瓶、平瓶、甕

灰釉陶器の分類に関しては齊藤分類(齊藤1984)を基本的に踏襲する。須恵器分類同様 灰釉陶器細かな分類基準は示さない。以下に器種を示す。

碗(A・B)、小碗、皿、折縁皿、段皿、鉢、壺

須恵器では都城関連遺跡で出土する壺G、高盤、灰釉陶器では浄瓶、双耳瓶、三足盤など 他がある。

齊藤孝正 「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究 施釉陶器』 古代の土器研究会, 1994

齊藤孝正・後藤健一編 『須恵器集成図録』第3巻東日本Ⅰ 雄山閣出版, 1995

城ヶ谷和広 「尾張における7世紀から9世紀半ばの須恵器」『古代の土器研究 須恵器』 古代の土器研究会, 1994

林部 均 「律令国家と畿内産土師器」『考古学雑誌』第77巻第1号 日本考古学会, 1992

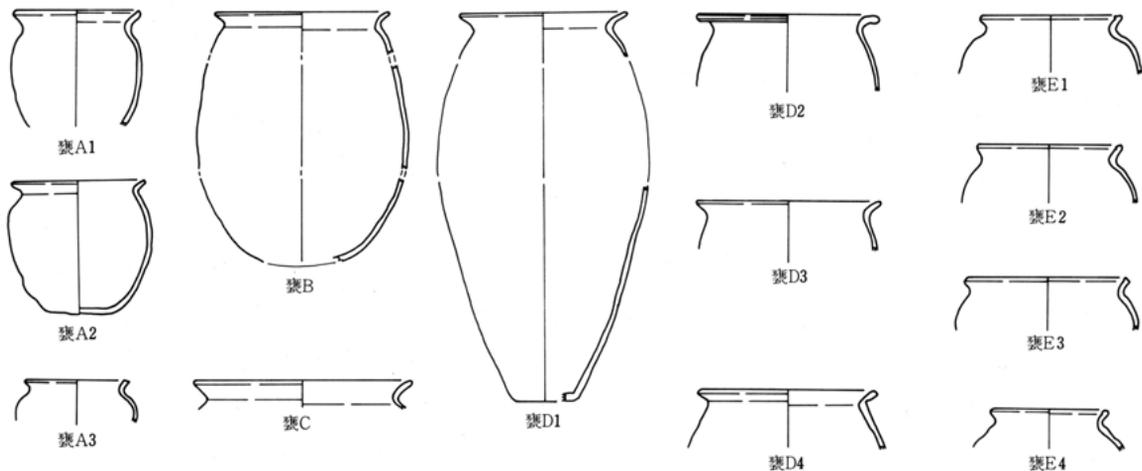
永井宏幸 「奈良・平安時代の土師器甕」『年報平成6年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター, 1995

永井宏幸 「清郷型鍋再考」『年報平成7年度』 (財)愛知県埋蔵文化財センター, 1996

森 隆 「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会, 1995

須恵器、灰釉陶器は生産地の同定をできるだけ行掛けた。産地については一覧表を参照されたい。なお、時期同定に関しては齊藤孝正氏(文化庁)、城ヶ谷和広氏(愛知県史編纂室)、渡辺博人氏(各務原市埋蔵文化財調査センター)にご教示を得た。

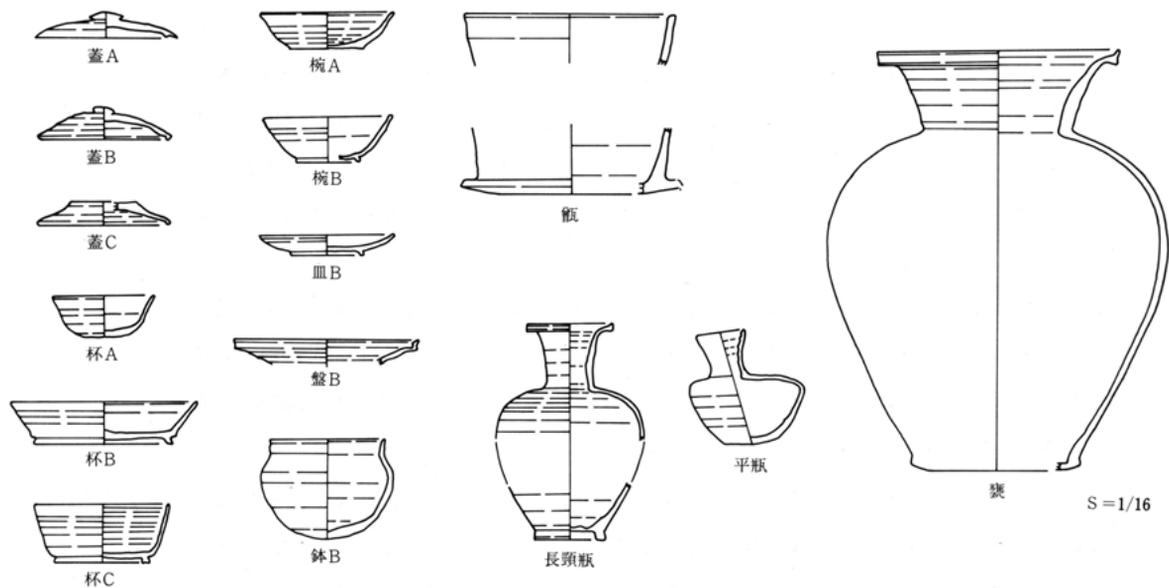
甕形土器



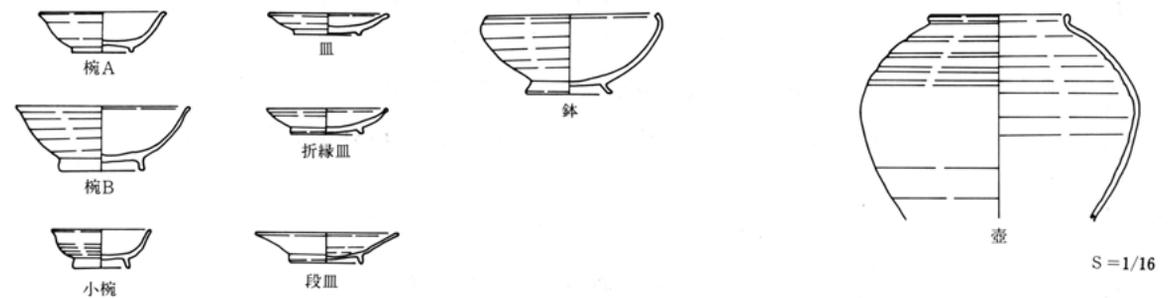
鍋形土器



須恵器



灰釉陶器



#### 4. 2. 2 時期設定

時期区分については、「遺跡の概要」で大枠を示している。ここでは遺物による見解を示す。沖編年と窯編年などとの対比表は表3を参照。

7世紀後半を中心とする時期。遺構・遺物ともに93Aに集中する。器種構成は須恵器が蓋A・B、杯A、鉢B、土師器が甕A・Bとなる。蓋AはⅡ期以降には見られず、メルクマールとなる。甕はⅠ期までが丸底が残り、Ⅱ期以降はすべて平底化する。 古代Ⅰ期

8世紀前半を中心とする時期。旧流路左岸域に遺構・遺物ともに展開する。右岸域に認められない理由は先にも記したとおり、旧流路の流路変更に伴う削剝による。器種構成は須恵器が蓋B、杯A・B、碗A、土師器が甕A・B・C・Dとなる。この時期は甕に特徴がある。口縁部を摘み上げるB・C類がこの時期で消失する。かわってⅢ期につながるD類が出現する。外面の調整はⅢ期以降のような荒々しいハケ調整ではなく、整ったハケメを残す。ただ、口縁部がやや肥厚する点がB・C類と大きく異なる。また、包含層資料ながら畿内産土師器杯Aも見られる。 古代Ⅱ期

8世紀後半から9世紀代を中心とする時期。Ⅲ期はさらに3小期に区分する。Ⅲ期は旧流路が安定し、両岸に遺構・遺物が展開する。器種構成は以下のとおり。Ⅲa期は須恵器が蓋B・C、杯A・B、碗A・B、長頸瓶、双耳瓶、土師器は甕D1・D2となる。Ⅲb期は須恵器が蓋B・C、杯A・B、碗A・C・D、皿、長頸瓶、甕、灰釉陶器が碗、皿、段皿、折縁皿、長頸瓶など、土師器が甕D1・D2・D3となる。古代Ⅲc期は灰釉陶器が碗、皿、段皿、長頸瓶、甕、壺など、土師器が甕D4となる。Ⅲ期の区分は須恵器・灰釉陶器の消長、土師器甕から確認できる。古代Ⅲa期は灰釉陶器を含まない時期。土師器甕は若干Bが残る。D3・4は含まない。古代Ⅲb期は須恵器と灰釉陶器が見られる。土師器甕はD4以外すべて見られる。古代Ⅲc期は須恵器がほとんど見られず、灰釉陶器が主体をなす。土師器甕はD4が主体を占める。また、包含層資料ながら黒色土器の畿内系Ⅱ類が古代Ⅲc期に併行する資料として確認できる。旧流路資料としては灰釉陶器の高台を持つ鉢が特筆できる。 古代Ⅲ期

10世紀代から11世紀前半を中心とする時期。Ⅳ期はさらに3小期に区分する。Ⅳ期は須恵器が器種構成からはずれ、灰釉陶器と土師器甕・鍋が主体となる。遺構・遺物は旧流路の左岸域に相当する94C・D・F、93Fに集中する。また、旧流路出土資料もこの時期ピークを迎える。器種構成は以下に示すとおり。Ⅳa期は灰釉陶器が碗・小碗・皿・段皿など、土師器が甕D4・E1、鍋となる。Ⅳb期は灰釉陶器が碗・皿・段皿など、土師器が甕E2・3、鍋となる。Ⅳc期は灰釉陶器が碗・皿など、土師器が甕E3・4となる。Ⅳ期の特徴は煮炊具にある。甕はほとんどがE類となる。若干の鍋（清郷型鍋）を含むものの主体とはならない。 古代Ⅳ期

旧流路出土土器については、「中世の土器」のつぎに中世の土器とともに層位順に掲載した。

### 4. 2. 3 遺構出土の土器

#### 古代Ⅰ期（図39）

10～15は93ASB08出土資料。16～22は93ASB09出土資料。SB08と09はほぼ重なって確認できた。遺構時期の前後関係はSB09が古く、08が新しい。遺物の型式変化からも確認できる。土師器甕の底部は丸底（21・22）から平底（15）への移行過程が追える。

23・24は93A<sub>2</sub>SK02出土資料。25は93A<sub>2</sub>SD01出土資料。

#### 古代Ⅱ期（図40）

26～33は93ASB01出土資料。34は93ASD06出土資料。35は93ASK52出土資料。36は93ASD07出土資料。37～41は93FSK35出土資料。39は底部外面にヘラ記号がある。42・43は94CSB06出土資料。43は造付カマド内出土資料。44～49は94CSB07出土資料。45は底部内面にヘラ記号がある。

古代Ⅱ期は大毛池田遺跡の「美濃」刻印資料の出土する時期に併行する。現状では大毛沖遺跡に「美濃」刻印資料は確認できない。遺跡の性格による相違かもしれない。

#### 古代Ⅲ期（図41～46）

Ⅲ a 期 50～65は94ISB01出土資料。56は湖西窯産。都城関連遺跡で出土する資料で、壺Gとして報告されている。体部にロクロ引きの痕跡と報告される凹凸が56にも見られるが、本資料の場合は、粘土紐積上の痕跡として報告する。66～68は94ISB03出土資料。69～81は94ASB06出土資料。73は底部外面にヘラ記号がある。82～84は93CSK09出土資料。85～92は94ISK60出土資料。89は猿投窯産の双耳瓶。93～115は94ISB02出土資料。

Ⅲ b 期 116～121は94ASB07出土資料。116～119の灰釉陶器は黒笹14号窯式期の2段階に併行する資料。122～130は94ISB06出土資料。124は土師器の高杯。125は底部外面にヘラ記号がある。131～136は94ISB07出土資料。133は須恵器の皿で大毛沖遺跡ではほかに例がない。137は94ISD29出土資料。138は94ISK65出土資料。139は93FSD06出土資料。140～152は94ISB04出土資料。143は灰釉陶器の三足盤。147は底部外面に「公」表記の墨書がある。153～155は94ISB05出土資料。154は147と同様に底部外面に「公」表記の墨書がある。

Ⅲ c 期 156・157は94BSK26出土資料。158は94BSD15出土資料。159は94HSK175出土資料。160は94HSK141出土資料。

Ⅱ～Ⅲ期 161～179は93FSD08出土資料。169は底部外面にヘラ記号がある。170は底部内面に「金」表記の墨書がある。

古代Ⅲ期のなかで特に注目される点をいくつか提示する。

56は都城編年の平城宮Ⅵ期、長岡京期、平安京Ⅰ中期が相当する。都城関連遺跡でよく見られる土器で、湖西周辺から運ばれ、その後、都城（長岡京?）から大毛沖遺跡へ持ち込まれた可能性もある。

147と154は「公」表記のある墨書土器。「公」表記の墨書土器はこれらのほかに3点確認できる。

煮炊具はそのほとんどが甕Dとなる。使用法は煤などの痕跡からⅡ期と基本的には変わらない。ただ、Ⅲa期以前とⅢb期以降の相違点は住居形態にある。Ⅲa期以前は造付カマドを有する住居が主流であったのに対して、Ⅲb期以降は簡易カマドとも言うべきカマドの痕跡が明確には残さない。住居形態に変化があるとすれば、竪穴から平地住居への変化が想定できる。ただ煮炊具の使用痕跡からは明確な回答は得られない。

#### 古代Ⅳ期 (図47～49)

180～186は93FSK37出土資料。187は93BSB02資料。188は94FSK28、189・192は94FSD Ⅳa期  
08、190・191・193は94FSD14出土資料。192・193は清郷型鍋。大毛沖遺跡ではこの時期数  
点しか確認できないが、愛知県内、特に三河部では主体を占める煮炊具となる。194は94C  
SK45出土資料。

195～206は94FSB03出土資料。204はⅢc期まで主体となる甕D4、Ⅳ期は基本的に甕 Ⅳa～b期  
Eが主体となる。207～227は94FSB02出土資料。224は底部外面にヘラ記号がある。

228～237は94FSB01出土資料。238は93BSB01出土資料。238と187は隣接する住居の資料。 Ⅳb期  
図示可能な資料は各1点のみであるが、93BSB02からSB01への変遷が遺物から確認できる。

242～246は94CSB01出土資料。244は東濃産の光ヶ丘1号窯式で、Ⅲc期に遡る資料と Ⅳc期  
なるものの、94CSB04にはⅢ期に遡る資料が認められる(247・248)ことを考慮するとSB  
04からの混入資料と考えられる。

252～257は94CSB03出土資料。SB03資料は土師器甕にE1を含まないのでおそらくⅣb その他の  
期以降になる。258・259は94FSD02出土資料。260・261は94FSX01出土資料。262は93FS Ⅳ期  
D14出土資料。263は93FSK11出土資料。

Ⅳ期の資料について特に注目できる点を提示する。

Ⅳ期はⅡ・Ⅲ期と比較して特異な資料はない。ただ、Ⅳ期から見られる甕Eの出現は注  
目できる。Ⅲ期までは長胴甕が主体となっていたのが、Ⅳ期から鍋的な甕へと変化する。  
すなわち、甕Eは球胴で丸底甕の器形となる。したがって、煮炊具に大きな変化が考えら  
れる。甕から鍋への変化は火所(炊飯施設)の問題に大きく関与する。

#### 4. 2. 4 遺構外出土の土器 (図50、51)

264～266はⅠ期以前の資料。この時期の資料を含む大毛池田遺跡により近い地点から出  
土している。267～274はⅠ期の資料。269は底部外面に「大」のヘラ書された須恵器の杯。  
大毛沖遺跡でヘラによる文字表記は1点のみ。275～279はⅡ期の資料。278は畿内産土師  
器、林部分類の杯A(林部1986・92)。内面に暗紋がみられる。280～298はⅢ期の資料。2  
88は高盤の脚部。289は浄瓶。294は小型の平瓶。296は黒色土器。森分類の畿内系Ⅱ類(内  
黒)に相当する。

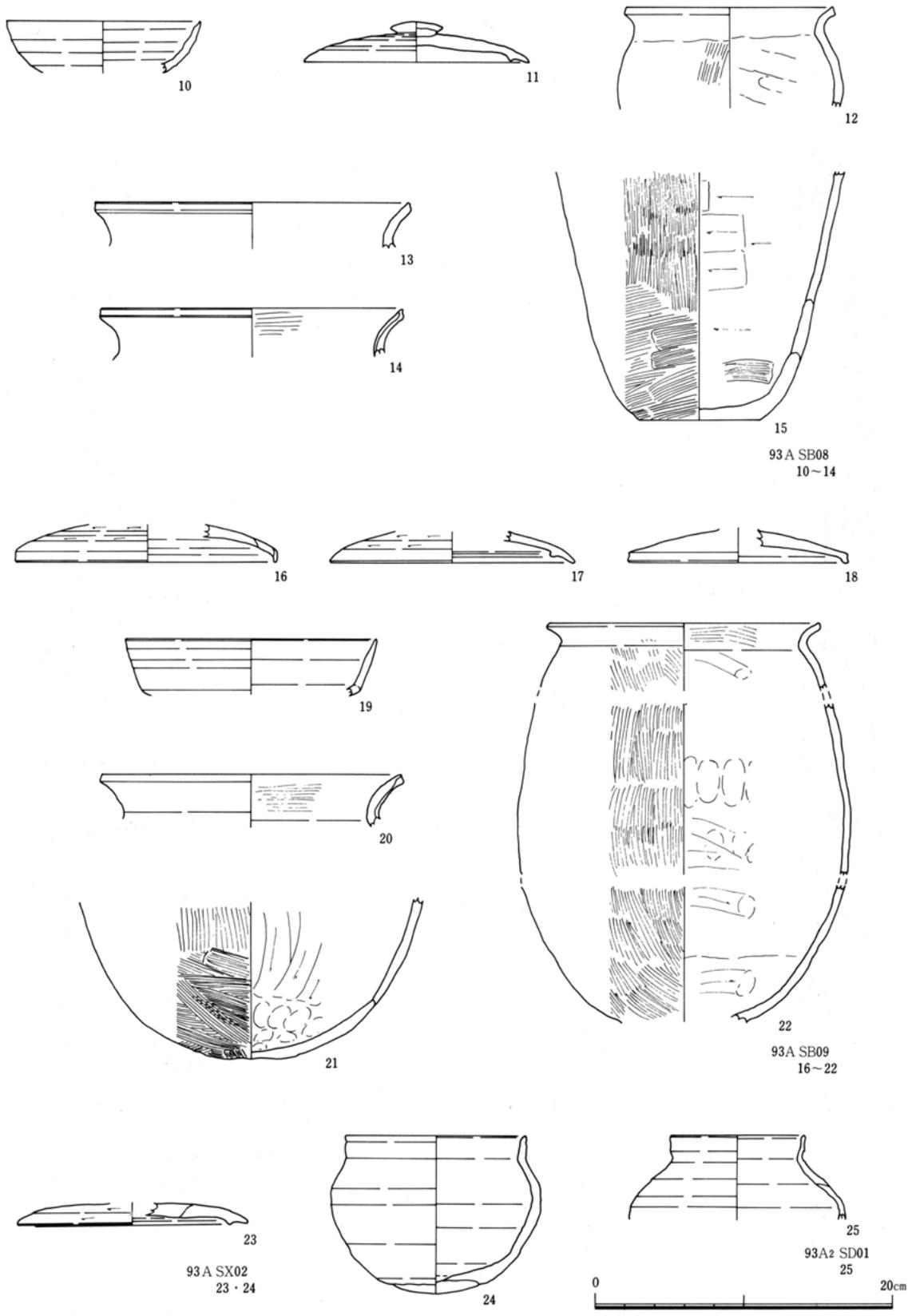


图39 古代I期土器实测图 (S=1/4)

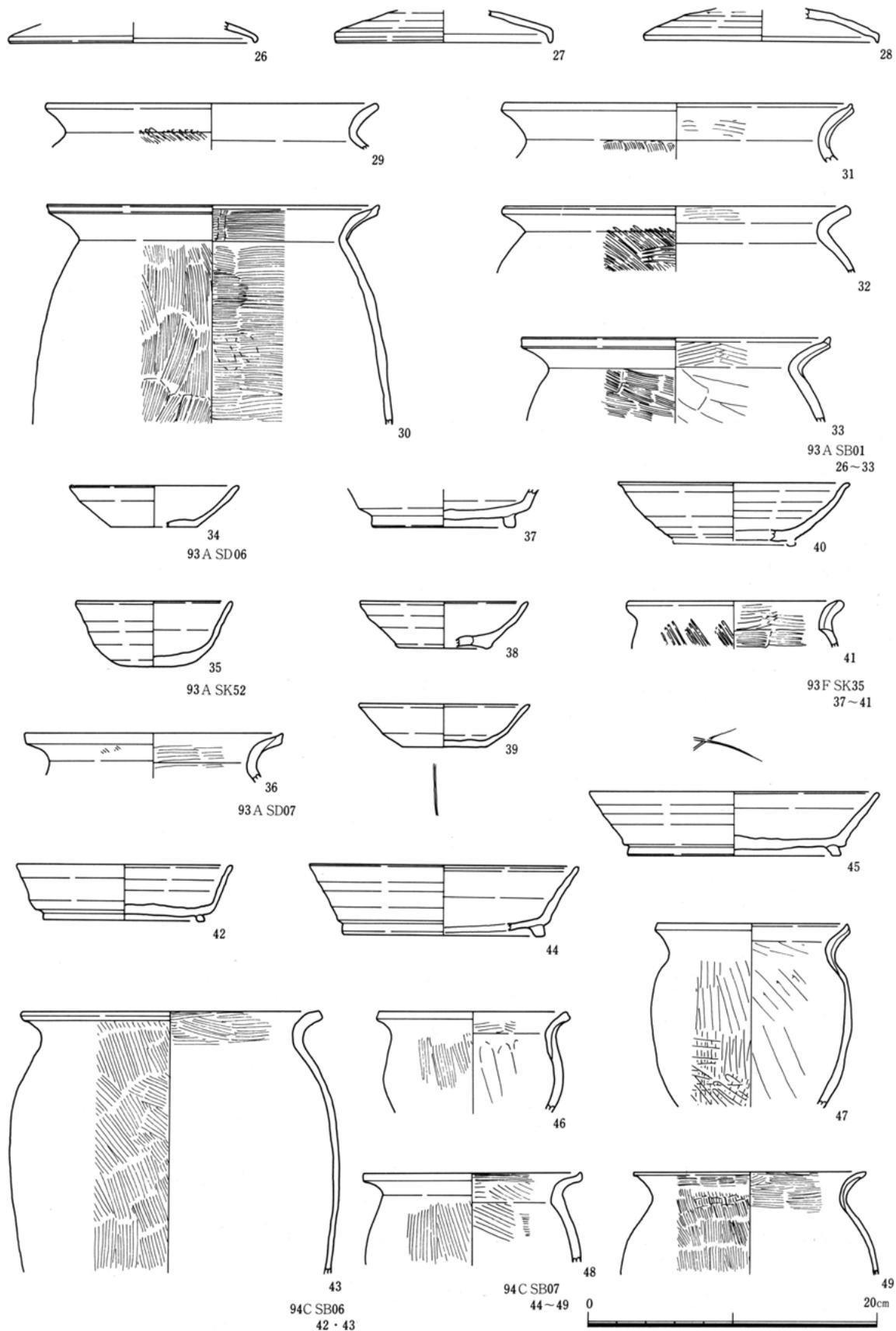
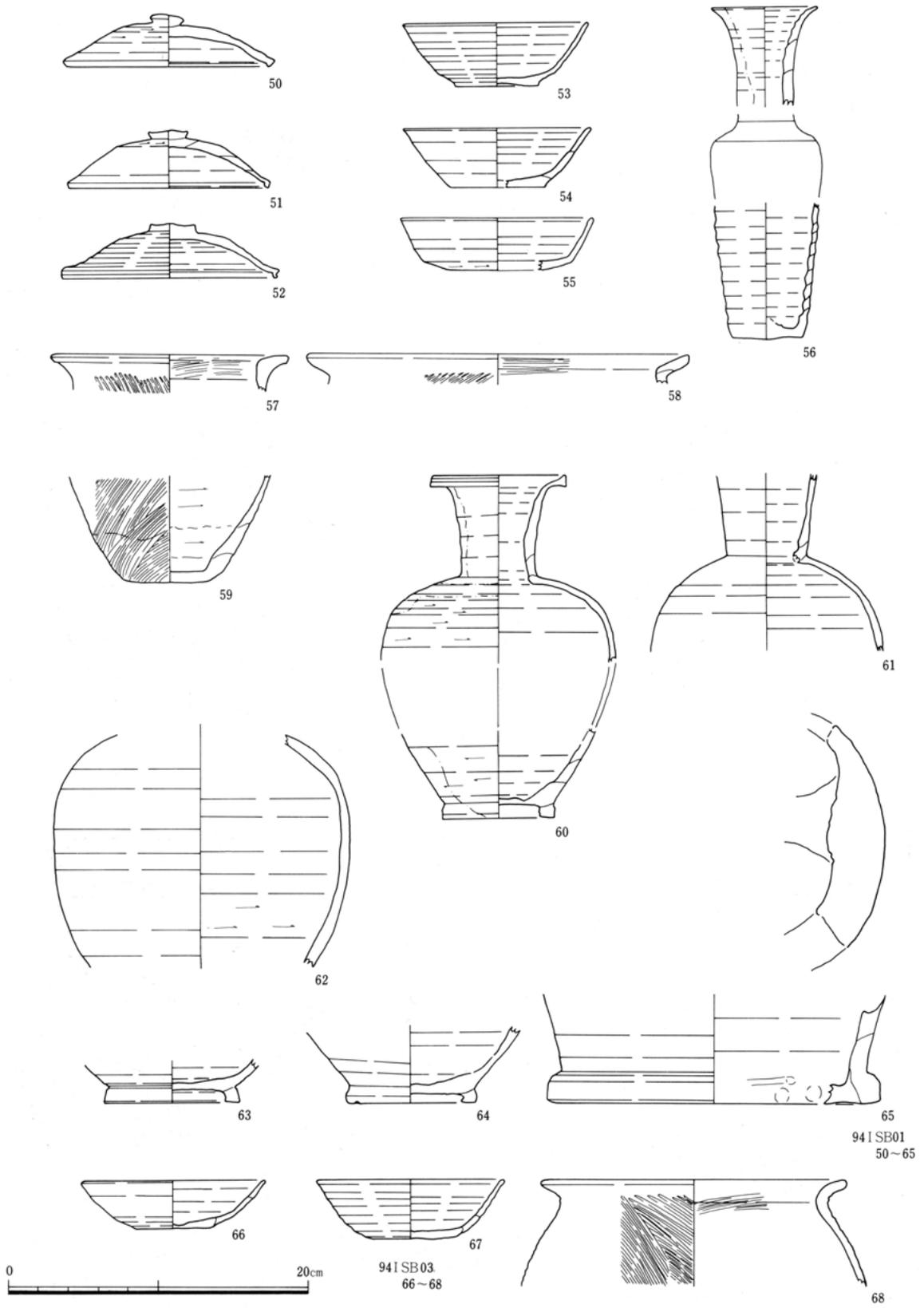


图40 古代II期土器実測図 (S=1/4)



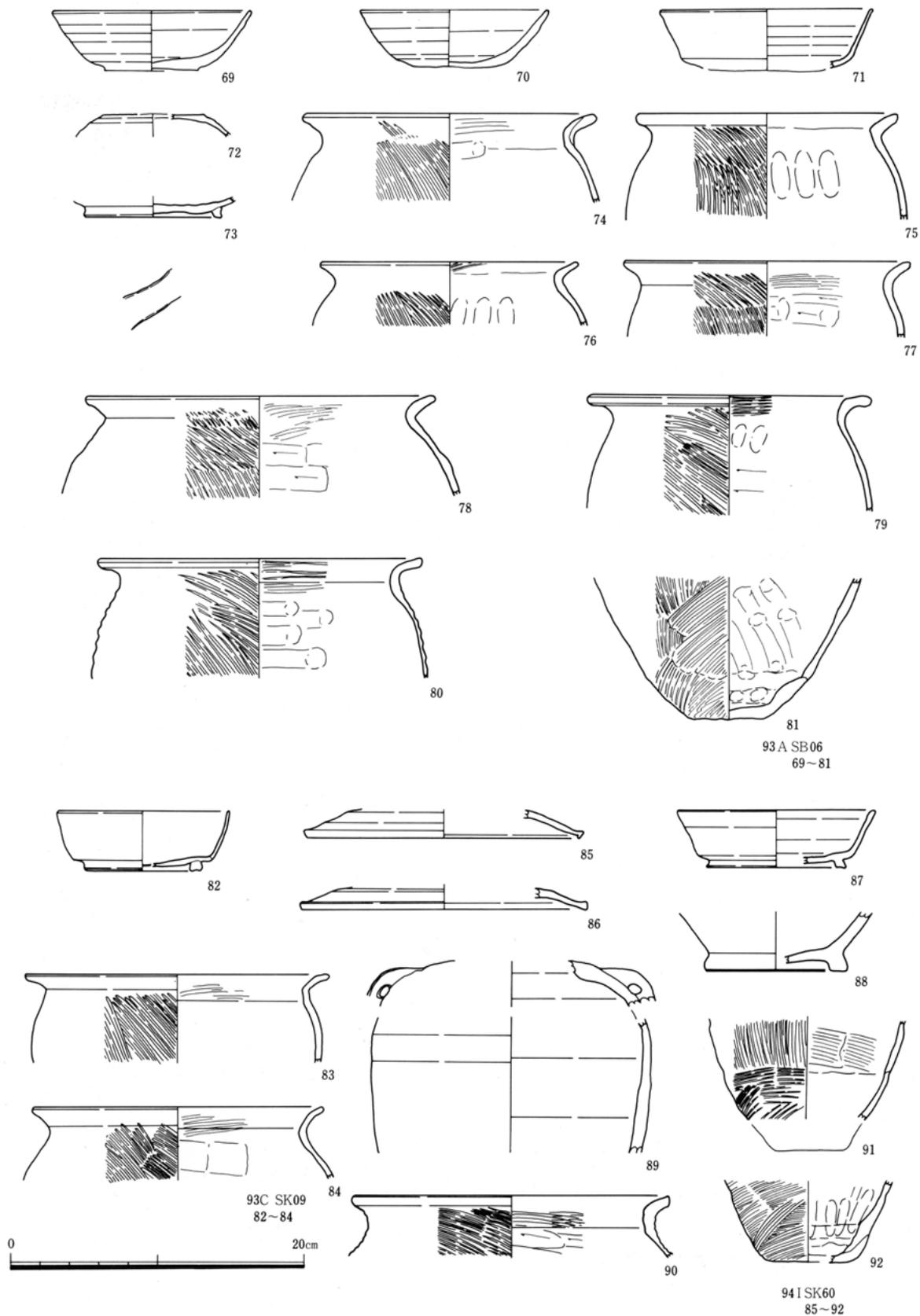
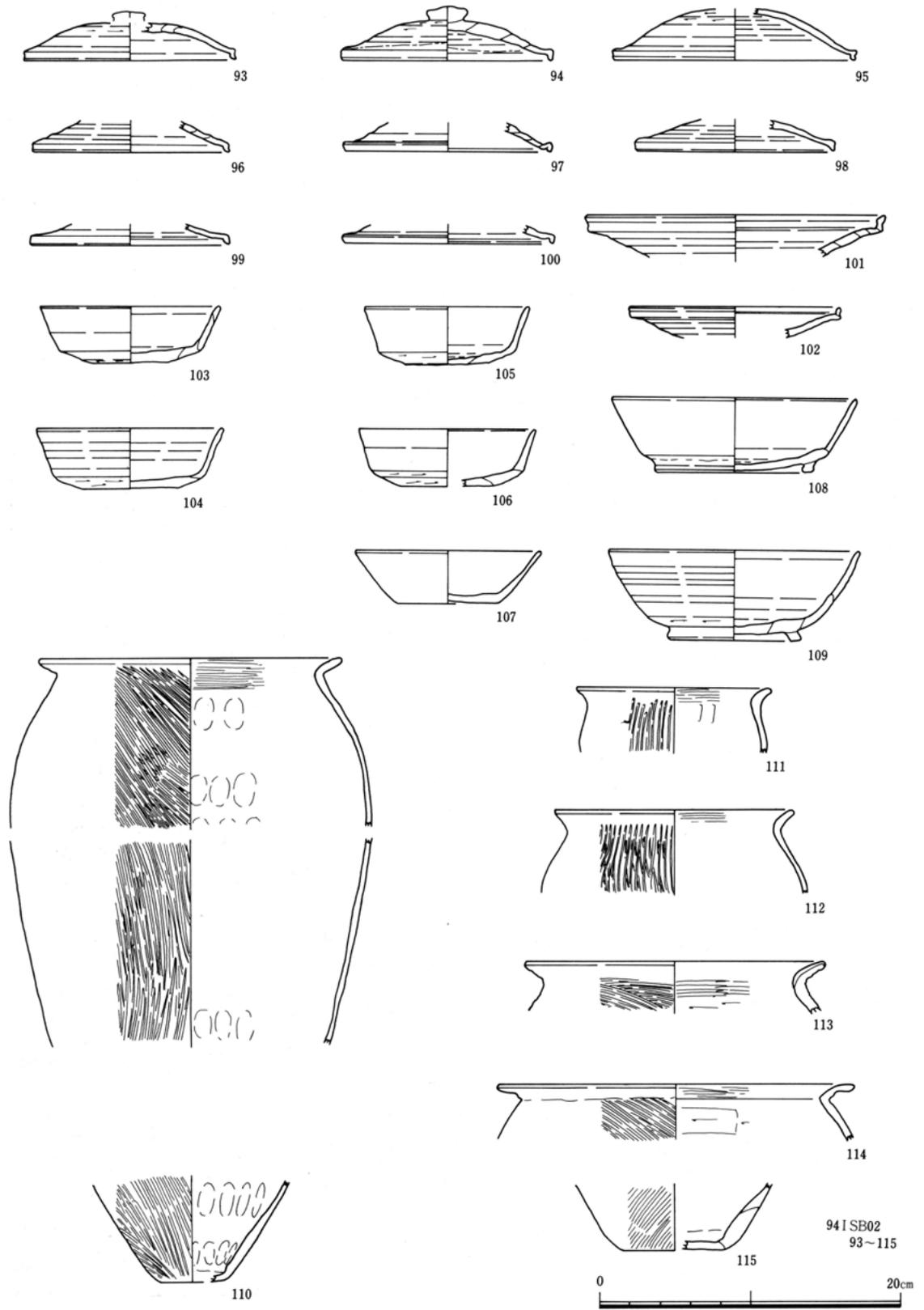


图42 古代Ⅲa期土器実測図(2) (S=1/4)



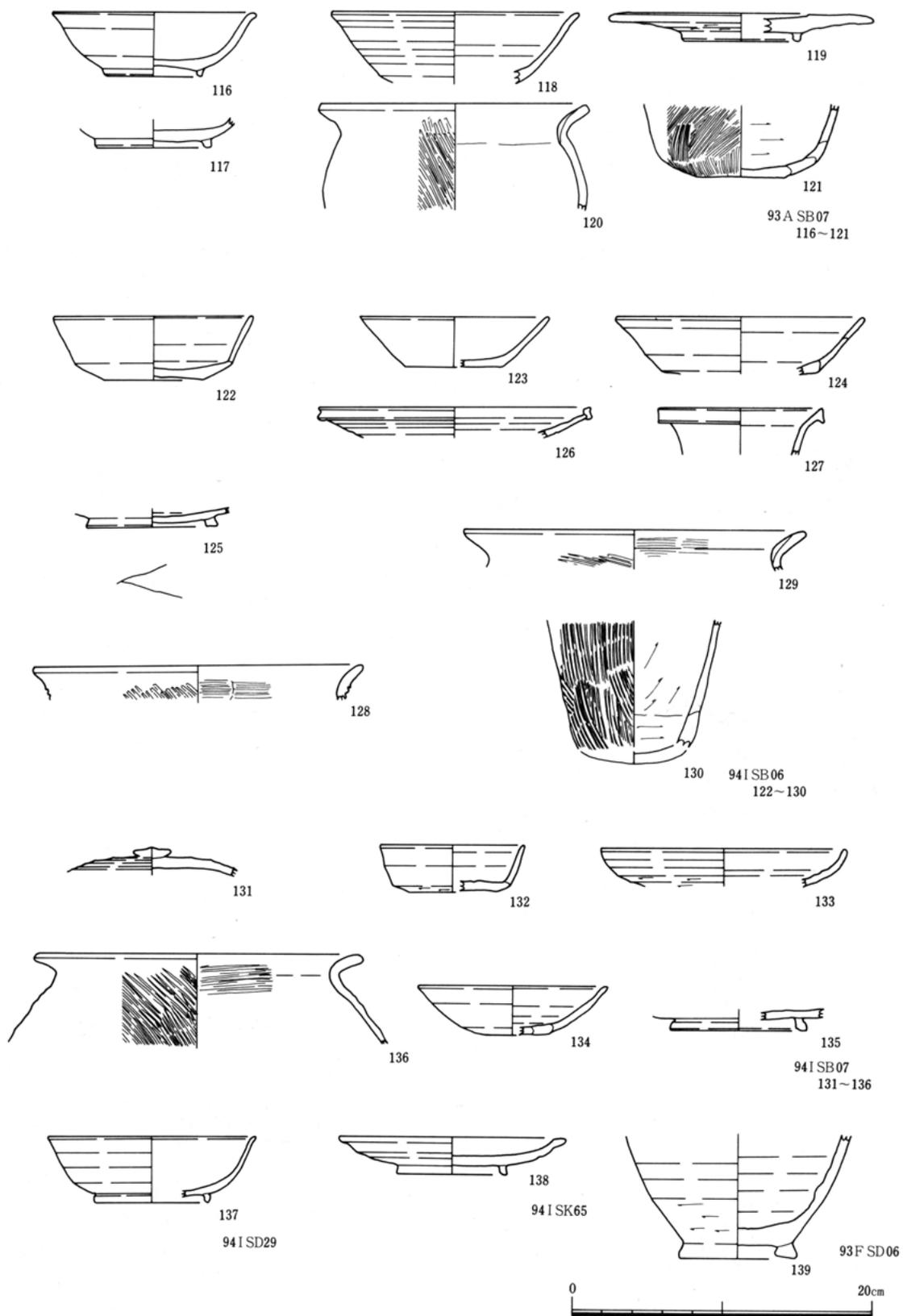
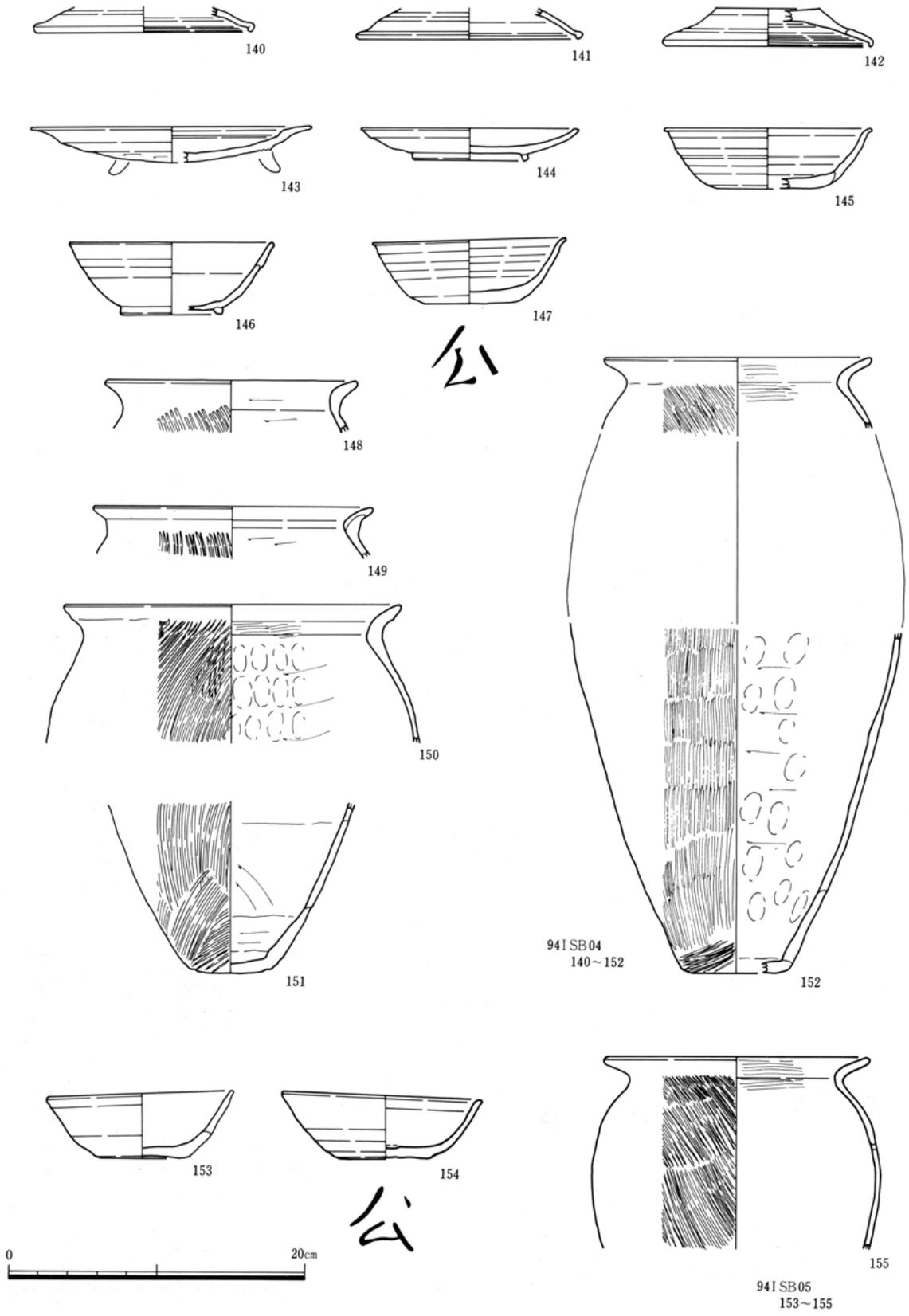


图44 古代Ⅲb期土器实测图(1) (S=1/4)



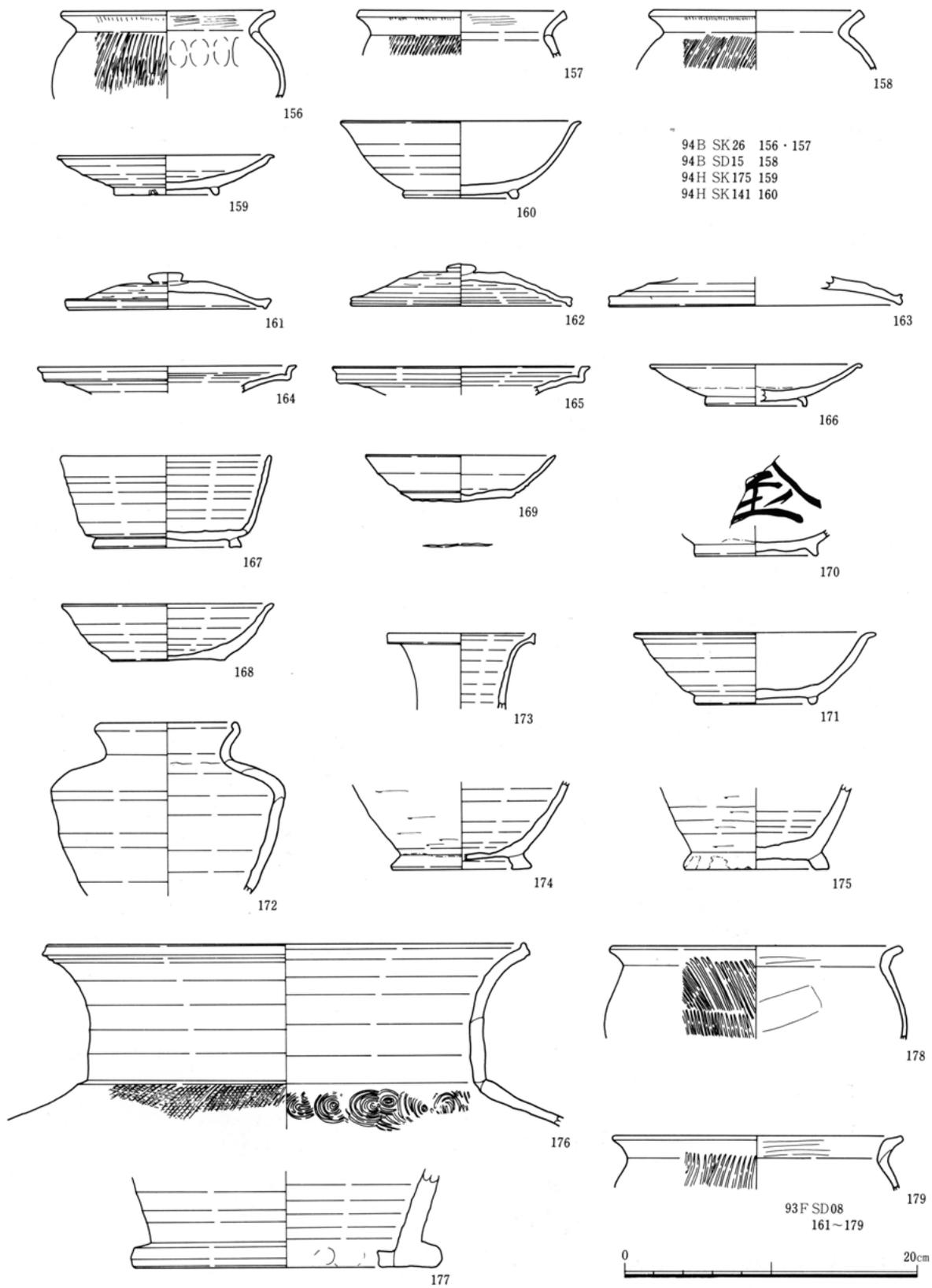
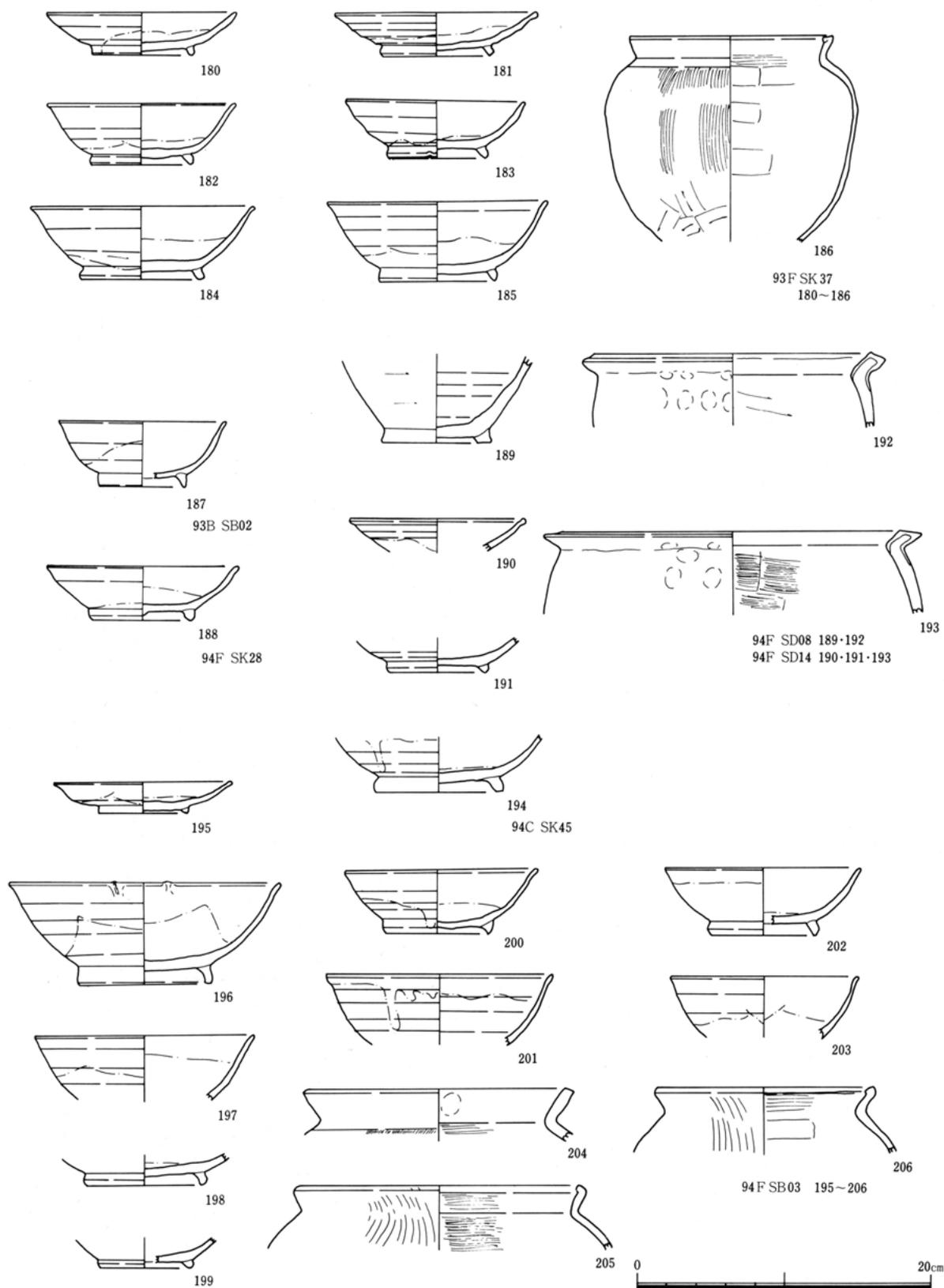


图46 古代Ⅱ~Ⅲ期土器实测图(S=1/4)



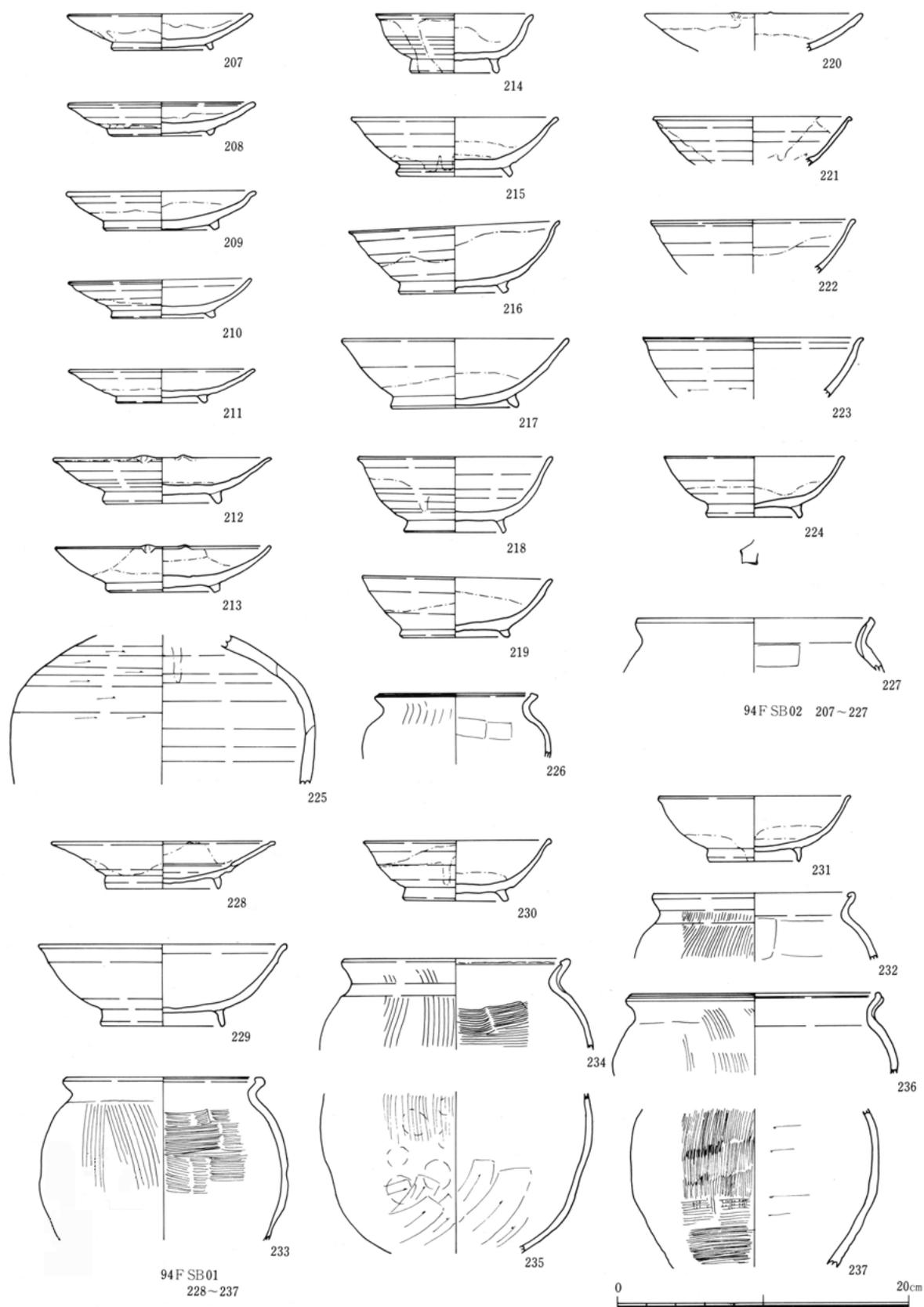
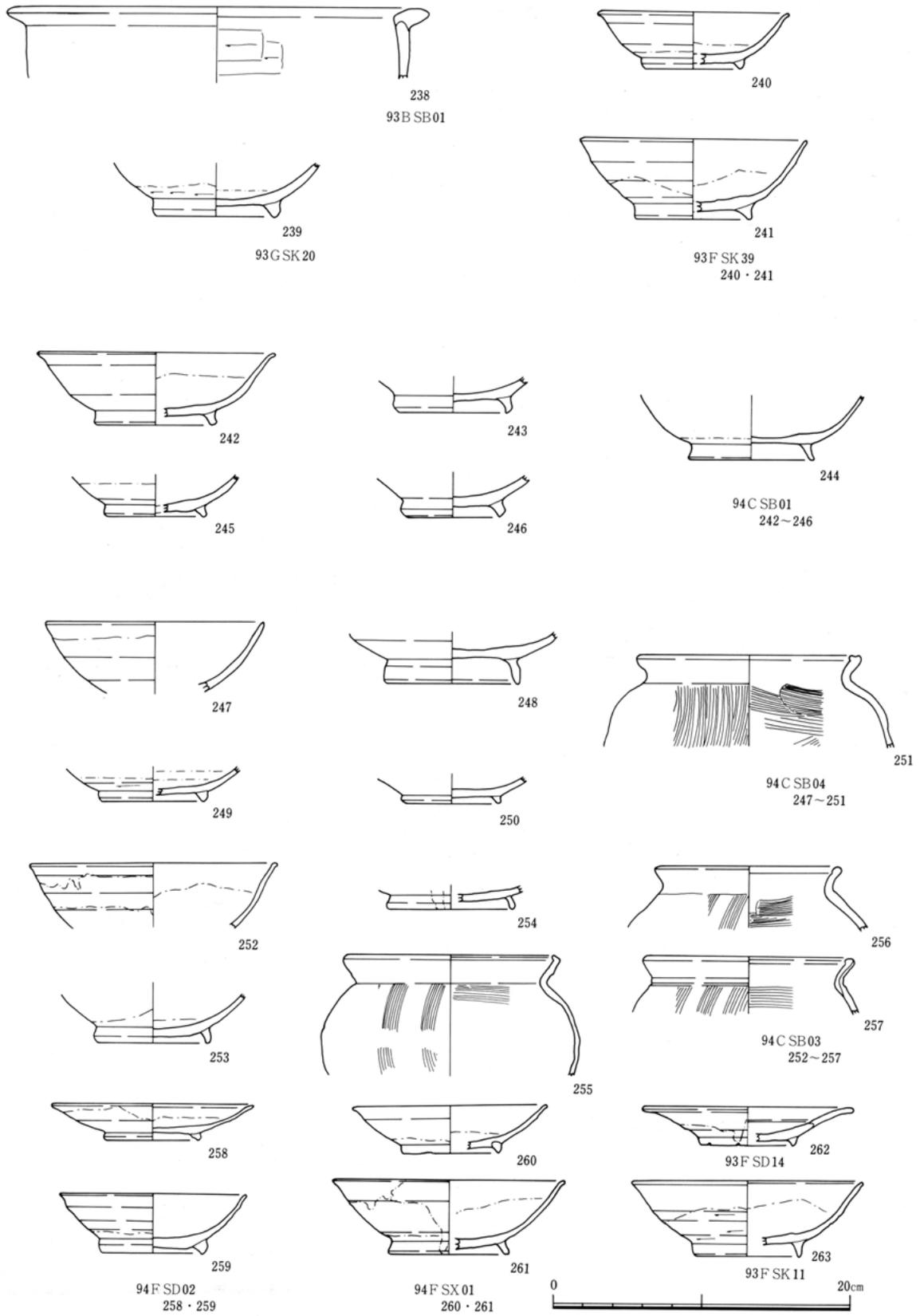


图48 古代IVa~IVb期土器实测图(2) (S=1/4)



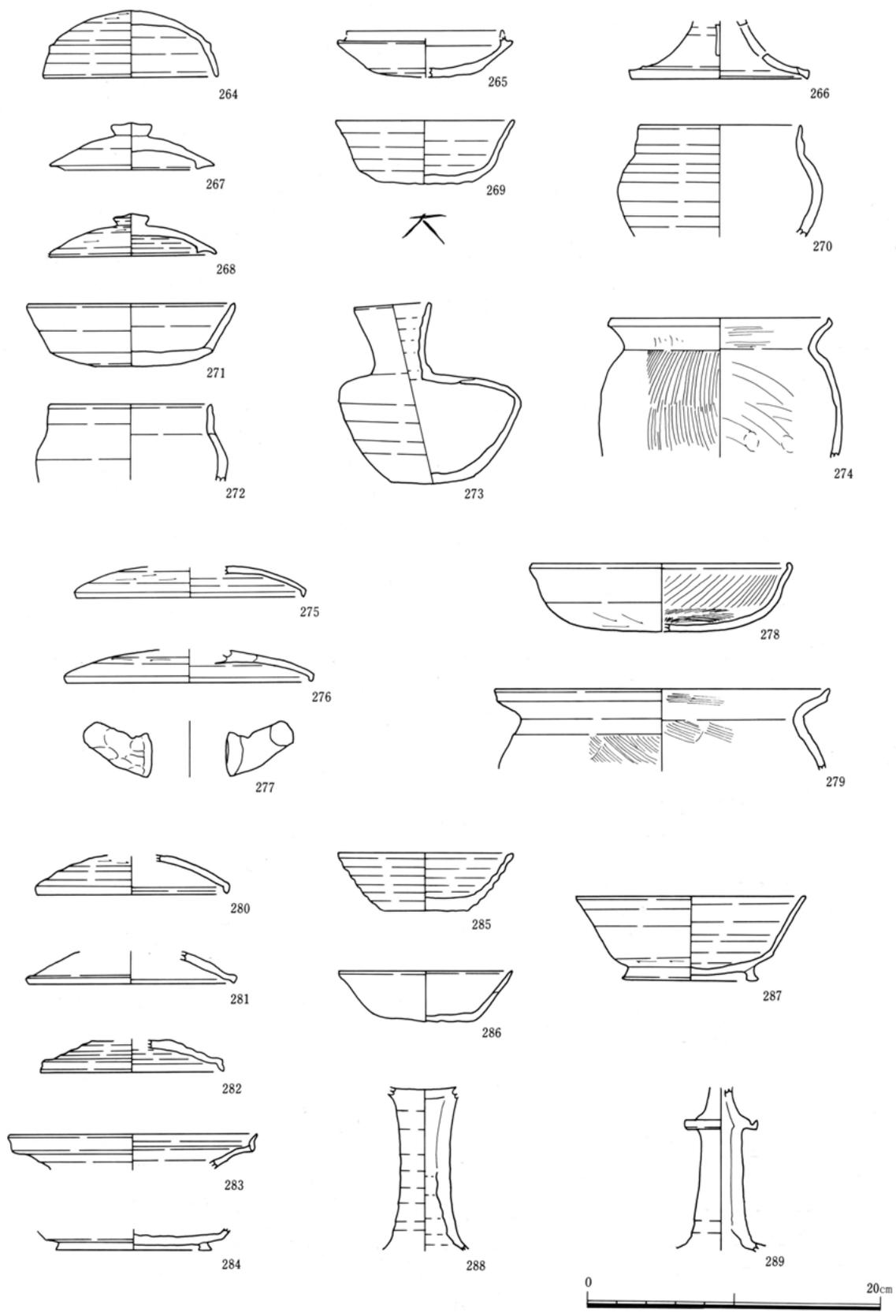
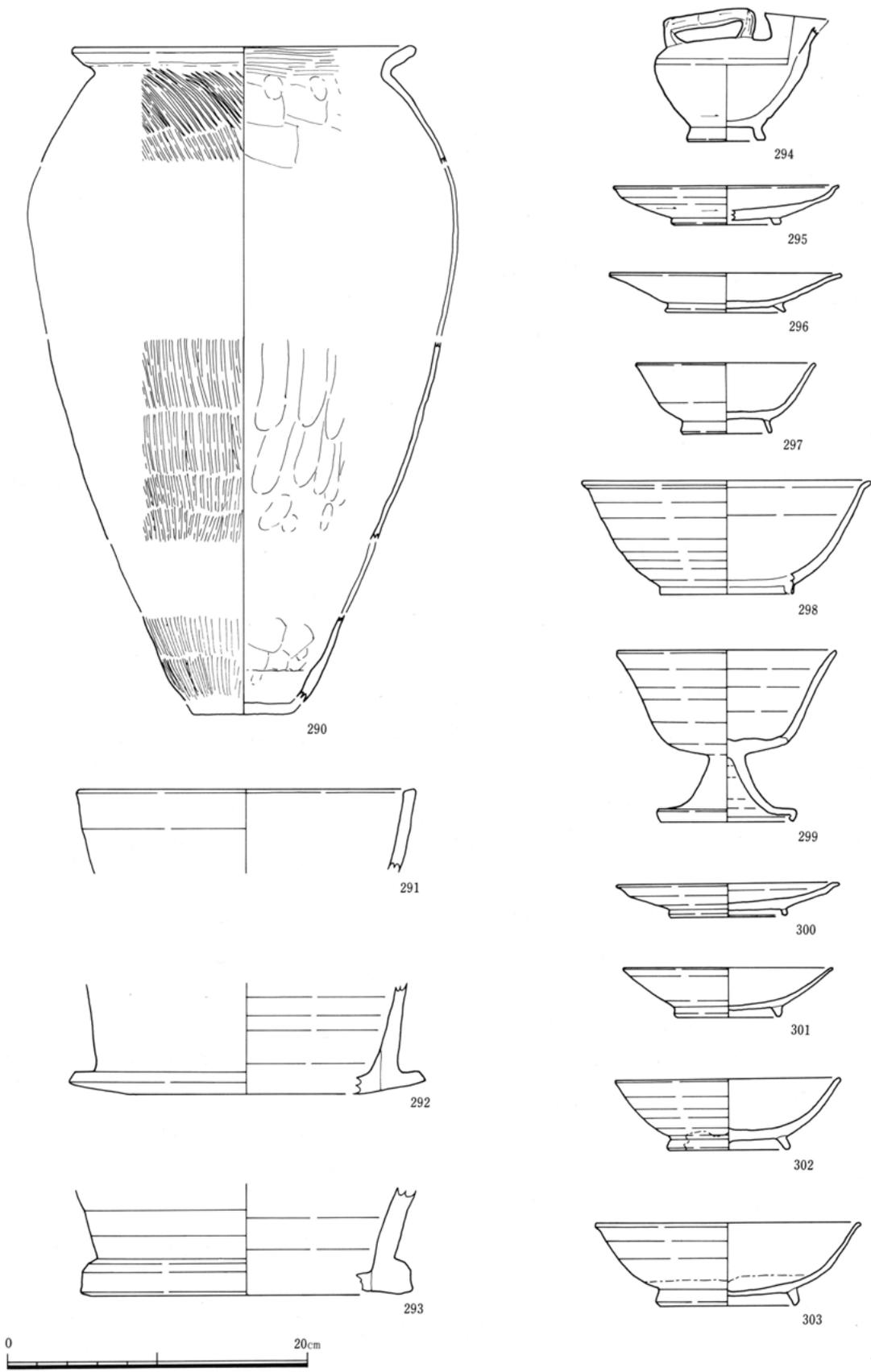


図50 遺構外出土の古代土器実測図(1) (S=1/4)



## 4.3 中世の土器

### 概要

中世の土器は11世紀後半から16世紀前半までを対象とする。時期設定については藤澤編年（藤澤1994など）を基軸に、知多窯は赤羽・中野編年（赤羽・中野1995）を参考にした。分類については、灰釉系陶器\*1が藤澤分類（藤澤1994など）と松河戸分類（赤塚1994）を参考に、施釉陶器\*2が藤澤分類（藤澤1991など）を参考に、煮炊具は鈴木分類（鈴木1994）を参考にした。

出土土器を概観すると、他の尾張平野の中世集落遺跡と同じく、灰釉系陶器の椀・皿が出土遺物の大半を占め、次いで土師器の皿、施釉陶器、灰釉系陶器の甕などが続く。

掲載の方針は時期別に遺構出土資料を中心に提示し、さらに包含層資料については、全形がつかみやすいもの、特異な資料を優先的に掲載した。なお、貿易陶磁器・文字表記資料・加工円盤・陶丸については、遺構出土以外について別途掲載した。

### 4.3.1 分類の基準（図52）

灰釉系陶器は椀・皿を中心に、壺・鉢（片口鉢）・甕がある。ここでは出土量の最も多 灰釉系陶器い、椀・皿について分類する。

**椀A** 松河戸分類のⅠ類がほぼ相当する。体部が内彎し、口縁部でわずかに外反するもので体部の浅いものと、直線的な体部で口縁に向かって外反するもので体部の浅いものがある。中世猿投窯南部から知多窯の土器が相当する。

**椀B** 松河戸分類のⅡ類がほぼ相当する。直線的な体部に肥厚する口縁部をもつもので体部が深いもの。中世猿投窯北部から瀬戸窯の土器が相当する。

**椀C** 松河戸分類のⅢ類がほぼ相当する。A・Bに比べ精製品で、器壁の薄いもの。多治見窯など東濃地区の土器が相当する。

**椀D** 藤澤分類の美濃須衛型がほぼ相当する。Aと器形が類似するため認識が容易ではないが、体部がA類よりやや膨らみを持ち、胎土はA類より粗くない。中世美濃須衛窯の土器が相当する。

上記のほか中世0期に相当する灰釉陶器、松河戸分類の0類もある。今回は椀0とし、中世0期の実態が明らかになるのを待ちたい。

**皿A** 松河戸分類のⅠ類が相当する。底部が小さく口縁部に大きく外反するもの。体部はBより深い。椀Aと同様に中世猿投窯南部から知多窯の土器が相当する。

**皿B** 松河戸分類のⅡ類が相当する。底部が大きく口縁端部に稜線をもつ、体部はA類より浅い。椀Bと同様に中世猿投窯北部から瀬戸窯の土器が相当する。

**皿C** 松河戸分類のⅢ類が相当する。器壁が薄くC類よりも器高が低い。椀Cと同様に多治見窯など東濃地区の土器が相当する。

**皿D** 椀Dと同様藤澤分類の美濃須衛型が相当する。

上記のほか灰釉陶器の小椀がある。椀0と同様に中世0期の実態が明らかになるまでの年代的位置付けは待ちたい。

\*1 灰釉系陶器とは中世期の東海地方の窯で焼かれた無釉の陶器を指す。

\*2 いわゆる「古瀬戸」と呼ばれる瀬戸窯で焼かれた施釉された陶器を指す。

その他の 知多窯系統の甕・壺・羽釜・鉢（片口鉢）がある。

#### 灰釉系陶器

施釉陶器 いわゆる「古瀬戸」と呼ばれている土器とその系統の土器。先にも示したように藤澤分類を踏襲する。大毛沖遺跡では四耳壺、卸皿、折縁中皿、天目茶碗、挿鉢などがある。

土師器 土師器はおもに皿と煮炊具（鍋・釜）がある。

皿 皿は大まかに3つに分けた。底部に糸切り痕を残す、回転台使用の土器を皿A。その他の皿は、型作り（外型）の痕跡と思われる粘土の押圧が残る皿Bといわゆる手づくねの皿Cとに分けた。

煮炊具 煮炊具の分類・名称については、伊勢型鍋を松河戸分類、その他の鍋・釜を鈴木分類に合わせた。

伊勢型鍋 松河戸分類ではA～Eに分類している。このうち大毛沖遺跡ではB～E類が確認されているので、ここではA類の記述を外す。

B 平坦な肥厚する口縁部を持ち、体部は球形、口縁部は体部から直接屈曲する。

C 斜めに肥厚する口縁部を持ち、口縁部は体部から緩やかに外彎する。

D 直立する頸部を持ち、口縁部端部は折り返し内彎する、体部はやや扁平となる。

E 口縁端部は内彎し、器壁は薄い、体部はさらに扁平化が進む。体部外面にハケ調整を行い、その後体部下半にケズリ調整を行う。

羽付鍋 半球形の鉢で鐙があるもの。

内耳鍋 半球形の鉢で鐙がなく、内耳が付くもの。

釜 口が狭められた袋状の壺の形状をし、鐙があるもの。

その他、清郷型鍋がある。

貿易陶磁器 貿易陶磁器の分類は4. 6を参照。

加工円盤・陶丸 加工円盤と陶丸は4. 7を参照。

赤塚次郎編 「Ⅲ遺物 4鎌倉・室町時代」『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター，1994

赤羽一郎・中野晴久 「生産地における編年」『「中世常滑焼」をおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所，1994

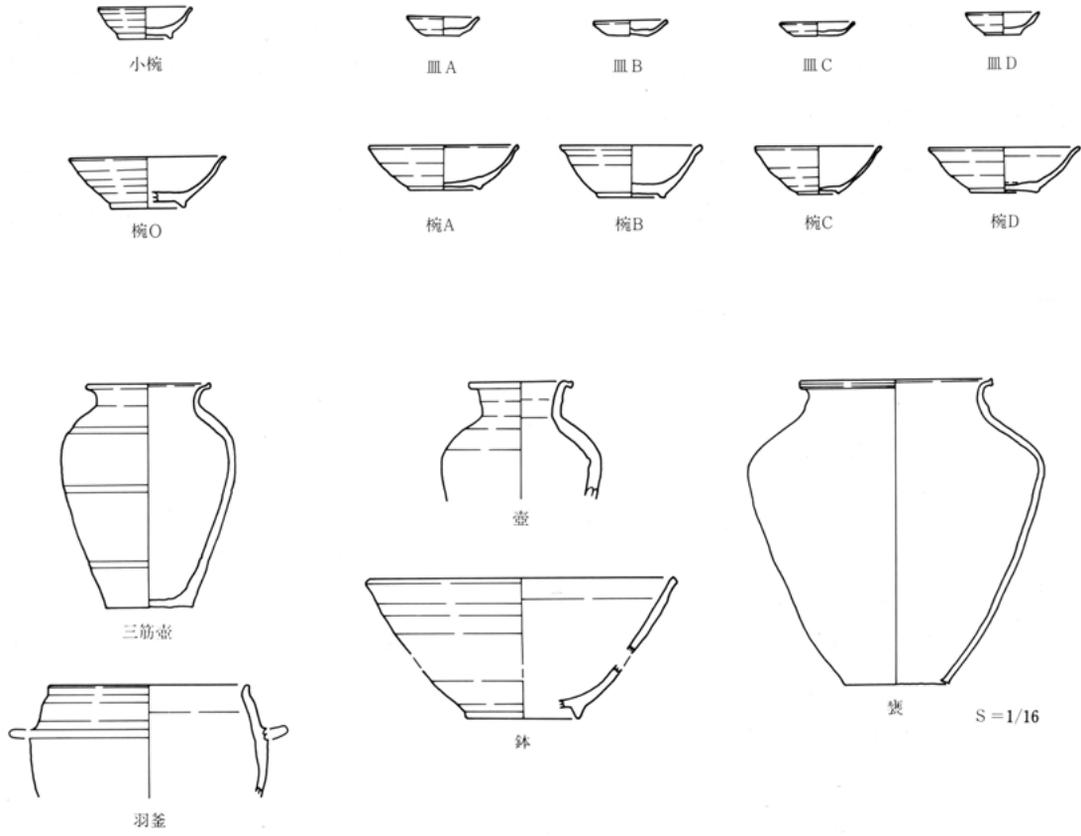
鈴木正貴 「戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム』4 考古学フォーラム，1994

藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館，1991

藤澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター，1994

灰釉系陶器、施釉陶器の時期同定、産地同定については、藤澤良祐氏（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）、岡本直人氏（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター）にご教示を得た。

灰軸系土器



土師器

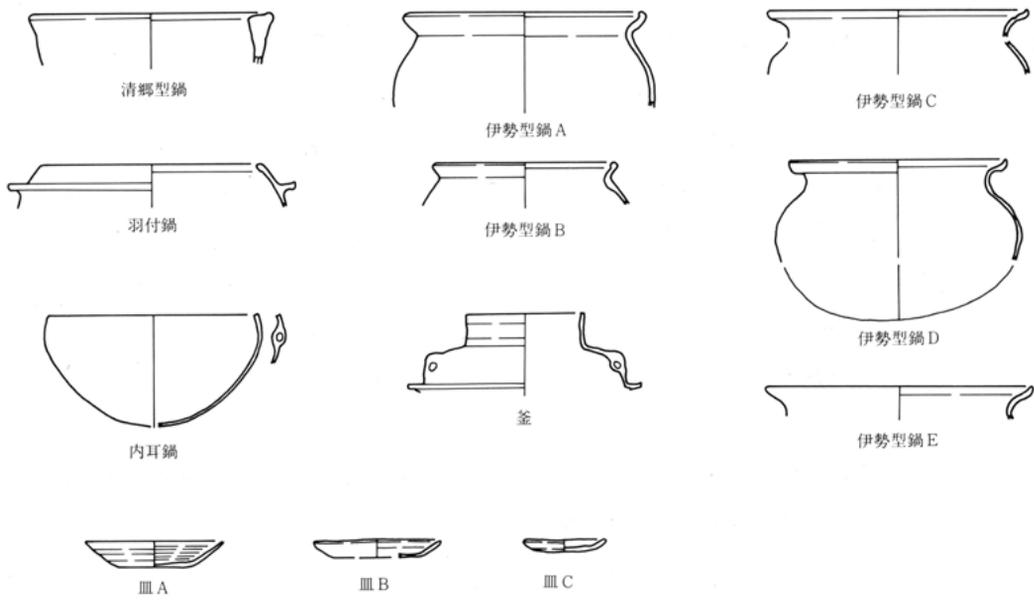


図52 中世土器の分類図 (S=1/8)

#### 4. 3. 2 時期設定

時期区分については、「遺跡の概要」で大枠を示している。ここでは遺物による見解を示す。大毛沖遺跡編年と窯編年などとの対比表は表4を参照。

- 中世0期** 11世紀後半から12世紀前半を中心とする時期。おもに94C・D旧流路上に展開する方形土坑とその周辺に集中する。器種構成は椀0・小椀・清郷型鍋などとなる。
- 中世I期** 12世紀後半を中心とする時期。灰釉系陶器から3期に細分できる。藤澤編年に拠れば、I a期は第4型式(新)、I b期は第5型式(古)、I c期は第5型式(新)が相当する。器種構成は灰釉系陶器が椀A・皿Aを中心とし、鉢、土師器皿などとなる。灰釉系陶器の産地については猿投窯南部から知多窯が多い。
- 中世II期** 13世紀前半を中心とする時期。灰釉系陶器から2期に細分できる。藤澤編年に拠れば、II a期は第6型式、II b期は第7型式が相当する。器種構成は以下の通り。II a期は灰釉系陶器が椀A・B・C、皿A・B・C、甕、土師器が伊勢型鍋D、皿、貿易陶磁器などとなる。II b期は灰釉系陶器が椀C・皿Cを中心とし、鉢など、土師器が伊勢型鍋D、皿、貿易陶磁器などとなる。灰釉系陶器の産地については、II a期は瀬戸窯から猿投窯北部が中心、II b期は東濃窯が中心となる。
- 中世III期** 13世紀後半から15世紀前半を中心とする時期。93Fに比較的多く見られた。灰釉系陶器から3期に細分できる。藤澤編年に拠れば、III a期は第8型式、III b期は第9型式、III c期は第10型式が相当する。器種構成は灰釉系陶器が椀C・皿C、施釉陶器が四耳壺・土瓶など、土師器が皿・羽釜、貿易陶磁器となる。III期以降、施釉陶器が増加してくる。
- 中世IV期** 15世紀後半から16世紀前半を中心とする時期。94H居住域Ⅲに集中している。灰釉系陶器、施釉陶器から2期に細分できる。藤澤編年に拠れば、IV a期は第11型式前半と古瀬戸後IV期(古)、IV b期は第11型式後半と古瀬戸後IV期(新)から大窯I期が相当する。器種構成は灰釉系陶器が減少し、施釉陶器が主体となる。また、土師器皿がまとめて出土する遺構が増える。灰釉系陶器は椀C、施釉陶器は天目茶椀・挿鉢・縁釉皿などが主体を占め、土師器は皿が圧倒的に多く、内耳鍋・羽付鍋・釜が少量となる。土師器皿については、大・中・小の大きさによる区別も可能と思われるが、今回は前記した通り製作技法的な観点で分類した。
- その他** 別項で報告する墨書土器について若干触れておく。
- 墨書土器** 墨書土器はすべて灰釉系陶器の椀・皿。時期的にはII期のものが多く、次いでIII期、I期、IV期と続く。II a期にみられる「まつ」表記資料、II b期にみられる「悦」表記資料、同じくII b期にみられる花押風の表記資料など注目される墨書がある。「まつ」はほぼ同一人物と思われる筆跡が酷似する土器が3点ある。

### 4. 3. 3 遺構出土の土器

中世0期 (図53-304~310)

304~306は93GSK17出土資料。306は清郷型鍋。307・308は93GSK35出土資料。309・310は94CSK17出土資料。中世0期は遺構がほとんどない。上記の資料のほか旧流路からの出土は確認できるものの、出土点数は少ない。今後の資料増加によっては、0期併行の資料の位置付けが変動する可能性は高い。

中世I期 (図53-311~319、図54-320~343、図55-346~358)

311・312は93DSD05出土資料。313は94DSK24出土資料。314は94DSK13出土資料、知多 I a~b 期  
窯の三筋壺。315は93AP22出土資料。316は93ASK37出土資料。317は93ASK42出土資料。  
318は94FSD17出土資料。319は94FSK17出土資料。311~319はI a~b 期。0期と同様に  
遺構・遺物ともに資料数が少ない。

320は93ASD07出土資料。321は93ASK02出土資料。324は93ASK52出土資料。322・323は I c 期  
93BSD13出土資料。325は93DSK35出土資料。326~328は93CSX05出土資料、島畑状遺構内  
の資料で、3枚重なって出土。329~332は93GSD10出土資料。333~345は94ESK54出土資  
料。346~348は94FSK08出土資料。349~358は93ASK06出土資料、355は底部外面に「大」  
表記の墨書がある。

中世II期 (図55-359、図56-64-360~599)

359は93ASK04出土資料、知多窯の甕、体部上半に一对の穿孔がある。底部は全面の穿 II a 期  
孔。検出時には口縁部に1段曲物が残存しており、井戸枠と使用されていたことがわかる。  
360~405は93GSE05出土資料。SE05が井戸として機能しなくなった後の一括廃棄資料。時  
期的にはI c~II a 期の土器が確認されている。362は内面に漆がほぼ全面に付着してい  
る。372・380・388・391は内面に煤が付着している。400・401は伊勢型鍋D、口縁部内外  
面に煤あるいはふきこぼれによるヨゴレが見られる。402~405は貿易陶磁器。

406~426は94HSD07出土資料、居住域IIの北側にあたる区画溝。409は内外面にわたり  
煤が付着。420は底部外面に「大」表記の墨書がある。427~431は94HSD31出土資料、居住  
域IIの南側にあたる区画溝。428は内面に煤付着。432~435は94HSD29出土資料、居住域II  
の東側にあたる区画溝。436~442は94HSE03出土資料。437は内面に煤付着。442は同安窯  
系青磁。443・444は94HSE04出土資料。445・446は94HSE05出土資料。447~458は93GSE  
04出土資料。451・454は口縁部内面に一部タール付着。459~463は94DSD08出土資料。46  
4~470は93CSE03出土資料。

471~479は93ASK53出土資料。473は口縁部の一部にタール付着。476は内外面に煤が付 II b 期  
着。478は青磁の椀。479は伊勢型鍋D、体部外面に煤付着。480~502は94ISE02出土資料。  
すべて井戸廃棄後の遺物。501は入子か。502は伊勢型鍋D。503~505は94ISD03出土資料。

506は94 I SD04出土資料。507～513は94 I SD06出土資料。513は伊勢型鍋D。514～523は94 I SD08出土資料。523は青磁碗。524～527は94 I SK12出土資料。528は94 I P 39出土資料。529～540は93 C SK06資料。540は底部外面に「□九□」表記の墨書がある。541は93 C SK05出土資料で底部外面に「万？」表記の墨書がある。542～546は93 F SD14出土資料。544は施釉陶器の卸皿。547は93 F SD12出土資料。548・549は93 F SD09出土資料。550は93 F SD11出土資料、知多窯の羽釜。

551～599は93 A SX01出土資料。Ⅱ a～b期の資料。Ⅱ b期の土器は切り合い関係にあるSK53資料の可能性もある。土器の中には内外面あるいは内面に煤の付着が目立つ（551・566・567・569・570・572・574）。580は体部外面に墨書、581は底部外面に「まつ」表記の墨書がある。587は水瓶の頸部。588～591は貿易陶磁器、588は白磁、その他は青磁。597～599は伊勢型鍋E。

#### 中世Ⅲ期（図65-600～620，図66-621～632）

600～604は93 F 集石 A 出土資料。600・604は施釉陶器四耳壺。605～610は94 H SE07出土資料。607は「大」表記の墨書がある。609は青磁。610は井筒として利用されていた甕。611は93 G SD03出土資料。612～617は93 G SD07出土資料。618・619は93 F SD06出土資料。620は93 F SD16出土資料、施釉陶器土瓶。

#### 居住域Ⅲ

621・622は94 H SD13出土資料。623～626は94 H SD30出土資料、624は施釉陶器の仏供。627～649は94 H SD09出土資料。630～632は青磁。SD09資料にはⅣ期の資料も混在する。

#### 中世Ⅳ期（図66-633～649，図67-69-650～736）

Ⅳ期の掲載資料はすべて居住域Ⅲ（94H）の資料。前記した621～632も同様に居住域Ⅲの資料。灰釉系陶器は器種構成に加わっているものの、Ⅲ期までとは異なり、少数となる。

#### Ⅳ b 期

650～668は94 H SD11出土資料。669～676は94 H SD14出土資料。677～679は94 H SD15出土資料、すべてが土師器皿。SD15に限らず居住域Ⅲでは土師器皿の出土量は極めて多い。680～703は94 H SD18出土資料。687は施釉陶器の有耳壺。689は施釉陶器の挿鉢、挿目が薄く、よく使い込まれている。702・703は土師器の煮炊具、ともに外面に煤が付着。702は釜、703は内耳鍋。

704～714は94 H SD20出土資料。715・716は94 H SD24出土資料。717～720は94 H SD25出土資料。721～728は94 H SK106出土資料、すべて土師器皿。729～736は94 H SX03出土資料。

#### 4. 3. 4 遺構外出土の土器（図70）

737～744はⅠ～Ⅱ期の資料。745～753はⅡ期の資料。754～769はⅢ期～Ⅳ期の資料。

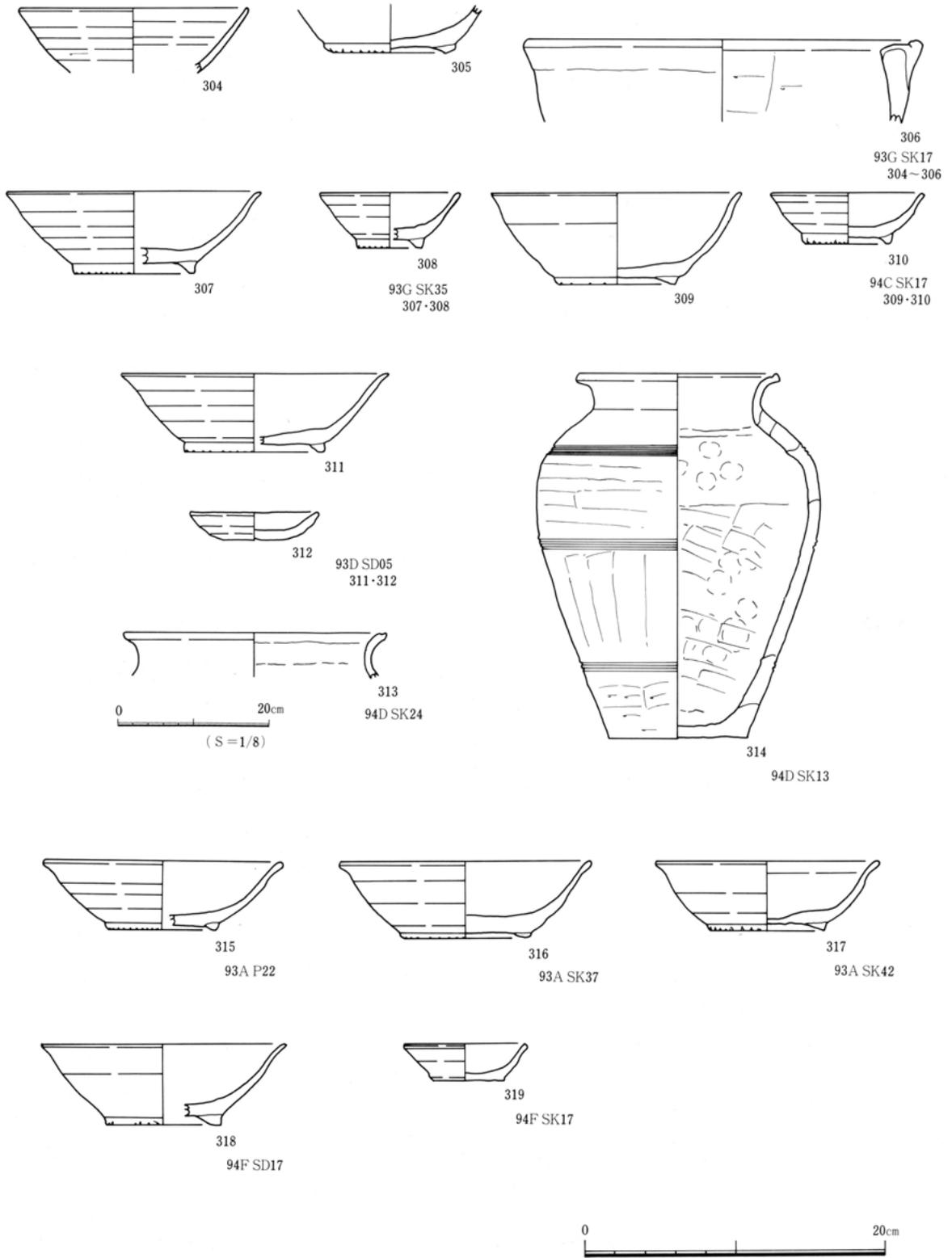


图53 中世0~I期土器実測図 (S=1/4)

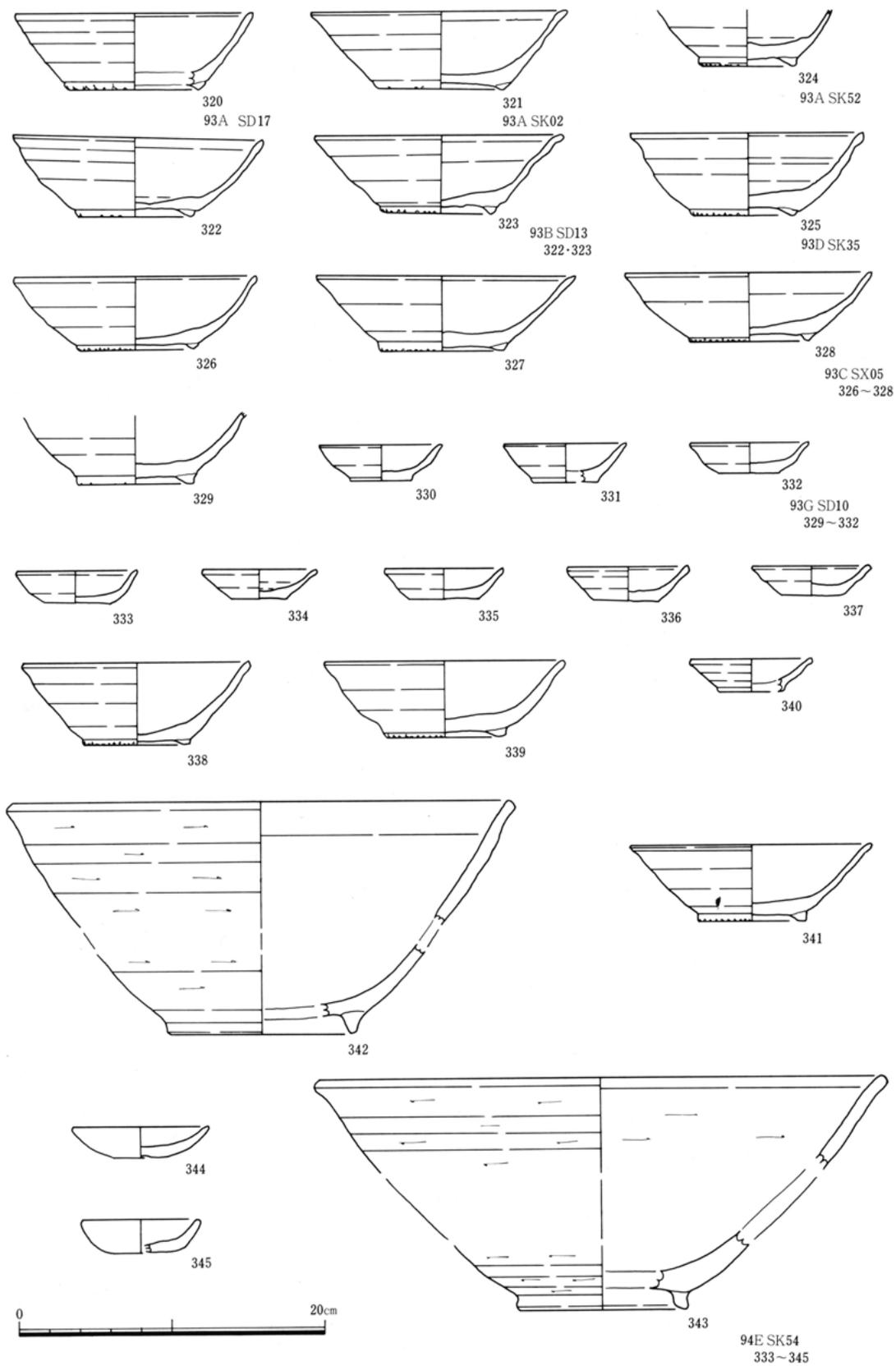


图54 中世Ⅰc期土器实测图 (S=1/4)

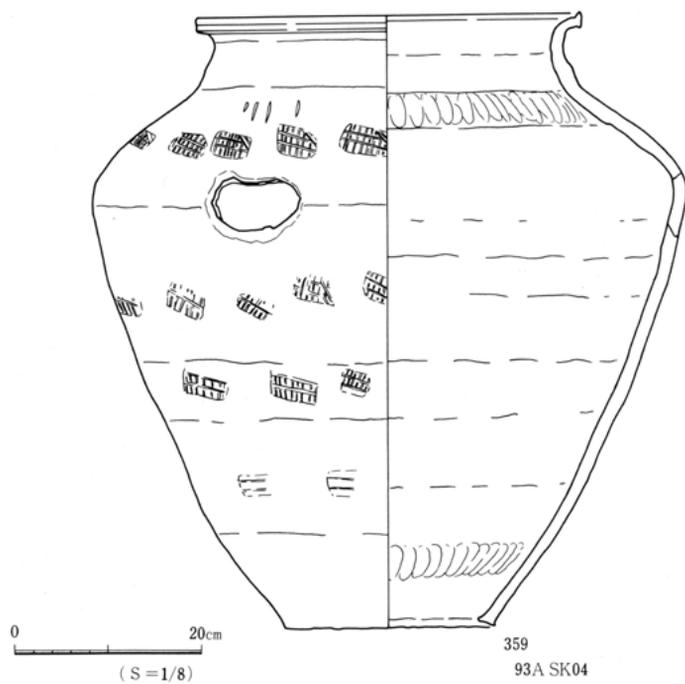
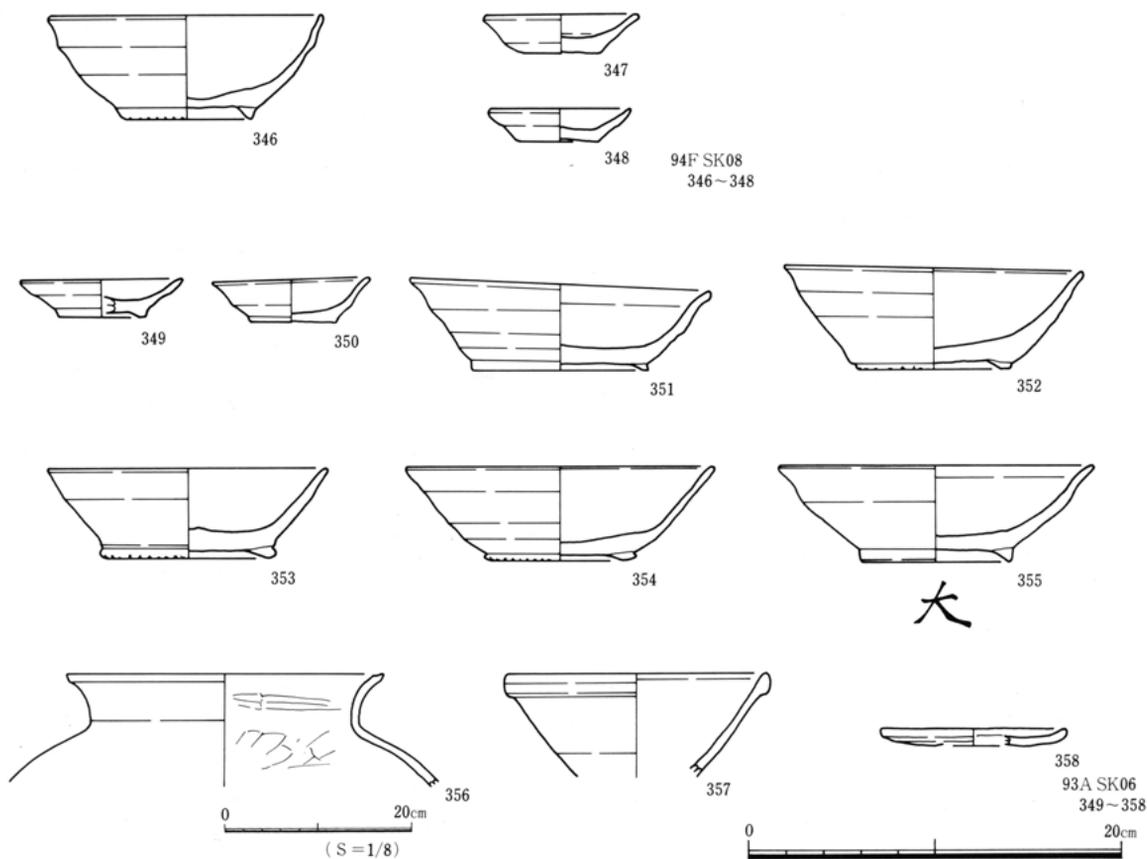


图55 中世Ic~II期土器実測図 (S=1/4)

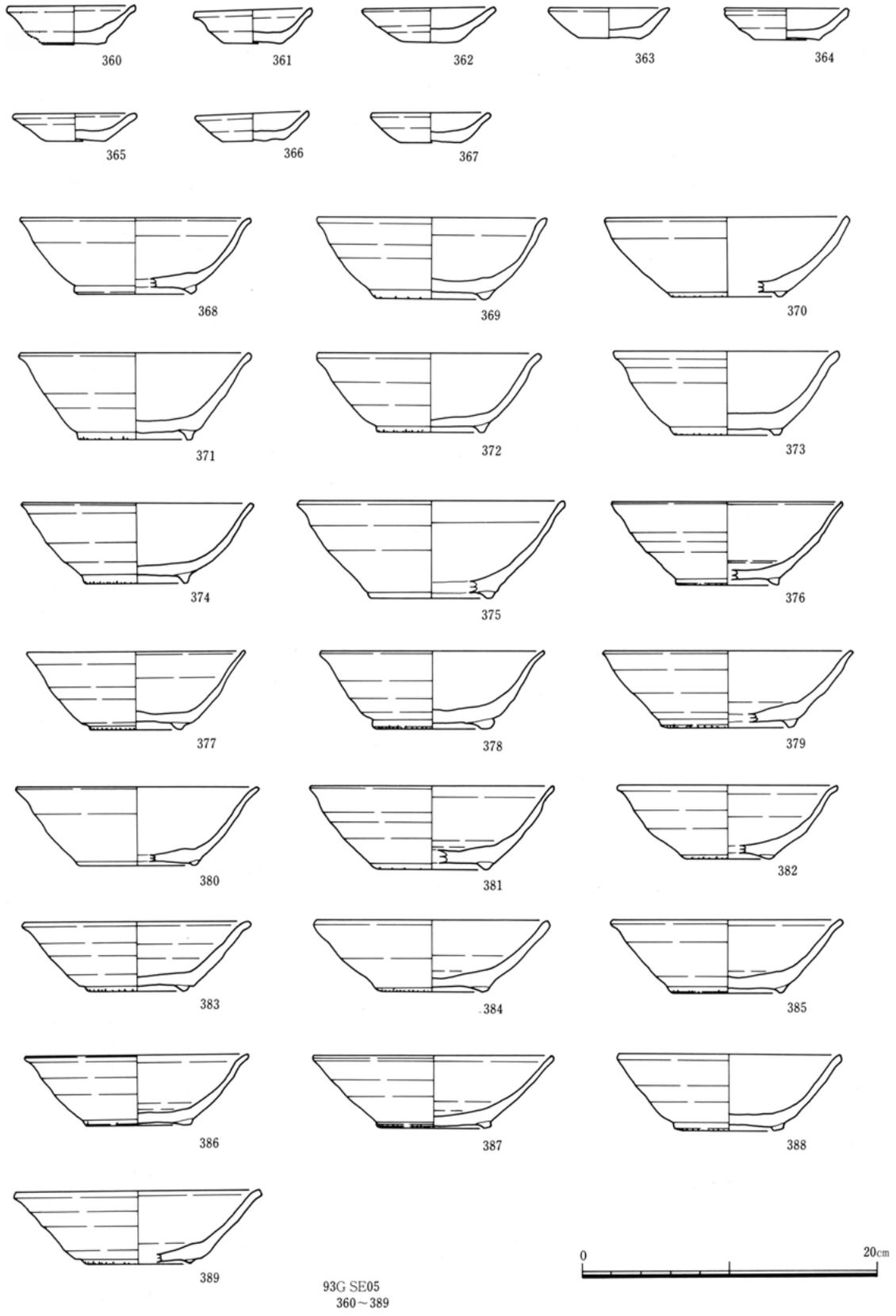
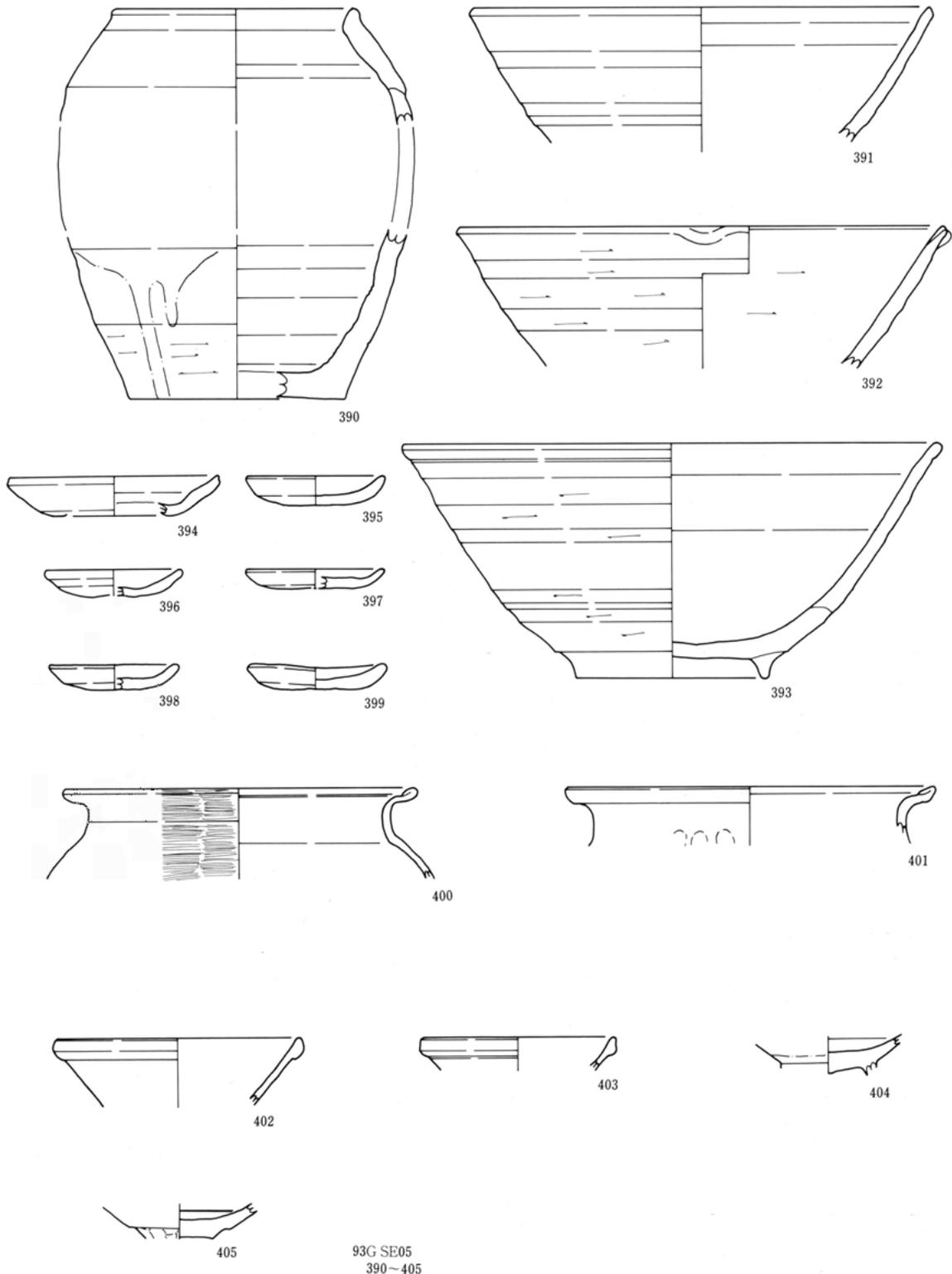


图56 中世Ⅱa期土器実測図(1) (S=1/4)



93G SE05  
390~405

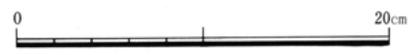


图57 中世Ⅱa期土器实测图(2) (S=1/4)

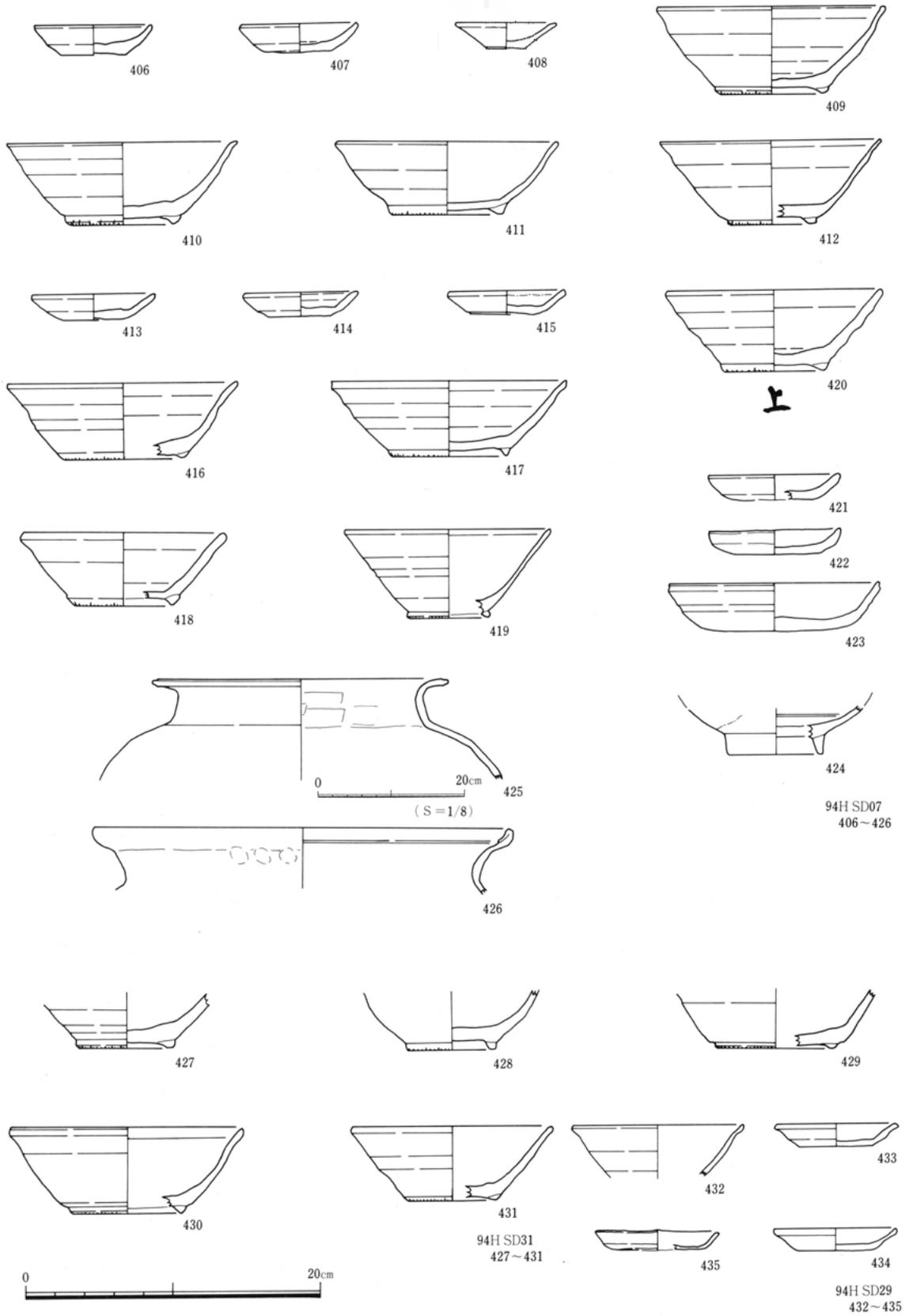


图58 中世Ⅱa期土器实测图(3) (S=1/4)

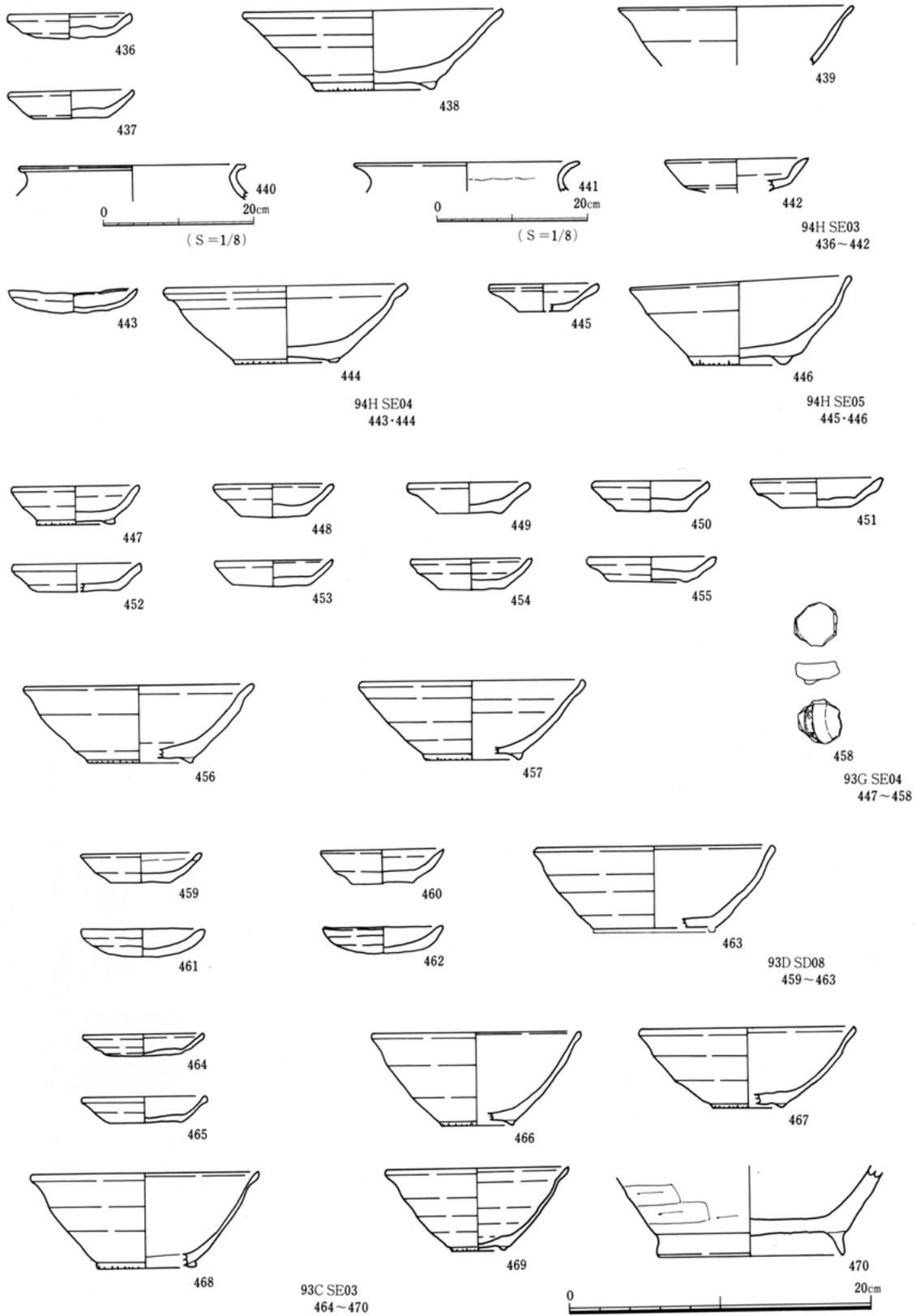


图59 中世Ⅱa期土器实测图(4) (S=1/4)

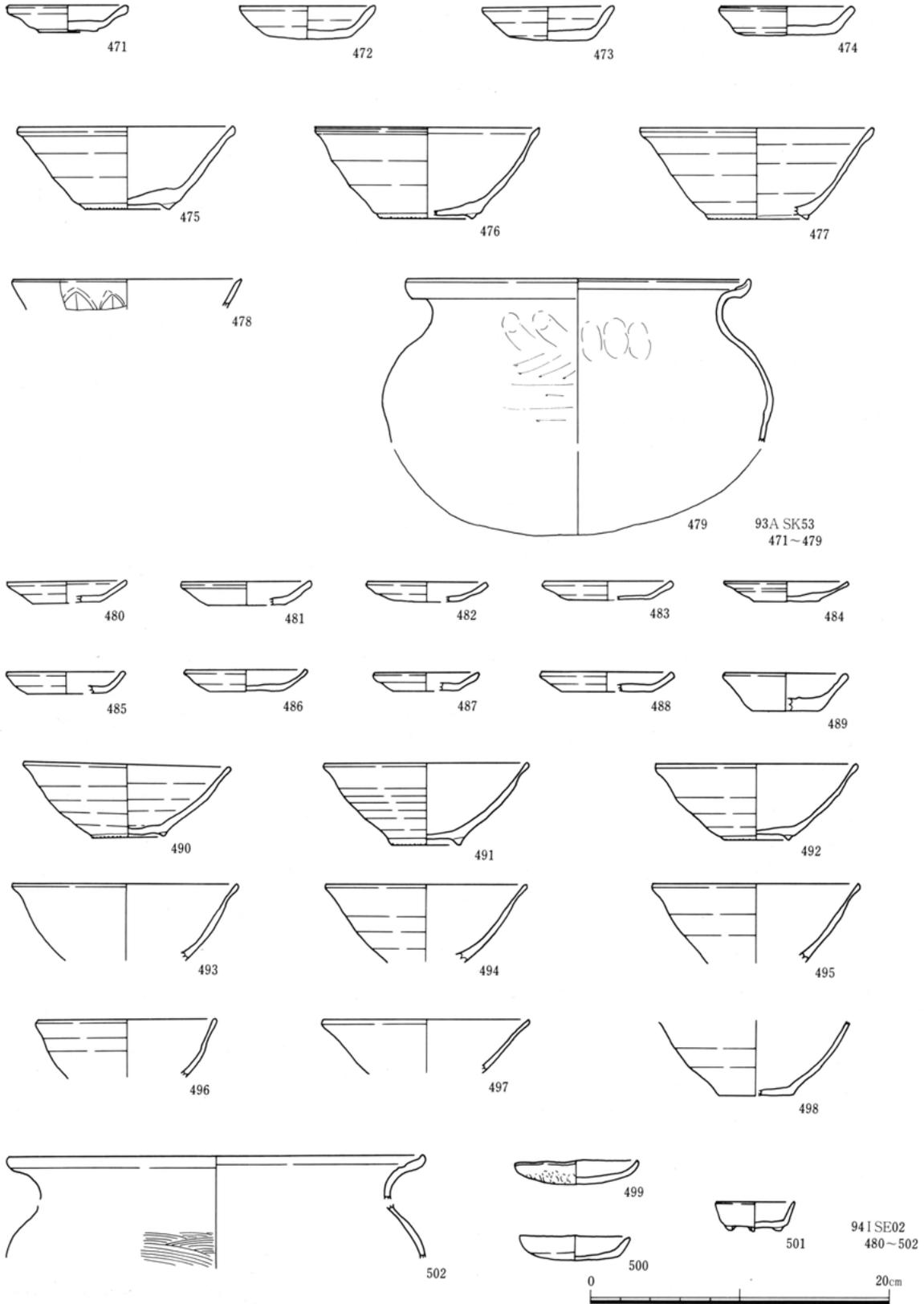


图60 中世Ⅱb期土器实测图(1) (S=1/4)

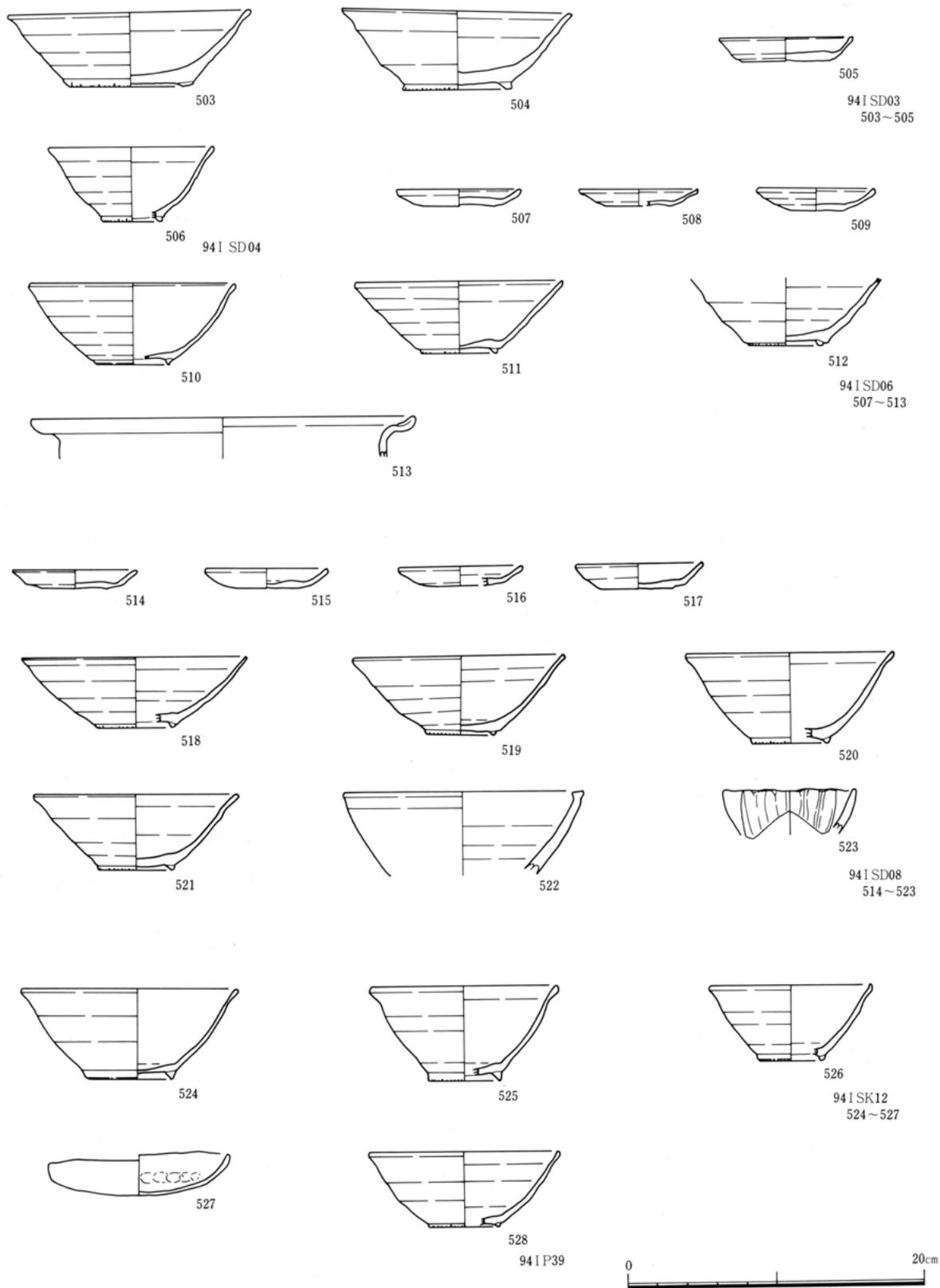


图61 中世Ⅱb期土器实测图(2) (S=1/4)

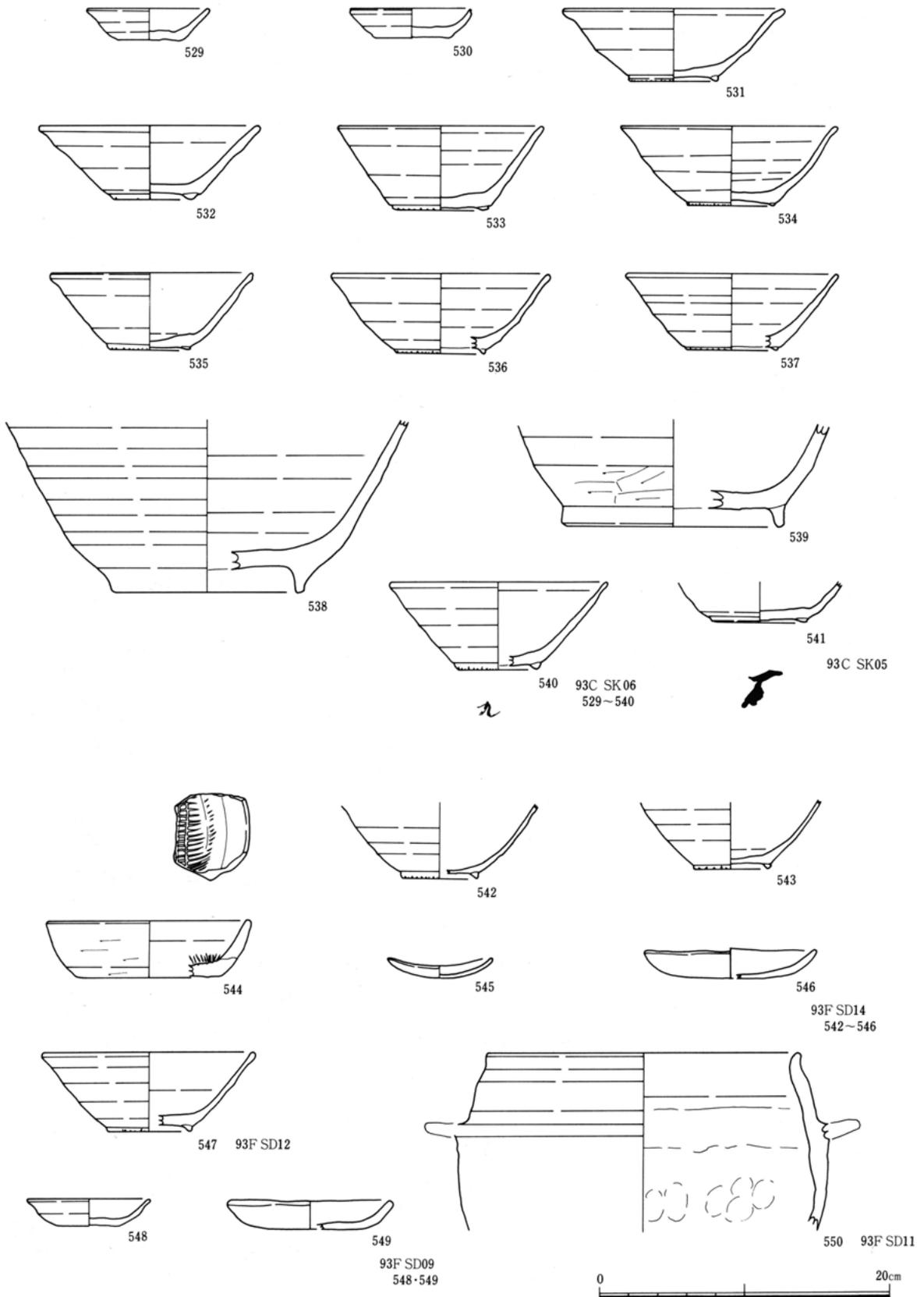


图62 中世Ⅱb期土器实测图(3) (S=1/4)

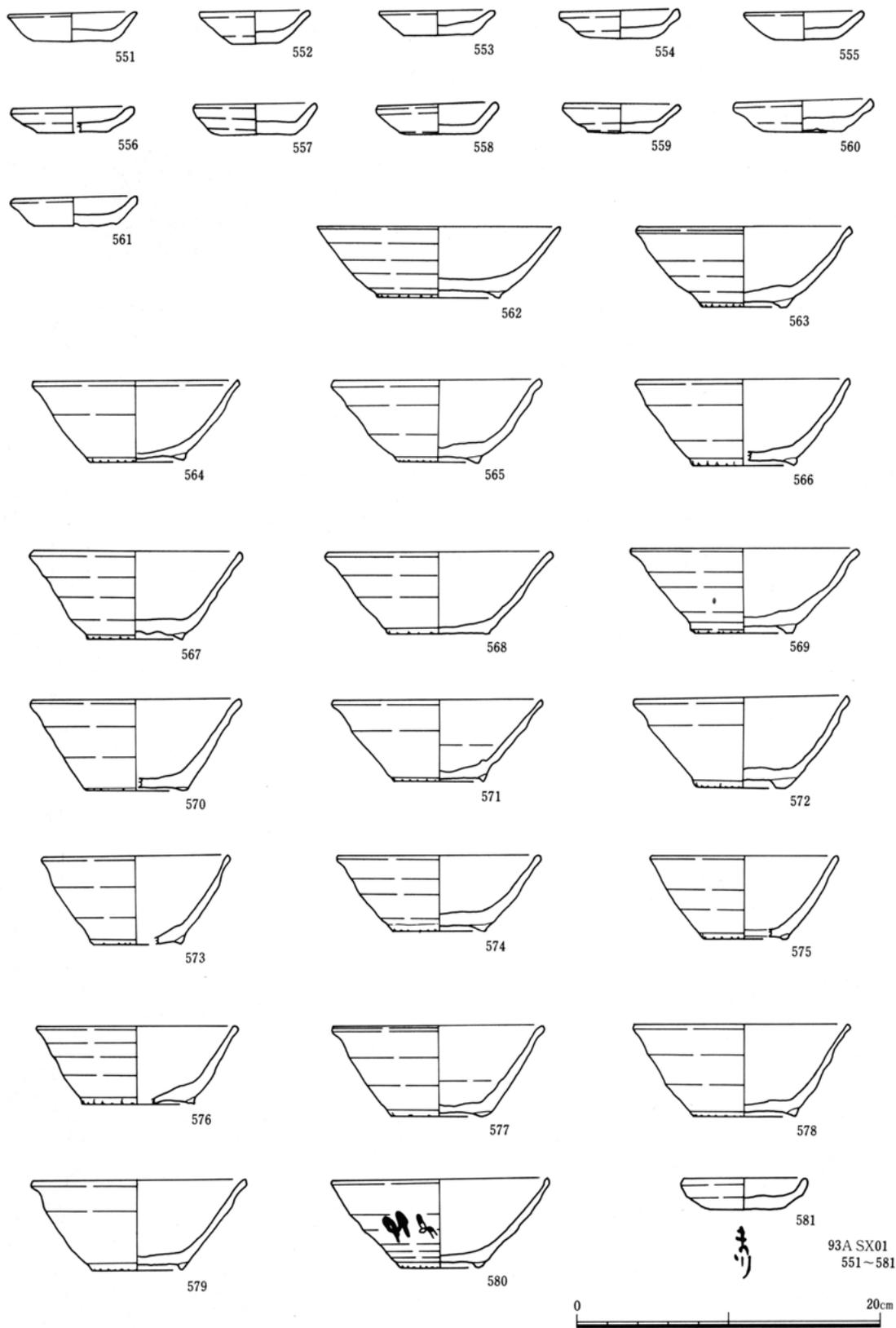


图63 中世Ⅱ期土器实测图(1) (S=1/4)

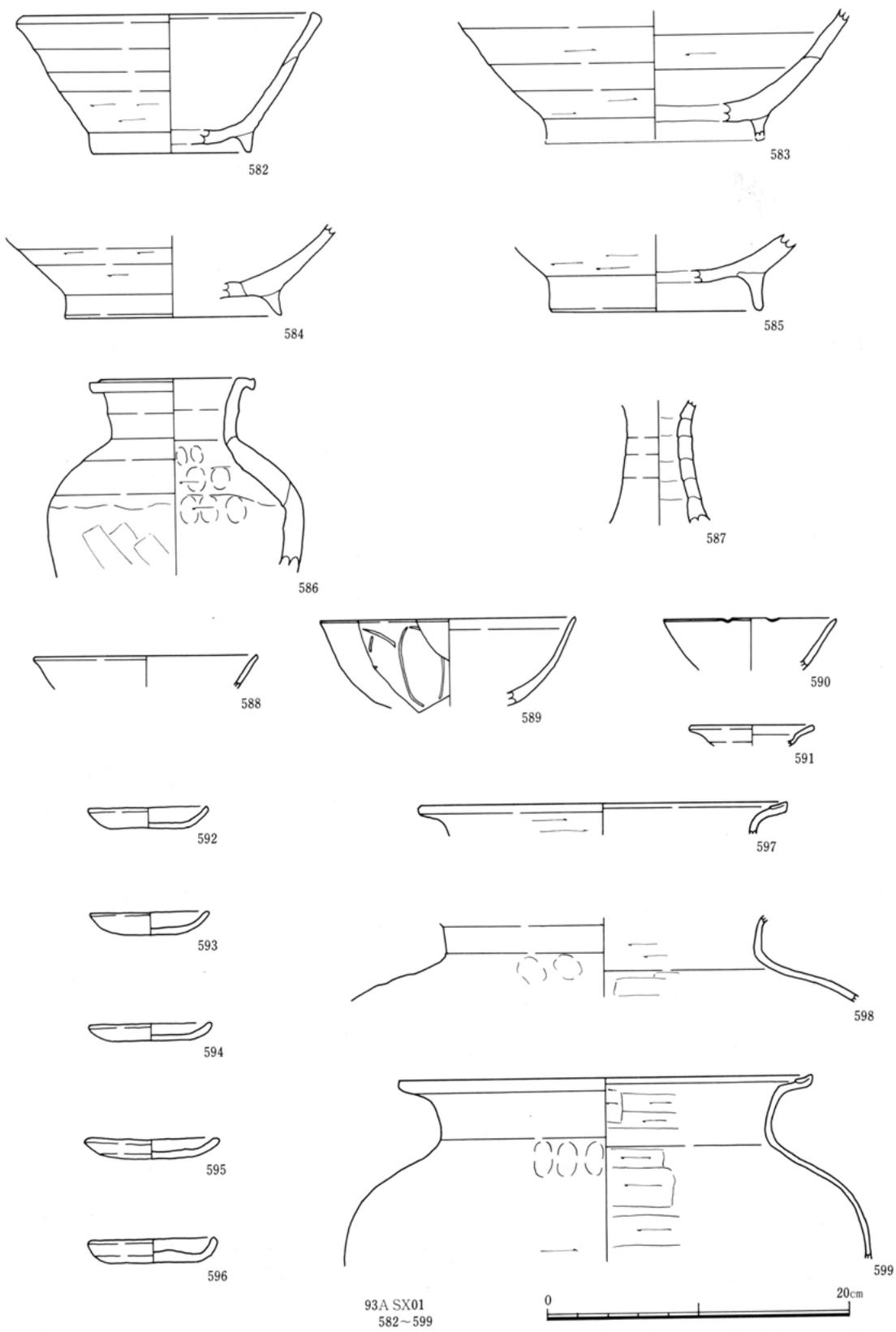


图64 中世Ⅱ期土器实测图(2) (S=1/4)

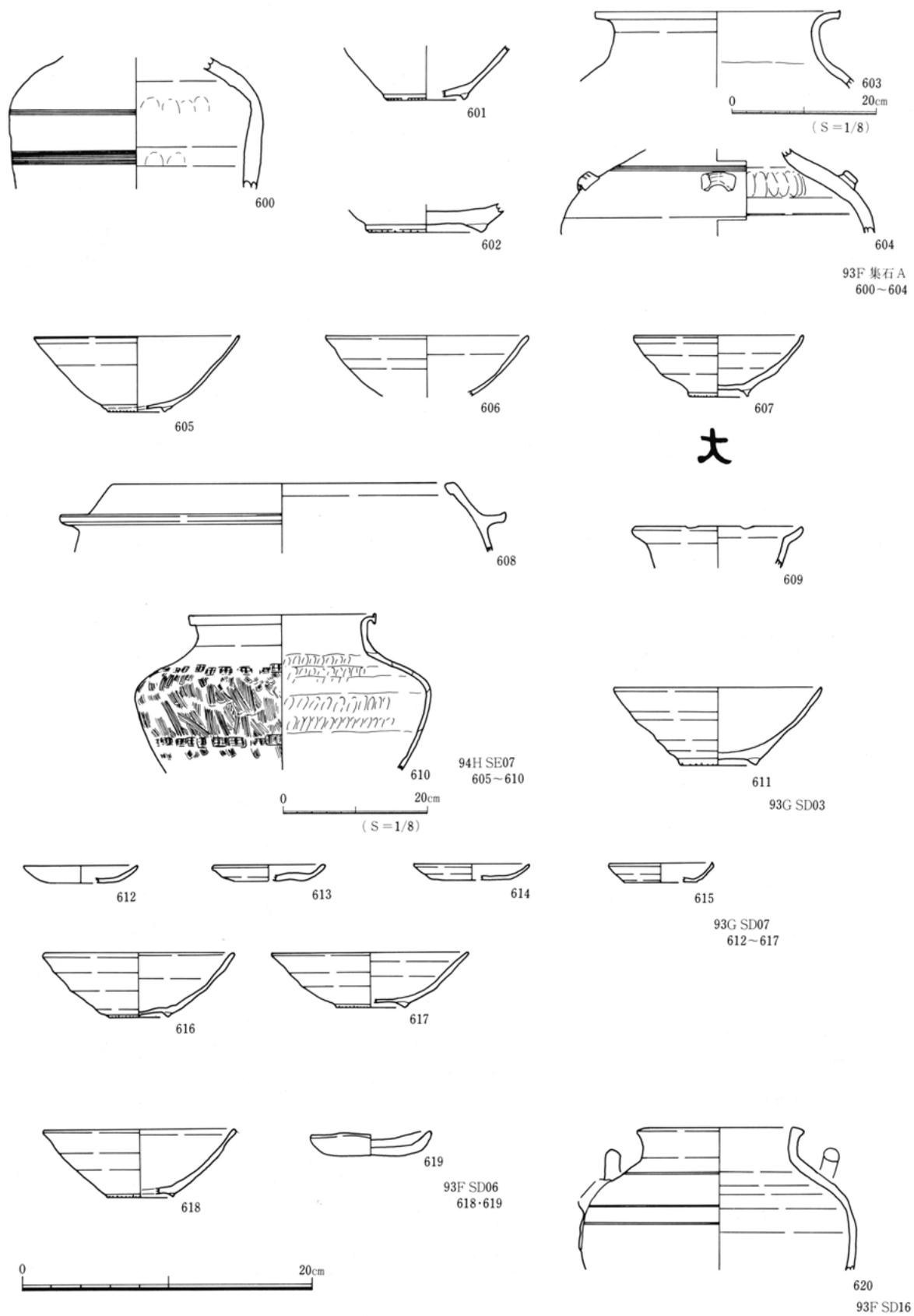


图65 中世Ⅲ期土器实测图 (S=1/4)

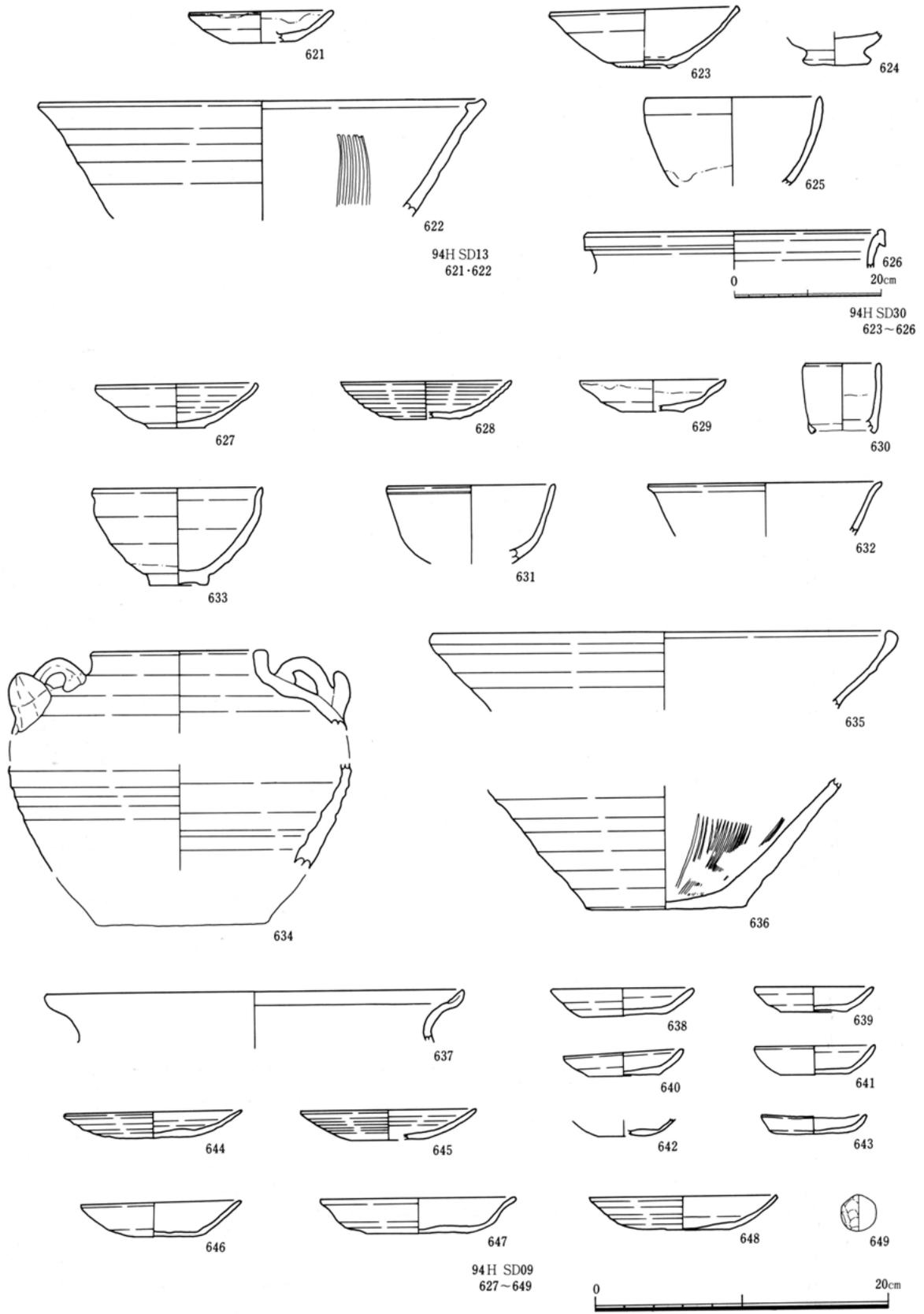


图66 中世Ⅲc~Ⅳ期土器实测图 (S=1/4)

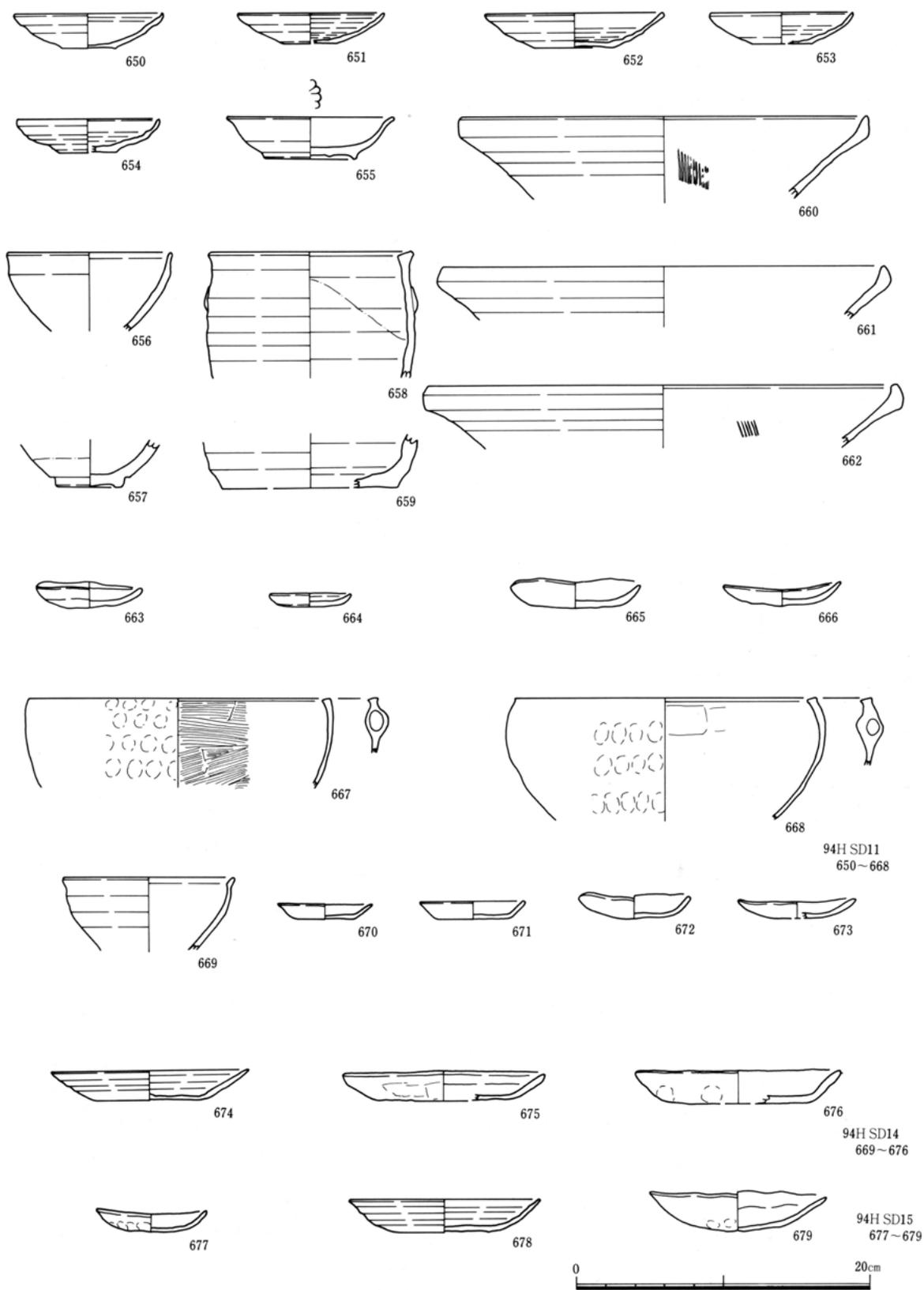


图67 中世Ⅳ期土器实测图(1) (S=1/4)

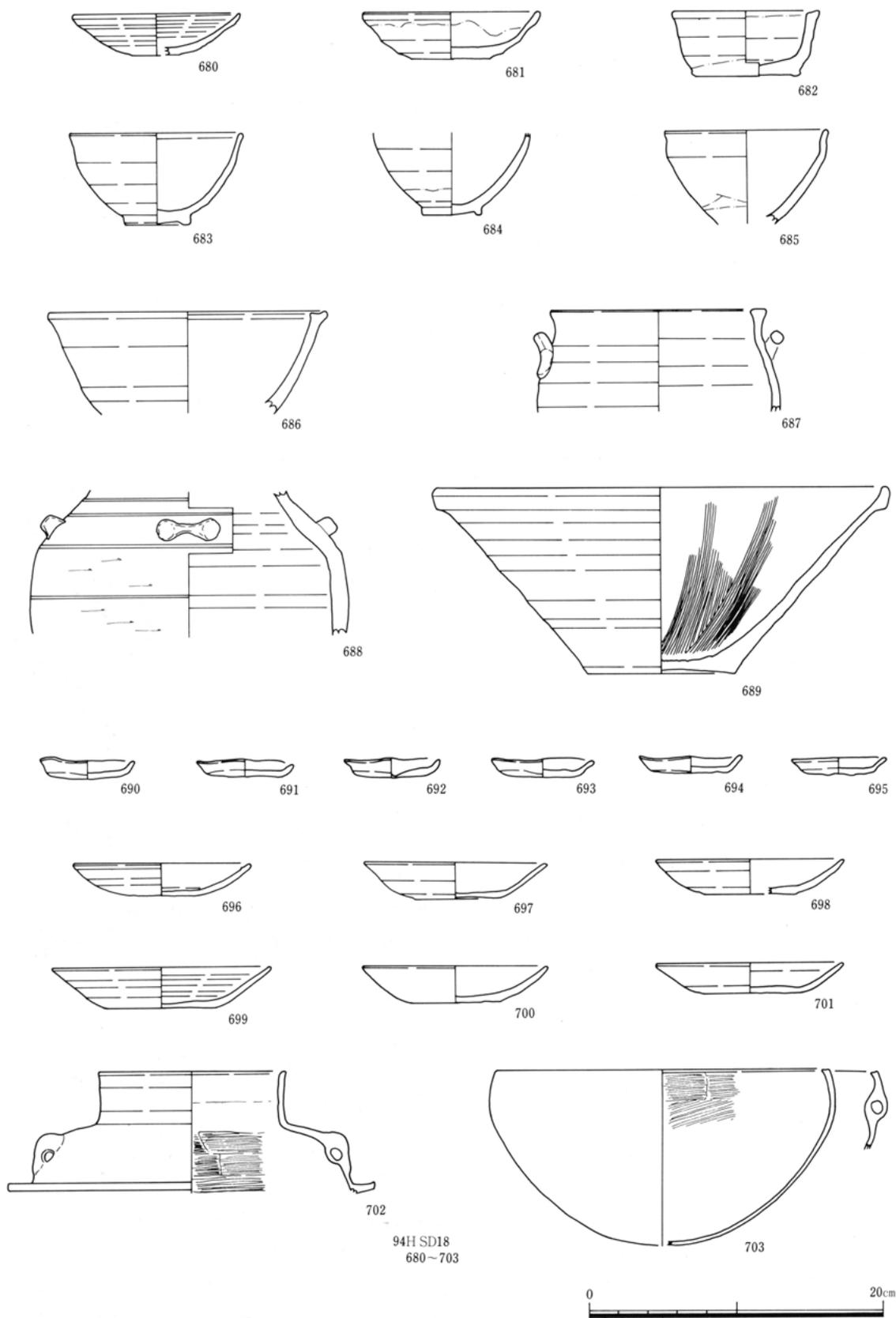


图68 中世Ⅳ期土器实测图(2) (S=1/4)

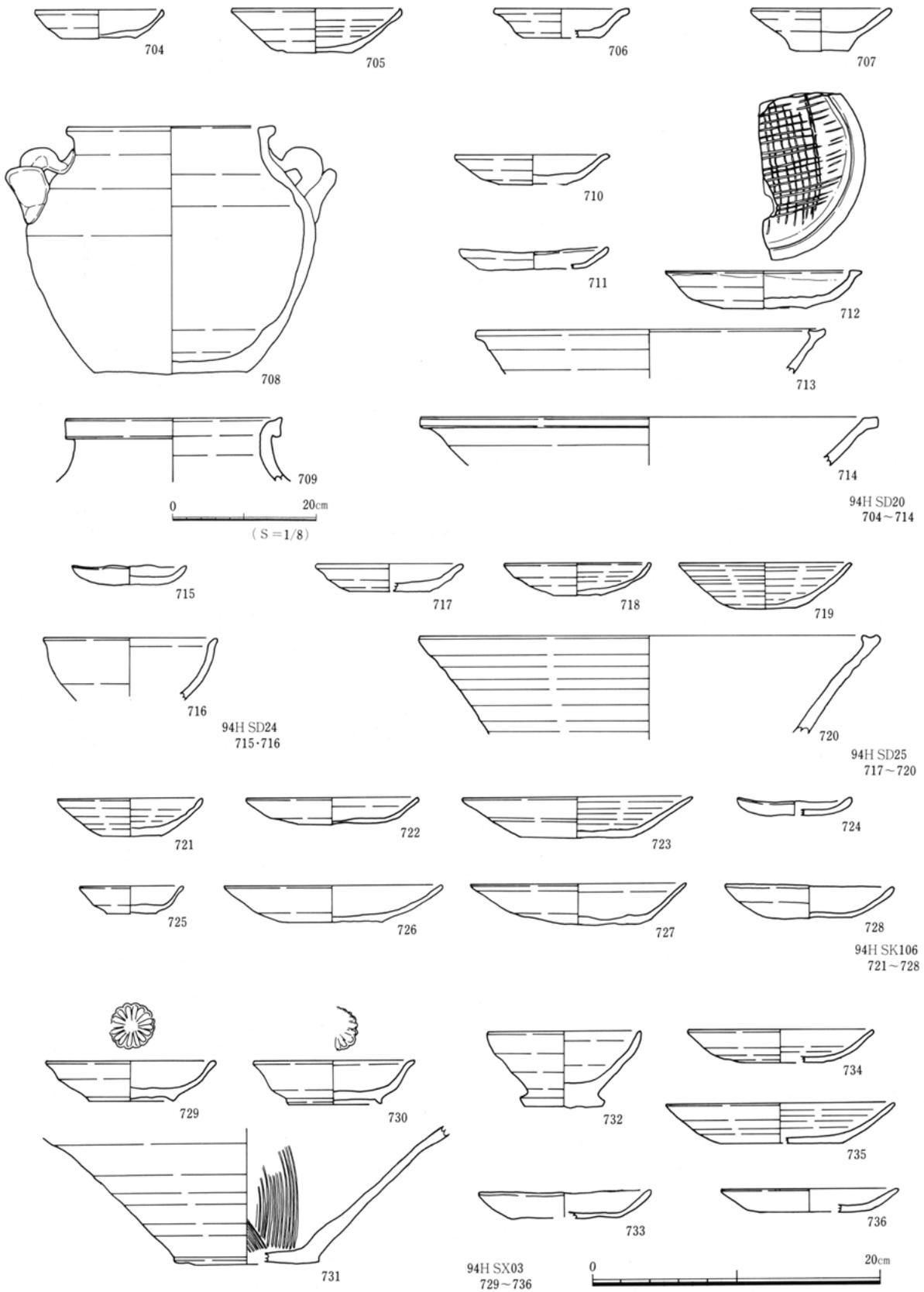


图69 中世Ⅳ期土器实测图(3) (S=1/4)

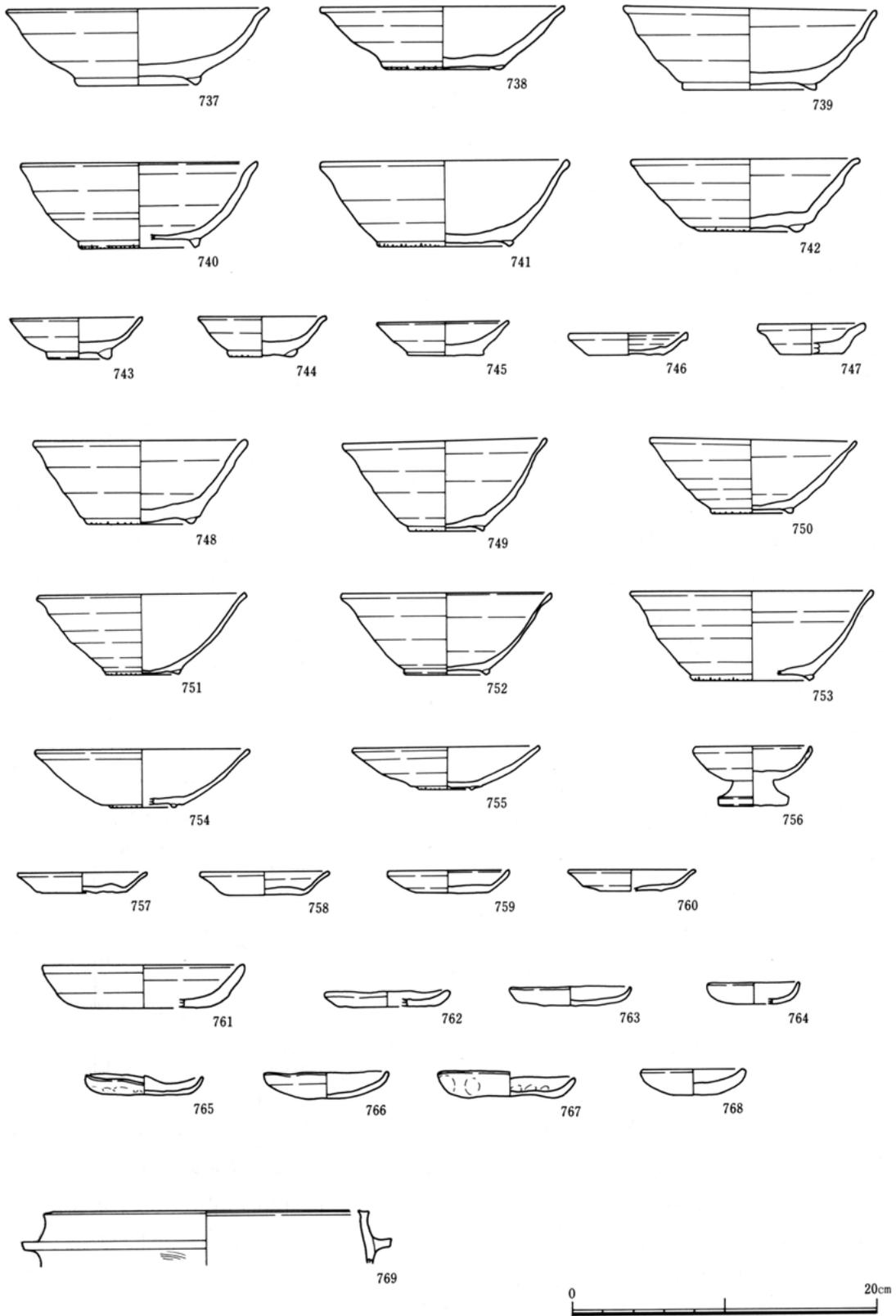


図70 遺構外出土の中世土器実測図 (S=1/4)

## 4.4 旧流路の土器

### 概要

旧流路の土器は3.3「旧流路」で示したように、Ⅰ～Ⅲ層の層序に分けられる。特にⅡ層はa～cに、Ⅲ層はa・b層にそれぞれ分層できる。遺物もおおよそ層序に合わせて進めていく。大毛沖遺跡の時期区分に合わせて次のようになる。Ⅰ層は古代Ⅲa期、Ⅱa層は古代Ⅲb～c期、Ⅱb層は古代Ⅲc期、Ⅱc層は古代Ⅳ期、Ⅲa層は中世0～Ⅰ期、Ⅲb層は中世Ⅱ～Ⅳ期となる。

#### 旧流路Ⅰ層（図71-770～776）

770～773は94GSX01出土資料。護岸施設の杭列などから出土している。774～776は護岸 94GSX01 施設上位堆積層出土資料。

#### 旧流路Ⅱa層（図71-777～798）

777～797は94C・D出土資料。782は土師器甕Aで完形品。791は底部外面に墨書がある。798は94GSX02出土資料。集石遺構で唯一時期を確認できる資料。集石遺構からはほかに 94GSX02 呪符状木簡が出土している。

#### 旧流路Ⅱb層（図72-799～828）

799～828は94C・D出土資料。木製鏡の出土した層位。799・800は高台付鉢。類例のない資料、胎土から美濃須衛系統の可能性もある。体部の施釉はハケ塗り。808～828は土師器甕D4、大毛沖遺跡の住居が認められない時期の資料。なお、隣接する大毛池田遺跡からは同時期の住居が確認されている。

#### 旧流路Ⅱc層（図73-829～858）

829～858は94C・D出土資料。837は底部内外面に「金」の墨書がある。838は底部外面に「大」の墨書がある。840は耳皿、大毛沖遺跡では数少ない器形。841～843は清郷型鍋。856～858は底部外面にいずれも「大田」の墨書がある。出土地点も集中しており、3点相互に関連性の高い資料。

#### 旧流路Ⅱ層（図74・75）

859～872は94C・D出土資料で、旧流路Ⅱ層の甕・長頸瓶。863は把手付長頸瓶。甕はそれぞれ1ヶ所に集中することなく、概して故意に破損させ流路に廃棄した状態を想起させる出土状況。859の須恵器甕は内外面に黄土によるハケ塗りが認められる。

#### 旧流路Ⅲa層（図76-873～893，図77-894～919）

873～919は94C・D出土資料。873は底部外面に「大」表記の墨書がある。912～914は白磁の碗。915は青白磁の皿、大毛沖遺跡では唯一の青白磁。916～919は土師器鍋鍋、916・919は伊勢型鍋A、917・918は伊勢型鍋B。

#### 旧流路Ⅲb層（図77-917・918，920～953）

920～946は94C・D出土資料。930は底部外面に「六田？」、931は底部外面に「×」表記の墨書がある。938・939は青磁。940・941は白磁。

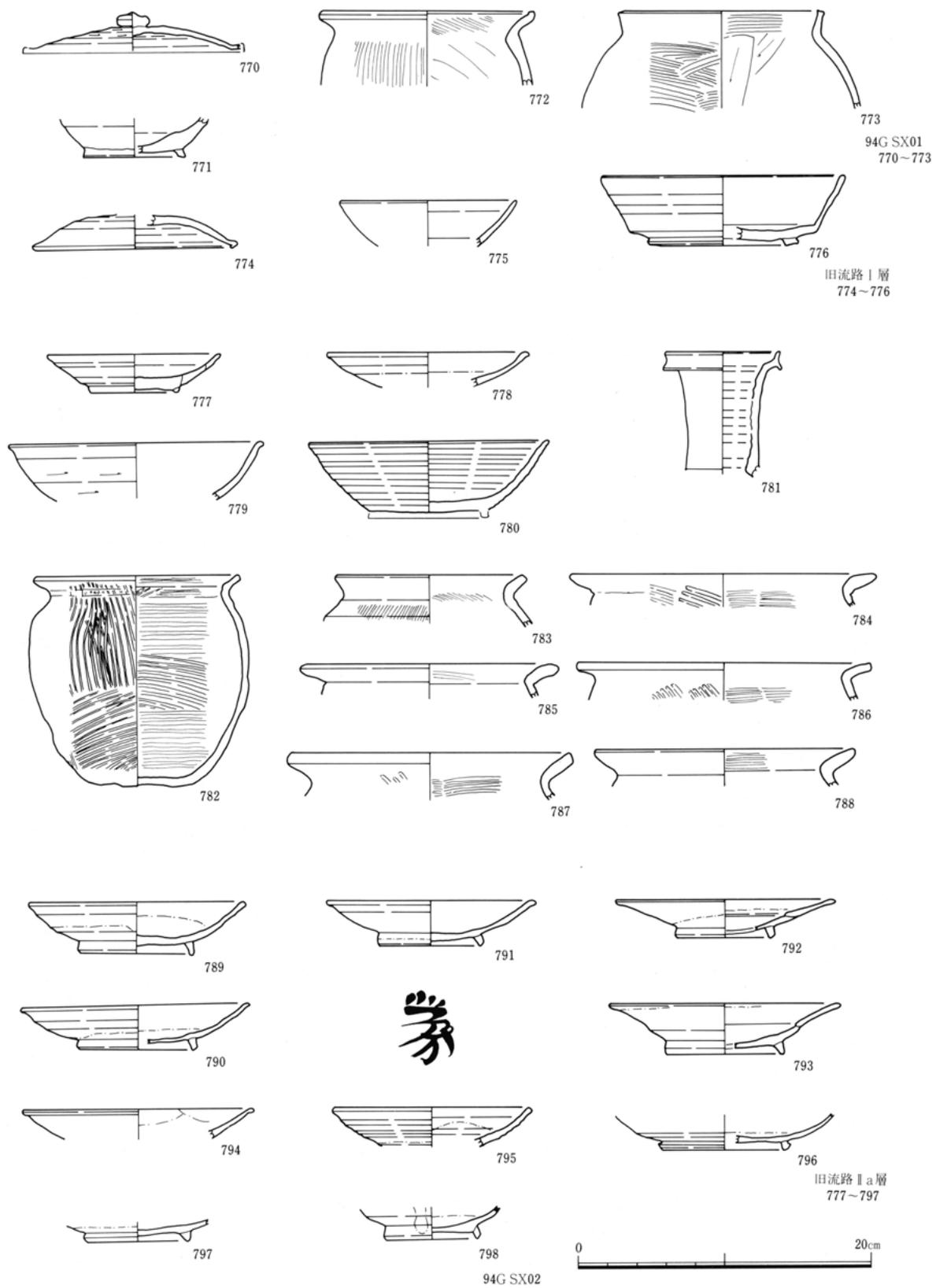


图71 田流路Ⅰ~Ⅱa層土器実測図 (S=1/4)

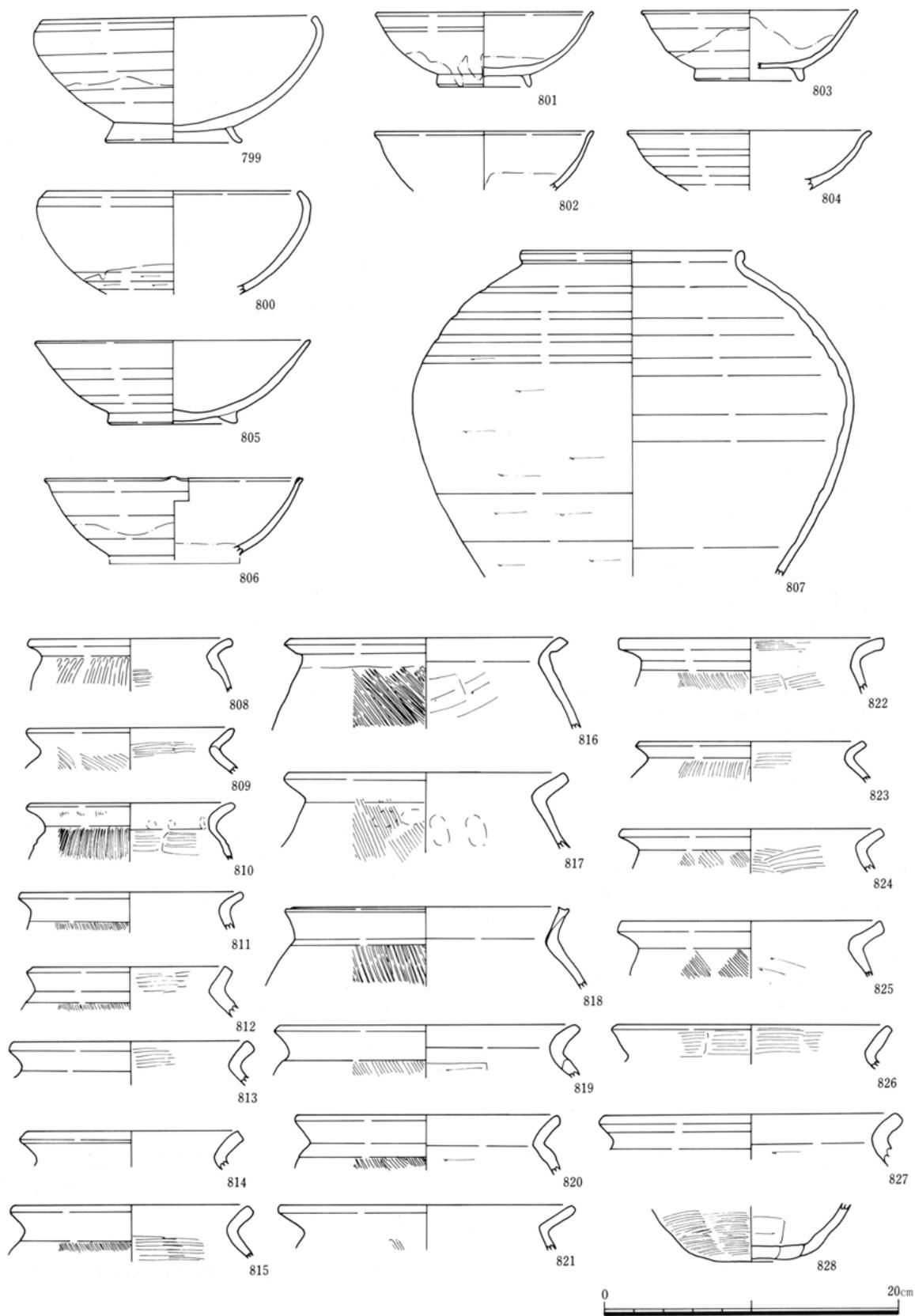


图72 旧流路Ⅱb層土器実測図 (S=1/4)

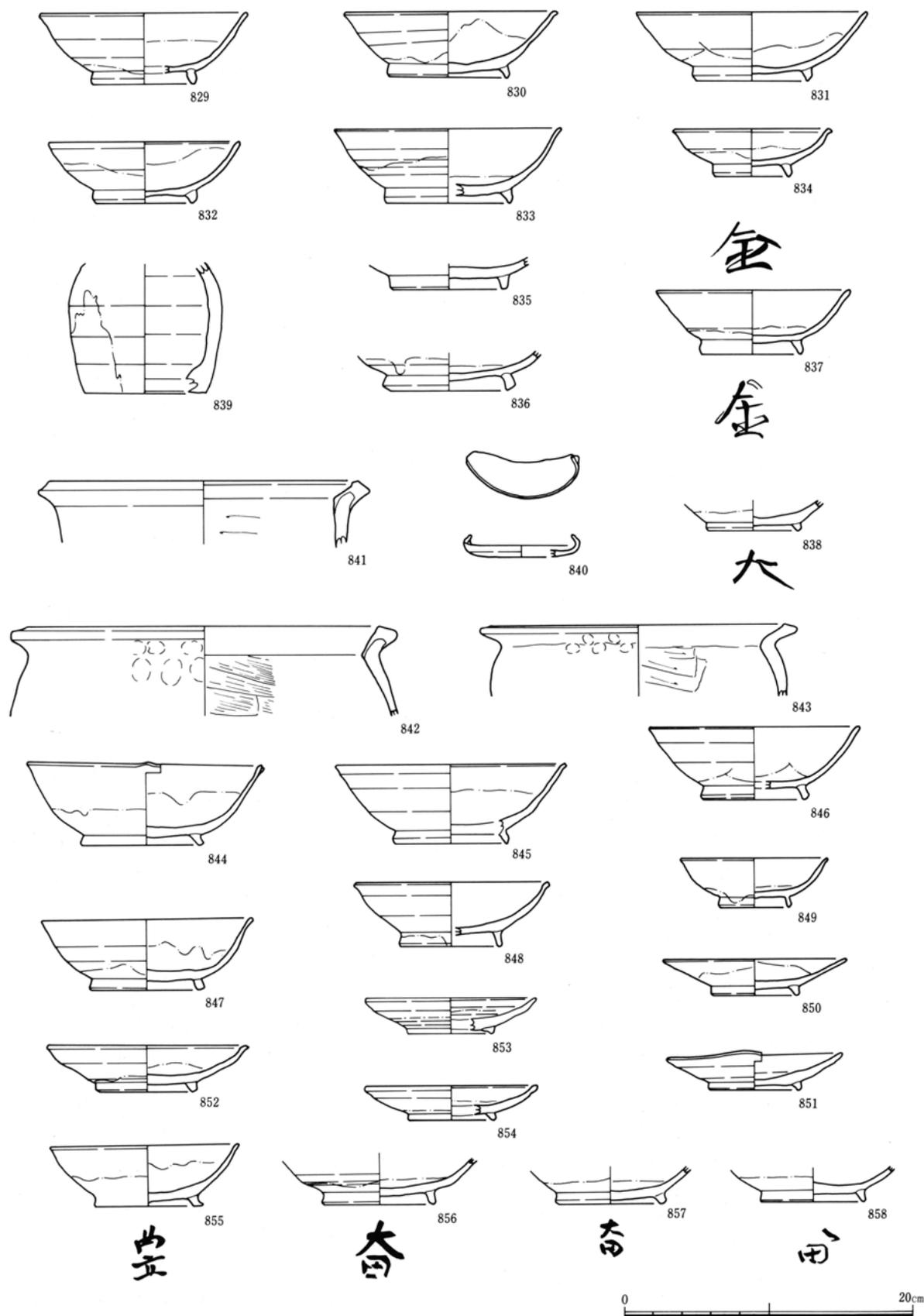


图73 旧流路Ⅱc層土器実測図 (S=1/4)

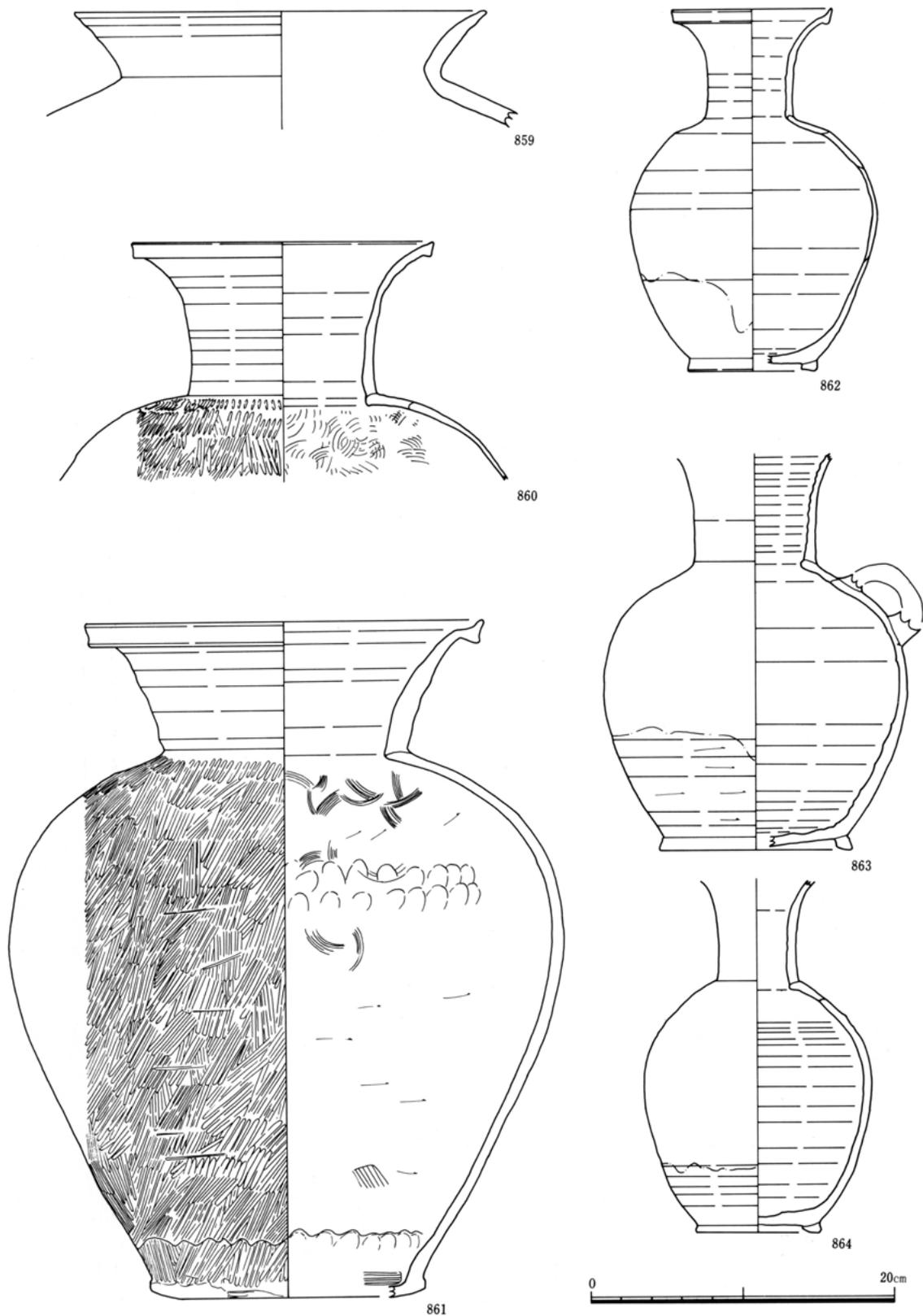


图74 旧流路Ⅱ層土器実測図(1) (S=1/4)

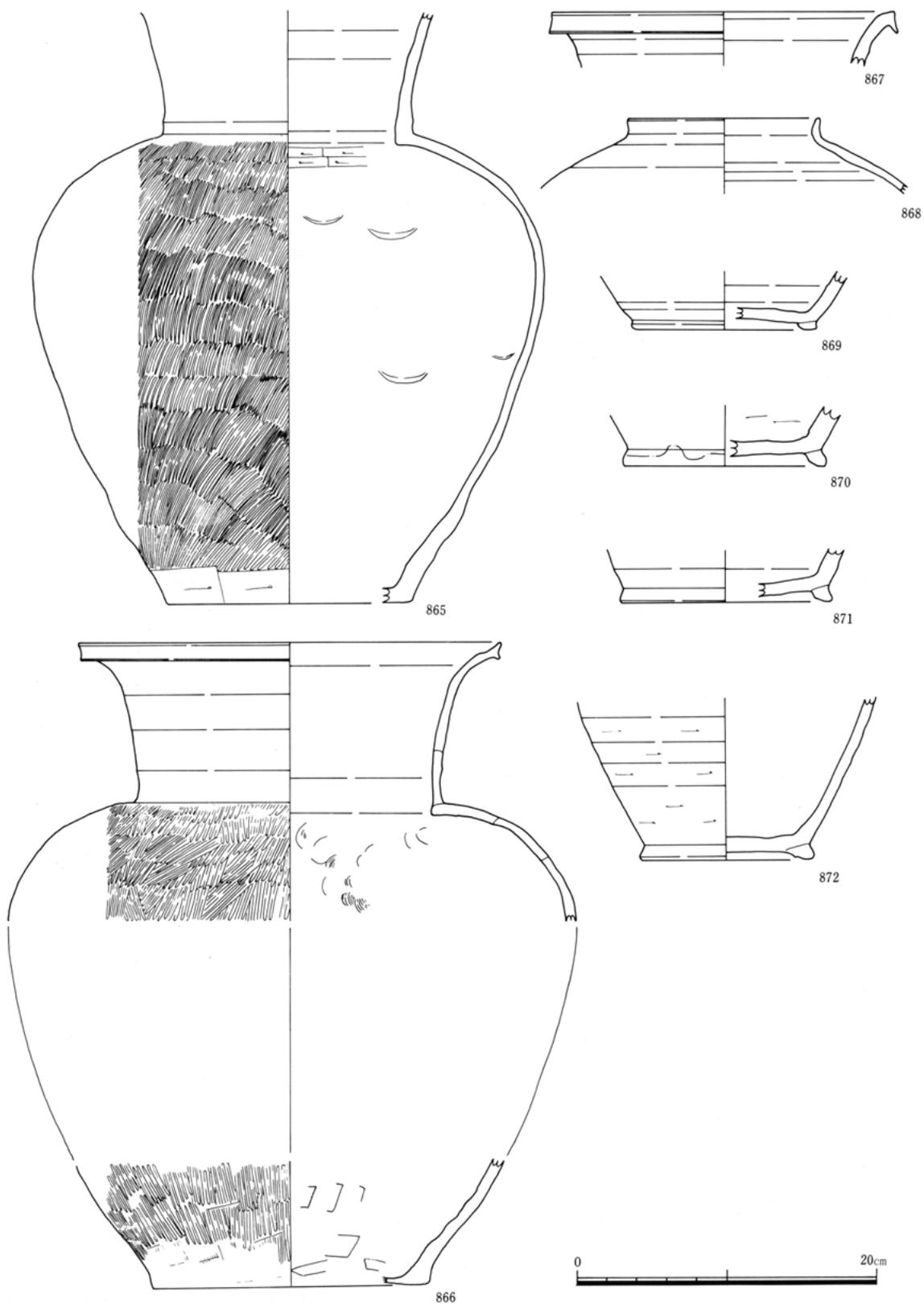


图75 旧流路Ⅱ層土器実測図(2) (S=1/4)

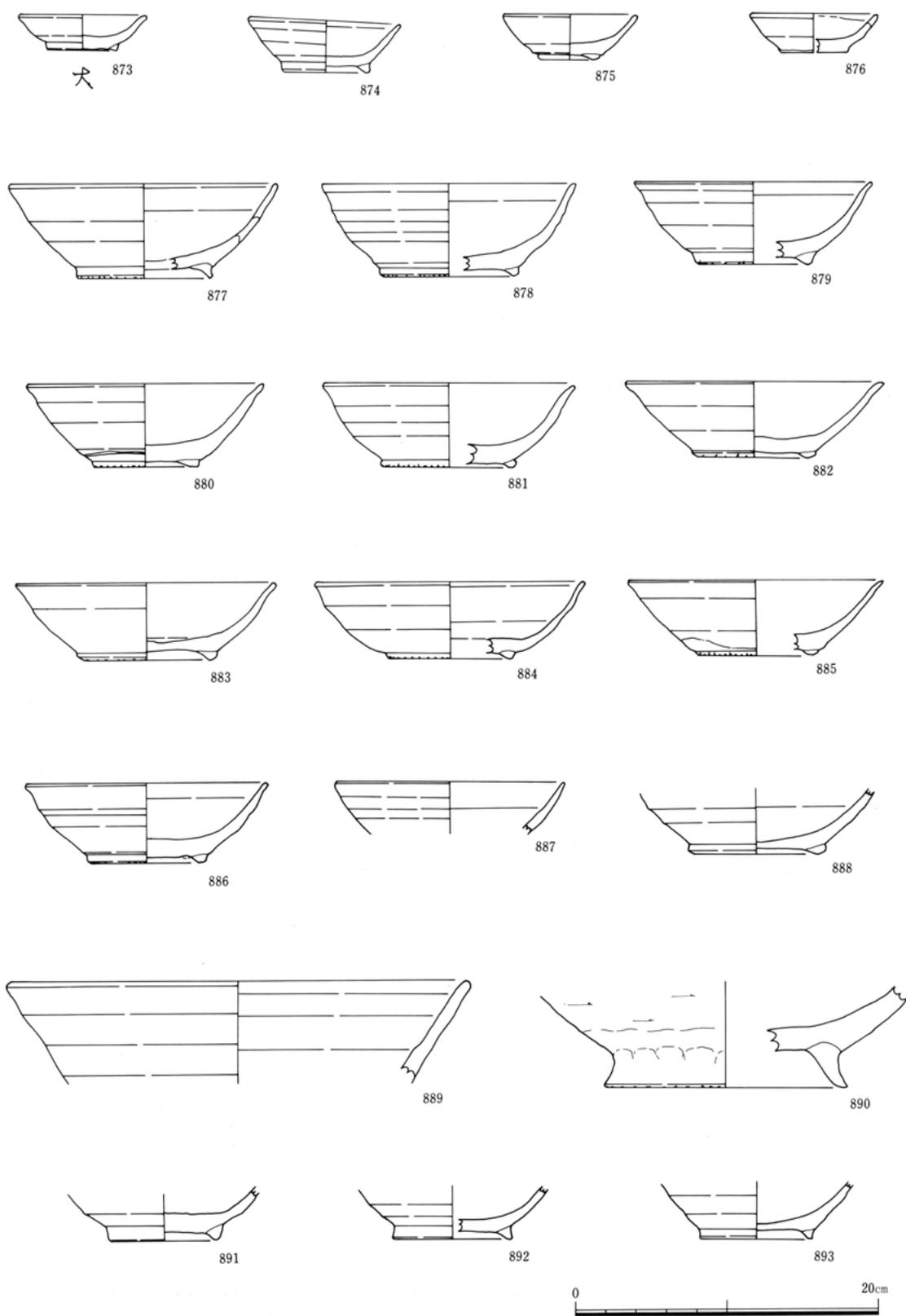


图76 旧流路Ⅲa層土器実測図(1) (S=1/4)

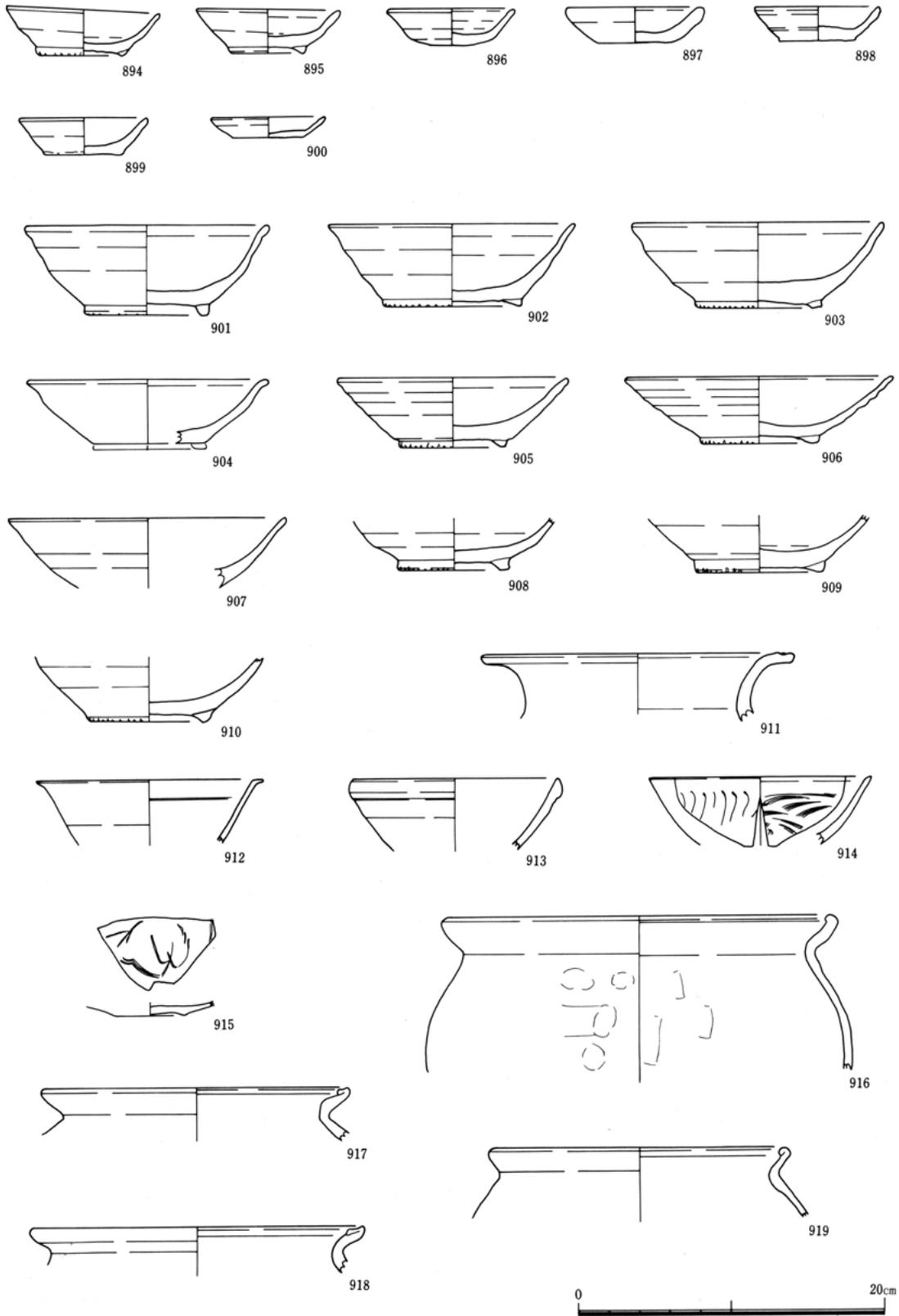


图77 旧流路Ⅲa層土器実測図(2) (S=1/4)

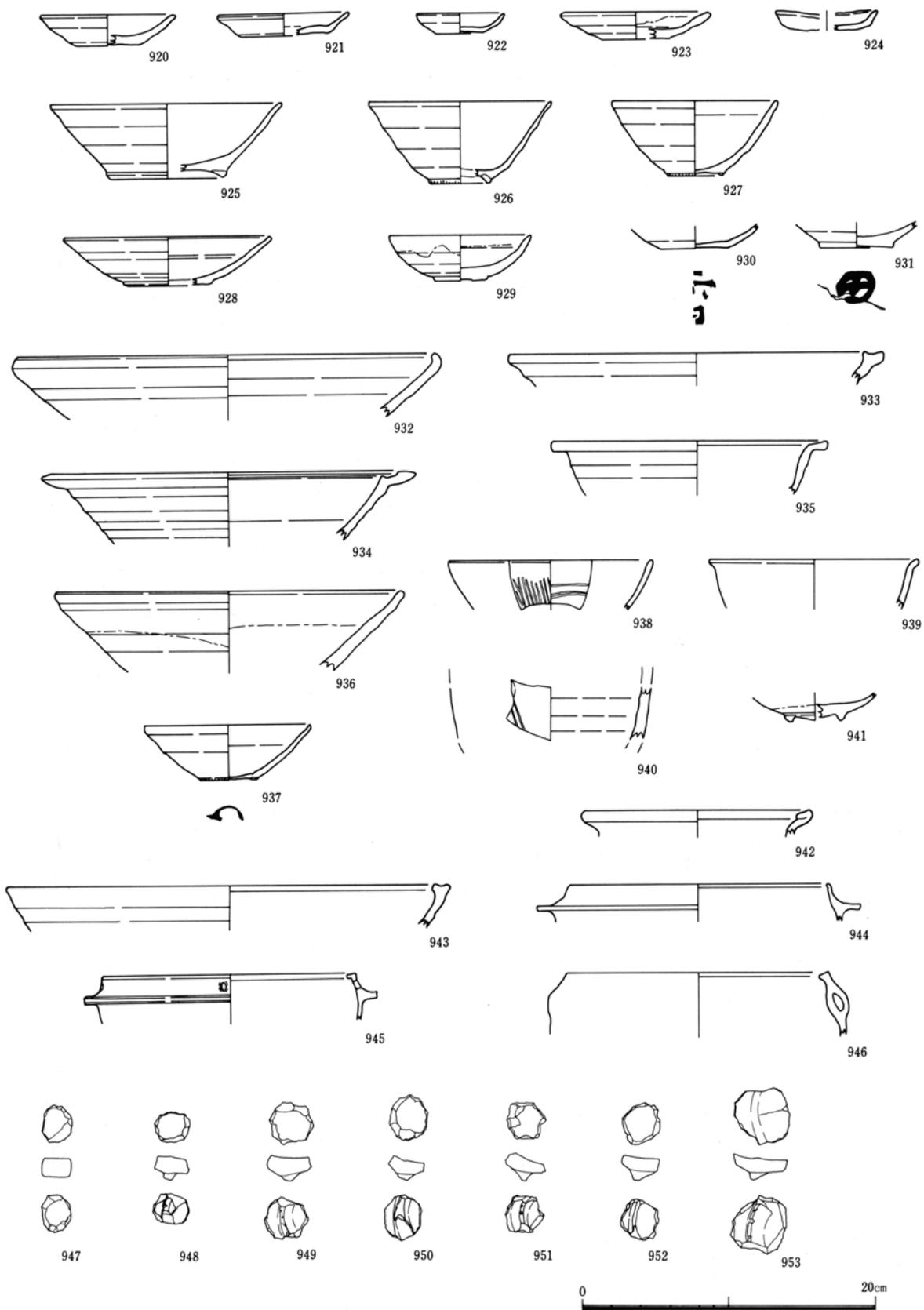


图78 旧流路Ⅲb层土器实测图 (S=1/4)

## 4.5 文字・記号表記資料

### 概要

文字表記は卒塔婆のほかはすべて土器。記号表記は呪符状木筒\*1のほかはすべて土器。その内判読可能なものに関しては、できる限り掲載した。時期に関しては、文字の普及率に呼応してか、中世の方が圧倒的に多い。特に中世Ⅱ～Ⅲ期の文字・記号表記の土器が大半を占める。出土地点に関しては、興味深い傾向がある。古代に関しては、古代Ⅲa期に所属する「公」表記の墨書土器が94 I SB04・05に各1点、包含層資料ではあるものの94Hから2点出土している。筆跡が類似する点、同時期という2点にこれらの資料の近似性を彷彿させる。中世に関しては、中世Ⅱa期に所属する「まつ」表記の墨書土器があげられる。いずれも灰釉系陶器皿に墨書が認められ、筆跡が酷似する。その他旧流路およびその周辺に集中する傾向がある。なんらかの河川祭祀にまつわる痕跡と思われる。

### 4.9.1 卒塔婆 (図79-954)

#### 卒塔婆

93ASX01出土資料。形状は圭頭でその下に切り欠きが2条入る。幅3.5cm、厚さ3mmを測る。「南無大□」と墨書表記が見られる。下部を欠損しているため、釈文の全容は明らかではないが、形状と表記内容から卒塔婆とした。また、文字表記はないものの、94Aから形状の類似した板状木製品がある (図97-1115)。

### 4.9.2 ヘラ記号・文字資料 (図79-955~958)

ヘラ書きのある土器はすべて古代の資料。その内訳は、1状のヘラ書きが4点、2条の並行線3点、「×」が3点、その他1点となる。

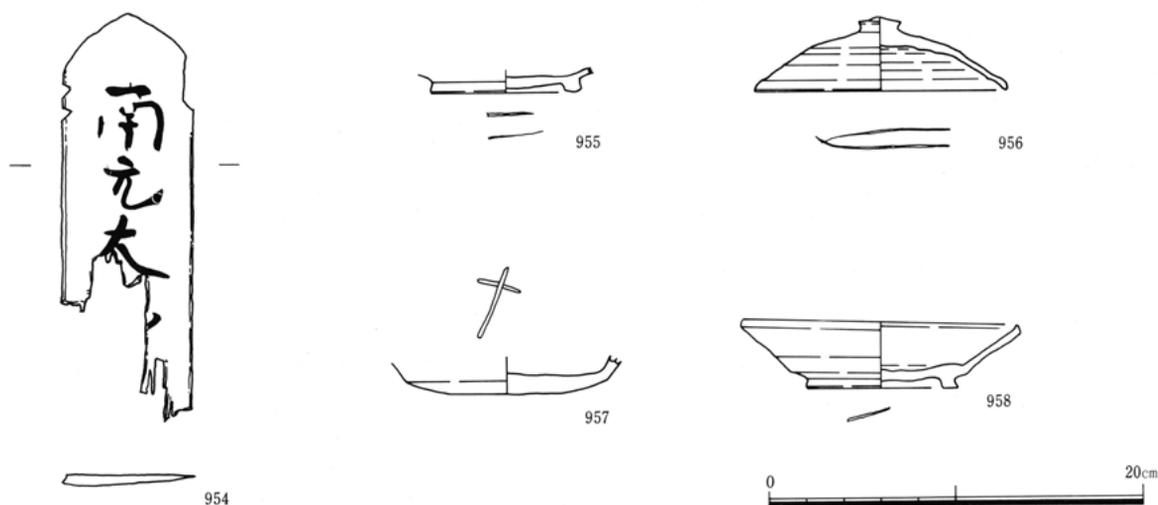


図79 卒塔婆・ヘラ記号土器実測図 (S=1/4)

\*1 呪符状木筒に関しては4.11「その他の遺物」で取り上げる。

### 4. 5. 3 墨書土器

大毛沖遺跡では、204点の墨書土器が出土した。そのうち灰釉系陶器が177点出土し、全体の87%を占める。器種としては灰釉系陶器の碗が最も多く、117点出土した。また、遺構に伴って出土した墨書土器は63点で、全体の31%にとどまる（表5, 6）。

墨書部位は底部外面が圧倒的に多く、全体の97%にのぼる。底部内面・外面の両面に墨書したものが2点出土したが、内訳は須恵器の盤と灰釉陶器の碗であり、時期的にも他の墨書土器に対してやや異質といえる。体部外面に墨書したものは、灰釉系陶器の碗がわずかに1点のみ出土した。

墨書の文字数は1字のみのものが主体を占める。またほとんどが小片で出土し、しかも墨痕が薄れているため、その判読は極めて困難なものが多い\*1。

古代はⅢ・Ⅳ期が中心となる。中世は178点確認でき、その内訳はⅠ期が約12%、Ⅱ期が約51%、Ⅲ期が約36%を占める。

墨書土器はⅠ～Ⅳの4つの区域で集中的に出土し、しかも同様の墨書内容のものが特定の区域で出土した。

この区域では遺跡全体を通じて最も多数の墨書土器が出土し、そのほとんどを中世Ⅱ・Ⅲ期の灰釉系陶器が占める。なかでもこの区域に特徴的な「の」と墨書したものが10点出土した（959～962ほか）。いずれも旧流路の右岸にこれと並行して走る、93D区のSD08との関わりが深い。灰釉系陶器の碗や小皿の底部外面に墨書されており、「の」・「ぬ」・「ぬ」の3つのパターンが認められた。このことはそれぞれにまとまりをもった、人間集団の存在をうかがわせる。「の」という語の意味については、「の」に始まる人名・地名等を省略したものと思われる。このほか、「悦」（963ほか）及び花押風の墨書（965・966）もこの区域に集中した。いずれも「の」と同時代の灰釉系陶器で旧流路及び93D区のSD02との関わりが深い。「悦」の筆跡はいずれも酷似しており、細い筆で筆運びもなめらかな草書体となっている。花押風の墨書は4点とも異なる内容で、いずれも小片のため全体をとらえることはできないが、その筆運びにはたどたどしさが感じられる。大毛地域における領域支配の問題との関連で興味深い。

この区域に特有な墨書内容としては、「大田」をあげることができる（856～858）。「大田」については農耕儀礼との関わりがしばしば指摘されるが、本遺跡ではこの区域から3点出土し、すべて虎溪山1号窯式の灰釉陶器の底部外面に墨書されている。出土地点はいずれも旧流路の左岸域。これらの墨書がなされた時期は、その出土層位からも10世紀と想定できる。これと同じ層位では、近接した地点で馬の下顎骨が2点出土している。さら

\*1 墨書の判読については、下村信博氏（名古屋市博物館）のご教示を得た。

に、やや上流部においても束状の藁と馬の頭部と思われる骨が出土しており、旧流路の周辺において何らかの祭祀が行われたことを物語るものと思われる。

この他に特徴的なものとして、「金」と墨書した灰釉陶器の椀が2点出土した(837・967)。このうち1点は底部の内面と外面に墨書が見られ、食膳用以外の目的で使用された可能性がある。「金」の意味としては人名もしくはその省略形、または吉祥句的な性格も考えられる。

**集中区域Ⅲ** この地域では須恵器の杯の底部や体部の外面、同じく須恵器の皿の底部外面や底部内外両面に「公」という文字が見られる墨書土器が4点出土した(147・154・968・969)。これらの須恵器は美濃須衛老洞窯段階のもので、筆跡も類似している。出土地点は94H区SK123、94H区、及び94I区のSB04.05。また、皿の底部外面に「首」と墨書した虎溪山1号窯式の灰釉陶器も出土した(970)。特にこの「首」は、際立って端正な楷書で美しい筆跡。「公」・「首」ともに官衙との関わりを匂わせるが、人名もしくはその一部という可能性もある。この区域の墨書土器は先に述べた6点を除くと中世Ⅲ期以降の灰釉系陶器がほとんどを占め、主に「上」・「十」等の墨書が見られる(971・977ほか)。本遺跡の北西に隣接する大毛池田遺跡では「美濃国」施印須恵器が出土し、さらに15世紀～16世紀の大規模な区画溝を検出している。古代及び中世におけるこの区域については、大毛池田遺跡との関係にも留意する必要がある。

**集中区域Ⅳ** この区域の墨書土器は、93A区のSX01に集中して出土した。ここで特徴的な墨書は灰釉系陶器の小皿に見られた「まつ」という墨書(581)で、このSX01から南西に約100m離れた94C区のSK58でも、同一人物の筆跡と思われる「まつ」という墨書をもつ同様の小皿が出土した。人名もしくはその省略形と思われるが、地域的なつながりをうかがわせる。

**その他** I～Ⅳの区域に限定されず、遺跡全体をとおして出土している墨書内容として、「十」をはじめとする数字や、「○」をはじめとする記号が見られる。日常生活において、または祭祀・儀礼にさいして、他と識別することを意図したものであろう。さらに「大」という墨書が灰釉及び灰釉系陶器に見られ、やはり遺跡全体をとおして出土している。吉祥句または地名にちなむ語である可能性がある。

**まとめ** 古代においては、「公」・「首」の文字を墨書した須恵器や灰釉陶器が出土したⅢの区域に、官衙との関係を有する空間が存在した可能性がある。古代末期から中世にかけては「大田」・「金」・「まつ」・「大」及び「の」・「悦」等の文字や「○」等の記号を墨書した灰釉陶器や灰釉系陶器が出土したI・Ⅱ・Ⅳの区域に、農耕色の濃い生活空間を想定できる。さらに中世後半になると、花押風の墨書を多く出土した旧流路右岸域に支配階層的な集団の居住空間が存在した可能性がある。

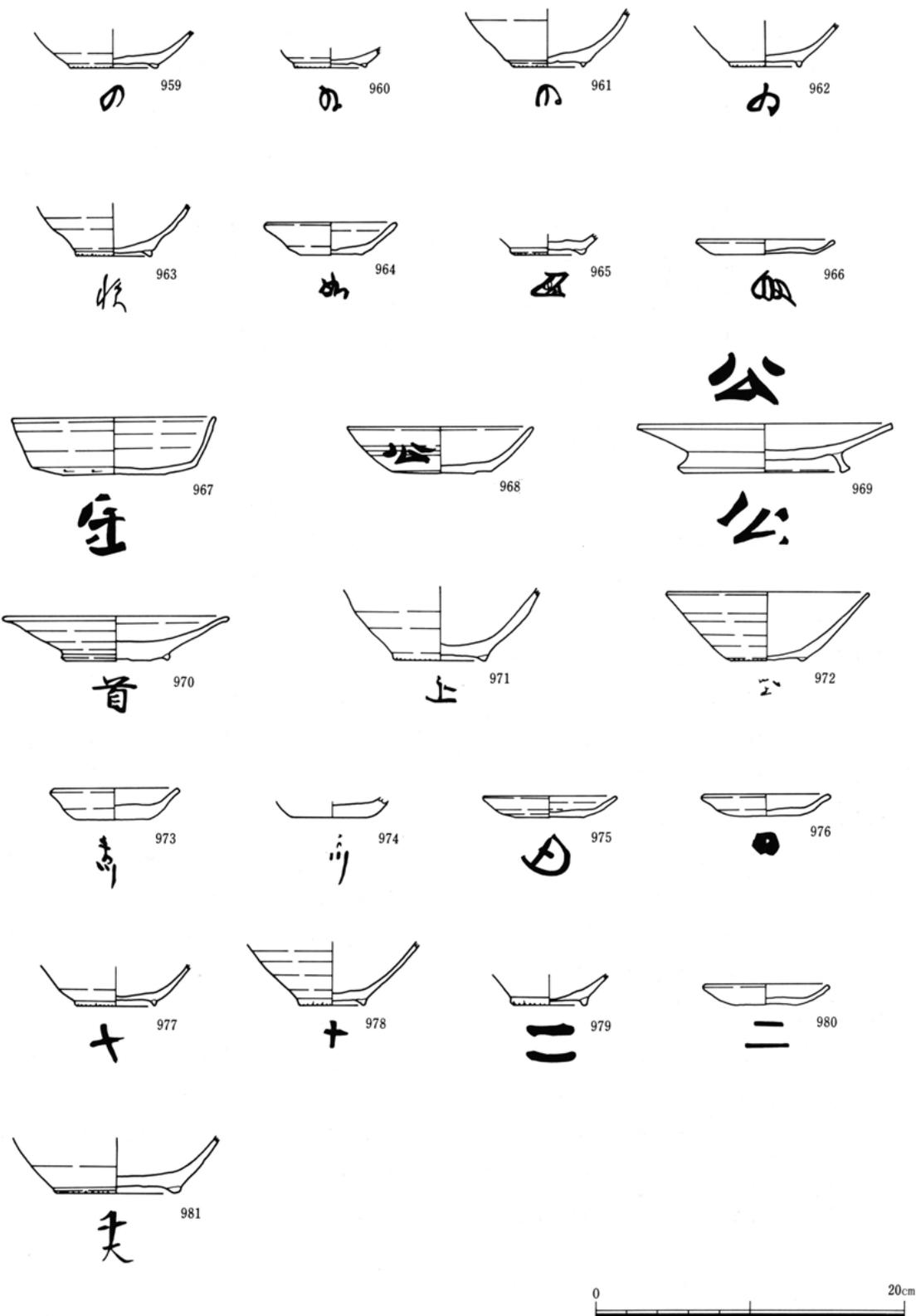


图80 墨書土器実測図 (S=1/4)

調査区	グリッド	遺構	文字	器種	時期	調査部位	登録番号	写真	
1	94H	ⅢG13q	SK123	公?	須意 皿	古代Ⅱ期	底部外面		
2	93F	ⅣH8g	SD08	公	須意 杯	古代Ⅱ~Ⅲ期	底部内面	E-170	
3	94H	ⅢG15o	検出	須意 杯	古代Ⅲa期	底部外面	E-967	107	
4	94H	ⅢG14q	検出	須意 杯	古代Ⅲa期	底部外面	E-968		
5	94H	ⅢH17a	NR01	公	須意 盤	古代Ⅲa期	底部内外面	E-969	106
6	94I	ⅣG18c	SB04	公	須意 杯	古代Ⅲb期	底部外面	E-147	
7	94I	ⅣG15c	SB05	公	須意 杯	古代Ⅲb期	底部外面	E-154	
8	94C	VG14i	SK21	?	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面		
9	94D	VG7i	NR01	?	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面		
10	94D	VG9h・i・10i	NR01	?	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面		
11	94D	VG9h・i・10i	NR01	?	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面		
12	94C	VG18e	検出	?	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面	E-2090	
13	94D	VG10i	検出	□万	須意 杯	古代Ⅲc期	底部外面	E-791	
14	93C	検出	四?	須意 杯	古代Ⅲ期	底部外面	E-2010		
15	94C	VG18e	NR01	?	須意 杯	古代Ⅳa期	底部外面		
16	94D	VG11l	検出	金?	須意 杯	古代Ⅳa期	底部内外面		
17	94F	VH17c	検出	?	須意 杯	古代Ⅳa期	底部外面		
18	94H	ⅢG14q	検出	首	須意 杯	古代Ⅳa期	底部外面	E-970	105
19	94D	VG7m	検出	□	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面		
20	94D	VG11h	検出	金?	須意 杯	古代Ⅳb期	底部内外面	E-837	
21	94D	VG10m	検出	大?	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面	E-838	
22	94C	VG15f	NR01	□	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面	E-854	
23	94C	VG13k	検出	大田	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面	E-855	
24	94C	VG13l	検出	大田	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面	E-857	
25	94D	VG7o	検出	大田?	須意 杯	古代Ⅳb期	底部外面	E-858	
26	93F	ⅣH6g	SD13	上□?	須意 杯	古代Ⅳ期	底部外面	E-2017	
27	94D	VG9h	検出	?	須意 杯	中世0期	底部内外面		
28	93C	ⅣH9i	検出	正□	須意 杯	中世Ⅰa期	底部外面		
29	94F	(南部分)	検出	大	須意 杯	中世Ⅰa期	底部外面	E-873	
30	94D	VG8n	検出	大	須意 杯	中世Ⅰa期	底部外面	E-355	
31	93A	VH6l	SK06	大	須意 杯	中世Ⅰa期	底部外面		
32	94C	VG17・18c	SK12	大?	須意 杯	中世Ⅰb期	底部外面		
33	94D	VG7o	検出	?	須意 杯	中世Ⅰb期	底部外面		
34	93D	ⅣH2j	検出	めつ?	須意 杯	中世Ⅰb期	底部外面	E-964	
35	94C	VG1p	SK55	上大□	須意 杯	中世Ⅰb期	底部外面	E-981	
36	93A	VH5n	SX01下層	□	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
37	93A	VH5n	SX01下層	□	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
38	93D	ⅣH2c・d	検出	□	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
39	93D	ⅣH3・4h	検出	□	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
40	94D	VG10n	検出	?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
41	94F	(南部分)	検出	?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
42	94F	VG18t	検出	?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
43	94H	ⅢG18r	SD32	?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面		
44	94C	VG15j	検出	大□?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面	E-2447	
45	94H	ⅢG14o	SE01	十?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面	E-977	
46	93C	ⅣH17l	SK06	十?	須意 杯	中世Ⅰc期	底部外面	E-531	
47	93A	VH5n	SX01	□	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
48	93A	VH5o~p	SK02	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
49	93A	VH5o~q	SX01	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
50	93A	VH6l・m	SK06	一?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
51	93D	検出		も	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
52	93D	ⅣH1・2・3g	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
53	93D	ⅣH1・2・3l	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
54	93D	ⅣH2h	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
55	93D	ⅣH3d	SD08下層	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
56	93D	ⅣH5k	検出	十?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
57	93D	ⅣH5k	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
58	93D	ⅣH6・7k	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
59	93G	VG1c	SE04	□?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
60	94C	VG17c	検出	十	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
61	94D	VG8g	検出	三or川	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
62	94D	VG9p	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
63	94E	VG11e	SD05	□?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
64	94F	(南部分)	検出	○?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
65	94F	VG13t	検出	○?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
66	94F	VH16b	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
67	94H	検出		?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
68	94H	ⅢH19g	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
69	94H	ⅢH19i・j	検出	=?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
70	94H	ⅢH20g	SD41	-?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
71	94H	ⅢG9n	SD07	上?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
72	94I	ⅣG12e	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
73	94I	ⅣG16f	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
74	94H	ⅢG9o	検出	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面		
75	94F	VH17e	検出	□?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-2442	
76	94C	VG2o	SK58	まツ	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-965	111
77	93C	ⅣH15p	検出	まツ	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-973	109
78	94I	ⅣG15g	SD06	ニ	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-974	
79	94H	ⅢG9n	SD07	上?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-980	
80	93C	ⅣH17l	SK06	?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-420	
81	93C	ⅣH17l	SK06	万?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-530	
82	93A	VH5n	SX01	ま?	須意 杯	中世Ⅱa期	底部外面	E-541	
83	93A	VH4o	SX01	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面	E-581	108
84	93A	VH4q	検出	□?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
85	93A	VH5n	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部内面		
86	93A	VH5n	SK53	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
87	93A	VH5n	SX01下層	□	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
88	93A	VH5n	SX01下層	□	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
89	93A	VH8m	検出	□	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
90	93B	ⅣH12t	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
91	93C	ⅣH15m	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
92	93C	ⅣH17l	SK06	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
93	93D	検出		悦?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
94	93D	ⅣH1・2・3g	検出	悦?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
95	93D	ⅣH1・2・3j	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
96	93D	ⅣH2e	検出	れ	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
97	93D	ⅣH2e	検出	□	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
98	93D	ⅣH2e	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
99	93D	ⅣH3d	検出	の?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
100	93D	ⅣH3i	検出	□	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
101	93D	ⅣH5d	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		
102	93D	ⅣH5e	検出	?	須意 杯	中世Ⅱb期	底部外面		

表5 墨書土器一覧表(1)

調査区	グリッド	遺構	文字	器種	時期	調査部位	登録番号	写真
103	93D	IVH5i	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
104	93D	IVH6h	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
105	93D	IVH6h	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
106	94D	VG11g	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
107	94D	VG8i	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
108	94F	IVH17b	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
109	94C	IVH8n	SK06	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
110	94H		検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
111	94H		検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
112	94H		検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
113	94H		検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
114	94H	ⅢH20g	SD41	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
115	94H	ⅢH20g	SE08	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
116	94H	ⅢG14c	SE01下層	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
117	94H	ⅢG14c	SE01下層	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
118	94I	IVG12g	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
119	94I	IVG12i	SE02	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
120	95A	ⅢG4i	SD01	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面		
121	94H	ⅢG14p	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-2441	
122	93A	VH4q	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-2443	
123	93D	IVH3e	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-2444	
124	93D	IVH5・6・7h	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-2445	
125	94I	IVG12g	SK12	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-2448	
126	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-962	114
127	93D	IVH1・2・3n	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-963	110
128	93D	IVH4l	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-971	
129	93A	VH13p	検出	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-979	
130	93C	IVH16m	SK05	反軸系小皿	中世Ⅱb期	底部外面	E-541	
131	93A	VH13c	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
132	93B	IVH9s	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
133	93D	IVH1・2・3i	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
134	93D	IVH1・2k	SD04	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
135	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
136	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
137	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
138	93D	IVH2h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
139	93D	IVH3h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
140	93D	IVH3o・p	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
141	93D	IVH6h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
142	93D	IVH6i	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
143	94F	VH17d	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
144	94H	ⅢG14p	SK145	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
145	94H	ⅢG9k	SX01	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
146	94H	ⅢG9n	SE02	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
147	94I	IVG12i	SE02	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
148	94I	IVG15g	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
149	94I	IVG15g	SD06	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
150	93D	IVH1h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-2446	
151	93B	IV11o・11a	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-959	113
152	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-961	
153	94F	VH16c	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-975	
154	93D	IVH6e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-976	
155	93A	VH5n	SX01	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面	E-580	
156	93A	VH9o	検出	反軸系小皿	中世Ⅲa期	底部外面		
157	93D	IVH2c・d	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
158	93D	IVH2c・d	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
159	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
160	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
161	93D	IVH2r	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
162	93D	IVH4e・f	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
163	93D	IVH6e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
164	93D	IVH6g	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
165	93D	IVH6g	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
166	93D	IVH6h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
167	94I	IVG12i	SE02	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面		
168	93D	IV11b	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-2449	
169	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-960	
170	93D	IVH3i	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-966	112
171	93D	IVH1f	検出	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-978	
172	94D	VG8i	NR01	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-937	
173	94H	ⅢH20f	SE07	反軸系小皿	中世Ⅲb期	底部外面	E-607	
174	93B	IV11b	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
175	93B	IV18a・b	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
176	93D	IVH1・2・3i	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
177	94D	VG5j	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
178	94D	VG8h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
179	94D	VG8h	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
180	94D	VG9・10i	SK12	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
181	94F	(南部分)	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
182	94C	IVH7o	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
183	94I		検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
184	94I	IVF15n	SD02	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面		
185	93D	IVH2g	SD02	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面	E-972	
186	94C	VG13d	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面	E-931	
187	94F	VH17a・b	検出	反軸系小皿	中世Ⅲc期	底部外面	E-755	
188	94F	VG18・19s	SK06	反軸系小皿	中世Ⅳa期	底部外面		
189	94D	VG8h	検出	反軸系小皿	中世Ⅳa期	底部外面	E-930	
190	93A	VH9l	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
191	93D	IVH2e	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
192	93D	IVH2f	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
193	93D	IVH2h	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
194	93D	IVH2r	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
195	93D	IVH3f	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
196	93D	IVH4f	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
197	94C	VG16e	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
198	94D	VG7i	検出	白磁 検	(不明)	底部外面		
199	94F	VG19t	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
200	94F	VH15d	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
201	94F	VH16d	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
202	94H		検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
203	94H	ⅢH20g	検出	反軸系小皿	(不明)	底部外面		
204	94H	ⅢG9n	SE03	反軸系小皿	(不明)	底部外面		

表6 墨書土器一覽表(2)

## 4.6 貿易陶磁器

大毛沖遺跡から出土した貿易陶磁器は総数357点、その内訳は青磁263点、白磁110点、青白磁2点となる(図82)。ほとんどが小片だが可能なものについては従来の研究\*1に基づいて分類した\*2。

**白磁** 口縁部を玉縁にする太宰府編年Ⅳ類の碗(357・402)。口縁部を外反させる(982)、胴部内面に櫛描きで花紋を描く太宰府編年Ⅴ類の碗(983)。口縁部に釉のかからないいわゆる口禿の太宰府編年Ⅵ類の碗(588)・皿がある。984は12世紀代の皿。他に12世紀から13世紀と思われる瓶(950)がある。

**青磁** 同安窯系と龍泉窯系がある。同安窯系青磁は外面に櫛描きし台形状の厚い高台の碗(986)、内面にジグザグ紋様を有する皿(987)がある。龍泉窯系青磁は体部内面に劃花紋や草花紋を描く碗(990・991・992)、外面体部に蓮弁の紋様を有する蓮弁文碗(994)、口縁部が外反する碗(995)がある。997は12世紀から13世紀前半の小碗。他に杯・盤・16世紀代の香炉(630)などがある。

**青白磁** 915は内面に劃花紋が描かれている12世紀代の皿。

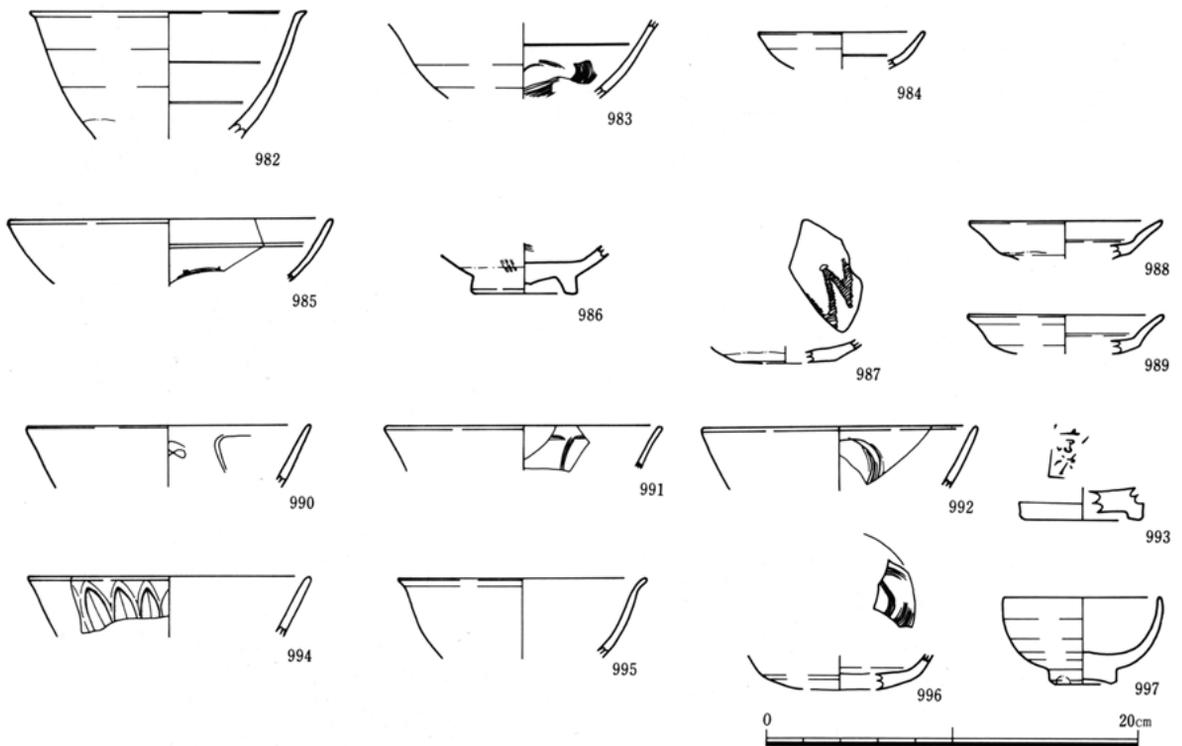


図81 貿易陶磁器実測図 (S=1/4)

\*1 分類については、横田堅次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』1978、上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2号1982を参考とした。

\*2 時期・分類・産地などについては森 達也氏(愛知県陶磁資料館)にご教示を得た。

登録番号	調査区	遺構	種類	器種	分類	口径	器高	底径	時期	備考	図版	写真
E-357	93A	SK06	白磁	碗	大宰府編年IV類	14.0	(5.6)	-	中世I期		55	117
E-402	93G	SE05	白磁	碗	大宰府編年IV類	15.4	(4.6)	-	中世Ic~IIa期		57	
E-403	93G	SE05	白磁	碗	大宰府編年IV類	12.6	(2.4)	-	中世Ic~IIa期		57	
E-404	93G	SE05	白磁	碗	大宰府編年IV類	-	(2.4)	-	中世Ic~IIa期		57	
E-405	93G	SE05	白磁	碗	大宰府編年IV類	-	(2.4)	-	中世Ic~IIa期		57	
E-424	94H	SD07	白磁	碗	大宰府編年V類	-	(3.0)	6.4	中世Ic~IIa期	福建~広東産	58	117
E-442	94H	SE03	青磁	皿	同安窯系	9.6	(2.4)	-	中世IIa期		59	
E-478	93A	SK53	青磁	碗	龍泉窯系B類	15.2	(2.0)	-	中世IIb期		60	
E-523	94I	SD08	青磁	碗		9.0	(2.8)	-	中世IIb期		61	
E-588	93A	SX01	白磁	碗	大宰府編年IX類	14.6	(2.0)	-	中世II期		64	
E-589	93A	SX01下層	青磁	碗	龍泉窯系B類	17.0	(5.8)	-	中世II期		64	117
E-590	93A	SX01下層	青磁	皿		11.4	(3.2)	-	中世II期		64	
E-591	93A	SX01下層	青磁	皿	同安窯系	8.4	(1.2)	-	中世II期		64	
E-609	94H	SE07	青磁	杯?		11.8	(3.0)	-	中世III期		65	
E-630	94H	SD09	青磁	香炉		5.0	4.6	-	中世IVb期		66	
E-631	94H	SD09	青磁	碗		11.6	5.4	-	中世IVb期		66	
E-632	94H	SD09	青磁	碗		15.8	3.4	-	中世IVb期		66	
E-887	94D	NR01IIIa層	白磁	碗		14.9	(3.4)	-			76	
E-912	94D	NR01IIIa層	白磁	碗	大宰府編年V類	15.0	(4.4)	-			77	
E-913	94D	NR01IIIa層	白磁	碗	大宰府編年IV類	14.0	(4.6)	-			77	
E-914	94D	NR01IIIa層	白磁	碗		14.6	(4.8)	-		福建~広東産	77	117
E-915	94D	NR01IIIa層	青白磁	皿		-	(0.8)	4.6		12C	77	117
E-938	94D	NR01IIIb層	青磁	碗	同安窯系I類	14.0	(3.4)	-			78	117
E-939	94D	NR01IIIb層	青磁	深碗		14.4	(3.4)	-		15C	78	
E-940	94D	NR01IIIb層	白磁	水注		-	(3.6)	-			78	
E-941	94D	NR01IIIb層	白磁	皿		-	(1.8)	4.0		15C	78	
E-982	94F	検I	白磁	碗		14.8	(6.8)	-			81	
E-983	93A	検I	白磁	碗		-	(4.3)	-		福建~広東産	81	117
E-984	93D	検I	白磁	皿		8.8	(2.0)	-		12C代	81	
E-985	93F	検I	青磁	碗	同安窯系I類	17.4	(3.4)	-			81	
E-986	93A	SK13	青磁	碗	同安窯系I類	-	(2.1)	5.4			81	117
E-987	93D	検I	青磁	皿	同安窯系I類	-	(0.9)	5.4			81	
E-988	93A	検II	青磁	皿	同安窯系	10.4	(2.0)	-			81	
E-989	93A	検I	青磁	皿		10.6	(2.0)	-			81	
E-990	94C	SD10	青磁	碗	龍泉窯系I類	15.2	(3.2)	-			81	
E-991	94F	SK02	青磁	碗	龍泉窯系I類	14.6	(2.3)	-			81	
E-992	94F	検I	青磁	碗	龍泉窯系I類	14.6	(3.2)	-			81	
E-993	94F	SK02	青磁	碗		-	(1.7)	6.6			81	
E-994	93F	検I	青磁	碗	龍泉窯系B類	15.1	(3.2)	-			81	117
E-995	93B	検I	青磁	碗	龍泉窯系D類	13.1	(4.3)	-		15C	81	
E-996	93D	検I	青磁	皿	龍泉窯系J類	-	(1.9)	-			81	
E-997	94G	検I	青磁	小碗	龍泉窯系E類	8.4	4.6	3.6		93D-4と接合	81	117

表7 貿易陶磁器一覽表

白磁				青磁							青白磁	計
碗	皿	瓶	不明	碗	皿	小碗	盤	杯	香炉	不明	皿	
85	13	2	10	211	22	2	9	5	1	13	2	375
110				263							2	

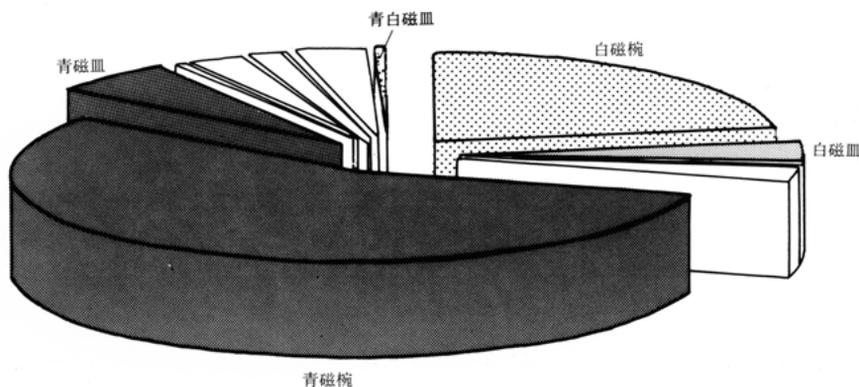


図82 貿易陶磁器器種構成図

## 4.7 加工円盤、陶丸

### 4.7.1 加工円盤 (図83-1026~1039)

**分類** 加工円盤は土田分類(赤塚1987\*1)をはじめほぼ統一された基準で分類されている。今回も従来の分類基準を踏襲して行う。

A 類………灰釉系陶器の底部を利用したもの。

B 類………灰釉系陶器の底部以外を利用したもの。

C 類………その他、施釉陶器などを利用したもの。

今回の調査で出土した加工円盤の総点数は246点。その内訳はA類が182点、B類が32点、C類が32点となる。他の遺跡と比較した場合も同様の結果が得られるように、大毛沖遺跡だけの特徴ではない。ただ、珍しいものとして、C類のなかに含めた貿易陶磁器の加工円盤が1点ある。

**分布** 分布については、いくつか指摘できる。調査区別に見てゆくと、93Aで60点、93Fで30点、94Fで30点と続く。分布の偏重からみると、旧流路周辺(93D・G、94C・D)で87点、93Fと94Fで60点、全体の約80%を占める。前者は旧流路の直上に並ぶ方形土坑群の周辺、後者は中世Ⅲ期を中心とする区画溝を伴う墓域と考えられる空間に相当する。

**時期** 加工円盤は遺構に共伴する例が少なく、時期の決め手を欠く。いきおい底部の高台部分と胎土などから判断しなければならない。中心となる時期はおおよそ中世Ⅱ～Ⅲ期となる。

### 4.7.2 陶丸 (図83-998~1025)

陶丸は松河戸分類(赤塚 1994\*2)に拠れば大・中・小の3つに分類されている。大毛沖遺跡では総数が29点、したがって、分類し傾向を見るよりも分布を重視して検討してみる。

**分布** 陶丸の分布は加工円盤の分布とほぼ重なる。比較的集中する地区をみると、居住域Ⅲ周

**時期** 辺と93Dの旧流路に沿った道1周辺があげられる。これら2地区は中世Ⅲ～Ⅳ期を中心とする遺構・遺物が多い。陶丸もこれらの時期に伴うものとして考えられる。

---

\*1 赤塚美智代「加工円盤」『土田遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター, 1987

\*2 赤塚次郎「陶丸」『松河戸遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター, 1994

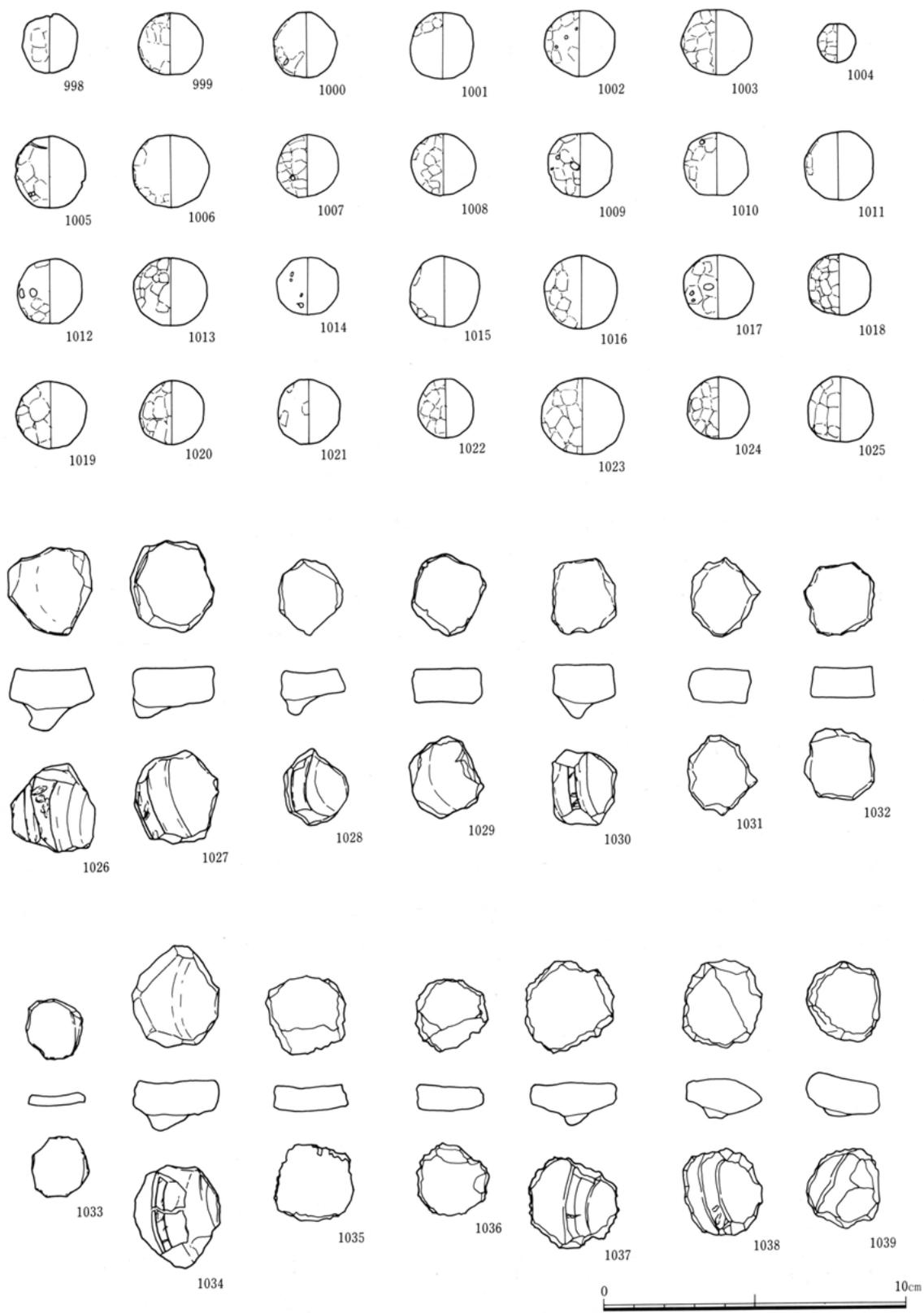


图83 陶丸・加工円盤実測図 (S=1/2)

陶丸

調査区	遺構番号	長軸(mm)	重量(g)	備考	登録番号	調査区	遺構番号	長軸(mm)	重量(g)	備考	登録番号
1	93A	検出	19.0	5.6	E-998	16	93E	検出	24.0	13.1	E-1013
2	93A	検出	20.0	9.3	E-999	17	93G	検出	19.0	6.7	E-1014
3	93A	検出	20.5	9.6	E-1000	18	94D	検出	22.0	14.2	E-1015
4	93A	検出	21.0	9.6	E-1001	19	94F	SK06	24.0	12.5	E-1016
5	93A	検出	21.0	11	E-1002	20	94F	検出	21.5	10.6	E-1017
6	93C	検出	22.0	12.4	E-1003	21	94F	検出	20.5	9.9	E-1018
7	93C	検出	12.0	1.8	E-1004	22	94H	SD09	23.5	15.5	E-649
8	93D	検出	23.0	(7)	E-1005	23	94H	SE01	21.5	11	E-1019
9	93D	検出	24.5	16.8	E-1006	24	94H	SK20	20.5	9.8	E-1020
10	93D	検出	20.0	8.7	E-1007	25	94I	検出	20.5	9.9	E-1021
11	93D	検出	19.5	8.7	E-1008	26	95A	SD01	18.5	7.4	E-1022
12	93D	検出	21.0	10.2	E-1009	27	95A	SD02上層	25.0	16.7	E-1023
13	93D	検出	20.5	10	E-1010	28	95A	SD02上層	20.0	8.5	E-1024
14	93D	検出	22.0	9	E-1011	29	95A	検出	20.5	8.8	E-1025
15	93D	検出	20.5	10	E-1012						

加工円盤

調査区	遺構番号	分類	長軸(mm)	短軸(mm)	重量(g)	登録番号	調査区	遺構番号	分類	長軸(mm)	短軸(mm)	重量(g)	登録番号	
1	93A	SK34	A	24.5	20.5	6.3	E-1028	61	93C	検I	A	22.0	19.0	7.0
2	93A	検I	A	25.0	23.0	8.2		62	93C	検I	A	22.0	20.0	7.6
3	93A	検I	A	25.0	23.0	8.4		63	93C	検I	A	26.0	25.0	11.5
4	93A	検I	A	28.5	28.0	13.3		64	93C	検I	A	54.4	52.4	28.8
5	93A	検I	A	26.0	25.5	9.6		65	93C	検I	A	21.0	19.0	5.4
6	93A	検I	A	21.0	20.0	6.2		66	93C	検I	A	27.2	20.6	9.6
7	93A	検I	A	27.0	23.0	10.2		67	93D	検I	A	31.0	28.5	9.8
8	93A	検I	A	29.0	28.0	11.0		68	93D	検I	A	28.0	24.5	9.1
9	93A	検I	A	28.0	25.0	8.4		69	93D	検I	A	28.2	28.0	10.8
10	93A	検I	A	27.0	26.0	12.0		70	93D	検I	A	21.0	20.5	5.4
11	93A	検I	A	33.0	32.0	14.4		71	93D	検I	A	26.0	24.0	8.7
12	93A	検I	A	27.5	26.5	10.6		72	93D	検I	A	25.5	23.4	7.3
13	93A	検I	A	28.0	27.0	12.5		73	93D	検I	A	21.4	18.0	5.3
14	93A	検I	A	25.0	23.0	7.1		74	93D	検I	A	29.0	26.5	10.5
15	93A	検I	A	29.0	27.0	11.5		75	93D	検I	A	25.5	23.0	9.0
16	93A	検I	A	28.0	21.5	9.9		76	93D	検I	A	31.0	25.5	10.5
17	93A	検I	A	24.5	20.5	5.2		77	93D	検I	A	25.5	22.3	7.2
18	93A	検I	A	23.0	21.0	6.4		78	93D	検I	A	30.5	22.0	13.7
19	93A	検I	A	27.0	21.5	6.4		79	93D	検I	A	19.4	17.3	5.8
20	93A	検I	A	26.0	25.0	9.2		80	93E	検I	A	24.6	20.6	9.5
21	93A	検I	A	24.0	23.0	8.7		81	93F	検I	A	29.3	24.8	7.8
22	93A	検I	A	22.0	17.0	4.9		82	93F	検I	A	21.8	21.0	5.7
23	93A	検I	A	29.0	28.0	10.9		83	93F	検I	A	26.1	23.1	7.5
24	93A	検I	A	29.0	26.0	10.3		84	93F	検I	A	22.7	19.3	6.1
25	93A	検I	A	30.0	27.0	9.6		85	93F	検I	A	25.8	24.5	6.2
26	93A	検I	A	26.0	25.0	6.0		86	93F	検I	A	20.5	17.7	5.5
27	93A	検I	A	25.0	22.0	9.5		87	93F	検I	A	29.1	26.0	11.5
28	93A	検I	A	22.0	20.0	6.7		88	93F	検I	A	25.5	23.8	7.9
29	93A	検I	A	22.0	21.0	6.0		89	93F	検I	A	27.0	23.0	10.7
30	93A	検I	A	25.0	23.0	7.8		90	93F	検I	A	23.0	22.0	4.4
31	93A	検I	A	23.0	18.0	4.6		91	93F	検I	A	21.0	18.0	5.9
32	93A	検II	A	28.0	26.0	10.7		92	93F	検I	A	30.5	28.5	17.2
33	93A	検II	A	30.0	23.5	10.7		93	93F	検I	A	21.5	18.6	6.0
34	93A	検II	A	25.0	22.5	5.2		94	93F	検I	A	59.4	59.0	30.5
35	93A	検II	A	20.0	20.0	6.7		95	93G	検I	A	21.5	21.0	7.5
36	93A	検II	A	28.0	23.0	8.1		96	93G	P4	A	28.5	27.0	11.4
37	93A	検II	A	32.0	29.0	10.9		97	93G	SE04	A	26.5	25.1	9.2
38	93A	検II	A	24.0	23.0	8.3		98	93G	検I	A	26.8	22.9	8.1
39	93A	検II	A	26.5	24.0	7.9		99	93G	検I	A	31.0	25.5	11.0
40	93A	検II	A	28.0	27.0	9.8		100	93G	検I	A	27.7	25.5	7.6
41	93A	検II	A	27.0	26.0	11.5		101	93G	検II	A	23.6	23.0	6.6
42	93A	検II	A	23.0	22.0	7.2		102	93G	検II	A	23.0	22.4	6.0
43	93A	検II	A	26.0	22.0	8.4		103	93G	検II	A	45.6	43.5	18.0
44	93A	検II	A	21.0	18.0	4.0		104	93G	検II	A	31.6	27.3	12.1
45	93A	検II	A	27.0	24.0	9.0		105	93G	検II	A	55.0	53.6	26.8
46	93A	検II	A	25.0	22.0	8.0		106	93G	検II	A	28.6	24.5	8.3
47	93A	検II	A	26.0	21.0	11.0		107	93G	検II	A	32.2	27.5	11.4
48	93A	検II	A	23.0	22.0	5.5		108	93G	検III	A	29.3	29.0	12.5
49	93A	検II	A	28.0	26.0	9.4		109	93G	検III	A	56.6	52.4	35.6
50	93A	検II	A	27.0	26.0	13.3		110	94A	SD01	A	20.0	19.0	2.0
51	93A	検II	A	25.0	18.0	6.3		111	94A	検I	A	22.5	22.0	7.4
52	93A	検II	A	22.0	20.0	8.1		112	94A	検I	A	49.0	46.0	18.9
53	93A	検II	A	28.0	25.0	9.0		113	94A	検II	A	23.0	21.0	8.7
54	93A	検II	A	31.0	26.0	11.4		114	94A	検II	A	29.5	24.5	10.4
55	93A	検II	A	26.0	22.0	8.9		115	94A	検II	A	26.0	23.0	9.8
56	93A	検II	A	27.0	23.0	7.5		116	94B	SD18	A	28.5	26.0	16.3
57	93A	検II	A	26.0	24.0	10.3		117	94B	SK20	A	27.0	23.5	8.9
58	93A	検II	A	22.0	22.0	8.1		118	94C	NR01	A	27.0	21.0	9.4
59	93A	検II	A	24.0	23.5	8.7		119	94C	SD11	A	27.5	21.0	11.1
60	93A	検II	A	32.0	26.0	10.7		120	94C	検I	A	42.0	32.5	17.5

表8 陶丸・加工円盤(1)一覽表

調査区	遺構番号	分類	長軸(mm)	短軸(mm)	重量(g)	登録番号	調査区	遺構番号	分類	長軸(mm)	短軸(mm)	重量(g)	登録番号	
121	94C	検Ⅰ	A	22.0	17.0	6.8		184	93A	検Ⅰ	B	28.0	23.0	8.0
122	94C	検Ⅰ	A	26.0	18.0	6.8		185	93A	検Ⅱ	B	20.5	16.5	4.2
123	94C	検Ⅰ	A	26.5	26.0	8.1		186	93A	検Ⅱ	B	30.5	26.0	14.3
124	94C	検Ⅰ	A	25.0	22.5	8.5		187	93C	検Ⅰ	B	23.0	21.0	7.6
125	94C	検Ⅰ	A	23.5	22.0	8.5		188	93D	検Ⅰ	B	31.3	26.3	9.4
126	94C	検Ⅰ	A	24.0	23.5	8.7		189	93D	検Ⅰ	B	26.0	22.5	8.1
127	94C	検Ⅱ	A	28.5	24.0	9.3		190	93D	検Ⅰ	B	25.8	22.4	6.9
128	94C	検Ⅱ	A	26.5	24.5	9.5		191	93D	検Ⅰ	B	27.0	23.4	9.3
129	94C	検Ⅱ	A	22.0	21.0	6.1		192	93D	検Ⅰ	B	29.0	25.5	11.7
130	94C	検Ⅱ	A	29.5	23.5	10.6		193	93D	検Ⅰ	B	24.7	21.0	5.4
131	94C	検Ⅱ	A	24.5	22.5	8.5		194	93D	検Ⅰ	B	24.5	22.5	8.7
132	94C	検Ⅱ	A	28.0	27.0	9.9		195	93E	検Ⅰ	B	24.5	20.5	10.5
133	94D	NR01Ⅱc層	A	37.0	36.0	17.9	E-953	196	93F	検Ⅰ	B	24.4	22.7	3.7
134	94D	NR01Ⅱa層	A	27.0	24.0	10.0	E-952	197	93F	検Ⅰ	B	25.7	23.8	9.8
135	94D	NR01Ⅲa層	A	25.0	24.5	8.0	E-951	198	93F	検Ⅰ	B	22.5	19.9	3.3
136	94D	NR01Ⅲb層	A	24.5	23.5	7.6		199	93F	検Ⅰ	B	15.8	14.9	4.7
137	94D	NR01Ⅲa層	A	23.5	18.5	7.3	E-948	200	93F	検Ⅰ	B	23.9	23.1	3.8
138	94D	NR01Ⅲb層	A	26.5	23.5	10.0	E-950	201	93F	検Ⅰ	B	29.2	25.3	9.4
139	94D	NR01Ⅲb層	A	28.5	24.5	8.8		202	93G	検Ⅰ	B	42.7	41.5	20.4
140	94D	NR01Ⅲb層	A	25.5	21.5	5.8		203	93G	検Ⅰ	B	43.5	39.2	20.7
141	94D	NR01Ⅲb層	A	29.5	28.0	10.7	E-949	204	93G	検Ⅰ	B	22.4	20.5	10.8
142	94D	NR01Ⅲb層	A	22.0	20.5	7.0		205	93G	検Ⅰ	B	24.2	23.2	8.3
143	94D	NR01Ⅲb層	A	24.0	22.5	7.5		206	94C	検Ⅰ	B	27.0	26.5	4.0
144	94D	検Ⅰ	A	24.5	19.0	7.0		207	94C	検Ⅱ	B	29.5	26.0	4.4
145	94D	検Ⅰ	A	28.0	23.0	10.9		208	94D	NR01-71	B	25.0	22.0	7.7
146	94D	検Ⅰ	A	26.0	22.0	8.5		209	94D	NR01Ⅲb層	B	24.5	21.5	8.3
147	94D	検Ⅰ	A	25.0	23.0	8.6		210	94D	検Ⅰ	B	31.5	26.0	10.5
148	94D	検Ⅰ	A	44.0	41.5	20.3		211	94F	検Ⅰ	B	22.5	18.5	4.2
149	94D	検Ⅰ	A	41.0	38.0	19.1		212	94F	検Ⅰ	B	25.0	24.0	5.6
150	94D	検Ⅰ	A	31.0	27.0	12.3		213	94H	SD34	B	24.0	22.0	10.2
151	94D	検Ⅰ	A	26.5	23.5	8.9		214	94I	SD02	B	22.5	22.0	8.0
152	94E	SD01	A	28.0	27.5	12.2		215	93A	検Ⅰ	C	26.0	17.0	6.8
153	94F	SK16	A	32.5	28.0	14.0	E-1034	216	93A	検Ⅱ	C	20.5	20.5	6.2
154	94F	検Ⅰ	A	28.5	24.0	6.8		217	93C	検Ⅰ	C	29.0	28.5	7.5
155	94F	検Ⅰ	A	31.5	22.5	10.6		218	93E	検Ⅰ	C	16.5	16.3	3.6
156	94F	検Ⅰ	A	32.0	27.0	12.5		219	93E	検Ⅰ	C	37.0	30.6	12.6
157	94F	検Ⅰ	A	25.0	24.0	9.0		220	93F	検Ⅰ	C	27.0	26.1	10.3
158	94F	検Ⅰ	A	29.5	27.0	8.6		221	93F	検Ⅰ	C	20.0	19.3	3.3
159	94F	検Ⅰ	A	25.5	23.5	8.8		222	93F	検Ⅰ	C	32.5	30.4	11.0
160	94F	検Ⅰ	A	26.5	23.5	7.3		223	93F	検Ⅰ	C	20.1	20.8	3.1
161	94F	検Ⅰ	A	30.0	25.0	8.6		224	93F	検Ⅰ	C	22.8	19.9	4.7
162	94F	検Ⅰ	A	24.5	23.5	8.9		225	93F	検Ⅰ	C	25.4	24.5	7.8
163	94F	検Ⅰ	A	30.0	30.0	11.5		226	93F	検Ⅰ	C	26.1	25.9	6.7
164	94F	検Ⅰ	A	27.5	20.5	7.5		227	93F	検Ⅰ	C	30.5	28.0	13.6
165	94F	検Ⅰ	A	29.0	23.5	7.5		228	93F	検Ⅱ	C	17.6	16.8	3.1
166	94F	検Ⅰ	A	29.0	25.5	8.8		229	93F	検Ⅱ	C	20.9	18.7	1.3
167	94F	検Ⅰ	A	23.5	23.0	5.1	E-1036	230	93G	検Ⅰ	C	52.9	50.2	40.4
168	94F	検Ⅰ	A	26.0	24.0	9.4	E-1039	231	93G	検Ⅰ	C	23.1	19.7	4.3
169	94F	検Ⅰ	A	28.0	25.0	9.4	E-1038	232	93G	検Ⅰ	C	21.1	20.8	4.8
170	94F	検Ⅰ	A	29.0	27.5	11.4	E-1037	233	93G	検Ⅰ	C	28.3	24.6	9.4
171	94F	検Ⅰ	A	25.0	23.5	7.7		234	93G	検Ⅰ	C	20.7	18.5	3.8
172	94F	検Ⅰ	A	30.0	21.5	7.2		235	93G	検Ⅰ	C	29.1	27.1	8.6
173	94F	検Ⅰ	A	24.5	21.0	9.1		236	94A	検Ⅰ	C	34.0	28.0	13.4
174	94G	検Ⅰ	A	27.0	23.0	6.7		237	94C	SD11	C	26.5	25.5	9.5
175	94G	検Ⅰ	A	26.5	22.0	8.5		238	94C	SD15	C	38.0	37.0	12.1
176	94G	検Ⅰ	A	28.0	26.0	9.5		239	94D	NR01-72	C	26.0	21.0	8.0
177	94G	検Ⅰ	A	23.0	20.0	5.6		240	94F	検Ⅰ	C	23.0	20.0	8.1
178	94H	SD34	A	23.5	22.0	7.3	E-1029	241	94F	検Ⅰ	C	23.5	20.5	5.0
179	94I	検出	A	25.0	23.0	9.5		242	94F	検Ⅰ	C	26.5	26.0	7.0
180	94I	SD01	A	21.5	21.5	6.8	E-1031	243	94F	検Ⅰ	C	25.0	20.0	8.5
181	94I	SE03	A	31.0	26.5	14.8	E-1027	244	94F	検Ⅰ	C	33.5	29.5	16.9
182	95A	SD01	A	27.0	22.0	8.5		245	94F	検Ⅰ	C	22.0	22.0	6.8
183	93A	検Ⅰ	B	24.0	24.0	8.8		246	94F	検Ⅰ	C	34.0	28.5	12.6

表9 加工円盤一覧表(2)

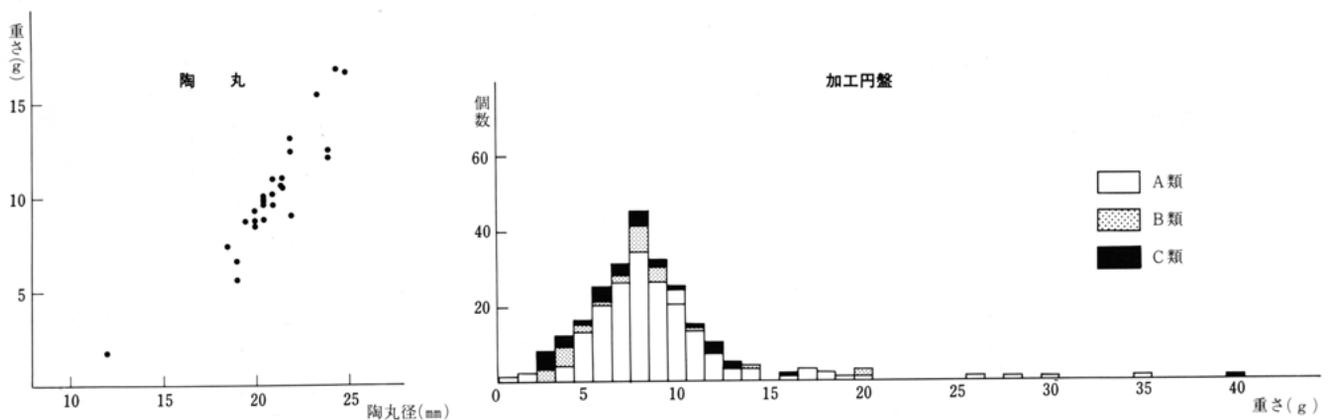


図84 陶丸・加工円盤グラフ

## 4.8 土 錘

久保禎子（一宮市博物館）

### 概要

今回の調査で出土した土錘はすべて管状土錘で、総数115点、そのうち時期が判明しているものが65点ある（表11・12）。

形態には大きく分けて2種類あり、孔径が小さく重量も軽い小型のものをⅠ類、孔径が大きく重いものをⅡ類とした（表10）。さらに、両端部を平坦にするか否かによってAa・Ab・Bと分類したが、土錘の孔に通す縄が切れないようにその両端を調整するのは常識的なことであり、その程度や調整方法によって漁具・漁法が変化するとも考えにくい。そのため、今回はこの点について詳細な検討をしないが、全体的な傾向として、平坦面の面積が広いものには焼成温度が高いと思われる資料が多いようである。

出土状況については、土坑や住居跡などの遺構に伴って出土する例もあるが、1点のみで散発的に検出されるものがほとんどである。ただ、No.25から64は埋没しつつあった旧流路の12世紀後半の堆積土からまとまって出土し、形態も非常に類似したものである。形状は大きく分けて3種類あるが、不純物の混入などから同時に焼成されたとわかるものも含まれ、法量も近似している。

土錘の時期幅は7世紀後半から17世紀後半にいたる長い期間であるが、主体は12世紀から14世紀までである。時期が明確なものの中で10世紀以前、14世紀以降に所属する資料はそれぞれ1点ずつしか検出されておらず、時期的な変遷をとらえるには不十分である。

分類 1	Ⅰ	孔径が0.5cm以下で、重量が20g未満 ＝刺網
	Ⅱ	孔径が0.5cm以上で、重量が20g以上 ＝曳網
分類 2	Aa	両端部を平坦に調整するもの
	Ab	両端部を平坦に調整するが、痕跡が不明瞭なもの
	B	両端部を平坦に調整しないもの

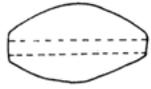
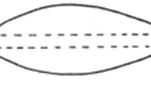
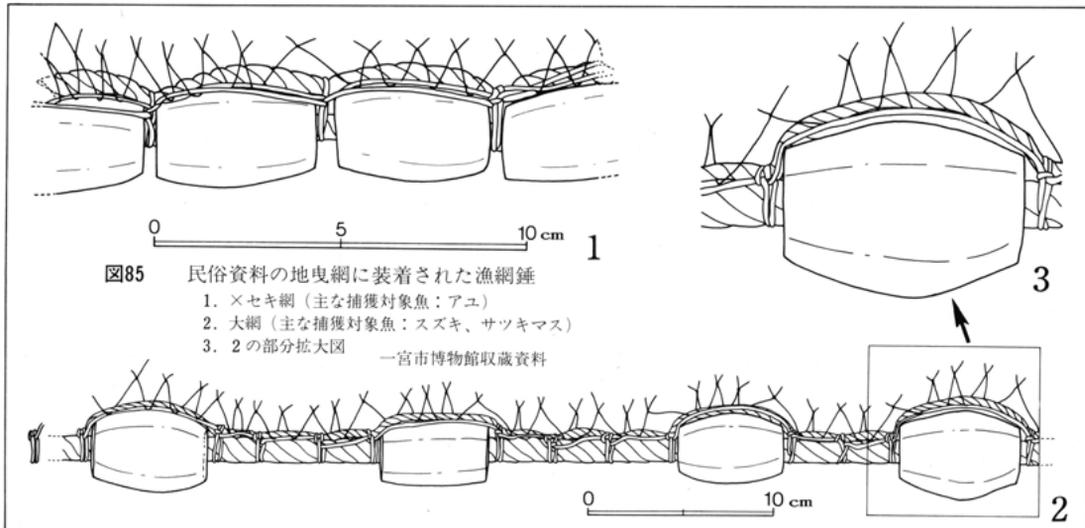
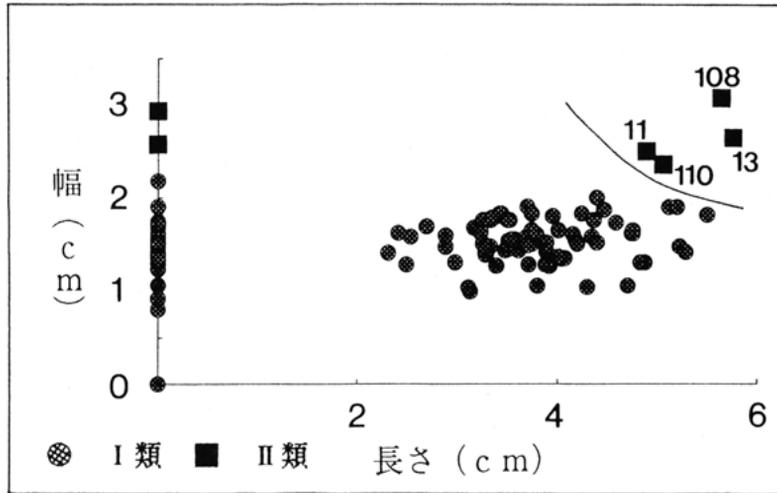
分類 3	イ	 中央部が膨らみ、胎土中に不純物（木片）が混入するもの
	ロ	 中央部が膨らまず、胎土に不純物が混入しないもの
	ハ	 イよりもさらに長さや巾の割合が小さく、軽く小さいもの

表10 土錘の形態分類表

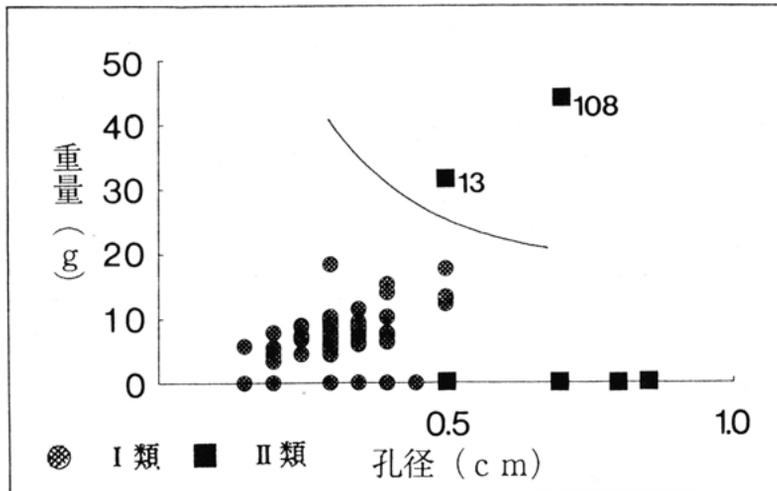


土錘の形態別の数量と割合はⅠ類が109点で94.8%、Ⅱ類が6点で5.2%とⅠ類が圧倒的に多いことがわかる。Ⅰ類は孔径\*1が小さく軽いもので、刺網の漁網錘とするのが妥当ではないかと考えられるものである。Ⅱ類は孔径が0.5cm以上で重量が20gを越えるもので、曳網の漁網錘と考えられる。出土点数は少ないが、No.11から10世紀後半には地曳網漁が行われていたことがわかり、扇状地から沖積地へ変わる地点での曳網漁の痕跡として貴重であると言える。また、土錘計測値の度数分布を示した図86、87をみると、Ⅰ・Ⅱ類の計測値の違いが明確にあらわれているのがわかる。



※0軸に分布する点は、一部欠損のため長さ不明のもの。

図86 土錘の計測値の傾向 -長さ/幅



※0軸に分布する点は、一部欠損のため重さ不明のもの。

図87 土錘の計測値の傾向 -孔径/重量

\*1孔径は密着されるイワ縄の太さを示すものであり、土錘の孔にいろいろな幅に切った方眼紙を挿入して計測値を得た。

I類の土鍾は、昭和前期まで当地方で使われていた重さが1匁(3.75g)前後の絹素材の刺網の漁網鍾に比べ若干重い傾向があり、当時は絹素材として重くて太いものを使っていたことがわかる。民俗資料でも、同じ漁法で大きさがほぼ同じ漁網でありながら、絹と麻という素材の違いで装着される漁網鍾の重さや装着する個数が異なる事例がある。刺網の鍾は、網が使われる場所(瀬か淵か)、水深と網の高さ、対象魚の大きさ、網が浮くか川底につくかなどの諸条件で浮子とのバランスが決められるため、土鍾から漁法までを想定するのは非常に難しい。

I類の中で比較的まとまって出土したNo.25から64は、計測値も近似した値を示している(図88)。混入している不純物などから焼成された「時」が違うようであるが、長さ2cmほどの幅は民俗資料でも見られることであり(図89・90)、同じ網に装着されていたと考ええてよいであろう。この土鍾はいずれも長さが短いずんぐりした形をしており、割れにくい。しかし、川底に土鍾がつく漁法では、土鍾の間隔が広いと隙間ができ使いにくかったのではと思われる。したがって、流れのあまりないところで使われたのかもしれない。

II類の土鍾の計測値は、重さが10匁前後である民俗資料のアユを主な捕獲対象魚とするメセキ網(図85)の漁網鍾に類似しており、河口近くの下流部で操業されているような300mを越えるような規模の大きい大網(地曳網)ではなく、長さが50~100mほどの小規模な地曳網であったようである。図85で示したスズキやサツキマスを対象魚とする100g\*1を越えるような大網の漁網鍾は、今回の調査では出土していない。

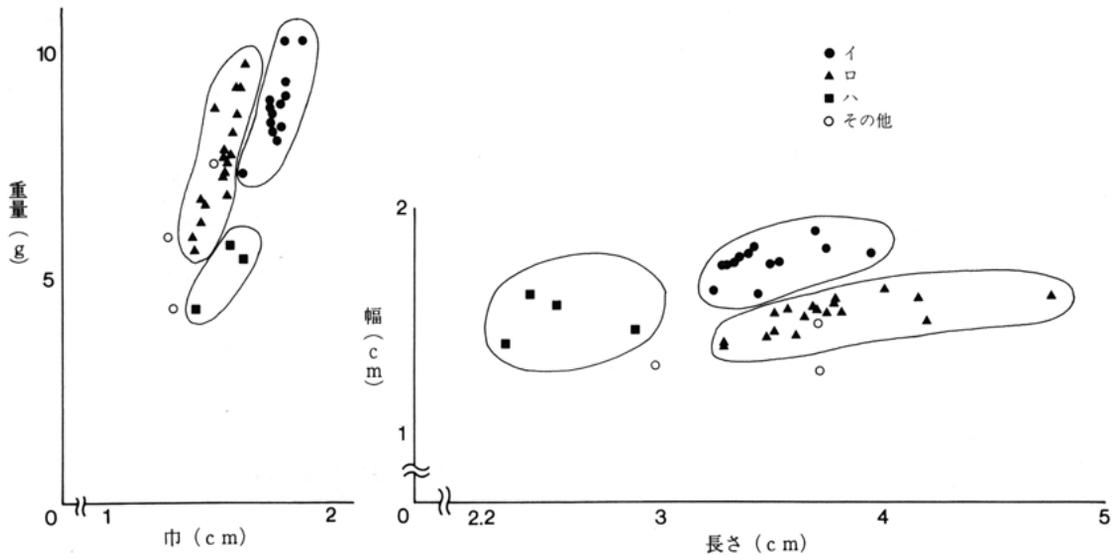


図88 12世紀後半の土鍾計測値の傾向

\*1羽島郡川島町で使用されていた大網には、80g前後のものもある。

木曾川の流路が現在のように固定したのは天正14年（1586）の大洪水以降のことであり、沖遺跡のそれ以前は幹川が境川筋を流れて墨俣で長良川に合流して南下していた。当時の木曾川左岸には一之枝・二之枝・三之枝・黒田川などの派川が多く流れており、大毛沖遺跡に最も近いのが、木曾川堤が整備される17世紀以前には比較的規模の大きい派川であった黒田川である。調査区内でも旧流路が検出されているように、漁場となる水辺が豊富にあったと考えられ、刺網漁を中心として5人ほどの少人数で曳くことができるような地曳網漁の操業も推測できる。また、木曾川幹川への交通路でもあり、今後、漁業と共通する要素である船を媒介にした水運も考慮しながら、水辺に位置する集落の漁業を考えていかなければならない。

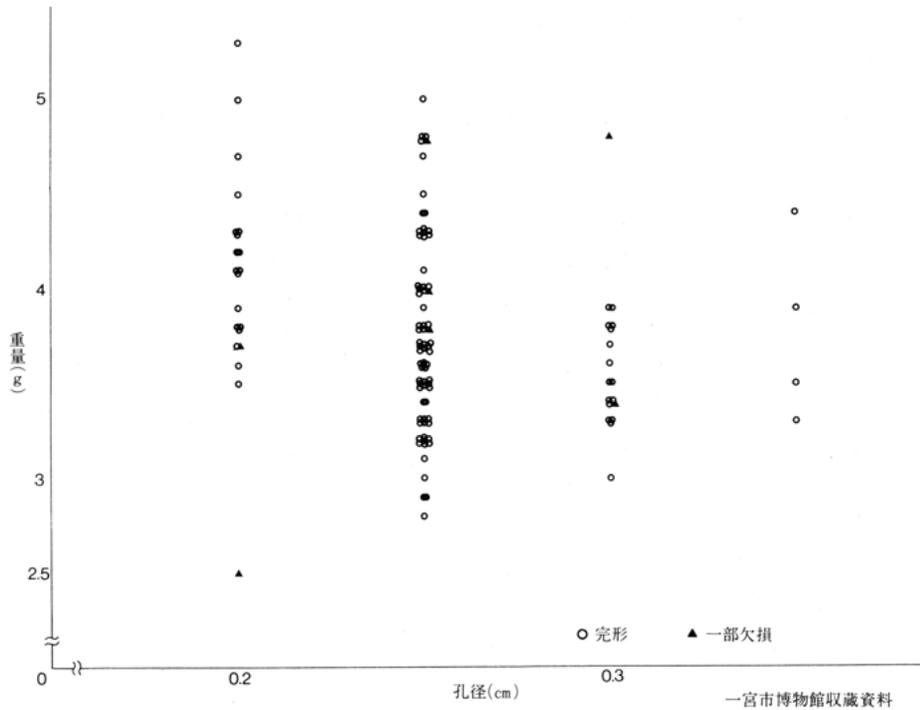


図89 民俗資料の夜川網（捕獲対象魚：アユ、緋、麻の二枚網）に装着された漁網錘の計測値の傾向－孔径/重量

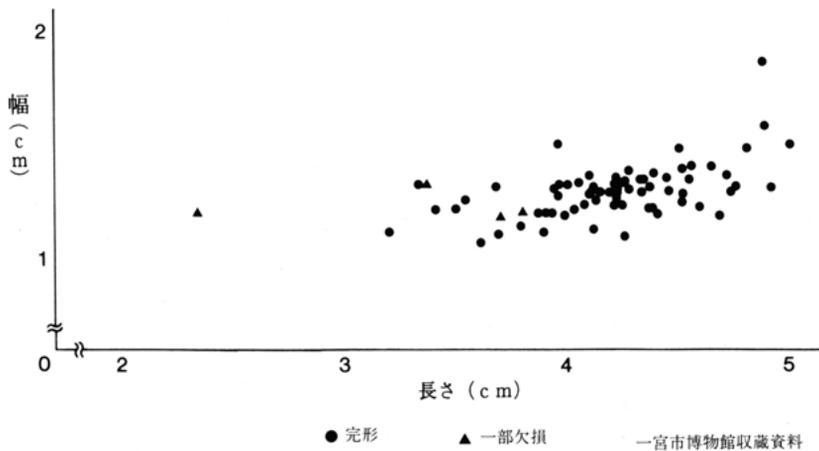
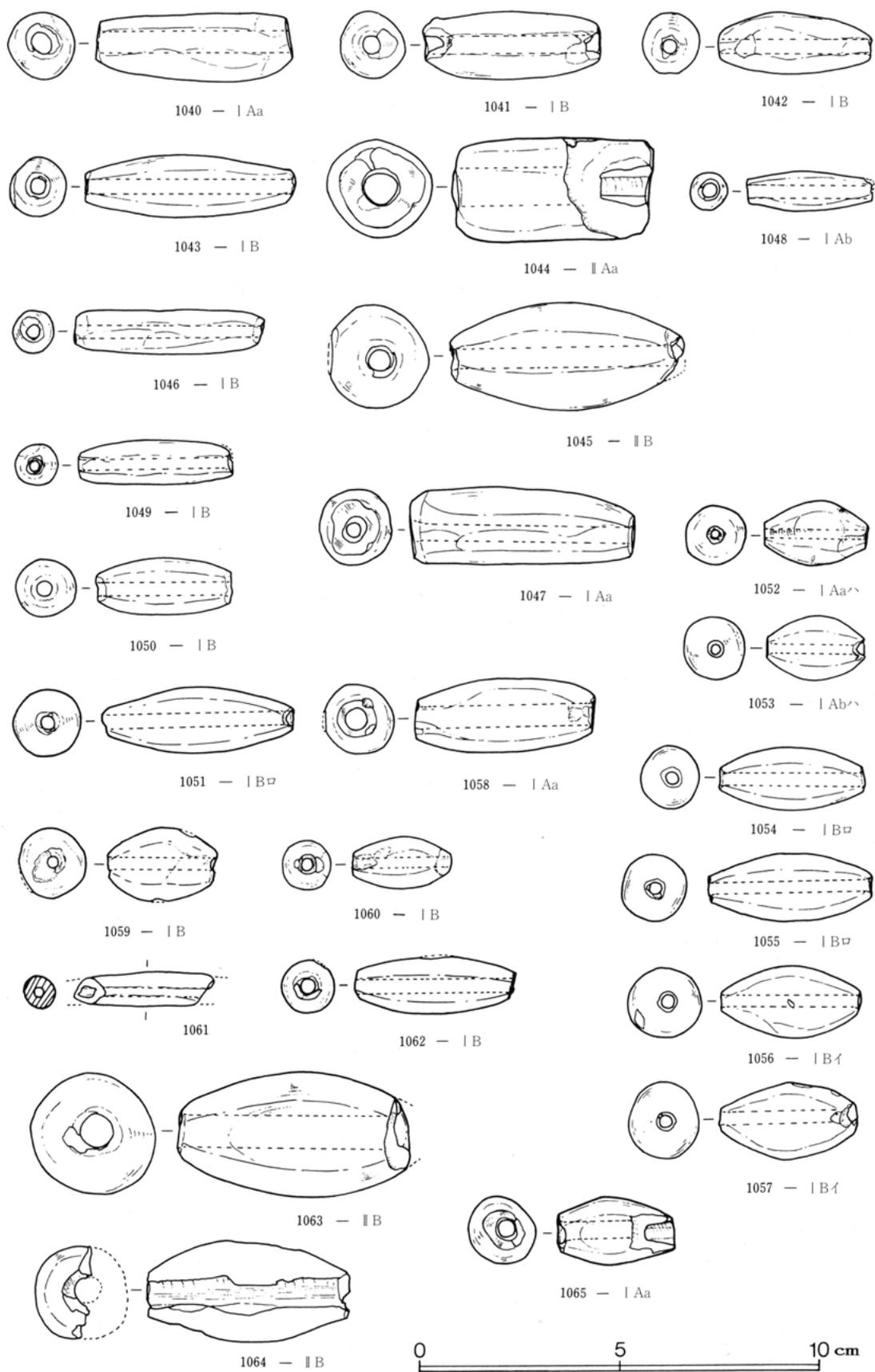


図90 民俗資料の刺網（捕獲対象魚：コイなど、麻の一枚網）に装着された漁網錘の計測値の傾向－長さ/幅



	調査区	遺構	時期	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存状態	分類1	分類2	分類3	登録番号
1	93A	SX01上層	中世Ⅱ期	4.74	1.61	0.50	13.0	完形	I	A a		E-1040
2	93A	SX01上層	中世Ⅱ期	3.89	1.42	0.20	7.8	完形	I	A a		
3	93A	P14	中世	4.18	1.54	0.35	8.2	両端少欠損	I	B		
4	93A	SD06	古代Ⅲ a期	(3.22)	1.53	0.30	(6.4)	1/2欠損	I	B		
5	93A	SD02	中世	(2.71)	1.38	0.30	(3.9)	2/3欠損	I	B		
6	93A	SB01上層	古代Ⅱ期	(4.20)	1.61	0.50	(9.5)	両端欠損	I	A a		
7	93A	SB09	古代Ⅰ期	4.35	1.57	0.40	10.2	両端少欠損	I	B		E-1041
8	93D	SD08下層	古代Ⅰ期	4.04	1.34	0.35	7.3	完形	I	B		
9	93F	SK20	古代	3.75	1.50	0.30	6.3	完形	I	B		
10	93G	SD07	中世Ⅱ期	5.22	1.47	0.35	9.4	完形	I	B		E-1042
11	94C	SB03	古代Ⅲ c期	4.90	2.49	0.85	(26.4)	片端欠損	II	A a		E-1043
12	94H	SD18	中世Ⅳ b期	(4.13)	1.90	0.50	(13.6)	片端欠損	I	A a		E-1044
13	94H	SD11	中世Ⅳ b期	5.76	2.63	0.50	31.6	完形	II	B		E-1045
14	94H	SD29	中世Ⅱ b期	(3.94)	1.52	0.45	(6.3)	片端欠損	I	A a		
15	94H	SD03		4.70	1.05	0.30	5.1	完形	I	B		E-1046
16	94I	SK60	古代Ⅲ期	5.50	1.81	0.30	18.4	完形	I	A a		E-1047
17	94D	NRO1Ⅲ a層	中世0~Ⅰ期	3.17	1.67	0.25	6.7	完形	I	A b	イ	
18	94D	NRO1Ⅲ a層	中世0~Ⅰ期	3.26	1.50	0.30	6.1	片端少欠損	I	A b	ロ	
19	94D	NRO1Ⅲ b層	中世Ⅱ~Ⅳ期	(3.21)	1.46	0.35	(5.6)	両端欠損	I	-		
20	94C	NRO1		3.13	0.99	0.35	(2.2)	両端少欠損	I	A b		E-1048
21	94D	NRO1Ⅲ b層	中世Ⅱ~Ⅳ期	3.80	1.05	0.20	(4.3)	片端少欠損	I	B		E-1049
22	94D	NRO1Ⅲ b層	中世Ⅱ~Ⅳ期	3.33	1.47	0.35	6.5	完形	I	B		
23	94D	NRO1Ⅲ b層	中世Ⅱ~Ⅳ期	4.47	1.87	0.40	15.2	完形	I	A a		
24	94D	NRO1Ⅲ b層	中世Ⅱ~Ⅳ期	(3.32)	1.55	0.40	(7.9)	1/2欠損	I	A b		
25	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.70	1.55	0.30	7.5	完形	I	B	ロ	
26	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	4.16	1.60	0.30	9.2	完形	I	B	ロ	
27	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.75	1.54	0.30	7.8	完形	I	B	ロ	E-1050
28	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	4.76	1.61	0.30	9.2	完形	I	B	ロ	E-1051
29	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.82	1.54	0.30	7.6	完形	I	B	ロ	
30	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.72	1.28	0.35	5.9	完形	I	B		
31	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.29	1.40	0.30	5.6	完形	I	B	ロ	
32	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.42	1.82	0.25	9.0	完形	I	A b	イ	
33	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	2.98	1.30	0.30	4.3	完形	I	B		
34	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	2.89	1.46	0.15	(4.5)	1/4欠損	I	A a	ハ	
35	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	2.54	1.57	0.15	5.7	完形	I	A a	ハ	E-1052
36	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	2.31	1.40	0.20	4.3	完形	I	A b	ハ	
37	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	2.42	1.62	0.20	5.4	完形	I	A b	ハ	E-1053
38	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.95	1.80	0.30	8.3	完形	I	A a	イ	
39	94C	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.53	1.76	0.30	8.6	完形	I	A b	イ	
40	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.61	1.43	0.30	6.7	完形	I	B	ロ	E-1054
41	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.44	1.82	0.30	9.3	完形	I	B	イ	E-1056
42	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.70	1.90	0.30	10.2	完形	I	A a	イ	
43	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	4.01	1.64	0.30	9.7	完形	I	B	ロ	E-1055
44	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.78	1.58	0.30	8.2	完形	I	B	ロ	
45	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.51	1.53	0.30	7.2	完形	I	B	ロ	
46	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.75	1.82	0.30	10.2	完形	I	A a	イ	
47	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.65	1.52	0.30	7.3	完形	I	B	ロ	
48	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.69	1.57	0.30	7.7	完形	I	B	ロ	
49	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.34	1.76	0.30	8.4	完形	I	B	イ	
50	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.40	1.80	0.25	8.8	完形	I	A a	イ	
51	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.48	1.43	0.30	6.2	完形	I	A b	ロ	
52	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.28	1.75	0.30	8.4	完形	I	A a	イ	
53	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.28	1.39	0.30	5.9	完形	I	B	ロ	
54	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.26	1.75	0.30	8.1	完形	I	B	イ	E-1057
55	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.51	1.45	0.30	6.6	完形	I	A a	ロ	
56	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.79	1.60	0.35	8.6	完形	I	B	ロ	
57	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.57	1.55	0.25	6.8	完形	I	B	ロ	
58	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.24	1.63	0.25	7.3	完形	I	A a	イ	
59	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.50	1.75	0.25	8.7	完形	I	B		
60	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.71	1.49	0.40	7.5	完形	I	A b	イ	
61	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	3.35	1.78	0.30	8.3	完形	I	B	ロ	
62	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	4.20	1.50	0.30	8.7	完形	I	B	ロ	
63	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	(2.80)	1.50	0.30	(5.8)	1/3欠損	I	B	ロ	
64	94D	NRO1Ⅱ c層	古代Ⅳ期	(4.03)	1.54	0.30	(9.4)	1/6欠損	I	B	ロ	

表11 土鐘一覽表(1)

	調査区	遺構	時期	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存状態	分類1	分類2	分類3	登録番号
65	94A	SX02		4.39	1.52	0.35	9.5	完形	I	B		
66	94A	SD11		4.76	1.64	0.40	(0.4)	1/4欠損	I	A a		
67	94A	SD01	中世Ⅳ期	(2.85)	1.06	0.30	(2.9)	破片	I	B		
68	94C	SD10	中世Ⅱ期	(2.50)	1.41	0.35	(6.4)	破片	I	B		
69	94A	SX01		4.87	1.30	0.40	(7.0)	両端欠損	I	A a		
70	93A	検Ⅰ		4.24	1.82	0.30	(12.2)	片端欠損	I	B		
71	93A	検Ⅱ		(4.35)	2.57	0.70	(24.8)	1/4欠損	Ⅱ	B		
72	93A	検Ⅱ		(3.65)	(1.63)	0.50	(7.0)	両端欠損	I	—		
73	93A	検Ⅰ		(3.81)	(1.53)	0.30	(8.7)	片端欠損	I	B		
74	93A	検Ⅰ		4.36	1.75	0.50	12.2	完形	I	A a		E-1058
75	93A	検Ⅰ		4.07	1.35	0.35	8.8	完形	I	A a		
76	93B	検Ⅰ		(2.34)	(1.40)	0.35	(4.4)	破片	I	—		
77	93B	検Ⅰ		3.75	1.64	0.40	10.2	完形	I	A a		
78	93B	検Ⅰ		(3.36)	1.70	0.35	(7.9)	片端欠損	I	B		
79	93C	検Ⅰ		(4.58)	1.67	0.40	(11.8)	両端欠損	I	A a		
80	93C	検Ⅰ		(3.66)	1.49	0.40	(7.3)	片端欠損	I	A a		
81	93C	検Ⅰ		4.39	1.99	0.50	(14.2)	完形	I	A a		
82	93C	検Ⅰ		3.28	1.43	0.40	6.4	両端欠損	I	B		
83	93C	検Ⅰ		(3.04)	1.57	0.30	(6.9)	1/2欠損	I	A b		
84	93C	検Ⅰ		4.58	1.73	0.50	13.2	完形	I	A a		
85	93C	検Ⅰ		2.70	1.68	0.30	7.2	完形	I	B		E-1059
86	93D	検Ⅰ		(4.17)	1.56	0.50	(8.6)	片端欠損	I	B		
87	93D	NR01		(3.80)	1.57	0.40	(8.8)	1/5欠損	I	A a		
88	93D	NR01		5.11	1.89	0.40	14.0	完形	I	A b		
89	93D	NR01		3.39	1.26	0.25	4.4	完形	I	B		
90	93D	検Ⅰ		(3.32)	1.34	0.40	(5.6)	1/4欠損	I	A b		
91	93D	NR01		2.49	1.28	0.20	3.3	片端少欠損	I	B		E-1060
92	93F	検Ⅰ		3.12	1.03	0.30	5.5	完形	I	B		
93	93F	検Ⅰ		3.92	1.26	0.30	6.6	完形	I	A b		
94	93F	検Ⅰ		3.89	1.51	0.40	7.7	完形	I	B		
95	93F	検Ⅰ		(3.41)	0.80	0.20	(2.1)	両端欠損	I	—		E-1061
96	93G	検Ⅰ		4.83	1.30	0.30	7.8	完形	I	A a		
97	93G	NR01		5.20	1.89	0.50	17.6	完形	I	B		
98	93G	NR01		(2.60)	0.91	0.30	(2.9)	破片	I	—		
99	93G	検Ⅰ		(4.38)	1.29	0.40	(7.1)	片端欠損	I	B		
100	94A	検Ⅰ		(4.00)	1.23	0.40	(4.7)	片端欠損	I	B		
101	94A	検Ⅰ		(3.83)	1.74	0.35	(10.0)	1/3欠損	I	B		
102	94A	検Ⅱ		4.30	1.04	0.30	(5.0)	1/2欠損	I	B		
103	94A	検Ⅱ		(1.90)	(1.31)	0.35	(2.7)	2/3欠損	I	B		
104	94A	検Ⅱ		4.01	1.36	0.30	6.7	両端少欠損	I	B		E-1062
105	94A	検Ⅱ		(2.82)	1.90	0.40	(10.2)	1/2欠損	I	A a		
106	94C	NR01		(3.33)	1.72	0.30	(10.0)	1/3欠損	I	B		
107	94F	検Ⅰ		5.29	1.41	0.35	11.4	片端少欠損	I	A b		
108	94G	NR01		5.65	3.07	0.70	44.2	片端少欠損	Ⅱ	B		E-1063
109	94H	検Ⅰ		(3.58)	2.18	0.80	(15.8)	1/3欠損	Ⅱ	A a		
110	94H	トレンヂ		5.06	2.36	0.50	(13.4)	1/2欠損	Ⅱ	B		E-1064
111	94H	検Ⅰ		(3.13)	1.50	0.50	(5.8)	1/3欠損	I	A a		
112	94I	検Ⅰ		3.88	1.28	0.35	5.9	完形	I	B		
113	94I	検Ⅰ		2.89	1.59	0.40	6.3	片端少欠損	I	A a		E-1065
114	94I	No.125		(5.00)	1.35	0.50	(8.8)	両端欠損	I	—		
115	94I	検Ⅲ		3.54	1.55	0.30	7.6	完形	I	B		

表12 土錘一覧表(2)

## 4.9 木製品

### 概要

大毛沖遺跡では旧河道に限らず、豊富な木製品の出土を見た。特に旧河道Ⅱ a層出土の木製鏡は全国的に見ても類例が少なく、そのなかでも優品。漆器では中世Ⅱ期の資料(1067)があげられる。尾張部では清洲城下町遺跡から豊富な漆器類が確認されているが、いずれも15世紀以降の漆器がほとんどで、13世紀代に遡る資料はほとんど類例がない。

### 鏡(図93)

大毛沖遺跡で出土した鏡は一般に「舌鏡」と呼ばれるタイプ。壺部はヨコ9.5cm、タテ11cmを測る。舌は踏込部で遺存長20cm、最大幅約10cmを測る。吊手部は壺部との接点部で3×4cmの四隅を面取りした楕円形に近い断面形、遺存長で24cmを測る。

材はツバキ科サカキ、芯持ち丸太材の幹と枝の分岐部分を利用し、幹で壺および舌部を、枝で吊手部を一木で利用する横木取りの製品。また、全面にわたり加工痕を残さず、黒漆を塗りきれいに仕上げている\*1。

鳩胸は中央に稜線をもち球形に近い形を作り出している。舌は足を乗せる面となる踏込部はよく使用させているため、漆がはがれ磨耗している。断面形態はU字形となる。踏込部の側面の柳端は幅1.5cmの凸部が壺から続く。下面の舌裏は鳩胸にある稜線が続く。

鏡の年代については、出土地点が旧流路ということもあって、確実な共伴関係が押さえられない。出土した層位は、旧流路Ⅱ a層、沖編年の古代Ⅲ b~c期に相当し、9世紀代となる。

さて、大毛沖遺跡出土の鏡に類似する例として山形県川西町道伝遺跡(置賜郡衙跡)があげられる\*2。道伝例は平安時代前期(9世紀前半)に比定されており、時期的にも近い資料となる。形態は「舌鏡」で、木取りは横木取りの一木造、用材はクスギという。

ほかに舌鏡の類例は静岡県島田市居倉遺跡(平安時代)などがある。詳しくは付論で紹介する。

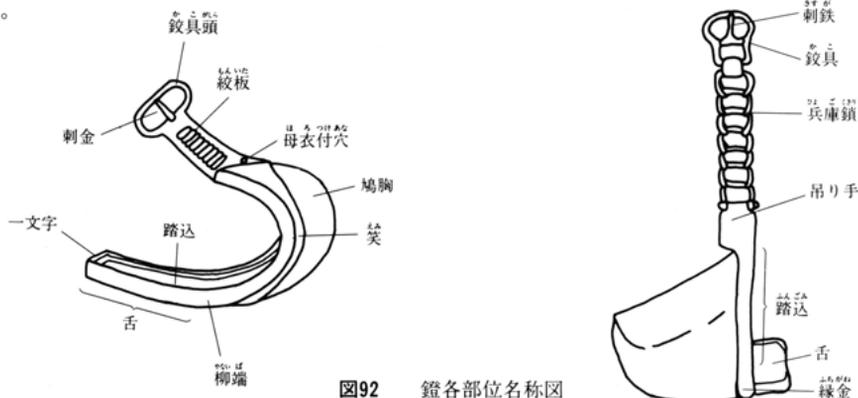
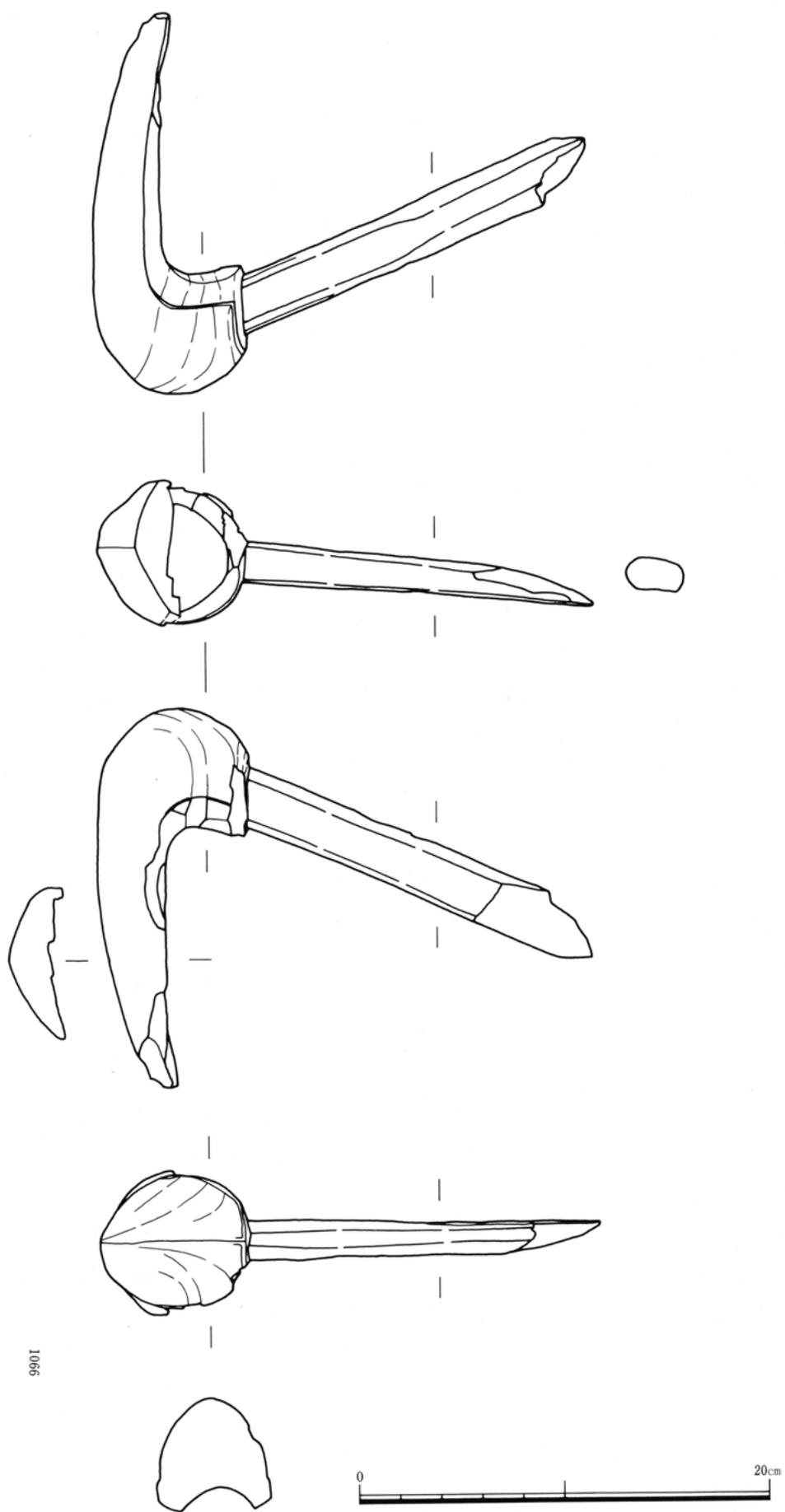


図92 鏡各部位名称図

『日本馬具大鑑』吉川弘文館、1990より引用改変

\*1 (財)元興寺文化財研究所の分析の結果は付論に掲載。

\*2 北野信彦氏ご教示。



1066

图93 木製鐙実測图 (S=1/3)

#### 生活用具（図94～96－1090～1101）

1067～1070は漆器。1067は93CSK06出土資料の椀。内外面に黒漆、紋様は赤漆で松が描かれている。中世Ⅱb期。1068は94HSD09出土資料の椀。内外面に黒漆、紋様は体部外面2ヶ所、底部内面に3つ、赤漆により丸に鶴が描かれている。中世Ⅳ期。1069は94HSD07出土資料の椀。削出し高台部分が他の椀より高い。内外面に黒漆、紋様は赤漆により内外面に草花が描かれている。中世Ⅱa期。1070は94G旧流路Ⅲ層出土資料の黒漆皿、中世Ⅱ期。1071は94D旧流路Ⅱ層出土資料。皿で底部中央に穿孔あり。古代Ⅳ期。

1072～1074は漆製品。1072は94HSK106出土資料の円形板。2ヶ所に貫通しない穴がある。中世Ⅳ期。1073・1074はいずれも板状の加工木で、数ヶ所に穿孔がある。いずれも94HSD09出土資料、中世Ⅳ期。

1075は折敷、両面に細かい切り傷が残る、94HSD09出土資料、中世Ⅳ期。1076は円形板、中央に穿孔がある、93CSK06出土資料中世Ⅱb期。1077は盆、内外面に細かい切り傷が残る、94D旧流路Ⅱb層出土資料、古代Ⅲc期。

1078～1087は曲物。曲物はこのほか井筒に利用されたものがある。1089は編み物、94D旧流路Ⅲa層出土資料、中世Ⅱ期。

1090は杓子状木製品、93ASX01出土資料、中世Ⅱ期。1091～1099は箸状木製品、1091～1097は94HSD09出土資料、中世Ⅳ期。1098・1099は95ASD02出土資料、中世Ⅲ～Ⅳ期。1100・1101は杓子状木製品、いずれも中世Ⅳ期、1100は94HSD11、1101は94HSK106出土資料。

#### 装身具・履物（図96－1102～1104・97－1105）

1102～1104は連歯下駄。1102は94HSD18出土資料、中世Ⅳ期。1103は95ASD02出土資料、中世Ⅲ～Ⅳ期。1104は94C旧流路Ⅱ層、古代Ⅲ期。1105は横櫛、94HSD09出土資料、中世Ⅳ期。

#### 生産用具（図97－1106）

1106は編具、中央のくびれ部分がよく磨耗している。93ASK10出土資料、中世Ⅱa期。

#### 信仰・呪術（図97－1115・1116）

1115は卒塔婆、93ASX01出土資料で、同様の形状で「南無大□」と墨書がみえる資料がSX01から出土している（図79－954）、中世Ⅱ期。1116は陽物、縦に半分欠損している。95ASD02出土資料、中世Ⅲ～Ⅳ期。

#### その他（図97－1105～1114）

1114は羽子板状木製品。ただ、柄の部分ではなく先の方に穿孔があり、何らかの用途を限定できる孔かもしれない。94HSD09出土資料、中世Ⅳ期。

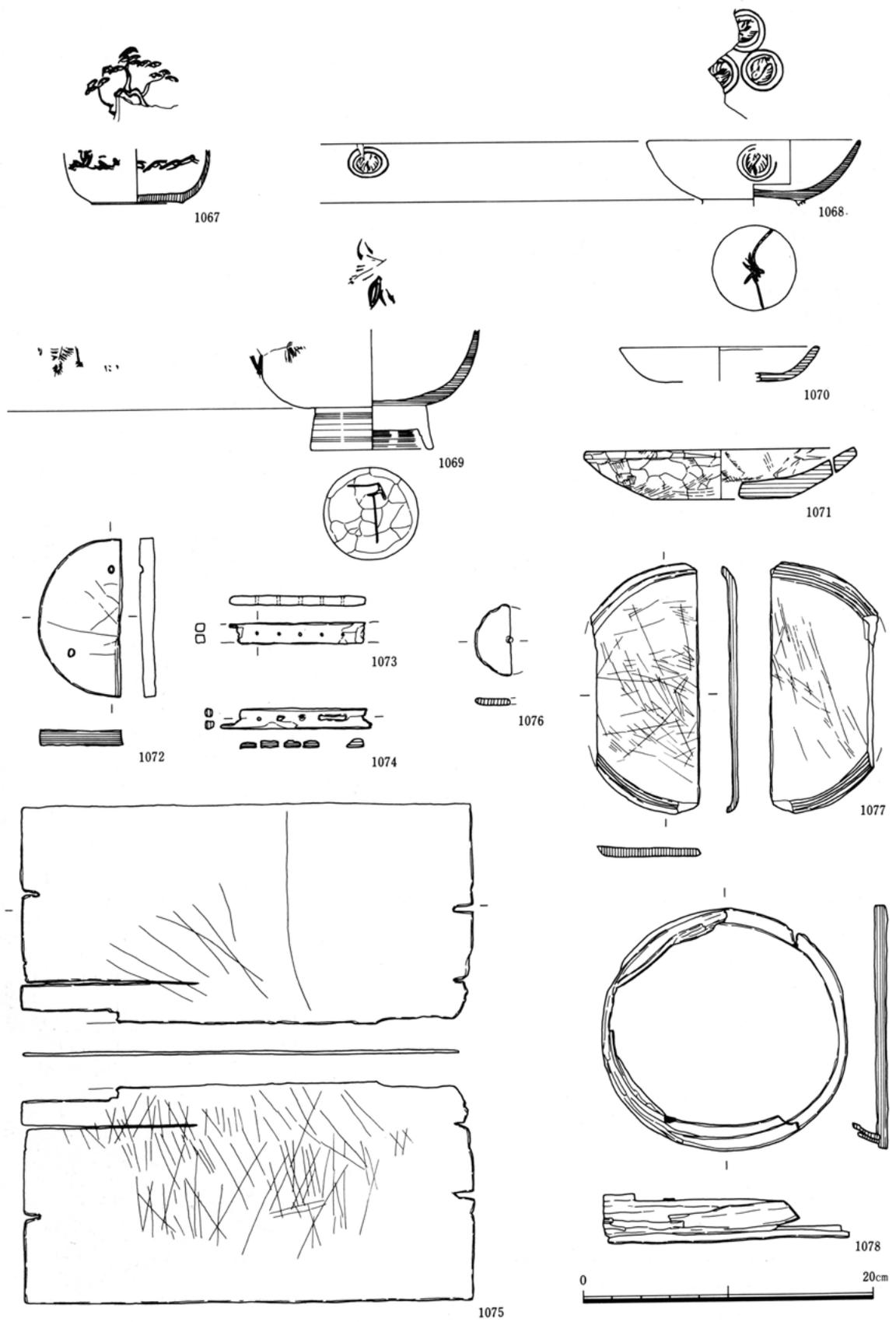


图94 木製品実測图(1) (S=1/4)

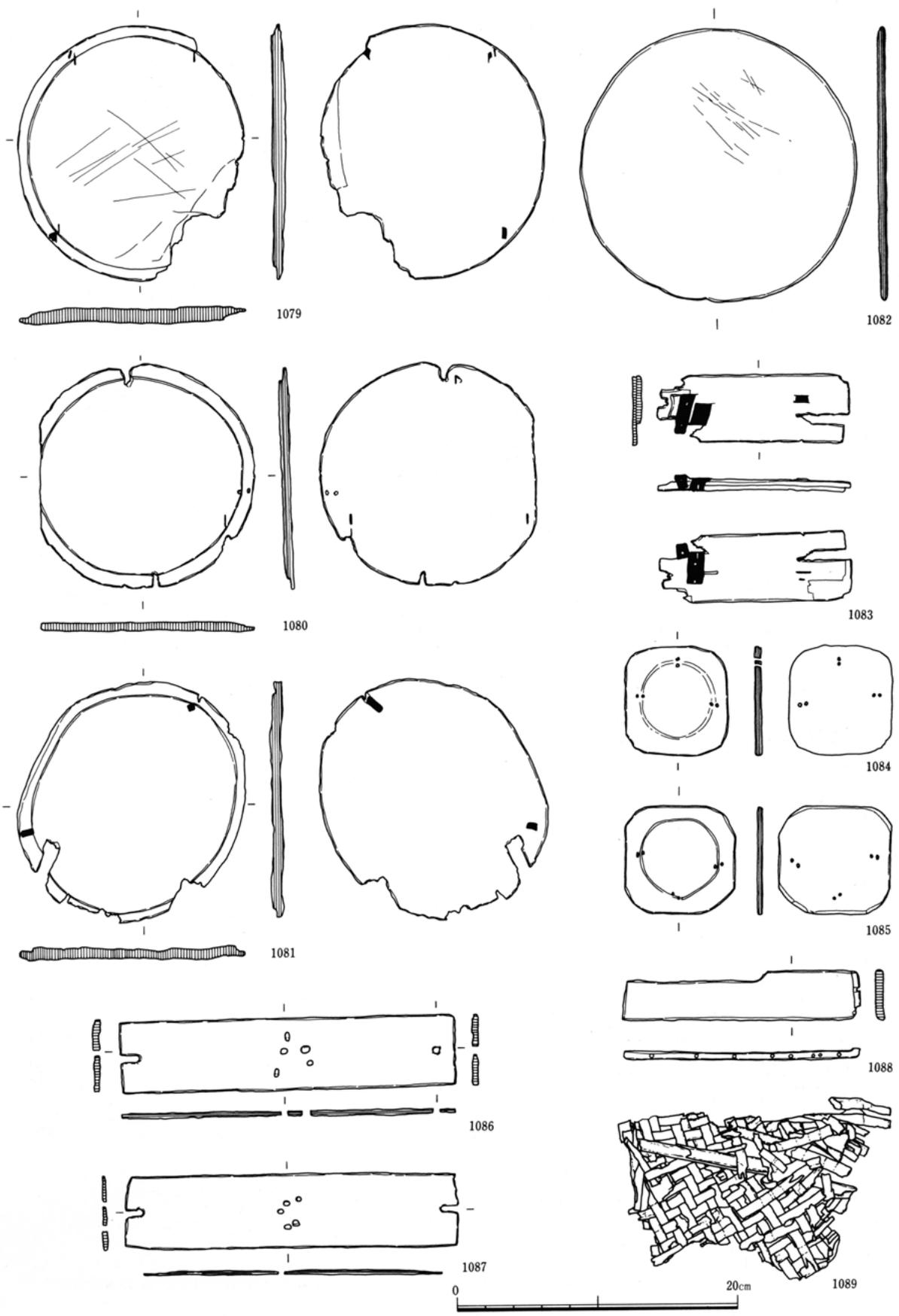


图95 木製品実測図(2) (S=1/4)

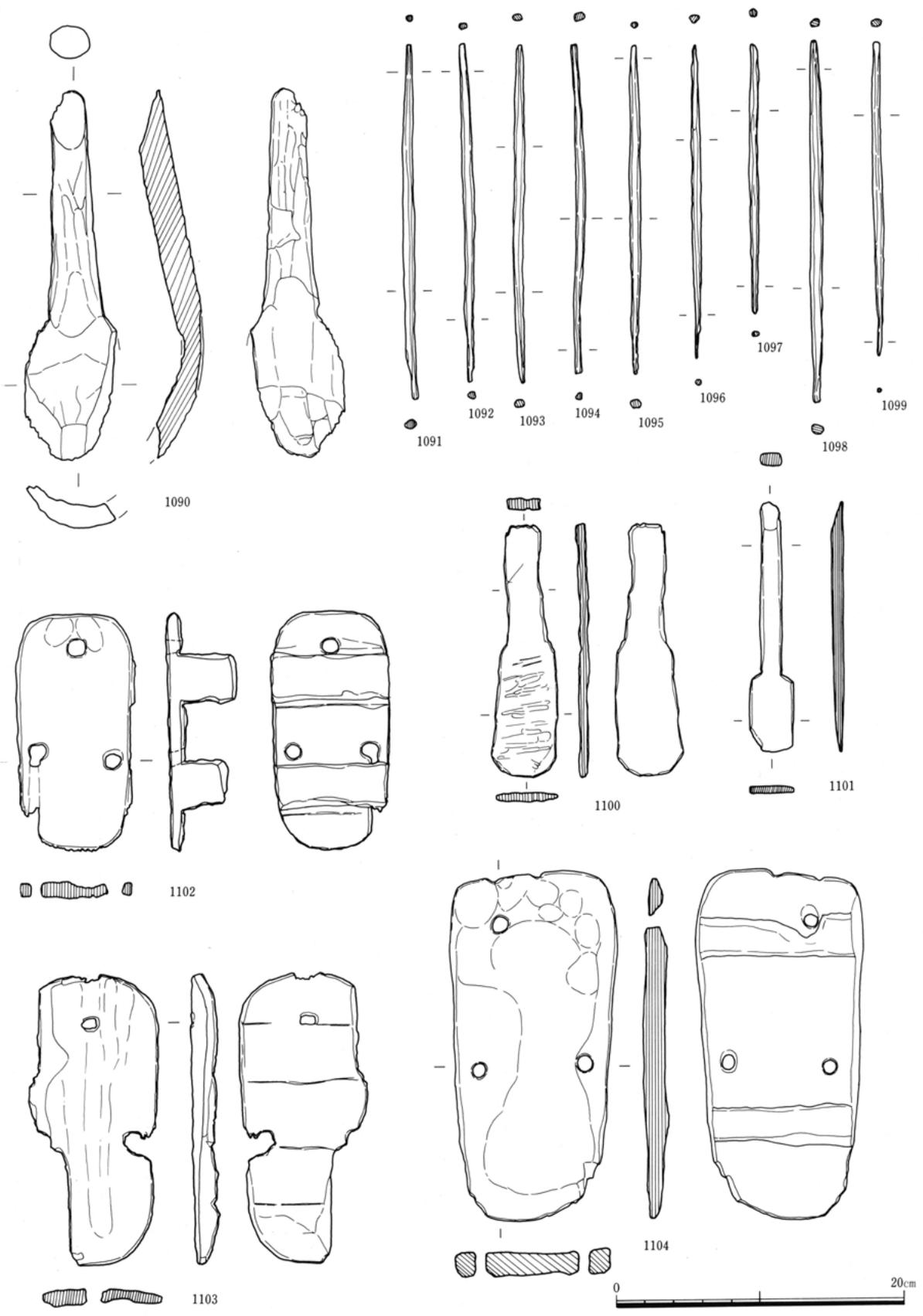
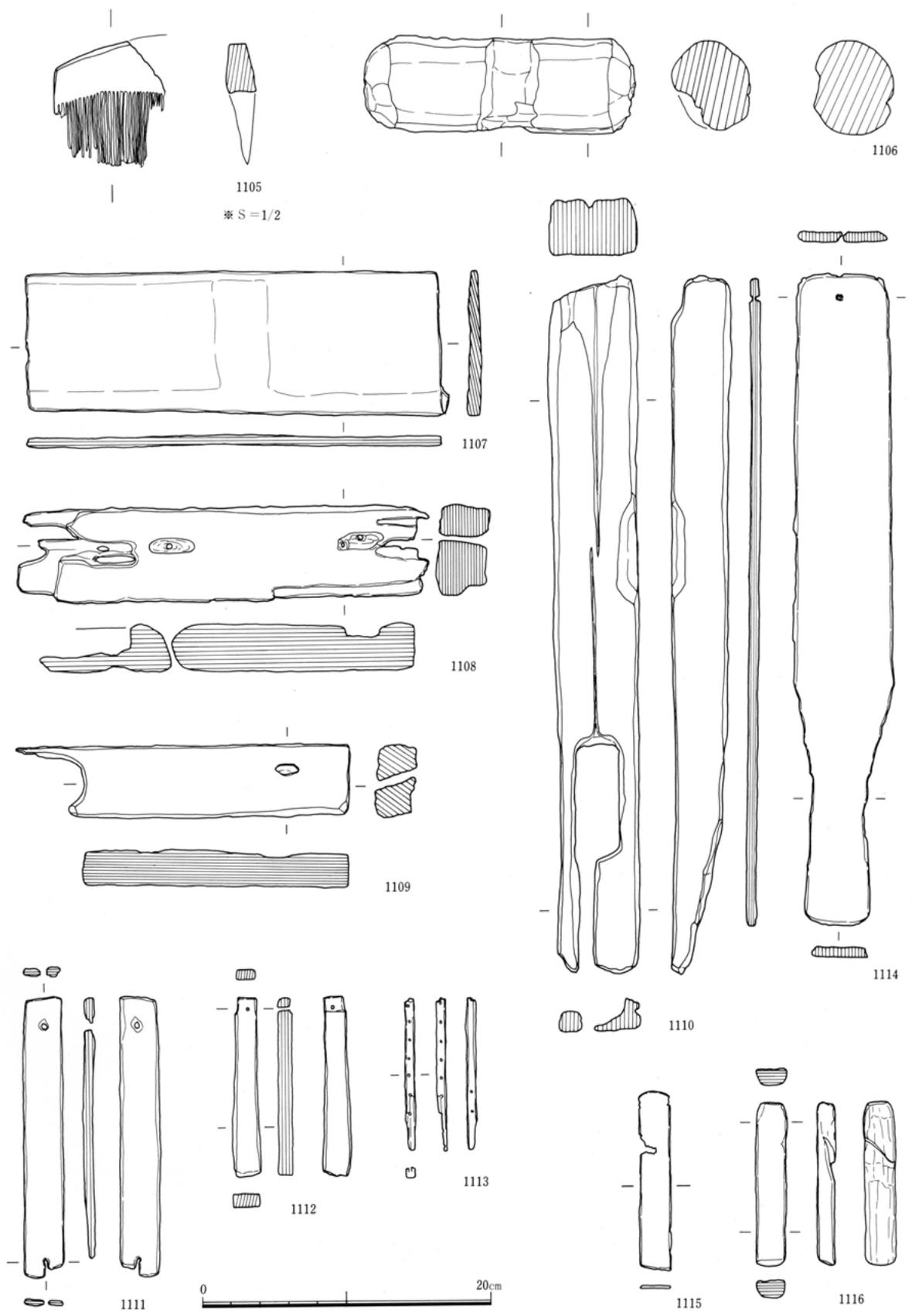


图96 木製品実測図(3) (S=1/4)



1105  
\* S=1/2

1106

1107

1108

1109

1114

1110

1113

1112

1111

1115

1116



图97 木製品実測図(4) (S=1/4)

## 4.10 石製品

**砥石** 確認できる石製品は28点あり、そのほとんどが砥石。砥石は石材\*1によって分類が可能で、1117・1118は泥質凝灰岩、1119～1124は凝灰岩製となる。これらはいずれも仕上げ砥と思われる。形態は直方体のものが多い。1123は平面形態が三角形で砥面がかなりの曲面となっている。1125は砂岩製で八面の砥面をもち、荒砥として使用され被熱の状態などから五徳として転用された可能性がある。

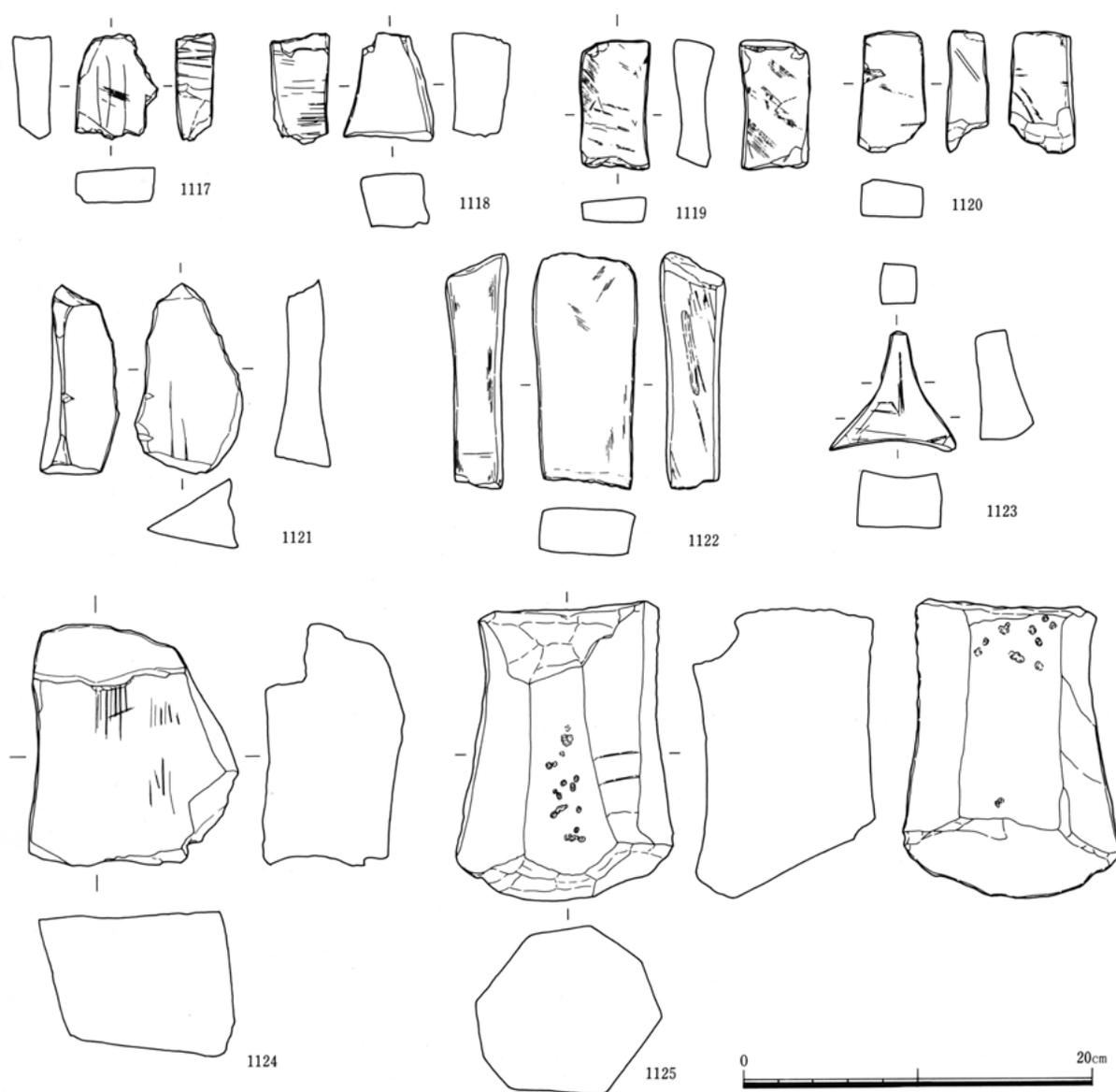


図98 砥石実測図 (S=1/4)

\*1 石材の鑑定は堀木真美子が行った。

## 4.11 金属製品

### 羽 釜 (図100-1127)

口径10.7cm、器高24.1cm、器壁の厚さ4～6mm。器形は長胴の丸底、体部から口縁部は法量  
はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部が内側に屈曲する、口縁端部の断面は三角形。体部上  
位に鑄が付く。

材質は鉄。ただ、体部下半から底部にかけて補修痕が認められ、この部分に関しては銅材質  
を用いている\*1。

出土地点については、94D旧流路(NR01)Ⅲa層で旧流路の左岸に近い地点、横位に出土状況  
なって出土した。Ⅲa層の時期が中世0～Ⅱ期に相当するため、12～13世紀に所属する羽  
釜といえる。時期

鉄製の煮炊具は遺跡で出土する例は非常に稀。したがって、類例は非常に少ない。理由類例\*2  
に鉄製品は再鑄造を繰り返し用いるためと一般的に考えられている。鑄型の出土例に関し  
ては滋賀県栗太郡栗東町中村遺跡、富山県射水郡小杉町綿打池遺跡などから古代の鑄型が  
確認されている。また、鉄製羽釜を模倣した土器は数例確認されている。例えば、長野県  
石墨遺跡など長野県下から東に多く見られる。

### 小刀 (図99-1126)

小刀は93CSK06出土資料。鉄製品。刃渡りが現存で20.5cmを測り、柄部分は残存してい  
なかった。部分的に欠損しているもののほぼ完形品。時期は中世Ⅱb期。

### 銭 貨 (図101-1128～1151)

銭貨は総数49枚出土している。その内訳は図101に示した通り。種類は「皇宋通寶」「聖  
宋元寶」などの北宋銭、11～12世紀に鑄造された銭貨が多く出土している。分布は93Aの  
居住域Ⅰ周辺に比較的多くなる。

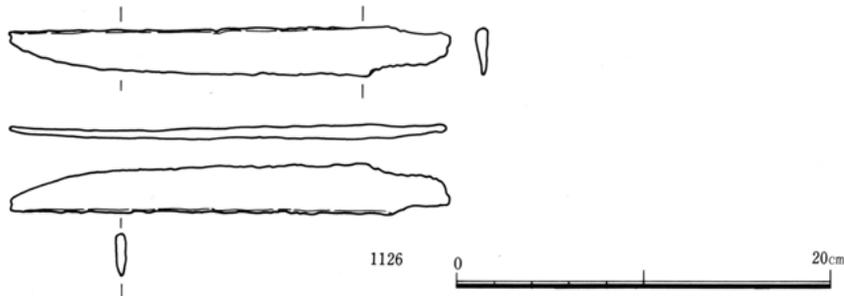
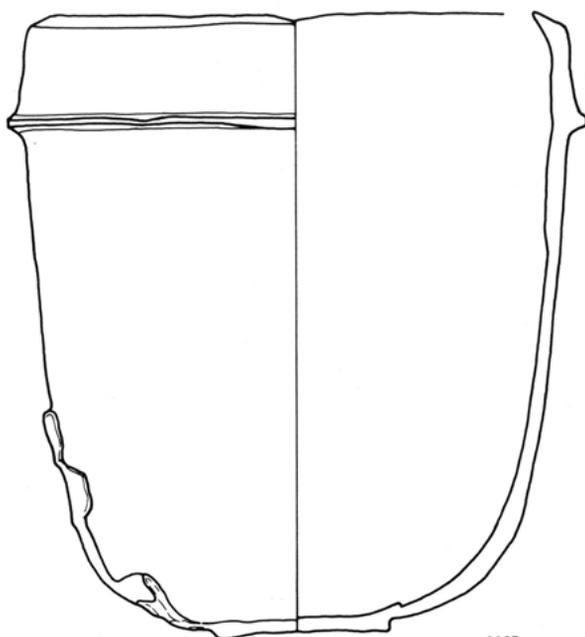


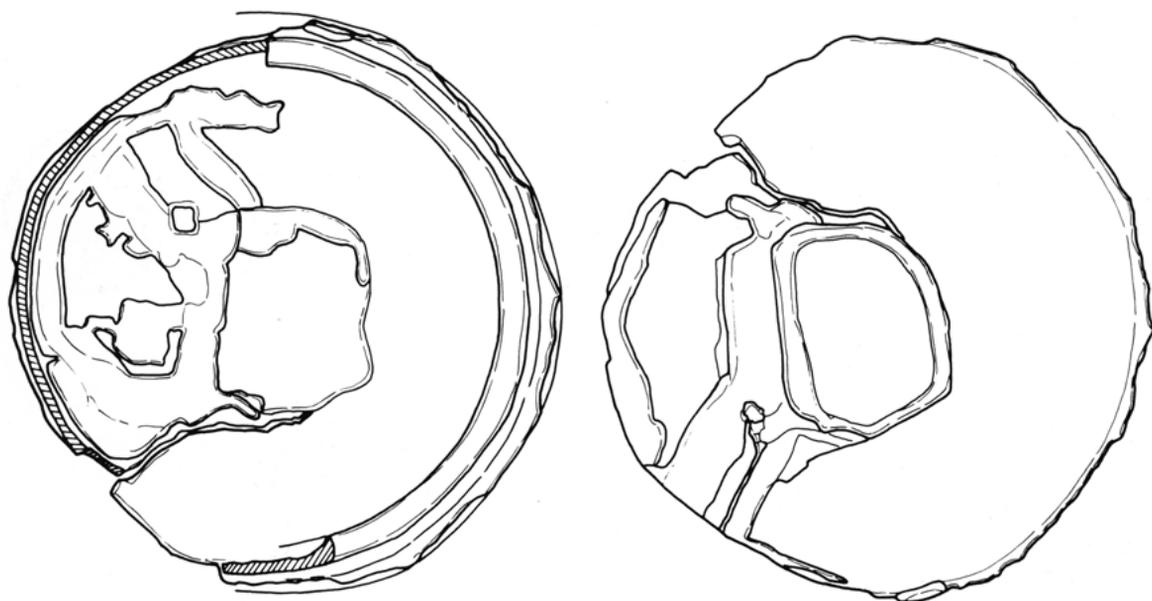
図99 小刀実測図 (S=1/4)

\*1 材質鑑定にあたっては、奈良国立文化財研究所の所有する蛍光X線測定器を使用させていただいた。

\*2 五十川伸矢「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗歴史博物館研究報告』第46集1992国立歴史民俗歴史博物館



1127





1128  
開元通寶



1129  
淳化元寶



1130  
至道元寶



1131  
景德元寶\*



1132  
祥符元寶



1133  
祥符通寶



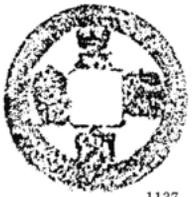
1134  
天聖元寶



1135  
天聖元寶



1136  
皇宋通寶



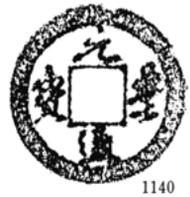
1137  
皇宋通寶



1138  
熙寧元寶



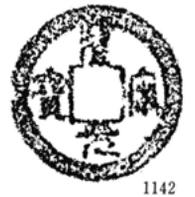
1139  
元豐通寶



1140  
元豐通寶



1141  
元祐通寶



1142  
聖宋元寶



1143  
聖宋元寶



1144  
政\*通\*



1145  
\*和\*寶



1146  
嘉定通寶



1147  
皇宋元寶



1148  
洪武通寶



1149  
寬永通寶



1150  
寬永通寶



1151  
寬永通寶

開元通寶 1	淳化元寶 1	至道元寶 1	景德元寶 1	祥符元寶 1
祥符通寶 1	天聖元寶 2	皇宋通寶 5	熙寧元寶 2	元豐通寶 2
元祐通寶 1	聖宋元寶 3	政和通寶 2	嘉定通寶 1	皇宋元寶 1
洪武通寶 1	永樂通寶 1	寬永通寶 7	不明 15	
				合計 49

圖101 錢貨拓影圖 (實寸大)

## 4.12 その他、特殊遺物

### 4.12.1 土製品 (1152~1155)

製塩土器 (1152~1154) いずれも知多式4類で、脚部のみ。尾張北部で製塩土器の類例は少ない。

紡錘車陶製 (1155) 93Aから出土。

### 4.12.2 木製品 (1156)

呪符木簡 長さ32cm、幅2cm、厚さ7mmの板、94GSX02から出土した。墨書による符号の記載がある。古代Ⅲc期。

### 4.12.3 石製品 (1157・1158・1160)

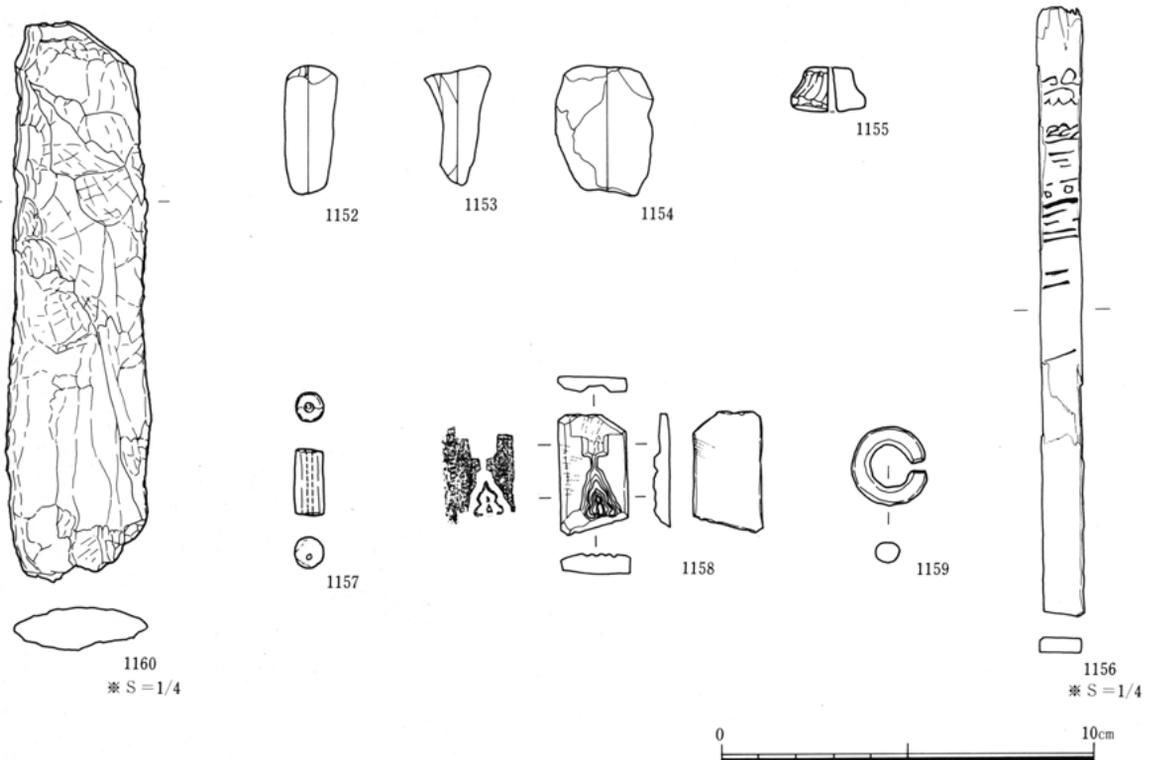
管玉 (1157) 長さ1.8cm、幅8mm、中央の孔は片方から開けているようで、片側で2mm、もう一方で1mmとなる。石材は緑色の凝灰岩。93Dより出土。時期不明。

不明石製品(1158) 石材は凝灰岩で、一般的には砥石に使用される石材。幅1.9cm、厚さ4mm、長さが残存長で3.2cmを測る。特徴としては、片面に紋様が刻み込まれており、もう一方の面は研磨されている。94I SB02出土資料。古代Ⅲa期。

板碑未製品 (1160) 石材は緑泥片岩、文字などは刻まれていないものの、板状に加工されていることから板碑の未製品とした。

### 4.12.4 金属製品 (1159)

耳環 94Cから出土。金メッキのある銅製品。調査区南に隣接する門間古墳に関連する遺物か。



1994年(平成6年)2月19日

鎌倉初期の畑跡

昆虫ダンゴ  
ほんのため

一宮で7カ所から

「害虫を泥で捕った」  
「羽飾り作った残り」

「昆虫ダンゴ」読者ら解釈



「昆虫ダンゴ」の由来は、鎌倉初期の農家の知恵から来るといわれています。害虫を泥で捕まえて、羽飾りを作った残り物から作られたとされています。

「害虫を泥で捕った」「羽飾り作った残り」というのは、鎌倉初期の農家の知恵から来るといわれています。害虫を泥で捕まえて、羽飾りを作った残り物から作られたとされています。

中世から続いた  
「農家の知恵」か



中世の田舎

まじない・駆除とも  
食用

今も鮮やか金緑色

濃尾平野  
12世紀以前にも大地震

一宮の大毛沖遺跡から新説 周期解明手がかかり



濃尾平野の歴史は、古くから地震の多い地域として知られています。12世紀以前にも大地震が発生したと推定されています。

一宮の  
巨大地震の跡？



発生は12世紀以前と推測  
「濃尾地震」周期知る手がかりに

一宮を一般向け現地説明会

濃尾平野の歴史は、古くから地震の多い地域として知られています。12世紀以前にも大地震が発生したと推定されています。

新聞記事にみられる  
大毛沖遺跡

出雲国

鎌倉初期以前に「濃尾級」大地震？  
一宮の遺跡で痕跡発見

出雲国... 濃尾平野の歴史は、古くから地震の多い地域として知られています。12世紀以前にも大地震が発生したと推定されています。

考古ファン  
400人にと  
大毛沖遺跡  
一宮市... 濃尾平野の歴史は、古くから地震の多い地域として知られています。12世紀以前にも大地震が発生したと推定されています。

## 要 旨

中部地方最大の面積をもつ濃尾平野には、古くから多くの人間が集中して居住し、経済・社会活動の中心地となってきた。それは昨日・今日にはじまったことではなく、有史以来の人々が幾世代にも渡って育んできた結果であることが、近年の発掘成果によって明らかにされてきている。このような経済・社会活動の発展には、人間活動の影響もさることながら、その地域の地理や気候条件などの自然的要因（立地条件）に恵まれていたことも重要な要素であろう。本章以降では人間の生活活動の基盤となる地盤地質の構成と、それを取り巻く環境変遷の歴史を明らかにしていきたい。

## 目 次

- 5. 1 自然環境 鬼頭 剛
  - 5. 1. 1 大毛沖遺跡の地形・地質
  - 5. 1. 2 大毛沖遺跡の層序
  - 5. 1. 3 各調査区の層序
  - 5. 1. 4 旧流路堆積物
- 5. 2 歴史時代の自然災害 服部俊之
- 5. 3 生活環境 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美
  - 5. 3. 1 花粉・珪藻・プラント・オパールからみた古環境
  - 5. 3. 2 93A区（調査区西壁）の分析結果
  - 5. 3. 3 93A区（S X01）の分析結果
  - 5. 3. 4 94G（旧流路）の分析結果
  - 5. 3. 5 94G区（護岸施設堆積物）の分析結果
  - 5. 3. 6 古環境についての考察
- 5. 4 樹木の利用 堀木真美子
  - 5. 4. 1 はじめに
  - 5. 4. 2 同定方法
  - 5. 4. 3 同定結果
  - 5. 4. 4 まとめ
- 5. 5 愛知県一宮市大毛沖遺跡から得られた昆虫群集について 森 勇一
- 5. 6 生産活動
  - 5. 6. 1 大毛沖遺跡出土古代工器の蛍光X線分析 三辻利一
  - 5. 6. 2 重鉍物分析 矢作健一

## 5.1 自然環境

### 5.1.1 大毛沖遺跡の地形・地質

尾張地域の人々の生活基盤となっている濃尾平野は、伊勢湾に臨む低平地であり大部分 沖積平野が完新統堆積物で埋積された沖積平野である。平野西縁は養老山脈に、東縁は台地や段丘群が発達する更新統堆積物によって画される。沖積面には東から木曾川・長良川・揖斐川の3河川が流れ込み、大量の土砂を運搬・堆積させ今日の沖積地形をつくりあげた。

木曾川で境される愛知県側の沖積平野面は東西およそ25km、南北およそ40kmにおよび、その面積は人の生活基盤面としては関東平野・大阪平野に並ぶ、わが国有数の平野である。

沖積平野の地形は一般に、扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯の3地帯に区分できる。濃尾平野は3地帯が明瞭に区分できる模式的な平野といえる。犬山市付近を頂点として半径およそ12kmの犬山扇状地（木曾川扇状地）が広がり、標高およそ10mラインまでが扇状地帯にあたる。平野の南部・南西部にかけての標高およそ2mより低い地域が三角州帯であり、伊勢湾に臨みほぼ平坦な面が広がっている。上記の扇状地帯と三角州帯とに挟まれた部分が自然堤防帯となる。自然堤防帯の地形勾配は、それまでの扇状地帯に比べて著しく緩やかになる。堆積物の粒子の大きさも、扇状地帯が礫を主体とするのに比べて細かくなり、砂や砂質堆積物を主体とするようになる。それらの堆積物は旧流路に並行に狭長な地形的な盛り上がり（微高地）を形成する。

大毛沖遺跡は一宮市大毛地区に位置する古代～中世にかけての遺跡である。調査区全体はおよそ37612㎡におよぶ面積を有する。調査区のある大毛沖地区の北側およそ2.5kmには木曾川が流れている。調査区が設定された現地表面の標高はおよそ9mであり、前述した沖積地形の区分帯でいえば、扇状地帯が自然堤防帯へと移り変わるちょうど境界部に当たっている。

自然堤防帯には、さらに小単位の微地形が存在する。模式的には、自由蛇行するチャンネル（流路）とチャンネルの脇に形成される自然堤防、さらにその外側の後背湿地で構成される。調査地を含めた周辺地域では、これらの地形が明瞭に認められる。例えば、一宮市更屋敷、光明寺、田所、大毛の東部地域、木曾川町黒田、内割田には自然堤防が発達しており、標高およそ10mほどの微高地を形成している。対照的に標高約9mの部分は後背湿地となっており、そのほとんどが水田として利用されている。調査区も調査に入る前はほとんどが水田であった。

ところで、今でこそ木曾川の流路は川面より数m高い強固な堤防で固定され、強制的に 木曾川の流路幅を規制されている。しかし、現在のような位置を流れるようになったのは、歴史的 支流には慶長15年（1608年）に始まる木曾川の築堤工事がおこなわれてから以降のことである。それ以前には木曾川から南西方向に幾筋もの支流が流れていた。それらは東から一之枝川、二之枝川、三之枝川、黒田川と呼ばれていた。大毛沖地区はこのうち黒田川の流路にあたっている。大毛沖地区の木曾川に近いというその地理的位置は、水運や水利といった

人々に恩恵を与える面と同時に、洪水などのように多大な被害を与える面も持ち合わせていたことだろう。

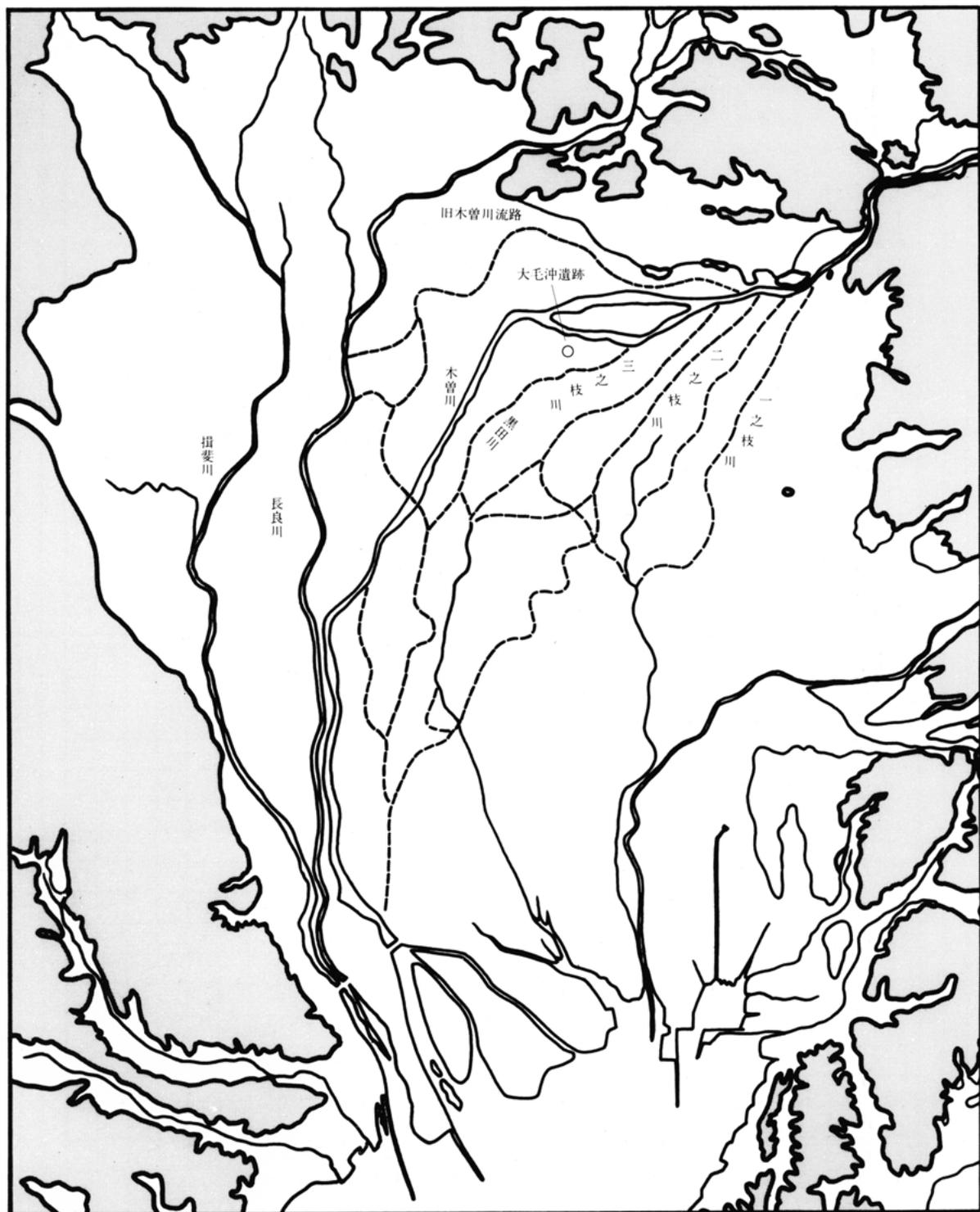


図103 大毛沖遺跡および旧流路位置  
(図は『東海其自然史』より引用)

一之枝川、二之枝川、三之枝川は1608年に閉め切られた。  
木曾川は1586年以前は現在よりも北を流れていた。

## 5. 1. 2 大毛沖遺跡の層序

木曾川から分派した支流の存在、古文書にみられる洪水の歴史などから、当地は有史より河川流路と洪水ともなう堆積物の埋積量の大きい地域であった。実際に大毛沖遺跡の古代～中世の遺構面は、現地表面をおよそ1 mほど掘削することで検出される。言い替えば、過去から現在までにそれだけ多量の碎屑物が当地にもたらされた結果でもある。大量の土砂を運んでくるためには、河川のエネルギーもそうとう高かったと期待され、現に遺跡を構成する堆積物は砂質堆積物で占められる。

大毛沖遺跡では発掘調査終了後、遺構面のさらに下の堆積物の状況を把握するため、重機を用いて更に深く掘削（深堀）した。これをほとんど全ての調査区で実施した。ここではその調査結果を用いて、大毛沖遺跡の層序について述べる。

図104は大毛沖遺跡の模式層序である。堆積物は下位の礫層から上位の砂質シルト層～シルト質粘土に至る上方細粒化傾向を示す。下位の堆積物より順を追って述べる。

### 1. 小礫～大礫層

層相：本層は主に礫からなる層である。礫径4～11cmの中礫を主体として大礫を含む層である。最大7cmの礫がみられる。塊状・無層理で、礫種は主に濃飛流紋岩などからなり、淘汰は不良である。マトリックス（基質）は粗粒砂からなる。礫と基質との関係は、礫の占める割合が高く礫支持礫である。不淘汰礫であること、礫支持礫であることから考えて扇状地性堆積物である。

### 2. 中粒砂～粗粒砂層

層相：基質を含まず白色～灰白色を呈する砂層である。粒径は中粒～粗粒であり、まれに小礫～細礫を挟む。トラフ状斜層理がたいへん明瞭であり、ひとつのセットはおよそ20cmである。シルトや粘土などの基質をほとんど含まずトラフ状斜層理が明瞭であることから、ある程度の流れをもち、デューン（砂堆）を形成する河川流路内の堆積物である。

### 3. シルト～砂質シルト層

層相：淡褐色～淡灰色を呈する主にシルトからなる層である。砂を含む割合は調査区ごとに変化し、砂質シルト～シルト質極細粒砂までの幅をもつ。本層は黒色や褐色を呈し腐植質粘土を挟む。また、本層を削削して極細粒～中粒砂からなる小規模チャンネル（流路）がみられる。本層が大毛沖遺跡の主たる遺物包含層である。シルト～砂質シルトから構成されるため、自然堤防堆積物が氾濫原（流路縁辺）堆積物である。河川流路のその後の変遷ともなって微高地化し、そこに人の生活面（遺構面）が形成されたと思われる。

### 4. 粘土質シルト～シルト質粘土

層相：褐色～黄褐色を呈するシルト～粘土からなる層である。同じ調査区内でも場所ごとにシルトと粘土の割合は変化する。堆積構造はほとんど破壊されみられない。中世の遺物包含層であるとともに現世水田の堆積物となっているところもある。シルトと粘土を主体とし、まれに極細粒砂を含んでくることから、後背湿地堆積物である。

標高	柱状図	番号	色調	堆積物	堆積構造	堆積環境	遺構	時代
9.0 (m)		4	褐色	シルト質粘土	見られない	低湿地	水田	現代 中世
			黄褐色	粘土質シルト				
8.0		3	淡褐色	シルト	見られない (小規模流路)	微高地	居住域・畑地	古代II 古代I
			淡灰色	砂質シルト				
7.0		2	淡褐色	中粒砂	斜層理	河川流路	確認されない	
			青灰色	粗粒砂 (細礫挟む)				
6.0		1	淡褐色	小礫	見られない (淘汰不良)	扇状地	確認されない	
			青灰色	巨礫				

図104 大毛沖遺跡模式層序断面図

### 5. 1. 3 各調査区の層序

大毛沖遺跡の各調査区では、遺跡に設定してあるグリッドに沿って南北および東西トレンチを掘削し、堆積物の断面観察をおこなった。以下では各調査区で確認される堆積物の層序関係および特徴について述べる。尚、94C区・94D区・94G区については旧流路堆積物のところで詳しく述べる。

#### 94A区・94B区の堆積層序

図105は94A区と94B区にかけての南北およそ68mの断面図である。堆積物は下位のシルト質極細粒砂層からシルト質粘土層、シルト質極細粒砂層、シルト層へと変化する。図をみても明らかなように、各堆積物は標高およそ8.0mを基準として微少な凹凸をもっているものの、ほとんど水平に堆積していることがわかる。94A b区では堆積物は全体に北傾斜を示し、94A a区では対比される堆積物が南傾斜を示す。そのため94A a区と94A b区との間には粘土質シルト層を埋積させる以前に凹地が存在したことになる。

また、ほぼ水平な堆積物を削剝して細粒砂～中粒砂からなるチャンネル（流路）充填堆積物がみられた。

#### 94B区・94D区・94E区の堆積層序

94B区から94E区、94D区にかけて、東西方向に伸びるトレンチを掘削した（図106）。図に現れているのは東西トレンチの北側セクションである。ここでは東に向かうにつれて堆積物の変化をとらえることができた。

94B区ではおよそ4層～5層の堆積物がほとんど水平に堆積しているのがわかる。また、94B区西側ではそれまで最上位層となっていたシルト質細粒～中粒砂層が断面図西からおよそ28m地点において、下位のシルト質極細粒砂層を欠いて、より下位の粘土質シルト層にアマルガメイト（癒着）しているのがわかる。その部分から94E区にかけて堆積物の様相は一変する。堆積物の層序関係も、それまでほぼ水平を保ってきたものがあるときは斜交し、あるときはレンズ状に挟まれるようになる。このような堆積状況の変化は堆積物を運搬してきた水の物理条件が刻々と変化したことを示す。つまり、94B区から94E区（西から東）にかけて、徐々に流路内の様相を呈すようになってきたといえる。特に、94E区の西から22m付近でみられる、粘土層とシルト質極細粒砂層との境界部の東傾斜した堆積である黒色を呈する腐植質堆積物の集積と、その間にレンズ状に挟まれるシルト質極細粒砂層の存在は、水の物理条件が滞水域から流水域へと頻繁に変化したことをうかがわせる。

#### 94F区の堆積層序

94F区では調査区北側において東西トレンチを設定した。堆積物は粘土、シルト、細粒砂の互層からなる。各堆積物ともほぼ水平な堆積面を有する。

#### 94H区の堆積層序

94H区では調査区の南東および東西にトレンチを設定した。主にシルト～粘土質シルトと粘土との互層からなる。各堆積物は下位の地層の微少な凹凸を埋積する形でほぼ水平に堆積する。しかし、他の調査区に比べて堆積物の側方への連続性が悪くレンズ状を呈する。

特に、94H b区南北トレンチで確認される極細粒砂は、粘土～シルト質粘土層に挟まれ顕著なレンズ状堆積を示す。

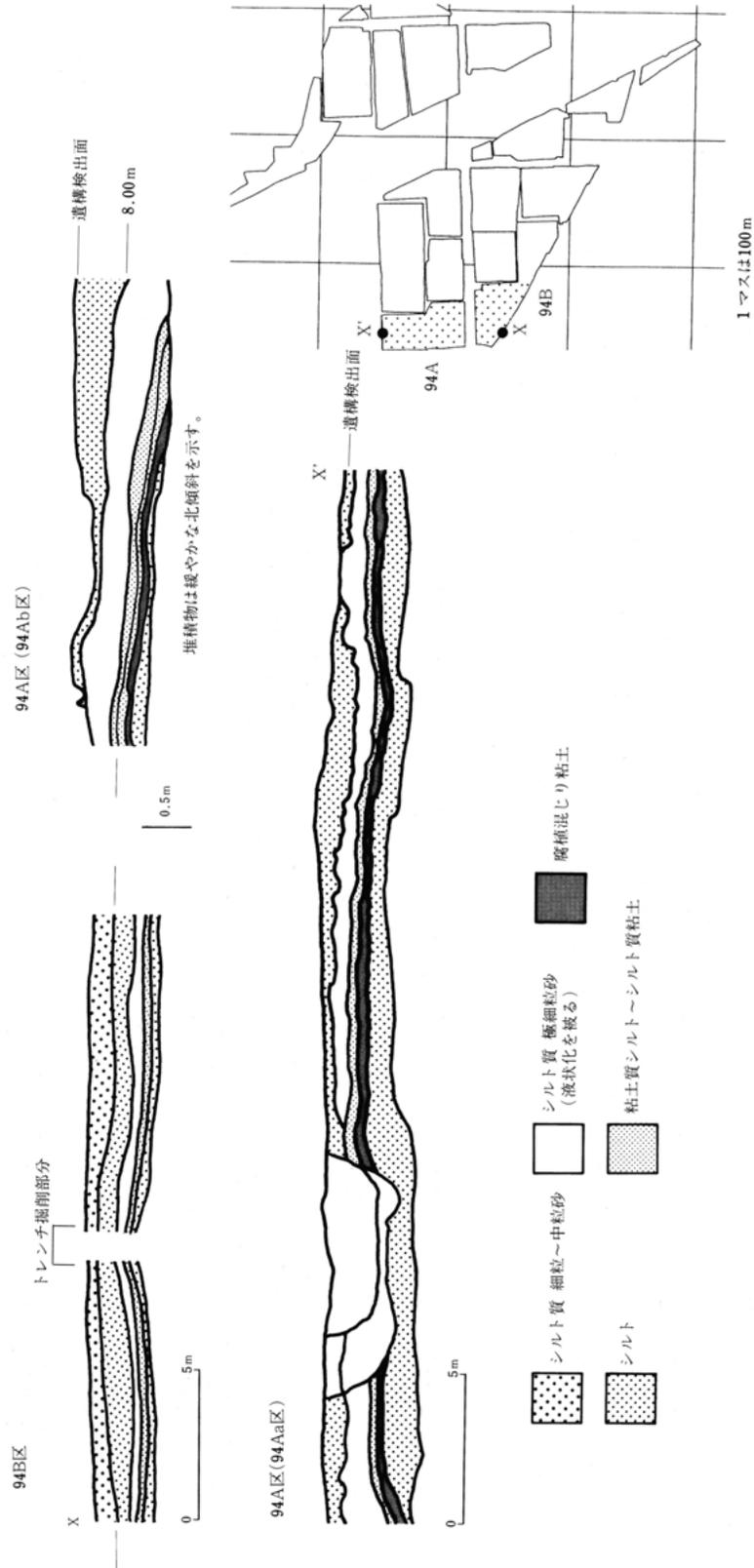


図105 94A・94B区南北断面図

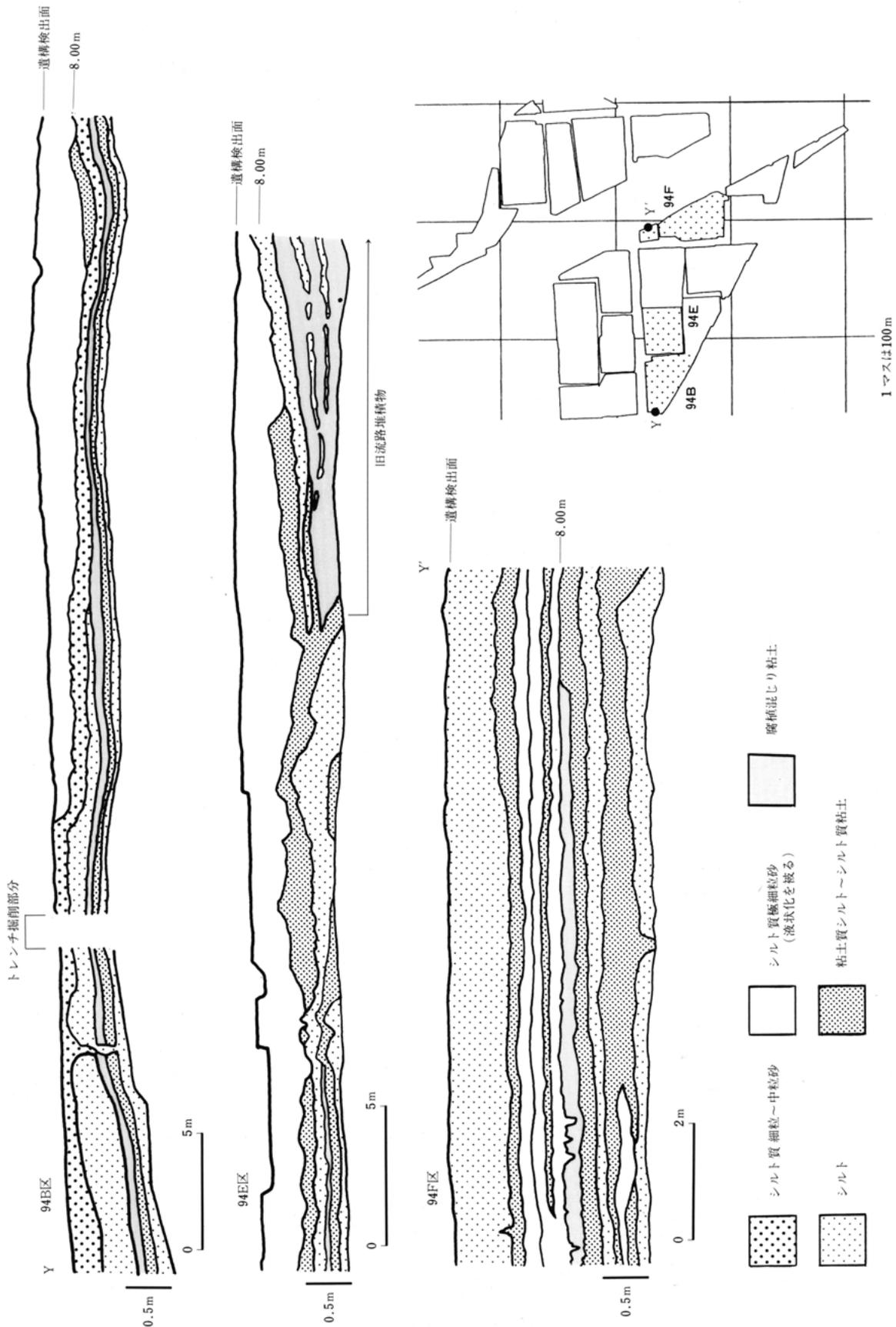
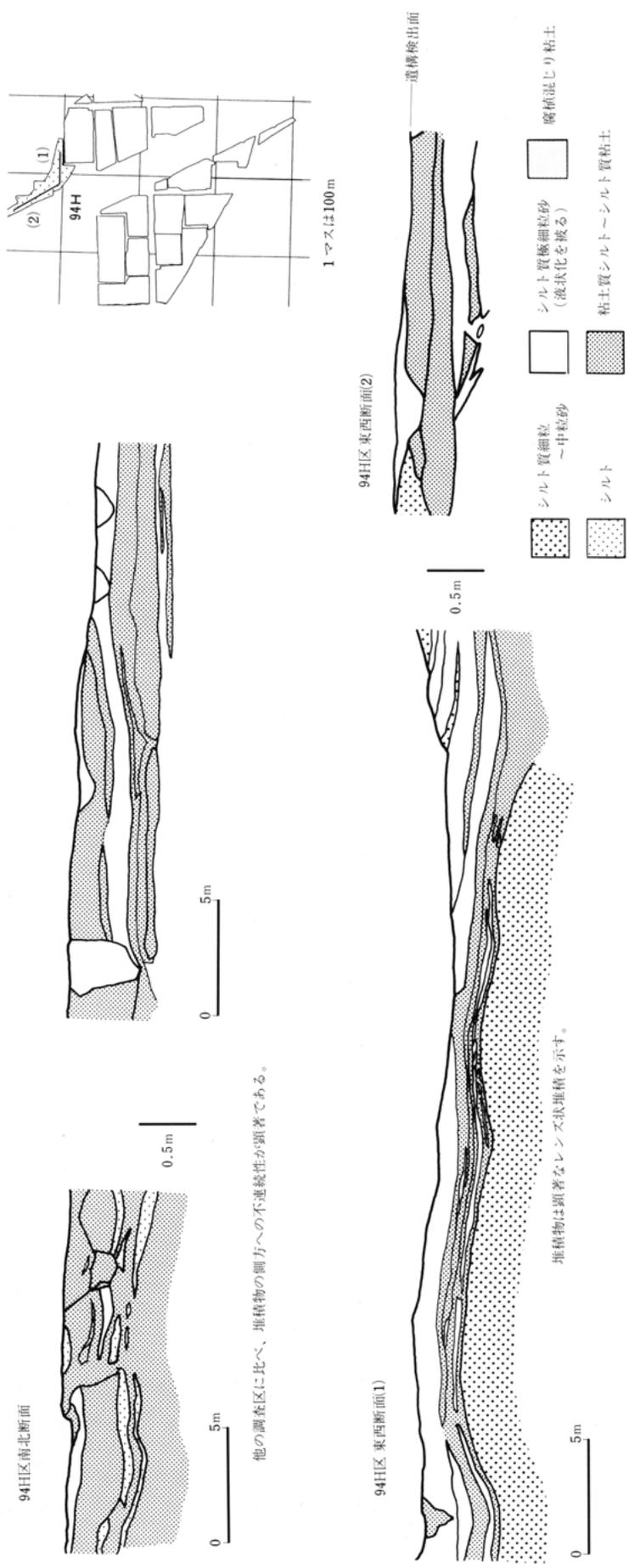


図106 94B区・94E区・94F区東西断面図



他の調査区に比べ、堆積物の側方への不連続性が顕著である。

図107 94H区東西および南北断面図

#### 5. 1. 4 94C・G区旧流路埋積堆積物

94C区・94D区・94G区では、旧流路を埋積する腐植質を多量に含んだ堆積物が確認された。この堆積物は、現地表面（標高およそ9m）からおよそ50cm掘り下げたところで河幅が確認されたのでわかる。以下では94C区と94D区で確認された河道を中心にしてその層序について述べる。

##### 旧流路堆積物の層序

94C区では調査区を南北に切る形で旧流路が確認された。流路幅はおよそ15mである。93C区  
検出面自体は流路の周囲が褐色を呈する極細粒砂質シルトであり、流路内は黒色～黒褐色を呈する腐植混じりのシルトが埋積しており、その色調のコントラストから判別可能である。緑灰色を呈するシルトと極細粒砂の互層の上位に黄褐色のシルト層が最大層厚50cmで堆積する。このシルト層の上に腐植質土層が堆積してくる。腐植土層自体は、その色調から黒褐色腐植質粘土層から始まり明褐色シルト層にいたる、層厚およそ1.5mの部分をなす。断面全体では腐植質部はおよそ12層認められた。また、旧流路の両翼はシルトと極細粒砂との互層となっていたが、後世の地震の影響によって堆積構造が失われてしまっている。しかし、堆積構造は消失しているものの、堆積物全体は東におよそ30°傾いている。この斜層理は94C区でみられる河川が東方に移動していくのに従ってその粒度も細くなる。また、基盤層は粗粒砂からはじまって極細粒砂にいたる上方細粒化の傾向がみられる。流路を埋積する堆積物の基底面は流路中央部（断面図の東より11m地点）で標高が最も低く、東西方向（河の両翼）に向かって傾斜およそ20°をもって徐々に地形高度に上げていく。基盤層である砂優勢の堆積物は斜層理をもち、粗粒～中粒砂と粒度も大きい。水のエネルギーが急激に減水したか、流路のジャンプによって取り残された低い部分となったのか理由はいずれにせよ、それまでの砂優勢の堆積物を切る形でシルト層が堆積しているので、流路の埋積の時期はシルトの堆積時からと考えられる。

94G区では94C区で確認された流路の北東への延長部が確認された。流路幅はおよそ16mである。94C区と同様に、検出面では極細粒砂と流路内を埋積する腐植質堆積物との色調の差として明瞭に捉えることができる。ここでみられる堆積物は発掘調査区内で最も層厚が厚く、基盤砂層との境界の標高も低い（標高およそ7.5m）。図108は94G区の流路断面図である。灰黒色を呈する塊状・均質な粘土層を基盤層として、その上に流路埋積堆積物が層厚およそ2mで堆積している。ここでも94C区と同様に、濃緑色を呈する腐植質粘土層を基底とし、その上位に褐色腐植質粘土（一部、灰色シルトとの互層部分あり）、明褐色粘土、塊状・均質な褐色粘土、腐植が混じる褐色粘土、レンズ状に挟まれるオリーブ灰色シルト質極細粒砂、オリーブ灰色腐植質粘土の順に堆積する。各堆積物は最大層厚を示す断面図東からおよそ6m付近を中心として、その両翼方向（東西方向）に標高を徐々に上げながらその層厚を減じていく。また、腐植混じりの黒褐色粘土層の上面には変形構造がみられ凹凸を示す。全体に94G区では94C区に比べて腐植を含有する層以外の堆積物がかなり細粒であり、粘土が卓越するのが特徴である。

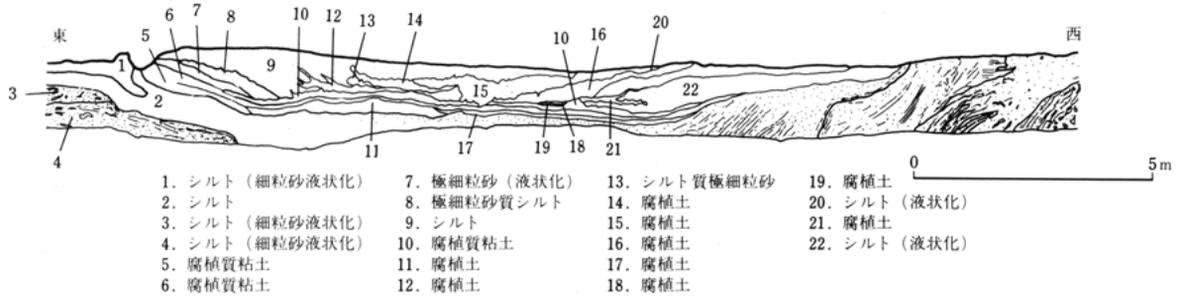
94D区

94D区の旧流路堆積物(図110)は中粒～粗粒砂を基盤とし、その上位に綠色腐植質土、黑色腐植質土、灰褐色粘土質シルト、黄灰色粘土質シルト層、黑色腐植質土、暗褐色粘土質シルト、暗灰黄色シルトの7層が堆積する。下位の綠色腐植質土は基盤の粗粒砂層の直上に明瞭な境界面をもって堆積する。本層は分解の進んだ植物遺体からなり、塊状・無層理である。黑色腐植質土は層内に厚さ数mm程度の極細粒砂の薄層を挟み互層を呈する。

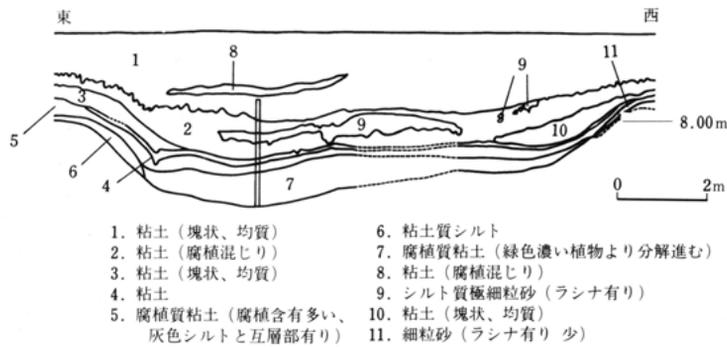
黑色腐植質土は河道の肩部に向かって標高を上げながら、灰褐色粘土質シルト層内に挟まれる。河道中央部では綠色腐植質土の直上に黑色腐植質土が癒着する。また、黄灰色粘土質シルトを欠いて、より上位の黑色腐植質土が下位の層をより上位の層が河道中央部にむかって覆っていくオーバーラップ構造を示す。これは流路が徐々に埋積されていく過程で水面が相対的に上昇したことを示す。

黑色腐植質土は波長およそ50cm、波高およそ数cmの軽微な褶曲構造を伴っている。平面では黑色腐植質土と極細粒砂質シルト層とが判然と入り混じった斑状構造を示す。堆積物が未固結時に地震により繰り返し応力を受けた結果生じた脱水構造である。

基盤砂層は粗粒砂から極細粒砂を経てシルトに変わる上方粗粒化傾向を示す。層理は東傾斜で、全体に西方から東方への側方付加(lateral accretion)が確認される。このことから、旧流路は河道を東方に移動させながら徐々に勢力が衰え、9世紀から12・13世紀にかけて水生植物が繁茂する滞水環境に移り変わったことがわかる。



94C区、旧流路東西断面図



94G区、旧流路東西断面図

図108 旧流路断面図(1) (位置は図110参照)

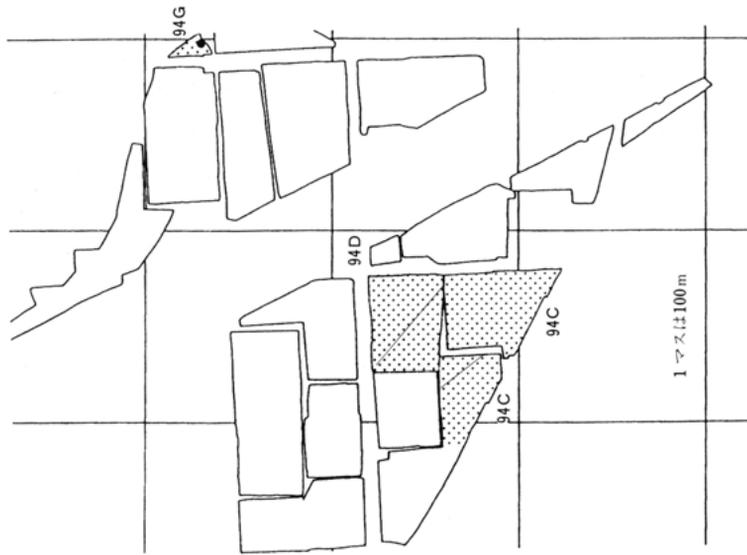


図109 旧流路断面写真

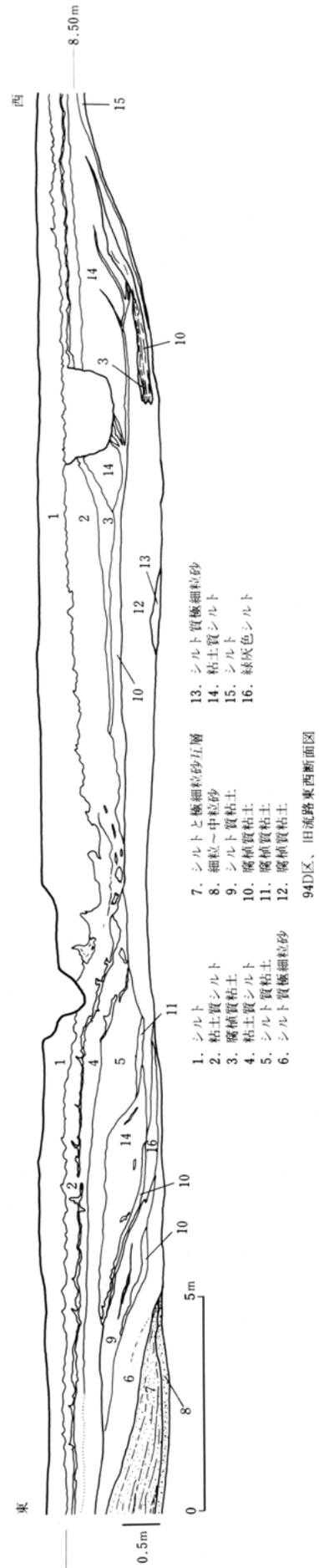


図110 旧流路断面図(2)

## 5.2 歴史時代の自然環境

**地震の痕跡** 沖積低地に立地する遺跡から大規模な地震の痕跡（地震痕）が、見つかることは一般的になってきており、地震考古学という新しい研究分野も生まれてきている。歴史時代の地震の研究は、当時の地震災害を推定する材料となるばかりでなく、繰り返し発生する地震の周期を予測するといった防災面でも注目を浴びている。ここでは、大毛沖遺跡で確認された地震痕を紹介する。

**濃尾地震** 大毛沖遺跡の立地する地域は、濃尾地震（1891年に発生）の際に根尾谷断層の濃尾平野への延長として形成された「岐阜—宮線」（活断層）のやや東側に相当する。活断層に近接する地域は断層が活動した時（この場合は濃尾地震の発生時期）に、非常に大きな被害を被ることが知られているが、大毛沖遺跡も例外ではなく、ほぼ全域にわたり検出された砂脈は当時の液状化の被害の大きさを物語っている。

観察された砂脈は、図111に示した2つのタイプに分類できる。このうち、Aタイプは濃尾地震の典型的な地震痕で、幅10cm程度、延長数10cm～数mに及ぶ砂脈が何本も雁行状に配列する。また、砂脈には明確な延びの方向性も認められ、概ね北東—南西に延びる。大毛沖遺跡では砂脈の延びの方向に調和的な、概ね北東—南西に延びる旧河川の存在が確認されていることから、砂脈の方向性は旧地形に支配されていると考えられる。

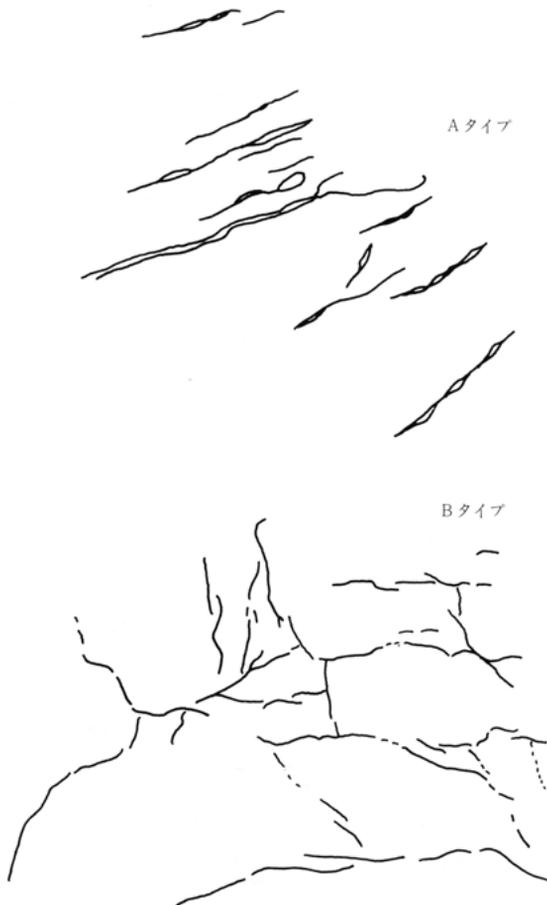


図111 濃尾地震による砂脈の分類

Aタイプ：旧地形または断層運動を反映  
Bタイプ：旧地形や断層運動とは直接結びつかない。  
地震動の影響が強い。

大毛沖遺跡においては、前述の濃尾地震の地震痕の他に、さらに古い時代の地震の痕跡 中世も確認された。このうち93G、94D、94Gのそれぞれの調査区では12～15世紀の範囲で発生したと考えられる地震の痕跡を確認した。以下にその記載を行う。

・93G区（図113）

93G区では、13～14世紀の遺物を多く含む地層に上端部を削られる砂脈が確認された。確認された砂脈は、図113の3灰色細粒砂層から噴き上げ、2の灰褐色砂質シルト層を引き裂いてほぼ垂直に上昇している。上端部は、1の中世遺物包含層である灰褐色粘土質シルト層の堆積により削りとられ、本来ならば存在したであろう噴砂丘は確認できなかった。噴砂の規模は、上昇量として最大25cmが確認され、幅は5～10mm程度、延長は50cm程度であった。延長方向は概ね北西―南東方向で、先に述べた濃尾地震による砂脈の方向とは明らかに異なる。

・94D区

94C・94Dから94G区にかけて分布する旧河道を埋積する堆積物中には、何層かの暗灰色～黒色腐植質シルト層が挟まれているが、このシルト層には堆積構造とは異なる構造が認められた。この構造の概略図を図112に示したが、これは河川内を埋積する堆積物が未固結な段階で比較的規模の大きな揺れ、すなわち地震による揺れにより形成されたものであり、液状化の一種と考えられる地震痕である。この地震痕が、河川内の堆積物（第Ⅲ層）を掘り込む形で形成された土坑により切り取られていることは、地震の発生年代を推定する上で非常に重要である。河川そのものは12～15世紀頃に埋積されていることが確認されているが、地震痕の構造を切り込む土坑は12～13世紀頃の形成であることから、12～13世紀頃の地震発生を考えるべきであろう。

さらに、この土坑中にも砂脈や土坑埋積物の流動化といった地震痕が確認できる。この現象については、中世以降のあらゆる時期の地震により形成された可能性があるが、埋土を構成するシルト層が流動化していることは、土坑埋積からさほど時間を経過していないとみるのが妥当であろう。従って前述の地震よりは後の時期の中世の地震を想定することになろう。

・94G区

94G区では旧河川を埋積した地層上に広がる噴砂を確認した（図114）。噴砂は、旧河川の基盤となる粗粒砂層から噴き上げ、12～13世紀の遺物を含む暗灰色砂質シルト層を引き裂いて、さらに上位の灰白色シルト質砂層上に噴き出し堆積面に平行に広がっている。堆積面に広がった噴砂は、噴き出し口がやや陥没するものの最大で5cm程度の高まりを有する噴砂丘を形成している。水平方向へは噴き出し口から両方向へ次第に厚さを減じ、1m程度の広がり呈している。この噴砂はさらに13世紀以降の遺物を含む灰色シルト質砂層に覆われている。このことから、地震の発生時期は13世紀頃と推定できよう。

以上の観察結果から、大毛沖遺跡周辺では規模的には濃尾地震に及ばないものの、液状化をもたらした地震が12～13世紀頃と13世紀以降の2回発生していたことになる。

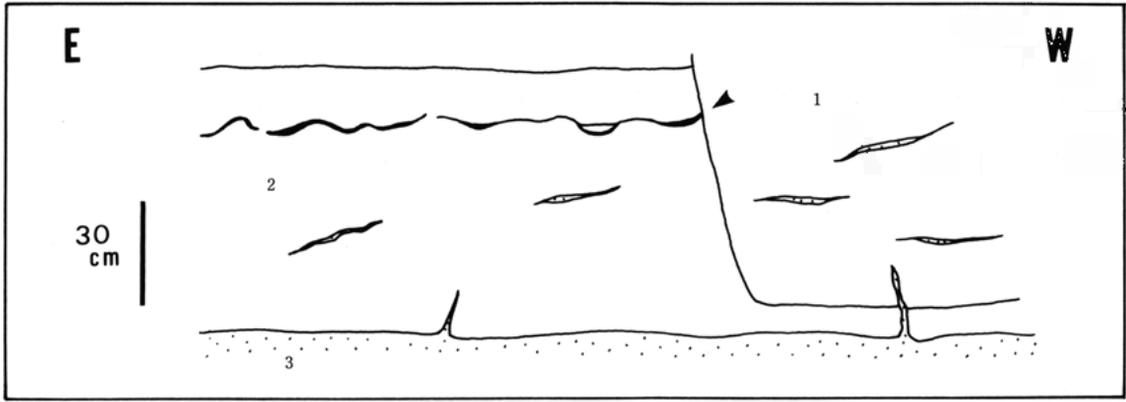


図112 94D区の地震痕

1：中世土坑の埋積物、2：旧河道埋積物、3：灰色細粒砂層

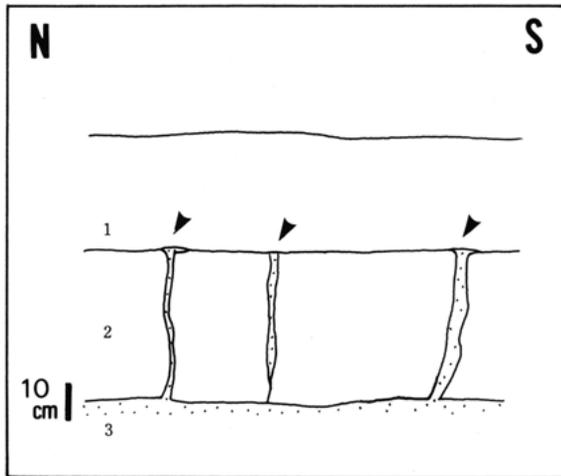


図113 93G区の地震痕

1：灰褐色粘土質シルト層  
2：灰褐色砂質シルト層  
3：灰色細粒砂質

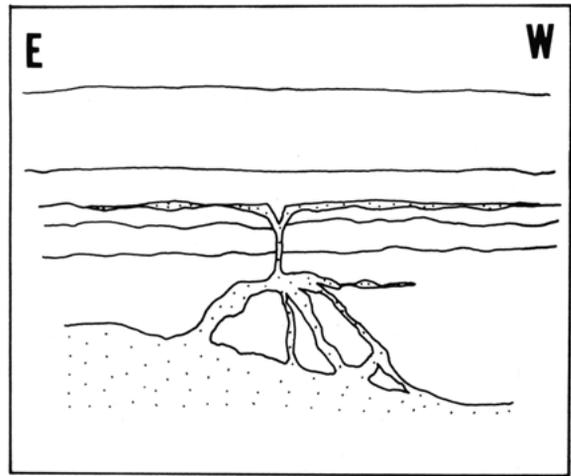


図114 94G区の地震痕

古代

93C区には北東—南西方向に流れていた河川の跡が存在する。この河川の跡には、砂で埋積された河川跡とシルトや泥で埋積された河川跡の2つが、それぞれ南北に平行している。このうち砂で埋積された河川跡の地下からは、大規模な地震によると考えられる地層の変形が確認された。この構造は服部（1994）により、地下の活断層の運動に連動して上位の地層が変形した“とう曲構造”ではないかとされた。その後、トレンチ調査による新知見の追加により、“とう曲構造”ではなく地震動による表層部の水平移動ではないか（服部，1995）との解釈がなされた。今回の報告では、周辺でおこなったボーリング調査の結果を追加してあらためてこの構造の記載、構造の解明を行う。

構造の記載

観察された構造は、図115のA—A'、B—B'に設定したトレンチ断面に典型的に現れている。このうちB—B'断面では、この構造を12世紀代の遺構が掘り込んでおり、少なくともこれより古い時代の地層の変形であることが断言できる。

A—A'

A—A'断面は、変形した地層全体の成り立ちをよく示した断面である。ここで記載事項をより簡略に説明するために、変形を受けた地層全体をA部層とするが、この断面の南端部で見られる地層の傾斜は、A部層形成以前にすでに存在していた緩やかな谷地形の南端部を示している。この谷地形は大毛沖遺跡で確認される旧河川と同じ方向性をもつ谷と

考えられるが、規模的にはかなり大きく、北端部は確認できなかった。A部層は、この谷を埋積するように堆積した砂—シルトの不規則な互層で構成されている。この砂—シルトの不規則な互層は、ほぼ水平に堆積しているが、断面図で示した北端部で著しく変形した構造を示す。この部分では、A部層中の黒色シルト層が急傾斜して北側の砂層と接している。傾斜角度は下部ほど強くほぼ直立した状態となる。さらに深部まで掘り下げたが、湧水のため変形した地層の先端部は確認出来なかった。

砂と接した部分のシルト層では水流による側方浸食を受けた部分も観察され、砂層中にも直立するラミナが見られた。

この変形はA部層内で累重的に見られるものではなく、図中に表現されているように一部では下方に向かって撓んでいる。

B—B'断面は、A—A'断面に平行に設定したトレンチであるが、この断面に示したB—B' Lは液状化した砂層を示している。また、A—A'断面と同様に地層の変形も確認できた。さらにこの断面では落差20cm程度の正断層も確認できた(図115→の部分)。この正断層は、地下から連続するものではなく、変形した地層内でのみ確認された小規模なもので、表層の地層が水平移動した際に生じたものと考えられる。

A—A'およびB—B'断面から地層の傾斜部はほぼ北東—南西方向に連続するが、その範囲は確認できなかった。

地層の急傾斜部を挟んでボーリング調査を実施し、その結果を図116に示した。沖積粘性上層、沖積砂質土層、沖積砂礫層とされた地下5mまでの地層境界には、分布高度差が見られなかった。この結果から判断する限り、地層の変形は地下構造まで達するものでなく、極表層部分の現象であると判断できる。従って、ここで観察された地層の急傾斜は、地下の断層活動を反映した“とう曲構造”とは考えられない。

ここで確認された地層の変形がどのように形成されたかを簡単に復元してみよう。構造の解釈 図117は、地層の変形過程を推定したものである。

1. は地震発生前の様子で、砂層上にシルト—砂の互層(A部層)が堆積している様子を示している。ここで大規模な地震が発生する。
  2. 砂層とA部層の境界で水平ずれが生じA部層のブロックが南に数m移動し、引きずられた力でA部層内に小断層(正断層)が生じる。同時に液状化した下位の砂層が、A部層の水平移動により生じた隙間から噴砂として噴き出す。
  3. 地震動が収まる前にA部層のブロックが北側に戻る。しかし、噴砂として噴き出した砂が抵抗となり、もとのように水平な状態にはならず折れ曲がり、液状化した砂層中に落ち込む。小断層により動きやすくなったA部層の上半部が下半部を覆うように落ち込み、移動が制限された下半部内部の地層にひずみが生じレンズ状の変形構造が形成される。
  4. 地震が収まった後の洪水により、落ち込んだシルト層は側方浸食を受ける。
- 以上のような過程を経て、この構造は形成されたのであろう。

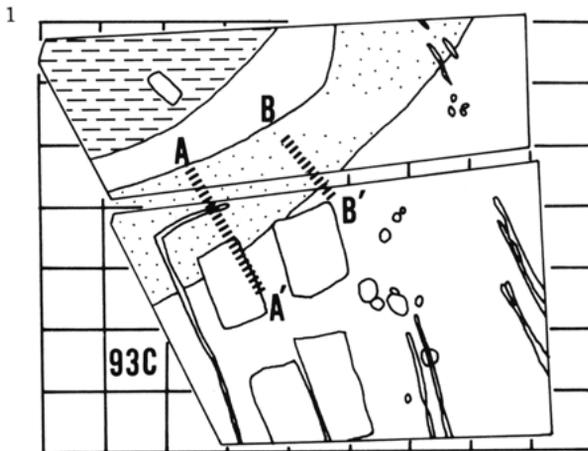
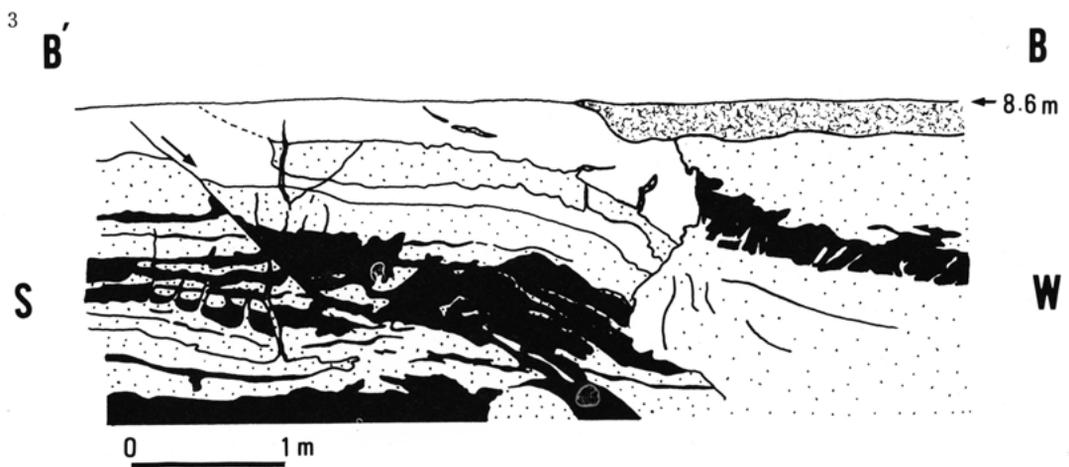
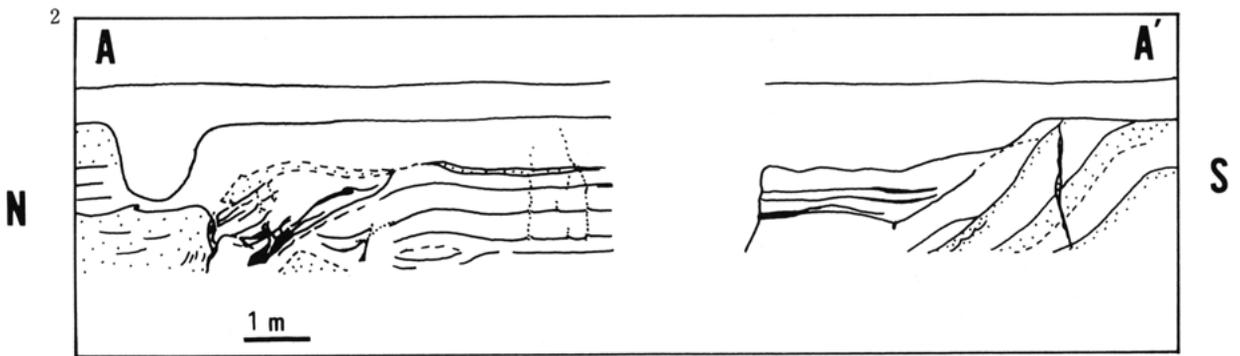


図115 93C区の地震痕

- 1 : トレンチ設定地点
- 2 : A-A'トレンチのスケッチ
- 3 : B-B'トレンチのスケッチ



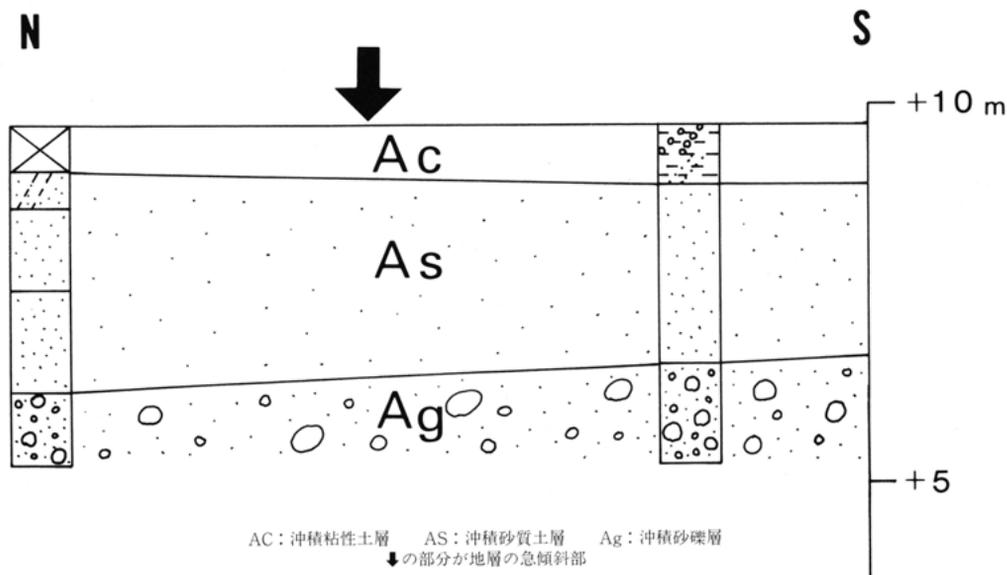


図116 ボーリング柱状図

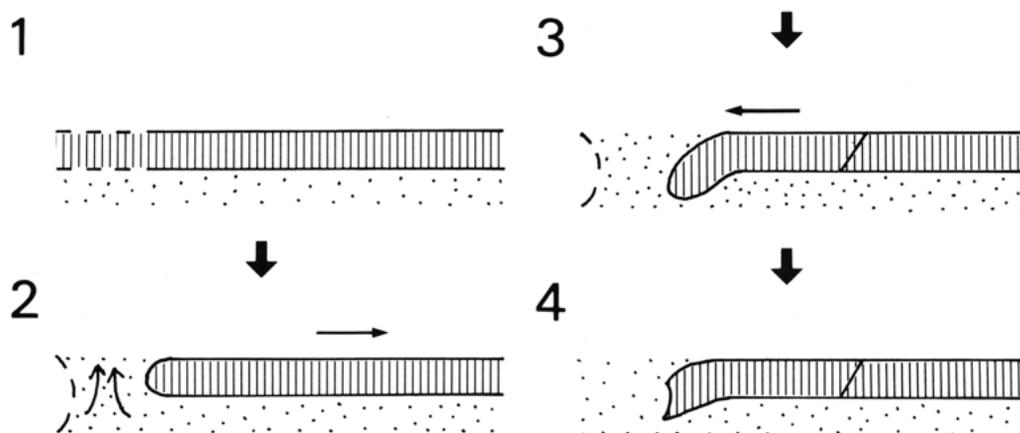


図117 地層の変形過程の模式図

ここでまとめとして、大毛沖遺跡で確認された地震痕から推定される大規模地震発生のまとめ時期を推定しておこう。新しい時代の地震からあげれば、1891年に根尾谷断層の活動によって発生した濃尾地震の影響はかなり大きい。また、規模は濃尾地震より小さいものの12~13世紀にかけてと13世紀頃の2時期にも液状化を起こさせた地震が発生している。

特筆すべきは、12世紀以前に著しい地層の変形を発生させた地震が存在することであろう。このような地震痕は全国的にも例がなく、かなり大規模な地震を想定する必要がある。

遺跡の地震痕から古地震発生を推定するためには、地震が発生したであろう年代の地層が保存されていることが必要であるが、後世の攪乱などにより必ずしも遺跡の中にその地層が残されているとは限らない。そのため、すべての地震痕が保存されているわけではなく、残された一部の情報で古地震発生の時期と規模を推定しなくてはならない。従って、今後は周辺の他の遺跡で見つかる地震痕の年代と照合し、より正確な地震発生年代の推定をめざす必要がある。

服部俊之(1994) 濃尾平野における歴史時代の地震痕—その2—。愛知県埋蔵文化財センター年報。

参考文献

服部俊之(1995) 濃尾平野における歴史時代の地震痕—その3—。愛知県埋蔵文化財センター年報。

## 5.3 生活環境

### 5.3.1 花粉、珪藻、プラント・オパールからみた古環境

遺物・遺構からみた大毛沖地域の歴史観というものが4章までで捉えられたことと思う。本章では微化石（花粉、珪藻、プラント・オパール）分析を通して、当時の大毛沖地域に広がっていた自然環境について考察を加えたいと思う。

大毛沖遺跡で採取した分析試料は、人の生活に関わる試料（93A区）と旧流路を含めた周辺環境の試料（93G区）とに大きく分けられる。試料採取地点と分析方法および分析目的を表13に示す。各分析方法について以下に述べる。

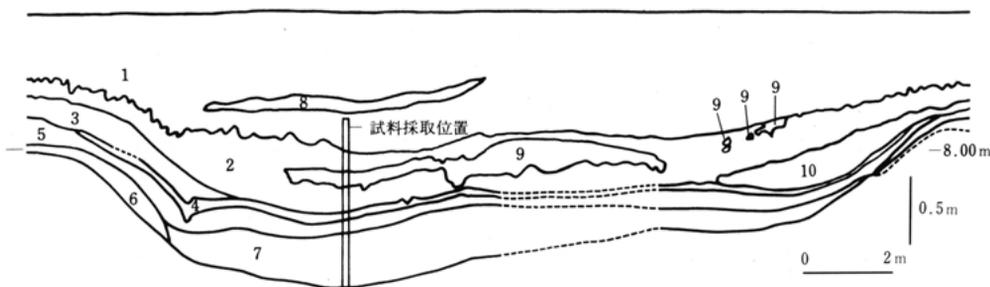
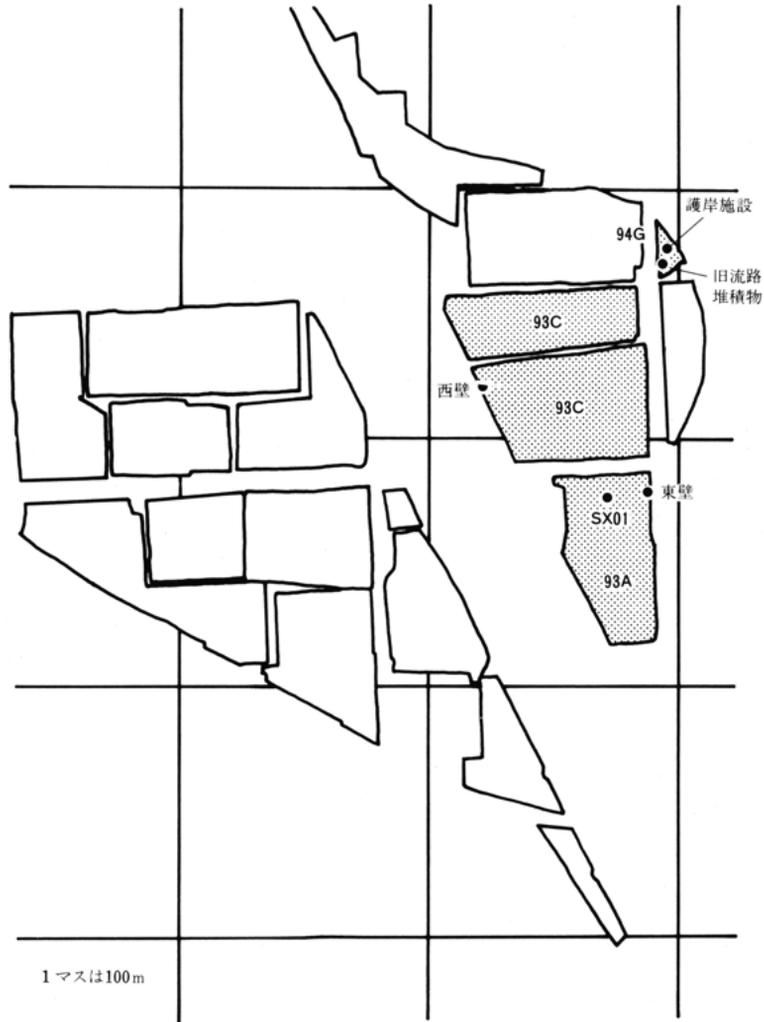
**珪藻分析方法** 試料の分析にあたって乾燥重量1gをトールピーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散をおこなった。岩片除去ののち、水洗を4～5回繰り返しながら同時に比重選別をおこなった。分離した試料を希釈しマウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定した。珪藻の同定については、Krammer & LangeBertalot（1986～1991）を参考にした。

**花粉分析方法** 分析方法は約20gの試料を10%KOH溶液処理（1晩）→60メッシュの篩に通し粗粒物質を除去→水洗→10%KOH溶液を加え湯煎（4分間）→傾斜法により細粒物質を除去→AnCl<sub>2</sub>溶液による比重分離（1500回転/分の遠心分離を2回繰り返す）→HF溶液処理（1晩）で鉱物片を除去→水洗→アセトリシス処理（40秒間）→水洗→グリセリン・ゼリーで封入。検鏡は400倍で、木本花粉が200個体以上に達するまでおこなった。出現率の産出は木本花粉については木本花粉の総数を、草本花粉については総花粉数および総孢子数の和を基数として計算した。

**プラント・オパール分析方法** 分析試料の抽出と定量は以下の手順でおこなった。試料土の絶乾（105℃・24時間）→試料約1gにガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）→電気炉灰化法による脱有機物

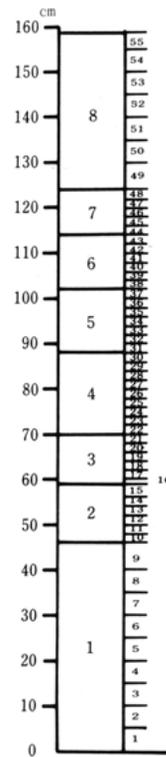
調査区	試料採取場所	主な遺構（遺物）	分析対象	分析目的	試料数	時期
93A区	調査区西壁	居住域・畝状遺構 （灰釉系陶器）	花粉	古植生	21点	8世紀～14世紀
	調査区西壁	居住域・畝状遺構 （灰釉系陶器）	珪藻	流水環境	21点	8世紀～14世紀
	SX01	卒塔婆・柅槽の種子 （灰釉系陶器）	珪藻	土坑埋積環境	20点	13世紀
94G区	旧流路	木製箆・鉄製羽釜 （須恵器・灰釉陶器・土師器）	花粉	古植生	8点	9世紀～ 12・13世紀
	旧流路	木製箆・鉄製羽釜 （須恵器・灰釉陶器・土師器）	珪藻	流水環境	55点	9世紀～ 12・13世紀
	護岸施設	護岸施設 （須恵器）	プラント・ オパール	古植生	48点	8世紀～9世紀

表13 試料採取場所および分析対象



- |                               |                         |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1. 粘土 (塊状、均質)                 | 6. 粘土質シルト               |
| 2. 粘土 (腐植混じり)                 | 7. 腐植質粘土 (緑色濃い植物より分解進む) |
| 3. 粘土 (塊状、均質)                 | 8. 粘土 (腐植混じり)           |
| 4. 粘土                         | 9. シルト質極細粒砂 (ラミナ有り)     |
| 5. 腐植質粘土 (腐植含有多い、灰色シルトと互層部有り) | 10. 粘土 (塊状、均質)          |
|                               | 11. 細粒砂 (ラミナ有り、少)       |

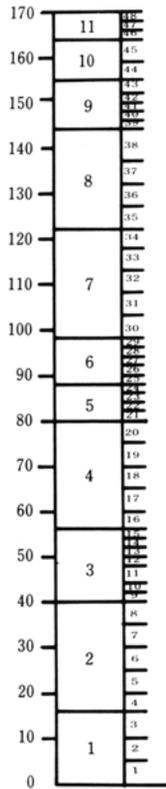
94G区、旧流路試料採取位置



- 凡例
1. 緑色腐植土 (分解進む)
  2. 黒褐色腐植土
  3. 灰褐色粘土
  4. 黒褐色腐植土
  5. 黒褐色腐植土 (灰色極細粒砂のブロック混じる)
  6. 黒褐色腐植土 (極細粒砂混じる)
  7. 黒褐色腐植土
  8. 極細粒砂混じりシルト

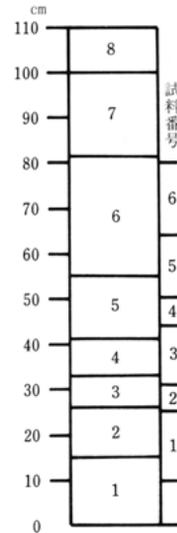
94G区、旧流路埋積堆積物の層序と試料採取位置

図118 分析試料採取位置図



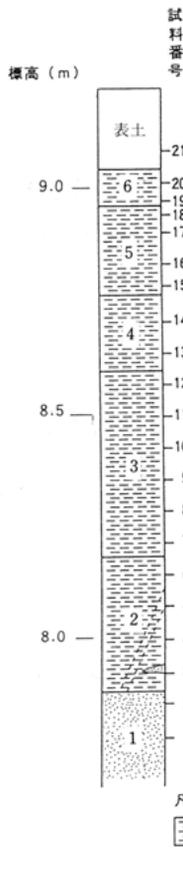
- 凡例
1. 極細粒砂
  2. 腐植質混じり粘土
  3. 粘土（塊状、均質）
  4. 粘土と細粒砂の互層
  5. 粘土
  6. 極細粒砂質シルト
  7. 粘土と細～中粒砂の互層
  8. 極細粒砂とシルトの互層
  9. シルト（塊状）
  10. 極細粒砂
  11. 粘土質シルト

94G区、護岸施設埋積堆積物の層序と試料採取位置

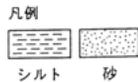


- 凡例
1. 緑色粘土
  2. 褐色粘土
  3. 灰色粘土
  4. 褐色粘土
  5. 黒色粘土
  6. 灰色シルト
  7. 褐色シルト
  8. 極細粒～細粒砂

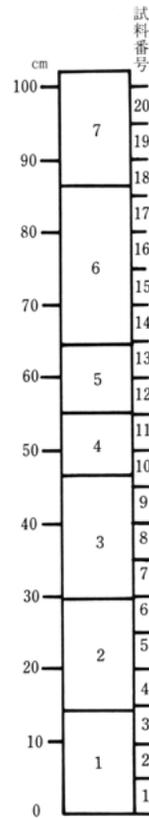
93C区、トレンチ断面の層序および昆虫試料採取位置



- 凡例
1. 灰色中粒砂
  2. 淡褐色砂質シルト
  3. 淡褐色シルト（古代以前）
  4. 淡褐色シルト（鉄斑多い）
  5. 淡褐色シルト（古代～中世）
  6. 黄褐色シルト



93A区、調査区東壁の層序および試料採取位置



- 凡例
1. シルト（極細粒砂含む）
  2. 暗灰色シルト
  3. 緑灰色粘土質シルト
  4. 明褐色粘土質シルト
  5. 明褐色粘土質シルト
  6. 紫灰色粘土質シルト
  7. 極細粒砂混じりシルト

93A区、SX01埋積堆積物の層序および試料採取位置

処理→超音波による分散(300W・42KHz・10分間)→沈底法による微粒子(20 $\mu$ m以下)除去後、乾燥→封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成→検鏡・計数。同定は機動細胞珪酸体(イネ科植物の葉身中に形成される)に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下でおこなった。計数はガラスビーズ個数が400以上になるまでおこなった。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

中世の生活に関係した微化石分析

### 5. 3. 2 93A区(調査区東壁)の分析結果

93A区では、中世I期～II期の屋敷地や畝状遺構および昆虫塊が検出されている。ここ93A区では調査区西壁において垂直的に21試料を得た(図119)。珪藻、花粉の順に分析結果を報告する。

古代～中世とされる層準の下部(試料番号8)以深では珪藻遺骸が多産したものの、屋敷地などにかかる古代～中世の中部～上部層(試料番号9から上)は出現率が低く、屋敷地の層準からのデータは得られなかった(表15、図120)。よって、環境の推定は一定量以上の珪藻遺骸が産出した試料番号8以深のサンプルについて述べる。珪藻分析結果

試料番号8以深の群集は試料1～3では好流水性種が、試料7・8では陸生珪藻の産出率が極めて高かった。また、産出する種数が多くおのおの種の産出率にばらつきがみられるのが特徴である。優占種としては、流れる水域を好む(*Achnanthes japonica*, *Cymbella turgidula*, *Gomphonema sumatrense*)種、流れる水域にも滞水した水域にも出現する(*Cocconeis placentula*, *Gomphonema angustum*)種、陸域で多少の湿り気と光があれば生育可能な陸生珪藻(*Hantzschia amphioxys*)などである。

花粉化石は試料17～21より良好に出現する(表21、図123)が、それ以外の試料からは保存状態の悪いものがわずかに出現するだけである。試料17～21の花粉群集は、構成比において草木花粉・シダ類孢子が高率を占める。木音花粉ではマツ属が卓越する。このほかクマシデ属―アサダ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴う。草木花粉ではイネ科が卓越する。このほか、カヤツリグサ科、サナエタデ節―ウナギツカミ節、アリノトウグサ属、水生植物のガマ属・ミズアオイ属・サンショウモ・ミズニラ属、栽培種のソバ属などを随伴ないし希に伴う。花粉分析結果

### 5. 3. 3 93A区(SX01)の分析結果

93A区のSX01からは卒塔婆や柃木の実が出土している。本土坑はどのような環境下で埋積されていたのか。珪藻分析をおこなったので報告する。

試料は土坑SX01を埋積する堆積物から垂直的に採取した20試料である(図119)。試料中より出現した珪藻遺骸は29属102種(6変種を含む)であった。そのリストを表16に、生態値の百分率と出現頻度を図121に示した。試料全体(試料1～20)についてみると、pHに対する適応性でみると、pH不定性種の占める割合が高く30～60%、次いで好アルカリ性種が20～50%、好酸性種が10～40%であった。水流性については不定性種が、生態性に珪藻分析結果

については底生種が優占して出現した。特徴種としては、好酸性・流水性不定・底生種の *Pinnularia microstauron* が7.4%、好酸性・流水性不定・底生種の *Pinnularia gibba* が6.2%、pH不定・真止水性・底生種の *Pinnularia subcapitata* が5.7%と3種が全試料を通じて多く認められた。珪藻の群集組成と出現頻度の特徴から、分析試料は、下位よりⅠ・Ⅱの2珪藻帯に区分される。以下に珪藻の群集組成の特徴を各帯ごとに簡単に記す。

#### Ⅰ帯（試料1～7）

出現種数は、80種であった。群集組成の特徴は、pHについては、好アルカリ性・不定性種が（特に試料1、2においては50%）優占した。水流性については、好止水性種の *Aulacoseira amubigua* が91%（7～1の出現個数/全試料中の出現個数）、*Cymbella leptoceros* が86%となっており、Ⅱ帯に比べて出現率が高い。生態性については、付着生種が優占であるが、試料3～7において浮遊生種である *Auiacoseira ambigua* の出現率が高くなる。これがⅠ帯の特徴である。

#### Ⅱ帯（試料8～20）

出現種数は89種であった。群集組成の特徴として、pHについては、不定性種が40～60%、好酸性種が30～40%と優占する。これは、好酸性種の *Pinnularia microstauron* が98%（8～20の出現個数/全試料中の出現個数×100）、*Pinnularia gibba* が89%（同じ）を占めることによる。水流性については、不定性種が優占し、止水性種と流水性種はいずれも20%以下である。また、止水性種のなかでも、好止水性種より真止水性種の割合のほうが高い。生態性では、付着性種が20～30%、底生種が60～80%と優占した。これは、底生種の *Pinnularia* 属・*Stauroneis* 属・*Neidium* 属の出現による。

**SX01の埋積環境について** 埋土下層の試料1、2において好アルカリ性で流水性種の *Cymbella turgidula* や広域に棲む *Synedra ulna*、好汚濁種の *Hantzschia amphioxys* が多いことと堆積物の層相から考えて、流れこみを受けながら埋積されたと思われる。さらに、試料3～7において止水域となり浮遊生～付着性が急増することから、やや水深が深くなったと考えられる。*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia microstauron* など、好汚濁性の珪藻遺骸が多いことから水質は汚れていたと思われる。試料8～15においては、底生種が優占することから止水域で水深の浅い、水生植物などが繁茂する湿地であったと考えられる。さらに、上層の試料16～20では上位層ほど珪藻遺骸数の密度が少なく、完形殻の出現率も低かった。このことから、出現種の多くは、他の場所から二次的に運搬堆積したと考えられる。また、*Hantzschia amphioxys* のような陸生珪藻が多く出現する層準がみられることから、一時的に乾燥した時期もあったと思われる。

### 5. 3. 4 94G区（旧流路）の分析結果

旧流路を埋積する堆積物について垂直的に55試料を採取した（図118）。ここでは珪藻および花粉分析をおこなった。以下では、珪藻、花粉の順に報告する。

**珪藻分析結果** 試料中より出現した珪藻遺骸は28属116種（8変種を含む）であった。そのリストを表17・18・19・20に、生態値の百分率と出現頻度を図122に示した。ここでは55試料の分析

をおこなったが、下位層準の試料1～10においては珪藻遺骸が全く出現しなかったため、200個体以上同定された試料番号11～55の結果について報告する。試料全体についてみると、pHについては好酸性種が20～50%、不定性種が30～60%と優占する。流水性については、不定性種が40～80%と優占し、止水性種・流水性種が10～40%を占めている。生態性については、底生・不定性種が20～60%を占める。特徴種としては、pH不定・好止水性・浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*が12.6%、pH不定・好流水性・付着生種の*Gomphonema parvulum*が7%、好酸性・流水性不定・底生種の*Pinnularia gibba*が6.9%、pH不定・流水性不定・底生種の*Navicula pupula*が4%で、各層準を通して出現した。塩分については淡水性種が優占した。珪藻の群集組成と出現頻度の特徴から、分析結果は下位よりI・IIの2珪藻帯に区分される。以下に珪藻の群集組成の特徴及び考察を各帯ごとに記す。

#### I 帯 (試料10～11)

出現種数は81種であった。群集組成の特徴は、pHについては好酸性種が20%～40%、不定性種が40～60%、アルカリ性種が20%と、不定性種と好酸性種が優占する。流水性については、止水性種が10%、不定性種が60%、流水性種が20～40%であり、止水性種よりも流水性種の方が優占している。特に下位の試料11・12では、好流水性種の*Cymbella minuta*, *Gomphonema parvulum*, *Synedra vaucheriae*の多産により、流水性種の占める割合が高い。生態性については底生種が20～40%、付着生種が60～80%、浮遊生種が数%と、浮遊生種の出現率が非常に少ない。これはII帯で多く出現する浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*の出現が少ないことによる。つまり、I帯の特徴として、下位層(試料11, 12)ではやや流水域で、層準が上にいくに従いより止水的かつ酸性水域で、水生植物が生える湿地に変わっていったと考えられる。しかし、閉ざされた湿地というよりも、止水性種と流水性種の出現率からみてやや流れのある水域であったと思われる。また、試料17, 18において好汚濁性種の*Nitzschia obtusa*, *Navicula mutica*などが出現することから、水質汚濁の進んだ時期もあったと考えられる。

#### II 帯 (試料20～55)

出現種数は109種であった。群集組成の特徴は、pHについては不定性種が30～70%と優占し、好酸性種が10～40%で、やや酸性水域であるといえる。流水性については、不定性種が40～80%と優占し、止水性種が20～40%、流水性種が10%程であった。生態性については底生種が30～60%で、上位層ほど若干出現率が高くなる。付着生種は30～50%、浮遊生種は20%程度であった。以上のことからII帯全体では、水深が浅くなる変化が認められた。

試料20～23にかけて酸性・付着生で貧塩・好塩性種の*Eunotia robusta*, *Eunotia pectinalis* var. *undulata*, *Eunotia pectinalis* var. *minor*や好酸性・不定性・底生種の*Pinnularia gibba*, *Pinnularia veridis*が多く出現し、逆に浮遊生種が減ることから、抽水植物などの水生植物が繁茂していたと考えられる。

試料35~47で浮遊生種の*Aulacoseira ambigua*の出現率が高くなることから、やや水深が深くなりながら湿地の環境が続いていたと思われる。そして、上位層の試料48~55において高い出現率を占めていた*Aulacoseira ambigua*が減少し、好汚濁性種の*Navicula pupula*, *Pinnularia subcapitata*が多くなったことと層相から考えて、止水域で周囲からの流れ込みを受ける比較的浅い湿地であったと考えられる。

**花粉分析結果** 花粉分析は各層準1試料、計8試料について分析をおこなった(図124)。分析をおこなった8試料は、いずれもよく似た傾向を示した。下位の試料5, 13, 18ではアガカシ亜属が、他の上部の試料ではコナラ亜属が優占的に出現する。これらに次いでスギ属やブナ属などの出現率が高くなっている。スギ属以外の針葉樹ではイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科やマツ属がほとんどの試料で高率に出現する。モミ属やイヌマキ属なども普遍的に出現する。アカガシ亜属・コナラ亜属・ブナ属以外の広葉樹では、エノキ属-ムクノキ属、クルミ属-サワグルミ属、モクセイ科が出現する。

草本花粉は試料26よりも上位層で出現率が増加する傾向がみられる。それに伴って、イネ科の出現率が上位に向かいやや高率になる傾向がうかがえる。イネ科のほかにはカヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科などを多く産する。

### 5. 3. 5 94G区(護岸施設堆積物)の分析結果

**プラント・オパール分析** 護岸施設を埋積する堆積物から垂直に採取した48試料についてプラント・オパール分析をおこなった(図119)。このうち試料6~19において良好に出現した。しかし、それ以外の試料からはずかみに出現するだけである(図125、表23)。試料6~19のプラント・オパールはイネ科葉部短細胞珪酸体についてはタケ亜科、ウシクサ族コブナグサ属、ウシクサ族ススキ属が卓越した。イネ科葉身機動細胞珪酸体ではタケ亜科、ウシクサ族が卓越した。試料6~15ではイネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の両方がとくに高率で出現する。

### 5. 3. 6 古環境についての考察

**生活面に関する古環境** 93A区は、大毛沖遺跡の中でも中世I期~II期の頃の住居域や畝状遺構などが確認され、最も人の生活に関する調査区である。人の生活の周辺環境がいかなるものであったかを推定するために前章(5. 3. 2)において珪藻、花粉分析をおこなった。しかし、珪藻・花粉ともにその産出率は低く各層準において産出の程度に偏りがみられた。以下の考察では、微化石が産出した試料のみについて議論することを断っておく。

試料8以深の珪藻群集は、試料1~3(最下層)で好流水性種が、試料7~8(古代II期)で陸生珪藻の産出率が極めて高かった(図120)。塩分濃度やpHにはほとんど変化がみられなかった。全体に産出種数が多いものの、各々の種の産出率にはばらつきがみられた。

多産した種としては、好流水性種の*Achnanthes japonica*, *Cymbella turgidula*, *Gomphonema sumatrense*, 流水不定性種の*Cocconeis placentula*, *Gomphonema angustum*, 陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*などである。これらの中で、好流水性種の

*Achnanthes japonica*, *Cymbella turgidula*, *Gomphonema sumatrense*は河川などの常に流水の影響を受ける水域で、水生植物や岩石に付着生育する種群である。とくに、*Cymbella turgidula*は河川の中～下流部の扇状地、自然堤防、後背湿地といった場所に集中して出現することが知られている（安藤、1990）。また、最下層の試料1～2でそれらの種群が多く認められており、流水的な環境で堆積したことは間違いない。

陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*はコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部などに生育する種である（伊藤・堀内、1991）。試料1～8の、とくに上位層に向かうにつれて本種の出現率が高くなっていくのは、流水的な環境から徐々に微高地化し、乾燥に耐えうる珪藻が増えてきたものと考えられる。

植生については、古代～中世の遺物包含層の下位層から花粉はほとんど検出されなかった。（図123）出現した花粉も保存状態は著しく悪く、風化作用の影響を受けている。しかし、上位層（中世）において、マツ属複雑管束亜属の花粉が卓越することから、極端な陽樹であるマツが生える開けた環境であったと推定される。また、草本花粉として栽培種のソバ属が認められることから、93A区で見つかっている畝状遺構とともに人間と関わりの深い植物が少なからず生育していたと推定される。

護岸施設が確認された94G区には旧流路がみられ、厚い腐植質堆積物が埋積している。このような植物片の埋積は、淀んで水の影響の少ない場所で徐々に堆積していったと思われる。また、厚い腐植質土の堆積は、砂や礫などを運搬するような水理条件下に置かれていなかったことを示す。そのため、当時の環境を微化石の形でそのままパックしていると期待される。

旧流路の  
古環境

珪藻について、下位層準（試料11～19）では流水性種が卓越し、上位層準（試料20～55）では止水性種が優先してくる（図122）。これは旧流路が腐植質堆積物で埋積されていく過程で、全体に下位から上位にかけて流水域から止水域へと変化したことを示唆する。生態性については、下位層準では付着性種が、上位層準では底生種が卓越する。これは、珪藻が付着するだけの植物が繁茂し、水深も徐々に浅くなったことを示す。また、上位層準（試料48～55）において、*Aulacoseira ambigua*, *Navicula pupula*, *Pinnularia subcapitata*が多くなる。*Aulacoseira ambigua*は浮遊性種、*Navicula pupula*, *Pinnularia subcapitata*は好汚濁性種であることから、最上位（12・13世紀）において旧流路は止水域であり、周囲から流れ込みを受ける比較的浅い湿地であったと推定される。

旧流路が埋積されていく過程（9世紀～12・13世紀）の周囲の植生について考えてみる。木本花粉は全層準にわたって非常に高率で出現している（図124）。その中でもイチイ科・ヒノキ科、マツ属、スギ属、クルミ属・サワグルミ属、ブナ属、コナラ亜属—アカガシ亜属は全層準に渡って高い割合で産する。とくにマツ属は陽樹であり、当時の流路周辺は比較的開けた環境であったことがわかる。また、ヤナギ属は河岸や湿地など水辺の近くに生育する樹木であり、流路または周辺部は湿潤な環境であったと推定される。

草本花粉では全層準を通してイネ科が卓越した。ほかにカヤツリグサ科やヨモギ属と

いった現在でも人里の野辺に生える植物花粉が認められた。また、サナエタデ節、オモダカ属などは現在の水田や水田の中の湿地、畦などの比較的湿った場所を好む植物である。旧流路周辺域での水田の存在が期待される。その意味で、イネ科花粉の卓越は重要であるが、残念ながらイネ科の科レベルでは多くの植物（表14）が存在するため、積極的に水田が存在したとは言えない。また、ソバ属、アブラナ科、シソ属などの花粉が少なからずみつかっている。中でもアブラナ科は表14のようにアブラナ・ハクサイ・カブ・ダイコンなど、現在ふつうにみられる野菜のほとんどがこの仲間である。また、オモダカ属にはクワイも含まれる。これらの事実は、周辺で畑作物が栽培されていた可能性を示唆するものである。

**護岸施設埋積過程における古環境** 94G区の護岸施設埋積に伴う時代の古植生について考えてみる。ここではプラント・オパール分析をもとに考察をおこなう。試料48点のうち、プラント・オパールの出現は試料6～19のみで高率で、その上下からはほとんど認められなかった（図125）。以下においては試料6～19の結果をもとにして考察を加える。

試料6～19ではイネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身部機動細胞珪酸体のどちらもタケ亜科、ウシクサ族、ウシクサ族ススキ属が卓越することから、護岸施設の周囲にはタケやススキの仲間が繁茂していたであろう。調査当初、流路にともなう施設であるため、水辺の環境を想定しヨシ属などが多産するものと予想していた。しかし、結果としてヨシ属も検出されるものの、その出現率はほかのプラント・オパールと比較して案外低いことがわかった。プラント・オパールが特に多くみつかる層準である2層（腐植質混じり粘土）、3層（塊状・均質な粘土）、4層（粘土と細粒砂の互層）は、護岸施設が設置される前から施設自体が埋積されてしまうまでの堆積物である。そのような堆積物中からタケやススキなど、土地の乾燥に耐えうる植物のプラント・オパールの多産は、この時期（8世紀～9世紀）大毛沖地域の流路近傍には、高燥な場所が存在したことをうかがわせる。また、タケやススキの葉や茎は、現在でもそれを編んで道具の材料になり得る。これらの植物は、護岸施設の敷物を造る際にも現地でも容易に手に入る材料となったであろう。

また、全試料を通して、護岸施設を埋積する試料中にもみプラント・オパールが高率で産するのにも興味深い。プラント・オパールは非常に細粒であり、砂やシルトといった粒子を運ぶ水理条件では容易に流されてしまい、堆積物中には残らない。2層・3層・4層中にプラント・オパールの多産をみるのは、護岸施設自体が機能しており、そのため激しい

科・属	含まれる種群
イネ科	イネ、ヨシ、ムギ、カヤ、ススキ、ササ、タケ、ヒエ、アワ、キビ
アブラナ科	アブラナ、ナズナ、ハクサイ、カブ、ダイコン、ワサビ
オモダカ属	オモダカ、クワイ

表14 科・属レベルに含まれる種群

水の流れが押さえられた結果水の流れが穏やかになり、細粒なプラント・オパールを堆積させたのであろう。

(鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美)

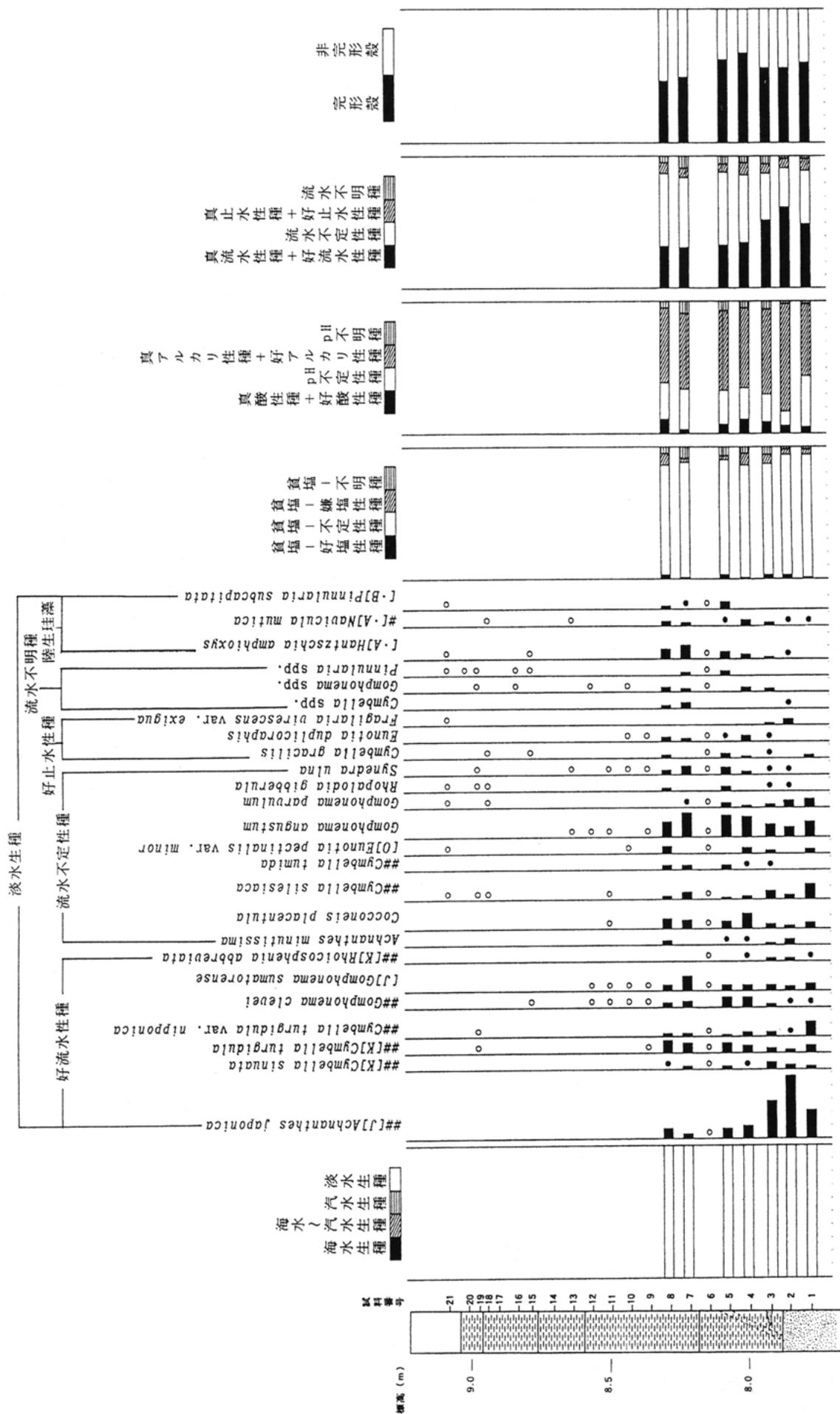
#### 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、愛知県立明和高等学校教諭 森 勇一氏には珪藻の同定についてご教示を賜った。珪藻プレパラート作製には服部恵子さん、水間雅江さんにお世話になった。また、微化石分析の一部はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。以上の方々に記して深く感謝する次第である。

#### 文 献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 日本珪藻学誌, 6, 23-44
- Krammer, K., & H. LangeBertalot., 1896, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1), 876P.
- Krammer, K., & H. LangeBertalot., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora Mitteleuropa, 2 (2), 596P.
- Krammer, K., & H. LangeBertalot., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (3), 596P.
- Krammer, K., & H. LangeBertalot., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (4), 596P.





海水・汽水・淡水性種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、後水性種の生態性の比率は淡水性種の合計を基数として算出した。  
 いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。  
 環境指標種群  
 [J]: 上流性河川指標種, [K]: 中～下流性河川指標種, [M]: 湖沼浮遊性種, [O]: 沼沢湿地付着性種, [P]: 高層湿原指標種, (以上は、安藤, 1990による)  
 #: 好汚濁性種, ##: 好清水性種 (以上は、渡辺ほか, 1986による), [-]: 陸生珪藻 ([A]: A群, [-B]: B群, [-B]: B群, 伊藤・堀内, 1991による)

図120 93A主要珪藻化石の層位分布













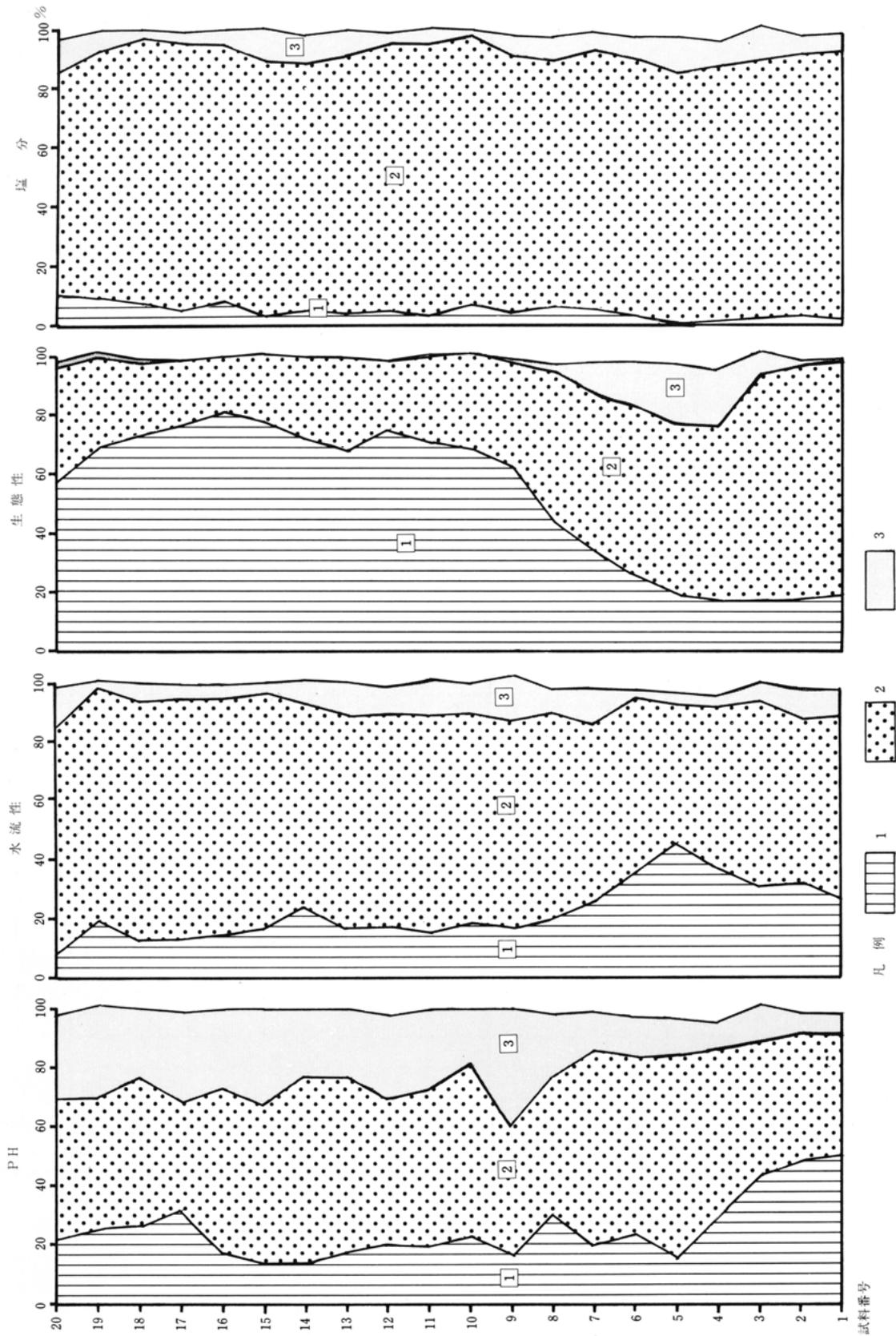
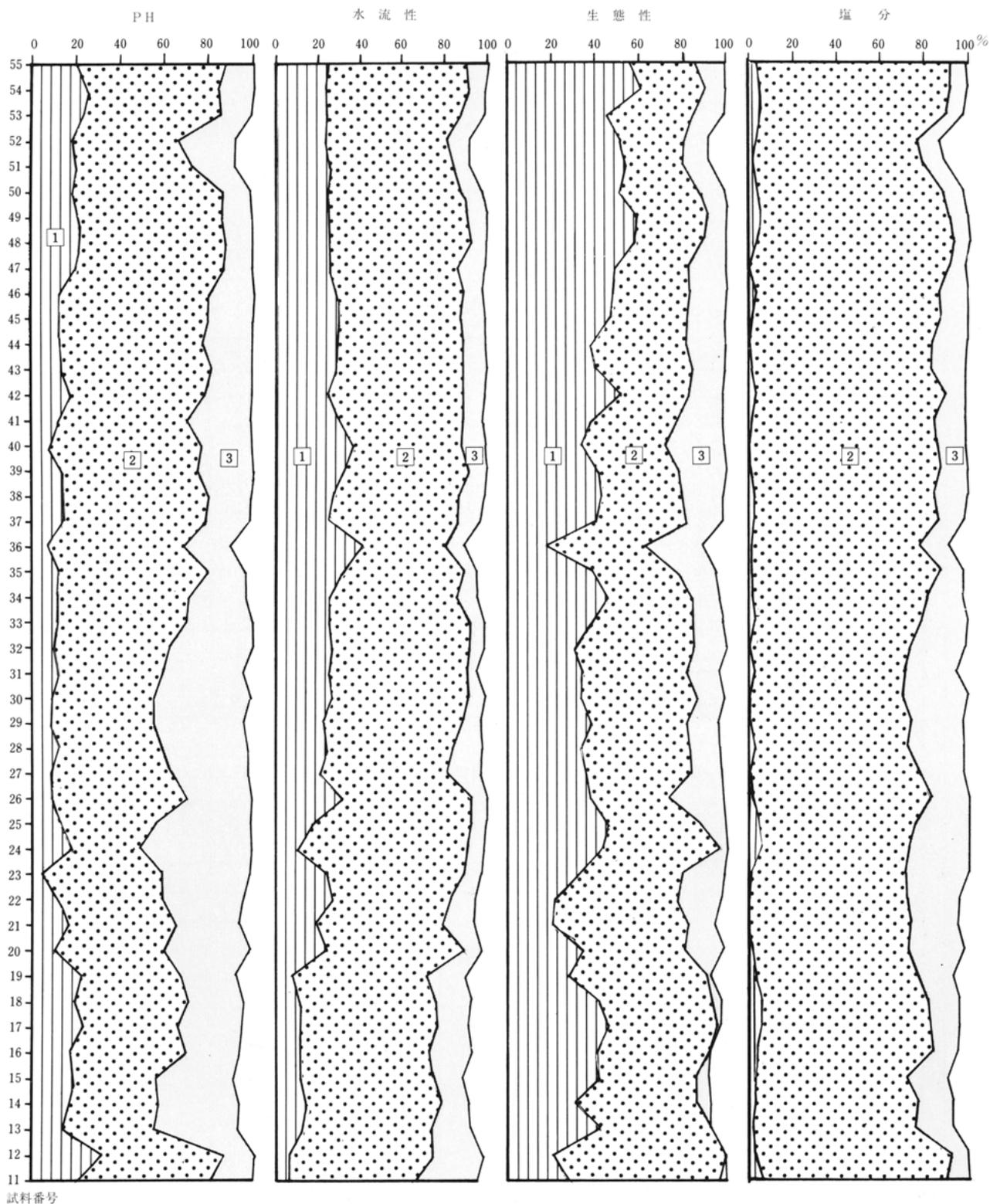


図121 93A、SX01珪藻分析結果



試料番号

凡例  1  2  3

PH	水流性	生態性	塩分
1. アルカリ性種	1. 止水性種	1. 底生種	1. 好塩性種
2. 不定性種	2. 不定性種	2. 附着生種	2. 不定性種
3. 酸性種	3. 流水性種	3. 浮遊生種	3. 嫌塩性種

図122 94G、旧流路堆積物珪藻分析結果



学名	5	13	18	26	34	40	46	52	5	13	18	26	34	40	46	52	
<i>TaxaceaeCupressaceae</i>	イチイ科—ヒノキ科	11	9	8	16	7	6	8	9	5.5	4.1	3.7	8.0	3.5	2.9	4.0	4.1
<i>Pinus</i>	マツ属	19	16	8	14	12	14	15	13	9.5	7.4	3.7	7.0	6.0	6.8	7.4	6.0
<i>Abies</i>	モニ属	11	8	6	11	8	5	8	2	5.5	3.7	2.8	5.5	4.0	2.4	4.0	0.9
<i>Picea</i>	トウヒ属	5	2					4	2	2.5	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	0.9
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	5	1	2	4	4	3	1	1.0	2.3	0.5	1.0	2.0	2.0	1.5	0.5
<i>Sciadopitys</i>	イヌマキ属		5	11	8	2	7	4	6	0.0	2.3	5.1	4.0	1.0	3.4	2.0	2.8
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	11	34	11	27	22	22	22	27	5.5	15.7	5.1	13.4	11.0	10.7	10.9	12.4
<i>Salix</i>	ヤナギ属			7	7	6	1	2	4	0.0	0.0	3.3	3.5	3.0	0.5	1.0	1.8
<i>JuglansPterocaria</i>	クルミ属—サワグルミ属	13	6	9	8	4	6	5	7	6.5	2.8	4.2	4.0	2.0	2.9	2.5	3.2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5	2	12	5	2		2	2	2.5	0.9	5.6	2.5	1.0	0.0	1.0	0.9
<i>Betula</i>	ブナ属	2	3		1		3		1	1.0	1.4	0.0	0.5	0.0	1.5	0.0	0.5
<i>Carpinus</i>	クマシデ属	3	3	10	3	2	3	3	3	1.5	1.4	4.7	1.5	1.0	1.5	1.5	1.4
<i>Corylus</i>	ハシバミ z 属	8	3	13	4	1	2	3	2	4.0	1.4	6.1	2.0	0.5	1.0	1.5	0.9
<i>Fagus</i>	ブナ属	20	5	8	13	9	15	13	17	10.0	2.3	3.7	6.5	4.5	7.3	6.4	7.8
<i>Lepidobalanus</i>	コナラ亜属	16	20	24	28	36	30	33	32	8.0	9.2	11.2	13.9	18.0	14.6	16.3	14.7
<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	34	34	33	18	25	25	28	24	17.0	15.7	15.4	9.0	12.5	12.2	13.9	11.0
<i>Castanea</i>	クリ属	4			3	5	9	10	6	2.0	0.0	0.0	1.5	2.5	4.4	5.0	2.8
<i>CastanopsisPasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	4	6	5	6	7	11	4	10	2.0	2.8	2.3	3.0	204	5.4	2.0	4.6
<i>UlmusZelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	8	4	4	2	5	9	7	5	4.0	1.8	1.9	1.0	2.5	4.4	3.5	2.3
<i>CeltisAphanante</i>	エノキ属—ムクノキ属	18	23	6	5	8	3	5		0.0	8.3	10.7	3.0	2.5	3.9	1.5	2.3
<i>Rhus</i>	ウルシ属	2						2	2	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.9
<i>Ilex</i>	モチノキ属	2	5					1		0.0	0.9	2.3	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0
<i>Acer</i>	カエデ属	1	2					1	1	0.5	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5
<i>Aesculus</i>	トチノキ属			1		1	1	1	1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	0.5	0.5
<i>Rhamnaceae</i>	クロウメモドキ科	1		2	3	1			1	0.5	0.0	0.9	1.5	0.5	0.0	0.0	0.5
<i>Vitis</i>	ブドウ属	2	5	2	4					1.0	2.3	0.9	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Parthenocissus</i>	ツタ属							2	3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	1.4
<i>Styrax</i>	エゴノキ属	6						2	1	4	3.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.5	1.8
<i>Camellia</i>	ツバキ属		1		3				1	0.0	0.5	0.0	1.5	0.0	0.0	0.5	0.0
<i>Elaeagnus</i>	グミ属							2	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.5
<i>Cornus</i>	ミズキ属					1				0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	3	1					1		1.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0
<i>Diospyros</i>	カキ属		2			5	2	5	5	0.0	0.9	0.0	0.0	2.5	1.0	2.5	2.3
<i>Oleaceae</i>	モクセイ科	8	18	11	6	23	11	8	21	4.0	8.3	5.1	3.0	11.5	5.4	4.0	9.6
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	3	1		3	5	7	2	1	1.5	0.5	0.0	1.5	2.5	3.4	1.0	0.5
<i>Weigela</i>	タニウツギ属						2			0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
Tree		200	217	214	201	200	205	202	218	65.6	63.6	71.6	52.8	53.1	52.8	42.6	38.5
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属		1	2	4	1	3	1	1	0.0	0.3	0.7	1.0	0.3	0.8	0.2	0.2
<i>Persicaria</i>	サナエタデ節	2	14			6	4	6		0.7	4.1	0.0	0.0	1.6	1.0	1.3	0.0
<i>Chenopodiaceae</i>	アカザ科						1	3	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.6	0.2
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科								1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
<i>Nuphar</i>	コウホネ属		5	2	1					0.0	1.5	0.7	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科					7	23	11	10	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	5.9	2.3	1.8
<i>Violaceae</i>	スミレ科								3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
<i>Trapa</i>	ヒシ属	1								0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Epilobium</i>	アカバナ属								1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0
<i>Umbelliferae</i>	セリ科			2	4	3	3		1	0.0	0.0	0.7	1.0	0.8	0.8	0.0	0.2
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属			1						0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Labiatae</i>	シソ科		1	6	3				1	0.0	0.3	2.0	0.8	0.0	0.0	0.2	0.0
<i>Cichorioideae</i>	キク亜科							5	2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.4	0.0
<i>Carduoideae</i>	タンポポ科	3	1			2			2	1.0	0.3	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.4
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	3	2	3	16	24	18	14	4	1.0	0.6	1.0	4.2	6.4	4.6	3.0	0.7
<i>Typha</i>	ガマ属	17		10	11	9	8	11		0.0	5.0	0.0	2.6	2.9	2.3	1.7	1.9
<i>Alisma</i>	サジメモダカ属	5								0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1				13	6	5	6	0.0	0.3	0.0	0.0	3.4	1.5	1.1	1.1
<i>Gramineae</i>	イネ科	60	31	30	66	48	70	98	183	19.7	9.1	10.0	17.3	12.7	18.0	20.7	32.3
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	1	15	19	22	23	15	25	18	0.3	4.4	6.4	5.8	6.1	3.9	5.3	3.2
<i>Allium</i>	ネギ属					1				0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
<i>Eriocaulaceae</i>	ホシクサ科					2		1	4	0.0	0.0	0.0	0.5	0.0	0.3	0.0	0.7
Grass		70	93	66	128	139	157	175	245	23.0	27.3	22.1	33.6	36.9	40.5	36.9	43.3
Spore		35	31	19	52	38	26	97	103	11.5	9.1	6.4	13.6	10.1	6.7	20.5	18.2
Total		305	341	299	381	377	388	474	566	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表22 94G旧流路花粉分析結果

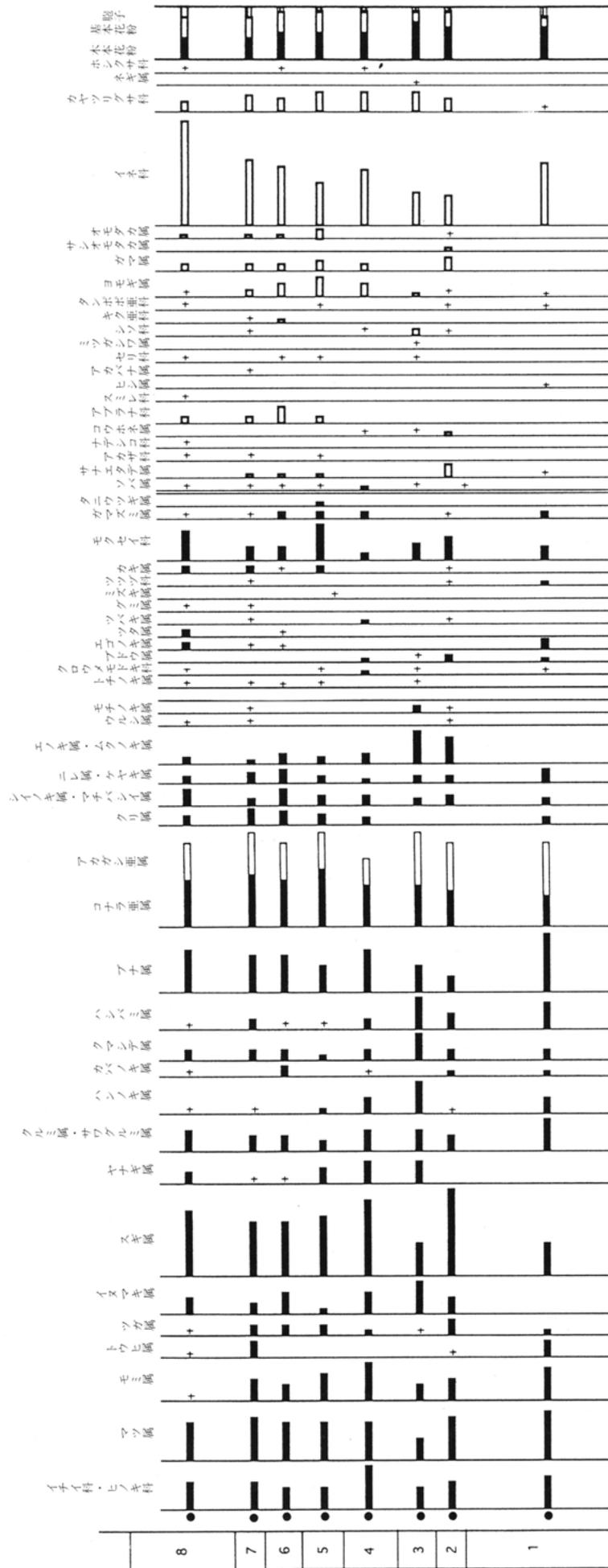


図124 94G 旧流路堆積物花粉化石の層位分布

94G区護岸施設C サンプルの植物珪酸体分析結果（1）

種類	試料番号	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>																										
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	-
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	3	1	6	3	5	4	1	2	5	4	1	2	5	-	3	6	10	-	13	4	3	6	4	4	4	
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	1	-	1	-	1	7	1	-	1	1	1	1	
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	3	-	2	1	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	-	-	-	-	1	1	-	-	-	7	2	-	1	-	12	14	15	3	19	3	-	20	-	2	2	
イチゴツナギ亜科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	1	1	1	
不明キビ型	4	1	2	-	-	2	-	-	1	4	2	-	2	1	5	15	4	4	17	5	2	11	1	1	1	
不明ヒゲシバ型	-	1	1	1	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	2	2	1	-	1	-	1	1	
不明ダンチク型	2	1	1	1	1	1	-	1	1	-	1	-	3	-	2	-	3	1	2	-	-	-	-	-	-	
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>																										
イネ族イネ属	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
タケ亜科ネザサ節	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-	1	1	1	
タケ亜科	8	2	6	-	3	6	5	6	5	3	1	1	4	4	7	8	4	1	6	2	-	4	2	2	2	
ヨシ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	
ウシクサ族	3	-	3	-	1	2	1	2	1	4	-	1	1	1	3	4	-	2	2	2	-	1	2	1	1	
不明	3	-	1	2	2	1	3	1	-	-	-	-	2	1	1	5	1	1	5	1	-	1	-	-	-	
<b>合計</b>																										
イネ科葉部短細胞珪酸体	10	4	10	5	9	8	1	4	7	18	8	2	13	1	25	41	39	12	66	16	5	40	7	10	10	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	18	2	10	2	7	10	9	9	6	7	2	2	8	6	15	18	6	4	17	6	0	6	5	5	5	
総計	28	6	20	7	16	18	10	13	13	25	10	4	21	7	40	59	45	16	83	22	5	46	12	15	15	
<b>組織片</b>																										
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	

94G区護岸施設C サンプルの植物珪酸体分析結果（2）

種類	試料番号	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>																										
イネ族イネ属	-	2	-	1	-	7	6	2	-	2	3	7	12	4	4	4	6	18	21	2	8	3	-	-	-	-
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科	8	18	16	14	15	46	39	12	2	32	26	24	65	34	38	101	90	13	79	8	15	30	-	-	-	
ヨシ属	-	2	3	2	7	5	3	1	-	5	2	4	3	5	3	5	5	7	8	2	2	22	-	-	-	
ウシクサ族コブナグサ属	-	3	-	1	4	14	12	2	-	44	6	28	42	24	43	10	12	9	26	8	3	7	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	5	6	15	12	23	80	67	12	2	119	39	123	92	126	127	45	57	53	65	11	12	18	-	-	-	
イチゴツナギ亜科	1	-	3	2	1	7	9	3	-	7	6	6	5	3	7	5	6	3	5	-	2	4	-	-	-	
不明キビ型	5	8	7	5	9	77	74	15	7	32	19	36	23	45	46	23	45	95	25	7	16	6	-	-		
不明ヒゲシバ型	1	1	1	4	1	17	11	2	1	18	2	11	6	18	11	9	8	55	11	3	2	10	-	-		
不明ダンチク型	2	-	4	1	-	23	20	3	1	3	4	3	6	12	13	4	10	12	8	1	4	6	-	-		
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>																										
イネ族イネ属	2	1	1	-	-	2	10	-	-	1	5	6	10	2	4	5	7	6	14	2	-	3	-	-	-	
タケ亜科ネザサ節	-	1	1	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	4	3	3	-	-	2	-	-		
タケ亜科	7	9	7	7	4	6	12	4	5	7	27	19	23	9	15	61	68	48	33	9	10	14	-	-		
ヨシ属	1	1	-	1	2	4	3	-	-	3	2	3	2	-	-	5	8	17	38	-	2	5	-	-		
ウシクサ族	-	8	5	7	2	17	10	1	-	12	8	5	45	15	15	22	25	48	47	2	2	5	-	-		
不明	1	2	2	1	2	10	11	4	-	10	12	11	28	3	17	21	23	18	25	3	12	6	-	-		
<b>合計</b>																										
イネ科葉部短細胞珪酸体	22	40	49	42	60	276	241	52	13	262	107	242	254	272	293	206	239	269	248	42	64	106	0	0	0	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	11	22	16	16	10	41	47	10	5	33	54	44	108	29	51	116	135	140	160	16	26	35	0	0	0	
総計	33	62	65	58	70	317	288	62	18	295	161	286	362	301	344	322	374	409	408	58	90	141	0	0	0	
<b>組織片</b>																										
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	2	3	3	1	1	-	-	-	-	3	1	-	-		

表23 94G護岸施設トレンチ南壁のプラント・オパール分析結果

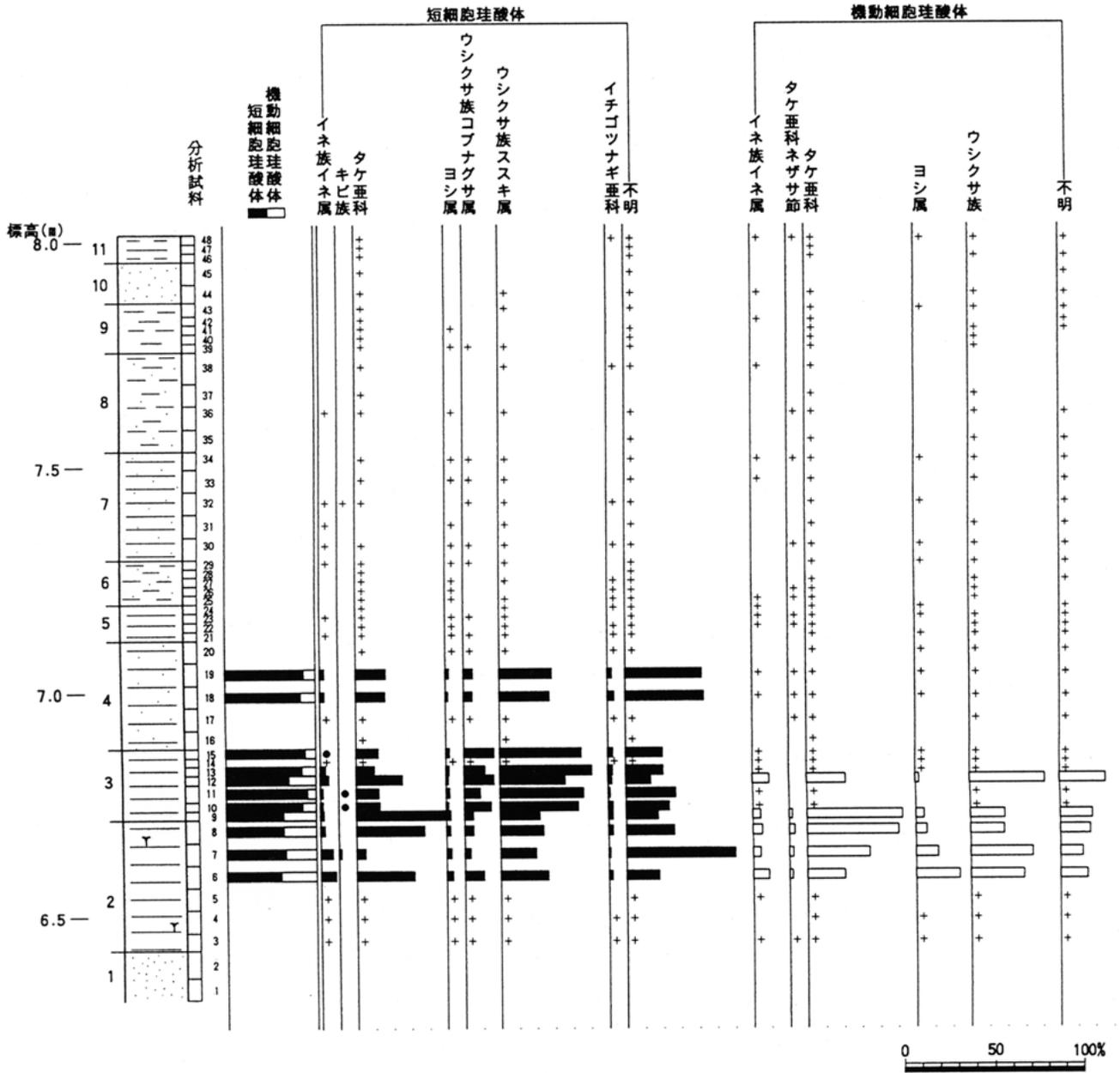


図125 94G 護岸施設トレンチ南壁の植物珪酸体組成

## 5.4 樹木の利用

### 5.4.1 はじめに

大毛沖遺跡では護岸施設や戸枠など多くの木製品が出土した。これらの木製品を無作為に選択し、樹種同定を行った。

### 5.4.2 同定方法

各試料の横断面を実体顕微鏡下で観察を行った後、一部の試料についてカミソリを用いて接線断面・放射断面・横断面の3方向の切片をとり、ダイヤテックを用いて封入し、プレパラートを作成した。プレパラートの観察は光学顕微鏡下で行った。

### 5.4.3 同定結果

表24に各試料の同定結果を示す。以下に各樹種の記載を行う。

#### モミ属 (Abies)

94H a S E03

垂直・水平樹脂道なし。放射仮導管もなく、放射柔組織の末端が数珠状になっている。分野壁孔はトウヒ型。

#### スギ属 (Cryptomeria)

94H b S E02/94H b S E02/94G NR01 No.61/94H a S E03 No.2 南東井戸  
枠下/94H a S D09 No.72/杭36, 40, 41

垂直・水平樹脂道ともになく、放射仮導管もない。放射柔組織の壁面はなめらかである。分野壁孔はスギ型で一分野2個。

#### マツ属 (Pinus)

94H a S D09 No.71/94H a S D09 No.43

早材部から晩材部への移行はゆるやか。樹脂細胞は認められない。放射仮導管があり、分野壁孔は窓状。

#### コウヤマキ属 (Sciadopitys)

94H a S E01側板上部/94H a S E01側板上部/94H b S E02/杭79

早材部から晩材部への移行はゆるやか。樹脂細胞や垂直・水平樹脂道はない。放射仮導管もなく、放射柔組織の壁面はなめらかである。分野壁孔は窓状。

#### ヒノキ属 (Chamaecyparis)

94H a S E03井戸枠東/94H a S E03井戸枠南/94H a S E03井戸枠北

早材部から晩材部への移行はゆるやか。樹脂細胞は晩材部に認められる。水平・垂直樹脂道はなく、放射仮導管もない。放射柔組織の壁面はなめらかで分野壁孔はヒノキ型で一分野2個。

#### イチイ属 (Taxus)

94H a S D09 No.65

早材部から晩材部への移行はやや急。樹脂道はなく、放射仮導管のない。放射柔組織

の壁面はなめらか。仮導管内にらせん肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で分野2個。

コナラ亜属 (Quercus Lepidobalanus)

94H a S E 05井戸梓東/94H a S E 05井戸梓西/94H a S E 05井戸梓南/94H a S E 05井戸梓北/94H a n i b u S D 09 №44/杭4~6, 12~15, 22, 27, 32, 33, 37, 43, 46, 51, 55, 80, 86

大型の管孔が年輪界に沿って配列する環孔材。孔圏外では管径を減じながら放射方向に火炎状の配列をする。導管のせん孔は単一。チロースが認められる。導管・放射柔組織間壁孔は柵状をなす。

アカガシ亜属 (Quercus Cylobalanopsis)

杭23, 25, 26, 52, 53, 70

大型の管孔が放射状に配列する。広放射組織あり。

クリ属 (Castanea)

杭9, 16, 18, 20, 21, 29, 38, 39, 42, 44, 45, 47, 49, 57, 59, 63, 64, 66, 69, 71, 72, 75, 77, 78, 81, 82, 87, 88, 89

導管の配列は環孔状で、孔圏は連続している。広放射組織なし。

ケヤキ属 (Zelkova)

杭28

導管の配列は環孔状で、孔圏外の小導管が波状に配列している。単穿孔。放射組織は異性で1~8列。

サクラ属 (Prunus)

杭2, 3, 6, 30, 34, 35, 48, 74, 76, 84, 90

導管は小さく散孔状に配列する。放射組織は1~4列。単穿孔。

不明

94H a S K 92/94H a S D 09 №2/杭1, 7, 10, 11, 17, 19, 24, 50, 54, 56, 58, 60, 61, 62, 65, 67, 68, 73, 83, 85, 91, 92

試料の保存状態が不良で、同定に耐えられる切片を得ることができなかった。

#### 5. 4. 4 まとめ

以上、大毛沖遺跡から出土した木製品に利用されていた樹種は、針葉樹6属、広葉樹5属計11属である。いずれの植物も特異な環境に生息するものではなく、容易に入手できたものと思われる。

また、井戸梓などには針葉樹材を利用し、杭材には広葉樹が多く用いられている。このことは、マツ属やヒノキ属、コウヤマキ属などが耐水性に富み保存性がよく、加工のしやすい材であることから、作為的に選択されたものと思われる。それに対し、クリ属やコナラ亜属などは、加工に適さないことから杭に多く用いられたものと思われる。

参考文献：島地 謙・伊藤隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣出版。296p.

出土木製品樹種一覧

遺構	樹種	学名
94Ha SD09 No.2	不明	
94Ha SD09 No.43	マツ属	<i>Pinus</i>
94Ha SD09 No.44	コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
94Ha SD09 No.65	イチイ属	<i>Taxus</i>
94Ha SD09 No.71	マツ属	<i>Pinus</i>
94Ha SD09 No.72	スギ属	<i>Cryptomeria</i>
94Ha SE01側板上部①	コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>
94Ha SE01側板上部②	コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>
94Ha SE03井戸枠東	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis</i>
94Ha SE03井戸枠西	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis</i>
94Ha SE03井戸枠南	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis</i>
94Ha SE03井戸枠北	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis</i>

遺構	樹種	学名
94Ha SE03	モミ属	<i>Abies</i>
94Ha SE03 No.2 南東井戸枠下	スギ属	<i>Cryptomeria</i>
94Ha SE05井戸枠東	コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
94Ha SE05井戸枠西	コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
94Ha SE05井戸枠南	コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
94Ha SE05井戸枠北	コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
94Ha SK92	不明	
94Hb SE02	スギ属	<i>Cryptomeria</i>
94Hb SE02①	スギ属	<i>Cryptomeria</i>
94Hb SE02②	コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>
94G NR01 No.61	スギ属	<i>Cryptomeria</i>

護岸施設杭の樹種一覧

樹種	学名
1 不明	
2 サクラ属	<i>Prunus</i>
3 サクラ属	<i>Prunus</i>
4 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
5 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
6 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
7 不明	
8 サクラ属	<i>Prunus</i>
9 クリ属	<i>Castanea</i>
10 不明	
11 不明	
12 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
13 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
14 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
15 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
16 クリ属	<i>Castanea</i>
17 不明	
18 クリ属	<i>Castanea</i>
19 不明	
20 クリ属	<i>Castanea</i>
21 クリ属	<i>Castanea</i>
22 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
23 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
24 不明	
25 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
26 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
27 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
28 ケヤキ属	<i>Zelkova</i>
29 クリ属	<i>Castanea</i>
30 サクラ属	<i>Prunus</i>
31 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>

樹種	学名
32 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
33 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
34 サクラ属	<i>Prunus</i>
35 サクラ属	<i>Prunus</i>
36 スギ属	<i>Cryptomeria</i>
37 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
38 クリ属	<i>Castanea</i>
39 クリ属	<i>Castanea</i>
40 スギ属	<i>Cryptomeria</i>
41 スギ属	<i>Cryptomeria</i>
42 クリ属	<i>Castanea</i>
43 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
44 クリ属	<i>Castanea</i>
45 クリ属	<i>Castanea</i>
46 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
47 クリ属	<i>Castanea</i>
48 サクラ属	<i>Prunus</i>
49 クリ属	<i>Castanea</i>
50 不明	
51 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
52 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
53 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
54 不明	
55 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
56 不明	
57 クリ属	<i>Castanea</i>
58 不明	
59 クリ属	<i>Castanea</i>
60 不明	
61 不明	
62 不明	

樹種	学名
63 クリ属	<i>Castanea</i>
64 クリ属	<i>Castanea</i>
65 不明	
66 クリ属	<i>Castanea</i>
67 不明	
68 不明	
69 クリ属	<i>Castanea</i>
70 アカガシ亜属	<i>Cyclobalanopsis</i>
71 クリ属	<i>Castanea</i>
72 クリ属	<i>Castanea</i>
73 不明	
74 サクラ属	<i>Prunus</i>
75 クリ属	<i>Castanea</i>
76 サクラ属	<i>Prunus</i>
77 クリ属	<i>Castanea</i>
78 クリ属	<i>Castanea</i>
79 コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>
80 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
81 クリ属	<i>Castanea</i>
82 クリ属	<i>Castanea</i>
83 不明	
84 サクラ属	<i>Prunus</i>
85 不明	
86 コナラ亜属	<i>Lepidobalanus</i>
87 クリ属	<i>Castanea</i>
88 クリ属	<i>Castanea</i>
89 クリ属	<i>Castanea</i>
90 サクラ属	<i>Prunus</i>
91 不明	
92 不明	

表24 出土木製品樹種一覧

## 5.5 愛知県一宮市大毛沖遺跡より得られた昆虫群集について

森 勇一（愛知県立明和高等学校）

### I. はじめに

昆虫はすべての生物群のなかで最も種数が多く、水中（水生昆虫）、地表面（地表性歩行虫）、植物上（樹上性昆虫）など、多様な生活空間に適応して生活している。食性も食植性から、食肉性・食糞性・食屍性など多岐にわたっている。

先史～歴史時代における人間による自然改変によって、自然界に生息する動植物は多大な影響を受けた。とりわけ弥生時代以降、広域かつ組織的に実施された農耕地の開発によって、そこに生息していた生物は新しく出現した人為環境に適応するため、水稲や畑作物を加害するなど食性や生活史を変化させて種の保存を図るか、他の生息場所に移動するかの二者択一をせまられたのである。

小論では、愛知県一宮市大毛沖遺跡の遺物包含層および遺跡基盤層中より得られた昆虫化石（昆虫遺体ともいう）の分析結果をもとに、濃尾平野周辺地域における中世を中心とした昆虫相と、これらより推定される古環境について考察する。

### II. 分析試料および方法

大毛沖遺跡は濃尾平野北東の一宮市北方に位置し、標高9～10mの古代～中世を中心とした集落遺跡である（図103）。分析試料は、遺跡中央部を北東―南西方向に貫流する河道内の遺跡基盤層中より6試料（試料A；図119）、古代から中世にかけての土坑等より採取した6試料（試料B）、および鎌倉時代（12世紀後半～13世紀前半）に人為により掘削・廃棄された昆虫集積坑（「昆虫土坑」と呼ぶ）9試料（試料C）の計21試料である。なお、試料Cの昆虫土坑は93A区より8試料、隣接する大毛池田遺跡95A b区より1試料が得られている。これらは直径20～30cmの不規則な半球状を呈し、深さ4～10cmの凹みの底部に厚さ1～2cmの昆虫片が重なりあい集積したものである。掘削坑および埋め戻された土は、いずれも黄褐色の粘土混じり砂質シルト層であった。図版19に、遺構配置図および試料採取地点を示した。

昆虫化石の抽出は主にブロック割り法によった。昆虫化石の検出にあたってはアサヒペンタックス単眼顕微鏡（20倍）を利用し、実体顕微鏡下でクリーニングののち、一つずつの節片について筆者採集の現生標本の各部位と顕微鏡下で比較・検討しながら同定した。

### III. 分析結果

大毛沖遺跡より発見された昆虫の抽出・分析作業は未完成であるが、これまでに同定した昆虫化石（節片ないしは破片数）は計609点、試料ごとでは試料Aが327点、試料Bが278点であった。試料Cについては節片数が膨大であり、正確な計数は実施していない。産出した昆虫化石のリストを表25に、層準別の群集組成の特徴を表26に示した。主な昆虫化石

の顕微鏡写真は写真145に掲げた。

発見された昆虫は、そのほとんどが鞘翅目 (COLEOPTERA) に属する鞘翅 (Shard) ・前胸背板 (Pronotum) 等の節片よりなり、鞘翅目以外では双翅目 (DIPTERA) が3点、アリ科 (FORMICIDAE) が5点発見された。

出現した昆虫化石のうち、科レベルまで同定できたものの12科208点 (34.2%)、1亜科1点 (0.2%)、属レベル11属22点 (3.6%)、種レベル41種355点 (58.3%) であった。なお、目レベルでとどめたものは2目4点 (0.6%) であり、不明甲虫としたものは21点 (3.4%) であった。

生息環境および生態による分類では、食肉性および食植性の水生昆虫1目2科1亜科2属14属計142点 (23.3%)、食糞性および食屍性の地表性歩行虫1科2属4種計42点 (6.9%)、雑食性および食肉性の地表性歩行虫2科6属5種計165点 (27.1%)、陸生の食植性昆虫6科1亜科1属16種の計231点 (37.9%) であった。その他の昆虫片は29点 (4.9%) であった。

試料ごとにみると、試料Aではそのほとんどが水生昆虫で占められた。なかでもセマルガムシ *Coelostoma stultum* (61点) ・ガムシ *Hydrophilus acuminatus* (15点) ・コガムシ *Hydrochara affinis* (8点) ・ヒメガムシ *Sternolophus rufipes* (7点) などの食植性の水生甲虫が多く、主に湿地等に棲息するゴミムシ科 HARPLIDAE (63点) ・ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. (4点)、およびハネカクシ科 STAPHYLINIDAE (13点) なども伴われた。また、最下位層準をのぞき、サクラコガネ属 *Anomala* sp. (23点) ・ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (6点) をはじめとしたコガネムシ科 SCABAEIDAE (38点) が認められた。ネクイハムシ亜科 DONACIINAE では、A-1 でフトネクイハムシ *Donacia clavareau* (5点)、A-2 でキヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris sericea* (2点) とイネネクイハムシ *Donacia provosti* (1点)、A-5 および6 でイネネクイハムシ (8点) を産出することが特筆される。

試料Bでは、陸生の食植性昆虫が優占した。とくにヒメコガネ (115点) ・ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (2点) ・マメコガネ *Popillia japonica* (3点) ・ピロウドコガネ *Maladera japonica* (3点) ・サクラコガネ属 (10点) など、主に樹葉や果樹などの葉を食害する食葉性昆虫が多数認められた。また、クワハムシ *Freutiauxia armata* (1点) ・ハッカハムシ *Chrysolina exanthematica* (2点) ・ヨモギハムシ *C. aurichalcea* (1点) など、草本植生に多いハムシ科 CHRYSOMELIDAE が計15点発見された。ほかに草本植生などの葉上に認められ、他の小昆虫を捕食する食肉性のナミテントウ *Harmonia axyridis* (1点) などテントウムシ科 COCCINELLIDAE が計2点検出された。

地表性歩行虫では、ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. (8点) をはじめ、ゴミムシ科 HARPLIDAE (52点) ・ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE (4点) ・アトボンアオゴミムシ *Chlaenius naeviger* (1点) ・セアカヒラダゴミムシ *Dolichus halensis* (3点) などが産出した。食糞性昆虫ではコブマルエンマコガネ *Onthophagus atiripennis* (22点) ・エンマコ

ガネ属*Onthophagus sp.* (5点)、マグソコガネ*Aphodius rectus* (7点)・コマグソコガネ*A. pusillus* (2点)などが発見された。水生昆虫では、ゲンゴロウ*Cybister japonicus* (1点) およびガムシ (1点) が発見されたのみであった。

試料C (昆虫土坑) については、現段階では2試料分析したのみであるが、試料C-1 (93A区VH13p; 最大径23cm、深さ4cm、湿潤重量7.3kg) の1/2を水中にて溶解し昆虫片をすべて抽出した結果、試料中には推定数千点の昆虫節片 (破片) が含有されることが判明した。これらはすべてヒメコガネの鞘翅・前胸背板・腹部腹板・腿脛節等の節片およびその破片であった。鞘翅や前胸背板等では大部分著しく破壊が進み計数が困難であるため、保存状態が比較的良好な後腿節 (1個体に左右1対) に注目し、これを抽出し計数した結果、試料中には最少個体数で24~25頭にあたるヒメコガネが含有されることが明らかになった。同様の方法で試料C-2 (93A区VH93p; 最大径25.5cm、湿潤重量6.8kg) について分析した結果、13~16頭のヒメコガネが含まれることがわかった。これらはいずれも試料の1/2であることから、土坑全体ではそれぞれ48~50頭、26~32頭程度のヒメコガネが含有されるものと考えられる。なお、体色については試料1に1~2頭の青藍色個体が含有されるのみで、その他はすべて緑色個体であった。残る7試料 (C-3~9) では詳細な分析を実施していないが、いずれもヒメコガネの節片 (破片) が集積したものである。

#### Ⅳ. 推定される古環境

##### 1. 試料A (遺跡基盤層)

本試料では生成年代は定かではないものの、最下層 (A-1) から昆虫化石群集の標徴種であるフトネクイハムシを産出した (表26)。本種は富山県魚津埋没林内の弥生時代後期の堆積物中 (森, 1992)、静岡県池ヶ谷遺跡の弥生時代後期~古墳時代前期頃の水田廃絶後の泥炭層中 (森ほか, 1993) より産出し、清澄な酸性止水域と冷涼な気候 (野尻湖昆虫グループ, 1985) を指示するネクイハムシとして知られる。本層準では水深の浅い池沼や湿地などに棲息するセマルガムシを優先し、コガネムシ科をまったく産出しないことより、大毛沖遺跡周辺はこの当時、広範囲にわたり水深の浅い沼沢地のような景観を呈していたことが推定される。

A-2からは、高層湿原・池沼・ため池などさまざまな水域に棲息し気候帯においても亜寒帯~暖温帯に至る広域分布を有するキヌツヤミズクサハムシを産出した (表26)。同時にセマルガムシやガムシ・コガムシ・ヒメガムシなど大小の食植性水生甲虫を多産した。本層準ではコガネムシ科の産出点数も多く、この時期にはスゲ類をはじめ各種の水生植物が繁茂する湿地的な環境に移り変わったことが考えられる。コガネムシ科の産出からは、湿地内部にハンノキ類などの小灌木が生育していたことが推定される。

これより上位のA-3から4では、流水環境に多いオオミズスマシやミズスマシを産出した (表26)。本層準ではアオゴミムシ属・コブマルエンマコガネ、およびハムシ科などの

地表性歩行虫や陸性の食植性昆虫を随伴することより、水域と陸域が共存するような河畔環境であったことが考えられる。

A-5および6からは、稲作害虫（森，1993）として著名なイネネクイハムシを多産した（表26）。同じ地層よりヒメガムシ・マメガムシ・セマルガムシなど水田内に多い食植性水生甲虫を産出し、周辺地域で水稲耕作が行われていたことはほぼ確実であろう。なお、本層準は一宮市から葉栗郡木曾川町にかけての大毛沖遺跡（北條，1995）や、田所遺跡（服部，1993）より確認された古墳時代前期から後期に至る水田層とほぼ同層準に対比される可能性が考えられる。そして、試料Aと試料Bの間には、堆積物の層相のみならず、昆虫相のうえでも著しい違いが認められた。この地域では、両者をはさむ古代から中世の間に、湿性環境から乾性環境へと移行するような土地条件の大変化があったことが考えられる。これに伴い、大毛沖遺跡周辺では水稲耕作を中心とした土地利用から、畑作地への転換が図られたものと思われる。

## 2. 試料BおよびC（遺物包含層）

試料Bは水生昆虫に替わり、陸生の食植性昆虫の多産によって特徴づけられる。とくに樹葉や草本性の葉を食害する食葉性昆虫を優占した（表26）。このうち最も多く検出されたヒメコガネは、元来林縁や二次林等の樹葉に依存して生活する食葉性昆虫として知られる。遺跡などから検出された昆虫化石の分析から、ヒメコガネを中心とした食葉性のコガネムシ類は中世～江戸時代にかけて、日本各地で大増殖したことが明らかになってきた（森，1994；森，1995）。この事実は、中世以降、人間が山林原野を開墾した人家周辺に果樹・畑作物等を植栽するようになったとする文献史料にみられる記載内容（大山，1978；黒田，1984；木村，1992）ともよく符合する。12～13世紀の大毛沖遺跡の土坑や溝堆積物中から二次的環境下の樹葉を食する食葉性昆虫を多産したことにより、中世初頭には本遺跡の位置する濃尾平野周辺地域では土地改変が進行し、森林植生が伐採された人為度の高い空間であったと推定される。

また同層準におけるクワハムシ・ヨモギハムシ・ハッカハムシ・ピロウドコガネなどの日向の草本植生に依存する食植性昆虫の出現からは、大毛沖遺跡周辺が一年生ないし多年生の陽性植物が繁茂する攪乱環境であったことを示している。

そして、コブマルエンマコガネ・エンマコガネ属・マグソコガネなどの食糞性昆虫やセアカヒラタゴミムシ・アトボンアオゴミムシなど、今日の人里周辺に最も普通に認められる食糞性ないし食肉性の地表性歩行虫が多数発見されたことより、大毛沖遺跡周辺には近現代の畑作農村地帯に見られるような人家と畑が混在する人里生態系がすでに成立していたことが考えられる。このことは、食葉性昆虫や食糞性昆虫などの人里昆虫を多産した同一土坑（93A区SX01）内より、*Pinnularia microstauron*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*などの人為度の高い攪乱環境を特徴づける珪藻化石を産出する（鬼頭ほか未公表資料）ことによっても支持される。

また、試料Cの分析結果では、果樹等を加害していたであろうヒメコガネが大量に捕殺

生態	和名	学名	試料A-1 (10~25)	試料A-2 (25~31)	試料A-3 (31~44)	試料A-4 (44~50)		
水生昆虫	肉食性	トンボ目	ODONATA					
		ゲンゴロウ科	DYTISCIDAE	W3 P1		W2 A1		
		ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> SHARP				W1	
		ハイロゲンゴロウ	<i>Eretes sticticus</i> (LINNE)					
		マメゲンゴロウ属	<i>Agabus</i> sp.	H1		P2		
		クロズマメゲンゴロウ	<i>Agabus conspicuus</i> SHARP	W1				
	昆虫食性	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> MODEER			P1	W1	
		ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> SHARP			W2		
		ガムシ科	HYDROPHILIDAE			W1	H1 A1 L1	
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	A1	T1	W1 S1 L3	W1 A1 L1	
		コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (SHARP)		P1 L2	W1 P1 A1	W1 L1	
		ヒメガムシ	<i>Sternolophus rufipes</i> (FABRICIUS)		L1	L1		
地表面歩行虫	食糞性	マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (FABRICIUS)					
		セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (WALKER)	W11 P2 H1	W4 P3	W9 P3	W4 P2	
		ヒメセマルガムシ	<i>Coelostoma orbiculare</i> (FABRICIUS)			W1	W1	
		ネクイハムシ亜科	DONACIINAE					
		イネネクイハムシ	<i>Donacia provosti</i> FAIRMAIRE		W1			
		ミズクサハムシ属	<i>Platamaris</i> sp.				W1	
	雑食よび食植性	キヌツヤミズクサハムシ	<i>Platamaris sericea</i> LINNE		W2			
		フトネクイハムシ	<i>Donacia clavareaui</i> GOECKE	W2 P2 A1				
		エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.					
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> WATERHOUSE			W1		
		マダソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.					
		マダソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (MOTSCHULSKY)					
雑食よび食植性	雑食よび食植性	コマダソコガネ	<i>Aphodius pusillus</i> (HERBST)					
		エンマムシ	<i>Merohister jekeli</i> (MARSEUL)					
		シデムシ科	SILPHIDAE				P1 S1	
		ゴミムシ科	HARPALIDAE	W4 T1 A5 L1	W3 P1 T1 A3	W4 T2 A6	W8 P2 A4 L1	
		ナガゴミムシ科	<i>Pterostichus</i> sp.					
		オオナガゴミムシ	<i>Pterostichus fortis</i> MORAWITZ					
	雑食よび食植性	セアカヒラタゴミムシ	<i>Dolichus halensis</i> (SCHALLER)					
		ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.		W3			
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.				W1	
		アオゴミムシ属	<i>Chlaenius</i> sp.			P1		
		アトボシアオゴミムシ	<i>Chlaenius naeviger</i> MORAWITZ					
		オオトックリゴミムシ	<i>Oodes vicarius</i> BATES			W1		
雑食よび食植性	雑食よび食植性	トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.				P2	
		ヤマトトックリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> BATES	W1	W1	W2		
		ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	W3 T1 A1	W1 T1	P1 A1	W1	
		キマワリ属	<i>Plesiopthalmus</i> sp.				W2	
		コガネムシ科	SCARABAEIDAE		W1 S1 T1 L1		W1 S1 A1	
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.		W1 P2 A1 L1	W4 L2	W4 P1 L2	
	雑食よび食植性	雑食よび食植性	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> HOPE				
			ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY			W1	P3
			コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL				
			マメコガネ	<i>Popillia japonica</i> NEWMANN				
			ヒメカンショコガネ	<i>Apogonia amida</i> LEWIS			W1	
			ピロウドコガネ	<i>Maladera japonica</i> (MOTSCHULSKY)				
雑食よび食植性		雑食よび食植性	カミキリムシ科	CERAMBYCIDAE				
			ミヤマカミキリ	<i>Massicus raddei</i> (BLESSIG)				
			ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	W5	L1	W7	W4
			ルリハムシ	<i>Linaeidea aenea</i> (LINNE)				
			クワハムシ	<i>Flutiauzia armata</i> (BALY)				
			ヤナギルリハムシ	<i>Plagiadera versicolora</i> (LAICHTARTING)				
雑食よび食植性	雑食よび食植性	アオバネサルハムシ	<i>Basilepta fulvipes</i> (MOTSCHULSKY)					
		ルリマルノミハムシ	<i>Nonarthra cyaneum</i> BALY					
		ハッカハムシ	<i>Chrysolina exanthematica</i> (WIEDEMANN)					
		ヨモギハムシ	<i>Chrysolina aurichalcea</i> (MANNERHEIM)					
		コメツキムシ科	ELATERIDAE					
		サビキコリ	<i>Agrypnus binodulus</i> (MOTSCHULSKY)					
雑食よび食植性	雑食よび食植性	ゾウムシ科	CURCULIONIDAE	P1	P1 H1 L1			
		テントウムシ科	COCCINELLIDAE	W1				
		ナミテントウ	<i>Harmonia axyridis</i> (RALLAS)					
		不明甲虫	COLEOPTERA	W1 部位不明5	部位不明6	W1 部位不明1	W1	
		アリ科	FORMICIDAE	H2	H1			
		双翅目	DIPTERA			開齋1		
合計			59	49	68	59		

(検出部位凡例)

W(Wings): 鞘翅 H(Head): 頭部 T(thorax): 胸部 A(Abdomen): 腹部 P(Pronotum): 前胸背板 S(Scutellum): 小橋板

表25 遺跡から産出した昆虫化石

試料A-5 (50~64)	試料A-6 (64~80)	試料B-1 91A 北西溝	試料B-2 91B SK15	試料B-3 91C SK17	試料B-4 93A SK56	試料B-5 91A SK56	試料B-6 91H SD18	合計
	A1							1
W2								9
					W1			2
W1								1
								3
								1
W1								3
W1								3
								4
W3 H1	W1				W1			16
								8
W3 H1	W1							7
W1	W1							2
W15 P1	W4 P2							61
W1								3
	L1							1
W1	W6 P1							9
								1
								2
								5
			P1 T1 A1 L1		A1			5
			W7 P7 H1 A2		W2 P1	P1 T1		23
			P1					1
			W1		W2	W1 P3		7
						W1 H1		2
			W1					1
			W1					3
W1 P1 H1 A3	W5 P2 T3 A1	A1	W9 P5 H3 A3	P2	P2 H1 A1 L2	W8 P6 H5 A4		115
			P1					1
						W1		1
						W3		3
W1			W1			W7		12
								2
			P1					2
						W1		1
								1
								2
	W1							5
	T2 A1		P2		W1 A1			17
			L1					3
	W1		W1 L1		L1			11
W1	W2 P1 L1		W2 L3		W1 A1 L2		W1	33
		A1				A1		2
W1	L1	W2 A1	W20 P5 S1 H3 T2 A6 L3		W9 P1 H4 T1 A4 L2	W8 P4 T2 A2 L10	W13 P7 A3 L2	121
					W1	W1		2
					L3			3
								1
			W1			W2		3
			L1		L1			2
						W1		1
W2	W1		W5			W2 P1		28
W1								1
						W1		1
						W1		1
						W1		1
						W1		1
			W2					2
						W1		1
P1	W1 T1				W1 T1			5
					P1			1
W2								6
	W1					W1		3
						W1		1
	W2 P1		部位不明2		部位不明1			21
	H1				H1			5
閉鎖2								3
49	47	5	109	2	52	84	26	609

L(Legs): 腿脛節 M(Mandible): 大腮

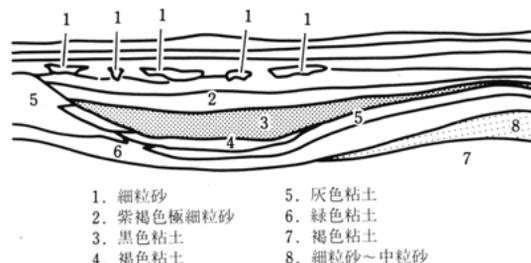
され土坑内に廃棄されたことが明らかになった。そして、ほぼ同じ時代の溝や土坑中の堆積物からもヒメコガネを中心とした食葉性の昆虫化石を多産することから、鎌倉時代（13世紀頃）には大毛沖遺跡周辺では果樹・桑・綿花・マメ科植物などの有用植物が植栽された畑作地帯であったと推定される。このことは文献（一宮市，1963；上村，1990）に表われた一宮市周辺地域における畑作地の存在ときわめてよく一致し、興味深い。

#### 謝 辞

小文を草するにあたり、以下の方々にお世話になった。心よりお礼申し上げる。服部恵子（愛知県埋蔵文化財センター）・永井宏幸（同）・鬼頭 剛（同）・土本典生（一宮市博物館）・久保禎子（同）

段階	推定年代	昆虫群集(優占種+標徴種)	古環境
1	弥生前-後期?	セマルガ <sup>1</sup> ムシ-フトネクイムシ群集	沼沢地
2	弥生-古墳?	セマルガ <sup>1</sup> ムシ-キヌガキミズ <sup>2</sup> クサハムシ群集	湿地
3	弥生-古墳?	セマルガ <sup>1</sup> ムシ-ミズ <sup>3</sup> スズメ群集	河畔環境
4	古墳前期-古代	イネクイムシ <sup>4</sup> -セマルガ <sup>1</sup> ムシ群集	水田近傍の湿地
5	古代(7-8C)	ヒメコガネ <sup>5</sup> -コノミミシ群集	陽性の攪乱環境?
6	古代~鎌倉	ヒメコガネ <sup>6</sup> -コノミミシ群集	人里環境
7	鎌倉(13C)	ヒメコガネ <sup>7</sup> -セアカヒラガ <sup>8</sup> ミミシ群集	畑作地帯
8	室町(15-16C)	ヒメコガネ <sup>8</sup> -サカコガネ群集	屋敷地付近の人為環境

表26 遺跡より産出した昆虫群集と古環境



参考図 93C区 西壁トレンチ断面図

#### 文 献

- 上村喜久子（1990）尾張国，講座日本荘園史 5，東北・関東・東海地方の荘園，吉川弘文館，337-374。
- 木村茂光（1992）日本古代・中世島作史の研究．校倉書房，412p。
- 黒田日出男（1984）日本中世開発史の研究．校倉書房，502p。
- 服部信博（1993）田所遺跡．愛知県埋蔵文化財センター年報（平成4年度），22-24。
- 北條真木（1995）大毛沖遺跡．愛知県埋蔵文化財センター年報（平成6年度），10-11。
- 一宮市（1963）新編一宮市史（資料編五），妙興寺文書，653p。
- 大山喬平（1978）日本中世農村史の研究．岩波書店，482p。
- 森 勇一（1992）魚津埋没林の泥炭層中より発見された昆虫化石について．魚津市立博物館紀要，3，魚津市教育委員会，1-12。
- 森 勇一（1993）静岡県・池ヶ谷遺跡の水田層より産した稲作害虫について．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第46集）池ヶ谷遺跡Ⅱ（自然科学編），静岡県埋蔵文化財調査研究所，201-218。
- 森 勇一・木下智章・楯真美子・前田弘子・山田由美子（1993）珪藻および昆虫化石群集から得られた静岡県・池ヶ谷遺跡の古環境変遷．静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書（第46集）池ヶ谷遺跡Ⅱ（自然科学編），静岡県埋蔵文化財調査研究所，133-200。
- 森 勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究，33（5），331-349。
- 森 勇一（1995）虫は世につれ，人につれ，昆虫考古学のすすめ（4），考古学フォーラム6，愛知考古学談話会，53-61。

## 5.6 生産活動(蛍光X線・重鉍物)

### 5.6.1 大毛沖遺跡出土古代土器の蛍光X線分析

三辻利一(奈良教育大学)

#### 1. はじめに

元素分析による須恵器の産地推定をするためには、前以って、窯跡出土須恵器の分析データを整理しておかねばならない。そのためには大量の分析データが必要である。当然、従来から岩石学分野で行われてきたような完全分析の仕方では処理し切れるものではない。この点を考慮に入れて、まず、地域差を示す元素を探索しておき、この地域差を示す元素についてデータを集積する。その上で産地想定法を組立てる。こうした考え方で、筆者は過去20年にわたって、全国各地の窯跡出土須恵器の分析データを集積してきた。K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を示す元素であった。そして、Rb-Sr分布図が各地の窯跡出土須恵器の地域差を見易く表示する図として提案された。この分布図は考古学者にも見易いという点で、きわめて有用な図であるが、この分布図上で、2つの窯又は窯群間の相互識別を定量的に行うことはできない。この点を改良するために、2群間判別分析法が適用され、Rb-Sr分布図に代わって、K、Ca、Rb、Srの4因子を使った2群間判別分析図が考案された。そして、この分布図で各群の試料の分布領域の領界を決めるため、5%の危険率をかけたホッテリングの $T^2$ 検定が行われることになった。もし、古墳や住居跡から出土した須恵器が上述した方法で決められた(X)窯群の領界内に入れば、(X)窯群が産地を推定される訳である。勿論、この計算の作業に入る前に、前以って、年代などの考古学的諸条件を入れて産地候補となる窯群をしばっておかなければならない。これが筆者が開発した須恵器産地推定法であり、目下、各地の遺跡出土須恵器について試験的に適用されている。この方法は須恵器と同様、窰窯でしか焼成できない中世陶器にも適用できるし、一部の埴輪や土師器にも適用される。また、生産地である窯跡が残っていない土器についても、何らかの方法で母集団を設定することが出来れば、この方法を適用することができる。この方法を適用するには、窯群を十分整理しておかなければならない。とくに、美濃須衛、尾北、尾張、猿投地域の窯群出土須恵器の化学特性は微妙に異なっており、筆者自身、これらの窯群の相互識別においてとどまっている現状である。そのためここではあえて、2群間判別分析は行わず、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を使って、窯間の微妙な相異を示すことにした。したがって、大毛沖遺跡などの須恵器、灰釉陶器の産地推定もこれらの分布図を使って探ることにとどめた。

#### 2. 分析結果

表27・28には窯跡出土須恵器、灰釉陶器の分析値をまとめてある。すべての分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値である。JG-1中の各元素の含有量は $K_2O$ 、 $CaO$ 、 $Na_2O$ 、 $Fe_3O_4$ として、それぞれ、3.95、2.18、3.39、2.02%であり、また、Rb、Srとしては181、184ppmである。したがって、表27・28の分析値にそれぞれ、これらの値を案ず

れば、%やppmで表示する濃度が得られる。ここではJ G-1による標準値化を使って分布図を作成した。

図127①②には天狗谷窯、寒洞窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。両図には天狗谷窯のすべての試料を包含するようにして、定性的な天狗谷領域を示してある。そうすると、図127②の寒洞窯の須恵器もすべて、天狗谷領域内に分布することがわかる。図127③④には天狗谷窯、寒洞窯の須恵器のK-Ca分布図を示す。K-Ca分布図でも、寒洞窯の須恵器は天狗谷領域に分布しており、天狗谷窯と寒洞窯の須恵器胎土は類似していることがわかる。

次に、図127⑤⑥には稲田山窯の須恵器のRb-Ca分布図とK-Ca分布図を示してある。天狗谷領域や尾北篠岡領域とは微妙にずれており、胎土が違うことを示している。このことは天狗谷窯と稲田山窯では同じ場所の粘土を採取していなかったことを示している。

図128⑦⑧には篠岡窯、御望南窯の須恵器のRb-Sr分布図を示してある。また、両図には篠岡窯群の今回分析したすべての試料を包含するようにして篠岡領域を描いてある。天狗谷領域とは明らかに異なることがわかる。⑧の御望南窯の須恵器は微妙なところに分布していることがわかる。しかし、図128⑨、⑩のK-Ca分布図を比較すると、御望南窯の須恵器胎土は天狗谷窯よりも尾北篠岡窯群の須恵器胎土に近いように思われる。勿論、灰釉陶器も須恵器と同じ胎土である。

このようにして、今回分析した美濃須衛・尾北地域の窯内出土須恵器胎土は窯によって微妙に異なることがわかった。ここでは一方、(天狗谷・寒洞群)、(稲田山群)、(尾北篠岡・御望南群)の3群に分類しておく。なお、Fe、Na因子は美濃須衛と尾北地域の窯間ではほとんど差異がないことが表27・28からわかる。逆の言い方をすれば、美濃須衛と尾北地域の窯跡出土須恵器はFe、Na量とも少ないという共通した特徴をもつといえる。図128⑪⑫には湖西側の吉名窯の灰釉陶器と山田窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。比較のために、天狗谷領域を示してあるが、明らかに、美濃須衛・尾北地域産の須恵器とは胎土が異なることがわかる。同様にして、図129⑬⑭のK-Ca分布図では天狗谷領域と比較してあるが、Rb-Sr分布図と同様、湖西側の灰釉陶器、須恵器胎土は美濃須衛・尾北地域の須恵器とは胎土が異なることがわかる。さらに、吉名窯の灰釉陶器と山田窯の須恵器胎土も同じでないことは、⑬と⑭を比較すればわかる。

このように、窯ごとに須恵器胎土が異なることは、窯ごとに粘土の採掘場所が違ったことを意味する。

また、吉名窯の灰釉陶器には他の窯の須恵器に比べてFe量は少ないが、篠岡15号窯の灰釉陶器にもFe量は少ない。さらに、篠岡47号窯では須恵器と灰釉陶器が分析されたが、須恵器に比べて灰釉陶器にはFe量が少ないことが表28よりわかる。このことは須恵器と灰釉陶器では素材粘土が異なることを示している。しかし、長石系の4因子では須恵器と灰釉陶器で差異は認められないことから、両岩の粘土は同一地域内で採取されたことがうかがわれる。同一地域内の粘土にも、Fe量に若干差異があり、とくに、Fe量の少ない白色の粘土を灰釉陶器の素材として使用したものと推定される。このことは表29～31に示す、供

給先側の灰釉陶器についても同様である。

次に、供給先の遺跡出土須恵器、灰釉陶器の分析結果について説明する。分析値は表29～31にまとめられている。これらのデータを一挙に解説することは難しい。まず、分布図を使って、大まかに産地をみてみることにする。

図129⑮⑯には堀之内花ノ木遺跡出土土器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。⑮で天狗谷領域に分布する134～140の7点はいずれも灰釉陶器であり、尾北篠岡領域に分布するのはほとんどが須恵器である。この図を見る限り、須恵器は篠岡群側から、灰釉陶器は美濃衛天狗谷群側から供給された可能性がある。127の須恵器も天狗谷群のものかもしれない。136、137は天狗谷領域を少しずれるので、東濃群の別の窯の灰釉陶器も混ざっている可能性もある。図129⑰⑱には名古屋城三の丸遺跡出土土器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。173～175は灰釉陶器である。須恵器のほとんどは美濃須衛稲田山領域に分布していることが⑰と⑱からわかる。ここでも、灰釉陶器と須恵器は別産地の製品である可能性がある。178は須恵器であるが、胎土が他の須恵器と若干異なっており、産地も異なる可能性がある。図130⑲⑳には清洲城下町遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。大部分が稲田山領域を中心に分布しており、美濃須衛稲田山窯群から供給された可能性が高い。また、K、Rb量の高い146、160、161、163、164などは別産地の製品であろう。逆に、Rb量の少ない141、142も別産地の製品とみられる。これらの別産地の製品とみられるものも、Ca、Sr、Fe量が少ないという東海産の須恵器の特徴をもっており、美濃、尾張地域の製品であることには相違ない。湖西地域からの搬入品は1点もない。

図130㉑～㉓には大毛沖遺跡出土土器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。㉑をみる限り、ほとんどの試料が篠岡領域と天狗谷領域に分布しており、地元、美濃産の製品であることを示している。このうち須恵器の大半は尾北篠岡領域に分布し、灰釉陶器の多くは美濃須衛天狗谷領域に分布する。Rb量の多いNa200、201、203、222、224、はいずれも灰釉陶器であり、これらは美濃須衛産ではなく、東濃産の製品とみられる。胎土からみて、灰釉陶器には少なくとも、2種類あることがわかった。大部分の須恵器は1ヶ所の産地の製品とみられるが、美濃須衛稲田山領域に対応するものはほとんどないところから、稲田山窯群からの供給はなかったものとみられる。Na56、106、860は別産地の製品である可能性をもつ。とくに、Na56は異質で、湖西地区からの搬入品である可能性をもつ。今回、湖西地区からの搬入品があるとすれば、このNa56くらいであり、ほとんどの須恵器は尾北産、灰釉陶器は美濃須衛産と東濃産であると推定された。

東海地域内での須恵器、灰釉陶器のまとまった流通の流れは目下のところ、十分把握されてはいない。この段階で、個別に判別分析で無理に産地を推定しても、全体からみて、判断が誤ることも考えられるので、分布図から大きな流れを探ってみた訳である。従来は上述したように、須恵器のほとんどは美濃須衛・尾北産であり、湖西からの搬入品はほとんど検出されなかった。灰釉陶器も美濃須衛産と推定されるものが多かったが、一部にK、Rb量の高い東濃群産とみられるものも含まれていた。

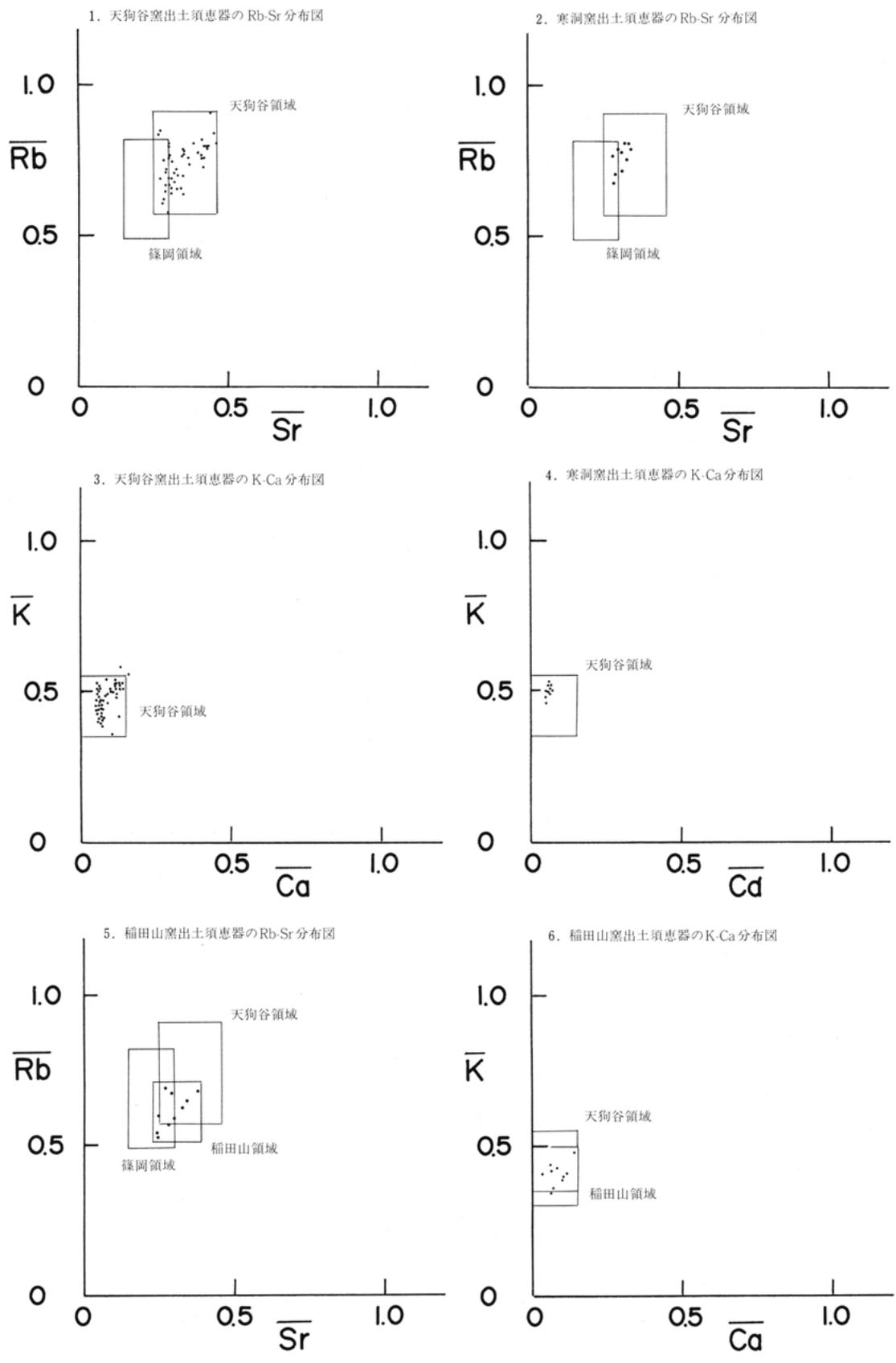
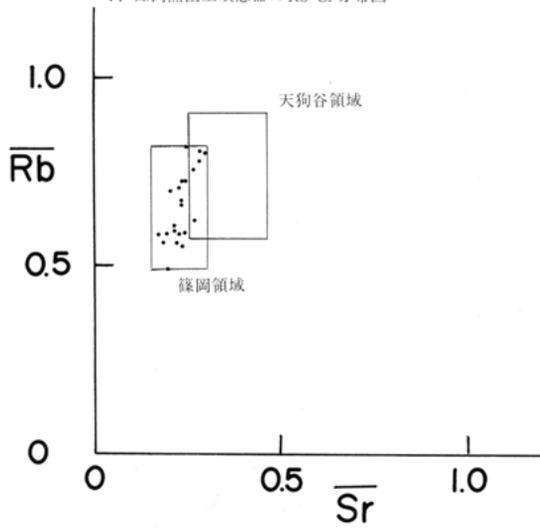
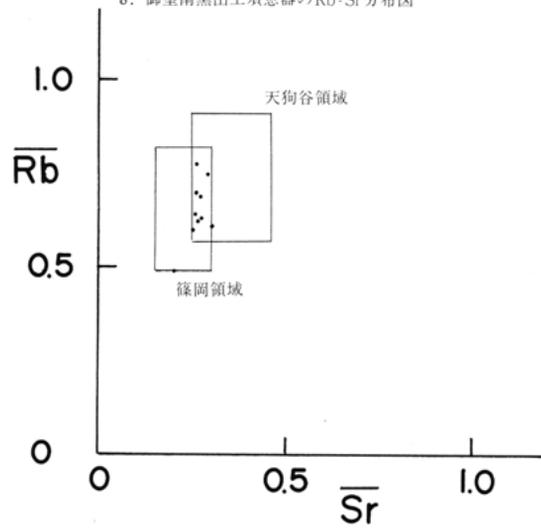


図127 Rb-Sr および K-Ca分布図(1)

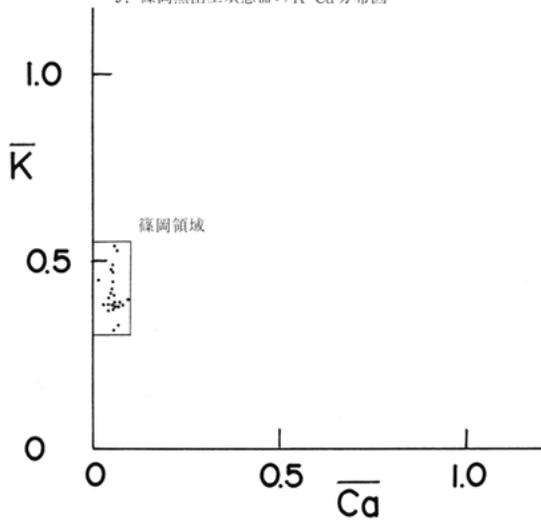
7. 篠岡窯出土須恵器のRb-Sr分布図



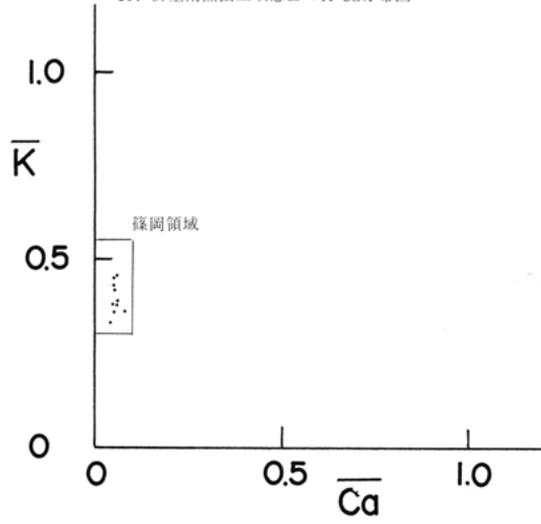
8. 御望南窯出土須恵器のRb-Sr分布図



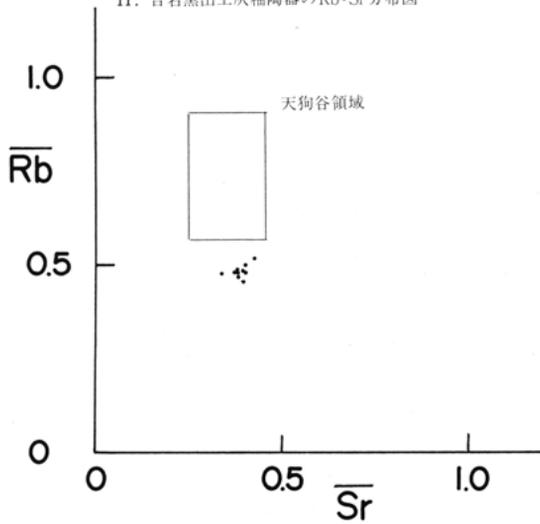
9. 篠岡窯出土須恵器のK-Ca分布図



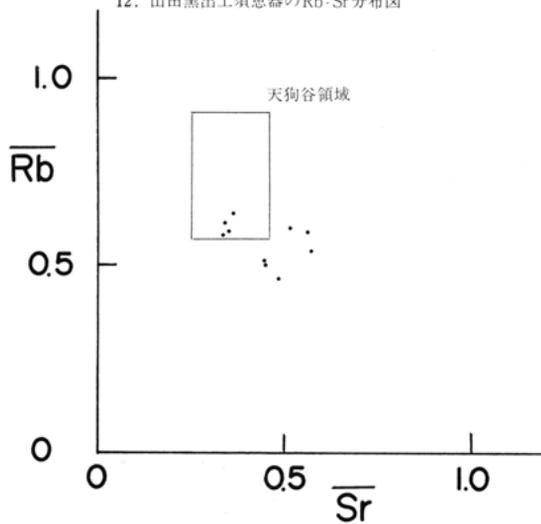
10. 御望南窯出土須恵器のK-Ca分布図



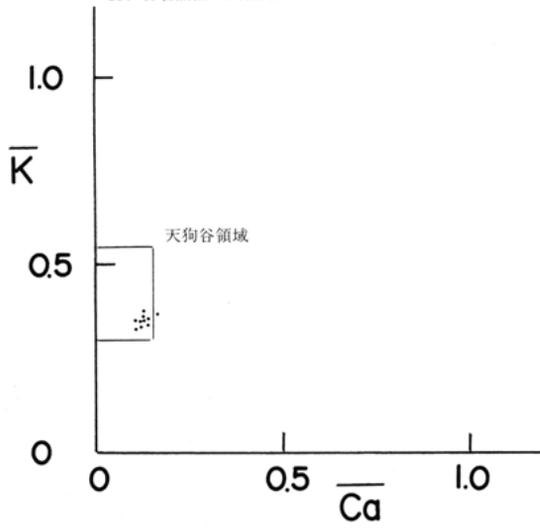
11. 吉名窯出土灰釉陶器のRb-Sr分布図



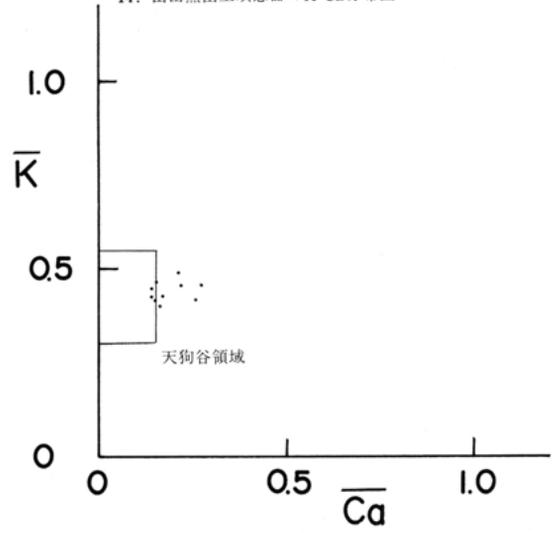
12. 山田窯出土須恵器のRb-Sr分布図



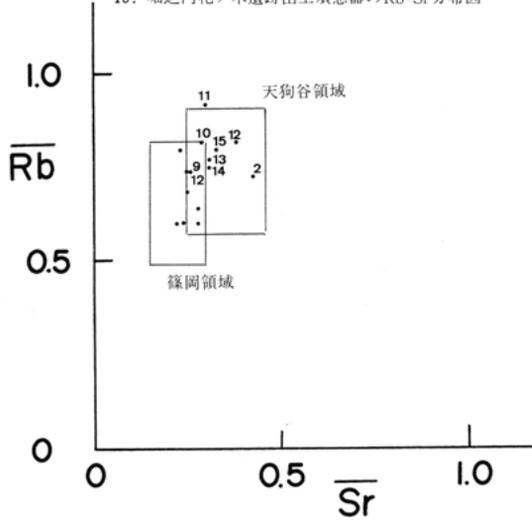
13. 吉名窯出土灰釉陶器のK-Ca分布図



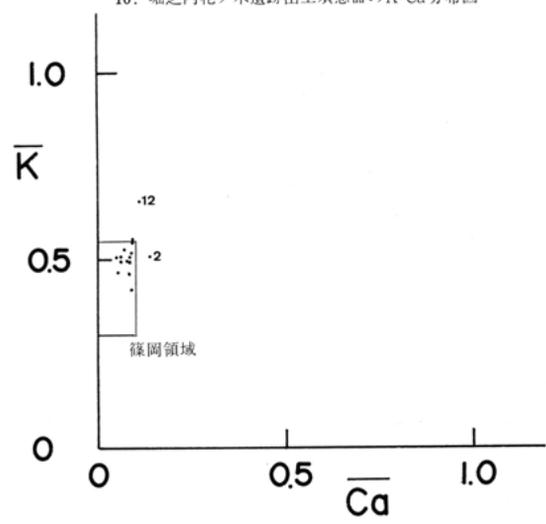
14. 山田窯出土土須恵器のK-Ca分布図



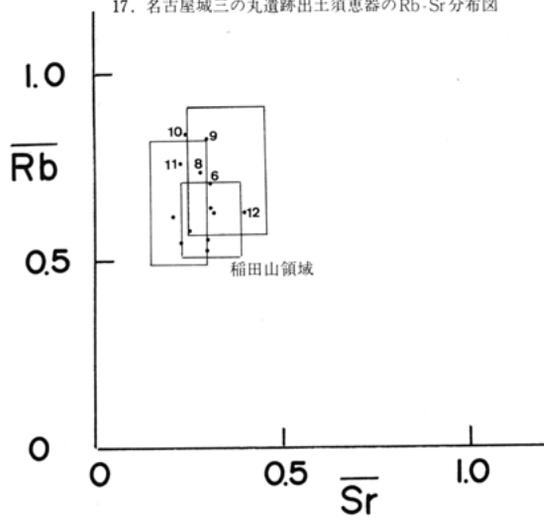
15. 堀之内花ノ木遺跡出土土須恵器のRb-Sr分布図



16. 堀之内花ノ木遺跡出土土須恵器のK-Ca分布図



17. 名古屋城三の丸遺跡出土土須恵器のRb-Sr分布図



18. 名古屋城三の丸遺跡出土土須恵器のK-Ca分布図

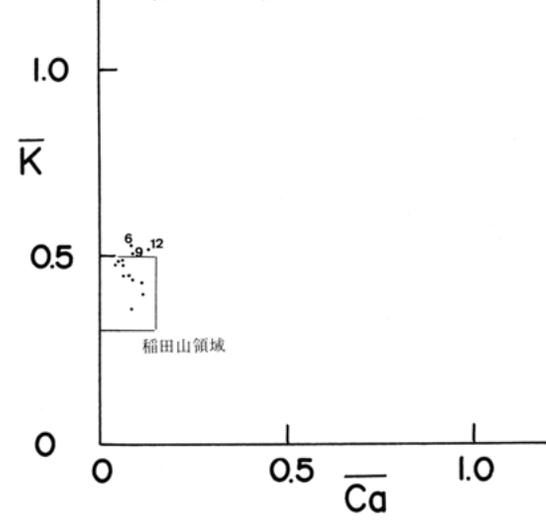


図129 Rb-SrおよびK-Ca分布図(3)

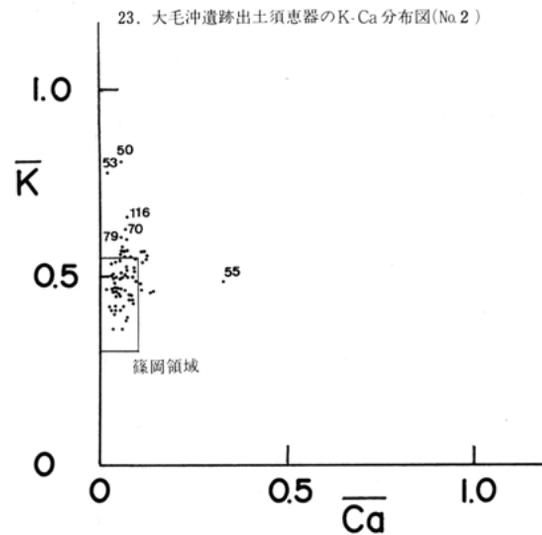
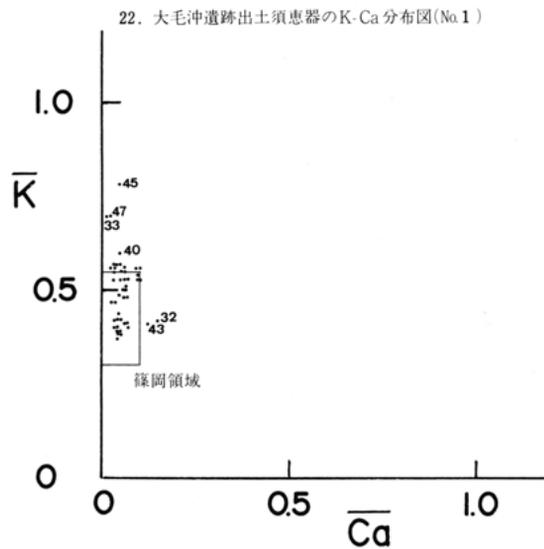
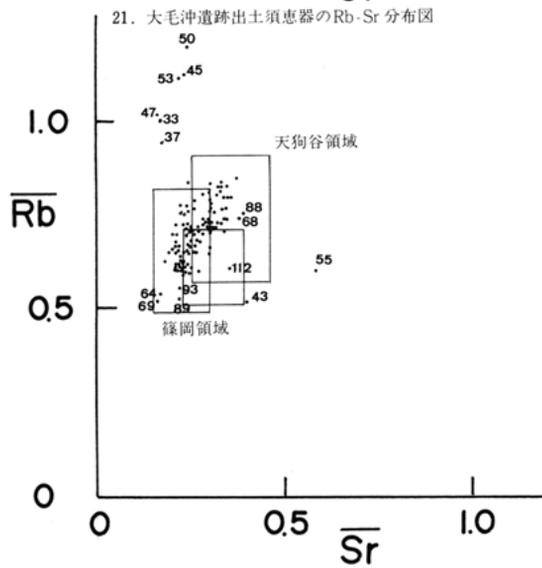
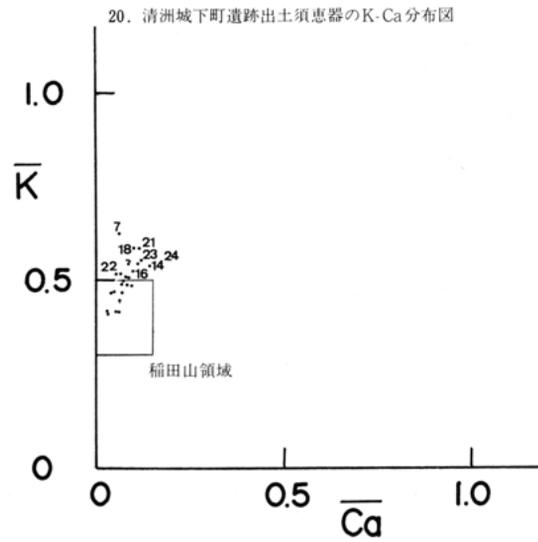
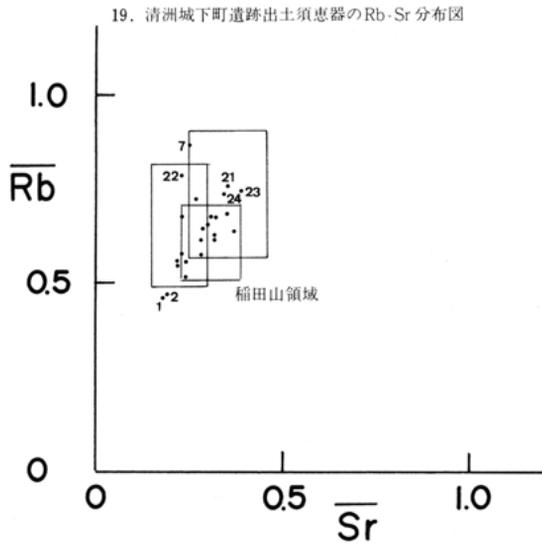


図130 Rb-Sr および K-Ca 分布図(4)

	遺跡名	資料番号	種類・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	吉名6号窯		1 灰釉陶器・椀	0.351	0.118	0.887	0.461	0.393	0.193
2	吉名6号窯		2 灰釉陶器・椀	0.352	0.125	1.01	0.466	0.384	0.173
3	吉名6号窯		3 灰釉陶器・椀	0.374	0.157	1.04	0.517	0.425	0.186
4	吉名6号窯		4 灰釉陶器・椀	0.362	0.141	0.923	0.501	0.403	0.180
5	吉名6号窯		5 灰釉陶器・椀	0.379	0.132	0.868	0.492	0.384	0.168
6	吉名6号窯		6 灰釉陶器・皿	0.344	0.144	1.05	0.483	0.402	0.163
7	吉名6号窯		7 灰釉陶器・椀	0.341	0.118	0.973	0.483	0.377	0.178
8	吉名6号窯		8 灰釉陶器・椀	0.351	0.102	0.859	0.480	0.375	0.174
9	吉名6号窯		9 灰釉陶器・椀	0.358	0.126	1.07	0.485	0.389	0.181
10	吉名6号窯		10 灰釉陶器・椀	0.332	0.102	0.991	0.482	0.344	0.150
11	山田窯		1 須恵器・杯蓋	0.487	0.213	1.85	0.602	0.515	0.328
12	山田窯		2 須恵器・杯	0.422	0.256	1.57	0.538	0.571	0.314
13	山田窯		3 須恵器・杯	0.464	0.268	1.68	0.592	0.563	0.353
14	山田窯		4 須恵器・杯	0.401	0.156	1.62	0.511	0.437	0.179
15	山田窯		5 須恵器・杯	0.431	0.165	1.69	0.507	0.444	0.205
16	山田窯		6 須恵器・杯	0.455	0.218	2.35	0.468	0.478	0.321
17	山田窯		7 須恵器・杯蓋	0.465	0.152	2.40	0.639	0.360	0.236
18	山田窯		8 須恵器・杯蓋	0.423	0.148	2.77	0.582	0.330	0.184
19	山田窯		9 須恵器・杯	0.426	0.138	2.55	0.585	0.346	0.189
20	山田窯		10 須恵器・杯	0.446	0.143	2.75	0.607	0.343	0.205
21	御望南9号窯	A1	須恵器・杯蓋	0.333	0.040	1.56	0.493	0.199	0.030
22	御望南9号窯	A2	須恵器・杯蓋	0.391	0.052	1.10	0.631	0.268	0.042
23	御望南9号窯	A3	須恵器・杯蓋	0.380	0.048	1.12	0.638	0.256	0.038
24	御望南9号窯	A4	須恵器・杯蓋	0.461	0.060	0.962	0.746	0.292	0.061
25	御望南9号窯	A5	須恵器・壺	0.451	0.052	1.05	0.778	0.263	0.042
26	御望南9号窯	B1	須恵器・杯蓋	0.430	0.051	1.08	0.685	0.274	0.058
27	御望南9号窯	B2	須恵器・杯蓋	0.362	0.081	1.08	0.612	0.303	0.070
28	御望南9号窯	B3	須恵器・杯蓋	0.358	0.051	1.35	0.598	0.250	0.051
29	御望南9号窯	B4	須恵器・杯蓋	0.420	0.055	1.39	0.704	0.264	0.063
30	御望南9号窯	B5	須恵器・杯	0.377	0.057	1.28	0.626	0.265	0.049
31	天狗谷3号窯	A1	須恵器・杯	0.425	0.073	1.02	0.650	0.293	0.051
32	天狗谷3号窯	A2	須恵器・杯蓋	0.356	0.104	1.14	0.576	0.302	0.042
33	天狗谷3号窯	A3	須恵器・杯蓋	0.556	0.161	1.21	0.836	0.446	0.075
34	天狗谷3号窯	A4	須恵器・杯蓋	0.438	0.057	0.998	0.694	0.273	0.062
35	天狗谷3号窯	A5	須恵器・盤	0.422	0.125	0.693	0.643	0.353	0.059
36	天狗谷3号窯	B1	須恵器・杯	0.414	0.061	0.971	0.665	0.299	0.059
37	天狗谷3号窯	B2	須恵器・盤	0.511	0.099	0.940	0.767	0.350	0.072
38	天狗谷3号窯	B3	須恵器・盤?	0.520	0.127	0.863	0.796	0.433	0.102
39	天狗谷3号窯	B4	須恵器・杯蓋	0.441	0.062	0.877	0.658	0.333	0.065
40	天狗谷3号窯	B5	須恵器・杯蓋	0.450	0.053	0.881	0.619	0.281	0.049
41	天狗谷4号窯	A1	須恵器・杯	0.494	0.085	0.879	0.785	0.351	0.059
42	天狗谷4号窯	A2	須恵器・杯	0.504	0.096	0.855	0.764	0.365	0.068
43	天狗谷4号窯	A3	須恵器・盤	0.528	0.127	0.893	0.807	0.457	0.102
44	天狗谷4号窯	A4	須恵器・杯蓋	0.528	0.113	0.985	0.762	0.419	0.098
45	天狗谷4号窯	A5	須恵器・杯蓋	0.511	0.133	0.881	0.793	0.431	0.079
46	天狗谷4号窯	B1	須恵器・杯	0.489	0.121	0.943	0.741	0.370	0.084
47	天狗谷4号窯	B2	須恵器・杯	0.532	0.118	0.865	0.804	0.420	0.085
48	天狗谷4号窯	B3	須恵器・盤	0.512	0.114	1.02	0.732	0.415	0.116
49	天狗谷4号窯	B4	須恵器・杯蓋	0.532	0.130	0.889	0.803	0.429	0.080
50	天狗谷4号窯	B5	須恵器・杯蓋	0.535	0.085	0.924	0.809	0.378	0.077
51	天狗谷5号窯	A1	須恵器・杯	0.450	0.073	1.19	0.755	0.302	0.043
52	天狗谷5号窯	A2	須恵器・盤	0.536	0.114	1.03	0.766	0.408	0.076
53	天狗谷5号窯	A3	須恵器・杯蓋	0.416	0.076	1.04	0.680	0.318	0.047
54	天狗谷5号窯	A4	須恵器・杯蓋	0.376	0.066	1.08	0.666	0.294	0.039
55	天狗谷5号窯	A5	須恵器・杯蓋	0.459	0.086	0.913	0.704	0.345	0.060
56	天狗谷5号窯	B1	須恵器・杯	0.401	0.069	1.53	0.614	0.277	0.040
57	天狗谷5号窯	B2	須恵器・盤	0.447	0.056	1.21	0.702	0.330	0.044
58	天狗谷5号窯	B3	須恵器・盤	0.460	0.060	1.15	0.767	0.349	0.075
59	天狗谷5号窯	B4	須恵器・杯蓋	0.389	0.070	1.12	0.642	0.307	0.044
60	天狗谷5号窯	B5	須恵器・盤	0.478	0.120	1.44	0.658	0.312	0.052
61	天狗谷7号窯	A1	須恵器・杯蓋	0.477	0.012	1.00	0.777	0.353	0.062
62	天狗谷7号窯	A2	須恵器・杯蓋	0.434	0.055	0.821	0.686	0.297	0.054

表27 窯跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(1)

	遺跡名	資料番号	種類・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
63	天狗谷7号窯	A3	須惠器・杯蓋	0.507	0.143	1.24	0.764	0.417	0.101
64	天狗谷7号窯	A4	須惠器・盤	0.466	0.066	1.23	0.721	0.325	0.058
65	天狗谷7号窯	A5	須惠器・盤	0.468	0.071	0.940	0.658	0.341	0.056
66	天狗谷7号窯	B1	須惠器・杯	0.587	0.128	0.944	0.910	0.440	0.090
67	天狗谷7号窯	B2	須惠器・杯蓋	0.472	0.058	1.15	0.720	0.285	0.041
68	天狗谷7号窯	B3	須惠器・杯蓋	0.502	0.058	1.13	0.800	0.301	0.049
69	天狗谷7号窯	B4	須惠器・杯蓋	0.494	0.053	0.977	0.712	0.292	0.044
70	天狗谷7号窯	B5	須惠器・杯蓋	0.401	0.065	1.06	0.642	0.313	0.041
71	天狗谷窯	1	須惠器・杯	0.498	0.107	0.876	0.777	0.396	0.075
72	天狗谷窯	2	須惠器・杯	0.470	0.052	1.07	0.751	0.279	0.042
73	天狗谷窯	3	須惠器・杯	0.477	0.078	1.18	0.745	0.307	0.053
74	天狗谷窯	4	須惠器・盤?	0.514	0.053	1.30	0.840	0.265	0.042
75	天狗谷窯	5	須惠器・杯蓋	0.527	0.121	0.984	0.820	0.410	0.069
76	天狗谷窯	6	須惠器・杯蓋	0.435	0.070	1.17	0.694	0.313	0.060
77	天狗谷窯	7	須惠器・杯蓋	0.506	0.062	1.21	0.758	0.300	0.052
78	天狗谷窯	8	須惠器・杯蓋	0.439	0.074	0.973	0.706	0.321	0.051
79	天狗谷窯	9	須惠器・壺	0.524	0.063	1.10	0.845	0.274	0.041
80	天狗谷窯	10	須惠器・高杯	0.530	0.056	0.917	0.813	0.300	0.047
81	稲田山1号窯	No1	須惠器・杯	0.337	0.056	1.38	0.528	0.242	0.040
82	稲田山1号窯	No2	須惠器・杯	0.359	0.073	1.45	0.568	0.280	0.039
83	稲田山1号窯	No3	須惠器・杯	0.441	0.057	1.37	0.687	0.270	0.041
84	稲田山1号窯	No4	須惠器・杯	0.412	0.033	1.36	0.542	0.244	0.038
85	稲田山1号窯	No5	須惠器・杯	0.419	0.056	1.13	0.602	0.247	0.043
86	稲田山2号窯	No1	須惠器・杯	0.381	0.096	1.36	0.585	0.297	0.100
87	稲田山2号窯	No2	須惠器・杯	0.426	0.084	1.37	0.675	0.286	0.038
88	稲田山2号窯	No3	須惠器・杯	0.421	0.114	1.46	0.650	0.344	0.046
89	稲田山2号窯	No4	須惠器・杯	0.385	0.096	1.21	0.633	0.331	0.049
90	稲田山2号窯	No5	須惠器・杯	0.482	0.143	1.19	0.684	0.379	0.062
91	寒洞窯A	No1	須惠器・杯	0.503	0.053	1.24	0.784	0.308	0.048
92	寒洞窯A	No2	須惠器・杯	0.480	0.046	1.49	0.767	0.280	0.048
93	寒洞窯A	No3	須惠器・杯	0.531	0.054	1.12	0.785	0.298	0.053
94	寒洞窯A	No4	須惠器・杯	0.527	0.054	1.12	0.786	0.337	0.057
95	寒洞窯A	No5	須惠器・杯	0.508	0.056	1.22	0.809	0.324	0.052
96	寒洞窯B	No1	須惠器・杯	0.523	0.063	1.19	0.813	0.331	0.050
97	寒洞窯B	No2	須惠器・杯	0.496	0.053	1.31	0.710	0.286	0.049
98	寒洞窯B	No3	須惠器・杯	0.494	0.056	1.46	0.722	0.311	0.055
99	寒洞窯B	No4	須惠器・杯	0.457	0.050	1.26	0.679	0.281	0.050
100	寒洞窯B	No5	須惠器・杯	0.497	0.065	1.20	0.761	0.325	0.051
101	篠岡15号窯	1	灰釉陶器・椀	0.397	0.039	0.937	0.699	0.202	0.048
102	篠岡15号窯	2	灰釉陶器・椀	0.391	0.058	0.760	0.655	0.231	0.054
103	篠岡15号窯	3	灰釉陶器・椀	0.404	0.097	0.590	0.624	0.259	0.074
104	篠岡15号窯	4	灰釉陶器・皿	0.409	0.060	0.725	0.665	0.231	0.057
105	篠岡15号窯	5	灰釉陶器・皿	0.377	0.056	0.903	0.713	0.220	0.049
106	篠岡47号窯	1	灰釉陶器・皿	0.471	0.053	0.736	0.805	0.275	0.085
107	篠岡47号窯	2	須惠器・杯蓋	0.445	0.013	1.85	0.583	0.169	0.047
108	篠岡47号窯	3	灰釉陶器・椀	0.530	0.065	0.611	1.02	0.270	0.082
109	篠岡47号窯	4	灰釉陶器・皿	0.482	0.051	0.529	0.796	0.293	0.106
110	篠岡47号窯	5	灰釉陶器・壺	0.494	0.050	0.728	0.784	0.275	0.065
111	篠岡78号窯	1	須惠器・高杯	0.381	0.082	1.69	0.586	0.243	0.064
112	篠岡78号窯	2	須惠器・高杯	0.383	0.059	1.52	0.576	0.228	0.066
113	篠岡78号窯	3	須惠器・杯蓋	0.539	0.060	1.90	0.822	0.242	0.048
114	篠岡78号窯	4	須惠器・杯蓋	0.384	0.053	1.36	0.590	0.212	0.052
115	篠岡78号窯	5	須惠器・杯蓋	0.378	0.075	1.59	0.548	0.230	0.059
116	篠岡81号窯	1	須惠器・杯蓋?						
117	篠岡81号窯	2	須惠器・長頸壺?	0.429	0.052	1.23	0.759	0.257	0.083
118	篠岡81号窯	3	須惠器・杯蓋	0.445	0.056	1.14	0.734	0.243	0.067
119	篠岡81号窯	4	須惠器・杯	0.423	0.051	1.42	0.726	0.238	0.083
120	篠岡81号窯	5	須惠器・杯蓋?	0.378	0.032	1.26	0.602	0.206	0.054
121	篠岡112号窯	1	須惠器・杯	0.331	0.071	3.34	0.420	0.189	0.071
122	篠岡112号窯	2	須惠器・杯	0.315	0.057	2.00	0.492	0.194	0.046
123	篠岡112号窯	3	須惠器・杯	0.382	0.067	2.24	0.563	0.216	0.060
124	篠岡112号窯	4	須惠器・杯蓋	0.372	0.043	1.98	0.561	0.178	0.045
125	篠岡112号窯	5	須惠器・杯蓋	0.385	0.046	1.95	0.583	0.194	0.047

表28 窯跡出土須惠器・灰釉陶器分析結果(2)

	遺跡名	遺構番号	資料番号	種類・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	登録番号
126	堀之内花ノ木遺跡	SD01	堀-1	須恵器・短頸壺	0.469	0.080	1.57	0.681	0.246	0.085	
127	堀之内花ノ木遺跡	SD26	堀-2	須恵器・杯蓋	0.513	0.139	1.92	0.727	0.433	0.185	
128	堀之内花ノ木遺跡	SD45	堀-3	須恵器・杯	0.527	0.065	2.33	0.641	0.282	0.145	
129	堀之内花ノ木遺跡	SD13	堀-4	須恵器・杯蓋	0.496	0.086	2.27	0.596	0.279	0.146	
130	堀之内花ノ木遺跡	SD13	堀-5	須恵器・杯	0.513	0.047	2.31	0.801	0.230	0.057	
131	堀之内花ノ木遺跡	SD13	堀-6	須恵器・杯	0.419	0.083	2.33	0.597	0.236	0.063	
132	堀之内花ノ木遺跡	SD13	堀-7	須恵器・杯	0.468	0.048	2.33	0.599	0.222	0.084	
133	堀之内花ノ木遺跡	SD13	堀-8	須恵器・盤	0.505	0.056	1.71	0.738	0.249	0.053	
134	堀之内花ノ木遺跡	SD30	堀-9	灰釉陶器・椀	0.503	0.064	0.595	0.736	0.263	0.081	
135	堀之内花ノ木遺跡	SD30	堀-10	灰釉陶器・椀	0.510	0.079	0.766	0.822	0.286	0.089	
136	堀之内花ノ木遺跡	SD30	堀-11	灰釉陶器・皿	0.564	0.090	0.753	0.924	0.297	0.099	
137	堀之内花ノ木遺跡	SD30	堀-12	灰釉陶器・皿	0.664	0.107	0.635	0.821	0.375	0.212	
138	堀之内花ノ木遺跡	SB11	堀-13	灰釉陶器・椀	0.548	0.089	0.783	0.773	0.308	0.126	
139	堀之内花ノ木遺跡	SB11	堀-14	灰釉陶器・皿	0.503	0.083	0.719	0.749	0.314	0.103	
140	堀之内花ノ木遺跡	SB11	堀-15	灰釉陶器・皿	0.523	0.085	0.672	0.800	0.325	0.118	
141	清洲城下町遺跡	SB15	清-1	須恵器・杯	0.418	0.030	2.50	0.462	0.184	0.055	
142	清洲城下町遺跡	SB15	清-2	須恵器・杯	0.420	0.029	2.55	0.471	0.185	0.062	
143	清洲城下町遺跡	SB50	清-6	須恵器・杯蓋	0.418	0.053	2.28	0.583	0.231	0.064	
144	清洲城下町遺跡	SB50	清-3	須恵器・杯	0.422	0.050	1.63	0.559	0.237	0.066	
145	清洲城下町遺跡	SB50	清-4	須恵器・杯	0.468	0.044	2.11	0.554	0.224	0.083	
146	清洲城下町遺跡	SB50	清-7	須恵器・鉢	0.628	0.059	1.39	0.872	0.254	0.079	
147	清洲城下町遺跡	SB50	清-8	須恵器	0.474	0.040	1.67	0.563	0.219	0.070	
148	清洲城下町遺跡	SB50	清-5	須恵器・杯	0.468	0.073	1.96	0.617	0.279	0.123	
149	清洲城下町遺跡	SB54	清-10	須恵器・杯蓋	0.498	0.070	2.04	0.652	0.292	0.129	
150	清洲城下町遺跡	SB54	清-9	須恵器・杯	0.508	0.086	1.83	0.676	0.317	0.165	
151	清洲城下町遺跡	SB54	清-11	須恵器・高杯	0.441	0.064	2.90	0.520	0.237	0.070	
152	清洲城下町遺跡	SB20	清-12	須恵器・杯	0.511	0.084	1.99	0.729	0.268	0.084	
153	清洲城下町遺跡	SB20	清-14	須恵器・杯	0.539	0.144	2.14	0.644	0.370	0.196	
154	清洲城下町遺跡	SB20	清-13	須恵器・杯	0.546	0.085	1.90	0.675	0.306	0.136	
155	清洲城下町遺跡	SB20	清-15	須恵器・杯	0.493	0.080	1.96	0.578	0.278	0.125	
156	清洲城下町遺跡	SB20	清-16	須恵器・杯	0.529	0.099	2.21	0.618	0.320	0.159	
157	清洲城下町遺跡	SB23	清-17	須恵器・杯	0.485	0.093	1.96	0.634	0.319	0.163	
158	清洲城下町遺跡	SB23	清-18	須恵器・椀	0.594	0.100	2.08	0.694	0.351	0.131	
159	清洲城下町遺跡	SB23	清-19	須恵器・杯蓋	0.521	0.052	1.59	0.676	0.229	0.075	
160	清洲城下町遺跡	SB61	清-21	須恵器・椀	0.585	0.113	1.93	0.763	0.349	0.142	
161	清洲城下町遺跡	SB61	清-24	須恵器・椀	0.553	0.110	1.74	0.744	0.344	0.162	
162	清洲城下町遺跡	SB61	清-20	須恵器・杯	0.489	0.066	1.66	0.662	0.297	0.096	
163	清洲城下町遺跡	SB61	清-22	須恵器・杯	0.515	0.066	1.76	0.785	0.229	0.052	
164	清洲城下町遺跡	SB61	清-23	須恵器・杯	0.560	0.120	1.72	0.747	0.390	0.161	
165	名古屋城三の丸遺跡	SK206	名-13	須恵器・杯	0.452	0.081	2.90	0.554	0.229	0.104	
166	名古屋城三の丸遺跡	SK206	名-11	須恵器・杯蓋	0.480	0.059	1.93	0.758	0.230	0.065	
167	名古屋城三の丸遺跡	SK206	名-12	須恵器・杯蓋	0.521	0.132	2.18	0.631	0.403	0.165	
168	名古屋城三の丸遺跡	SB206	名-4	須恵器・盤	0.356	0.088	2.03	0.533	0.302	0.105	
169	名古屋城三の丸遺跡	SB206	名-5	須恵器・盤	0.434	0.112	1.77	0.631	0.315	0.108	
170	名古屋城三の丸遺跡	SB206	名-3	須恵器・椀	0.435	0.089	1.88	0.560	0.297	0.141	
171	名古屋城三の丸遺跡	SB206	名-1	須恵器・杯	0.404	0.116	2.01	0.640	0.305	0.097	
172	名古屋城三の丸遺跡	SB206	名-2	須恵器・椀	0.493	0.056	1.95	0.581	0.252	0.119	
173	名古屋城三の丸遺跡	SB220	名-9	灰釉陶器・長頸瓶	0.511	0.086	0.838	0.826	0.302	0.118	
174	名古屋城三の丸遺跡	SB220	名-8	灰釉陶器・皿	0.453	0.063	0.875	0.742	0.281	0.095	
175	名古屋城三の丸遺跡	SB220	名-10	灰釉陶器・長頸瓶	0.486	0.054	1.35	0.842	0.240	0.062	
176	名古屋城三の丸遺跡	SB227	名-7	須恵器・杯	0.476	0.039	2.23	0.618	0.205	0.072	
177	名古屋城三の丸遺跡	SB227	名-6	須恵器・杯蓋	0.525	0.086	1.54	0.710	0.307	0.121	
178	大毛沖遺跡	93A SB01	沖-1	須恵器・杯蓋	0.557	0.096	1.28	0.846	0.367	0.082	E-26
179	大毛沖遺跡	93A SB01	沖-2	須恵器・杯蓋	0.555	0.085	1.34	0.833	0.332	0.067	E-28
180	大毛沖遺跡	93A SB01	沖-3	須恵器・杯蓋	0.542	0.095	1.14	0.834	0.340	0.073	E-27
181	大毛沖遺跡	93A SB01	沖-4	須恵器・杯蓋	0.536	0.096	2.07	0.651	0.303	0.087	E-1070
182	大毛沖遺跡	93A SB06	沖-5	須恵器・杯蓋or杯	0.422	0.037	1.40	0.601	0.217	0.032	E-71
183	大毛沖遺跡	93A SB06	沖-6	須恵器・杯	0.468	0.030	1.43	0.700	0.236	0.039	E-72
184	大毛沖遺跡	93A SB06	沖-7	灰釉陶器・段皿	0.424	0.034	1.28	0.610	0.223	0.380	E-73
185	大毛沖遺跡	93A SB06	沖-10	灰釉陶器・椀							E-69
186	大毛沖遺跡	93A SB06	沖-12	須恵器・椀	0.559	0.022	2.53	0.625	0.176	0.066	E-70
187	大毛沖遺跡	93A SB07	沖-8	灰釉陶器・椀	0.495	0.059	0.778	0.768	0.256	0.086	E-119
188	大毛沖遺跡	93A SB07	沖-9	灰釉陶器・椀							E-116

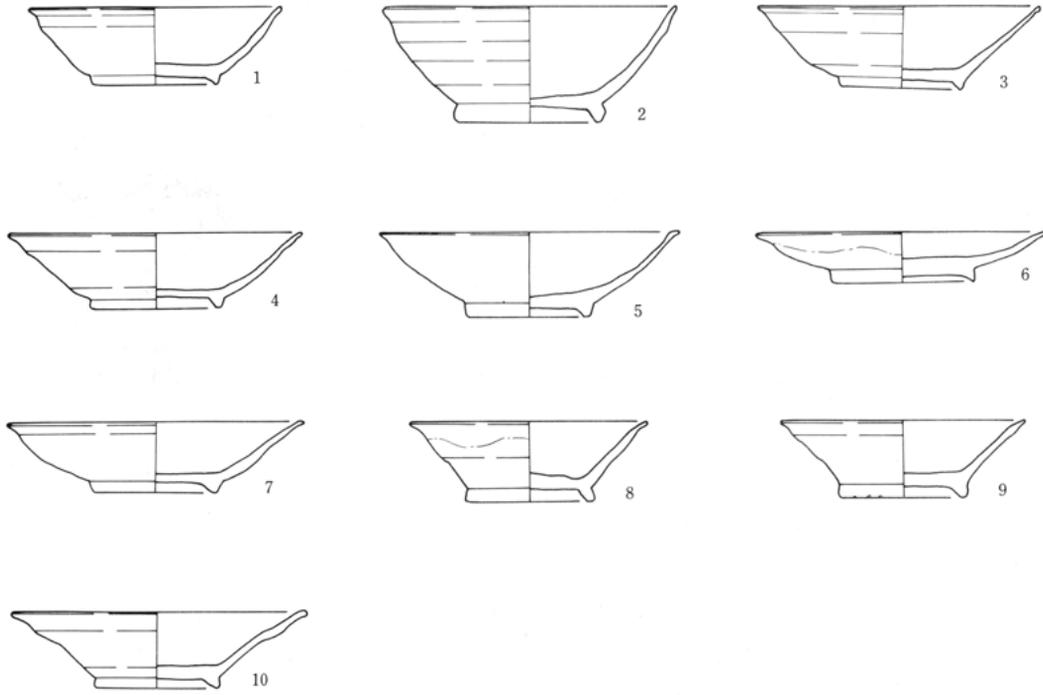
表29 遺跡出土須恵器・灰釉陶器分析結果(1)

遺跡名	遺構番号	資料番号	種類・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	登録番号	
189	大毛沖遺跡	93A SB07	沖-11	灰軸陶器・椀	0.553	0.058	0.790	0.808	0.315	0.114	E-118
190	大毛沖遺跡	93A SB07	沖-13	灰軸陶器・椀	0.557	0.062	0.856	0.816	0.297	0.090	E-1071
191	大毛沖遺跡	93A SB08	沖-14	須惠器・高杯or杯	0.504	0.061	1.86	0.791	0.256	0.077	E-10
192	大毛沖遺跡	93A SB08	沖-15	須惠器・杯蓋	0.526	0.100	1.25	0.800	0.335	0.104	E-11
193	大毛沖遺跡	93A SB09	沖-16	須惠器・杯蓋	0.510	0.062	1.95	0.722	0.247	0.058	E-16
194	大毛沖遺跡	93A SB09	沖-19	須惠器・杯	0.476	0.062	1.93	0.722	0.245	0.076	E-19
195	大毛沖遺跡	93A SB09	沖-18	須惠器・杯蓋	0.562	0.063	1.29	0.792	0.295	0.073	E-17
196	大毛沖遺跡	93A SB09	沖-17	須惠器・杯蓋	0.532	0.061	1.27	0.765	0.298	0.062	E-18
197	大毛沖遺跡	94F SB01	沖-20	灰軸陶器・椀	0.402	0.037	0.696	0.608	0.210	0.049	E-230
198	大毛沖遺跡	94F SB01	沖-21	灰軸陶器・椀	0.423	0.043	0.812	0.609	0.246	0.051	E-231
199	大毛沖遺跡	94F SB01	沖-22	灰軸陶器・椀	0.487	0.042	0.656	0.620	0.226	0.070	E-1072
200	大毛沖遺跡	94F SB01	沖-23	灰軸陶器・皿	0.574	0.047	0.819	0.774	0.338	0.129	E-1073
201	大毛沖遺跡	94F SB01	沖-24	灰軸陶器・段皿	0.553	0.053	0.820	0.726	0.321	0.115	E-228
202	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-25	灰軸陶器・皿	0.534	0.026	0.807	0.683	0.210	0.069	E-207
203	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-26	灰軸陶器・皿	0.381	0.043	0.592	0.618	0.215	0.069	E-208
204	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-27	灰軸陶器・椀	0.389	0.045	0.632	0.695	0.204	0.066	E-218
205	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-28	灰軸陶器・皿	0.480	0.056	0.738	0.763	0.236	0.071	E-210
206	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-29	灰軸陶器・椀	0.370	0.038	0.548	0.596	0.209	0.070	E-1074
207	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-30	灰軸陶器・椀	0.409	0.059	0.617	0.670	0.210	0.054	E-217
208	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-31	灰軸陶器・椀	0.386	0.040	0.681	0.660	0.205	0.063	E-219
209	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-32	灰軸陶器・椀	0.421	0.145	1.00	0.804	0.349	0.204	E-221
210	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-33	灰軸陶器・椀	0.702	0.011	0.669	1.01	0.167	0.019	E-1075
211	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-34	灰軸陶器・皿	0.402	0.035	0.612	0.652	0.209	0.057	E-212
212	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-35	灰軸陶器・皿	0.569	0.030	0.763	0.721	0.295	0.102	E-213
213	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-36	灰軸陶器・椀	0.409	0.065	0.699	0.730	0.243	0.075	E-215
214	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-37	灰軸陶器・椀	0.574	0.029	0.637	0.949	0.175	0.030	E-224
215	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-38	灰軸陶器・皿	0.404	0.070	0.718	0.597	0.270	0.054	E-220
216	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-39	灰軸陶器・長頸瓶	0.547	0.029	0.784	0.722	0.304	0.113	E-225
217	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-40	灰軸陶器・椀	0.602	0.048	0.691	0.837	0.241	0.090	E-216
218	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-41	灰軸陶器・皿	0.381	0.046	0.559	0.607	0.216	0.077	E-209
219	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-42	灰軸陶器・椀	0.438	0.043	0.600	0.640	0.224	0.080	E-1076
220	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-43	灰軸陶器・椀	0.412	0.123	1.01	0.522	0.395	0.114	E-1077
221	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-44	灰軸陶器・椀	0.568	0.036	0.745	0.731	0.325	0.106	E-223
222	大毛沖遺跡	94F SB02	沖-45	灰軸陶器・椀	0.785	0.043	0.642	1.13	0.225	0.022	E-222
223	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-46	灰軸陶器・椀	0.533	0.048	0.702	0.708	0.295	0.097	E-202
224	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-47	灰軸陶器・椀	0.702	0.021	0.668	1.02	0.170	0.020	E-203
225	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-48	灰軸陶器・椀	0.403	0.035	0.986	0.671	0.247	0.054	E-1078
226	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-49	灰軸陶器・椀	0.600	0.068	0.854	0.835	0.331	0.105	E-196
227	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-50	灰軸陶器・椀	0.814	0.053	0.623	1.20	0.239	0.020	E-200
228	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-51	灰軸陶器・椀	0.356	0.058	0.628	0.607	0.227	0.067	E-197
229	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-52	灰軸陶器・皿	0.384	0.064	0.682	0.673	0.237	0.065	E-195
230	大毛沖遺跡	94F SB03	沖-53	灰軸陶器・椀	0.782	0.018	0.641	1.12	0.216	0.022	E-201
231	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-54	須惠器・杯蓋	0.505	0.034	2.01	0.729	0.236	0.123	E-51
232	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-55	須惠器・瓶	0.490	0.331	1.31	0.600	0.580	0.323	E-56
233	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-56	須惠器・長頸瓶	0.503	0.043	2.43	0.663	0.236	0.073	E-60
234	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-57	須惠器・椀	0.500	0.089	1.83	0.723	0.310	0.133	E-54
235	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-58	須惠器・杯蓋	0.473	0.043	1.94	0.651	0.230	0.095	E-52
236	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-59	須惠器・杯	0.514	0.054	1.75	0.715	0.245	0.097	E-55
237	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-60	須惠器・椀	0.540	0.113	1.37	0.736	0.352	0.306	E-53
238	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-61	須惠器・長頸瓶	0.522	0.072	1.22	0.823	0.330	0.195	E-63
239	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-62	須惠器・椀	0.488	0.094	1.87	0.710	0.298	0.118	E-1079
240	大毛沖遺跡	94I SB01	沖-63	須惠器・杯	0.500	0.062	1.24	0.713	0.267	0.067	E-1080
241	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-64	須惠器	0.422	0.038	1.82	0.542	0.174	0.019	E-1081
242	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-65	須惠器・杯	0.568	0.114	1.16	0.799	0.363	0.055	E-108
243	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-66	須惠器・杯	0.539	0.026	1.79	0.726	0.205	0.053	E-1082
244	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-67	須惠器・杯蓋	0.558	0.116	1.61	0.768	0.336	0.144	E-98
245	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-68	須惠器・杯	0.463	0.143	1.80	0.739	0.376	0.125	E-104
246	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-69	須惠器・杯	0.362	0.033	1.74	0.522	0.163	0.043	E-106
247	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-70	須惠器・杯	0.629	0.064	1.10	0.829	0.328	0.050	E-1083
248	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-71	須惠器・杯蓋	0.548	0.093	2.01	0.780	0.301	0.124	E-95
249	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-72	須惠器・杯	0.567	0.052	1.40	0.726	0.309	0.124	E-103
250	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-73	須惠器・杯蓋	0.562	0.058	2.10	0.673	0.255	0.076	E-93
251	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-74	須惠器・杯蓋	0.552	0.049	1.28	0.699	0.280	0.105	E-94

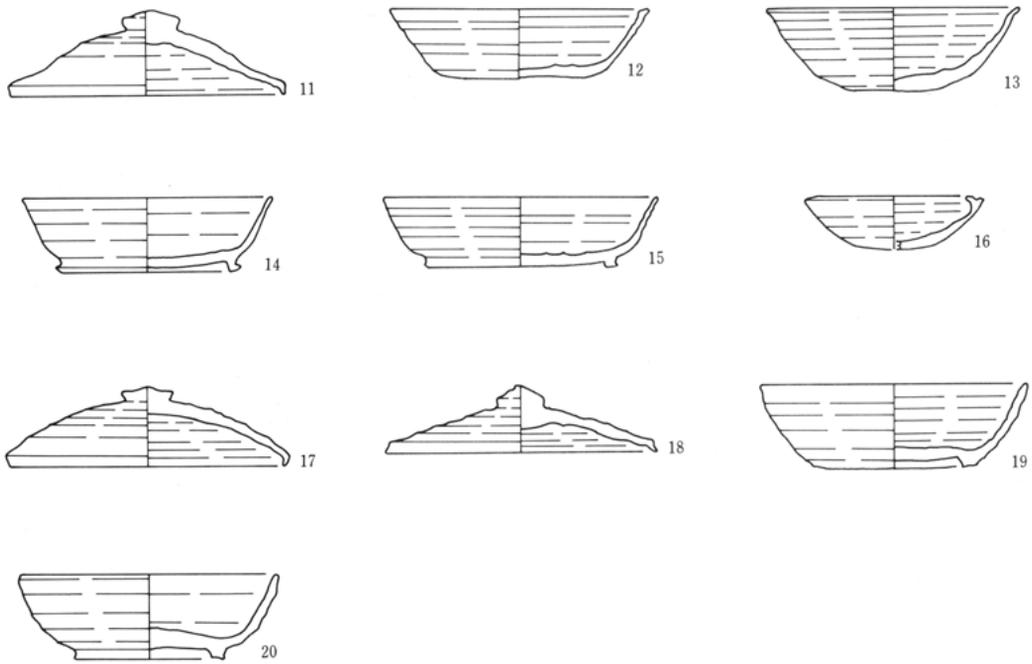
表30 遺跡出土須惠器・灰軸陶器分析結果(2)

	遺跡名	遺構番号	資料番号	種類・器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	登録番号
252	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-75	須惠器・杯蓋	0.464	0.049	1.48	0.588	0.227	0.072	E-96
253	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-76	須惠器・杯蓋	0.572	0.054	1.47	0.725	0.296	0.167	E-97
254	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-77	須惠器・盤	0.447	0.037	1.52	0.589	0.231	0.085	E-102
255	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-78	須惠器・杯	0.468	0.035	1.46	0.617	0.238	0.078	E-105
256	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-79	須惠器・碗	0.606	0.053	1.34	0.773	0.304	0.118	E-109
257	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-80	須惠器・碗	0.481	0.042	1.33	0.623	0.231	0.017	E-1084
258	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-81	須惠器・杯蓋	0.576	0.054	1.47	0.722	0.300	0.158	E-100
259	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-82	須惠器・盤	0.570	0.067	1.41	0.729	0.290	0.136	E-101
260	大毛沖遺跡	94I SB02	沖-83	須惠器・杯蓋	0.573	0.117	1.63	0.743	0.340	0.152	E-99
261	大毛沖遺跡	94I SB03	沖-84	須惠器・碗	0.460	0.042	1.48	0.618	0.231	0.036	E-66
262	大毛沖遺跡	94I SB03	沖-85	須惠器・碗	0.537	0.039	2.01	0.699	0.209	0.075	E-67
263	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-86	灰釉陶器・碗	0.525	0.090	0.817	0.814	0.284	0.155	E-146
264	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-87	灰釉陶器・三足盤	0.476	0.106	0.941	0.727	0.292	0.076	E-143
265	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-88	灰釉陶器・皿	0.554	0.122	0.737	0.751	0.394	0.169	E-144
266	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-89	須惠器・杯蓋	0.413	0.051	1.93	0.531	0.220	0.095	E-142
267	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-90	須惠器・杯蓋	0.502	0.035	1.73	0.783	0.222	0.070	E-140
268	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-91	須惠器・杯蓋	0.500	0.035	1.73	0.778	0.230	0.063	E-141
269	大毛沖遺跡	94I SB04	沖-92	須惠器・碗	0.472	0.019	1.87	0.647	0.187	0.054	E-145
270	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-93	須惠器・杯	0.394	0.066	1.47	0.560	0.224	0.069	E-122
271	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-94	須惠器・長頸瓶	0.523	0.089	1.55	0.697	0.299	0.111	E-127
272	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-95	須惠器・皿or盤	0.446	0.074	2.19	0.696	0.255	0.069	E-1085
273	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-96	須惠器・杯	0.450	0.045	1.44	0.670	0.223	0.040	E-125
274	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-97	須惠器・碗	0.465	0.035	1.33	0.711	0.247	0.047	E-123
275	大毛沖遺跡	94I SB06	沖-98	須惠器・盤	0.447	0.081	2.15	0.685	0.267	0.072	E-126
276	大毛沖遺跡	94I SB07	沖-99	須惠器・杯蓋	0.468	0.036	2.83	0.622	0.214	0.070	E-131
277	大毛沖遺跡	94I SB07	沖-100	須惠器・杯	0.527	0.069	1.66	0.724	0.291	0.122	E-132
278	大毛沖遺跡	94I SB07	沖-101	須惠器・杯	0.498	0.069	2.14	0.681	0.270	0.120	E-135
279	大毛沖遺跡	94I SB07	沖-102	須惠器・碗	0.465	0.049	1.34	0.678	0.247	0.052	E-134
280	大毛沖遺跡	94I SB07	沖-103	須惠器	0.558	0.047	1.97	0.723	0.267	0.128	E-133
281	大毛沖遺跡	94I SB08	沖-104	須惠器・盤	0.562	0.079	1.24	0.762	0.310	0.109	E-1086
282	大毛沖遺跡	94I SB08	沖-105	須惠器・鉢or壺	0.499	0.065	1.34	0.762	0.235	0.049	E-1087
283	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-112	須惠器・甕	0.463	0.140	1.52	0.613	0.349	0.134	E-860
284	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-114	須惠器・甕	0.466	0.064	1.26	0.739	0.281	0.075	E-859
285	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-113	須惠器・甕	0.503	0.044	1.96	0.756	0.225	0.064	E-865
286	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-115	灰釉陶器・長頸瓶	0.415	0.025	0.781	0.673	0.213	0.050	E-862
287	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-116	灰釉陶器・長頸瓶	0.660	0.072	0.943	0.836	0.304	0.080	E-864
288	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-117	灰釉陶器・長頸瓶	0.439	0.081	1.25	0.648	0.264	0.067	E-863
289	大毛沖遺跡	94Ca NR01	沖-106	灰釉陶器・鉢	0.421	0.062	0.725	0.658	0.239	0.086	E-799
290	大毛沖遺跡	94Ca NR01	沖-108	灰釉陶器・皿	0.405	0.038	0.576	0.600	0.224	0.088	E-852
291	大毛沖遺跡	94Ca NR01	沖-107	灰釉陶器・碗	0.414	0.026	0.705	0.591	0.235	0.081	E-846
292	大毛沖遺跡	94Ca NR01	沖-109	灰釉陶器・碗	0.429	0.086	0.832	0.661	0.297	0.059	E-831
293	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-110	須惠器・甕	0.444	0.075	1.15	0.654	0.255	0.060	E-861
294	大毛沖遺跡	94Cb NR01	沖-111	須惠器・甕	0.472	0.110	1.30	0.707	0.341	0.128	E-866

表31 遺跡出土須惠器・灰釉陶器分析結果(3)



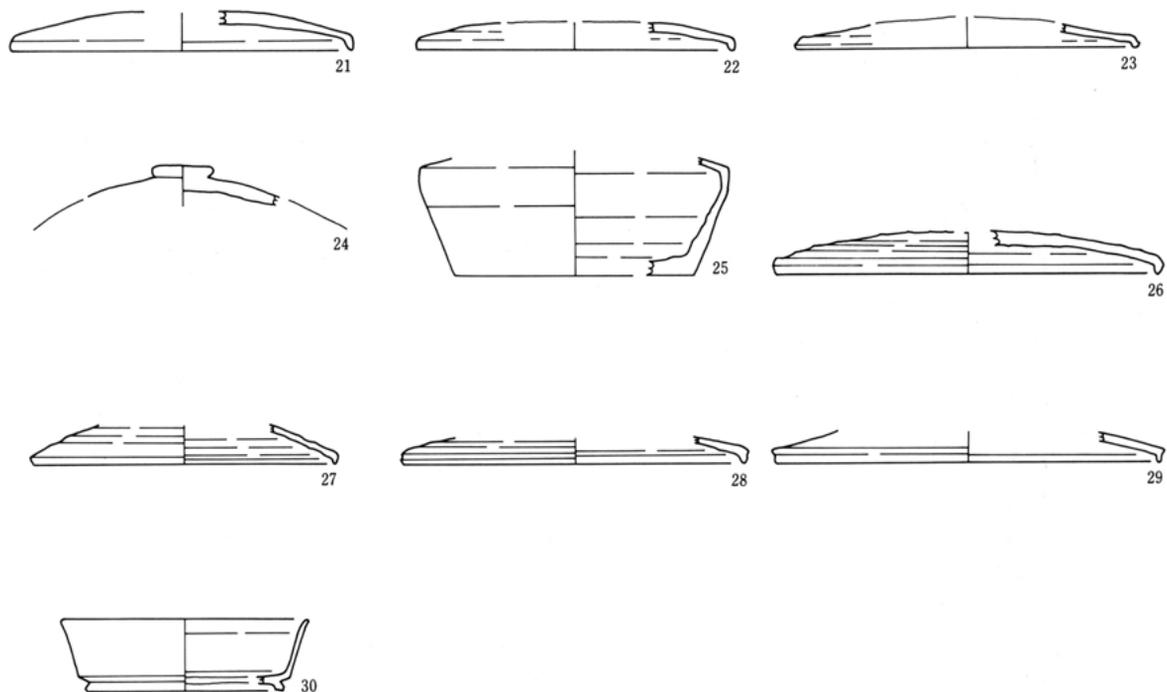
吉名6号窯(1~10)



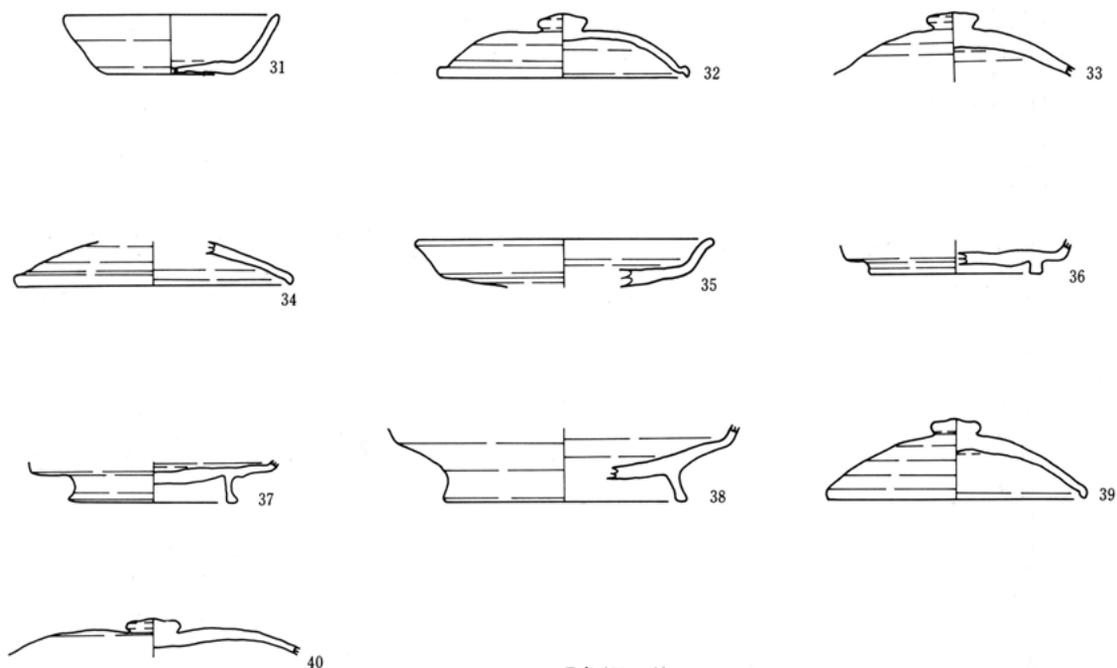
山田窯(11~20)



図131 遠江地域の窯出土遺物 (S=1/4)

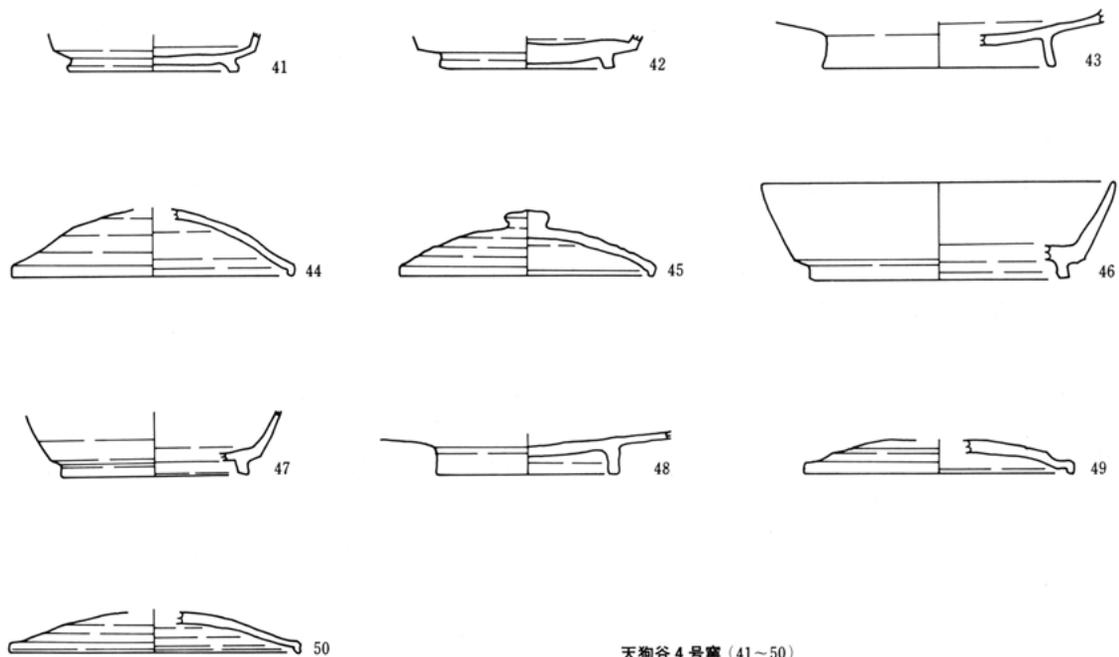


御望南9号窯 (21~30)

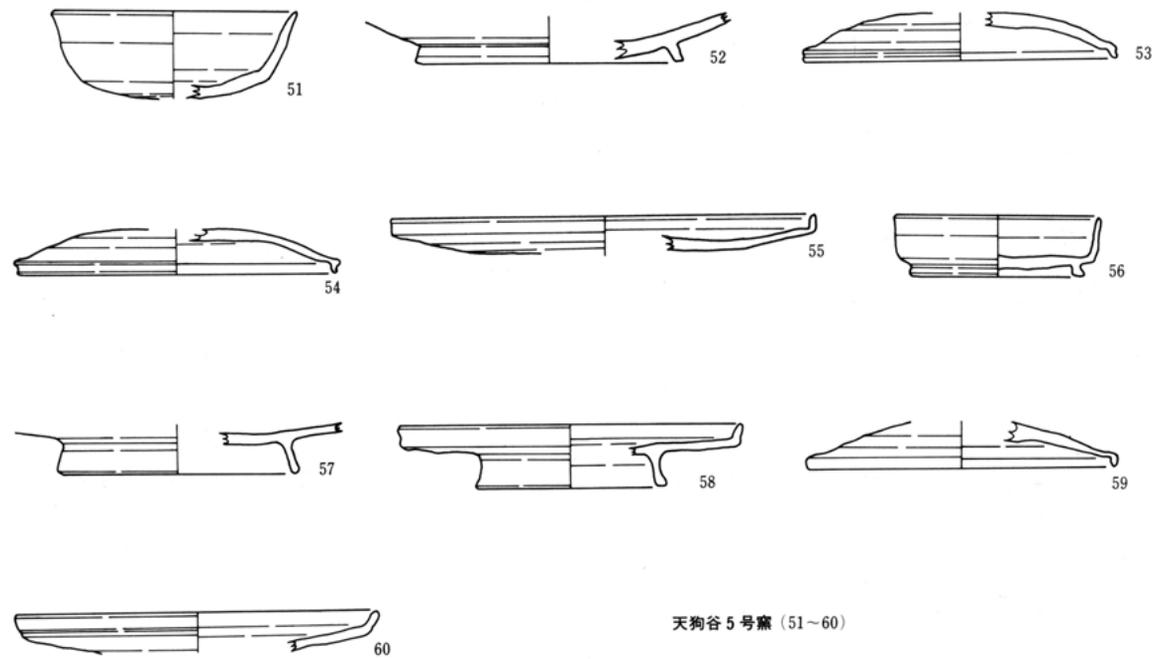


天狗谷3号窯 (31~40)





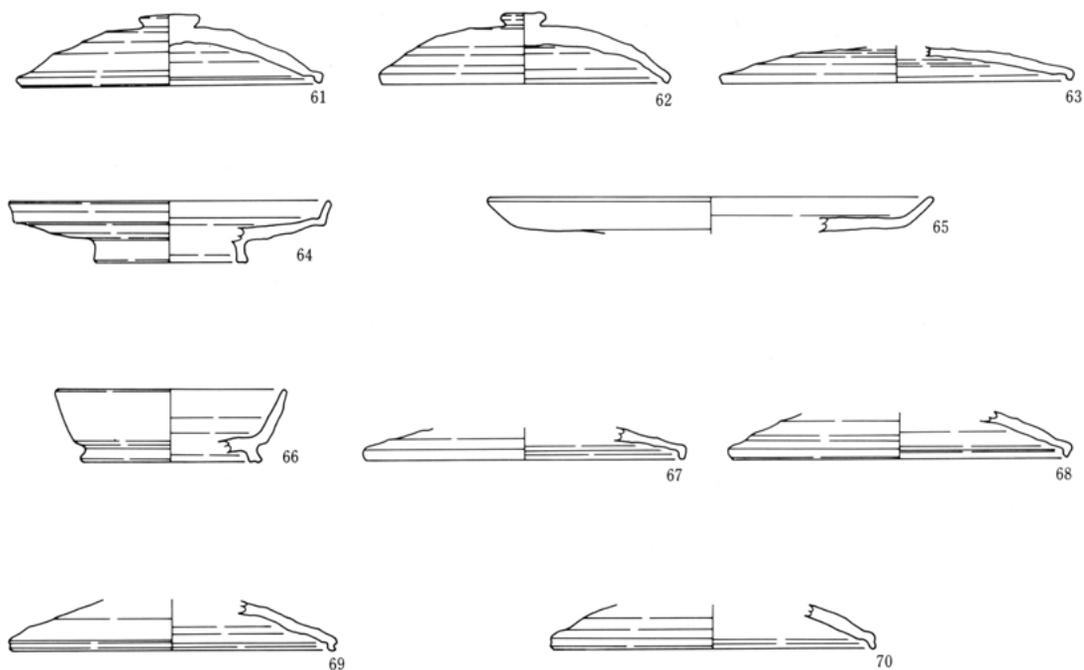
天狗谷4号窯 (41~50)



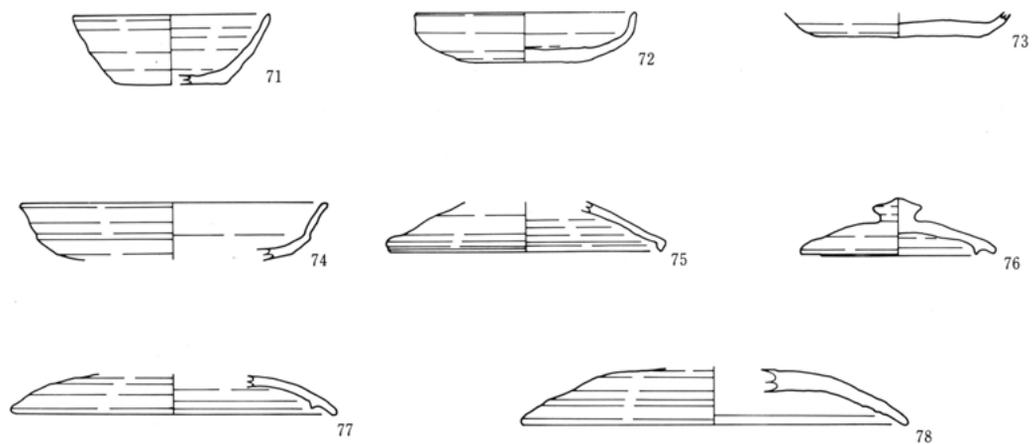
天狗谷5号窯 (51~60)



图133 美濃須衛窯出土遺物(2) (S=1/4)



天狗谷7号窯 (61~70)



天狗谷窯 (71~80)

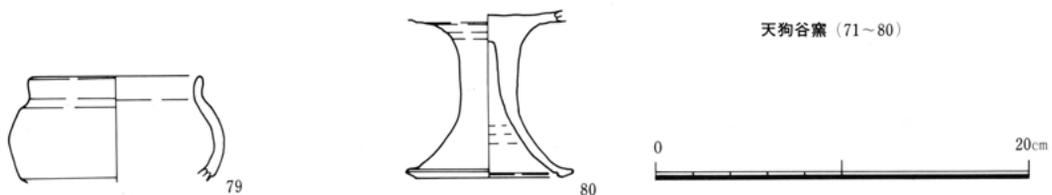


图134 美濃須衛窯出土遺物(3) (S=1/4)



81



82



83



84

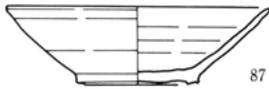


85

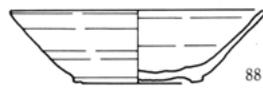
稲田山1号窯 (81~85)



86



87



88



89



90

稲田山2号窯 (86~90)



91



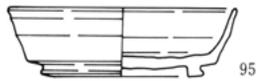
92



93



94



95

寒洞A窯 (91~95)



96



97



98



99



100

寒洞B窯 (96~100)



图135 美濃須衛窯出土遺物(4) (S=1/4)

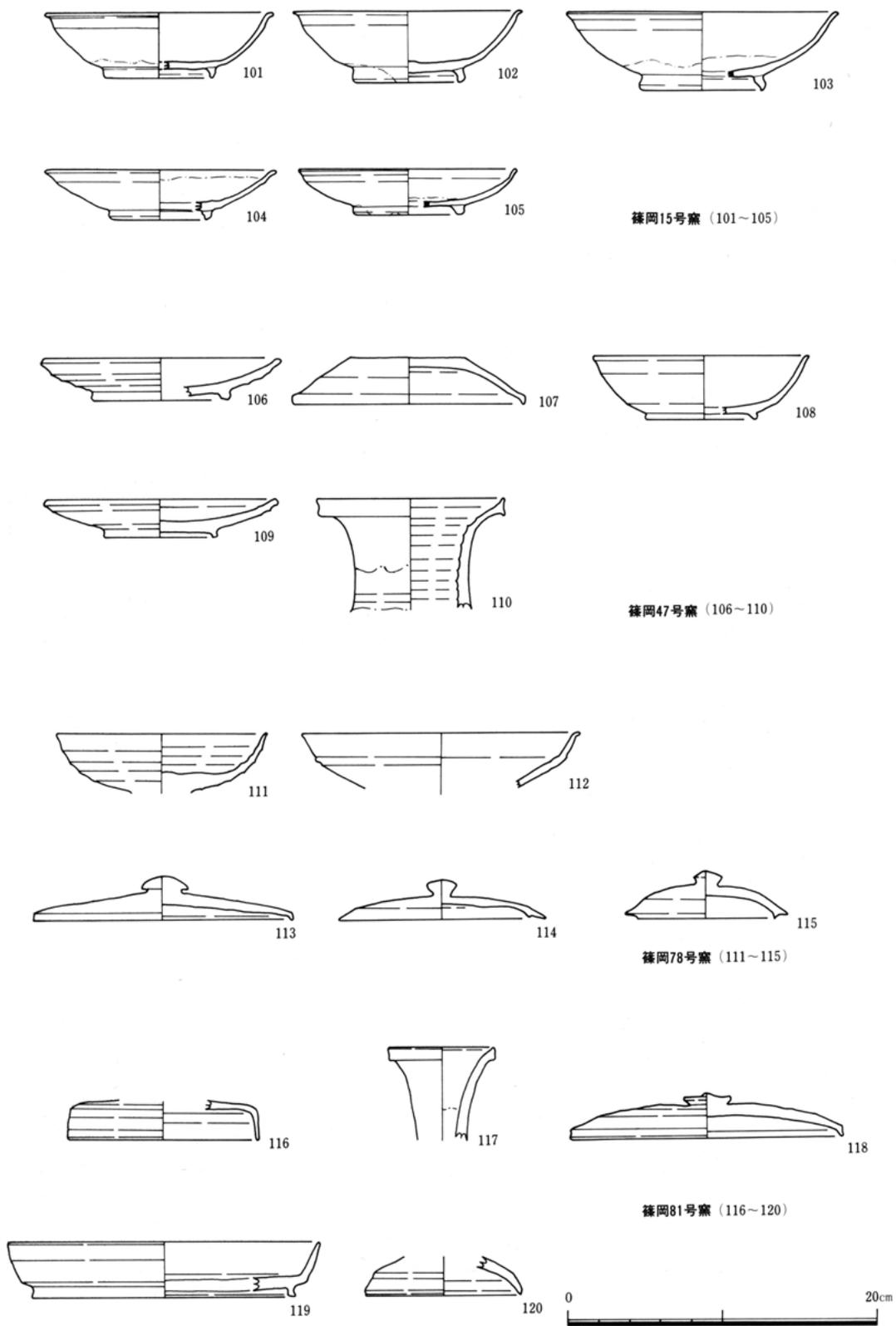
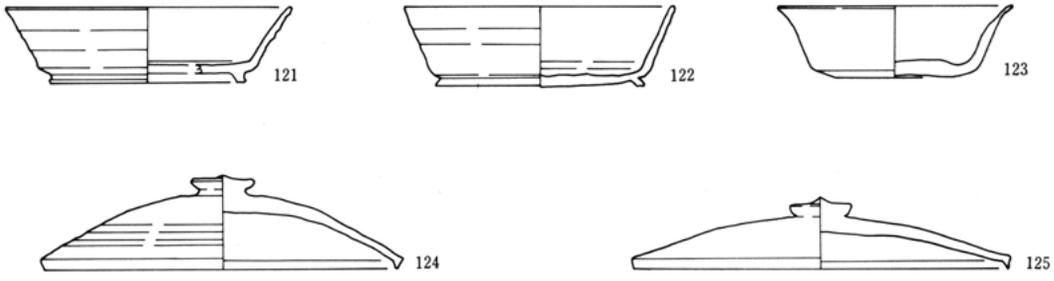
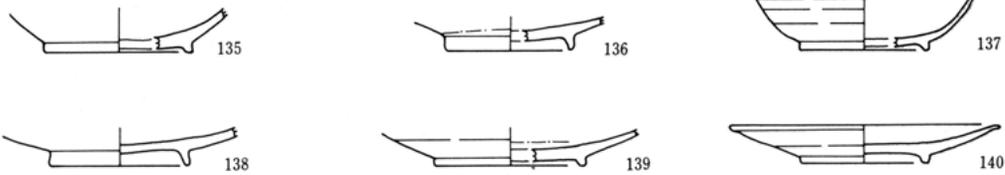
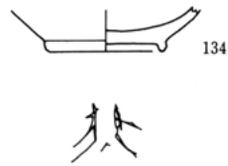
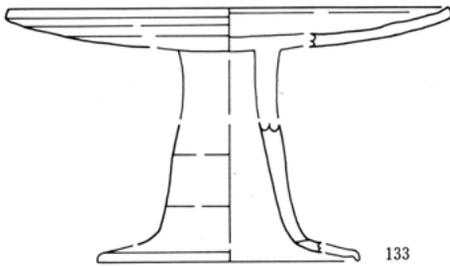


图136 尾北窯出土遺物(1) (S=1/4)



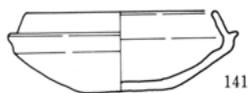
藤岡112号窯 (121~125)



堀之内花ノ木遺跡 (126~140)

図137 尾北窯出土遺物(2)、堀之内花ノ木遺跡出土遺物 (S=1/4)

SB15



141

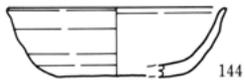


142

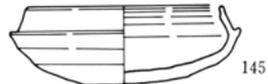
SB50



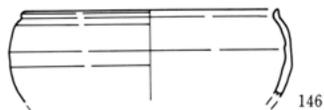
143



144



145



146



147

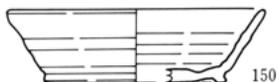


148

SB54



149

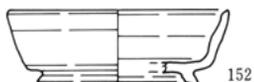


150



151

SB20



152



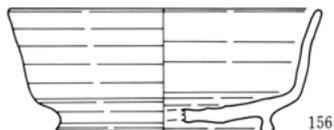
153



154



155



156

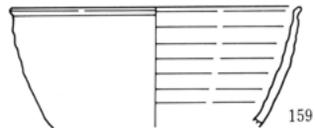
SB23



157



158



159

SB61



160



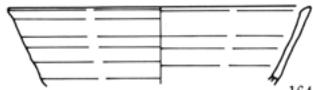
161



162



163



164



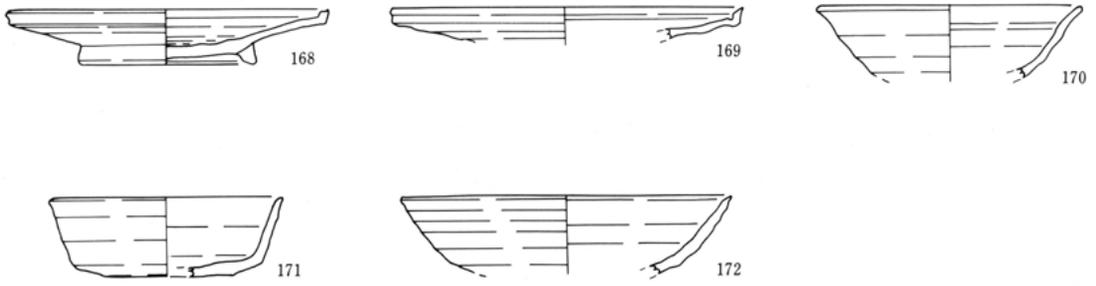
清洲城下町遺跡 (141~164)

図138 清洲城下町遺跡出土遺物 (S=1/4)

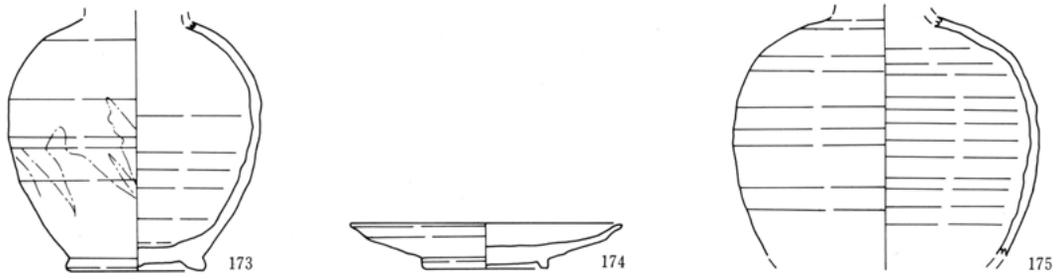
SK206



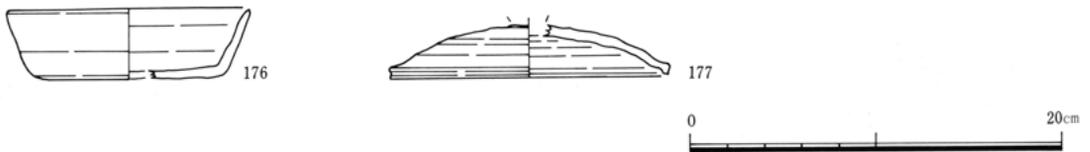
SB206



SB220



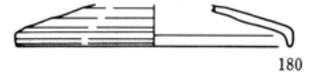
SB227



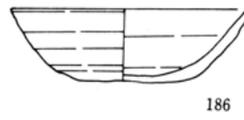
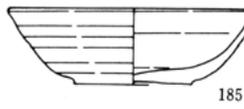
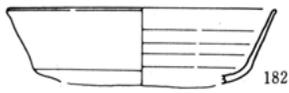
名古屋城三の丸遺跡 (165~177)

図139 名古屋城三の丸遺跡出土遺物 (S=1/4)

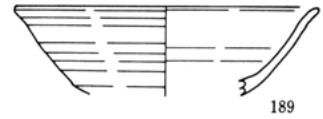
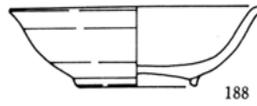
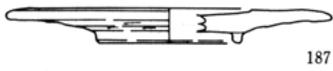
93A SB01



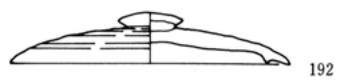
93A SB06



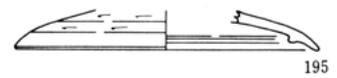
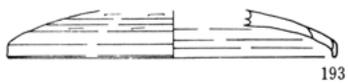
93A SB07



93A SB08



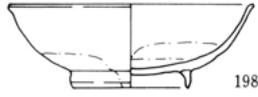
93A SB09



94F SB01



197



198



199



200



201

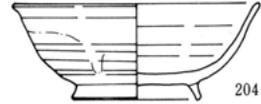
94F SB02



202



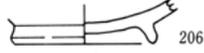
203



204



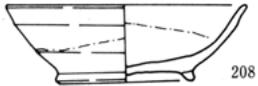
205



206



207



208



209



210



211



212



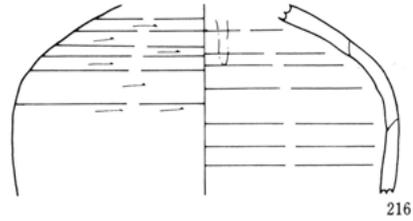
213



214



215



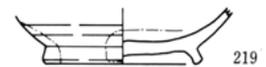
216



217



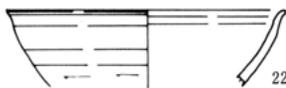
218



219



220



221

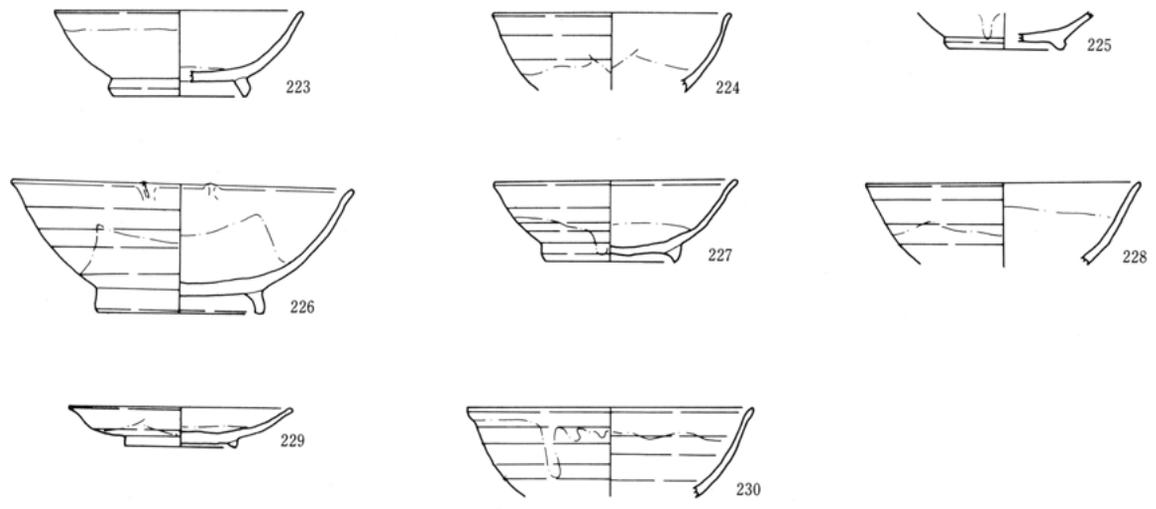


222



图141 大毛沖遺跡出土遺物(2) (S=1/4)

94F SB03



94I SB01

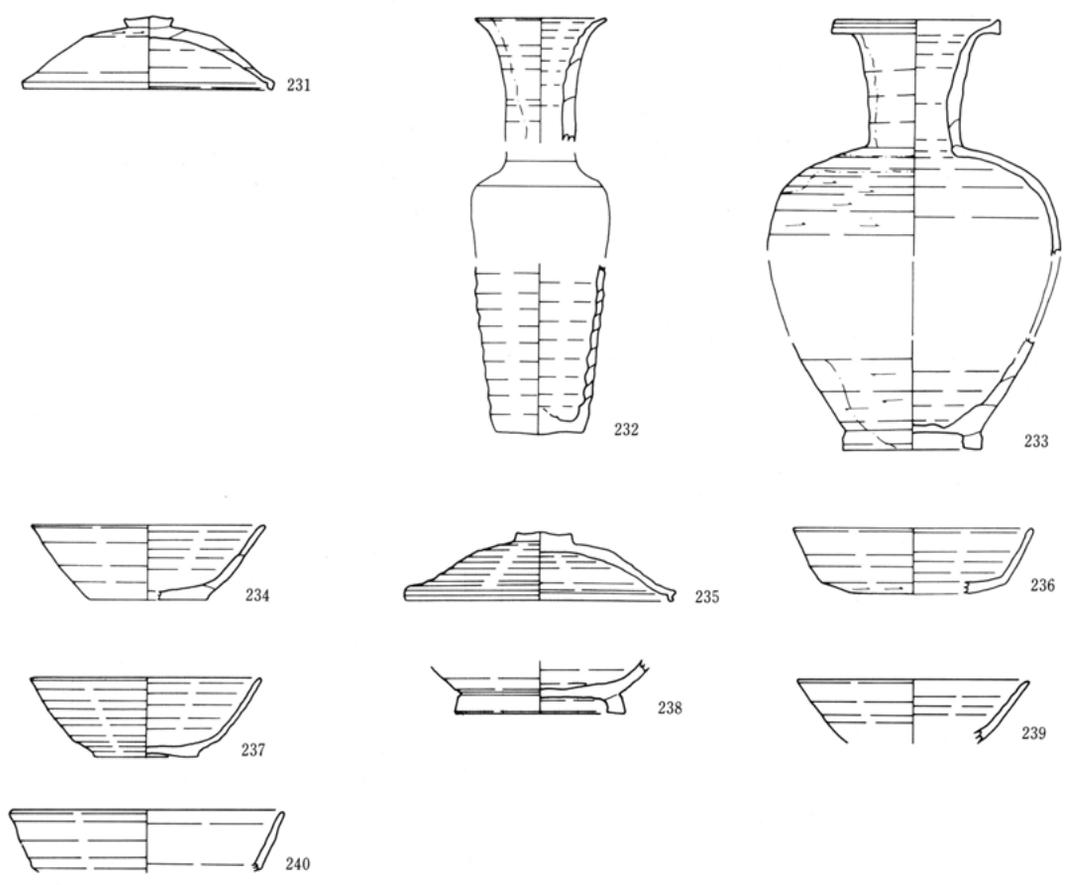
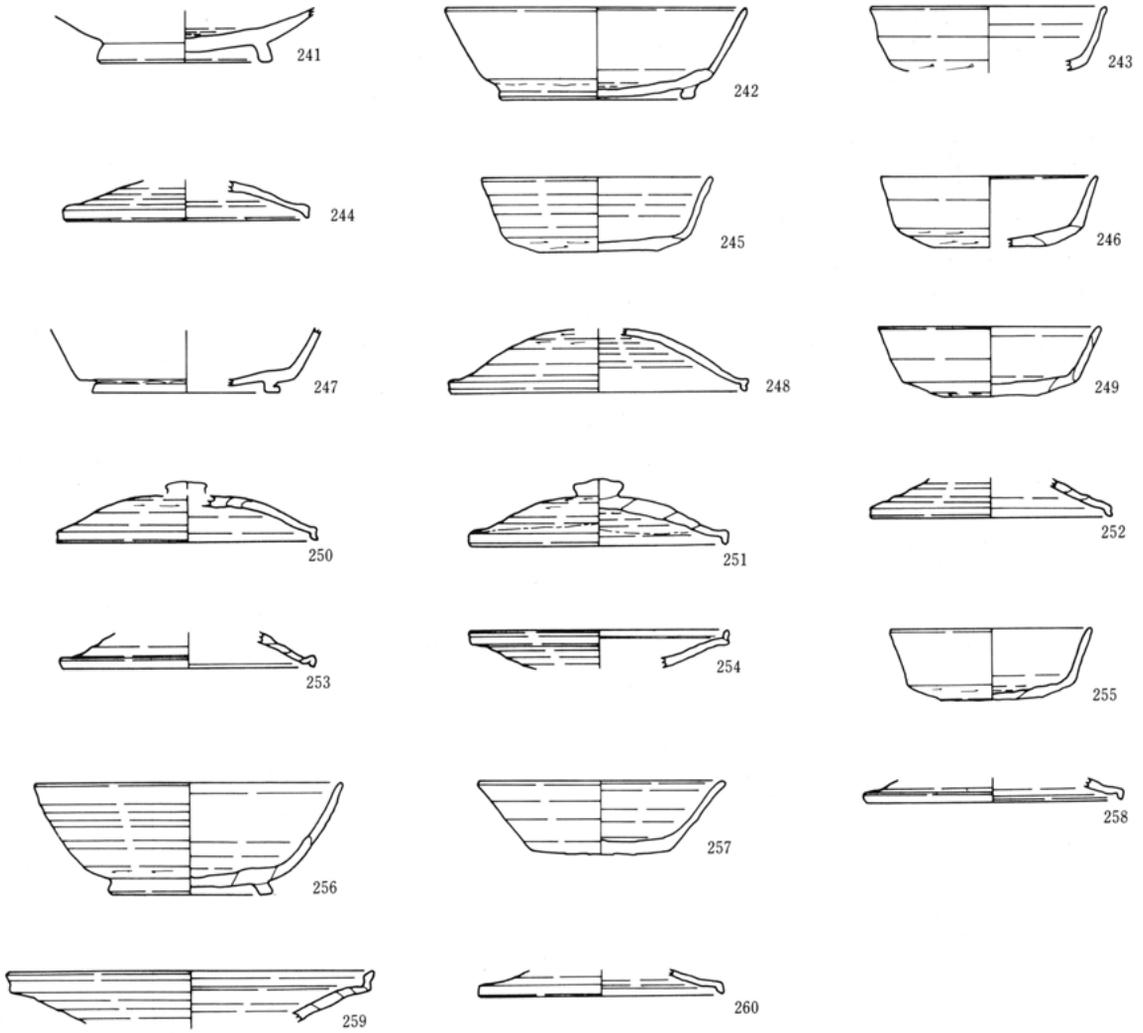


图142 大毛冲遗迹出土遺物(3) (S=1/4)

941 SB02

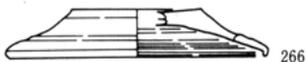
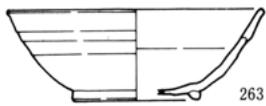


941 SB03

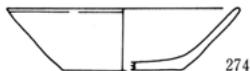
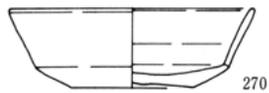


图143 大毛冲遺跡出土遺物(4) (S=1/4)

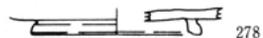
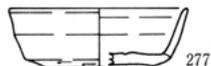
94 | SB04



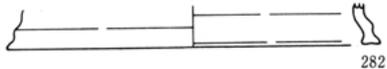
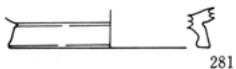
94 | SB06



94 | SB07



94 | SB08



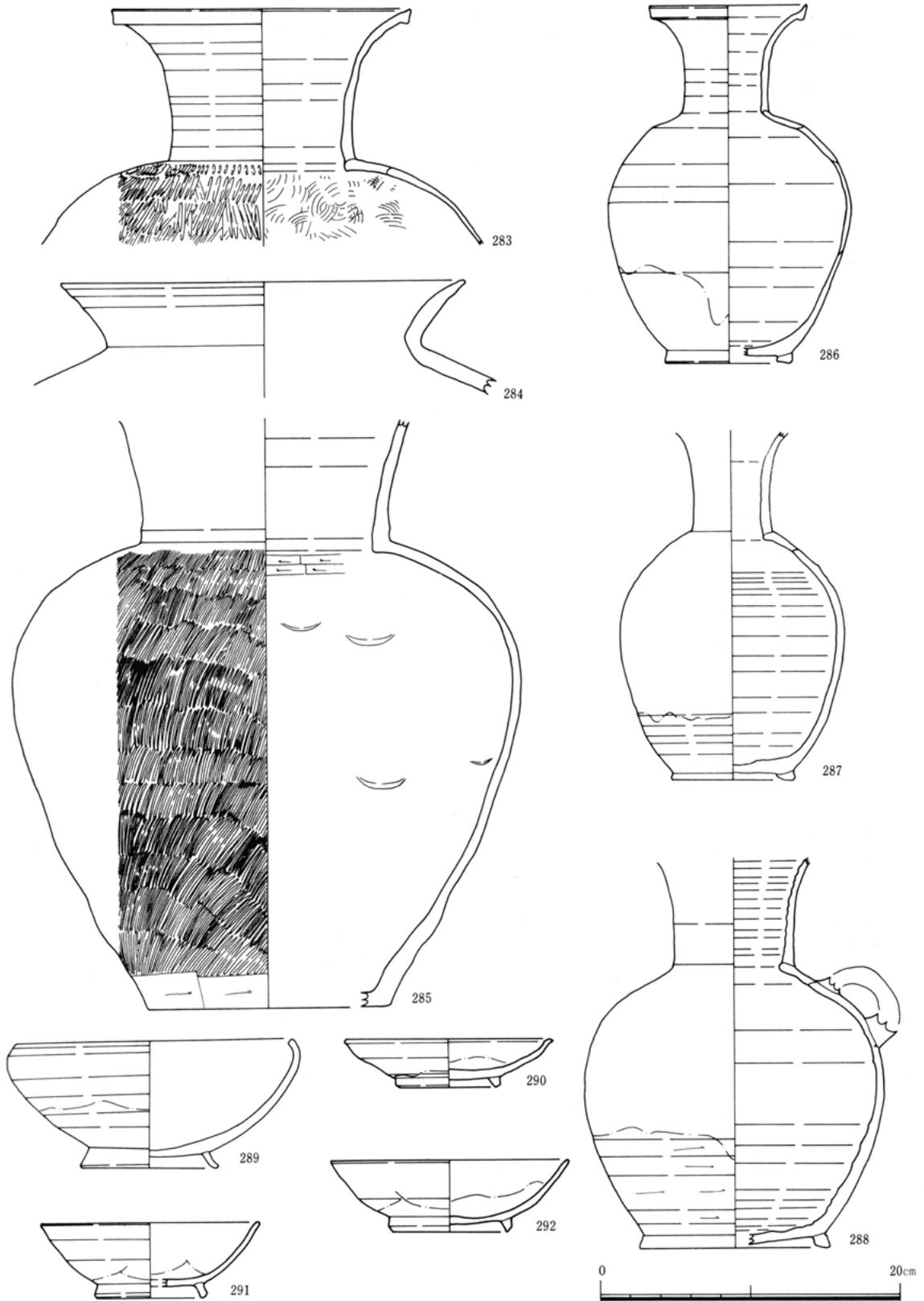


图145 大毛冲遗迹出土遺物(6) (S=1/4)

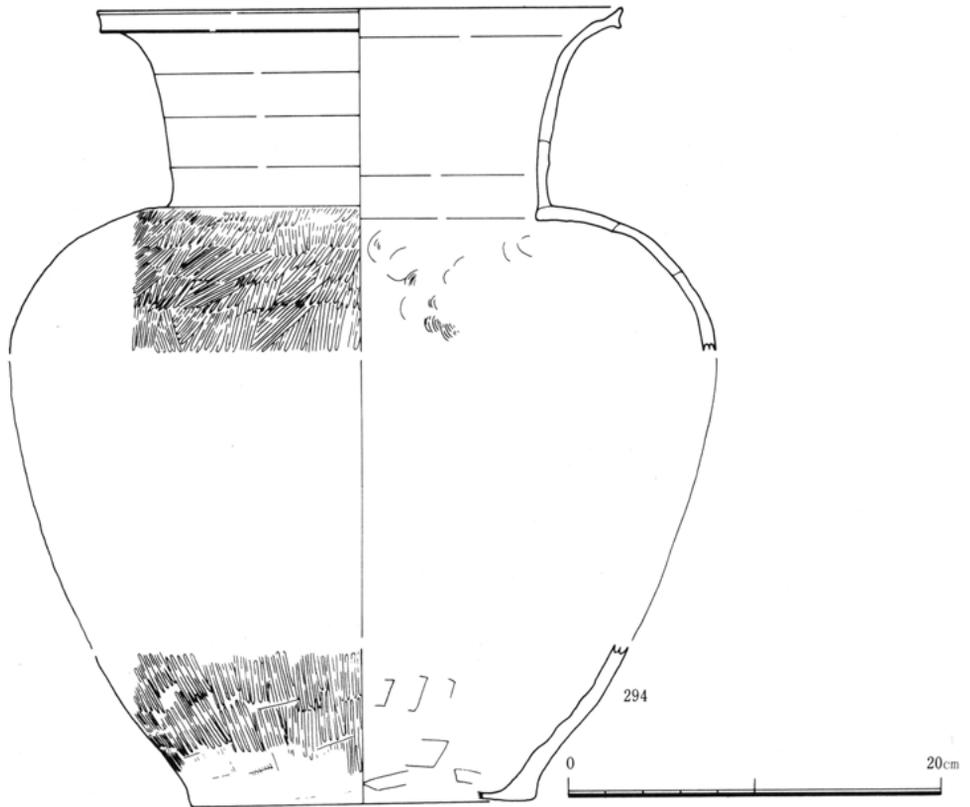
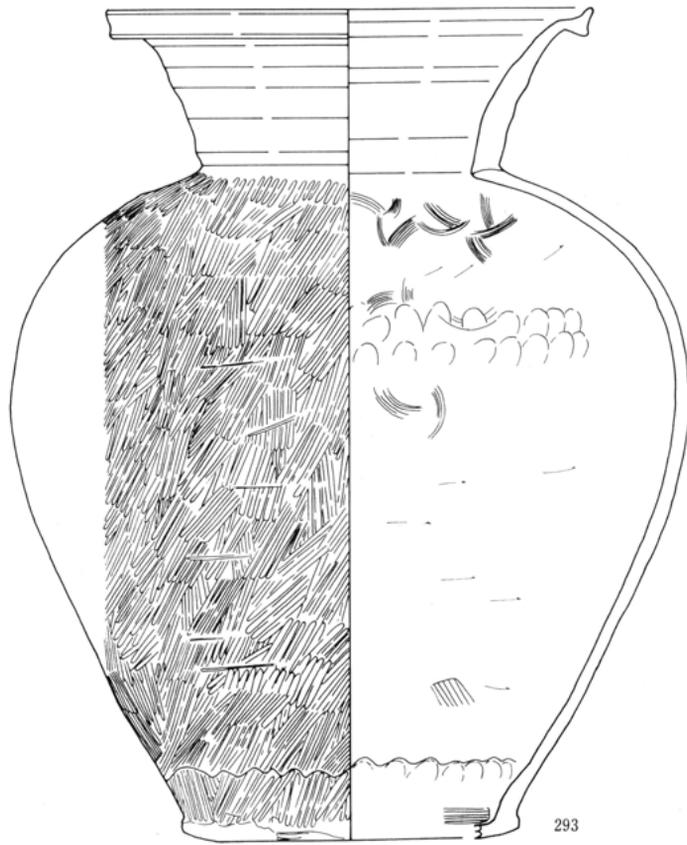


图146 大毛冲遗迹出土遺物7) (S=1/4)

## 5. 6. 2 重鉍物分析

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

矢作健一

### はじめに

一般に、土師器のような素焼きの土器は、奈良時代や平安時代においても自給自足的な生産・消費体制にあったと考えられることが多い。しかし、形態や大きさ、器面にみられる調整、胎土の外見的特徴などの観察から各地の土器を分類整理すると、これらの土器もこれまでに考えられているほど局所的なものであったわけではなく、ある程度広域的な流通とその時期的な変化が推定されている。愛知県下の遺跡から出土した奈良・平安時代の土師器については、甕を中心とした分類がなされ、その分類に特有の地域性や時代性が整理されつつある。そして、平安時代末期に出現した「清郷型鍋」や中世の「伊勢型鍋」というようなある体制下で製品として作られ流通したとされている土器との関係も検討されている。土器を材質の側面から解析する胎土分析は、以上のような問題に対して、非常に重要な検証材料を提供し得るものと考えられる。

広域的な流通と時期変遷

検証材料

愛知県埋蔵文化財センターより依頼された当社の胎土分析資料の中では、奈良・平安時代の土師器の分析例はそれほど多くないが、それでも弥生土器に認められたものと同様な尾張地域と西三河地域との胎土の違いを認めることができた。さらに、清郷型鍋や伊勢型鍋の分析例もあり、特に伊勢型鍋の胎土については時期的な変遷も指摘した（例えば矢作, 1994）。本分析では、これらの試料を活用することにより、大毛沖遺跡から出土した土師器甕の胎土について考え、上述の問題にとって意義のある試料を作成する。

清郷型鍋  
伊勢型鍋

### 1. 試料

試料は、全て土師器の甕であるが、出土遺跡と点数は次の通りである。一宮市に所在する大毛沖遺跡の試料17点（試料番号1～17）、隣接する大毛池田遺跡の試料14点（試料番号18～31）、海部郡甚目寺町に所在する大淵遺跡の試料8点（試料番号32～39）、名古屋市中区に所在する名古屋城三の丸遺跡10点（試料番号40～49）、稲沢市に所在する儀長寺通遺跡の試料12点（試料番号50～61）、同市に所在する堀之内花ノ木遺跡の試料1点（試料番号62）の合計62点である。各試料の分類や器種その他の特記事項は、胎土の重鉍物組成を示した図1、2に並記する。

### 2. 分析の方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉍物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm～1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉍を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「そ

重鉍物組成

の他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示すグラフでは、同定粒数が100個未満の資料についてはグラフにせず、比較的多いと判断される鉱物をグラフのハッチングにて呈示するにとどめる。

### 3. 分析結果

分析結果を表1に示す。分析した試料のうち、同定粒数100個未満であったのは、試料番号7、12、17、35、43、47、62の7点である。これらについては、上述のように組成図では多い鉱物を示し、以下に述べる分類は行わない。

#### (1) 胎土の分類

分類の基準としては、優先する鉱物の種類とその組み合わせを指標とするが、これまでの分析例から得られている特徴的な組成（「両輝石型」や「西三河型」など）を分類の柱としている。本分析結果は以下のような分類ができる。

##### a) I型

**両輝石型** 斜方輝石が優占し、少量の単斜輝石と角閃石を伴ういわゆる「両輝石型」のタイプであり、これまでの分析例から「尾張地域産」の指標とされている胎土である。単斜輝石と角閃石の量比および他に特徴的に伴う鉱物により以下のように細分される。

I 1型：角閃石が微量

I 2型：単斜輝石も角閃石も少量含まれる

I 3型：単斜輝石が微量で角閃石は少量

I 4型：単斜輝石は微量であり、角閃石は斜方輝石よりもやや多い

I 5型：少量のザクロ石と緑レン石を伴う

I'型：「その他」が非常に多い組成ではあるが、それを斜方輝石と単斜輝石、角閃石が含まれる。

##### b) II型

**不透明鉱物** 組成の主体は斜方輝石と角閃石であり、これに少量の単斜輝石、ジルコン、ザクロ石、不透明鉱物などを伴う。また、不透明鉱物の量比が比較的高い傾向にある。特に不透明鉱物が優占する組成をII型とした。弥生土器の分析からは、勝川遺跡に代表される濃尾平野東部の庄内川沿いの土器に多い傾向がある。

##### c) III型

**角閃石** 角閃石、ジルコン、ザクロ石の3鉱物を主体とする、いわゆる「西三河型」の胎土である。  
**ジルコン** 3鉱物のうち角閃石が優占するものをIII 1型、ジルコンが優占するものをIII 2型、ザクロ石が優占するものをIII 3型とし、さらに、これら3鉱物に黒雲母が伴うものをIII 4型とする。  
**ザクロ石**  
**西三河型**

##### d) IV型

角閃石を主体とし、少量のジルコンを伴う組成であるが、ザクロ石がほとんど含まれないので、「西三河型」であるIII型とは区別する。少量の緑レンガ石を伴うものはIV 2型とする。

##### e) V型

角閃石またはザクロ石を主体とする組成である。2鉱物のうち角閃石が多いものをV1型とし、ザクロ石の方が多いいものをV2型とする。

#### f) V型

全体的には「その他」が多いが、それを除くとジルコンが目立つ組成。少量の角閃石を伴う場合にはV2型とする。

以上I～Vまでの胎土を設定し、各資料の胎土分析を図148に示す。また、甕の分類順に並べ替えた図を図149に示す。

#### (2) 分類別にみた胎土の傾向

A類は2点のみであるが、両資料ともII型である。B類の古代I期以前と古代I期では、圧倒的にN型特にN2型が多い。一方、B類の古代II期では、N2型にI2型、IとIIの中間タイプ、V1型などが混在する。C類では、I2型がやや多い傾向にあるが、N型やV型も混在する。D類は、I型、II型、III型が混在するが、古代IIIc期の3点は全てI1型である。E類では、組成の求められた2点は両方ともN型である。

B類とN型

E類とN型

#### 4. 考察

現在、愛知県の奈良・平安時代の土師器甕は、A～Eまでの5種類に分類整理されることで、系統的な生産と流通、消費およびその時期的変遷があったと考えられている。この5種類という数に比べれば、今回分類された胎土の6種類という数は決して多いとはいえず、さらに上述のようにA～Eの分類との相関性も認められることから、今回の胎土分析の結果は、系統的な生産、流通、消費のあったことを補強する結果になったとみることができる。

6種類の胎

土

当社におけるこれまでの奈良・平安時代の土師器甕の分析結果も全点がI～V型の分類にはほぼ当てはまる。また、これらの資料に、本分析資料と同様の年代と分類がされた資料を得ることができた。これらの資料も含めて、年代、分類、地域性と胎土との関係を検討してみたい。尾張地域北部に相当する大毛沖遺跡、大毛池田遺跡、儀長寺通遺跡の資料のうち、後2者でみれば、古代I期以前からII期にかけてはN型の胎土が多く、これだけみればN型は尾張地域北部の地域性を示すようにもみえる。しかし、大毛沖遺跡ではI型、II型、V型が混在し、必ずしもN型の地域性を特定し得るほどの結果とはいえない。このN型の胎土は、大毛沖遺跡の試料では古代N期のE類に認められ、さらに、中世に南伊勢地域を中心に出土する「伊勢型鍋」の胎土に非常に多く認められる。分析例の中には伊勢地域で作られたことがほぼ確実な伊勢地域の遺跡から出土した伊勢型鍋があり、これらが多くがN型である。したがって、N型の地域性として伊勢地域を考えることができる。N型が伊勢地域であるとすれば、尾張地域北部では、古代I期以前から伊勢地域からの土器流入があったことになる。今後の類例の蓄積と両地域の発掘調査成果による土器研究の検討が必要であろう。ところで、本分析の尾張地域北部の資料では、古代III期になると大毛沖遺跡ではII型、大毛池田遺跡ではI型となり、N型の資料が見られなくなる。これが、土器の流入状況の変化を示唆するものであれば、土器研究で考えられている古代II期とIII

IV型と伊勢

地域

期の間にある画期に対応するものかもしれない。

一方、尾張地域南部に位置する大洲遺跡では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの各型が混在し、分類と胎土との間に関連が認められない。また、大洲遺跡から出土した三河型の甕は、本分析では胎土の分類をすることができなかったが、これまでの分析例では、Ⅰ型やⅣ型またはⅣ型とⅤ型の中間タイプを示すなど様々である。この三河型という分類の甕は、これまでの分析例では西三河地域の中道遺跡や志貴野遺跡さらに東三河地域になる石堂野遺跡などの試料があるが、多くはⅤ型を示し、Ⅲ型が少数混在するという比較的明瞭な胎土の傾向がある。これに比べれば、大洲遺跡出土の三河型の甕の胎土は特異な傾向にあるといえる。おそらく、大洲遺跡の三河型の甕は、三河地域から運ばれてきたものは少なかったと考えられる。上記のようにⅠ型やⅡ型の胎土が認められることから、尾張地域内で作られたものも多かったであろう。以上のような胎土の状況から、大洲遺跡では、主に尾張地域内の各地で作られた甕が集まっていた様子が窺える。ただし、同じ尾張地域南部に位置する清洲城下町遺跡の試料の胎土の状況を見ると、大洲遺跡の状況は、尾張地域南部の地域的な特徴ではなく、大洲遺跡固有の状況であると考えられる。すなわち、清洲城下町遺跡の古代Ⅳ期D類の分析例においてはⅢ型とⅣ型あるいはその中間タイプに限定され、ほとんどが西三河地域や伊勢地域からの搬入であった可能性が指摘されるのである。

三河型とⅤ型

清洲城下町遺跡のD類

尾張地域南部でも台地上に位置する名古屋城三の丸遺跡では、胎土にⅠ、Ⅱ、Ⅲの各型が混在し、尾張地域各地と西三河地域からの搬入品から構成されていたとみることができる。ただし、古代Ⅳ期のE類の試料だけは、上述の伊勢型鍋の胎土に多く認められたⅣ型の胎土であり、大毛沖遺跡のE類の試料がⅣ型であることも考慮すると、E類と伊勢型鍋との関連性が指摘できる。

E類と伊勢型鍋

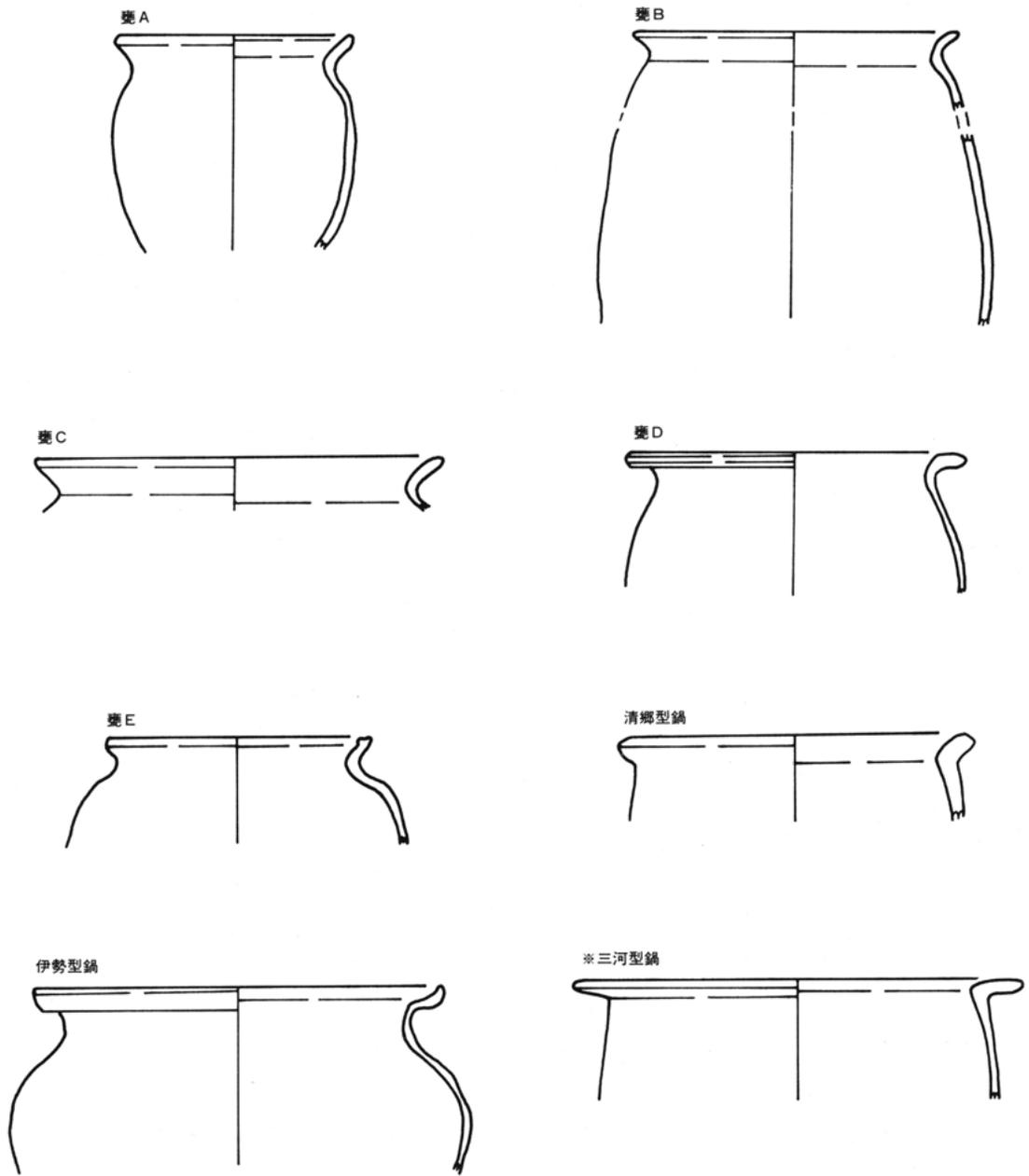
ところで、当社の分析例の中には、冒頭に述べた「清郷型鍋」の分析例もある。清郷型鍋の分析例では、十分な試料数ともえないが、一宮市清郷遺跡や朝日西遺跡、宝飯郡一宮町の西浦遺跡、そして静岡県湖西市や浜松市の遺跡から出土した試料は全てⅢ型である。Ⅲ型の胎土は西三河地域を示す地域性を有することから、西三河地域を中心とする清郷型鍋の出土状況と一致する。おそらく、そのほとんどは西三河地域内で生産されたものが各地へ流通したのではないだろうか。

清郷型鍋とⅢ型

以上、現時点では、各遺跡における試料数がまだ少ないことと、胎土から推定される具体的な生産地がわからないことから、各遺跡ごとの流通、消費の有り様を詳細に解析することはできない。今後、より多くの分析例を蓄積することはもちろんであるが、自然堆積物の分析調査ならびに試料が出土した遺跡の位置づけ（地理的、歴史的、社会的、産業史的など）に関する情報を整備することにより、胎土分析の結果がより効果的に生かされると考えられる。

#### 引用文献

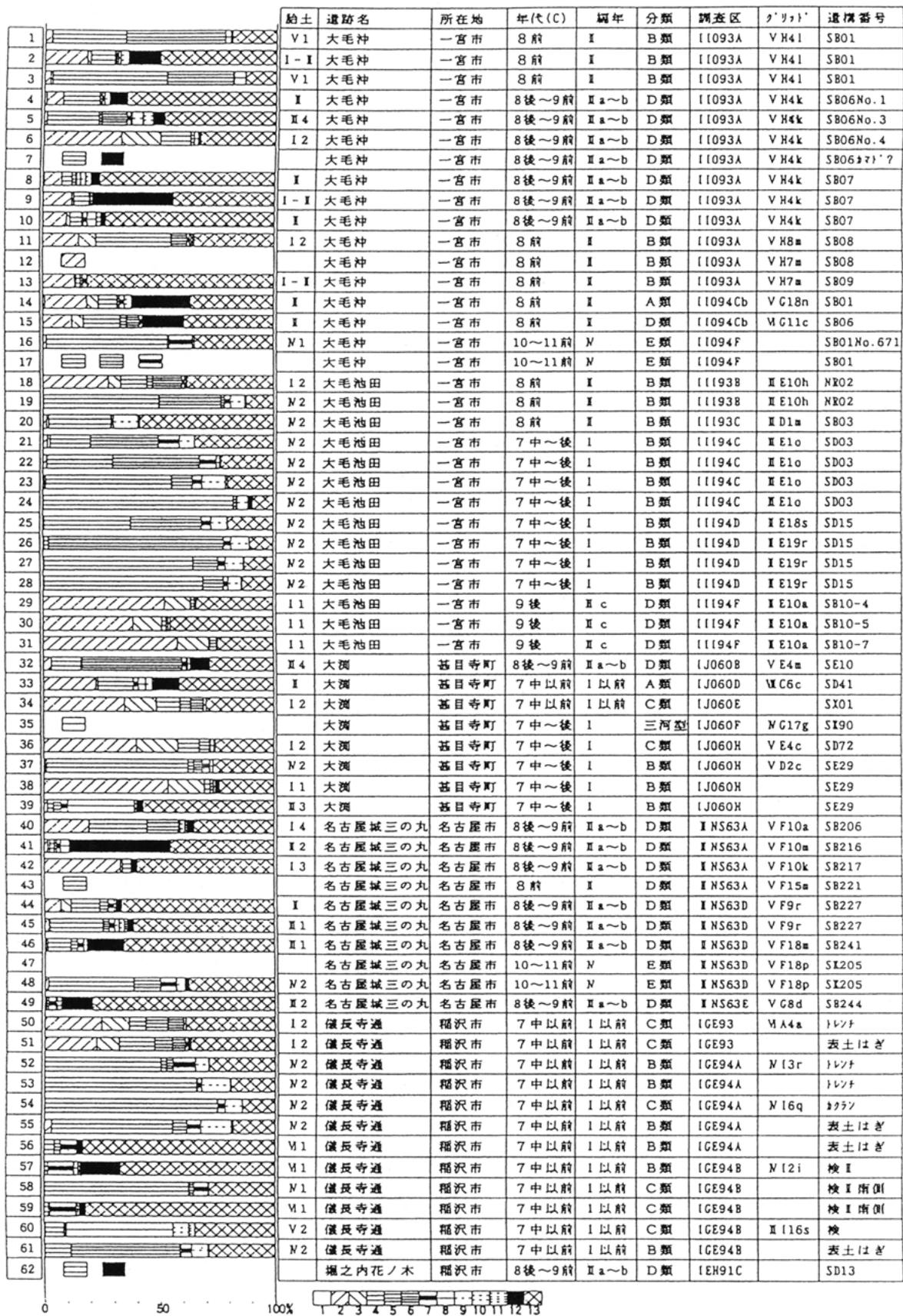
矢作健二(1994)「伊勢型鍋胎土重鉍物分析」『松河戸遺跡』, P. 60-66



古代Ⅰ期 7世紀後半  
 古代Ⅱ期 8世紀前半  
 古代Ⅲ期 8世紀後半～9世紀  
 古代Ⅳ期 10世紀

※は大濶遺跡資料  
 その他は大毛沖遺跡資料

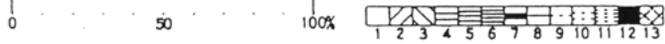
図147 土師器甕分類図



1.カンラン石 2.斜方輝石 3.単斜輝石 4.角閃石 5.酸化角閃石 6.黒雲母 7.ジルコン  
8.ザクロ石 9.緑閃石 10.電気石 11.紅柱石 12.不透明鉱物 13.その他

図148 試料の胎土重鉱物組成

胎土	遺跡名	所在地	年代(C)	層年	分類	調査区	グ'ラット'	遺構番号	
33	I	大洞	菖目寺町	7中以前	I以前	A類	IJ060D	V C6c	SD41
14	I	大毛沖	一宮市	8前	I	A類	I1094Cb	V G18n	SB01
52	N2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94A	N I3r	トレン
53	N2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94A		トレン
55	N2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94A		表土はぎ
56	V1	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94A		表土はぎ
57	V1	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94B	N I2i	検 I
61	N2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	B類	IGE94B		表土はぎ
21	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194C	II E1o	SD03
22	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194C	II E1o	SD03
23	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194C	II E1o	SD03
24	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194C	II E1o	SD03
25	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194D	II E18s	SD15
26	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194D	II E19r	SD15
27	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194D	II E19r	SD15
28	N2	大毛池田	一宮市	7中〜後	I	B類	I1194D	II E19r	SD15
37	N2	大洞	菖目寺町	7中〜後	I	B類	IJ060H	V D2c	SE29
38	I1	大洞	菖目寺町	7中〜後	I	B類	IJ060H		SE29
39	II3	大洞	菖目寺町	7中〜後	I	B類	IJ060H		SE29
1	V1	大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H4l	SB01
2	I-I	大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H4l	SB01
3	V1	大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H4l	SB01
11	I2	大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H8m	SB08
12		大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H7m	SB08
13	I-I	大毛沖	一宮市	8前	I	B類	I1093A	V H7m	SB09
18	I2	大毛池田	一宮市	8前	I	B類	I1193B	II E10h	NR02
19	N2	大毛池田	一宮市	8前	I	B類	I1193B	II E10h	NR02
20	N2	大毛池田	一宮市	8前	I	B類	I1193C	II D1m	SB03
50	I2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE93	V A4a	トレン
51	I2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE93		表土はぎ
54	N2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE94A	N I6q	トレン
58	N1	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE94B		検 I 南側
59	V1	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE94B		検 I 南側
60	V2	儀長寺通	稲沢市	7中以前	I以前	C類	IGE94B	II I16s	検
34	I2	大洞	菖目寺町	7中以前	I以前	C類	IJ060E		SX01
36	I2	大洞	菖目寺町	7中〜後	I	C類	IJ060H	V E4c	SD72
15	I	大毛沖	一宮市	8前	I	D類	I1094Cb	V G11c	SB06
43		名古屋城三の丸	名古屋市	8前	I	D類	INS63A	V F15m	SB221
4	I	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB06No.1
5	II4	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB06No.3
6	I2	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB06No.4
7		大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB06No.7?
8	I	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB07
9	I-I	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB07
10	I	大毛沖	一宮市	8後〜9前	II a~b	D類	I1093A	V H4k	SB07
32	II4	大洞	菖目寺町	8後〜9前	II a~b	D類	IJ060B	V E4m	SE10
62		堀之内花ノ木	稲沢市	8後〜9前	II a~b	D類	IEH91C		SD13
40	I4	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63A	V F10a	SB206
41	I2	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63A	V F10m	SB216
42	I3	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63A	V F10k	SB217
44	I	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63D	V F9r	SB227
45	II1	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63D	V F9r	SB227
46	II1	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63D	V F18m	SB241
49	II2	名古屋城三の丸	名古屋市	8後〜9前	II a~b	D類	INS63E	V G8d	SB244
29	I1	大毛池田	一宮市	9後	II c	D類	I1194F	II E10a	SB10-4
30	I1	大毛池田	一宮市	9後	II c	D類	I1194F	II E10a	SB10-5
31	I1	大毛池田	一宮市	9後	II c	D類	I1194F	II E10a	SB10-7
16	N1	大毛沖	一宮市	10〜11前	N	E類	I1094F		SB01No.671
17		大毛沖	一宮市	10〜11前	N	E類	I1094F		SB01
47		名古屋城三の丸	名古屋市	10〜11前	N	E類	INS63D	V F18p	SI205
48	N2	名古屋城三の丸	名古屋市	10〜11前	N	E類	INS63D	V F18p	SI205
35		大洞	菖目寺町	7中〜後	I	三河型	IJ060F	N G17g	SI90



- 1.カンラン石 2.斜方輝石 3.単斜輝石 4.角閃石 5.酸化角閃石 6.黒雲母 7.ジルコン  
 8.ザクロ石 9.緑レン石 10.電気石 11.紅柱石 12.不透明鉱物 13.その他

図149 試料の胎土重鉱物組成(分類別)

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
1	0	7	1	79	107	0	0	5	0	1	0	2	48	250
2	0	22	2	12	1	1	0	1	0	4	0	17	60	120
3	0	6	3	123	71	2	0	11	0	0	0	1	33	250
4	1	7	0	16	1	0	1	0	2	0	0	8	64	100
5	0	2	0	33	2	16	2	1	7	6	0	8	71	148
6	1	83	42	32	4	0	0	0	4	0	0	4	80	250
7	0	8	1	21	3	0	1	0	0	2	0	15	38	89
8	1	10	0	6	2	0	1	2	3	3	0	6	103	137
9	1	28	2	15	0	0	1	0	0	2	0	81	100	230
10	1	22	3	11	2	0	4	8	1	3	1	5	161	222
11	0	32	15	66	0	14	3	0	1	1	0	2	71	205
12	0	18	0	2	1	0	0	0	1	1	0	9	43	75
13	0	28	1	2	2	0	4	0	0	0	0	1	164	204
14	1	18	5	8	1	0	2	0	0	3	0	26	36	100
15	0	22	9	28	5	9	2	0	0	0	0	33	69	177
16	0	4	0	130	2	0	25	1	2	0	0	0	86	250
17	0	0	1	5	4	2	4	0	3	0	0	1	52	72
18	0	71	13	28	6	32	3	0	0	1	1	1	94	250
19	0	1	0	124	67	4	7	0	15	1	0	2	29	250
20	0	4	2	67	1	0	2	0	26	0	0	3	145	250
21	0	4	3	36	61	0	19	0	14	0	0	0	72	209
22	0	4	1	70	94	0	19	0	3	0	0	2	57	250
23	0	2	1	136	22	0	11	0	26	2	0	0	50	250
24	0	1	0	205	3	0	2	0	11	0	0	6	22	250
25	0	2	0	93	76	0	11	0	17	0	0	1	50	250
26	0	1	1	4	189	0	9	0	20	0	0	0	26	250
27	0	1	1	160	27	0	9	0	19	1	0	1	31	250
28	0	1	1	171	22	0	6	0	14	0	0	1	34	250
29	0	131	28	1	4	0	0	0	1	0	0	1	84	250
30	0	97	31	5	2	0	0	2	0	0	0	0	113	250
31	0	145	34	2	7	1	0	0	0	0	0	0	61	250
32	0	4	0	14	1	48	2	1	1	0	0	10	31	112
33	0	41	2	27	0	0	4	6	5	0	1	21	74	181
34	0	88	34	25	12	14	0	0	3	0	0	0	74	250
35	0	0	0	0	0	0	0	8	0	1	0	1	2	12
36	0	100	45	23	11	0	2	0	3	0	0	2	64	250
37	0	2	1	153	6	9	8	1	3	0	0	0	67	250
38	0	134	40	6	3	0	0	1	1	0	0	6	59	250
39	0	4	0	6	8	0	8	71	0	2	1	7	143	250
40	0	48	1	62	34	1	1	0	0	5	2	9	87	250
41	0	2	1	2	1	0	2	4	0	0	0	50	51	113
42	0	82	3	8	0	0	1	1	0	0	0	6	149	250
43	0	2	0	6	2	2	0	0	0	0	0	2	10	24
44	0	18	11	31	8	1	6	0	0	2	1	6	166	250
45	0	5	1	57	1	6	6	0	5	5	3	8	153	250
46	0	2	1	25	7	0	7	0	3	0	0	41	164	250
47	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
48	0	4	0	92	29	0	17	1	8	0	0	6	93	250
49	0	1	0	1	1	0	4	1	0	2	0	18	103	130
50	0	61	30	18	24	17	0	0	2	1	0	0	97	250
51	0	56	24	38	19	14	3	0	1	0	0	3	92	250
52	0	0	0	125	6	7	25	0	14	0	0	1	72	250
53	0	0	0	164	1	0	5	0	30	0	0	2	48	250
54	0	0	0	187	0	0	8	0	19	0	0	0	36	250
55	0	5	0	84	10	0	10	0	21	0	0	2	29	161
56	0	0	0	11	6	0	17	0	1	0	0	7	208	250
57	0	0	1	3	0	0	28	4	1	1	1	43	168	250
58	0	1	0	155	1	4	16	0	0	0	0	1	72	250
59	0	0	0	3	1	0	18	1	1	0	0	5	131	160
60	0	1	1	19	2	0	1	0	0	17	6	1	87	250
61	0	1	0	28	117	1	12	0	17	1	0	1	72	250
62	0	0	0	13	0	1	0	0	1	0	1	8	13	37

表32 試料の胎土重鉱物分析結果

## 6. まとめ～大毛沖遺跡の評価～

### (1)大毛沖遺跡と“カワ”

大毛沖遺跡は8～12世紀の流路の形成が大きく関与する集落遺跡。“カワ”の評価が大毛沖遺跡の評価に密接な関わりを持つ。

“カワ”との関わりは7世紀代から始まる。北西に隣接する大毛池田遺跡との間に流路が94Aの北部と94Hの中央を結ぶラインに登場する。その後、7世紀代の遺跡群を削離し、南東方向へ併行移動、今回の調査区はほぼ中央を北東から南西を縦断する流路に落ち着く。流路が安定するのは8世紀後半代と思われる。すなわち、94Gで確認したSX01とした低水位護岸施設の設置による流路の安定。SX01は流路の変換点、左岸寄りに流路が折れ曲がる地点にある。残念ながらこの護岸施設に伴うであろう堤防敷の部分の確認はできなかった。しかしながら、7世紀初頭に比定されている岡山県津寺遺跡の護岸施設に匹敵する「敷葉工法」あるいは「そだ沈床工法」が確認されたことは、古代尾張の高度な河川改修工事、土木技術の一端を垣間みることができた。

文献史料に拠ると、ちょうど護岸施設と同時期にあたる769(神護景雲3)年に鵜沼川(木曾川・現境川)の大洪水により、流路が埋まり葉栗・中嶋・海部郡の百姓の田宅に被害をおよぼした、とみえる。この際、解工使の派遣および流路の再掘削を要請している。解工使の派遣申請、すなわち河川改修の技術者たちを中央政権に要請しているのであれば大毛沖遺跡で確認された護岸施設も解工使の指導のもと造られた施設とも考えられる。

実際、隣接する大毛池田・門間沼遺跡には大毛沖の“カワ”に並行する古代の溝が数条確認されている。これらがすべて洪水対策の人口水路かどうかは別としても、河川改修に伴う大規模な土木工事が行われていたことは間違いない。

### (2)中世大毛沖と鎌倉街道

中世の大毛沖遺跡は12世紀後半から13世紀にかけて居住域が少なくとも2ヶ所確認できる。93A居住域Ⅰと94H居住域Ⅱとがある。特に居住域Ⅰは北側と西側に道2・3、西側の道を挟んで畑地と典型的な中世村落のイメージが浮かぶ。一方、居住域Ⅱは内部施設の建物が3棟確認でき居住域の内部構造も明らかになった。また、居住域の南側には道1があり、道2と同じく旧流路に並行して北東から南西に延びる。

さて、中世以前から東山道と尾張道を結ぶ道がこの周辺に存在していたことは従来から指摘されている。中世になり、いわゆる「鎌倉街道」とよばれる道もほぼ古代と変わらぬ経路であった。鎌倉街道の推定経路は玉ノ井賀茂神社境内～外割田社宮寺北～八剣神社～剣光寺前～法蓮寺北～籠守勝手神社～白山神社東～伊富利部神社西(以上木曾川町)、となる。この先南下し、妙興寺周辺から清須へつながる。

このうち白山神社から伊富利部神社をつなぐ道が大毛池田遺跡から大毛沖遺跡に隣接している。実際、大毛池田遺跡からは鎌倉街道と推定される道状遺構が現在の木曾川町と一宮市の境界で確認されている。大毛沖遺跡で確認された道1・2は両者ともこの鎌倉街道（伊富利部神社方面）のある南西に向かって延びている。逆方向は現在の島村集落（中世若栗郷の中心地？）へ向かっていると推定できる。整理すると、幹道の鎌倉街道と若栗郷の中心地を結ぶ枝道が大毛沖遺跡で確認されたと言える。

鎌倉街道の成立時期は経路とともに不明な点が多い。大毛沖遺跡からは以下の点で鎌倉街道の成立時期解明に寄与する事象がある。それは、遺物の消長にある。中世の大毛沖遺跡は居住域の消長から中世Ⅰ～Ⅱ期、12世紀後半から13世紀前半にピークがある。13世紀後半から急激に遺構数が減り、近隣の場所に移住したとも考えられる。移住した先はおそらく北西に隣接する大毛池田遺跡であろう。実際、大毛池田遺跡では13世紀前後から居住域が展開してくるようで、16世紀前後に見られる方一町の居館跡につながる居住域が連続と営まれていた。

沖から池田へ このように大毛沖と大毛池田を概観した場合、遺跡の消長に大毛沖から大毛池田への移住が推定できる。すなわち、13世紀後半に居住域が放棄される大毛沖から13世紀以降に居住域が展開する大毛池田へと。そして中世鎌倉街道が大毛池田を南東から北西へ縦断することを合わせてみれば、鎌倉街道の成立（整備？）は少なくとも13世紀後半以降に推定できる。

### （3）大毛沖遺跡からみた古代の土器

大毛沖遺跡では30棟近くの堅穴あるいは平地住居を確認した。時期的には古代Ⅰ～古代Ⅳ期、7世紀後半から11世紀前半までとなる。須恵器・灰釉陶器、あるいは土師器の良好な一括資料に恵まれた。尾張平野部は特に8～10世紀代の良好な一括資料が少なかったため、古代の土器編年が大別のみで細別案が提出されなかった。今回の大毛沖資料は細別を可能にする良好な資料となった。

土器の流通 土器の流通に関しては、須恵器・灰釉陶器の蛍光X線分析と土師器甕の重鉍物分析について行った。

蛍光X線 蛍光X線分析については、美濃須衛窯、尾北窯、東濃窯、猿投窯の4地区が主な供給先となることは言うまでもない。そのほか、都城関連遺跡で壺Gと称される須恵器の関して、湖西窯産という結果が蛍光X線分析からも確認できたことは型式学的な立場で言われてきたことを追認することとなった。全体の傾向として須恵器は尾北窯、美濃須衛窯の製品が灰釉陶器は美濃須衛窯、東濃窯の製品が多い。

重鉍物 重鉍物分析については、土師器甕の分類および時期によって傾向がつかめた。甕B類を中心とした口縁を摘み上げるタイプの甕は、伊勢からの搬入品が多い。これらは古代Ⅰ期～Ⅱ期の傾向。古代Ⅱ～Ⅲ期は甕D類が中心となり、五条川流域あるいは庄内川流域の

胎土を示す。古代Ⅳ期は伊勢型鍋の祖型と考えられている甕E類が伊勢からの搬入品、清郷型鍋は西三河からの搬入品。また、大毛沖遺跡では確認されなかった三河型甕については、分析結果から三河産の製品との分析結果が得られた。

従来の研究は専ら須恵器・灰釉陶器の窯式編年が中心に進められてきた。今後は蛍光X線分析や重鉍物分析などを取り入れた多角的な視野からの研究が望まれる。今回の分析結果はその一端を示したに過ぎないが、須恵器・灰釉陶器だけでなく、土師器甕も商品？として流通していたことがわかってきた。

#### (4) 旧流路出土の遺物について

今回の調査で旧流路からは豊富な遺物が出土した。なかでも古代の木製鐙、鉄製羽釜は全国的に見ても類例が少なく、貴重な類例となった。

遺跡出土の木製鐙については、管見によると21遺跡26例ある。このうち、大毛沖遺跡と **木製鐙** 同類の「舌鐙」は山形県川西町道伝遺跡、静岡県島田市居倉遺跡、静岡県藤枝市御子ヶ谷遺跡の3例のみ。居倉・御子ヶ谷の2例は、壺鐙に小舌が付くいわゆる「半舌鐙」と呼ばれているタイプのもの。道伝例は大毛沖例と同様に舌部分が発達した段階の類例と言える。大毛沖例と道伝例の共通点は木取り方法にある。幹部分を舌部、枝部分を吊手部とした横木取りとなる。相違点は細部の加工および装飾にある。道伝例は工具の加工痕が見られるが、大毛沖例は研磨され、加工痕が見られない。また、大毛沖例には壺部から踏込部まで蒲鉾縁の柳端が付き、全面にわたり黒漆が施されている。一方道伝例には装飾が一切ない。

このように他例と比較した場合、大毛沖例は平安時代の木製鐙としては価値の高い資料と言える。

鉄製羽釜については、出土層位から12世紀後半としたが、これより古い年代も与えられ **鉄製羽釜** る。鉄製品としての羽釜は比較検討できる資料が少ないため土師器と比較した場合、都城関連遺跡では摂津C型（菅原1983）が10世紀代、中信（松本盆地）に見られる羽釜A（長野埋文1990）が10世紀後半代となる。特に中信の羽釜Aは大毛沖例と器形が酷似する。大毛沖からは鉄滓やファイゴの羽口など鉄生産にかかわる遺物が少量ながら確認されている。大毛沖の周辺遺跡には清郷遺跡など製鉄遺跡が知られている。古代から中世にかけて尾張北西部が鉄製品の生産地であった可能性は否定できない。

今回出土した羽釜は補修痕があり、その補修に銅を用いている。鋳直すのではなく、銅で補修している点、さらに内面に付着した成分を分析したところ銅であった。坩堝として利用されていたと考えられ、本例の使用法を認識する上で興味深い結果を得た。

## (5) 大毛池田遺跡、門間沼遺跡、そして大毛沖遺跡～隣接する遺跡との関係～

**白山神社** 古代Ⅰ期以前、すなわち7世紀代までの大毛の中心は現在の白山神社辺りと推定できる。その理由の一つに大毛沖を縦断する“カワ”に関わる遺構があげられる。“カワ”の右岸にあたる大毛池田と門間沼から、“カワ”に並行して確認された5条の溝がある。年代的にはほぼ7世紀代と考えられており、大毛沖に遺構が確認できる直前の溝群。この溝群は幅5～10m、深さ1.5m前後で、おそらく右岸域に展開する居住域あるいは官衙・寺院などの空間を“カワ”の氾濫から防御する溝とも考えられる。門間沼の居住域は5～7世紀が中心で中世Ⅲ期（12世紀末～13世紀初頭）まで、すなわち鎌倉街道が整備されるまで居住域は存在しない。一方、北西に隣接する大毛池田では8世紀以降居住域が展開する。ただ、調査区内での遺構は大毛沖と同様密にはならない。ただ、大毛池田の93Bで確認された方形に区画した基壇状の施設がある。遺物のなかには銅製の椀蓋があり、特殊な空間であったと考えられる。時期は古代Ⅲa期に併行する。

地形的には白山神社の辺りから大毛沖へ傾斜しており、白山神社側の方がより安定した土地条件と言える。

**大毛郷** 以上の理由から、古代大毛の中心は“カワ”の右岸域にあり、その中心は白山神社周辺にあったと考えられる。

中世については、先に記したように鎌倉街道の整備に左右されるところが大きい。すなわち、13世紀代を境に大毛沖から居住域がなくなり、より鎌倉街道に近い大毛池田、門間沼で新たに居住域が展開する。その規模は12世紀代までとは異なり、街道を基準に整備された居住域がいくつか認められる。街道沿いの町屋とも考えられる。

### 参考文献

菅原正明 「畿内における土釜の制作と流通」『文化財論議』 同朋舎出版、1983

(財)長野県埋蔵文化財センターほか 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』、1990

7. 付 論



## 目 次

- 7. 付論……………永井
  - 7. 1 古代の木製鏡について
  - 7. 2 大毛沖遺跡からみた古代の土器

## 7.1 古代の木製鐙について

### (1) はじめに

大毛沖遺跡で出土した木製鐙は古代馬具史を語る上で貴重な発見となった。遺跡から出土した鐙は全国的に見ても20数例しか確認できない。したがって、この20数例で扱える事象は限られてくる。資料の集成、木取りの方法、鐙の変遷などがある。本稿では特に資料の集成に重点を置き、大毛沖資料の位置付けをおこなう。

### (2) 大毛沖の鐙

大毛沖遺跡で出土した鐙は一般に「舌鐙」と呼ばれるタイプ。壺部はヨコ9.5cm、タテ11cmを測る。舌は踏込部で遺存長20cm、最大幅約10cmを測る。吊手部分は壺部との接点部で3×4cmの四隅を面取りした楕円形に近い断面形、遺存長で24cmを測る。

樹種は広葉樹、つばき科サカキ。

樹種

木取りの方法は芯持ちの幹部と枝部の枝分かかれた部分を利用している。

木取り

黒漆膜面の塗り構造は木胎に直接漆を塗布するのではなく、木胎→炭粉下地→赤褐色系漆の塗り構造をなす\*1。

漆

鳩胸は中央に稜線をもち球形に近い形を作り出している。舌は足を乗せる面となる踏込部はよく使用させているため、漆がはがれ磨耗している。断面形態はU字形となる。踏込の側面の柳端は幅1.5cmの凸部が壺から続く。下面の舌裏は鳩胸にある稜線が続く。

細部の特徴

吊手部分の傾きから左足用の鐙と考えられる。

鐙の年代については、出土地点が旧流路ということもあって、確実な共伴関係が押さえられない。出土した層位は、旧流路Ⅱb層、沖編年の古代Ⅳ期に相当し、10世紀前半代に位置づけられる。

年代

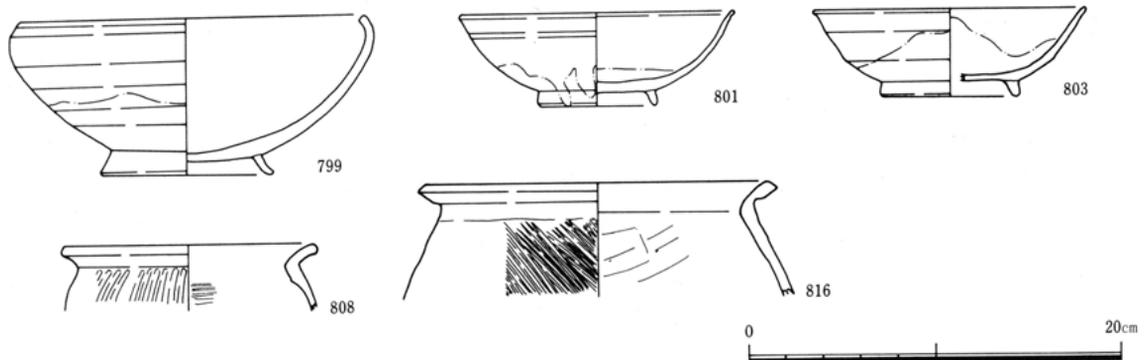


図150 鐙に共伴する旧流路Ⅱb層出土資料 (S=1/4)

\*1 樹種・木取り・漆の分析は(財)元興寺文化財研究所主任研究員 北野信彦氏の鑑定結果に基づいて記述。

## (2) 遺跡出土の古代木製鐙について

全国で木製鐙の出土例は大毛沖例を含めて管見に拠ると21遺跡26例確認している。年代的には古墳時代～平安時代まで資料に限る。形態は大きく3種類に分けられる。

### A 輪鐙

輪鐙は古墳時代に主に見られる形態。古墳の副葬品として出土する鐙は木芯鉄板張輪鐙が多い。

**藤田新田** 木製品は宮城県藤田新田遺跡から出土している。出土した遺構はSD302とされている河川跡。共伴する遺物は古墳時代前期から中期の土器。踏込部が一部欠損しているが、ほぼ完形品。吊手部と踏込部が一体となる。吊手部の先に孔がある。

**神宮寺** 他例に5世紀末から6世紀後半に比定されている滋賀県神宮寺遺跡例がある。

### B 壺鐙

壺鐙は杓子型と三角錐型、そして無花果型がある。木製以外では木芯を鉄板で覆い鋸留めした木芯鉄板張壺鐙とすべてが金属で作られた金属製壺鐙がある。古墳時代から奈良時代にかけて主に見られる形態。木製品の出土例は管見では15遺跡20例と木製鐙のなかで最も多い。

**杓子型** 杓子型は現状では山形県嶋遺跡のみ。杓子型は鉄製のものが多く、6世紀にはほぼ消滅する。したがって、嶋例は年代的には7世紀と後出するため、古い形態が東北地方に残存していたとも考えられる。

**三角錐型** 三角錐型(琵琶型)は埼玉県小敷田例を含め8例ある。小敷田例は伴出土器から4～5世紀に比定されているが、鐙の伝来が5世紀以降とされていることから、4世紀に遡ることはない。

**無花果型** 無花果型は金属製品の年代比定から杓子型・三角錐型より後出する型となる。木製の壺型は香川県下川津遺跡を含め11例ある。下川津例を典型とみると、全体的に丸みを持つ無花果型をなす。吊手部は壺部の直上に短くつき方形穿孔が1ヶ所付く。壺型は6～8世紀を中心に見られる。

### C 舌鐙

舌鐙は鎌倉時代以降に主流を占める。舌部の長さから半舌と舌長への変化が認められる。大毛沖遺跡の場合は舌長とも考えられる。遺跡出土は大毛沖遺跡を含め4例しかなく取りあえず半舌・舌長の分類は行わず、「舌鐙」として一括することにした。

静岡県御子ヶ谷例は報告では壺鐙とされているが、舌部の側面観が発達していると考えられるため舌鐙に含めた。舌鐙は9世紀以降に出現する。

以上、遺跡出土の木製鐙を概観した。馬具としての鐙を考える上では金属製品を抜いては語れない。しかし、本稿の目的は木製品の中での大毛沖例を評価することであり、金属製品を含めた稿は改めて用意する。

### (3) 木製鐙の変遷と大毛沖資料の位置付け

木製鐙の変遷は金属製品と同じく、5世紀代の輪鐙に始まり、5～8世紀代に壺鐙が流行し、8世紀以降に舌鐙が出現する。大枠で、輪鐙、壺鐙そして舌鐙へと変遷するようだ。

ここで、木製品の特徴として「木取り」に視点を向けてみよう\*1。

輪鐙・壺鐙はすべて縦木取りで、壺部と吊手部が一体化した一木作りとなる。一方、舌鐙は基本的には横木取りとなる。御子ヶ谷例以外の舌鐙は、芯持ちの幹部と枝部の枝分かれた部分を利用した横木取りとなる。

この縦木取りから横木取りへの変化こそ、壺鐙から舌鐙への変化と言える。したがって、御子ヶ谷例はこの過渡的な資料として評価されよう。

さて、大毛沖例は舌鐙で横木取りの手法で作られ、全面に黒漆を塗布した鐙である。ここで再度特徴を整理して本例の位置付けを行いたい。

まず、舌鐙という形態的特徴から見ていこう。比較できる類例として、道伝・居倉の2例のほかに奈良県手向山神社例があげられる。手向山神社所蔵資料は壺鐙（宝相華唐草象嵌壺鐙）が2例、黒漆半舌鐙が3例、鉄製半舌鐙が1例ある\*2。伝世品ではあるものの、12世紀に比定されている。

大毛沖例との共通点はまず、壺部の稜線、いわゆる鳩胸と呼ばれている形態があげられる。また、舌部も他の手向山神社の類例より長い。しかし、黒漆半舌鐙に見られるような壺の縁に蒲鉾縁が施されていない。大毛沖例は壺部から踏込部まで蒲鉾縁の柳端がつく。

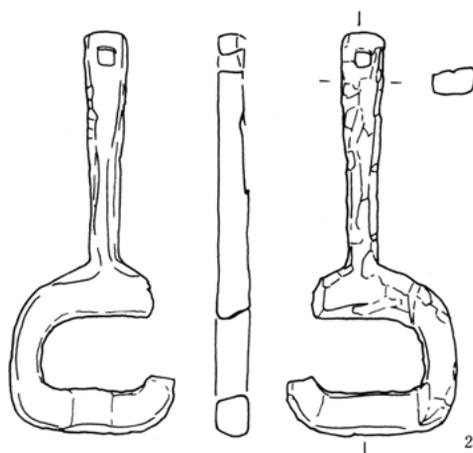
つぎに道伝・居倉例と比較してみる。道伝例は、壺部から踏込部にかけてのいわゆる鳩胸に入る稜線がないものの、ほぼ形態的には類似する。特に長く伸びた吊手部は壺鐙を含めて比較してもほかにない。比較できる伝世品はすべて吊手が短く兵庫鎖と繋がる。一方、伝世品に近い資料は居倉例。吊手部が短く、先端に方形の穿孔があり、兵庫鎖が上部に付くことが予想できる。

大毛沖例は吊手部の先端が欠損しており、どのように装着していたかは不明となるが、踏込部の磨耗から見ても使用されていることは比定できない。また、道伝例は吊手部の先端まで遺存しているものの、先端に穿孔や接続痕跡は確認されていない。したがって、現状ではどのように鞍と繋がっていたのかはわからない。

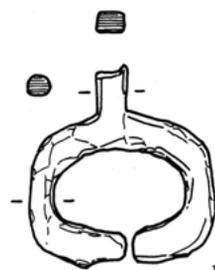
このようにみてゆくと、大毛沖例は一方で、伝世品資料に近い優品的な一面を持つものの、機能的側面についてはその装着方法に課題が残る。いずれにしても、古代から中世への過渡的形態を持つことから、重要な資料となろう。

\*1 木取りの観察については北野信彦氏に全面的にご教示を受けた。

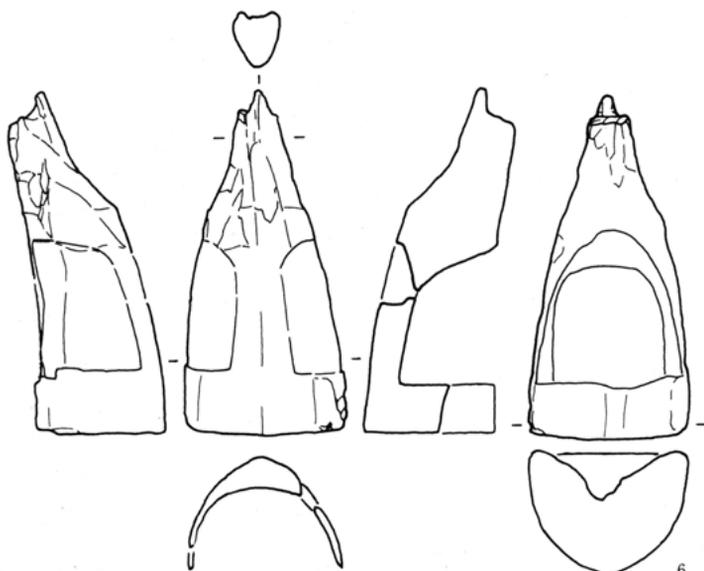
\*2 観察記載は鈴木友也氏による『日本馬具大観』日本中央競馬会、1991の記載を引用した。



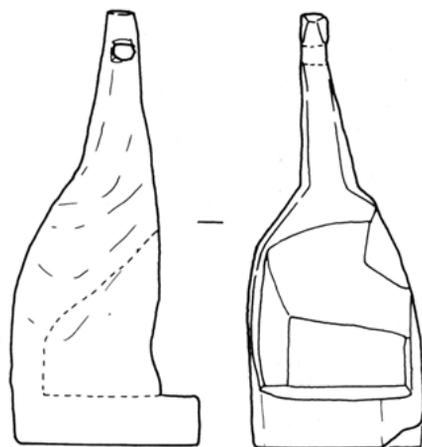
2



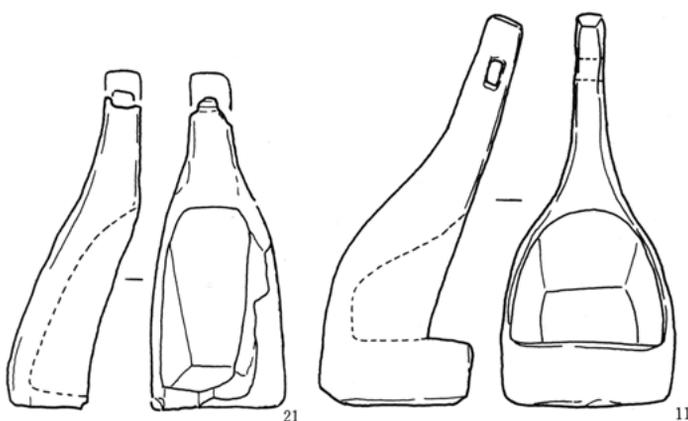
16



6

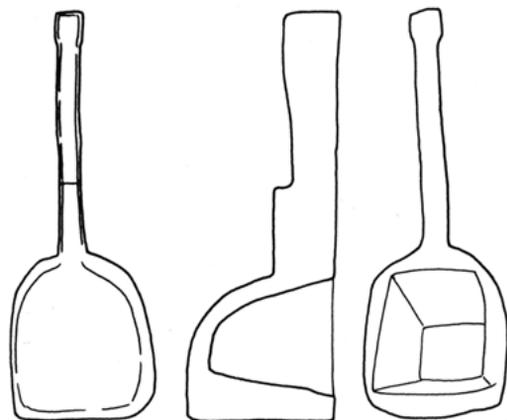


5



21

11



3

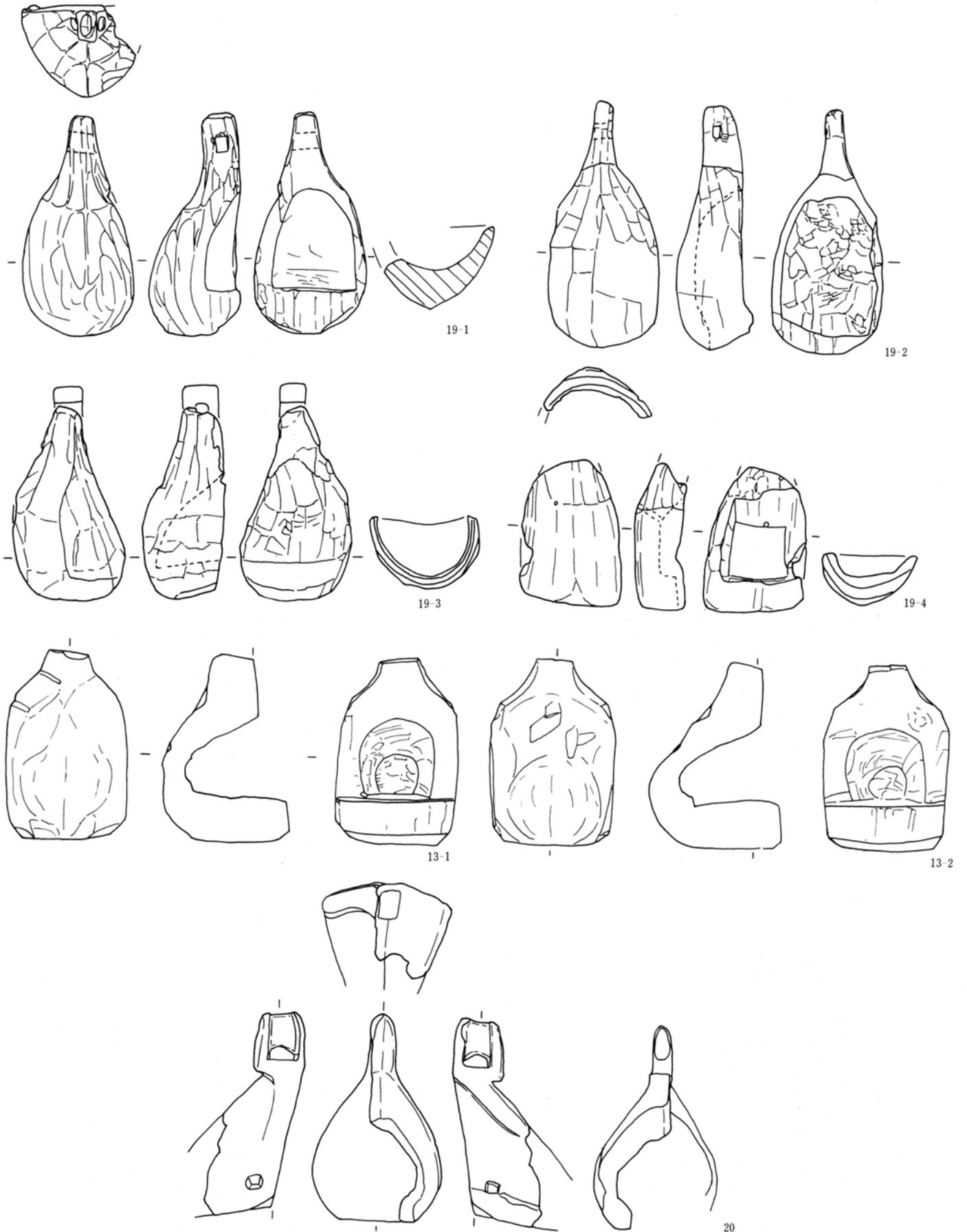
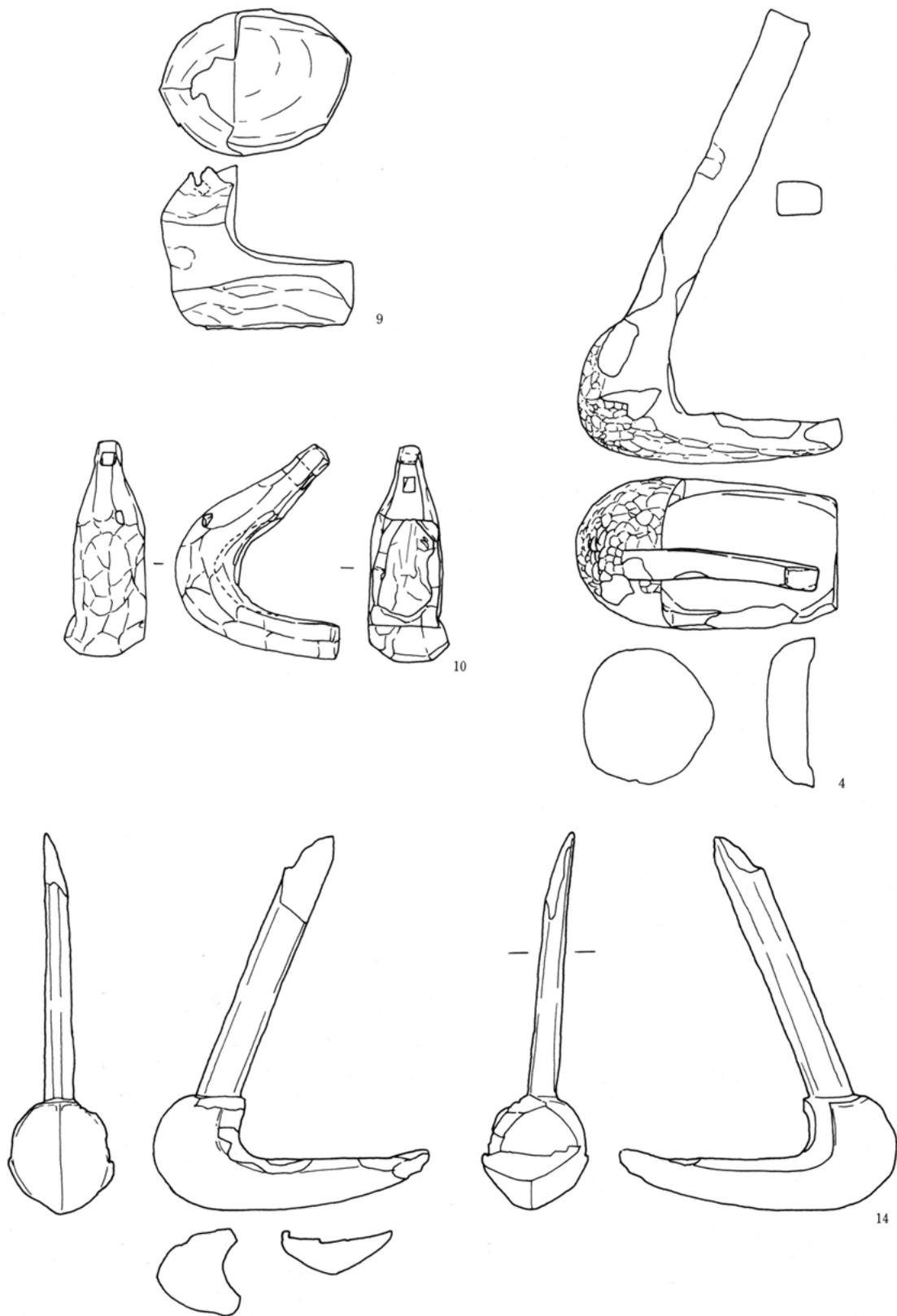


図152 木製鋸集成図(2) S=1/6

※番号は表32と一致



※番号は表32と一致

図153 木製鑑集成図(3) S=1/6

参考文献

- 大田市教育委員会 1989 『白坏遺跡発掘調査概報』
- 小野山節 1966 「日本発見の初期馬具」『考古学雑誌』第52巻第1号
- 香川県教育委員会ほか 1990 「下川津遺跡第2分冊」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』
- 川西町教育委員会 1981 『道伝遺跡第1次重要遺跡確認調査概報』
- 行田市教育委員会 1979 『池守遺跡発掘調査概報』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1996 『大毛沖遺跡』
- (財)北九州市教育文化事業団 『石田遺跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『小敷田遺跡』
- 島田市教育委員会 1987 『居倉遺跡』
- 鈴木友也ほか 1990 『日本馬具大鑑』第1～3巻 日本馬具大鑑編集委員会編 吉川弘文館
- 田原町教育委員会 1993 『山崎遺跡』
- 東北歴史資料館 1974 『宮城県多賀城調査研究年報・第20次発掘調査概報』
- 豊川市教育委員会 1988 『山西遺跡』
- 浜松市教育委員会 1978 『伊場遺跡遺物編1』
- 福井県教育委員会 1978 「上河北(上叡生田)遺跡」『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』
- 藤枝市教育委員会ほか 1981 「志太郡衛跡(御子ヶ谷遺跡・秋合遺跡)」『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 増田精一 1971 「鏡考」『史学研究』第81号 東京教育大学文学部
- 丸山雄二 1993 「神宮寺遺跡の調査」『滋賀考古』9 滋賀考古学会
- 三重県埋蔵文化財センター 1996 「六大A遺跡」『中勢道路調査ニュース』No.27
- 宮城県教育委員会 1994 『藤田新田遺跡』
- 山形市史編纂委員会 1986 『山形市史』別巻1
- 山田良三 1975 「古墳出土の鏡と形態的変遷」『橿原考古学研究所論集』 吉川弘文館
- 山田良三 1994 「古代の木製馬鞍」『橿原考古学研究所論集』第12 吉川弘文館

番号	遺跡名	所在地	分類・数	出土状況	年代	文献
1	多賀城跡	宮城県多賀城市	甕鏡(無花果型)・1	旧流路	8～9世紀	東北歴史資料館, 1974
2	藤田新田	宮城県仙台市	輪鏡・1	SD302	5世紀	宮城県教委, 1994
3	嶋	山形県山形市	甕鏡(杓子型)・1		7世紀	山形市史編纂委, 1986
4	道伝	山形県川西町	舌鏡・1	SD1	9世紀前半	川西町教委, 1981
5	池守	埼玉県行田市	甕鏡(三角錐型)・1	旧流路	6世紀後半	行田市教委, 1979
6	小敷田	埼玉県行田市	甕鏡(三角錐型)・2	旧流路	4～5世紀	(財)埼玉県埋蔵文化財センター, 1992
7	諏訪木	埼玉県熊谷市	甕鏡(三角錐型)・1		7世紀	
8	上河北	福井県福井市	甕鏡(三角錐型)・1	旧流路	7世紀	福井県教委, 1978
9	御子ヶ谷	静岡県藤枝市	舌鏡・1	旧流路	8世紀	藤枝市教委, 1981
10	居倉	静岡県島田市	舌鏡・1	旧流路	10世紀後半	島田市教委, 1987
11	伊場	静岡県浜松市	甕鏡(三角錐型)・1	溝	6世紀後半	浜松市教委, 1978
12	山西	愛知県豊川市	甕鏡(無花果型)・1	旧流路?	6～7世紀	豊川市教委, 1988
13	山崎	愛知県田原町	甕鏡(無花果型)・2	旧流路	7世紀	田原町教委, 1993
14	大毛沖	愛知県一宮市	舌鏡・1	旧流路	10世紀前半	(財)愛知県埋蔵文化財センター, 1996
15	六大A	三重県津市	甕鏡(三角錐型)・1	旧流路	5～6世紀	三重県埋蔵文化財センター, 1996
16	神宮寺	滋賀県長浜市	輪鏡・1	旧流路	5～6世紀	滋賀考古学研究会, 1993
17	水垂	京都府京都市	甕鏡(無花果型)・1	旧流路	6世紀	京都府埋蔵文化財研究所, 1995
18	白杯	島根県太田市	甕鏡(無花果型)・1	旧流路	10世紀前半	太田市教委, 1989
19	下川津	香川県坂出市	甕鏡(無花果型)・4	旧流路	7～8世紀	香川県教委, 1990
20	石田	福岡県北九州市	甕鏡(無花果型)・1	旧流路	8世紀	(財)北九州市教育文化事業団, 1990
21	下山門	福岡県福岡市	甕鏡(三角錐型)・1	旧流路	6世紀	福岡市教委, 1973

表33 木製鏡出土遺跡一覧表

## 7.2 大毛沖遺跡からみた古代の土器

はじめに 大毛沖遺跡では、須恵器や灰釉陶器とともに出土した土師器甕は従来の資料を大幅に補填することができ、古代の土器編年を細別する手段を与えた。ここでは、3.「遺物」のなかで示した土器編年をもう少し踏み込んで見てゆくことにする。具体的には土師器甕を指標とし、共伴する須恵器・灰釉陶器の窯編年を参考にし、進めてゆく。

併せて土師器甕の重鋳物分析結果を踏まえて、大毛沖遺跡を中心に生産地と消費地の関係についても触れてみたい。

窯編年 最近刊行された『須恵器集成図録』（雄山閣出版、1995）の第3巻東日本編1で斉藤孝正氏は「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」を掲載している。本書もこの編年表を基本とし大毛沖編年を提案した。ただ、灰釉陶器の終末期、すなわち東山72号窯式から百代寺窯式の評価については意見の分かれるところとなる。美濃窯（東濃地区）の先にあげた窯式との併行関係がある。斉藤氏は猿投窯と美濃窯の併行関係について、東山72号窯式＝虎渓山1号窯式、百代寺窯式①＝丸石2号窯式、百代寺窯式②＝明和27号窯式としている。一方、美濃窯の立場から田口昭二・若尾正成両氏は白瓷（灰釉陶器）と白瓷系陶器（灰釉系陶器）の境界を丸石2号窯式と明和27号窯式の間置き、絶対年代を1080年とした（田口・若尾1990）。また、瀬戸窯の立場から藤澤良祐氏は山茶碗（灰釉系陶器）の始まりを第3型式とし、これに先行する灰釉陶器の流れを汲む先行型式を東山72号窯式＝第1型式、百代寺窯式＝第2型式とし、灰釉系陶器の始まりを1060年に置く点では斉藤氏と一致するものの、美濃窯の西坂1号窯式＝百代寺窯式②とし、美濃窯の評価で食い違いがある。

また、灰釉陶器の始まりの時期についても決着がついておらず、斉藤氏は今回の編年表で猿投窯第Ⅳ期第4小期に井ヶ谷78号窯式と黒笹14号窯式①を一括りにし、黒笹14号窯式を1段階遡らせた。この時期に見られる「原始灰釉陶器」についても評価が分かれるところとなっている。

このように窯編年の評価に決着がなかなか着かないのも、消費地の調査成果が頻繁に行われていないことに起因するのではないか？近年、城ヶ谷氏により消費地における土器編年がいくつか提出されている（城ヶ谷1992ほか）。城ヶ谷氏が指摘するようによく消費地（集落）編年の対象となる一括資料が愛知県内でまとまってきた。

本書の大毛沖編年も細別を試みたが、1遺跡だけの評価を行ったため、さらに細別できる余地はある。ところで、消費地遺跡では須恵器・灰釉陶器のほかに土師器も一定量出土する。特に煮炊具の甕形土器は日常生活には欠かせない道具の一つと言えよう。カタチが単純だけに型式変化もあまりなく、編年基準としては細分不可能と考えがちではあるが、細かな指摘をすれば現在の窯編年と同等、あるいはさらなる細別が可能となる。ここでは、大毛沖遺跡出土資料と必要に応じて周辺地域の土師器甕・土師器鍋をもとに編年案を提示

する。したがって、尾張平野部を中心とする。編年の対象とする時期は7世紀後半から11世紀前半とし、大毛沖編年の古代I～N期に相当する。

煮炊具の分類は本書で提示した甕A～E類と拙稿の清郷型鍋の分類（永井1996）を踏襲分類する。

#### 甕形土器（以下甕）

**甕A** 小型品。口径が15cm以下、器高15cm以下のもの。口縁の特徴から、摘み上げるタイプ（A1）、肥厚あるいは体部と同じ厚さのタイプ（A2）、口縁部を折り返すタイプ（A3）に分ける。

**甕B** 中型品。口径が18cm前後のもの。器形は長胴で、体部下位に最大径をもち丸底になるタイプ（B1）と体部上位に最大径をもち平底になるタイプ（B2）がある。いずれも口縁端部を摘み上げる特徴を持ち、体部外面に比較的整ったタテあるいはナナメ方向のハケ調整を行う。内面調整は頸部に横方向のやや荒いハケ調整、体部はおおむねナデ調整、下半には板ケズリを行うものもある。

**甕C** 大型品。口径が23cm以上のもの。全形を捉えるまでの資料はないが、B類と同様の特徴が想定できる。

**甕D** 中型品。口径が20cm前後のもの。器高が40cm前後でB類より長胴化が進む。底部はすべて平底となり、成形技法に特徴がある。底部に円盤状の粘土を置き、その上にやや厚めの粘土紐（帯）を積み上げる。底部内面の成形・調整痕跡から粘土積上の際、外反しすぎるのを防ぐために絞り込んだ跡が残り、底部から1段目あるいは2段目の積上の境目に積上の痕跡が明瞭に残る。外面の調整は器壁を薄くするためにケズリ調の荒々しいハケ調整を行う。ハケメもB類にくらべると深く幅広になる。内面調整は頸部に荒い横方向のハケ調整、体部内面は概ね指ナデあるいは指オサエで、板ナデも認められる。口縁部の特徴から5類に細分できる。口縁部がさほど肥厚せず、体部外面の調整が細かいハケメとなるもの（D0）口縁部が肥厚し「く」字になるもの（D1）、D1類よりさらに頸部からの折り返しが進み、水平に屈曲するもの（D2）、口縁部が「く」字になるもの、D1類より立ち上がるもの（D3）、D3類とほぼ同様の特徴をもち、口縁端部に面をもつもの（D4）に分類できる。

**甕E** 中型品。口径15cm前後、器高15～20cmのものが多い。器形は球胴で丸底となる。口縁端部を内面に折り返す特徴を持つ。口縁部の特徴、体部外面の調整から4類に細分できる。口縁部を折り返し、その後強くヨコナデを行い面を持つ、口縁部から頸部にかけてヨコナデを行い、体部と頸部の境目に稜線を持つ（E1）。E1類のように面は持たない、体部のハケ調整の単位がわかるように間隔を空けて行う、口縁部から頸部にかけてのヨコナデがE1類より弱くなる（E2）。口縁端部の折り返しが弱く丸みをもつ、体部のハケ調整

もさらに弱くなる（E3）。口縁部の折り返しが痕跡程度となる（E4）。

**甕F** 「三河型甕」を一括する。尾張平野部、特に南部に若干見られる。したがって、本来であれば細分も必要となるが、尾張平野に主要型式とならないため、今回は細分を見送る。典型的な三河型甕を示すと次のようになる。器形は長胴で、底部は平底、ただ、尾張平野部の甕に比べるとやや丸底に近い。口縁部は鋭角に折れ肥厚する。体部調整はハケ調整を残さない、基本的にはナデ調整で仕上げる。清郷型鍋は成立段階に三河型鍋の系譜を引くものもある。

#### 清郷型鍋

**A類** 口縁部が「く」ノ字に折れ、やや長胴気味の器形。底部は不明ではあるがおそらく丸底になる。調整は外面がユビナデ、内面は横方向の板ナデあるいはハケ。いわゆる「三河型甕」からの型式変化したもの。

**B類** A類との相違点は器形にある。器形は羽釜系と同じくほぼ球胴となる。口縁部から体部にかけては、「く」ノ字になるため、ややくびれる。その他はA類と同じ。

**C類** 器形などはB類と同じ。ただ、口縁部はやや肥厚する。口縁端部はヨコナデにより面取りがなされている。口縁端部が水平方向になるものと斜め上方になるものがある。さらに口縁部が短く終わるもの（新相）とそうでないもの（古相）で時期差になる可能性がある。体部の調整は外面が成形段階のユビオサエが多少残るものの、基本的にはナデ調整、内面は横方向に板ナデを行い、一見ミガキ調整のように丁寧になされる。

**D類** 口縁部が「く」ノ字に短く屈折し、口縁部を水平あるいはやや下方に引き出すタイプ。断面形状が三角形の鋸状の口縁となる。口縁内面に強い稜線をもつ。体部の内外面調整はC類と同じ。

**E類** 口縁端部に体部と接合させるために連続する指頭オサエをしたのち、強いヨコナデを行う。そのため凹線状にくぼみを持つタイプ。ヨコナデが弱くなり、口縁部が「N」字状になるものもある。体部の内外面調整はC類と同じ。ただ口縁部と体部の稜線がはっきりとしないものも相当量ある。

**F類** 口縁部を水平方向に短く引き出し「L」字状となり、断面形状が直角三角形のタイプ。体部の内外面調整はC類と同じ。

**G類** 基本的にはF類と変わらない。ただ、口縁部の接合が粗雑になり、鋸状の張り出しが小さい。したがって、口縁部の面取りはほとんどなく、丸みをもつようになる。灰釉系陶器と共存する。

#### 編年

本稿で扱う資料は先に示したとおり7世紀後半から11世紀前半。そこで古代の土器について、いつからいつまでを示さなければならない。大毛沖遺跡では遺跡の動向から古代を7世紀後半から11世紀前半とした。また、中世I期との間に中世0期（11世紀後半～12世紀前半）を設定し、今後の土器編年研究に備えた。では、古代の始まりをいつからとする

か？ここでは便宜上都城編年に抛り、飛鳥Ⅰ期を古代Ⅰ期とし、6世紀末あるいは7世紀からとする。古代の終わりは本書で示した中世Ⅰ期の前段階、11世紀前半とした。

### 古代Ⅰ期

Ⅰ期は6世紀末から7世紀代とする。おおよそ7世紀前半までをⅠa期、7世紀後半をⅠb期とする。

Ⅰa期は基本的に甕A1・B1・Cが主要器種となる。6世紀中頃から続く型式で口縁部を摘み上げる断面形態をもつ。祖型は畿内の土師器甕にあり、伊勢湾周辺も同様の特徴をもつ。標準資料として大渕遺跡SE32、清洲城下町SB15があげられる。

Ⅰb期はⅠa期に加えてB2が加わる。この時期を過渡期として丸底から平底へ、球胴から長胴へと変化する。また、体部下半の板ケズリがなくなり、指ナデあるいは板ナデ調整が主流となる。口縁部の摘み上げも直立するものから、より外方へ摘み上げるタイプへとなる。標準資料は大毛沖遺跡93ASB08・09、清洲城下町遺跡SB54がある。

### 古代Ⅱ期

Ⅱ期は7世紀末から8世紀前半代とする。現状では細別できないがD0の出現が新相のメルクマールとなろう。基本的には前段階から引き続き口縁部摘み上げの退化現象が顕著になり、痕跡程度のタイプが主流となる。また、頸部と体部の境目にみられる稜線が弱くなる。頸部から口縁部にかけての強い横ナデが弱くなることが認められる。

次段階から主流となるDと前段階からのBとの折衷型D0類が出現する。D類の祖型は美濃に求められる。美濃では各務原市三井遺跡、関市重竹遺跡などで7世紀代に、口縁部が肥厚し体部外面調整がケズリ調の荒々しいハケ調整となる長胴平底甕が出現している。標準資料は清洲城下町遺跡SB63を古相、大毛沖遺跡93ASB01を新相としてあげられる。

### 古代Ⅲ期

Ⅲ期は8世紀前半から9世紀前半とする。おおよそⅢa期を8世紀後半代、Ⅲb期を9世紀前半代とする。

Ⅲa期はD1が主体となりD2類も共伴する。型式変化から見ればD1からD2へと考えられるが、現状では細別できない。D1類のなかには口縁部が肥厚しないタイプも見られる。体部上半に最大径をもち、肩の張る体部上半から直線的に小さな底部に向かって延びる長胴甕が特徴となる。体部外面の調整はすべてケズリ調の荒々しいハケ調整。底部の製作技法にも特徴がある。円盤状の底部の端部をやや持ち上げ皿状に底を作る。その上に内面接合で粘土紐を積み上げてゆく。底部内面は最終的に接合痕が明瞭に残り、底部を絞り込んで細くした結果、内面にしわが付くことがある。この底部接合技法はD類を通して見られる特徴となる。標準資料は大毛沖遺跡94ISB02がある。

Ⅲb期はD2類が主体となり、D3類と共伴する。D2類は口縁部が肥厚し、鋭く屈曲

するタイプ。頸部が短く口縁部につながるため、ハケ調整の単位がよく観察できる。ハケの方向は左上方へ掻き上げるように見られる。頸部にかかる先端は先細りとなる。D 2 からD 3 類への型式変化はD 4 類への過渡的現象として捉えられる。標準資料として大毛沖遺跡94 I SB04がある。

#### 古代Ⅳ期

V 期は9世紀後半代とする。現状では細別できないが、D 4 類のうち口縁端部の面取りの強弱が古相（弱）、新相（強）の指標となろう。

全形を確認できる資料がないため確証はないが、体部上半と底部から想定すると、長胴からやや球胴への変化が見られる。体部上半の肩部がD 3 類よりも張らず、やや丸みを持ちながら下半部へとつながる。一方底部の立ち上がりも緩やかとなり、D 類に特徴的な底部内面接合技法も見られなくなる。また、体部調整も一変する。これまでのケズリ調のハケメから細かいハケメへと変わる。さらに頸部から口縁部にかけての横ナデが復活し、体部と頸部の境目に稜線が入る。口縁部がやや肥厚するタイプが残存するものの、基本的には体部と同じ厚さが認められる。標準資料として大毛池田遺跡94 F SB10がある。

#### 古代Ⅴ期

V 期は10世紀から11世紀前半とする。10世紀前半代をV a 期、10世紀後半代をV b 期、11世紀前半代をV c 期とする。この時期は新たに清郷型鍋が出現する。また、ⅢからⅣ期にかけて続いたD 類が姿を消し、甕E 類が出現する。さらに全体の傾向として、甕から鍋形への変革が起きる時期でもある。

甕E に関して、その系譜は畿内の土器に認められる。中心となるのは伊勢で、尾張には相当量認められるが、三河ではほとんど見られない型式。口縁部を折り返す技法から伊勢型鍋の祖型と言われている。

一方、清郷型鍋は伊勢ではほとんど見られず、北勢で相当量認められるものの、分布の中心は西濃・尾張から三河、さらに遠江が中心となり、駿河までおよぶ。そして甕E と清郷型鍋が共伴するのは尾張平野部と北勢となる。

#### V a 期

V a 期は甕E 1・2 と清郷型鍋C が主流となる。尾張平野部では、清郷型鍋より甕E の方が優性となる。前段階までの甕D と系譜が異なる甕E は、重鉍物分析によると伊勢型鍋と同じ鉍物組成を持つ。伊勢からの搬入品の可能性もある。甕E 1 とE 2 は型式変化で捉えることができる。E 1 は口縁端部を折り返した後に強く横ナデをする。E 2 は口縁端部を折り返した後の横ナデはさほど強くない。体部調整について、E 1 は体部上半に細かいハケ調整を全面的に行う、一方E 2 はハケ調整の単位が確認できる、間隔をもって行う。現状では細別可能な一括資料はない。

清郷型鍋はC 類が主流となる。良好な一括資料としては、三河部の一宮町西浦遺跡SB-1 があげられる。尾張平野では大毛沖の旧流路Ⅱ c 層資料があるものの、良好な遺構一括

資料はない。清郷型鍋の重鉍物分析によると矢作川流域の胎土となる。一方表面観察では、黒雲母・長石・石英が清郷型鍋の胎土に共通する、これらは矢作川流域に多く見られる。以上2点から清郷型鍋は矢作川流域で作られている可能性が高い。清郷型鍋の系譜は拙稿で述べたように畿内産の摂津C型（菅原1983）と類似する。直接の系譜と考えるよりも、鉄製羽釜の模倣品として捉えた方がよいのかもしれない。また、清郷型鍋にはもう一つ系譜「三河型甕」が想定できる。三河型甕の系譜を引く清郷型鍋A・B類は三河部に圧倒的に多い。これら2つの系譜を融合させながら清郷型鍋は成立する。標準資料として大毛沖遺跡93F SK37、94F SD14がある。

甕E2・3類、清郷型鍋D・E類が主流となる。大毛沖では清郷型鍋が見られないが、Vb期一宮市清郷遺跡、稲沢市尾張国府跡などでは甕E類より清郷型鍋D・E類が卓越する。

甕E類は前段階より規格が一定してくるようだ。大型・中型品から中型品のみとなる。口縁部の折り返しは弱くなり、より丸みを帯びる。体部上半のハケ調整も荒くなる。調整の基本がナデへと変化するようだ。頸部と体部の境目に見られた稜線もさほど強いものはなく、頸部から口縁部にかけての横ナデが弱くなる。

清郷型鍋D・E類は型式変化として捉えているものの、一括資料として細別はできない。DとE類の違いは口縁端部の横ナデが弱い（古相）か強い（新相）かによるもの。加えて、口縁部と体部の境目にあたる稜線がはっきりしないもの（新相）としている。したがって、製作上の退化現象と捉えるべきか、ただ単に横ナデのバラエティーとして捉えるべきか、判断に迷うところとなる。標準資料として大毛沖遺跡94F SB01、清郷遺跡竪穴遺構がある。

甕E3・4類、清郷型鍋F類が主流となる。

Vc期

甕E類の口縁部折り返しは痕跡程度となる。また、体部上半のハケ調整も前段階に比べさらに粗雑になる。甕E類は伊勢型鍋の祖型と考えられているが、直接の系統とはならないようだ。伊勢地域の口縁部折り返し甕（ここで言う甕E類）の複数型式の中から生まれる可能性がある。清郷型鍋F類は11世紀後半には灰釉系陶器と共伴する\*1。この時期回転台使用の土師器（供膳具）がみられる。I～V期を通して土師器の他器種が見られるのはこの時期と、古代Ⅱ期のみとなる。Vc期の基準資料は朝日西遺跡SK271資料があげられる。

ここで、重鉍物分析の結果と対照しながら土師器甕の流通について触れてみる。

重鉍物分析

古代I～Ⅱ期は大毛沖遺跡、大毛池田遺跡、儀長正楽寺遺跡では伊勢型鍋と同じ胎土組成をもつ甕が多い。分類では甕A～C類が相当する。甕A類は畿内から伊勢湾周辺までおよぶ広域に分布する器形で、尾張平野部の場合、伊勢からの影響を受けて成立する甕と考えられてきた。今回の分析結果を参考にすれば、伊勢からの搬入品が相当量認められる。

\*1 朝日西遺跡で包含層資料ではあるが灰釉系陶器第3型式と共伴する。

古代Ⅲ期は甕D類が主流になり、若干の甕F類（三河型甕）が加わる。甕F類に関しては、志貴野遺跡などを参考にすると、三河の胎土組成を示す。尾張平野部に見られる甕F類はおそらく三河からの搬入品であろう。一方、D類はⅢc期の資料を除き、尾張平野部の胎土組成を示す。D類は尾張平野部で古代Ⅱ期で出現し、古代Ⅲ期にはB・C類に変わる系統の甕として主流となる。系譜は美濃にあると考えられる。その理由に、7世紀後半代に美濃では口縁部摘み上げのB・C類に替わるD類が出現し、8世紀前半代には主流となってくる\*1。尾張平野部のD類はおそらく美濃方面からの系譜として捉えられよう。現段階では、胎土組成が尾張平野部との結果があるが、美濃の資料と比較検討しなければ、美濃製品の可能性を否定できない。

古代Ⅳ期の甕D4類は型式組列をD1～3類までと同じくするが、胎土組成は全く違う。D4類は三河の胎土組成を示す。土師器甕の供給先が代わるのか？

古代Ⅴ期は甕E類、清郷型鍋が主流となる。甕E類はB・C類と同様に伊勢型鍋と同じ胎土組成となる。一方、清郷型鍋は西三河（矢作川流域）の胎土組成となる。尾張平野部では両者が混在し、三河部では清郷型鍋のみとなる。

以上の胎土分析をまとめると、Ⅰ～Ⅱ期は伊勢から、Ⅲ期は尾張平野（美濃？）で、Ⅳ期は西三河から、Ⅴ期は伊勢あるいは西三河から、それぞれ土師器甕が供給されていたことになる。甕の製作手法・技法の再検討、胎土分析のさらなる定量化を行えば、古代の土師器甕の流通に迫ることができよう。今後の資料増加・追検証を待ちたい。

## おわりに

以上、土師器甕から尾張の古代土器編年を提示した。今後の資料増加によっては更なる細分が可能となる。今回は城ヶ谷和広氏の提示した編年を再確認および新資料による補填を主な目的とした。集落（消費地）遺跡の土器編年を今後進めてゆくには、窯編年だけでなく煮炊具を用いた編年作業が重要な位置を占める。また、胎土分析から煮炊具には生産地・消費地の流通機構が示唆された。今後の分析資料の増加によっては古代の経済活動あるいは支配領域の問題にまで踏み込める可能性がある。陶器資料についても同様のことが言える。

さて、今回の分析には直接触れることのなかった2点をあげて課題とする。

尾張平野のみではなく伊勢湾周辺を見てゆくことにより、「○○型」といった設定も不可能ではない。三河型甕、清郷型鍋など胎土・カタチから設定された名称はほかの分類にも存在するようである。例えば尾張平野部と美濃を中心に見られる甕D類について、カタチ・製作技法から共通する要素がいくつか確認できる。

煮炊具の使用法について、甕から鍋への変化は、単なる形態的特徴の変化だけではなく

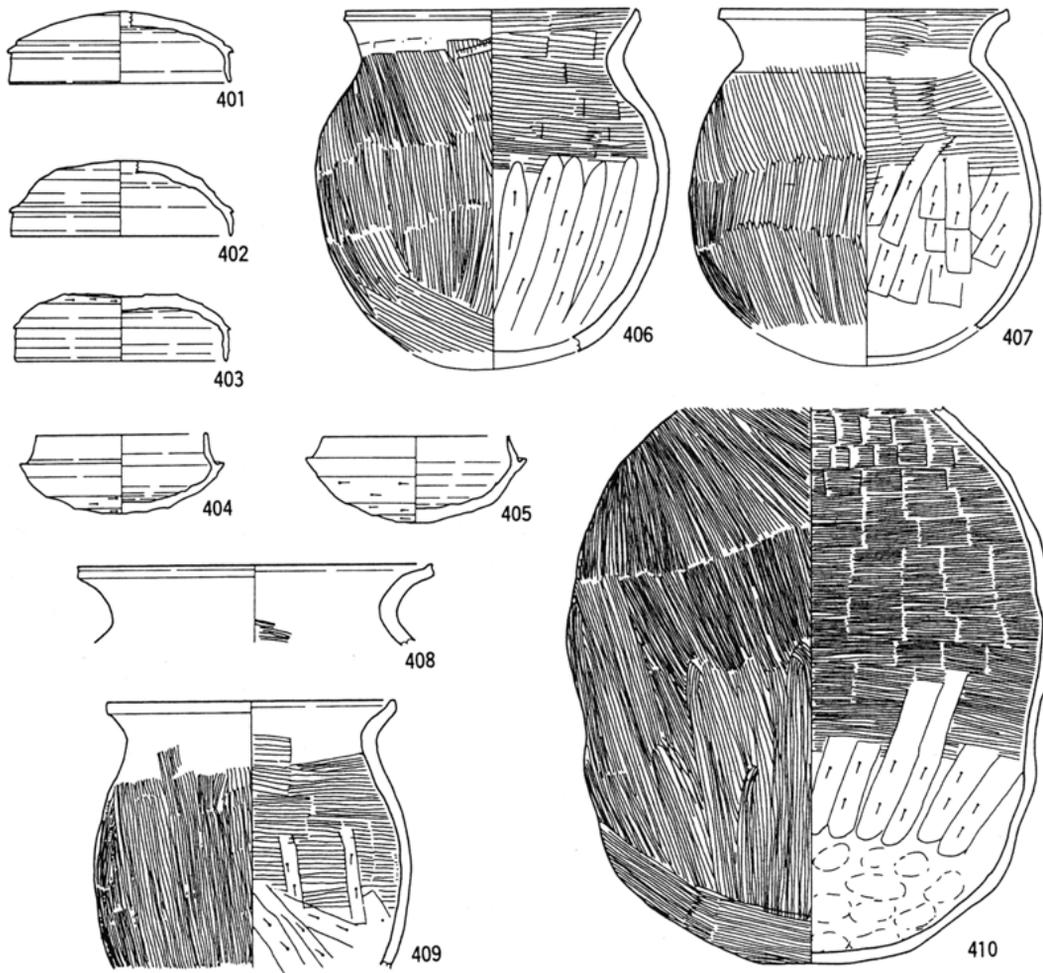
\*1 例えば、岐阜県関市重竹遺跡。

使用の変化のよるところが大きい。カマドの消滅、竪穴から平地住居への変化に伴うものと考えられる。使用法に関しては、カタチからだけでなく使用痕の分析も必要となる。カマドについては、類カマド→造付カマド・移動式カマド→簡易カマドの大きな流れがある。煮炊具の変化もこれら火所に併せて見てゆかなければならない。住居については竪穴→平地→堀立（高床）への変遷が古代から中世にかけて見られる。

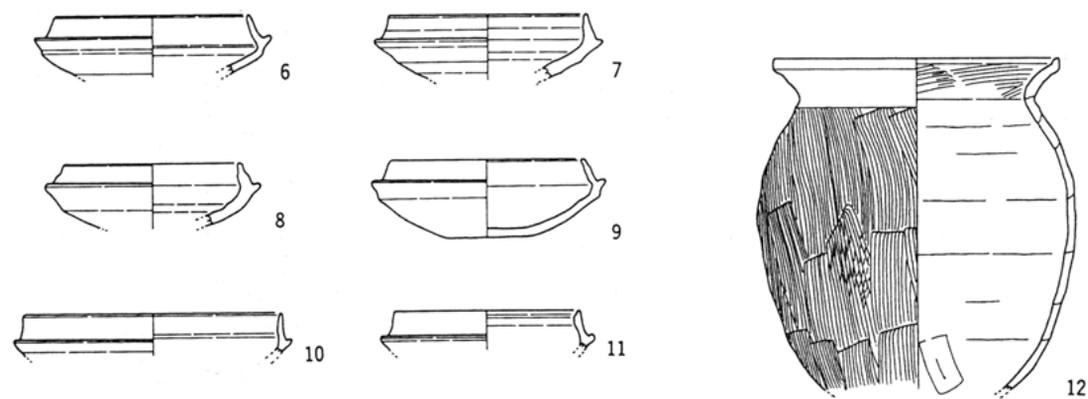
このような視点も取り込んで煮炊具を検証してゆくことが今後の課題となる。

#### 参考文献

- 岩野見司 1974 第3節「浅井町（7）清郷遺跡」  
『新編一宮市史資料編4』一宮市史編纂室
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」  
『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
- 野末浩之 1988 「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」  
『愛知県陶磁資料館研究紀要7』愛知県陶磁資料館
- 新田洋 1988 「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」  
『マージナルNo.9』愛知考古学談話会
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 『名古屋城三の丸遺跡(1)』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 『朝日西遺跡』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 『清洲城下町遺跡』
- 佐野五十三 1990 「清郷型甕の研究」  
『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小林久彦 1990 「須恵器出現以降の土師器の変遷」  
『三河考古第3号』三河考古刊行会
- 池本正明 1990 第6章考察「2. 志貴野Ⅱ期にみる土師器煮沸具」  
『志貴野遺跡・小島遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991 『大淵遺跡』
- 北村和宏 1991 第6章考察第2節「付東三河地方における8～15世紀代の土器」  
『森岡遺跡・淡洲神社北遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 城ヶ谷和広 1990 「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」  
『年報・平成2年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 松井直樹 1993 第4章まとめ第2節「(2)煮炊具について—清郷型甕成立の直前—」  
『ハッ面山北部遺跡Ⅲ—蔵屋敷地区—』西尾市教育委員会



1a期 大淵遺跡 SE32



1a期 清洲城下町遺跡 SB15

※番号は報告書と一致

図154 古代の土器基準資料(1) S=1/4

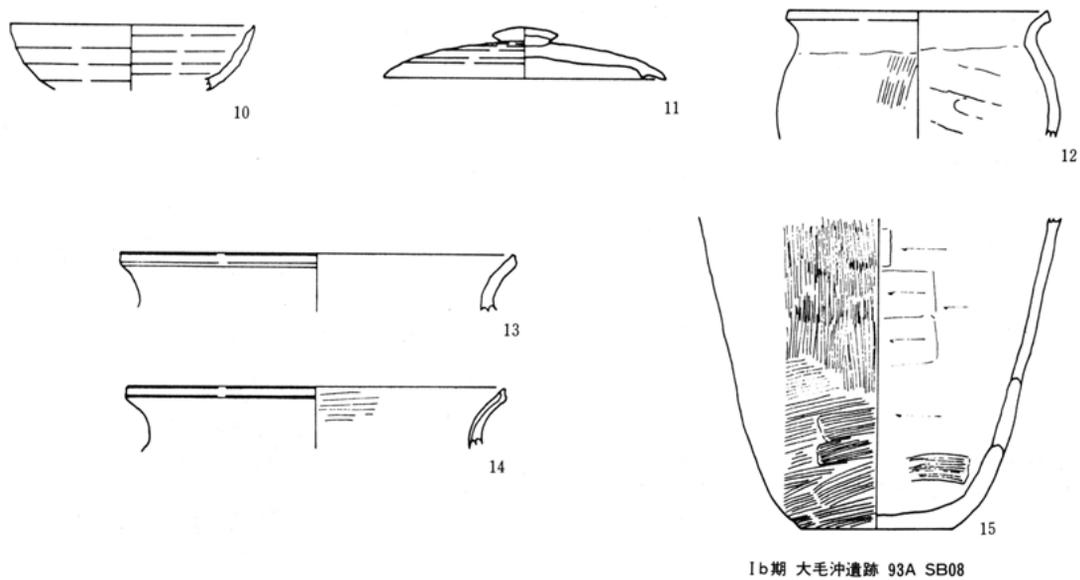
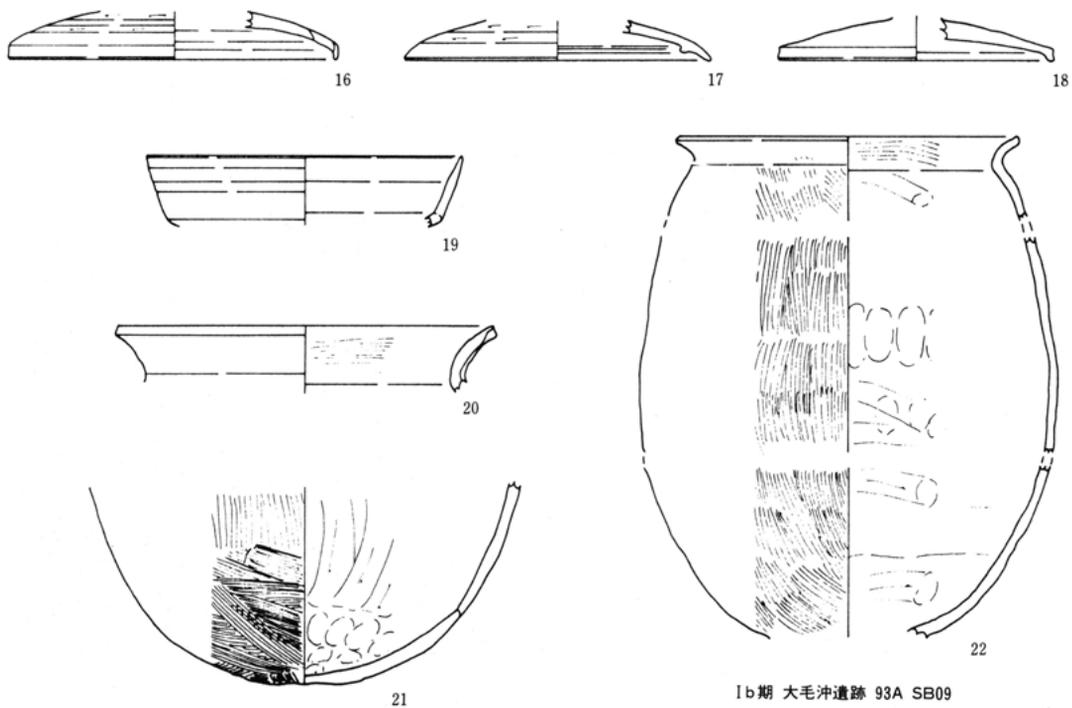
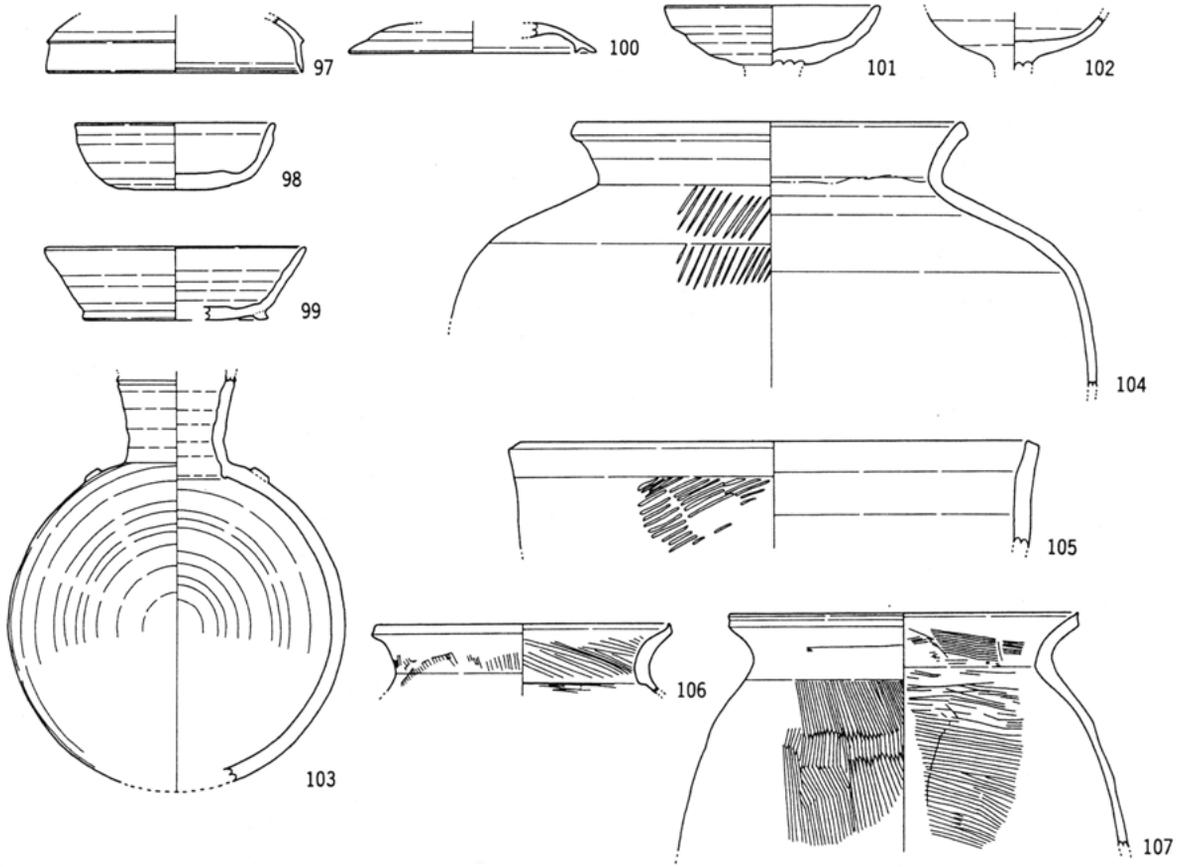


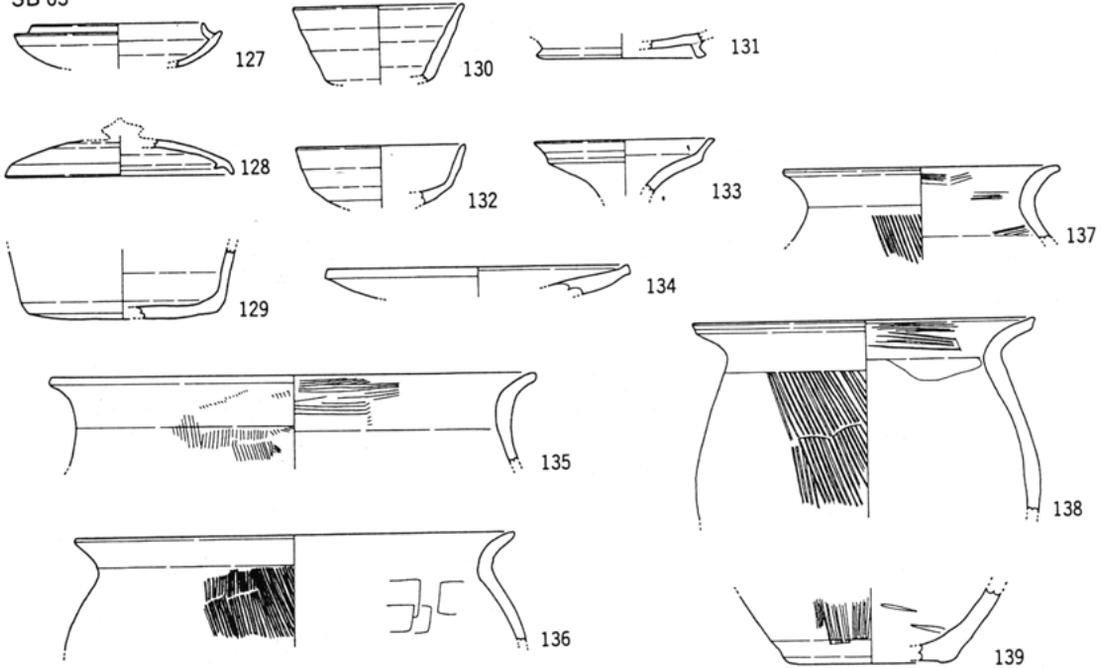
図155 古代の土器基準資料(2) S=1/4

SB 54



Ib期 清洲城下町遺跡 SB54

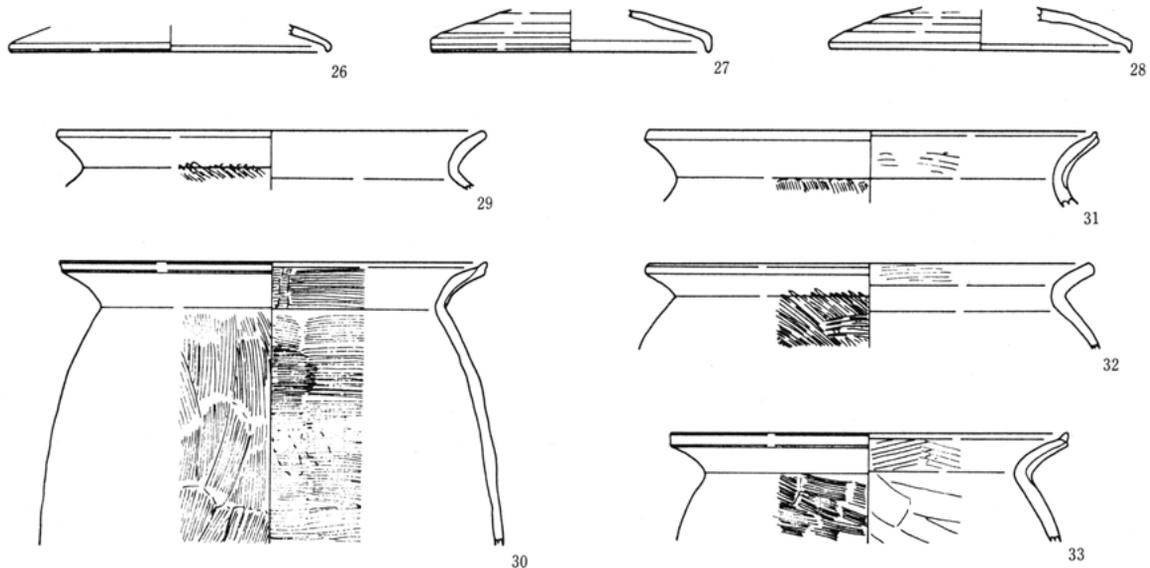
SB 63



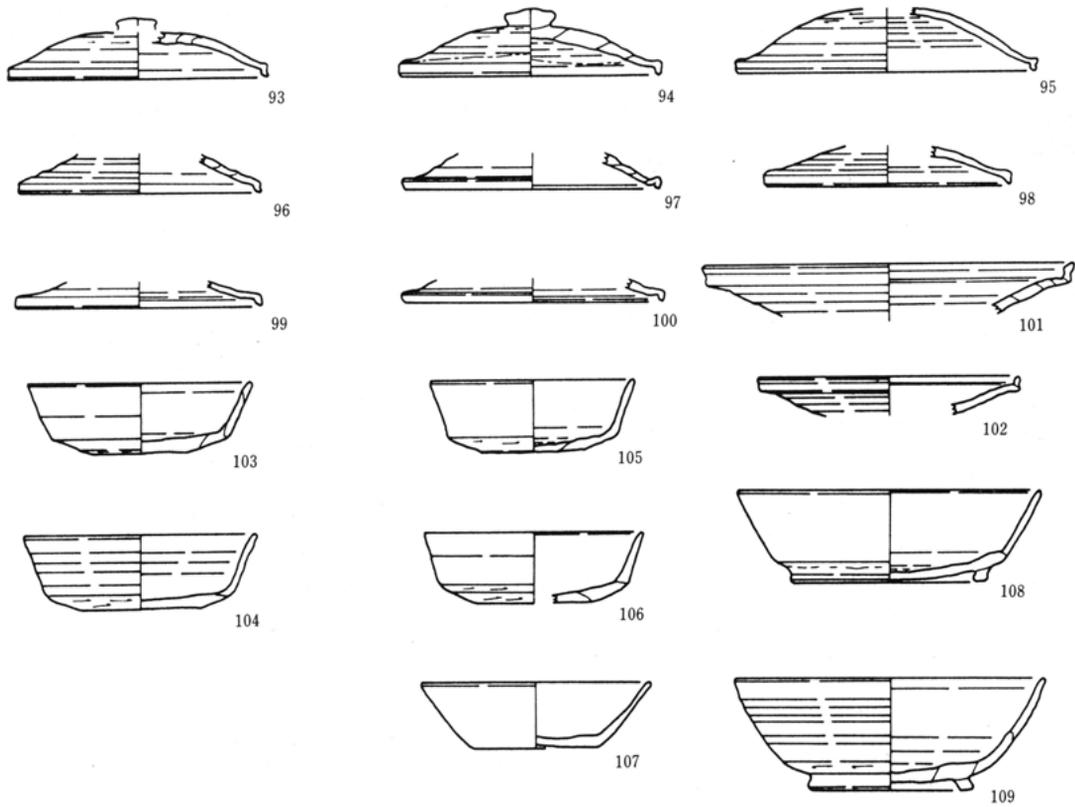
II期(古相)清洲城下町遺跡 SB63

※番号は報告書と一致

図156 古代の土器基準資料(3) S=1/4



Ⅱ期(新相)大毛沖遺跡 93A SB01



Ⅲa期 大毛沖遺跡 94I SB02(1)

図157 古代の土器基準資料(4) S=1/4

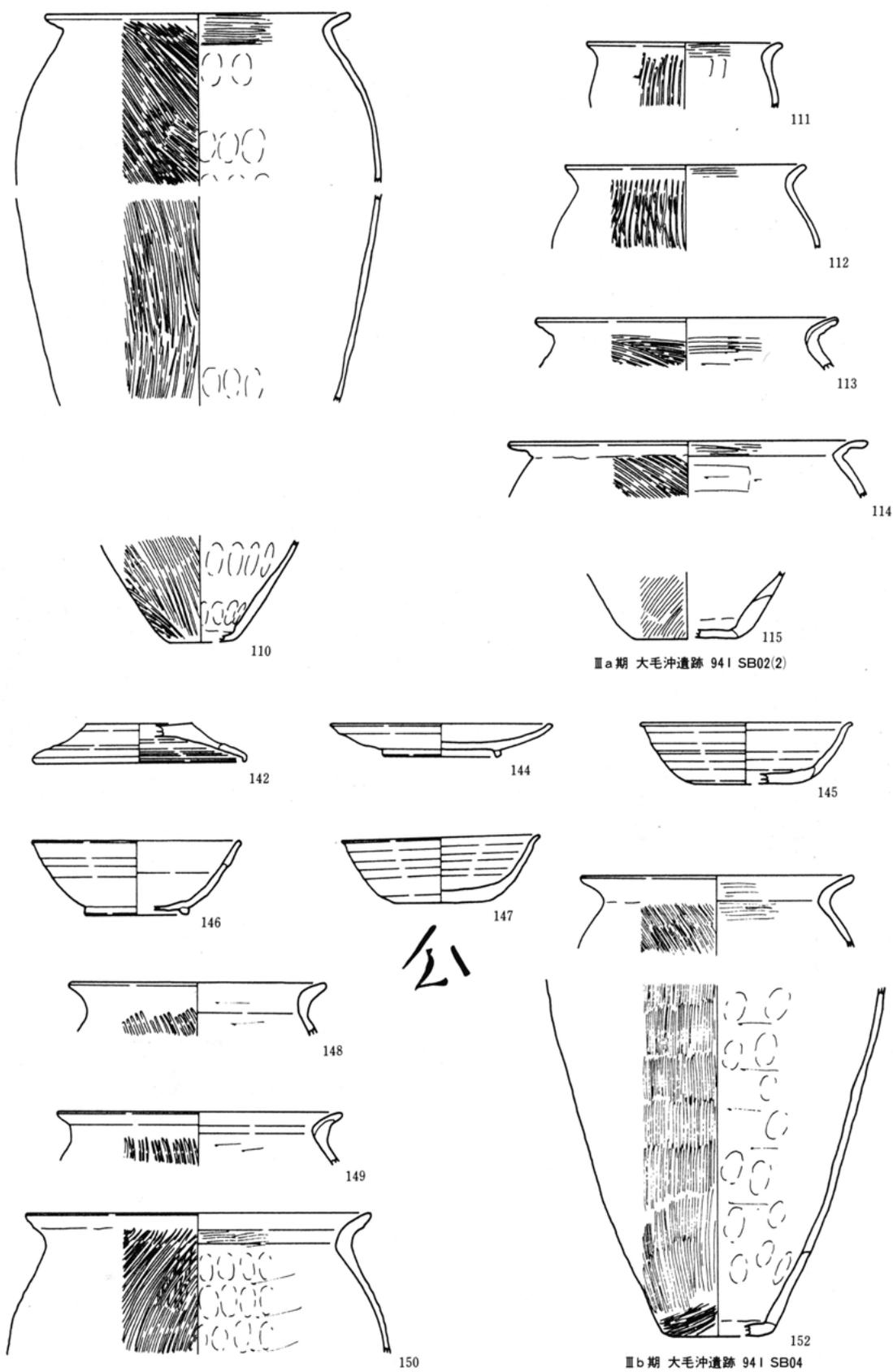
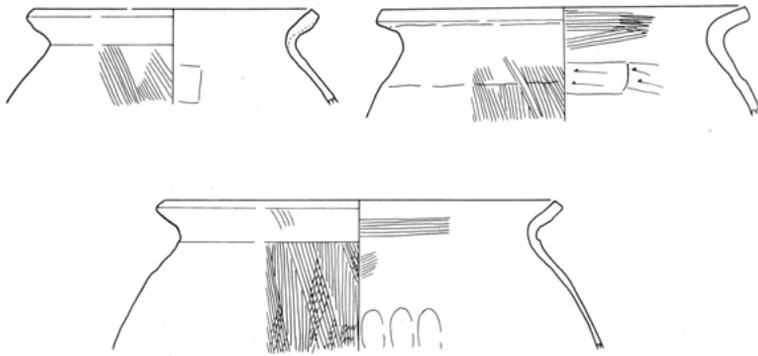
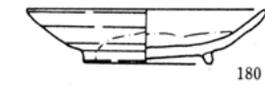


図158 古代の土器基準資料(5) S=1/4



IV期 大毛池田遺跡 94F SB10



180



181



182



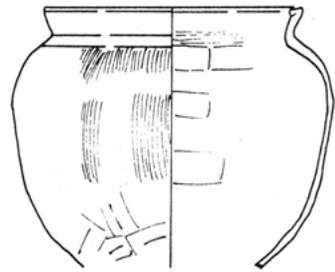
183



184



185



Va期 大毛沖遺跡 93F SK37

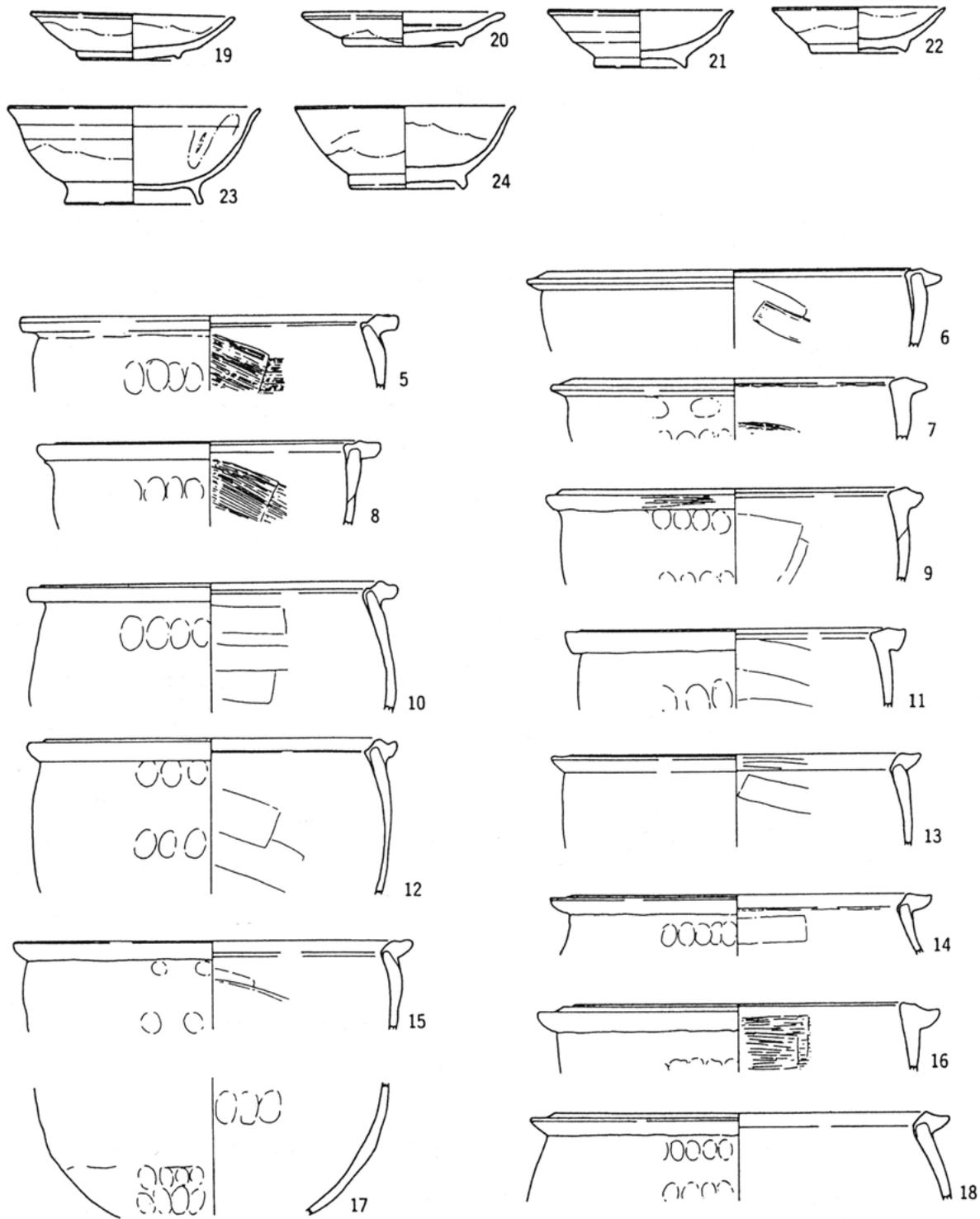


190



191

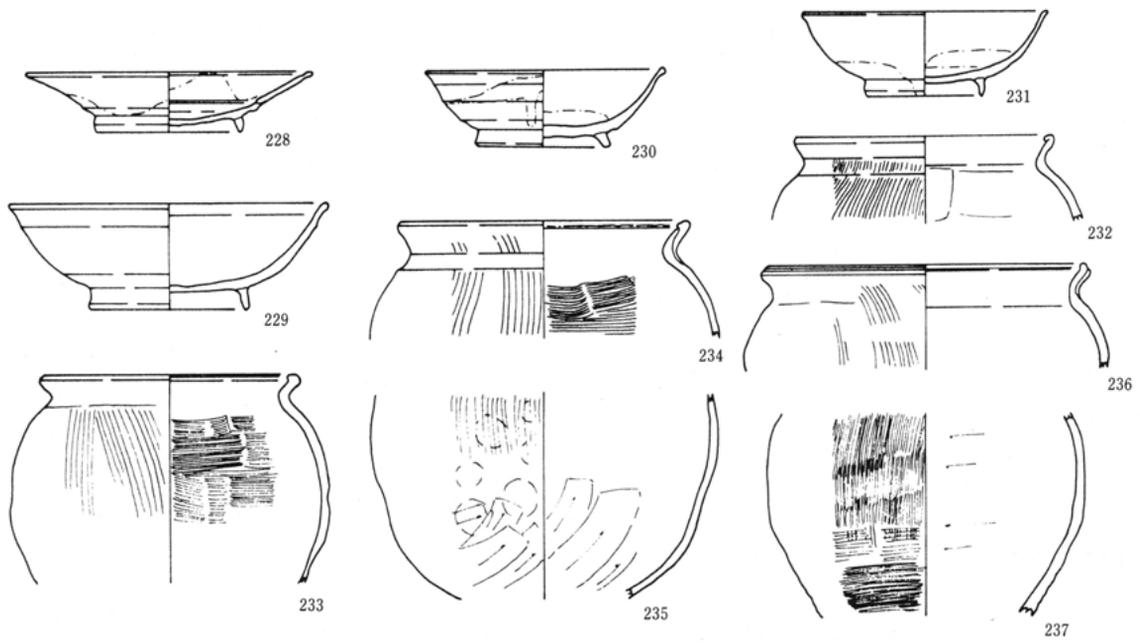
Va期 大毛沖遺跡 94F SD14



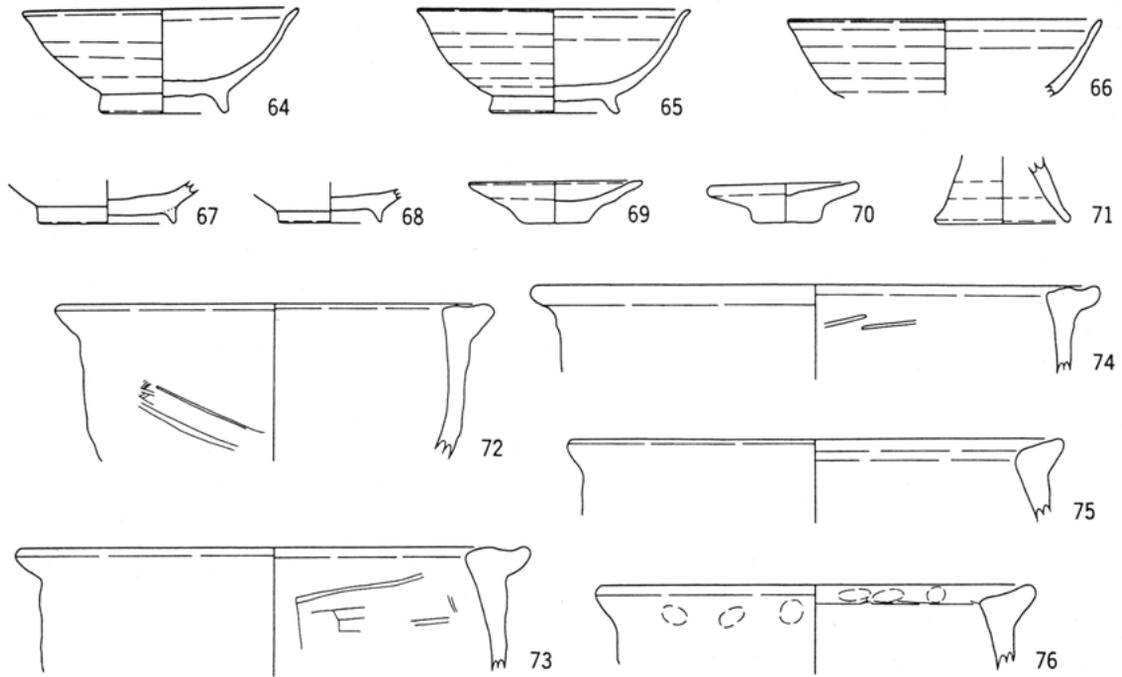
Vb期 清郷遺跡竪穴遺構

※番号は永井1996と一致

図160 古代の土器基準資料(7) S=1/4



Vb期 大毛沖遺跡 94F SB01



Vc期 朝日西遺跡 SK271

※番号は永井1996と一致

図161 古代の土器基準資料(8) S=1/4

発掘調査に当たり以下の方々(発掘作業員)のご協力を得た。(敬称略・50音順)

青井三男	小笠原文代	佐藤美奈子	長谷川節子
赤塚ひろ	岡村三子	沢田綾子	畑美津子
浅野和夫	岡本守	柴垣鈴子	浜口万里
浅野志代	小川八重子	柴田昭子	濱嶋英津子
浅野武光	小関真智子	清水和代	林恭江
東睦子	小田清子	清水良員	林禎一郎
安藤慶子	小野清子	下谷皆二	速水大
飯田弘子	小野晃一	白上安一	坂薫
池田智	梶田三郎	須賀弘之	廣垣澄枝
池田一二三	粕谷和美	杉本八重子	廣瀬美智枝
石井あつ子	加藤玉男	杉山進	広瀬喜巳
石井徳男	加藤まつ子	鈴木みえ子	福田けい
石井春利	加藤美貴子	瀬戸和子	福田恵子
石川喜代子	加藤美和子	瀬戸照之	藤村文子
石河安明	加納貴美子	千田隆之	古田和子
石原絵奈	神垣勇	高木英子	古田修一
市橋久美子	川上辰男	高崎啓治	堀尾美枝
伊藤栄	川崎義徳	高島節子	堀場美子
伊藤隆	川野百合子	高野幸雄	本多伴子
伊藤美枝子	河村絹子	滝川かすみ	前田利昇
伊藤満子	神田善子	田口勝義	牧野貞夫
伊藤義挙	菊池良子	田島茂明	間崎利夫
井上昌一	北川良子	田中篤	松岡秀男
猪口一彦	北島万紀	田中マサ子	松本喜代子
今井公子	木全信子	玉腰鈴江	松本千代美
今枝光代	桐田信子	玉腰武	丸井芳子
岩坂登美子	葛谷利幸	且木澄子	水谷孝子
岩田重孝	小泉幸雄	対木晶子	水谷淑子
岩田武夫	額額映美子	津川喜代子	水野貴代子
岩田弘子	国立妙子	土屋敏男	納堂克己
岩田雅子	小島和雄	床波順子	宮崎美穂子
岩田洋子	小島勝子	戸松静信	三輪智子
岩田良雄	小島智子	内藤春枝	武藤敏江
岩野きよ江	小島洋子	長井ちゑ	森島武
岩室一枝	後藤喜平	中川登久子	森田明子
上村栄	五藤栄	仲川信子	柳生宣子
植村輝美	後藤茂	中沢節子	安川富士子
鵜飼京子	後藤雅彦	中島邦光	柳瀬春香
鵜飼鯛一	小播すみ江	中田幸一	藪下敏治
宇佐見寿美代	駒澤一雄	中田眞澄	山内千里
臼井美代子	駒澤好子	中野絹枝	山川美智子
江川新	近藤勇	中村つや子	山田清子
江崎カツ子	近藤輝子	中村博	山田くに子
江崎汎	近藤宏	西川美代子	山田溜蔵
江森操	斉藤ツヤ子	似内熙子	山中登洋子
大久保文枝	坂井田美子	野垣豊子	吉川光子
大野啓子	酒井はるえ	野田郁子	吉田一夫
大野輝子	榊俊美	野田泰子	若杉隆治
大橋きよ子	佐々木清孝	野々垣孝治	渡辺志め子
大橋しのぶ	佐藤政美	野々垣裕美	渡辺文枝

# 付表・図版

## 付表目次

- 付表1 遺構一覧表(1)
- 付表2 遺構一覧表(2)
- 付表3 遺構一覧表(3)
- 付表4 遺構一覧表(4)
- 付表5 遺物一覧表(1)
- 付表6 遺物一覧表(2)
- 付表7 遺物一覧表(3)
- 付表8 遺物一覧表(4)
- 付表9 遺物一覧表(5)
- 付表10 遺物一覧表(6)
- 付表11 遺物一覧表(7)
- 付表12 遺物一覧表(8)
- 付表13 遺物一覧表(9)
- 付表14 遺物一覧表(10)
- 付表15 遺物一覧表(11)
- 付表16 遺物一覧表(12)
- 付表17 遺物一覧表(13)
- 付表18 遺物一覧表(14)
- 付表19 遺物一覧表(15)
- 付表20 遺物一覧表(16)

## 図版目次

- 図版1 93A<sub>2</sub>遺構詳細図
- 図版2 93A遺構詳細図
- 図版3 95A・94H遺構詳細図(1)
- 図版4 94H遺構詳細図(2)
- 図版5 遺構基本図(1)
- 図版6 遺構基本図(2)
- 図版7 遺構基本図(3)
- 図版8 遺構基本図(4)
- 図版9 遺構基本図(5)
- 図版10 遺構基本図(6)
- 図版11 遺構基本図(7)
- 図版12 遺構基本図(8)
- 図版13 特殊遺物と古代墨書土器分布図
- 図版14 中世墨書土器分布図
- 図版15 陶丸・加工円盤分布図
- 図版16 土錘分布図
- 図版17 貿易陶磁器分布図
- 図版18 錢貨分布図
- 図版19 分析試料採取位置図

古代遺構一覧表

建物

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	柱穴	カマド	備考
93A2	SB08	4.8	4	21	古代Ⅰ期	4	造付?	
93A2	SB09	5.2	4.4	21	古代Ⅰ期	4	造付	
93A	SB01	—	—	24	古代Ⅱ期	—	造付	
94C	SB07	—	—	18	古代Ⅱ期	(2)	造付	
94C	SB06	2.8	2.0	9	古代Ⅱ期	—	造付	
94I	SB03	—	—	22	古代Ⅱ期	(2)	造付?	
94I	SB08	3.4	—	23	古代Ⅱ期	(2)	—	
93A	SB06	—	—	—	古代Ⅲa期	—	—	
94I	SB01	4.2	3.5	22	古代Ⅲa期	(1)	造付	
94I	SB02	3.9	2.9	3	古代Ⅲa期	4	造付	
94I	SB07	3.9	—	13	古代Ⅲa期	(3)	—	
93A	SB07	—	—	3	古代Ⅲb期	—	簡易?	
94I	SB04	3.5	2.8	14	古代Ⅲb期	4	—	
94I	SB05	3.4	—	24	古代Ⅲb期	4	—	
94I	SB06	—	3.5	23	古代Ⅲb期	(5)	—	
93F	SK37	3.8	3.0	12	古代Ⅲc期	—	—	
94C	SB03	—	—	34	古代Ⅲc期	—	—	
94F	SB03	3.8	3.2	27	古代Ⅲc期	5	—	壁際にピットが14ヶ所ある。
94C	SB04	—	—	32	古代Ⅳa期	—	—	
94F	SB02	—	—	12	古代Ⅳa期	4	簡易?	
93B	SB01	4.3	3.9	22	古代Ⅳb・c期	4	—	
93B	SB02	—	4.0	26	古代Ⅳb・c期	(2)	—	
94F	SB01	4.4	—	12	古代Ⅳb・c期	4	簡易?	

溝

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93A	SD06	—	2.2	19	古代Ⅲa期	
93A	SD07	—	0.4	13	古代Ⅲa期	
93A2	SD01	—	0.1	3	古代Ⅰ期	
93A2	SD02	—	0.1	26	古代Ⅰ期	
93Fb	SD08	—	2.7	58	古代Ⅱ～Ⅲ期	

畝状遺構

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93A2	SD05	—	0.5	3	古代Ⅰ期	
93A2	SD06	—	0.4	8	古代Ⅰ期	
93A2	SD07	3.6	0.4	6	古代Ⅰ期	
93A2	SD08	3.9	0.6	13	古代Ⅰ期	
93A2	SD09	—	0.9	16	古代Ⅰ期	
93A2	SD10	3.5	0.3	6	古代Ⅰ期	
93A2	SD11	3.9	0.3	5	古代Ⅰ期	
93A2	SD12	10.6	0.8	17	古代Ⅰ期	
93A2	SD13	5.2	0.5	5	古代Ⅰ期	
93A2	SD14	4.7	0.6	5	古代Ⅰ期	
93A2	SD15	—	0.4	8	古代Ⅰ期	
93A2	SD16	—	0.5	5	古代Ⅰ期	
93A2	SD17	—	1.3	7	古代Ⅰ期	
93A2	SD18	—	0.7	8	古代Ⅰ期	
93A2	SD19	—	1.3	14	古代Ⅰ期	
93A2	SD20	—	0.5	9	古代Ⅰ期	
93A2	SD21	—	0.3	9	古代Ⅰ期	
93A2	SD22	—	0.4	3	古代Ⅰ期	
93A2	SD23	—	0.4	9	古代Ⅰ期	
93A2	SD24	—	0.5	10	古代Ⅰ期	
93A2	SD25	—	0.5	8	古代Ⅰ期	
93A2	SD27	3.4	0.5	11	古代Ⅰ期	
93A2	SD28	3.6	0.4	6	古代Ⅰ期	
93A2	SD29	3.9	0.3	5	古代Ⅰ期	

旧流路関連遺構

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
94G	SX01	(9)	(7)	—	古代Ⅲa期	低水位護岸施設
94G	SX02	12.5	0.7~3.5	5~12	古代Ⅲc期	集石遺構
94G	SX03	—	—	—	古代Ⅲa期	低水位護岸施設

## 中世遺構一覽

### 道

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93G	SD07	—	2.0	60	中世Ⅱ期	道1
93A	SD18	20.6	0.6	13	中世Ⅰa期	道2
93A	SD43	17.6	0.4	6	中世Ⅰb~Ⅰc期	道2
93A	SD44	13.6	0.3	7	中世Ⅰa期	道2
93A	SD17	—	0.4	16	中世Ⅰ期	道2、道3
93A	SD38	—	0.7	13	中世	道2、道3
93A	SD19	—	0.4	9	中世Ⅰa期	道3
93A	SD20	16.0	0.2	7	中世Ⅱa期	道3
93A	SD29	—	0.5	9	中世Ⅰb期	道3
93A	SD39	8.4	0.5	6	中世Ⅲa期	道3

### 墓域

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93F	SD05	—	0.9	20	中世Ⅱ期	
93F	SD06	—	2.4	36	中世Ⅰc期	
93F	SD11	—	1.0	35	中世Ⅱa期	
93F	SD12	—	0.8	15	中世Ⅰ期~Ⅱ期	
93F	SD13	—	0.8	16	中世Ⅱb~Ⅲ期	
93F	SD14	—	1.0	18	中世Ⅱb期	
93F	SD16	—	0.8	19	中世Ⅲ期	
93F	SD18	—	0.6	7	中世Ⅱ期	
93F	SD19	—	0.9	30	中世Ⅱ期	
93F	SD20	—	1.8	20	中世Ⅱ期	
93F	SK09	2.1	0.8	21	中世	
93F	SK10	2.4	1.4	17	中世Ⅰc期	
93F	SK13	2.1	1.0	20	中世Ⅱa期	
93F	SK14	1.3	1.0	12	中世	
93F	SK15	1.7	0.9	13	中世Ⅱ期	
93F	SK16	2.4	1.0	9	中世Ⅱa期	
93F	SK17	1.7	1.0	16	中世Ⅲ期	
93F	SK18	—	—	14	中世Ⅱ期	
93F	SK19	3.4	1.0	5	中世Ⅱa期	
93F	集石A				中世Ⅲa期	
93F	集石B					
93F	集石E					
93F	集石F					

### 井戸

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	分類	備考
93A	SK01	1.5	1.3	56	中世Ⅲ期	A1	
94H	SE02	—	—	90	中世Ⅱ期	A1	
93A	SK06	2.8	2.6	60	中世Ⅰa~Ⅰc期	A2	
93A	SK10	2.4	2.1	87	中世Ⅱa期	A2	
93A	SK53	3.6	3.0	98	中世Ⅱb期	A2	
93C	SK06	4.4	3.6	101	中世Ⅱ期	A2	
93F	SK20	3.6	3.0	65	古代Ⅳa期?	A2	
93G	SE05	2.4	2.1	—	中世Ⅰc期	A2	
94A	SE01	—	—	—	—	A2	
94H	SE04	2.4	1.9	60	中世Ⅱ期	A2	
94H	SE06	1.0	0.9	—	—	A2	
94H	SE08	1.2	1.0	(50)	中世Ⅱ期	A2	
94I	SE03	—	—	94	中世Ⅰc~Ⅱa期	A2	
94I	SE04	—	—	170	中世Ⅱ期	A2	
94I	SE05	—	—	—	—	A2	
93A	SK04	2.4	2.3	96	中世Ⅱa期	A3	
94H	SE03	5.1	4.0	130	中世Ⅱ期	B2	
94H	SE07	—	2.1	95	中世Ⅱb期	Ba2	
94I	SE02	—	4.8	57	中世Ⅱ期	Ba2	
94H	SE01	5.0	4.6	246	中世Ⅱb期	Bb2	
94H	SE05	2.3	2.0	240	中世Ⅱa期	Bb2	
93G	SE04	3.3	3.1	—	中世Ⅰc期	Bc2	
93C	SE03	1.9	1.6	200	—	C	

### 畝状遺構

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93A	SD47	9.9	0.2	6	中世Ⅱa・b期	
93A	SD48	3.8	0.3	5	中世	
93A	SD49	13	0.3	9	中世Ⅱb期	
93A	SD51	—	0.5	6	中世Ⅰb・c期	
93A	SD52	—	0.4	7	中世Ⅰb・c期	
93A	SD58	16.3	0.6	12	中世	

居住域 I

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93A	SK01	8.8	7.2	109	中世IIa~IIb期	
93A	SK01	1.5	1.3	56	中世III期	井戸
93A	SK06	2.9	2.6	60	中世Ia~Ic期	井戸
93A	SK10	2.4	2.1	87	中世IIa期	井戸
93A	SK53	3.6	3.0	98	中世IIb期	井戸 A 2
93A	SK04	2.5	2.4	96	中世IIa期	井戸 A 3
93A	SD02	-	0.5	9	中世	
93A	SD03	-	0.9	11	中世III期	
93A	SD04	-	1.8	9	中世IIIc期	
93A	SD05	-	0.8	14	中世I期?	
93A	SD06	-	2.2	19	中世Ic期	
93A	SD13	3.8	0.4	8	中世	
93A	SD14	-	1.9	20	中世I期	
93A	SD15	13.7	0.4	11	中世IIa期	
93A	SD17	-	0.4	16	中世I期	道2、道3
93A	SD18	20.6	0.6	13	中世Ia期	道2
93A	SD19	-	0.4	9	中世Ia期	道3
93A	SD20	16.0	0.2	7	中世IIa期	道3
93A	SD21	1.3	0.3	6	中世	
93A	SD23	3.9	0.4	9	中世Ib~Ic期	
93A	SD25	3.3	0.6	6	中世III期	
93A	SD28	5.9	0.9	15	中世IIa期	
93A	SD29	-	0.6	9	中世Ib期	道3
93A	SD31	7.7	0.8	12	中世	
93A	SD33	13.5	0.8	12	中世Ib~Ic期	
93A	SD34	-	0.6	7	中世IIa期	
93A	SD35	-	0.5	7	中世	
93A	SD37	6.2	0.8	9	中世Ic期	
93A	SD38	-	0.7	13	中世	道2、道3
93A	SD39	8.4	0.5	6	中世IIIa期	道3
93A	SD40	8.6	0.6	8	中世IIa期	
93A	SD41	-	0.6	11	中世Ib~Ic期	
93A	SD43	17.6	0.4	6	中世Ib~Ic期	道2
93A	SD44	13.6	0.3	7	中世Ia期	道2
93A	SD46	9.0	0.3	7	中世IIIa期	中世 畝
93A	SD47	9.9	0.3	6	中世IIa、b期	中世 畝
93A	SD48	3.8	0.3	5	中世	中世 畝
93A	SD49	13.0	0.4	9	中世IIb期	中世 畝
93A	SD50	-	0.3	9	中世IIa期	
93A	SD51	-	0.6	6	中世Ib、c期	中世 畝
93A	SD52	-	0.5	7	中世Ib、c期	中世 畝
93A	SD53	6.5	0.4	4	中世IIIa期	
93A	SD55	5.7	0.4	8	中世Ic期	
93A	SD56	4.9	0.4	10	中世	
93A	SD57	-	0.3	8	中世	
93A	SD58	16.3	0.6	12	中世	中世 畝
93A	SD60	-	0.4	8	中世Ic期	
93A	SK02	1.7	1.7	75	中世IIa~IIb期	
93A	SK03	1.2	1.0	64	中世IIa期	
93A	SK08	-	2.1	28	中世IIa~IIb期	
93A	SK09	1.5	0.9	10	中世	
93A	SK11	2.0	1.8	54	中世Ib期	
93A	SK13	8.9	0.9	24	中世IIb期	
93A	SK14	2.7	1.1	69	中世IIIa~Ic期	
93A	SK15	1.3	1.3	42	中世IIb期?	
93A	SK16	0.9	0.8	9	中世IIb期?	
93A	SK17	3.2	2.2	33	中世Ib~Ic期	
93A	SK20	2.1	1.0	26	中世IIIb期?	
93A	SK21	1.5	0.6	10	中世	
93A	SK22	1.7	1.0	9	中世IIa期	
93A	SK23	1.6	0.8	5	中世	
93A	SK24	1.1	0.7	8	中世III期?	
93A	SK25	2.1	2.0	18	中世IIa期	
93A	SK26	2.2	1.4	42	中世Ic期	
93A	SK27	1.6	0.8	8	中世	
93A	SK28	1.2	1.3	50	中世	
93A	SK30	0.9	0.6	8	中世	
93A	SK31	1.5	1.4	10	中世II期	
93A	SK37	-	1.5	10	中世Ic期	
93A	SK38	0.8	0.8	18	中世	
93A	SK39	1.5	1.3	16	中世	
93A	SK41	2.1	0.5	8	中世IIa期	
93A	SK42	0.9	0.8	34	中世I期	
93A	SK44	0.7	0.6	6	中世	
93A	SK45	0.8	0.7	9	中世Ic期	
93A	SK48	1.8	1.0	10	中世	
93A	SK49	1.9	1.7	42	中世I~IIa期	
93A	SK50	0.8	0.8	19	中世	
93A	SK52	2.7	1.7	72	中世IIb期	
93A	SB03	3.2	2.5	9	中世II期	
93A	SB04	3.2	2.6	16	中世II期	
93A	SB05	-	-	11	中世?	
93A	P08	0.8	0.4	6	中世Ic期?	
93A	P09	0.5	0.4	19	中世II期	
93A	P10	0.4	0.3	16	中世	
93A	P11	0.5	0.3	18	中世	
93A	P12	0.7	0.6	18	中世	
93A	P14	0.9	0.6	10	中世	
93A	P15	0.8	0.6	16	中世Ic期	
93A	P16	0.5	0.4	8	中世II期	
93A	P17	0.6	0.6	8	中世II期	
93A	P20	0.8	0.5	10	中世IIa期	

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
93A	P21	0.4	0.3	13	中世	
93A	P22	0.7	0.3	12	中世Ia期	
93A	P25	1.1	0.5	7	中世II期	
93A	P27	1.0	0.6	8	中世	
93A	P28	1.1	0.8	51	中世	
93A	P35	1.1	0.6	20	中世	
93A	P39	0.8	0.6	8	中世Ic期	
93A	P40	0.8	0.7	50	中世Ic期	
93A	P41	0.7	0.5	10	中世IIb期	
93A	P45	0.8	0.5	7	中世Ic期	
93A	P46	0.9	0.6	4	中世II期	
93A	P47	0.5	0.4	13	中世II期	
93A	P48	1.1	1.0	30	中世II期	
93A	P49	0.8	0.7	9	中世II期	

居住域 II

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
94H	SB01	5.0	4.6	246	中世IIb期	B b 2
94H	SB02	-	-	90	中世II期	A 1
94H	SB03	5.1	4.0	130	中世II期	B 2
94H	SB05	2.3	2.0	240	中世II期	B b 2
94H	SK75	0.4	0.3	13		SB01柱穴
94H	SK80	0.4	0.4	9	中世	SB01柱穴 礎板
94H	SK86	0.2	0.2	8		SB01柱穴
94H	SK87	0.6	0.5	11		SB01柱穴
94H	SK90	0.7	0.6	17		SB01柱穴
94H	SK91	0.5	0.3	15	中世IV期	SB01柱穴 礎板
94H	SK92	-	0.2	11		SB01柱穴
94H	SK93	0.4	0.3	6		SB01柱穴
94H	SK94	0.5	0.3	7	中世IIb期	SB01柱穴
94H	SK133	0.6	0.5	40	中世II期	SB02柱穴 礎板
94H	SK155	0.6	0.6	40	中世II期	SB02柱穴 礎板
94H	SK113	-	0.8	8		SB03柱穴
94H	SK116	1.0	0.5	40	中世II期	SB03柱穴
94H	SK124	0.5	0.3	10	中世	SB03柱穴
94H	SK126	0.4	0.3	24		SB03柱穴
94H	SK127	0.5	0.5	10		SB03柱穴
94H	SK129	0.6	0.4	20		SB03柱穴
94H	SK137	0.6	0.4	60		SB03柱穴
94H	SK139	0.8	0.5	40	中世II期	SB03柱穴
94H	SK141	0.5	-	23	中世II期	SB03柱穴
94H	SK161	1.0	0.4	12	中世	SB03柱穴
94H	SD07	-	2.6	22	中世Ib~Ic期	
94H	SD10	-	-	-	中世IIa期	
94H	SD23	13	0.7	8	中世IIb~Ic期	
94H	SD27	-	0.8	30	中世IIa期	
94H	SD28	-	0.6	17	中世IIa期	
94H	SD29	-	-	15	中世IIb期	
94H	SD31	-	1.2	16	中世IIa期	
94H	SD33	-	-	-	中世II期~III期	
94H	SD34	-	-	-	中世II期	
94H	SD35	-	-	-	中世II期	
94H	SK01	-	0.5	11	中世II期	
94H	SK47	0.4	0.3	9	中世II期	
94H	SK52	1	0.8	8	中世II期	
94H	SK54	0.5	0.3	12	中世II期	
94H	SK60	1.1	0.5	14	中世II期	
94H	SK61	-	0.2	50	中世II期	
94H	SK86	0.8	0.5	11	中世II期	
94H	SK87	1	0.8	5	中世II期	
94H	SK89	-	0.3	16		
94H	SK90	0.9	0.5	18	中世IIa期	
94H	SK88	0.3	0.2	9	中世II期	
94H	SK96	0.4	0.4	18	中世II期	
94H	SK100	-	-	10	中世II期	
94H	SK102	0.4	0.3	8	中世II期	
94H	SK105	0.5	0.2	18	中世II期	
94H	SK109	0.3	0.3	15	中世II期	
94H	SK128	0.6	0.5	15	中世II期	
94H	SK145	1.8	1.8	18	中世II期	
94H	SK146	3.2	1.6	30	中世II期	
94H	SK160	-	0.3	28	中世II期	
94H	SK163	0.5	0.4	17	中世IIa期	
94H	SK175	2.2	1.8	17	中世Ic期	

居住域 III

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	時期	備考
94H	SD02	-	2.9	-	中世IIIc~IVa期	
94H	SD08	-	-	22	中世IVa期	
94H	SD09	-	1.6	30	中世IV期	
94H	SD11	-	1.6	40	中世IVb期	
94H	SD13	-	1.7	48	中世III期	
94H	SD14	-	1	30	中世IVb期	
94H	SD15	-	0.8	28	中世IV期	
94H	SD16	-	0.5	12	中世IV期	
94H	SD18	-	3.2	110	中世IVb期	
94H	SD24	-	1	30	中世IV期	
94H	SD25	-	1.4	40	中世IVa期	
94H	SD30	-	2.6	56	中世IIIc~IVa期	
94H	SD32	-	2.2	-	中世IVb期	
94H	SK42	0.4	0.4	14	中世IV期	
94H	SK45	0.2	0.2	15	中世IV期	
94H	SK55	0.2	0.2</			

方形土坑

エリアA

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	軸方向	時期
93G	SK17	SK40	SK63	SK86	SK109	SK132
93G	SK18	SK41	SK64	SK87	SK110	SK133
93G	SK19	SK42	SK65	SK88	SK111	SK134
93G	SK20	SK43	SK66	SK89	SK112	SK135
94C	SK21	SK44	SK67	SK90	SK113	SK136
94C	SK22	SK45	SK68	SK91	SK114	SK137
94C	SK23	SK46	SK69	SK92	SK115	SK138
94C	SK24	SK47	SK70	SK93	SK116	SK139
94C	SK25	SK48	SK71	SK94	SK117	SK140
94C	SK26	SK49	SK72	SK95	SK118	SK141
94C	SK27	SK50	SK73	SK96	SK119	SK142
94C	SK28	SK51	SK74	SK97	SK120	SK143
94C	SK29	SK52	SK75	SK98	SK121	SK144
94C	SK30	SK53	SK76	SK99	SK122	SK145
94D	SK31	SK54	SK77	SK100	SK123	SK146
94D	SK32	SK55	SK78	SK101	SK124	SK147
94D	SK33	SK56	SK79	SK102	SK125	SK148
94D	SK34	SK57	SK80	SK103	SK126	SK149
94D	SK35	SK58	SK81	SK104	SK127	SK150
94D	SK36	SK59	SK82	SK105	SK128	SK151
94D	SK37	SK60	SK83	SK106	SK129	SK152
94D	SK38	SK61	SK84	SK107	SK130	SK153
94D	SK39	SK62	SK85	SK108	SK131	SK154

エリアC

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	軸方向	時期
94B	SD16	3.5	1.0	20	W33°	中世
94B	SK10	2.3	1.1	23	E51°	中世
94B	SK12	—	1.0	20	W41°	中世
94B	SK24	3.2	1.6	28	W30°	中世
94B	SK22	2.2	1.2	15	W38°	中世
94E	SK02	2.1	1.5	28	W42°	中世Ⅱ期
94E	SK04	—	1.3	30	W38°	中世Ⅱ期
94E	SK07	3.2	1.0	15	W40°	中世
94E	SK11	1.3	0.9	15	W49°	中世
94E	SK13	1.3	0.8	13	W42°	中世Ⅱ期
94E	SK14	2.2	0.7	10	W43°	中世
94E	SK15	2.0	1.0	20	W40°	中世
94E	SK18	2.0	0.9	16	E43°	中世
94E	SK19	2.2	1.0	9	W29°	中世
94E	SK20	1.9	1.3	15	W33°	中世Ⅱ期
94E	SK21	4.2	1.1	18	W39°	中世Ⅱ期
94E	SK23	2.4	0.9	12	W43°	中世
94E	SK24	1.4	0.7	7	W41°	中世
94E	SK27	2.6	0.9	40	W47°	中世Ⅱ期
94E	SK28	1.4	0.8	10	W45°	中世
94E	SK30	—	1.2	22	W40°	中世Ⅱ期
94E	SK31	3.1	1.1	18	E48°	中世Ⅱ期
94E	SK32	2.0	1.2	12	E41°	中世
94E	SK33	1.6	1.1	20	W41°	中世Ⅱb期
94E	SK34	2.6	1.2	20	W42°	中世Ⅱb期
94E	SK36	2.3	1.8	5	E56°	中世
94E	SK78	2.7	1.0	20	W33°	中世
94E	SK80	4.0	1.4	8	W31°	中世
94E	SK82	1.8	0.7	16	E50°	中世
94E	SK83	2.5	0.8	8	W36°	中世
94E	SK84	3.4	1.0	18	W35°	中世
94E	SK85	—	0.9	14	E56°	?
94E	SK86	2.9	0.9	12	E50°	中世

島畑状遺構

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
93C	SX02	13.4	10.0	30	
93C	SX03	15.6	7.9	30	
93C	SX04	12.6	8.8	50	
93C	SX05	13.3	8.1	30	
93G	SX01	—	—	25	
93G	SX02	—	9.9	24	
94A	SX01	—	12.5	52	
94A	SX02	—	11.0	55	
94F	SK02	26.0	10.0	14	
93C	SD05	—	0.4	10	島畑の区画溝
93C	SD06	—	0.4	8	島畑の区画溝
93C	SD08	49.7	0.5	12	島畑の区画溝

エリアB

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	軸方向	時期
94C	SK18	5.8	3.1	110	W42°	
93D	SK01	3.0	1.6	43	W24°	中世Ⅲ期
93D	SK02	4.5	2.2	55	W11°	
93D	SK04	2.9	1.3	84	E75°	
93D	SK14	3.0	1.7	103	W42°	中世Ⅱ～Ⅲ期
93D	SK39	1.7	0.9	38	W44°	中世
94G	SK01	2.0	1.3	45	W48°	中世Ⅲ期

エリアD

調査区	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	軸方向	時期
93G	SK01	2.9	0.8	8	W32°	中世Ⅱ期
93G	SK02	—	0.7	7	W36°	
93G	SK03	—	1.0	16	W34°	中世Ⅱ期
93G	SK04	—	0.7	10	E55°	中世Ⅱ期
93G	SK05	1.9	0.8	20	W37°	中世Ⅱ期
93G	SK06	2.7	1.2	28	W29°	中世Ⅱa期
93G	SK11	1.6	1.0	7	W47°	中世Ⅱ期
93G	SK12	1.7	1.1	10	W27°	
93G	SK13	2.7	0.8	6	E03°	
93G	SK14	1.2	0.8	7	E52°	
93G	SK15	1.3	0.9	18	E20°	
94I	SK07	1.9	0.9	8	E53°	
94I	SK08	2.5	1.0	8	E49°	
94I	SK09	2.6	0.8	7	W32°	中世
94I	SK10	2.4	1.8	14	E48°	中世Ⅱ期
94I	SK14	2.3	1.3	19	W31°	中世Ⅱb期
94I	SK15	3.4	1.1	23	W25°	中世Ⅱb期
94I	SK20	1.9	0.8	7	E57°	中世Ⅱ期
94I	SK21	2.0	0.7	5	W27°	
94I	SK23	3.4	1.0	15	W27°	中世Ⅱ期
94I	SK24	2.2	0.8	7	W33°	
94I	SK26	—	0.9	4	E38°	中世Ⅱa期
94I	SK27	1.2	1.0	12	W31°	中世Ⅱ期
94I	SK32	3.8	1.4	22	W36°	中世Ⅱa期
94I	SK42	2.6	1.3	18	W31°	中世Ⅱ期
94I	SK44	2.2	1.0	13	W32°	
94I	SK46	2.3	1.4	18	W34°	中世Ⅱ期
94I	SK47	—	1.5	19	W37°	中世
94I	SK48	4.1	1.3	15	W32°	中世Ⅱa期
94I	SK49	2.5	1.7	24	E47°	中世Ⅱ期
94I	SK50	2.7	2.2	10	W40°	中世
94I	SK61	2.0	1.2	5	W36°	
94I	SK62	—	1.0	8	W47°	
94I	SK64	—	1.7	11	E69°	

付表4 遺構一覧表(4)

古代以前

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
37	1	94H	検出	土師器	S字甕	(3.6)	18.0		古墳時代	B類古		E-1
37	2	94H	検出	土師器	S字甕	(4.3)	(16.8)		古墳時代	C類		E-2
37	3	94H	検出	土師器	S字甕	(2.7)	12.0		古墳時代	C類		E-3
37	4	94H	検出	土師器	S字甕	(3.4)	15.8		古墳時代	C類		E-4
37	5	94H	検出	土師器	S字甕	(4.8)	17.8		古墳時代	C~D類		E-5
37	6	94H	検出	土師器	S字甕	(5.0)	14.0		古墳時代	D類		E-6
37	7	94H	検出	土師器	S字甕	(9.6)	14.0		古墳時代	D類		E-7
37	8	94H	検出	土師器	S字甕	(5.8)		9.6	古墳時代	台部		E-8
37	9	94H	検出	土師器	S字甕	(18.0)		8.2	古墳時代	台部		E-9

古代I期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
39	10	93A2	SB08	須恵器	杯A	(3.5)	13.0		古代I期	尾北窯産?		E-10
39	11	93A2	SB08	須恵器	蓋A	2.7	15.0		古代I期	美濃須衛窯産	36	E-11
39	12	93A2	SB08	土師器	甕A	(6.7)	13.9		古代I期			E-12
39	13	93A2	SB08	土師器	甕B	(3.0)	21.0		古代I期			E-13
39	14	93A2	SB08	土師器	甕B	(2.9)	20.2		古代I期			E-14
39	15	93A2	SB08	土師器	甕B?	16.4		8.0	古代I期			E-15
39	16	93A2	SB09	須恵器	蓋B	(2.5)	17.3		古代I期	美濃須衛窯産		E-16
39	17	93A2	SB09	須恵器	蓋A	(2.1)	16.2		古代I期		35	E-17
39	18	93A2	SB09	須恵器	蓋B	(2.3)	14.6		古代I期			E-18
39	19	93A2	SB09	須恵器	杯B	(3.8)	16.8		古代I期			E-19
39	20	93A2	SB09	土師器	甕B	(2.9)	20.1		古代I期			E-20
39	21	93A2	SB09	土師器	甕B	(10.4)			古代I期			E-21
39	22	93A2	SB09	土師器	甕B	(26.5)	18.0		古代I期			E-22
39	23	93A2	SX02	須恵器	蓋A	(1.5)	12.8		古代I期	美濃須衛窯産	39	E-23
39	24	93A2	SX02	須恵器	鉢B	10.5	12.0		古代I期		37	E-24
39	25	93A2	SD01	須恵器	鉢B	(5.5)	9.0		古代I期			E-25

古代II期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
40	26	93A	SB01	須恵器	蓋B	(1.4)	16.8		古代II期	美濃須衛窯産		E-26
40	27	93A	SB01	須恵器	蓋B	(2.2)	14.9		古代II期			E-27
40	28	93A	SB01	須恵器	蓋B	(2.3)	15.9		古代II期	美濃須衛窯産		E-28
40	29	93A	SB01	土師器	甕D	(3.0)	22.8		古代II期			E-29
40	30	93A	SB01	土師器	甕B	(14.9)	23.0		古代II期			E-30
40	31	93A	SB01	土師器	甕C	(3.8)	24.0		古代II期			E-31
40	32	93A	SB01	土師器	甕D	(4.45)	23.6		古代II期			E-32
40	33	93A	SB01	土師器	甕B	(5.7)	21.2		古代II期			E-33
40	34	93A	SD06	須恵器	碗A	2.8	11.8	6.0	古代II期	美濃須衛窯産		E-34
40	35	93A	SK52	須恵器	杯A	4.5	10.8	3.4	古代II期	猿投窯産		E-35
40	36	93A	SD07	土師器	甕B	(3.0)	17.8		古代II期			E-36
40	37	93F	SK35	須恵器	杯B	(2.6)		9.7	古代II期			E-37
40	38	93F	SK35	須恵器	杯A	3.2	11.6	6.0	古代II期			E-38
40	39	93F	SK35	須恵器	杯A	2.9	11.8	5.8	古代II期	へら記号		E-39
40	40	93F	SK35	須恵器	杯A	(4.0)	16.0		古代II期			E-40
40	41	93F	SK35	土師器	甕D	(3.2)	14.6		古代II期			E-41
40	42	94C	SB06	須恵器	杯B	3.8	15.0	11.0	古代II期		38	E-42
40	43	94C	SB06	土師器	甕D	(17.8)	20.5		古代II期		42	E-43
40	44	94C	SB07	須恵器	杯B	4.8	18.4	13.8	古代II期	美濃須衛窯産		E-44
40	45	94C	SB07	須恵器	杯B	4.4	20.0	14.8	古代II期	へら記号		E-45
40	46	94C	SB07	土師器	甕A	(6.9)	13.0		古代II期			E-46
40	47	94C	SB07	土師器	甕B	(12.5)	13.2		古代II期			E-47
40	48	94C	SB07	土師器	甕B	(6.2)	15.0		古代II期			E-48
40	49	94C	SB07	土師器	甕D	(7.0)	16.0		古代II期			E-49

古代III期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
41	50	94I	SB01	須恵器	蓋B	3.5	13.6		古代IIIa期	美濃須衛窯産	45	E-50
41	51	94I	SB01	須恵器	蓋B	3.8	13.4		古代IIIa期			E-51
41	52	94I	SB01	須恵器	蓋B	3.6	14.4		古代IIIa期		46	E-52
41	53	94I	SB01	須恵器	碗A	4.2	12.2	5.6	古代IIIa期		48	E-53
41	54	94I	SB01	須恵器	碗A	3.9	12.6	6.3	古代IIIa期		47	E-54
41	55	94I	SB01	須恵器	杯A	3.4	12.8	7.0	古代IIIa期			E-55
41	56	94I	SB01	須恵器	蓋G		7.0	4.8	古代IIIa期	湖西窯産	52	E-56
41	57	94I	SB01	土師器	甕A	(2.4)	15.5		古代IIIa期			E-57
41	58	94I	SB01	土師器	甕D	(2.0)	25.5		古代IIIa期			E-58
41	59	94I	SB01	土師器	甕D	(7.1)		6.2	古代IIIa期			E-59
41	60	94I	SB01	須恵器	長頸瓶		9.0	7.5	古代IIIa期	猿投窯産	51	E-60
41	61	94I	SB01	須恵器	長頸瓶	(11.7)			古代IIIa期			E-61
41	62	94I	SB01	須恵器	長頸瓶	(15.4)			古代IIIa期			E-62
41	63	94I	SB01	須恵器	長頸瓶	(2.8)		8.9	古代IIIa期			E-63
41	64	94I	SB01	須恵器	長頸瓶	(4.8)		8.5	古代IIIa期			E-64
41	65	94I	SB01	須恵器	瓶	(7.0)		22.8	古代IIIa期			E-65

付表5 遺物一覧表(1)

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
41	66	94I	SB03	須恵器	碗A	3.2	12.2	5.0	古代Ⅲa期			E-66
41	67	94I	SB03	須恵器	碗A	3.9	12.6	4.4	古代Ⅲa期			E-67
41	68	94I	SB03	土師器	甕D	(7.1)	20.3		古代Ⅲa期			E-68
42	69	93A	SB06	須恵器	碗A	4.0	13.4	6.4	古代Ⅲa期		53	E-69
42	70	93A	SB06	須恵器	碗A	4.0	12.8	4.1	古代Ⅲa期		54	E-70
42	71	93A	SB06	須恵器	杯A	(3.9)	14.3		古代Ⅲa期			E-71
42	72	93A	SB06	須恵器	蓋C	(1.5)			古代Ⅲa期			E-72
42	73	93A	SB06	須恵器	杯B	(1.2)		9.1	古代Ⅲa期	異議あり		E-73
42	74	93A	SB06	土師器	甕D	(5.9)	19.5		古代Ⅲa期			E-74
42	75	93A	SB06	土師器	甕D	(7.2)	17.6		古代Ⅲa期			E-75
42	76	93A	SB06	土師器	甕D	(4.3)	17.6		古代Ⅲa期			E-76
42	77	93A	SB06	土師器	甕D	(5.1)	19.4		古代Ⅲa期			E-77
42	78	93A	SB06	土師器	甕D	(6.5)	23.8		古代Ⅲa期			E-78
42	79	93A	SB06	土師器	甕D	(7.8)	18.6		古代Ⅲa期			E-79
42	80	93A	SB06	土師器	甕D	(8.1)	22.0		古代Ⅲa期			E-80
42	81	93A	SB06	土師器	甕D	(9.6)		5.0	古代Ⅲa期			E-81
42	82	93C	SK09	須恵器	杯B	4.0	11.6	8.0	古代Ⅲa期			E-82
42	83	93C	SK09	土師器	甕D	(6.0)	20.6		古代Ⅲa期			E-83
42	84	93C	SK09	土師器	甕D	(4.9)	19.6		古代Ⅲa期			E-84
42	85	94I	SK60	須恵器	蓋B	(1.9)	18.5		古代Ⅲa期	猿投窯産		E-85
42	86	94I	SK60	須恵器	蓋B	(1.4)	19.3		古代Ⅲa期	猿投窯産		E-86
42	87	94I	SK60	須恵器	杯B	3.9	13.2	9.3	古代Ⅲa期			E-87
42	88	94I	SK60	須恵器	長頸瓶	(3.9)		9.6	古代Ⅲa期			E-88
42	89	94I	SK60	須恵器	双耳瓶				古代Ⅲa期	猿投窯産		E-89
42	90	94I	SK60	土師器	甕D	(4.1)	21.4		古代Ⅲa期			E-90
42	91	94I	SK60	土師器	甕D	(6.7)			古代Ⅲa期			E-91
42	92	94I	SK60	土師器	甕D	(5.4)		5.0	古代Ⅲa期			E-92
43	93	94I	SB02	須恵器	蓋B	(2.4)	14.0		古代Ⅲa期			E-93
43	94	94I	SB02	須恵器	蓋B	3.5	14.0		古代Ⅲa期			E-94
43	95	94I	SB02	須恵器	蓋B	(3.3)	16.0		古代Ⅲa期	猿投窯産		E-95
43	96	94I	SB02	須恵器	蓋B	(2.0)	13.0		古代Ⅲa期	猿投窯産		E-96
43	97	94I	SB02	須恵器	蓋B	(1.9)	13.5		古代Ⅲa期			E-97
43	98	94I	SB02	須恵器	蓋B	(2.0)	13.0		古代Ⅲa期	猿投窯産		E-98
43	99	94I	SB02	須恵器	蓋B	(1.3)	13.0		古代Ⅲa期			E-99
43	100	94I	SB02	須恵器	蓋B	(1.1)	13.8		古代Ⅲa期			E-100
43	101	94I	SB02	須恵器	蓋B	(2.7)	19.8		古代Ⅲa期			E-101
43	102	94I	SB02	須恵器	蓋B	(2.0)	13.8		古代Ⅲa期			E-102
43	103	94I	SB02	須恵器	杯A	3.7	12.0	5.0	古代Ⅲa期			E-103
43	104	94I	SB02	須恵器	杯B	3.9	12.4	6.4	古代Ⅲa期		49	E-104
43	105	94I	SB02	須恵器	杯A	3.8	10.7	5.5	古代Ⅲa期			E-105
43	106	94I	SB02	須恵器	杯A	3.7	11.6	6.0	古代Ⅲa期			E-106
43	107	94I	SB02	土師器	杯	3.4	12.2	6.6	古代Ⅲa期			E-107
43	108	94I	SB02	須恵器	杯B	4.8	16.0	10.2	古代Ⅲa期		50	E-108
43	109	94I	SB02	須恵器	碗D	5.9	16.4	7.6	古代Ⅲa期			E-109
43	110	94I	SB02	土師器	甕D		20.0	4.2	古代Ⅲa期			E-110
43	111	94I	SB02	土師器	甕A	(4.2)	12.8		古代Ⅲa期			E-111
43	112	94I	SB02	土師器	甕D	(5.4)	15.8		古代Ⅲa期			E-112
43	113	94I	SB02	土師器	甕D	(3.2)	19.8		古代Ⅲa期			E-113
43	114	94I	SB02	土師器	甕D	(3.5)	23.6		古代Ⅲa期			E-114
43	115	94I	SB02	土師器	甕D	(4.3)		6.6	古代Ⅲa期			E-115
44	116	93A	SB07	灰軸陶器	碗	4.2	13.0	6.2	古代Ⅲb期	猿投窯産	56	E-116
44	117	93A	SB07	灰軸陶器	碗	(2.0)		7.4	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-117
44	118	93A	SB07	灰軸陶器	碗	(4.7)	16.0		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-118
44	119	93A	SB07	灰軸陶器	段皿	1.9	17.6	7.6	古代Ⅲb期	猿投窯産	55	E-119
44	120	93A	SB07	土師器	甕D	(7.0)	17.5		古代Ⅲb期			E-120
44	121	93A	SB07	土師器	甕D	(4.8)		6.0	古代Ⅲb期			E-121
44	122	94I	SB06	須恵器	杯A	4.2	13.0	6.5	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-122
44	123	94I	SB06	須恵器	杯A	3.3	12.6	6.4	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-123
44	124	94I	SB06	土師器	高杯	(3.8)	16.3		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-124
44	125	94I	SB06	須恵器	杯B	(0.9)		8.6	古代Ⅲb期	猿投窯産、へつ記号		E-125
44	126	94I	SB06	須恵器	蓋B	(2.0)	18.0		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-126
44	127	94I	SB06	須恵器	長頸瓶	(3.0)	10.8		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-127
44	128	94I	SB06	土師器	甕D	(2.2)	21.6		古代Ⅲb期			E-128
44	129	94I	SB06	土師器	甕D	(2.5)	23.0		古代Ⅲb期			E-129
44	130	94I	SB06	土師器	甕D	(8.4)			古代Ⅲb期			E-130
44	131	94I	SB07	須恵器	蓋B	(1.9)			古代Ⅲb期			E-131
44	132	94I	SB07	須恵器	杯A	3.1	9.6	5.8	古代Ⅲb期			E-132
44	133	94I	SB07	須恵器	皿B	(2.5)	16.2		古代Ⅲb期			E-133
44	134	94I	SB07	須恵器	碗C	3.2	12.4		古代Ⅲb期			E-134
44	135	94I	SB07	須恵器	杯B	(1.9)		9.0	古代Ⅲb期			E-135
44	136	94I	SB07	土師器	甕D	(5.8)	21.2		古代Ⅲb期			E-136
44	137	94I	SD29	灰軸陶器	碗	4.3	13.8	7.6	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-137
44	138	94I	SK65	灰軸陶器	折縁皿	2.4	15.0	7.2	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-138
44	139	93F	SD06	灰軸陶器	瓶	(8.1)		7.6	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-139
45	140	94I	SB04	須恵器	蓋B	(1.7)	14.6		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-140
45	141	94I	SB04	須恵器	蓋B	(2.1)	14.6		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-141
45	142	94I	SB04	須恵器	蓋C	2.5	13.8		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-142
45	143	94I	SB04	灰軸陶器	三足盤	2.3	18.8		古代Ⅲb期	猿投窯産		E-143
45	144	94I	SB04	灰軸陶器	皿	2.1	14.4	7.4	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-144
45	145	94I	SB04	須恵器	碗D	4.0	13.6	6.0	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-145
45	146	94I	SB04	須恵器	碗D	4.8	13.6	6.6	古代Ⅲb期	猿投窯産		E-146
45	147	94I	SB04	須恵器	碗A	4.2	12.9	6.0	古代Ⅲb期	墨書「公」		E-147
45	148	94I	SB04	土師器	甕D	(3.4)	16.8		古代Ⅲb期			E-148

付表6 遺物一覧表(2)

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
45	149	94I	SB04	土師器	甕D	(3.4)	18.8		古代Ⅲb期			E-149
45	150	94I	SB04	土師器	甕D	(9.2)	22.8		古代Ⅲb期			E-150
45	151	94I	SB04	土師器	甕D	(11.1)			古代Ⅲb期			E-151
45	152	94I	SB04	土師器	甕D			6.8	古代Ⅲb期			E-152
45	153	94I	SB05	須恵器	椀A	4.3	12.5	5.7	古代Ⅲb期?			E-153
45	154	94I	SB05	須恵器	椀A	4.2	13.2	6.0	古代Ⅲb期?	墨書「公」		E-154
45	155	94I	SB05	土師器	甕D	(12.8)	17.6		古代Ⅲb期?			E-155
46	156	94B	SK26	土師器	甕D	(5.9)	14.3		古代Ⅲc期			E-156
46	157	94B	SK26	土師器	甕D	(2.9)	14.0		古代Ⅲc期			E-157
46	158	94B	SD15	土師器	甕D	(4.0)	14.0		古代Ⅲc期			E-158
46	159	94H	SK175	灰軸陶器	皿	2.7	14.1	6.9	古代Ⅲc期	猿投窯産		E-159
46	160	94H	SK141	灰軸陶器	椀	5.2	16.1	7.5	古代Ⅲc期	猿投窯産		E-160
46	161	93F	SD08下層	須恵器	蓋B	2.5	13.3		古代Ⅱ～Ⅲ期	美濃須衛窯産		E-161
46	162	93F	SD08	須恵器	蓋B	2.8	15.0		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-162
46	163	93F	SD08	須恵器	蓋B?	(2.0)	19.7		古代Ⅱ～Ⅲ期	猿投窯産		E-163
46	164	93F	SD08下層	須恵器	蓋B	(1.8)	17.5		古代Ⅱ～Ⅲ期	猿投窯産		E-164
46	165	93F	SD08下層	須恵器	蓋B	(1.9)	17.1		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-165
46	166	93F	SD08	灰軸陶器	皿	2.8	14.4	6.8	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-166
46	167	93F	SD08	須恵器	杯D	6.2	14.2	10.0	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-167
46	168	93F	SD08下層	須恵器	椀A	3.8	14.4	7.8	古代Ⅱ～Ⅲ期	美濃須衛窯産		E-168
46	169	93F	SD08	須恵器	杯A	3.1	12.8	6.4	古代Ⅱ～Ⅲ期	へラ記号		E-169
46	170	93F	SD08	灰軸陶器	椀	(0.9)	8.2	8.2	古代Ⅱ～Ⅲ期	東濃窯産・墨書「金」	107	E-170
46	171	93F	SD08下層	灰軸陶器	椀	4.8	16.6	8.0	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-171
46	172	93F	SD08	須恵器	蓋C	(11.5)	9.4		古代Ⅱ～Ⅲ期	美濃須衛窯産		E-172
46	173	93F	SD08下層	須恵器	長頸瓶	(5.1)	9.9		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-173
46	174	93F	SD08下層	須恵器	長頸瓶	(5.9)		9.4	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-174
46	175	93F	SD08下層	須恵器	長頸瓶	(5.5)		9.8	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-175
46	176	93F	SD08下層	須恵器	甕	(12.4)	32.6		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-176
46	177	93F	SD08下層	須恵器	甕	(6.6)		20.0	古代Ⅱ～Ⅲ期			E-177
46	178	93F	SD08下層	土師器	甕D	(6.25)	19.4		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-178
46	179	93F	SD08下層	土師器	甕D	(3.6)	19.6		古代Ⅱ～Ⅲ期			E-179

古代Ⅳ期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
47	180	93F	SK37	灰軸陶器	皿	2.9	12.8	6.8	古代Ⅳa期	美濃須衛窯産?		E-180
47	181	93F	SK37	灰軸陶器	皿	2.9	13.6	7.1	古代Ⅳa期			E-181
47	182	93F	SK37	灰軸陶器	椀	4.1	12.6	6.6	古代Ⅳa期	美濃須衛窯産?		E-182
47	183	93F	SK37	灰軸陶器	椀	3.9	11.8	6.4	古代Ⅳa期	美濃須衛窯産?		E-183
47	184	93F	SK37	灰軸陶器	椀	4.9	14.9	7.9	古代Ⅳa期	猿投窯産		E-184
47	185	93F	SK37	灰軸陶器	椀	5.4	14.8	7.8	古代Ⅳa期			E-185
47	186	93F	SK37	土師器	甕E	(13.75)	13.6		古代Ⅳa期			E-186
47	187	93B	SB02	灰軸陶器	小椀	4.4	11.4	5.8	古代Ⅳa期	猿投窯産		E-187
47	188	94F	SK28	灰軸陶器	椀	3.6	12.7	6.5	古代Ⅳa期	猿投窯産		E-188
47	189	94F	SD08	灰軸陶器	長頸瓶	(5.8)		7.3	古代Ⅳa期			E-189
47	190	94F	SD14	灰軸陶器	皿	(2.2)	11.8		古代Ⅳa期			E-190
47	191	94F	SD14	灰軸陶器	椀	(2.3)		6.6	古代Ⅳa期			E-191
47	192	94F	SD08	土師器	鍋Ⅲ	(4.9)	18.8		古代Ⅳa期			E-192
47	193	94F	SD14	土師器	鍋Ⅲ	(5.5)	22.8		古代Ⅳa期			E-193
47	194	94C	SK45	灰軸陶器	椀	(3.7)		8.6	古代Ⅳa期	猿投窯産		E-194
47	195	94F	SB03	灰軸陶器	皿	2.1	11.9	5.8	古代Ⅲa～Ⅳb期	尾北窯産		E-195
47	196	94F	SB03	灰軸陶器	椀	6.8	18.2	8.7	古代Ⅲa～Ⅳb期	尾北窯産		E-196
47	197	94F	SB03	灰軸陶器	椀	(4.3)	14.7		古代Ⅲa～Ⅳb期			E-197
47	198	94F	SB03	灰軸陶器	椀	(2.1)		7.7	古代Ⅲa～Ⅳb期			E-198
47	199	94F	SB03	灰軸陶器	椀	(2.0)		6.0	古代Ⅲa～Ⅳb期	尾北窯産?		E-199
47	200	94F	SB03	灰軸陶器	椀	4.2	12.8	6.8	古代Ⅲa～Ⅳb期	東濃窯産		E-200
47	201	94F	SB03	灰軸陶器	椀	(4.7)	15.2		古代Ⅲa～Ⅳb期	東濃窯産		E-201
47	202	94F	SB03	灰軸陶器	椀	4.5	13.2	6.8	古代Ⅲa～Ⅳb期	東濃窯産		E-202
47	203	94F	SB03	灰軸陶器	椀	(4.1)	12.5		古代Ⅲa～Ⅳb期			E-203
47	204	94F	SB03	土師器	甕D	(3.5)	17.3		古代Ⅲa～Ⅳb期			E-204
47	205	94F	SB03	土師器	甕E	(4.3)	18.7		古代Ⅲa～Ⅳb期			E-205
47	206	94F	SB03	土師器	甕E	(4.3)	14.6		古代Ⅲa～Ⅳb期			E-206
48	207	94F	SB02	灰軸陶器	皿	2.3	12.4	6.6	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-207
48	208	94F	SB02	灰軸陶器	皿	2.2	12.6	6.6	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-208
48	209	94F	SB02	灰軸陶器	皿	2.7	12.8	7.4	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-209
48	210	94F	SB02	灰軸陶器	皿	2.6	12.2	7.0	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産	63	E-210
48	211	94F	SB02	灰軸陶器	皿	2.3	12.3	5.9	古代Ⅳa～Ⅳb期			E-211
48	212	94F	SB02	灰軸陶器	皿	3.1	14.8	7.8	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-212
48	213	94F	SB02	灰軸陶器	皿	3.1	14.6	7.1	古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産		E-213
48	214	94F	SB02	灰軸陶器	椀	4.0	10.6	5.8	古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産	61	E-214
48	215	94F	SB02	灰軸陶器	椀	4.0	14.0	7.6	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-215
48	216	94F	SB02	灰軸陶器	椀	4.5	14.4	7.2	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-216
48	217	94F	SB02	灰軸陶器	椀	4.7	15.3	8.4	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産	59	E-217
48	218	94F	SB02	灰軸陶器	椀	5.1	13.2	6.6	古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産	60	E-218
48	219	94F	SB02	灰軸陶器	椀	4.1	12.8	7.1	古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産	58	E-219
48	220	94F	SB02	灰軸陶器	皿	(2.5)	14.8		古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-220
48	221	94F	SB02	灰軸陶器	椀	(3.3)	13.3		古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産		E-221
48	222	94F	SB02	灰軸陶器	椀	(3.6)	13.8		古代Ⅳa～Ⅳb期			E-222
48	223	94F	SB02	灰軸陶器	椀	(4.1)	15.0		古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産		E-223
48	224	94F	SB02	灰軸陶器	椀	(4.1)	12.2	6.4	古代Ⅳa～Ⅳb期	東濃窯産・へラ記号		E-224
48	225	94F	SB02	灰軸陶器	長頸瓶	(10.0)			古代Ⅳa～Ⅳb期	尾北窯産		E-225
48	226	94F	SB02	土師器	甕E	(4.3)	10.4		古代Ⅳa～Ⅳb期			E-226
48	227	94F	SB02	土師器	甕E	(3.7)	16.0		古代Ⅳa～Ⅳb期			E-227

付表7 遺物一覧表(3)

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
48	228	94F	SB01	灰釉陶器	段皿	3.2	15.1	7.7	古代IVb期	東濃窯産	62	E-228
48	229	94F	SB01	土師器	碗	5.5	17.0	16.4	古代IVb期			E-229
48	230	94F	SB01	灰釉陶器	碗	4.1	12.6	6.8	古代IVb期	東濃窯産		E-230
48	231	94F	SB01	灰釉陶器	碗	4.4	12.9	6.1	古代IVb期	東濃窯産		E-231
48	232	94F	SB01	土師器	壺E	(4.6)	13.8		古代IVb期			E-232
48	233	94F	SB01	土師器	壺E	(11.0)	13.5		古代IVb期			E-233
48	234	94F	SB01	土師器	壺E	(6.1)	15.2		古代IVb期			E-234
48	235	94F	SB01	土師器	壺E	(11.7)			古代IVb期			E-235
48	236	94F	SB01	土師器	壺E	(5.5)	17.0		古代IVb期			E-236
48	237	94F	SB01	土師器	壺E	(10.7)			古代IVb期			E-237
48	238	93B	SB01	土師器	鍋VI	(4.7)	27.0		古代IVb期?			E-238
49	239	93G	SK20	灰釉陶器	碗	(3.5)		8.0	古代IVb期	美濃須衛窯産		E-239
49	240	93F	SK39	灰釉陶器	碗	3.8	12.6	6.4	古代IVb期	美濃須衛窯産		E-240
49	241	93F	SK39	灰釉陶器	碗	5.3	15.2	7.6	古代IVb期	美濃須衛窯産		E-241
49	242	94C	SB01	灰釉陶器	碗	4.8	15.7	7.7	古代IVc期			E-242
49	243	94C	SB01	灰釉陶器	碗	(2.8)		6.2	古代IVc期	東濃窯産		E-243
49	244	94C	SB01	灰釉陶器	碗	(2.4)		7.2	古代IVc期	東濃窯産		E-244
49	245	94C	SB01	灰釉陶器	碗	(2.5)		6.2	古代IVc期			E-245
49	246	94C	SB01	灰釉陶器	碗	(4.2)		8.2	古代IVc期			E-246
49	247	94C	SB04	灰釉陶器	碗	(4.7)	14.5		古代IV期	猿投窯産		E-247
49	248	94C	SB04	灰釉陶器	碗	(3.4)		8.8	古代IV期	東濃窯産		E-248
49	249	94C	SB04	灰釉陶器	碗	(2.3)		6.8	古代IV期			E-249
49	250	94C	SB04	灰釉陶器	碗	(1.9)		6.2	古代IV期	猿投窯産		E-250
49	251	94C	SB04	土師器	壺E	(6.0)	15.1		古代IVc期			E-251
49	252	94C	SB03	灰釉陶器	碗	(4.3)	16.4		古代IV期	東濃窯産		E-252
49	253	94C	SB03	灰釉陶器	碗	(3.3)		7.4	古代IV期	東濃窯産		E-253
49	254	94C	SB03	灰釉陶器	碗	(2.1)		8.2	古代IV期	東濃窯産		E-254
49	255	94C	SB03	土師器	壺E	(8.0)	14.0		古代IV期			E-255
49	256	94C	SB03	土師器	壺E	(4.0)	12.0		古代IV期			E-256
49	257	94C	SB03	土師器	壺E	(3.7)	13.9		古代IV期			E-257
49	258	94F	SD02	灰釉陶器	皿	2.4	13.4	6.3	古代IV期	猿投窯産		E-258
49	259	94F	SD02	灰釉陶器	碗	3.9	12.4	6.8	古代IV期			E-259
49	260	94F	SX01	灰釉陶器	皿	3.1	12.8	6.3	古代IV期			E-260
49	261	94F	SX01	灰釉陶器	碗	4.9	15.4	8.0	古代IV期			E-261
49	262	93F	SD14	灰釉陶器	段皿	2.5	13.9	6.2	古代IV期			E-262
49	263	93F	SK11	灰釉陶器	碗	5.0	15.3	6.8	古代IV期	東濃窯産		E-263

遺構外出土の古代の土器

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
50	264	94H	検出	須恵器	杯H	4.5	11.8		古代I期以前			E-264
50	265	94H	検出	須恵器	杯H	(2.7)			古代I期以前			E-265
50	266	94I	検出	須恵器	高杯	(3.9)		12.0	古代I期以前			E-266
50	267	93A2	検出	須恵器	蓋B	3.1	9.0		古代I期			E-267
50	268	93A2	検出	須恵器	蓋A	2.8	11.2		古代I期	美濃須衛窯産		E-268
50	269	93A	検出	須恵器	杯A	4.3	12.0	6.5	古代I期	へら記号	43	E-269
50	270	93A	検出	土師器	鉢	(7.5)	11.0		古代I期			E-270
50	271	93A	検出	須恵器	杯A	4.2	14.0	5.0	古代I期	美濃須衛窯産	44	E-271
50	272	93A2	検出	須恵器	鉢B	(5.15)	10.8		古代I期			E-272
50	273	93A	検出	須恵器	平瓶	12.2	5.1	5.6	古代I期		40	E-273
50	274	93A2	検出	土師器	壺A	(9.4)	14.8		古代I期			E-274
50	275	93A	検出	須恵器	蓋B	(2.0)	15.4		古代II期			E-275
50	276	93A	検出	須恵器	蓋B	(2.1)	16.6		古代II期	美濃須衛窯産		E-276
50	277	93A	検出	須恵器	蓋				古代II期?			E-277
50	278	94C	検出	土師器	杯	4.6	17.6	8.0	古代II期	畿内産土師器 杯A	41	E-278
50	279	93C	検出	土師器	壺B	(5.4)	22.8		古代II期			E-279
50	280	94H	検出	須恵器	蓋B	(2.1)	13.0		古代IIIa期			E-280
50	281	94H	検出	須恵器	蓋B	(2.1)	14.0		古代IIIa期			E-281
50	282	94I	検出	須恵器	蓋B	(2.2)	12.4		古代IIIa期?			E-282
50	283	94I	検出	須恵器	盤B	(2.3)	17.0		古代IIIa期	猿投窯産		E-283
50	284	94I	検出	須恵器	杯B	(1.5)		10.6	古代IIIa期	美濃須衛窯産		E-284
50	285	94I	検出	須恵器	碗A	3.8	11.8	5.7	古代IIIa期			E-285
50	286	94I	検出	須恵器	杯A	3.4	11.8	7.0	古代IIIa期			E-286
50	287	94I	検出	須恵器	杯B	5.6	15.5	8.8	古代III期			E-287
50	288	94A	検出	須恵器	高盤	(11.0)			古代IIIa期	美濃須衛窯産		E-288
50	289	94A	検出	灰釉陶器	浄瓶	(11.0)			古代IIIa期	猿投窯産		E-289
51	290	93C	検出	土師器	壺D	(44.0)	22.4		古代IIIa期			E-290
51	291	94I	検出	須恵器	瓶	(5.6)	22.2		古代III期	美濃須衛窯産		E-291
51	292	94I	検出	須恵器	瓶	(7.2)		23.7	古代III期			E-292
51	293	94I	検出	須恵器	瓶	(6.9)			古代III期			E-293
51	294	94I	検出	須恵器	平瓶	8.6	3.8	5.2	古代IIIb期	猿投窯産	57	E-294
51	295	94I	検出	灰釉陶器	皿	2.5	15.0	7.0	古代IIIb期			E-295
51	296	94I	検出	黒色土器	皿	2.5	15.4	7.8	古代IIIc期	畿内系II類		E-296
51	297	93C	検出	緑釉陶器	碗				古代IIIa期			E-297
51	298	94A	検出	灰釉陶器	碗	7.4	19.0	8.8	古代IIIa期			E-298
51	299	93C	検出	土師器	高杯	10.2	14.4	8.8	古代			E-299
51	300	93C	検出	灰釉陶器	折縁皿	2.1	14.6	7.8	古代IVa期			E-300
51	301	94I	検出	灰釉陶器	皿	3.2	13.8	6.7	古代IVa期	猿投窯産		E-301
51	302	94F	検出	灰釉陶器	碗	4.6	14.8	8.0	古代IV期			E-302
51	303	94F	検出	灰釉陶器	碗	5.4	17.4	8.9	古代IV期			E-303

中世0期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
53	304	93G	SK17	灰軸系陶器	碗A	(4.2)	15.0		中世0期			E-304
53	305	93G	SK17	灰軸系陶器	碗A	(3.2)		7.2	中世0期			E-305
53	306	93G	SK17	土師器	清郷型鉢	(5.6)	26.0		中世0期	清郷型鉢G		E-306
53	307	93G	SK35	灰軸系陶器	碗A	5.3	16.8	8.0	中世0期			E-307
53	308	93G	SK35	灰軸系陶器	小碗	3.6	9.4	4.3	中世0期			E-308
53	309	94Ca	SK17	灰軸系陶器	碗A	6.0	16.6	7.6	中世0期			E-309
53	310	94Ca	SK17	灰軸系陶器	小碗	3.3	10.0	5.6	中世0期			E-310

中世1期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
53	311	93D	SD05	灰軸系陶器	碗A	5.1	17.8	9.0	中世1a期			E-311
53	312	93D	SD05	土師器	皿B	1.8	8.4	4.0	中世1期			E-312
53	313	94D	SK24	灰軸系陶器	壺	(5.9)	35.0		中世1a期			E-313
53	314	94D	SK13	灰軸系陶器	壺	23.8	13.2	9.2	中世1a期			E-314
53	315	93A	P22	灰軸系陶器	碗A	4.5	15.6	7.2	中世1b期			E-315
53	316	93A	SK37	灰軸系陶器	碗A	5.0	16.6	8.0	中世1b期			E-316
53	317	93A	SK42	灰軸系陶器	碗A	4.6	14.8	7.6	中世1b期			E-317
53	318	94E	SD17	灰軸系陶器	碗A	5.3	16.2	7.6	中世1b期			E-318
53	319	94F	SK17	灰軸系陶器	皿A	2.5	8.0	4.7	中世1b期			E-319

中世1c期~IIa期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
54	320	93A	SD17	灰軸系陶器	碗C	4.9	15.5	8.2	中世1c期			E-320
54	321	93A	SK02	灰軸系陶器	碗A	49.5	16.7	8.2	中世1c期			E-321
54	322	93B	SD13	灰軸系陶器	碗A	5.1	16.0	7.2	中世1c期			E-322
54	323	93B	SD13	灰軸系陶器	碗A	5.0	16.0	6.7	中世1c期			E-323
54	324	93A	SK52	灰軸系陶器	碗C	(3.6)		5.8	中世1c期			E-324
54	325	93D	SK35	灰軸系陶器	碗A	5.3	15.2	6.5	中世1c期			E-325
54	326	93C	SX05	灰軸系陶器	碗A	4.7	15.8	7.4	中世1c期			E-326
54	327	93C	SX05	灰軸系陶器	碗A	4.8	16.8	7.8	中世1c期			E-327
54	328	93C	SX05	灰軸系陶器	碗A	4.4	16.1	7.6	中世1c期			E-328
54	329	93G	SD10	灰軸系陶器	碗D?	(4.6)		7.5	中世1c期			E-329
54	330	93G	SD10	灰軸系陶器	皿D?	2.3	8.0	4.0	中世1c期			E-330
54	331	93G	SD10	灰軸系陶器	皿A	2.5	7.9	4.2	中世1c期			E-331
54	332	93G	SD10	灰軸系陶器	皿A	2.0	7.6	3.8	中世1c期			E-332
54	333	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	2.1	7.7	4.2	中世1c期			E-333
54	334	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	1.9	7.3	3.5	中世1c期			E-334
54	335	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	2.0	7.6	4.4	中世1c期			E-335
54	336	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	2.2	7.7	4.2	中世1c期			E-336
54	337	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	1.9	7.6	3.5	中世1c期			E-337
54	338	94E	SK54	灰軸系陶器	碗A	5.3	14.6	6.8	中世IIa期			E-338
54	339	94E	SK54	灰軸系陶器	碗A	4.9	15.4	7.4	中世IIa期			E-339
54	340	94E	SK54	灰軸系陶器	皿A	2.1	7.8	4.1	中世1c期			E-340
54	341	94E	SK54	灰軸系陶器	碗A	4.9	15.7	7.0	中世IIa期			E-341
54	342	94E	SK54	灰軸系陶器	鉢	(15.0)	32.3	11.7	中世1c期			E-342
54	343	94E	SK54	灰軸系陶器	鉢	(15.0)	36.4	10.6	中世1c期			E-343
54	344	94E	SK54	土師器	皿C	2.1	7.5	3.6	中世1c期			E-344
54	345	94E	SK54	土師器	皿B	2.0	8.8	3.5	中世1c期			E-345

中世1期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
55	346	94F	SK08	灰軸系陶器	碗C	5.5	14.4	6.8	中世1c期			E-346
55	347	94F	SK08	灰軸系陶器	皿C	2.1	8.0	4.0	中世1c期			E-347
55	348	94F	SK08	灰軸系陶器	皿C	1.8	7.5	4.0	中世1c期			E-348
55	349	93A	SK06	灰軸系陶器	小碗	2.0	8.6	4.6	中世1期			E-349
55	350	93A	SK06	灰軸系陶器	皿A	2.2	8.3	4.5	中世1期			E-350
55	351	93A	SK06	灰軸系陶器	碗A	4.1	16.0	9.4	中世1期			E-351
55	352	93A	SK06	灰軸系陶器	碗A	5.4	16.0	8.0	中世1期			E-352
55	353	93A	SK06	灰軸系陶器	碗A	4.8	15.0	8.8	中世1期			E-353
55	354	93A	SK06	灰軸系陶器	碗A	5.0	16.4	7.2	中世1期			E-354
55	355	93A	SK06	灰軸系陶器	碗A	5.0	16.8	8.0	中世1期	墨書「大」		E-355
55	356	93A	SK06	灰軸系陶器	壺	(12.0)	34.0		中世1期			E-356
55	357	93A	SK06	白磁	碗	(5.6)	14.0		中世1期		117	E-357
55	358	93A	SK06	土師器	皿B	0.9	9.8	6.0	中世1期			E-358
55	359	93A	SK04	灰軸系陶器	壺	65.6	41.2	22.4	中世IIa期			E-359

中世1~II期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
56	360	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.5	8.4	3.8	中世1b期			82 E-360
56	361	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.2	7.8	4.0	中世1c期			80 E-361
56	362	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.3	8.8	3.3	中世1c期			78 E-362
56	363	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.1	7.9	4.1	中世1c期			86 E-363
56	364	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.1	8.2	4.4	中世1c期			E-364

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
56	365	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	1.8	8.0	4.0	中世Ic期			E-365
56	366	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	1.8	7.6	3.0	中世IIa期		84	E-366
56	367	93G	SE05	灰軸系陶器	皿A	2.0	7.8	4.1	中世IIa期			E-367
56	368	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.1	15.4	7.6	中世Ic期			E-368
56	369	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.4	15.4	7.4	中世Ic期			E-369
56	370	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	(5.0)	16.2		中世Ic期			E-370
56	371	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	5.8	15.3	7.7	中世Ic期		81	E-371
56	372	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	5.3	14.8	7.0	中世Ic期	内面煤付着	87	E-372
56	373	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	5.6	15.1	7.0	中世Ic期		85	E-373
56	374	93G	SE05	灰軸系陶器	碗C	5.4	15.3	6.9	中世Ic期		83	E-374
56	375	93G	SE05	灰軸系陶器	碗C	6.5	17.8	8.0	中世Ic期			E-375
56	376	93G	SE05	灰軸系陶器	碗C	5.6	15.4	6.8	中世Ic期			E-376
56	377	93G	SE05	灰軸系陶器	碗C	5.2	14.8	6.2	中世Ic期			E-377
56	378	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.2	15.0	7.6	中世IIa期			E-378
56	379	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.2	16.6	8.0	中世IIa期			E-379
56	380	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.3	16.3	8.0	中世IIa期	内面煤付着		E-380
56	381	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	5.6	16.4	7.3	中世IIa期			E-381
56	382	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.9	14.7	5.6	中世IIa期			E-382
56	383	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.6	15.2	6.2	中世IIa期			E-383
56	384	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.8	15.6	6.6	中世IIa期			E-384
56	385	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.9	15.3	7.1	中世IIa期			E-385
56	386	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.7	15.0	6.7	中世IIa期			E-386
56	387	93G	SE05	灰軸系陶器	碗A	4.8	16.1	6.8	中世IIa期		77	E-387
56	388	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	5.1	14.8	6.4	中世IIa期		79	E-388
56	389	93G	SE05	灰軸系陶器	碗B	4.9	16.4	7.0	中世IIa期			E-389

中世IIa期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
57	390	93G	SE05	灰軸系陶器	壺	(25.0)	15.4	14.0	中世IIa期			E-390
57	391	93G	SE05	灰軸系陶器	鉢	(8.6)	29.2		中世IIa期	内面煤付着		E-391
57	392	93G	SE05	灰軸系陶器	鉢	(9.1)	31.2		中世IIa期			E-392
57	393	93G	SE05	灰軸系陶器	鉢	15.0	34.6	12.4	中世IIa期			E-393
57	394	93G	SE05	土師器	皿B	2.5	13.4	8.0	中世Ic~IIa期			E-394
57	395	93G	SE05	土師器	皿B	1.9	8.8	4.0	中世Ic~IIa期			E-395
57	396	93G	SE05	土師器	皿B	2.0	8.8	3.0	中世Ic~IIa期			E-396
57	397	93G	SE05	土師器	皿B	1.3	8.8	4.7	中世Ic~IIa期			E-397
57	398	93G	SE05	土師器	皿C	1.6	8.2	3.4	中世Ic~IIa期			E-398
57	399	93G	SE05	土師器	皿C	1.7	8.6	5.3	中世Ic~IIa期		88	E-399
57	400	93G	SE05	土師器	伊勢型鍋D	(5.8)	22.6		中世Ic~IIa期	口縁部煤付着		E-400
57	401	93G	SE05	土師器	伊勢型鍋D	(3.7)	23.6		中世Ic~IIa期	口縁部煤付着		E-401
57	402	93G	SE05	白磁	碗	(4.6)	12.6		中世Ic~IIa期		117	E-402
57	403	93G	SE05	白磁	碗	(2.4)			中世Ic~IIa期			E-403
57	404	93G	SE05	白磁	碗	(2.4)			中世Ic~IIa期			E-404
57	405	93G	SE05	白磁	碗	(2.4)			中世Ic~IIa期			E-405

中世I~II期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
58	406	94H	SD07	灰軸系陶器	皿A	2.0	8.0	4.4	中世Ic期			E-406
58	407	94H	SD07	灰軸系陶器	皿A	1.9	7.8	3.1	中世Ic期			E-407
58	408	94H	SD07	灰軸系陶器	皿C	1.7	6.6	2.6	中世Ic期			E-408
58	409	94H	SD07	灰軸系陶器	碗C	5.8	15.2	7.0	中世Ic期	内面煤付着		E-409
58	410	94H	SD07	灰軸系陶器	碗A	5.4	15.4	7.0	中世Ic期			E-410
58	411	94H	SD07	灰軸系陶器	碗A	4.9	14.8	7.5	中世Ic期			E-411
58	412	94H	SD07	灰軸系陶器	碗C	5.6	14.8	5.7	中世Ic期			E-412
58	413	94H	SD07	灰軸系陶器	皿A	1.7	8.1	4.0	中世IIa期			E-413
58	414	94H	SD07	灰軸系陶器	皿A	1.6	7.4	4.2	中世IIa期			E-414
58	415	94H	SD07	灰軸系陶器	皿B	1.6	7.7	4.4	中世IIa期			E-415
58	416	94H	SD07	灰軸系陶器	碗A	5.0	15.4	8.0	中世IIa期			E-416
58	417	94H	SD07	灰軸系陶器	碗A	5.0	15.8	7.8	中世IIa期			E-417
58	418	94H	SD07	灰軸系陶器	碗B	4.9	13.4	6.4	中世IIa期			E-418
58	419	94H	SD07	灰軸系陶器	碗C	5.9	13.8	5.4	中世IIa期			E-419
58	420	94H	SD07	灰軸系陶器	碗B	5.6	14.6	6.8	中世IIa期	墨書「大」		E-420
58	421	94H	SD07	土師器	皿B	1.7	8.8	5.0	中世Ic~IIa期			E-421
58	422	94H	SD07	土師器	皿B	1.6	8.8	4.7	中世Ic~IIa期			E-422
58	423	94H	SD07	土師器	皿B	3.2	14.0	6.0	中世Ic~IIa期			E-423
58	424	94H	SD07	白磁	碗	(3.0)		6.4	中世Ic~IIa期		117	E-424
58	425	94H	SD07	灰軸系陶器	壺	(13.4)	38.0		中世Ia期			E-425
58	426	94H	SD07	土師器	伊勢型鍋D	(4.4)	28.0		中世Ic~IIa期			E-426
58	427	94H	SD31	灰軸系陶器	碗B	(3.65)		6.4	中世Ic期			E-427
58	428	94H	SD31	灰軸系陶器	碗C	(3.9)		5.8	中世Ic期	内面煤付着		E-428
58	429	94H	SD31	灰軸系陶器	碗B	(3.8)		7.8	中世IIa期			E-429
58	430	94H	SD31	灰軸系陶器	碗B	5.7	15.8	7.4	中世IIa期			E-430
58	431	94H	SD31	灰軸系陶器	碗B	4.9	13.4	6.0	中世IIa期			E-431
58	432	94H	SD29	灰軸系陶器	碗C	(3.5)	11.4		中世IIb期			E-432
58	433	94H	SD29	灰軸系陶器	皿C	1.5	8.0	5.0	中世IIa期			E-433
58	434	94H	SD29	灰軸系陶器	皿C	1.4	8.2	4.9	中世IIa期			E-434
58	435	94H	SD29	土師器	皿B	1.3	8.1	5.4	中世II期			E-435

中世II期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
59	436	94H	SE03	灰釉系陶器	皿B	1.6	8.0	2.0	中世IIa期			E-436
59	437	94H	SE03	灰釉系陶器	皿C	1.7	8.2	5.0	中世Ic期			E-437
59	438	94H	SE03	灰釉系陶器	碗B	5.2	17.0	7.6	中世IIa期			E-438
59	439	94H	SE03	灰釉系陶器	碗C	(4.8)	15.4		中世IIIa期			E-439
59	440	94H	SE03	灰釉系陶器	甕	(4.2)	29.5		中世IIa期			E-440
59	441	94H	SE03	灰釉系陶器	甕	(3.9)	30.0		中世IIa期			E-441
59	442	94H	SE03	青磁	皿	(2.4)	9.6		中世IIa期			E-442
59	443	94H	SE04	土師器	皿B?	1.2	8.4	2.0	中世II期			E-443
59	444	94H	SE04	灰釉系陶器	碗A	5.0	15.8	6.7	中世IIa期			E-444
59	445	94H	SE05	灰釉系陶器	皿A	1.8	7.1	3.2	中世IIa期			E-445
59	446	94H	SE05	灰釉系陶器	碗A	5.5	7.4	6.1	中世IIa期			E-446
59	447	93G	SE04	灰釉系陶器	小碗	2.5	8.4	5.2	中世Ic期			E-447
59	448	93G	SE04	灰釉系陶器	皿A	2.1	7.8	4.0	中世Ic期			E-448
59	449	93G	SE04	灰釉系陶器	皿A	2.0	7.8	4.0	中世Ic期			E-449
59	450	93G	SE04	灰釉系陶器	皿A	2.0	7.5	4.6	中世IIa期			E-450
59	451	93G	SE04	灰釉系陶器	皿A	1.9	8.4	4.0	中世IIa期	口縁部タール付着		E-451
59	452	93G	SE04	灰釉系陶器	皿B	1.8	8.3	5.0	中世IIa期			E-452
59	453	93G	SE04	灰釉系陶器	皿B	1.7	7.8	4.8	中世IIa期			E-453
59	454	93G	SE04	灰釉系陶器	皿B	2.0	8.0	4.3	中世IIa期	口縁部タール付着		E-454
59	455	93G	SE04	灰釉系陶器	皿B	1.6	8.4	5.0	中世IIa期			E-455
59	456	93G	SE04	灰釉系陶器	碗A	5.0	15.0	6.7	中世IIa期			E-456
59	457	93G	SE04	灰釉系陶器	碗C	5.1	14.6	6.1	中世IIa期			E-457
59	458	93G	SE04	灰釉系陶器	加工円盤A				中世IIa期			E-458
59	459	93D	SD08	灰釉系陶器	皿A	1.9	7.7	3.8	中世IIa期			E-459
59	460	93D	SD08	灰釉系陶器	皿A	2.2	8.0	4.0	中世IIa期			E-460
59	461	93D	SD08	土師器	皿B?	1.8	8.0	2.4	中世IIa期			E-461
59	462	93D	SD08	土師器	皿B?	1.7	7.7	1.8	中世IIa期			E-462
59	463	93D	SD08	灰釉系陶器	碗A	(5.4)	15.5		中世IIa期			E-463
59	464	93C	SE03	灰釉系陶器	皿A	1.4	7.9	3.8	中世IIa期			E-464
59	465	93C	SE03	灰釉系陶器	皿C	1.7	8.2	4.8	中世IIb期			E-465
59	466	93C	SE03	灰釉系陶器	碗C	6.1	13.8	4.6	中世IIa期			E-466
59	467	93C	SE03	灰釉系陶器	碗C	5.2	14.2	4.5	中世IIb期			E-467
59	468	93C	SE03	灰釉系陶器	碗C	6.2	15.0	6.2	中世IIb期			E-468
59	469	93C	SE03	灰釉系陶器	碗C	5.4	12.0	3.6	中世IIb期			E-469
59	470	93C	SE03	灰釉系陶器	鉢	(5.8)		12.2	中世IIa期			E-470

中世IIb期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
60	471	93A	SK53	灰釉系陶器	皿A	1.7	7.6	4.0	中世IIb期			E-471
60	472	93A	SK53	灰釉系陶器	皿A	2.2	9.0	1.9	中世IIb期	タール付着		E-472
60	473	93A	SK53	灰釉系陶器	皿A	2.2	8.8	3.4	中世IIb期			E-473
60	474	93A	SK53	灰釉系陶器	皿B	1.9	8.6	5.2	中世IIb期			E-474
60	475	93A	SK53	灰釉系陶器	碗C	6.4	14.2	5.6	中世IIb期			E-475
60	476	93A	SK53	灰釉系陶器	碗C	6.0	15.0	6.2	中世IIb期	内外面煤付着		E-476
60	477	93A	SK53	灰釉系陶器	碗C	6.0	15.6	6.6	中世IIb期			E-477
60	478	93A	SK53	青磁	碗	(2.0)	15.2		中世IIb期			E-478
60	479	93A	SK53	土師器	伊勢型鍋D	(10.8)	23.0		中世IIb期			E-479
60	480	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.4	7.8	4.4	中世IIb期			E-480
60	481	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.6	8.6	5.0	中世IIb期			E-481
60	482	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	(1.3)	8.0		中世IIb期			E-482
60	483	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.2	8.4	5.4	中世IIb期			E-483
60	484	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.3	8.2	4.4	中世IIb期			E-484
60	485	94I	SE02	土師器	皿B	1.5	8.2	2.0	中世IIb期			E-485
60	486	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.4	7.9	4.8	中世IIb期			E-486
60	487	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.2	7.0	4.4	中世IIb期			E-487
60	488	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.3	8.6	6.0	中世IIb期			E-488
60	489	94I	SE02	灰釉系陶器	皿B	2.5	8.0	4.4	中世IIb期			E-489
60	490	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	4.8	13.6	4.8	中世IIb期			E-490
60	491	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	5.4	13.8	4.8	中世IIb期			E-491
60	492	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	5.2	13.8	4.8	中世IIb期			E-492
60	493	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	(5.0)	15.0		中世IIb期			E-493
60	494	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	(5.2)	13.4		中世IIb期			E-494
60	495	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	(5.2)	13.8		中世IIb期			E-495
60	496	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	3.8	11.8		中世IIb期			E-496
60	497	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	(3.5)	13.8		中世IIb期			E-497
60	498	94I	SE02	灰釉系陶器	碗C	(4.9)		5.0	中世IIb期			E-498
60	499	94I	SE02	灰釉系陶器	皿C	1.4	7.6	5.2	中世IIb期			E-499
60	500	94I	SE02	土師器	皿B	1.6	7.4	4.0	中世IIb期			E-500
60	501	94I	SE02	灰釉系陶器?	入子?	1.9	5.2	4.6	中世IIb期			E-501
60	502	94I	SE02	土師器	伊勢型鍋E	(7.4)	28.0		中世IIb期			E-502
61	503	94I	SD03	灰釉系陶器	碗A	4.9	16.2	8.0	中世Ic期			E-503
61	504	94I	SD03	灰釉系陶器	碗C	5.2	15.4	7.2	中世Ic期			E-504
61	505	94I	SD03	灰釉系陶器	皿C	1.6	8.9	6.0	中世IIb期			E-505
61	506	94I	SD04	灰釉系陶器	碗C	3.9	10.9	4.0	中世IIb期			E-506
61	507	94I	SD06	灰釉系陶器	皿C	1.1	8.4	4.8	中世IIb期			E-507
61	508	94I	SD06	灰釉系陶器	皿C	1.1	8.0	4.2	中世IIb期			E-508
61	509	94I	SD06	灰釉系陶器	皿C	1.5	7.8	3.4	中世IIIa期			E-509
61	510	94I	SD06	灰釉系陶器	碗C	5.4	13.6	4.9	中世IIb期			E-510
61	511	94I	SD06	灰釉系陶器	碗C	4.8	13.9	5.0	中世IIb期			E-511

付表11 遺物一覧表(7)

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
61	512	94I	SD06	灰釉系陶器	碗C	(4.9)		5.0	中世Ⅱb期			E-512
61	513	94I	SD06	土師器	伊勢型鍋D	(2.4)	25.8		中世Ⅱb期			E-513
61	514	94I	SD08	灰釉系陶器	皿C	1.2	8.4	4.4	中世Ⅱb期			E-514
61	515	94I	SD08	灰釉系陶器	皿C	1.3	8.1	4.2	中世Ⅱb期			E-515
61	516	94I	SD08	灰釉系陶器	皿C	1.3	8.2	3.2	中世Ⅱb期			E-516
61	517	94I	SD08	灰釉系陶器	皿C	1.7	8.4	4.9	中世Ⅱb期			E-517
61	518	94I	SD08	灰釉系陶器	碗C	4.7	15.0	5.0	中世Ⅱb期			E-518
61	519	94I	SD08	灰釉系陶器	碗C	5.2	14.0	4.5	中世Ⅱb期			E-519
61	520	94I	SD08	灰釉系陶器	碗C	6.0	13.7	5.1	中世Ⅱb期			E-520
61	521	94I	SD08	灰釉系陶器	碗C	5.1	13.6	4.8	中世Ⅱb期			E-521
61	522	94I	SD08	灰釉系陶器	鉢	(5.4)	16.4		中世Ⅱb期			E-522
61	523	94I	SD08	青磁	碗	(2.8)	9.0		中世Ⅱb期			E-523
61	524	94I	SK12	灰釉系陶器	碗C	6.0	14.5	5.6	中世Ⅱb期			E-524
61	525	94I	SK12	灰釉系陶器	碗C				中世Ⅱb期			E-525
61	526	94I	SK12	灰釉系陶器	碗C	5.0	10.7	4.1	中世Ⅱb期			E-526
61	527	94I	SK12	土師器	皿B	2.9	12.0	3.0	中世Ⅱb期			E-527
61	528	94I	P39	灰釉系陶器	碗C	5.0	12.6	4.8	中世Ⅱb期			E-528

中世Ⅱ期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
62	529	93C	SK06	灰釉系陶器	皿A	2.2	8.0	4.0	中世Ⅱa期			E-529
62	530	93C	SK06	灰釉系陶器	皿A	2.0	8.4	5.2	中世Ⅱa期			E-530
62	531	93C	SK06	灰釉系陶器	碗A	5.0	15.4	6.2	中世Ⅰc期			E-531
62	532	93C	SK06	灰釉系陶器	碗B	5.0	14.9	5.2	中世Ⅱb期			E-532
62	533	93C	SK06	灰釉系陶器	碗B	5.7	13.8	5.8	中世Ⅱb期			E-533
62	534	93C	SK06	灰釉系陶器	碗C	5.3	14.7	5.8	中世Ⅱb期			E-534
62	535	93C	SK06	灰釉系陶器	碗C	5.2	13.7	5.3	中世Ⅱb期			E-535
62	536	93C	SK06	灰釉系陶器	碗C	5.4	14.8	6.0	中世Ⅲa期			E-536
62	537	93C	SK06	灰釉系陶器	碗C	5.1	14.4	6.0	中世Ⅲa期			E-537
62	538	93C	SK06	灰釉系陶器	鉢	(11.6)		12.5	中世Ⅱb期			E-538
62	539	93C	SK06	灰釉系陶器	鉢	(7.0)		14.4	中世Ⅱb期			E-539
62	540	93C	SK06	灰釉系陶器	碗B	6.0	14.8	5.4	中世Ⅱa期	墨書「□九□」		E-540
62	541	93C	SK05	灰釉系陶器	碗C	(2.8)		6.4	中世Ⅱb期	墨書「万？」		E-541
62	542	93F	SD13.14	灰釉系陶器	碗C	(5.1)		5.1	中世Ⅱb期			E-542
62	543	93F	SD14	灰釉系陶器	碗C	(4.7)		5.0	中世Ⅱb期			E-543
62	544	93F	SD14	施釉陶器	卸皿	3.8	13.6	8.2	中世Ⅱb期			E-544
62	545	93F	SD13	土師器	皿C	1.3	7.0	1.5	中世Ⅱb期			E-545
62	546	93F	SD14	土師器	皿B?	(2.0)	11.5	4.9	中世Ⅱb期			E-546
62	547	93F	SD12	灰釉系陶器	碗C	5.4	14.7	5.6	中世Ⅱb期			E-547
63	548	93F	SD09	灰釉系陶器	皿D?	1.8	8.3	4.0	中世Ⅱb期			E-548
63	549	93F	SD09	土師器	皿B?	2.0	11.4	7.4	中世Ⅱb期			E-549
63	550	93F	SD11	灰釉系陶器	羽釜	(12.2)	21.6		中世Ⅱb期			E-550
63	551	93A	SX01下層	灰釉系陶器	皿A	1.9	8.2	5.0	中世Ⅱ期	内面煤付着	72	E-551
63	552	93A	SX01下層	灰釉系陶器	皿A	2.1	7.2	3.0	中世Ⅱ期			E-552
63	553	93A	SX01下層	灰釉系陶器	皿B	1.6	7.4	4.6	中世Ⅱ期			E-553
63	554	93A	SX01上層	灰釉系陶器	皿B	1.8	7.6	3.6	中世Ⅱ期			E-554
63	555	93A	SX01上層	灰釉系陶器	皿B	1.8	7.7	4.0	中世Ⅱ期			E-555
63	556	93A	SX01上層	灰釉系陶器	皿B	1.6	7.8	4.7	中世Ⅱ期			E-556
63	557	93A	SX01上層	灰釉系陶器	皿B	2.0	7.8	4.8	中世Ⅱ期			E-557
63	558	93A	SX01上層	灰釉系陶器	皿B	1.9	7.6	4.5	中世Ⅱ期		73	E-558
63	559	93A	SX01下層	灰釉系陶器	皿B	1.8	7.5	4.0	中世Ⅱ期			E-559
63	560	93A	SX01	灰釉系陶器	皿A	2.0	8.8	5.0	中世Ⅱ期		74	E-560
63	561	93A	SX01	灰釉系陶器	皿B	1.8	8.1	4.7	中世Ⅱ期			E-561
63	562	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗A	4.6	15.8	8.0	中世Ⅱ期		68	E-562
63	563	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗A	5.2	13.8	5.6	中世Ⅱ期			E-563
63	564	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗A	5.2	13.4	6.2	中世Ⅱ期			E-564
63	565	93A	SX01	灰釉系陶器	碗A	5.3	13.5	5.1	中世Ⅱ期		69	E-565
63	566	93A	SX01	灰釉系陶器	碗A	5.6	13.8	6.4	中世Ⅱ期	内面煤付着		E-566
63	567	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.7	14.2	6.4	中世Ⅱ期	内面煤付着		E-567
63	568	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.3	14.4	6.6	中世Ⅱ期			E-568
63	569	93A	SX01	灰釉系陶器	碗B	5.5	14.8	6.4	中世Ⅱ期	内面煤付着	66	E-569
63	570	93A	SX01	灰釉系陶器	碗B	5.7	13.6	6.5	中世Ⅱ期	内面煤付着		E-570
63	571	93A	SX01下層	灰釉系陶器	碗B	5.2	13.6	5.9	中世Ⅱ期		71	E-571
63	572	93A	SX01	灰釉系陶器	碗B	5.8	14.0	5.9	中世Ⅱ期	内面煤付着	70	E-572
63	573	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.7	12.2	6.0	中世Ⅱ期			E-573
63	574	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	4.9	13.4	6.0	中世Ⅱ期	内面煤付着		E-574
63	575	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.4	12.0	5.6	中世Ⅱ期			E-575
63	576	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.1	13.2	7.4	中世Ⅱ期			E-576
63	577	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.9	13.8	6.0	中世Ⅱ期			E-577
63	578	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	6.0	14.0	6.6	中世Ⅱ期		67	E-578
63	579	93A	SX01上層	灰釉系陶器	碗B	5.9	13.9	5.9	中世Ⅱ期			E-579
63	580	93A	SX01	灰釉系陶器	碗C	6.0	14.2	5.0	中世Ⅱ期	体部外面墨書		E-580
63	581	93A	SX01	灰釉系陶器	皿B	2.0	8.2	5.0	中世Ⅱ期	墨書「まつ」	108	E-581
64	582	93A	SX01下層	灰釉系陶器	鉢	9.1	19.2	10.4	中世Ⅱ期		75	E-582
64	583	93A	SX01上層	灰釉系陶器	鉢	(7.7)			中世Ⅱ期			E-583
64	584	93A	SX01下層	灰釉系陶器	鉢	(5.8)		14.2	中世Ⅱ期			E-584
64	585	93A	SX01	灰釉系陶器	鉢	(4.9)		13.8	中世Ⅱ期			E-585
64	586	93A	SX01上層	灰釉系陶器	壺	(12.7)	11.0		中世Ⅱ期		76	E-586
64	587	93A	SX01上層	灰釉系陶器	水瓶	(8.0)			中世Ⅱ期			E-587
64	588	93A	SX01	白磁	碗	(2.0)	14.6		中世Ⅱ期			E-588
64	589	93A	SX01下層	青磁	碗	(5.8)	17.0		中世Ⅱ期		117	E-589

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
64	590	93A	SX01下層	青磁	皿	(3.2)	11.4		中世Ⅱ期			E-590
64	591	93A	SX01下層	青磁	皿	(1.2)	8.4		中世Ⅱ期			E-591
64	592	93A	SX01上層	土師器	皿A	1.4	7.8	5.0	中世Ⅱ期			E-592
64	593	93A	SX01上層	土師器	皿B	1.5	7.8	3.4	中世Ⅱ期			E-593
64	594	93A	SX01下層	土師器	皿B	1.1	8.0	4.8	中世Ⅱ期			E-594
64	595	93A	SX01上層	土師器	皿C	1.5	9.0	3.0	中世Ⅱ期			E-595
64	596	93A	SX01上層	土師器	皿C	1.6	8.0	5.8	中世Ⅱ期			E-596
64	597	93A	SX01上層	土師器	伊勢型鍋E	(2.1)	24.4		中世Ⅱ期			E-597
64	598	93A	SX01上層	土師器	伊勢型鍋E	(5.7)			中世Ⅱ期			E-598
64	599	93A	SX01下層	土師器	伊勢型鍋E	(12.0)	27.4		中世Ⅱ期			E-599

#### 中世Ⅲ期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
65	600	93F	集石A	施釉陶器	四耳壺	(9.0)			中世Ⅲa期			E-600
65	601	93F	集石A	灰釉系陶器	碗C	(3.8)		5.4	中世Ⅲa期			E-601
65	602	93F	集石A	灰釉系陶器	碗A	(2.0)		7.8	中世Ⅰc期			E-602
65	603	93F	集石A	灰釉系陶器	壺	(10.4)	34.0		中世Ⅲa期			E-603
65	604	93F	集石A西	施釉陶器	四耳壺	(5.8)			中世Ⅲa期			E-604
65	605	94H	SE07	灰釉系陶器	碗C	5.1	14.0	4.0	中世Ⅲb期			E-605
65	606	94H	SE07	灰釉系陶器	碗C	4.1	13.8		中世Ⅲb期			E-606
65	607	94H	SE07	灰釉系陶器	碗C	4.2	11.6	4.2	中世Ⅲa期	墨書「大」		E-607
65	608	94H	SE07	土師器	羽釜	(4.6)	23.8		中世Ⅲ期			E-608
65	609	94H	SE07	青磁	杯?	(3.0)	11.8		中世Ⅲ期			E-609
65	610	94H	SE07	灰釉系陶器	壺	(21.2)	26.0		中世Ⅲa期			E-610
65	611	93G	SD03	灰釉系陶器	碗C	5.3	14.2	5.2	中世Ⅲa期			E-611
65	612	93G	SD07	土師器	皿A	1.2	15.8	4.4	中世Ⅲb期			E-612
65	613	93G	SD07	灰釉系陶器	皿C	1.1	7.4	4.6	中世Ⅲb期			E-613
65	614	93G	SD07	灰釉系陶器	皿C	1.1	7.9	3.6	中世Ⅲb期			E-614
65	615	93G	SD07	灰釉系陶器	皿C	1.3	7.0	5.0	中世Ⅲb期			E-615
65	616	93G	SD07	灰釉系陶器	碗C	4.3	13.0	4.0	中世Ⅲb期			E-616
65	617	93G	SD07	灰釉系陶器	碗C	3.7	13.4	4.6	中世Ⅲb期			E-617
65	618	93F	SD06	灰釉系陶器	碗C	4.6	13.2	4.5	中世Ⅲa期			E-618
65	619	93F	SD06	土師器	皿B	1.4	8.4	4.8	中世Ⅰc期			E-619
65	620	93F	SD16	施釉陶器	土瓶	(9.7)	9.8		中世Ⅲc期?			E-620

#### 中世Ⅲc～Ⅳ期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
66	621	94H	SD13	施釉陶器	縁釉皿	2.0	9.6	4.0	中世Ⅲc期			E-621
66	622	94H	SD13	施釉陶器	播鉢	(7.8)	30.0		中世Ⅲc期			E-622
66	623	94H	SD30	灰釉系陶器	碗C	3.9	12.5	3.4	中世Ⅲc期			E-623
66	624	94H	SD30	施釉陶器	仏供	(2.2)		1.0	中世Ⅲc期			E-624
66	625	94H	SD30	施釉陶器	天目茶碗	(6.0)	11.8		中世Ⅲc期			E-625
66	626	94H	SD30	常滑	壺	5.2	40.0		中世Ⅲc期			E-626
66	627	94H	SD09	灰釉系陶器	碗C	2.9	10.8	3.8	中世Ⅳa期			E-627
66	628	94H	SD09	灰釉系陶器	碗C	2.5	11.5	4.4	中世Ⅳb期			E-628
66	629	94H	SD09	施釉陶器	縁釉皿	2.1	10.0	4.2	中世Ⅳ期			E-629
66	630	94H	SD09	青磁	香炉	4.6	5.0		中世Ⅳb期			E-630
66	631	94H	SD09	青磁	碗	5.4	11.6		中世Ⅳb期			E-631
66	632	94H	SD09	青磁	碗	3.4	15.8		中世Ⅳb期			E-632
66	633	94H	SD09	施釉陶器	天目茶碗	6.5	11.4	4.0	中世Ⅳb期			E-633
66	634	94H	SD09	施釉陶器	釜	(14.8)	11.4		中世Ⅳb期			E-634
66	635	94H	SD09	施釉陶器	播鉢	(5.2)	31.4		中世Ⅳb期			E-635
66	636	94H	SD09	施釉陶器	播鉢	(8.6)		10.4	中世Ⅳ期			E-636
66	637	94H	SD09	土師器	伊勢型鍋E	(3.4)	28.2		中世Ⅳb期			E-637
66	638	94H	SD09	土師器	皿A	1.9	9.5	5.6	中世Ⅳb期	92		E-638
66	639	94H	SD09	土師器	皿A	1.7	8.0	4.4	中世Ⅳb期			E-639
66	640	94H	SD09	土師器	皿A	1.5	8.0	4.8	中世Ⅳb期			E-640
66	641	94H	SD09	土師器	皿A	1.9	8.1	4.8	中世Ⅳb期			E-641
66	642	94H	SD09	土師器	皿A	(1.1)		3.4	中世Ⅳb期			E-642
66	643	94H	SD09	土師器	皿B?	1.2	7.1	3.8	中世Ⅳb期			E-643
66	644	94H	SD09	土師器	皿A	1.7	12.0	4.4	中世Ⅳb期			E-644
66	645	94H	SD09	土師器	皿A	2.0	11.8	5.0	中世Ⅳb期			E-645
66	646	94H	SD09	土師器	皿B	2.3	10.8	4.2	中世Ⅳb期			E-646
66	647	94H	SD09	土師器	皿A	2.5	13.2	7.0	中世Ⅳb期	91		E-647
66	648	94H	SD09	土師器	皿A	2.3	12.7	4.4	中世Ⅳb期	90		E-648
66	649	94H	SD09	灰釉系陶器	陶丸				中世Ⅳb期			E-649

#### 中世Ⅳ期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
67	650	94H	SD11	灰釉系陶器	碗C	2.3	10.0	3.6	中世Ⅳa期			E-650
67	651	94H	SD11	灰釉系陶器	碗C	2.5	9.8	3.6	中世Ⅳb期			E-651
67	652	94H	SD11	灰釉系陶器	碗C	2.3	12.0	5.4	中世Ⅳa期			E-652
67	653	94H	SD11	灰釉系陶器	碗C	2.1	9.6	4.0	中世Ⅳb期			E-653
67	654	94H	SD11	灰釉系陶器	丸皿Ⅱ	2.3	9.6	3.8	中世Ⅳb期			E-654
67	655	94H	SD11	施釉陶器	端反皿	2.8	11.2	6.0	中世Ⅳb期			E-655
67	656	94H	SD11	施釉陶器	天目茶碗	(5.3)	11.0		中世Ⅳb期			E-656
67	657	94H	SD11	施釉陶器	天目茶碗	(3.1)		4.4	中世Ⅳb期			E-657

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
67	658	94H	SD11	旋軸陶器	有耳壺	(8.5)	13.6		中世IVb期			E-658
67	659	94H	SD11	旋軸陶器	土瓶・釜	(3.6)		12.0	中世IVb期			E-659
67	660	94H	SD11	旋軸陶器	播鉢	(5.5)	27.4		中世IVb期			E-660
67	661	94H	SD11	旋軸陶器	播鉢	(3.5)	30.0		中世IVb期			E-661
67	662	94H	SD11	旋軸陶器	播鉢	(4.2)	31.8		中世IVb期			E-662
67	663	94H	SD11	土師器	皿B?	1.8	7.2	1.8	中世IVb期			E-663
67	664	94H	SD11	土師器	皿B?	0.9	5.4	2.0	中世IVb期			E-664
67	665	94H	SD11	土師器	皿B?	1.7	8.7	3.0	中世IVb期			E-665
67	666	94H	SD11	土師器	皿B?	1.6	7.8	*	中世IVb期			E-666
67	667	94H	SD11	土師器	内耳鍋	6.0	20.6		中世IVb期			E-667
67	668	94H	SD11	土師器	内耳鍋	(8.2)	20.6		中世IVb期			E-668
67	669	94H	SD14	旋軸陶器	天目茶碗	(4.8)	11.5		中世IVa期			E-669
67	670	94H	SD14	土師器	皿B	1.0	6.3	3.6	中世IVa期			E-670
67	671	94H	SD14	土師器	皿B	1.2	7.0	4.5	中世IVa期			E-671
67	672	94H	SD14	土師器	皿C	1.8	7.3	0.5	中世IVa期			E-672
67	673	94H	SD14	土師器	皿C	2.3	7.8	3.2	中世IVa期			E-673
67	674	94H	SD14	土師器	皿A	2.0	13.4	7.0	中世IVa期			E-674
67	675	94H	SD14	土師器	皿B	2.0	13.6	3.8	中世IVa期			E-675
67	676	94H	SD14	土師器	皿B	2.3	13.8	6.4	中世IVa期			E-676
67	677	94H	SD15	土師器	皿B	1.5	7.4	2.2	中世IV期			E-677
67	678	94H	SD15	土師器	皿A	2.2	12.8	6.0	中世IV期			E-678
67	679	94H	SD15	土師器	皿B	2.6	11.9	1.2	中世IV期			E-679

中世IVb期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
68	680	94H	SD18	灰釉系陶器	碗C	2.7	11.2	3.4	中世IVb期			E-680
68	681	94H	SD18	旋軸陶器	縁軸皿	2.1	11.8	5.2	中世IVb期			E-681
68	682	94H	SD18	旋軸陶器	香炉	4.2	10.0	6.8	中世IVb期			E-682
68	683	94H	SD18	旋軸陶器	天目茶碗	6.2	11.6	4.1	中世IVb期			E-683
68	684	94H	SD18	旋軸陶器	天目茶碗	(5.5)		4.0	中世IVb期			E-684
68	685	94H	SD18	旋軸陶器	天目茶碗	(6.3)	11.0		中世IVb期			E-685
68	686	94H	SD18	旋軸陶器	鉢	(6.9)	18.8		中世IVb期			E-686
68	687	94H	SD18	旋軸陶器	有耳壺	(6.8)	14.4		中世IVb期			E-687
68	688	94H	SD18	旋軸陶器	四耳壺	(9.8)			中世IVb期			E-688
68	689	94H	SD18	旋軸陶器	播鉢	12.5	30.2	10.0	中世IVb期			E-689
68	690	94H	SD18	土師器	皿B	1.5	6.4	5.7	中世IVb期			E-690
68	691	94H	SD18	土師器	皿B	1.2	6.4	4.5	中世IVb期			E-691
68	692	94H	SD18	土師器	皿B	1.3	6.3	5.6	中世IVb期			E-692
68	693	94H	SD18	土師器	皿B	13.0	6.6	5.7	中世IVb期			E-693
68	694	94H	SD18	土師器	皿B	1.1	6.8	5.0	中世IVb期			E-694
68	695	94H	SD18	土師器	皿B	1.1	6.3	4.6	中世IVb期			E-695
68	696	94H	SD18	土師器	皿A	2.2	12.0	4.8	中世IVb期		93	E-696
68	697	94H	SD18	土師器	皿A	2.4	12.2	5.7	中世IVb期			E-697
68	698	94H	SD18	土師器	皿A	2.3	12.8	6.0	中世IVb期			E-698
68	699	94H	SD18	土師器	皿A	2.7	14.6	7.6	中世IVb期		94	E-699
68	700	94H	SD18	土師器	皿A	2.5	12.4	6.1	中世IVb期			E-700
68	701	94H	SD18	土師器	皿A	2.0	12.6	6.6	中世IVb期			E-701
68	702	94H	SD18	土師器	釜	(8.2)	12.8		中世IVb期	外面煤付着		E-702
68	703	94H	SD18	土師器	内耳鍋	(11.8)	22.6		中世IVb期	外面煤付着		E-703

中世IV期

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
69	704	94H	SD20	灰釉系陶器	皿C	1.9	8.8	5.0	中世IVb期			E-704
69	705	94H	SD20	灰釉系陶器	碗C	2.9	11.5	4.4	中世IVb期			E-705
69	706	94H	SD20	旋軸陶器	縁軸皿	2.0	9.2	5.2	中世IV期			E-706
69	707	94H	SD20	旋軸陶器	縁軸皿	2.9	9.6	3.4	中世IVa期			E-707
69	708	94H	SD20	旋軸陶器	釜	17.0	14.0	10.5	中世IV期			E-708
69	709	94H	SD20	灰釉系陶器	壺	(4.3)	14.8		中世IV期			E-709
69	710	94H	SD20	旋軸陶器	縁軸皿	2.0	10.4	4.4	中世IV期			E-710
69	711	94H	SD20	土師器	皿B?	1.2	10.2	6.0	中世IV期			E-711
69	712	94H	SD20	旋軸陶器	卸皿	2.6	13.4	5.6	中世IV期			E-712
69	713	94H	SD20	旋軸陶器	折縁深皿	(3.0)	23.8		中世IV期			E-713
69	714	94H	SD20	旋軸陶器	折縁深皿	(3.3)	31.6		中世IV期			E-714
69	715	94H	SD24	土師器	皿C	1.2	7.8	4.0	中世IVa期			E-715
69	716	94H	SD24	大窯	天目茶碗	(4.3)	12.0		中世IVa期			E-716
69	717	94H	SD25	旋軸陶器	縁軸皿	1.9	10.0	5.4	中世IV期			E-717
69	718	94H	SD25	灰釉系陶器	碗C	2.2	9.8	3.2	中世IVb期			E-718
69	719	94H	SD25	灰釉系陶器	碗C	3.2	11.8	4.0	中世IVa期			E-719
69	720	94H	SD25	旋軸陶器	折縁深皿	(6.7)	31.8		中世IVb期			E-720
69	721	94H	SK106	灰釉系陶器	皿C	2.6	10.0	4.0	中世IVb期			E-721
69	722	94H	SK106	土師器	皿A	1.8	1.8	4.8	中世IVb期			E-722
69	723	94H	SK106	土師器	皿A	2.8	15.8	7.6	中世IVb期			E-723
69	724	94H	SK106	土師器	皿B	1.2	7.8	4.0	中世IVb期			E-724
69	725	94H	SK106	土師器	皿A	1.9	7.1	3.4	中世IVb期			E-725
69	726	94H	SK106	土師器	皿A	2.5	15.0	6.5	中世IVb期			E-726
69	727	94H	SK106	土師器	皿A	2.8	14.8	3.5	中世IVb期			E-727
69	728	94H	SK106	土師器	皿B	2.5	11.4	5.1	中世IVb期			E-728
69	729	94H	SX03	旋軸陶器	皿	2.7	11.4	5.8	中世IVb期			E-729
69	730	94H	SX03	旋軸陶器	皿	1.9	1.8	7.6	中世IVb期			E-730

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
69	731	94H	SX03	灰軸系陶器	播鉢	(9.3)		7.0	中世IVb期			E-731
69	732	94H	SX03	灰軸系陶器	仏具	5.2	10.5	5.2	中世IVb期			E-732
69	733	94H	SX03	土師器	皿B?	2.9	10.8	6.4	中世IVb期			E-733
69	734	94H	SX03	土師器	皿A	2.2	12.8	6.0	中世IVb期			E-734
69	735	94H	SX03	土師器	皿A	2.7	15.8	8.4	中世IVb期			E-735
69	736	94H	SX03	土師器	皿B	1.6	12.2	7.0	中世IVb期			E-736

遺構外出土の中世の土器

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
70	737	94C	検出	灰軸系陶器	碗	4.9	17.0	7.6	中世0期~I期			E-737
70	738	93C	検出	灰軸系陶器	碗	4.0	15.8	7.4	中世0期~I期			E-738
70	739	94F	検出	灰軸系陶器	碗	5.3	16.5	8.5	中世0期~I期			E-739
70	740	93D	検出	灰軸系陶器	碗	5.5	16.0	8.3	中世0期~I期			E-740
70	741	93A	検出	灰軸系陶器	碗	5.5	15.3	7.3	中世0期~I期			E-741
70	742	94F	検出	灰軸系陶器	碗	4.7	14.6	6.4	中世0期~I期			E-742
70	743	93A	検出	灰軸系陶器	皿	2.7	8.6	3.9	中世0期~I期			E-743
70	744	93A	検出	灰軸系陶器	皿	2.6	8.2	4.0	中世0期~I期			E-744
70	745	93A	検出	灰軸系陶器	皿	2.2	8.4	4.9	中世II期			E-745
70	746	94I	検出	灰軸系陶器	皿	1.4	7.6	4.9	中世II期			E-746
70	747	93A	検出	灰軸系陶器	折縁小皿	2.0	6.9	4.0	中世II期			E-747
70	748	94I	検出	灰軸系陶器	碗	5.4	13.9	6.8	中世II期			E-748
70	749	94I	検出	灰軸系陶器	碗	5.8	13.4	4.8	中世II期			E-749
70	750	94I	検出	灰軸系陶器	碗	4.8	13.4	5.2	中世II期			E-750
70	751	94I	検出	灰軸系陶器	碗	5.2	13.4	4.8	中世II期			E-751
70	752	94I	検出	灰軸系陶器	碗	5.3	13.6	5.2	中世II期			E-752
70	753	94I	検出	灰軸系陶器	碗	5.8	15.9	7.5	中世II期			E-753
70	754	93A	検出	灰軸系陶器	碗	3.8	13.8	4.0	中世III期~IV期			E-754
70	755	94F	検出	灰軸系陶器	碗	2.8	12.2	3.6	中世III期~IV期			E-755
70	756	94I	検出	灰軸系陶器	仏飯具	3.9	7.5	3.8	中世III期~IV期			E-756
70	757	94I	検出	灰軸系陶器	皿	1.3	8.5	5.4	中世III期~IV期			E-757
70	758	94I	検出	灰軸系陶器	皿	1.5	8.4	4.6	中世III期~IV期			E-758
70	759	94I	検出	灰軸系陶器	皿	1.4	8.0	4.5	中世III期~IV期			E-759
70	760	94I	検出	灰軸系陶器	碗	1.4	8.0	4.0	中世III期~IV期			E-760
70	761	94I	検出	土師器	皿	2.8	13.2	7.0	中世III期~IV期			E-761
70	762	94I	検出	土師器	皿	1.0	8.0	5.0	中世III期~IV期			E-762
70	763	94I	検出	土師器	皿	1.2	7.8	3.4	中世III期~IV期			E-763
70	764	94I	検出	土師器	皿	1.4	6.0	3.0	中世III期~IV期			E-764
70	765	94I	検出	土師器	皿	1.2	7.7	2.8	中世III期~IV期			E-765
70	766	94I	検出	土師器	皿	1.7	8.0	2.8	中世III期~IV期			E-766
70	767	94I	検出	土師器	皿	1.7	9.0	5.5	中世III期~IV期			E-767
70	768	94I	検出	土師器	皿	1.6	6.6	2.4	中世III期~IV期			E-768
70	769	94I	検出	土師器	鍋	(3.5)	20.2		中世III期~IV期			E-769

旧流路の遺物

SX01・SX02・旧流路IIa層

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
71	770	94G	NR01SX01	須恵器	蓋B	(2.6)			古代IIIa期	美濃須恵窯産		E-770
71	771	94G	NR01SX01	須恵器	長頸瓶	(2.6)		6.9	古代IIIa期			E-771
71	772	94G	NR01SX01	土師器	甕A	(5.0)	14.4		古代IIIa期			E-772
71	773	94G	NR01SX01	土師器	甕	(6.5)	13.2		古代IIIa期			E-773
71	774	94G	NR01 I層	須恵器	蓋B?	(2.3)	13.2		古代IIIa期			E-774
71	775	94G	NR01 I層	須恵器	碗A	(3.0)	11.9		古代IIIa期			E-775
71	776	94G	NR01 I層	須恵器	杯B	4.7	16.2	8.2	古代IIIa期			E-776
71	777	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	2.6	1.8	6.0	古代IIIb期			E-777
71	778	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	(2.4)	13.4		古代IIIb期			E-778
71	779	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	碗	(3.8)	16.9		古代IIIb期			E-779
71	780	94D	NR01 II a層	須恵器	碗A	(5.0)	16.0		古代IIIb期	猿投窯産	98	E-780
71	781	94D	NR01 II a層	須恵器	長頸瓶	(8.3)	7.7		古代IIIb期	猿投窯産		E-781
71	782	94C	NR01 II a層	土師器	甕A	14.1	13.8	7.0	古代IIIb期		97	E-782
71	783	94D	NR01 II a層	土師器	甕D	(3.4)	12.6		古代IIIb期			E-783
71	784	94D	NR01 II a層	土師器	甕D	(2.2)	20.6		古代IIIb期			E-784
71	785	94C	NR01 II a層	土師器	甕D	(2.3)	16.7		古代IIIb期			E-785
71	786	94D	NR01 II a層	土師器	甕D	(2.5)	20.0		古代IIIb期			E-786
71	787	94D	NR01 II a層	土師器	甕D	(3.3)	18.8		古代IIIb期			E-787
71	788	94C	NR01 II a層	土師器	甕D	(2.7)	17.6		古代IIIb期			E-788
71	789	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	3.5	14.4	7.7	古代IIIc期		99	E-789
71	790	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	3.0	15.2	7.7	古代IIIc期			E-790
71	791	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	3.0	14.2	7.0	古代IIIc期	墨書		E-791
71	792	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	段皿	2.6	14.6	6.2	古代IIIc期			E-792
71	793	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	段皿	3.4	15.6	7.8	古代IIIc期			E-793
71	794	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	(2.0)	15.6		古代IIIc期			E-794
71	795	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	(2.6)	13.2		古代IIIc期			E-795
71	796	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	皿	(2.4)		8.2	古代IIIc期			E-796
71	797	94D	NR01 II a層	灰軸系陶器	碗	(1.4)		6.8	古代IIIc期			E-797
71	798	94G	NR01SX02	灰軸系陶器	碗	(2.2)		6.2	古代IIIc期			E-798

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
72	799	94C	NR01 II b層	灰軸陶器	鉢	8.4	18.4	8.9	古代Ⅲc期		96	E-799
72	800	94C	NR01 II b層	灰軸陶器	鉢	(6.9)	17.2		古代Ⅲc期			E-800
72	801	94C	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	5.0	14.4	6.0	古代Ⅲc期			E-801
72	802	94D	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	(4.0)	14.6		古代Ⅲc期			E-802
72	803	94C	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	4.6	14.4	7.0	古代Ⅲc期			E-803
72	804	94D	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	(4.0)	16.4		古代Ⅲc期			E-804
72	805	94D	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	5.5	18.4	8.4	古代Ⅲc期	猿投窯産		E-805
72	806	94D	NR01 II b層	灰軸陶器	碗	(5.2)	17.2		古代Ⅲc期			E-806
72	807	94C	NR01 II b層	灰軸陶器	壺A	21.8	15.0		古代Ⅲc期	猿投窯産		E-807
72	808	94D	NR01 II b層	土師器	壺A	(3.4)	13.6		古代Ⅲc期			E-808
72	809	94D	NR01 II b層	土師器	壺A	(3.0)	13.6		古代Ⅲc期			E-809
72	810	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.8)	13.6		古代Ⅲc期			E-810
72	811	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(2.5)	15.0		古代Ⅲc期			E-811
72	812	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.4)	13.0		古代Ⅲc期			E-812
72	813	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.0)	16.0		古代Ⅲc期			E-813
72	814	94C	NR01 II b層	土師器	壺D	(2.5)	14.4		古代Ⅲc期			E-814
72	815	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.5)	16.0		古代Ⅲc期			E-815
72	816	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(6.1)	18.1		古代Ⅲc期			E-816
72	817	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(5.1)	18.5		古代Ⅲc期			E-817
72	818	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(5.5)	18.0		古代Ⅲc期			E-818
72	819	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.5)	20.0		古代Ⅲc期			E-819
72	820	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.9)	17.6		古代Ⅲc期			E-820
72	821	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.0)	19.6		古代Ⅲc期			E-821
72	822	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.6)	18.0		古代Ⅲc期			E-822
72	823	94C	NR01 II b層	土師器	壺D	(2.7)	15.2		古代Ⅲc期			E-823
72	824	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(2.9)	17.5		古代Ⅲc期			E-824
72	825	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.7)	17.6		古代Ⅲc期			E-825
72	826	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(2.9)	18.3		古代Ⅲc期			E-826
72	827	94C	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.5)	19.8		古代Ⅲc期			E-827
72	828	94D	NR01 II b層	土師器	壺D	(3.8)		5.0	古代Ⅲc期			E-828

旧滅路Ⅱc層

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
73	829	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.8	14.1	7.0	古代Ⅳa期			E-829
73	830	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.5	14.4	8.0	古代Ⅳa期			E-830
73	831	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.7	16.0	7.6	古代Ⅳa期	尾北窯産		E-831
73	832	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.2	13.2	6.0	古代Ⅳa期			E-832
73	833	93D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	5.1	15.7	8.5	古代Ⅳa期	猿投窯産		E-833
73	834	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	折縁皿	3.3	10.2	5.0	古代Ⅳa期			E-834
73	835	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(2.2)		7.8	古代Ⅳa期			E-835
73	836	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(2.6)		8.0	古代Ⅳa期			E-836
73	837	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.4	13.6	7.0	古代Ⅳa期	墨書「金」		E-837
73	838	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(2.2)		6.4	古代Ⅳa期	墨書「大」		E-838
73	839	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	瓶	(8.9)		8.4	古代ⅣaかⅣb期			E-839
73	840	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	耳皿	(1.5)	7.2	4.0	古代Ⅳ期			E-840
73	841	94D	NR01 II c層	土師器	鍋Ⅲ	(4.2)	21.4		古代Ⅳa期			E-841
73	842	94D	NR01 II c層	土師器	鍋Ⅲ	(6.1)	24.2		古代Ⅳa期			E-842
73	843	94D	NR01 II c層	土師器	鍋Ⅲ	(4.4)	20.3		古代Ⅳa期			E-843
73	844	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	5.5	15.9	7.8	古代Ⅳb期		100	E-844
73	845	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	5.4	15.8	7.8	古代Ⅳb期			E-845
73	846	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.8	14.3	7.3	古代Ⅳb期			E-846
73	847	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.4	13.3	7.0	古代Ⅳb期			E-847
73	848	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	3.4	10.0	4.6	古代Ⅳb期	東濃窯産		E-848
73	849	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	5.0	14.4	6.9	古代Ⅳb期			E-849
73	850	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	皿	2.5	12.6	5.8	古代Ⅳb期			E-850
73	851	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	皿	2.3	12.0	6.1	古代Ⅳb期			E-851
73	852	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	皿	3.2	13.5	6.4	古代Ⅳb期	東濃窯産		E-852
73	853	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	皿	2.4	11.8	5.8	古代Ⅳb期			E-853
73	854	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	皿	2.4	12.0	5.8	古代Ⅳb期			E-854
73	855	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	4.0	13.1	12.4	古代Ⅳb期	墨書「大田」		E-855
73	856	94C	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(3.0)		7.6	古代Ⅳb期	東濃窯産・墨書「大田」		E-856
73	857	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(2.4)		7.0	古代Ⅳb期	東濃窯産・墨書「大田」		E-857
73	858	94D	NR01 II c層	灰軸陶器	碗	(2.2)		7.0	古代Ⅳb期	墨書「大田」		E-858

旧滅路Ⅱ層

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
74	859	94C	NR01 II層	須恵器	壺B?	(7.6)	27.2		古代			E-859
74	860	94C	NR01 II層	須恵器	壺A	(15.5)	21.4		古代			E-860
74	861	94C	NR01 II層	須恵器	壺A	44.1	26.0	14.0	古代			E-861
74	862	94C	NR01 II層	灰軸陶器	長頸瓶	23.6	10.3	8.2	古代		101	E-862
74	863	94C	NR01 II層	灰軸陶器	長頸瓶	(25.9)		12.6	古代		102	E-863
74	864	94C	NR01 II層	灰軸陶器	長頸瓶	(22.8)		8.2	古代			E-864
75	865	94C	NR01 II層	須恵器	壺A	(38.7)		15.9	古代			E-865
75	866	94C	NR01 II層	須恵器	壺A		27.8	17.9	古代			E-866
75	867	94D	NR01 II層	灰軸陶器	壺	(3.6)	22.8					E-867
75	868	94D	NR01 II層	灰軸陶器	壺A	(5.0)	12.8					E-868
75	869	94C	NR01 II層	灰軸陶器	長頸瓶	(3.8)		10.6	古代			E-869

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
75	870	94D	NR01Ⅱ層	灰軸陶器	瓶	(4.0)		13.4				E-870
75	871	94D	NR01Ⅱ層	灰軸陶器	瓶	(3.5)		13.7				E-871
75	872	94D	NR01Ⅱ層	灰軸陶器	長頸瓶	(10.6)		11.0				E-872

旧流路Ⅲa層

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
76	873	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	小碗				中世Ⅰa期	墨書「大」		E-873
76	874	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	小碗	3.4	9.8	5.4	中世Ⅰa期			E-874
76	875	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	小碗	2.9	8.6	3.5	中世Ⅰa期			E-875
76	876	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	皿A	2.5	8.4	4.4	中世Ⅰb期			E-876
76	877	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	6.1	17.4	8.6	中世Ⅰa期			E-877
76	878	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	6.0	16.6	8.4	中世Ⅰa期			E-878
76	879	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.3	15.4	7.1	中世Ⅰc期			E-879
76	880	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.3	15.6	6.8	中世Ⅰc期			E-880
76	881	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.4	16.6	8.6	中世Ⅰb期			E-881
76	882	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	4.9	16.7	7.1	中世Ⅰb期			E-882
76	883	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.0	16.9	8.1	中世Ⅰb期			E-883
76	884	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.0	17.5	7.8	中世Ⅰa期			E-884
76	885	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	4.9	16.8	7.6	中世Ⅰc期			E-885
76	886	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.1	15.6	7.0	中世Ⅰb期			E-886
76	887	94D	NR01Ⅲa層	白磁	碗	14.9	(3.4)					E-887
76	888	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	(4.3)		8.2	中世Ⅰc期			E-888
76	889	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	鉢	(5.6)	29.8		中世Ⅰc期			E-889
76	890	93D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	鉢	(5.9)		16.0	中世Ⅰa期			E-890
76	891	94Ca	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	(3.1)		7.0	中世Ⅰc期			E-891
76	892	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	(3.5)		7.6	中世Ⅰa期			E-892
76	893	93D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	(3.5)		7.4	中世Ⅰc期			E-893
77	894	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	小碗	3.0	10.0	5.4	中世Ⅰa期			E-894
77	895	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	小碗	2.8	9.1	4.6	中世Ⅰa期			E-895
77	896	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	皿A	2.3	8.2	3.1	中世Ⅰa期			E-896
77	897	94D	NR01Ⅲa層	土師器	皿B?	2.3	9.0	4.6				E-897
77	898	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	皿A	2.2	8.2	4.6	中世Ⅰc期			E-898
77	899	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	皿B	2.4	8.2	5.0	中世Ⅰc期			E-899
77	900	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	皿C	1.3	7.4	4.6	中世Ⅱa期			E-900
77	901	94C	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	5.8	15.8	8.0	中世Ⅱa期			E-901
77	902	94C	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	5.3	16.0	8.6	中世Ⅰc期			E-902
77	903	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	5.5	16.4	6.8	中世Ⅱa期			E-903
77	904	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	4.1	15.4	7.0	中世Ⅰb期			E-904
77	905	94Cb	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	4.5	15.0	6.8	中世Ⅰc期			E-905
77	906	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	4.3	17.6	7.4	中世Ⅰa期			E-906
77	907	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	(4.5)	18.0		中世Ⅱa期			E-907
77	908	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗B	(3.4)		7.0	中世Ⅰb期			E-908
77	909	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗A	(3.7)		8.2	中世Ⅰc期			E-909
77	910	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	碗C	(5.1)		7.6	中世Ⅰc期			E-910
77	911	94D	NR01Ⅲa層	灰軸系陶器	壺	(3.9)	19.1		中世Ⅰa期			E-911
77	912	94D	NR01Ⅲa層	白磁	碗	(4.4)	15.0					E-912
77	913	94D	NR01Ⅲa層	白磁	碗	(4.6)	14.0					E-913
77	914	94D	NR01Ⅲa層	白磁	碗	(4.8)	14.6				117	E-914
77	915	94D	NR01Ⅲa層	青白磁	皿	(0.8)		4.6			117	E-915
77	916	94D	NR01Ⅲa層	土師器	伊勢型鍋	(10.0)	25.0					E-916
77	917	94D	NR01Ⅲa層	土師器	伊勢型鍋	(3.4)	19.8					E-917
77	918	94D	NR01Ⅲa層	土師器	伊勢型鍋	(3.0)	21.6					E-918
77	919	94D	NR01Ⅲa層	土師器	伊勢型鍋	(4.7)	19.0					E-919

旧流路Ⅲb層

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
78	920	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	皿C	2.0	9.0	4.2	中世Ⅰc期?			E-920
78	921	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	皿C	1.4	8.7	5.8	中世Ⅱa期			E-921
78	922	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	皿C	1.3	5.8	3.2	中世Ⅱa期			E-922
78	923	94D	NR01Ⅲb層	線軸陶器	線軸皿	1.8	9.8	4.6				E-923
78	924	94D	NR01Ⅲb層	土師器	皿B	1.3	6.8	3.0				E-924
78	925	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗A	5.0	15.6	7.5	中世Ⅰc期			E-925
78	926	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗C	5.5	12.4	4.0	中世Ⅱb期			E-926
78	927	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗C	5.0	11.2	3.8	中世Ⅲa期			E-927
78	928	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗B	3.2	13.8	15.4	中世Ⅲc期			E-928
78	929	94D	NR01Ⅲb層	線軸陶器	線軸皿	3.0	9.4	3.6	中世Ⅳb期			E-929
78	930	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗C	(1.6)		4.4	中世Ⅳa期			E-930
78	931	94Ca	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗C	(1.8)		5.0	中世Ⅲc期			E-931
78	932	94D	NR01Ⅲb層	施軸陶器	播鉢	(4.2)	28.2		中世Ⅳb期			E-932
78	933	94D	NR01Ⅲb層	施軸陶器	播鉢	(2.1)	22.8		中世Ⅲc期			E-933
78	934	94D	NR01Ⅲb層	施軸陶器	鉢	(4.6)	23.4		中世Ⅲb期			E-934
78	935	94D	NR01Ⅲb層	施軸陶器	卸皿	(3.5)	17.8		中世Ⅲb期			E-935
78	936	94D	NR01Ⅲb層	施軸陶器	鉢	(5.4)	23.6		中世Ⅲc期			E-936
78	937	94D	NR01Ⅲb層	灰軸系陶器	碗	3.6	10.4	3.8	中世Ⅲb期	墨書		E-937
78	938	94D	NR01Ⅲb層	青磁	碗	(3.4)	14.0				117	E-938
78	939	94D	NR01Ⅲb層	青磁	深碗	(3.4)	14.4					E-939
78	940	94D	NR01Ⅲb層	白磁	蓋办水注	(3.6)						E-940
78	941	94D	NR01Ⅲb層	白磁	皿		(1.8)	4.0				E-941
78	942	94D	NR01Ⅲb層	土師器	伊勢型鍋D	(1.8)	15.4					E-942

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
78	943	94D	NR01Ⅲb層	灰釉陶器	播鉢	(3.0)	28.0		中世IVa期			E-943
78	944	94D	NR01Ⅲb層	土師器	羽付鍋	(2.5)	17.6					E-944
78	945	94D	NR01Ⅲb層	土師器	羽付鍋	(3.1)	17.2					E-945
78	946	94D	NR01Ⅲb層	土師器	内耳鍋	(4.2)	17.8					E-946

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
78	947	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤B	2.4	2.1	8.3				E-947
78	948	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	2.3	1.8	7.3				E-948
78	949	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	2.9	2.8	10.7				E-949
78	950	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	2.8	2.4	8.8				E-950
78	951	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	2.5	2.4	8.0				E-951
78	952	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	2.7	2.4	10.0				E-952
78	953	94D	NR01Ⅲb層	灰釉系陶器	加工円盤A	3.7	3.6	1.7				E-953

### 文字・記号表記資料

#### 卒塔婆

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	備考	写真	登録番号
79	954	93A	SX01	木製品	卒塔婆	(10.8)	3.5	0.3	中世Ⅱ期		116	W-53

#### ヘラ記号・文字資料

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
79	955	94H	SE01	須恵器	杯	(1.2)		7.7				E-955
79	956	94A	検出	須恵器	蓋	3.9	13.4					E-956
79	957	94F	SK02	須恵器	杯	(2.0)		6.0				E-957
79	958	93F	SB01	須恵器	皿	3.5	14.8	7.1				E-958

木製品

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	備考	写真	登録番号
93	1066	94D	NR01	馬具	轡(壺部) (舌部) (吊手部)	11.0 (20.0) (24.0)	9.5 10.0 4.0		古代Ⅲb~Ⅲc		34	W-1

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	備考	写真	登録番号
94	1067	93C	SK06	生活用具	漆器	(3.7)	—	6.3	中世Ⅱb期		126	W-2
94	1068	94H	SD09	生活用具	漆器	(4.5)	14.7	—	中世Ⅳ期		123	W-3
94	1069	94H	SD07	生活用具	漆器	(8.2)	—	8.5	中世Ⅱa期		125	W-4
94	1070	94D	NR01Ⅲ層	生活用具	漆器	(2.3)	8.4	—	中世Ⅱ期			W-5
94	1071	94D	NR01Ⅱ層	生活用具	皿	3.4	18.4	9.6	古代Ⅳ期	底部に穿孔		W-54

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	備考	写真	登録番号
94	1072	94H	SK106	その他	漆製品	10.7	(5.7)	1	中世Ⅳ期			W-7
94	1073	94H	SD09	その他	漆製品	(9.2)	1.4	0.6	中世Ⅳ期			W-8
94	1074	94H	SD09	その他	漆製品	(10.2)	1.4	0.5	中世Ⅳ期			W-9
94	1075	94H	SD09	生活用具	折敷	30.8	(14.9)	0.2	中世Ⅳ期			W-10
94	1076	93C	SK06	その他	円形板	4.7	(2.4)	0.5	中世Ⅱb期			W-11
94	1077	94D	NR01Ⅱb層	生活用具	盆	17	(7.5)	0.5	古代Ⅲc期			W-12
94	1078	94C	NR01	生活用具	曲物	16.5	16.8	側0.2底0.9				W-13
95	1079	94D	NR01Ⅱc層	生活用具	曲物	17.9	(16.0)	1				W-14
95	1080	94C	NR01	生活用具	曲物	15.5	(15.4)	0.6				W-15
95	1081	94C	NR01	生活用具	曲物	16.6	16.1	0.7				W-16
95	1082	93G	SE04	生活用具	曲物	19.2	19.6	0.6	中世Ⅱa期			W-17
95	1083	94C	NR01	生活用具	曲物	(13.6)	(4.7)	0.6				W-18
95	1084	94H	SD07	生活用具	曲物	7.6	7.3	0.4	中世Ⅱa期			W-19
95	1085	94H	SK106	生活用具	曲物	7.5	7.9	0.4	中世Ⅳ期			W-20
95	1086	94H	SD18	生活用具	曲物	23.6	5.1	0.4	中世Ⅳ期			W-21
95	1087	94H	SD18	生活用具	曲物	23.6	5.1	0.4	中世Ⅳ期			W-22
95	1088	95A	SD02	生活用具	箱物	(17.0)	(3.5)	0.5	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-23
95	1089	94D	NR01Ⅲa層	生活用具	籠み物	(19.5)	(11.5)	—	中世Ⅱ期			W-24
96	1090	93A	SX01	生活用具	杓子状木製品	(25.1)			中世Ⅱ期			W-25
96	1091	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	(24.4)	0.7	0.6	中世Ⅳ期			W-26
96	1092	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	23.2	0.8	0.5	中世Ⅳ期			W-27
96	1093	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	22.5	0.7	0.6	中世Ⅳ期			W-28
96	1094	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	22.5	0.6	0.5	中世Ⅳ期			W-29
96	1095	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	23.1	0.7	0.5	中世Ⅳ期			W-30
96	1096	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	21.5	0.7	0.5	中世Ⅳ期			W-31
96	1097	94H	SD09	生活用具	箸状木製品	18.5	0.6	0.3	中世Ⅳ期			W-32
96	1098	95A	SD02	生活用具	箸状木製品	24.8	0.8	0.6	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-33
96	1099	95A	SD02	生活用具	箸状木製品	21.4	0.7	0.5	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-34
96	1100	94H	SD11	生活用具	杓子状木製品	17.2	4.3	0.7	中世Ⅳ期		129	W-35
96	1101	94H	SK106	生活用具	杓子状木製品	17.1			中世Ⅳ期		128	W-36
96	1102	94H	SD18	装身具・履物	下駄	16.2	7.8	—	中世Ⅳ期		133	W-37
96	1103	95A	SD02	装身具・履物	下駄	19.9	(8.7)	(1.0)	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-38
96	1104	94C	NR01	装身具・履物	下駄	23.9	11.5	1.5	古代Ⅲ期		132	W-39
97	1105	94H	SD09	装身具・履物	櫛	(3.9)	(4.3)	1	中世Ⅳ期			W-40
97	1106	93A	SK10	生産用具	籠具	18.7	6.5	6.5	中世Ⅱa期		122	W-41
97	1107	94H	SD09下層	その他	板	(29.7)	(9.7)	1	中世Ⅳ期			W-42
97	1108	94H	SD09下層	その他	角材	(28.7)	6.3	3.4	中世Ⅳ期			W-43
97	1109	94H	SD09	その他	角材	(23.1)	4.9	2.4	中世Ⅳ期			W-44
97	1110	94C	NR01	その他	角材	(47.4)	6.1	3.9				W-45
97	1111	94H	SD09	その他	板	19.2	2.8	0.7	中世Ⅳ期			W-46
97	1112	95A	SD02	その他	加工木	(12.4)	(1.9)	1	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-47
97	1113	94H	SD09	その他	加工木	(10.4)	0.6	0.7	中世Ⅳ期			W-48
97	1114	94H	SD09	その他	羽子板状木製品	44.6	6.8 3.6	0.7	中世Ⅳ期		130	W-49
97	1115	93A	SX01下層	信仰・呪術	卒塔婆	(12.3)	2.1	0.1	中世Ⅱ期			W-50
97	1116	95A	SD02	信仰・呪術	籠物	11.1	(2.2)	(1.2)	中世Ⅲ~Ⅳ期			W-51

石製品

図版	No.	調査区	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	備考	写真	登録番号
98	1117	94I	SK12	砥石	泥質凝灰岩	(6.0)	(4.7)	1.9	中世Ⅱb期			S-4
98	1118	94I	SD08	砥石	泥質凝灰岩	(6.2)	(5.2)	3.3	中世Ⅱ期			S-5
98	1119	94F	検出	砥石	凝灰岩	(7.2)	(3.8)	0.7				S-6
98	1120	93A	SX01	砥石	凝灰岩	(6.8)	(3.8)	2.1	中世Ⅱ期			S-7
98	1121	94I	検出	砥石	凝灰岩	10.8	6.0	3.9				S-8
98	1122	93G	SE04	砥石	凝灰岩	(13.4)	6.0	2.5	中世Ⅱa期			S-9
98	1123	94I	SD08	砥石	凝灰岩	(6.9)	(7.2)	3.2	中世Ⅱ期			S-10
98	1124	94I	SB01	砥石	凝灰岩	(13.5)	12.0	8.1	古代Ⅲa期			S-11
98	1125	93B	検出	砥石	砂岩	(16.8)	12.5	9.5				S-12

金属製品

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	時期	写真	登録番号
99	1126	93C	SK06	鉄製品	小刀	(23.5)	2.6	0.5	中世Ⅱb期		M-2

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	時期	写真	登録番号
100	1127	94D	NR01Ⅲa層	鉄製品	羽釜	24.1	10.7		中世O期	118	M-1

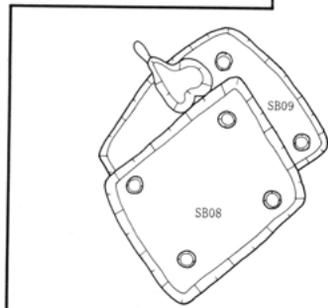
図版	No.	調査区	遺構	種類	銭貨種類	備考				写真	登録番号
101	1128	93A	検出	銅製品	銭貨	開元通寶	隸書	唐	武徳4年	621	M-4
101	1129	93A	検出	銅製品	銭貨	淳化元寶	行書	北宋	淳化元年	990	M-5
101	1130	93A	検出	銅製品	銭貨	至道元寶	行書	北宋	至道元年	995	M-6
101	1131	93A	検出	銅製品	銭貨	景德元*		北宋	景德元年	1004	M-7
101	1132	93D	検出	銅製品	銭貨	祥符元寶	楷書	北宋	大中祥符元年	1008	M-8
101	1133	93A	検出	銅製品	銭貨	祥符通寶		北宋	大中祥符2年	1009	M-9
101	1134	93A	検出	銅製品	銭貨	天聖元寶	篆書	北宋	天聖元年	1023	M-10
101	1135	94A	SD01	銅製品	銭貨	天聖元寶		北宋	天聖元年	1023	M-11
101	1136	93A	検出	銅製品	銭貨	皇宋通寶		北宋	皇元2年	1039	M-12
101	1137	93B	検出	銅製品	銭貨	皇宋通寶	篆書	北宋	皇元2年	1039	M-13
101	1138	93A	検出	銅製品	銭貨	熙寧元寶		北宋	熙寧元年	1068	M-14
101	1139	93A	検出	銅製品	銭貨	元豐通寶	行書	北宋	元豐元年	1078	M-15
101	1140	94A	検出	銅製品	銭貨	元豐通寶	行書	北宋	元豐元年	1078	M-16
101	1141	93B	検出	銅製品	銭貨	元祐通寶	行書	北宋	元祐元年	1078	M-17
101	1142	93A	検出	銅製品	銭貨	聖宋元寶	篆書	北宋	建中靖國元年	1101	M-18
101	1143	94D	検出	銅製品	銭貨	聖宋元寶	篆書	北宋	建中靖國元年	1101	M-19
101	1144	94A	検出	銅製品	銭貨	政*通*		北宋	政和元年	1111	M-20
101	1145	93G	検出	銅製品	銭貨	*和*寶					M-21
101	1146	93A	検出	銅製品	銭貨	嘉定通寶		南宋	嘉定元年～	1208	M-22
101	1147	93A	検出	銅製品	銭貨	皇宋元寶		南宋	皇祐元年	1253	M-23
101	1148	94A	検出	銅製品	銭貨	洪武通寶		明	洪武元年	1368	M-24
101	1149	94A	検出	銅製品	銭貨	寛永通寶					M-25
101	1150	93G	検出	銅製品	銭貨	寛永通寶					M-26
101	1151	93c	検出	銅製品	銭貨	寛永通寶					M-27

その他・特殊遺物

図版	No.	調査区	遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	写真	登録番号
102	1152	93A	SK52	土製品	製塩土器	(3.4)	(1.3)				E-1066
102	1153	94D	NR01Ⅲa層	土製品	製塩土器	(3.5)	(2.5)				E-1067
102	1154	94H	検出	土製品	製塩土器	(3.2)	(1.7)				E-1068
102	1155	93A	SK03	須恵器?	紡錘車	2.4	4.0				E-1069
102	1156	94G	SX02	木製品	呪符木簡	(32.0)	2.0	0.7	古代Ⅲc期	115	W-52
102	1157	93D	検出	石製品	管玉	1.8	0.8	0.8	石材 凝灰岩	120	S-1
102	1158	94I	SB02			(3.3)	1.9	0.4	石材 凝灰岩	121	S-2
102	1159	94C	検出	銅製品	耳環	2.1	2.1	0.5		119	M-3
102	1160	93G	SD10	石製品	板碑未製品	29.2	7	2.2	石材 緑泥片岩		S-3

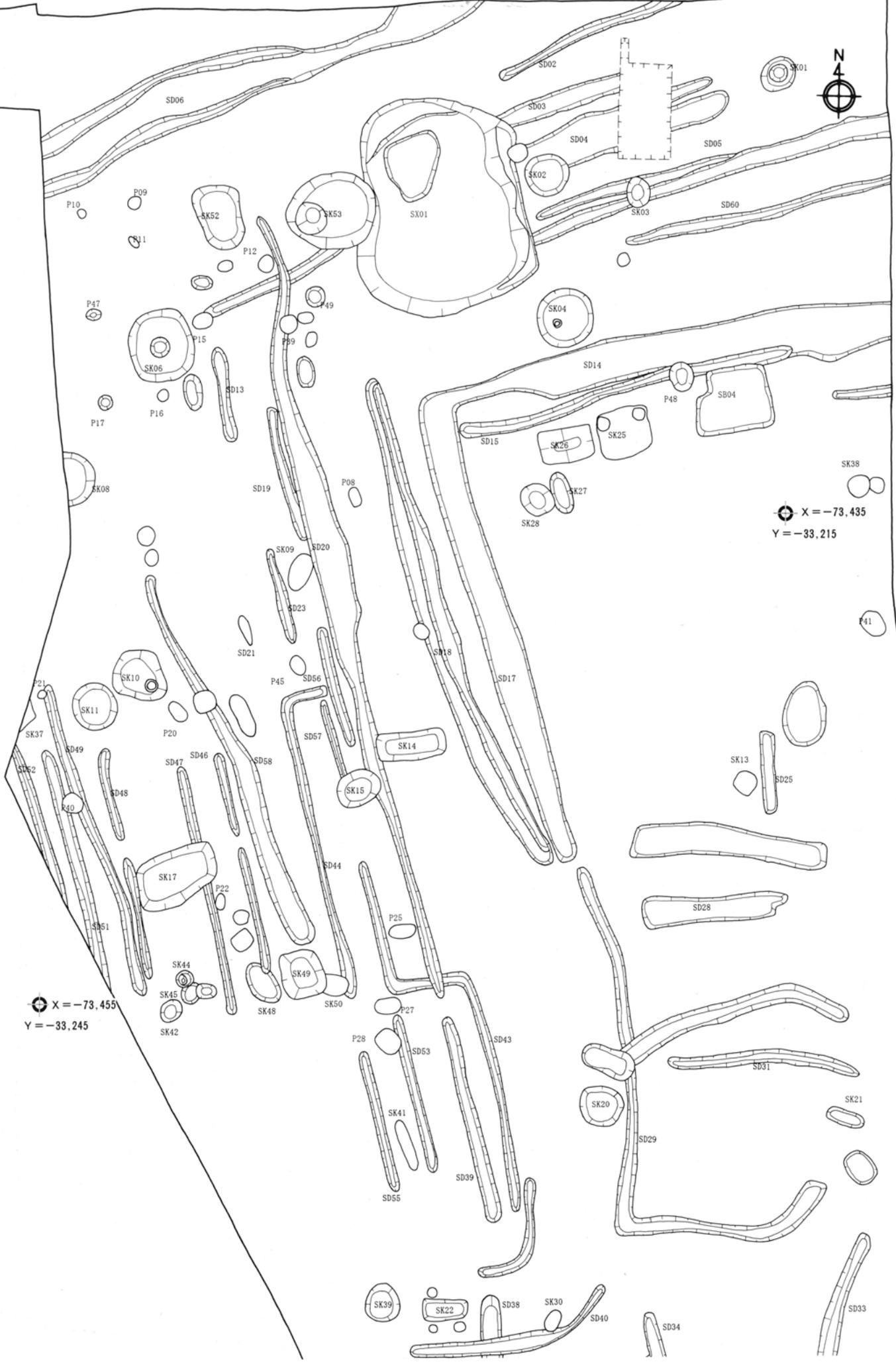


⊕ X = -73.420  
Y = -33.240

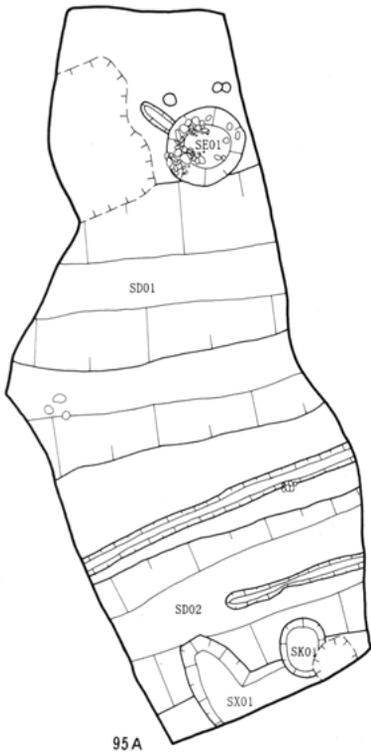


⊕ X = -73.465  
Y = -33.235

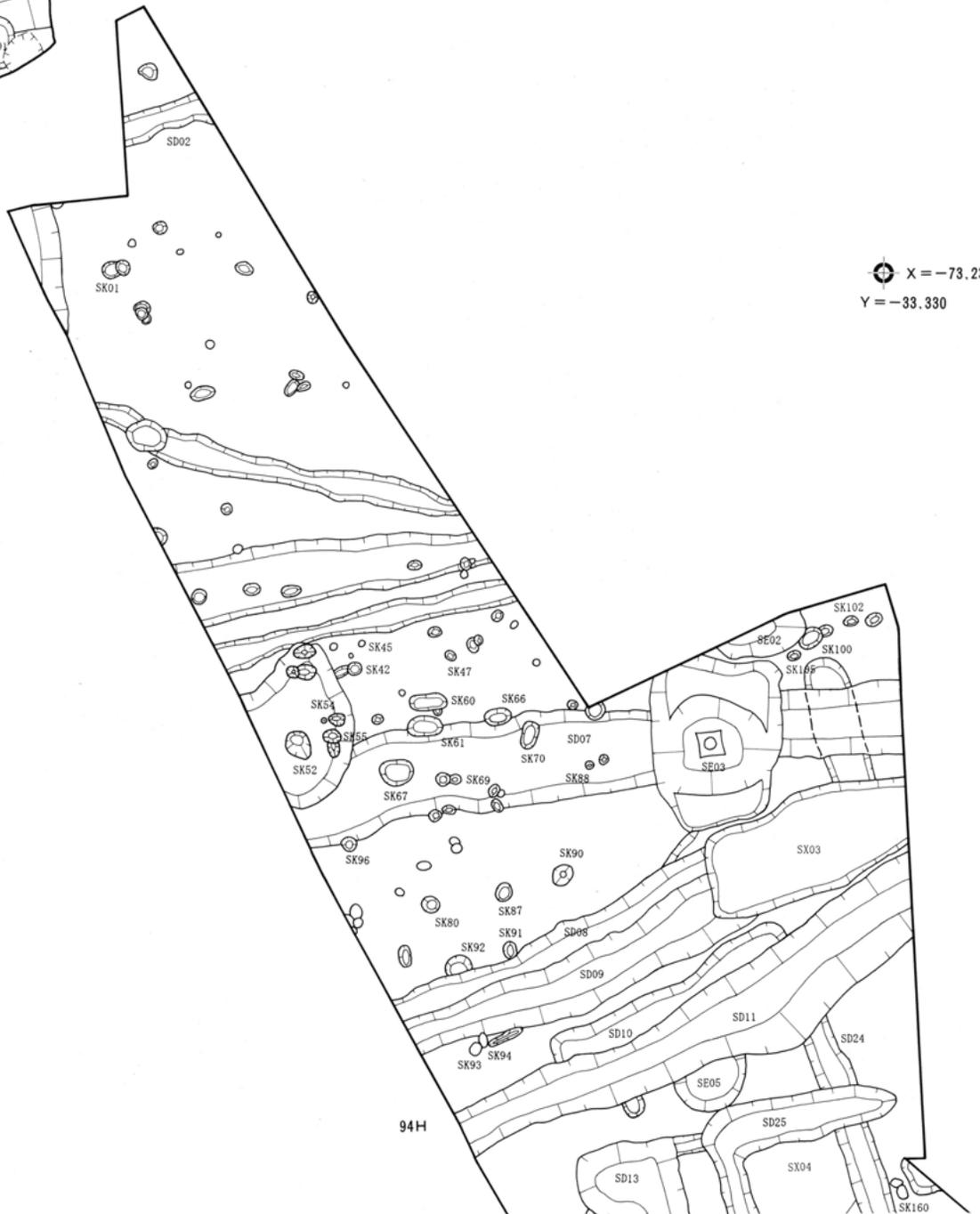
図版 1 93A2 遺構詳細図 (S=1/200)



図版2 93A遺構詳細図 (S=1/200)



95A



X = -73.230  
Y = -33.330

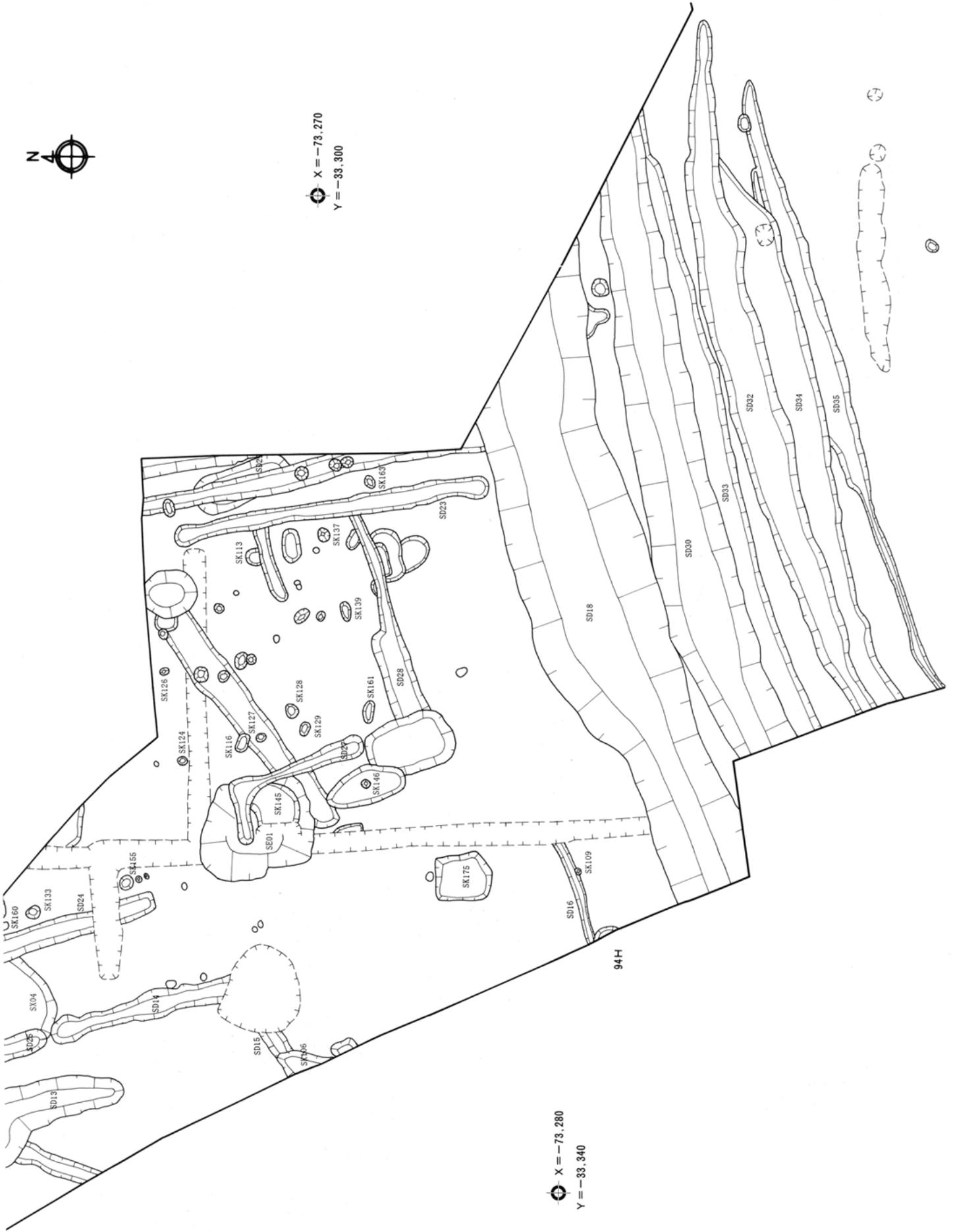
X = -73.250  
Y = -33.360

94H

図版3 95A、94H遺構詳細図(1) S=1/200

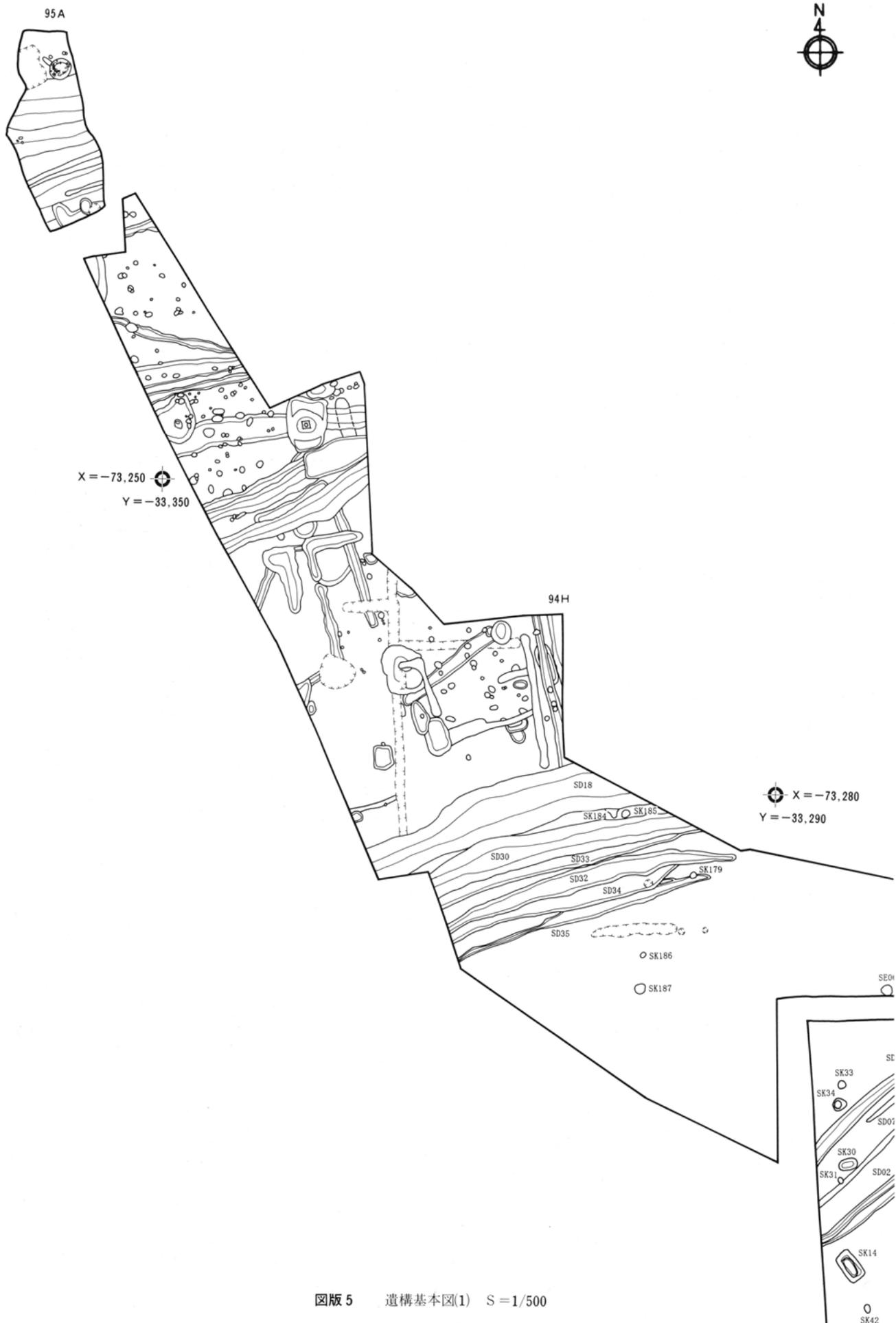


● X = -73.270  
Y = -33.300

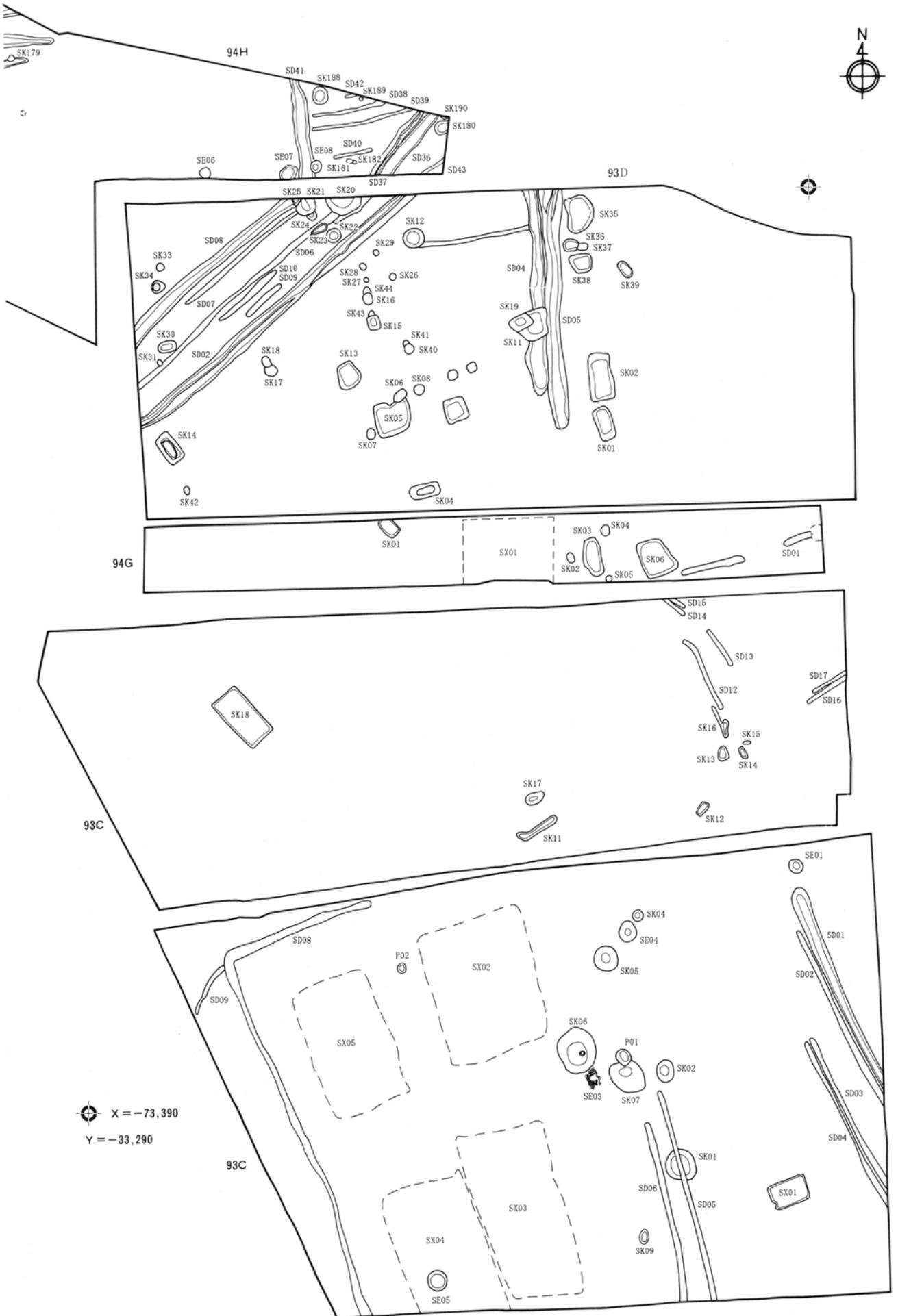


● X = -73.280  
Y = -33.340

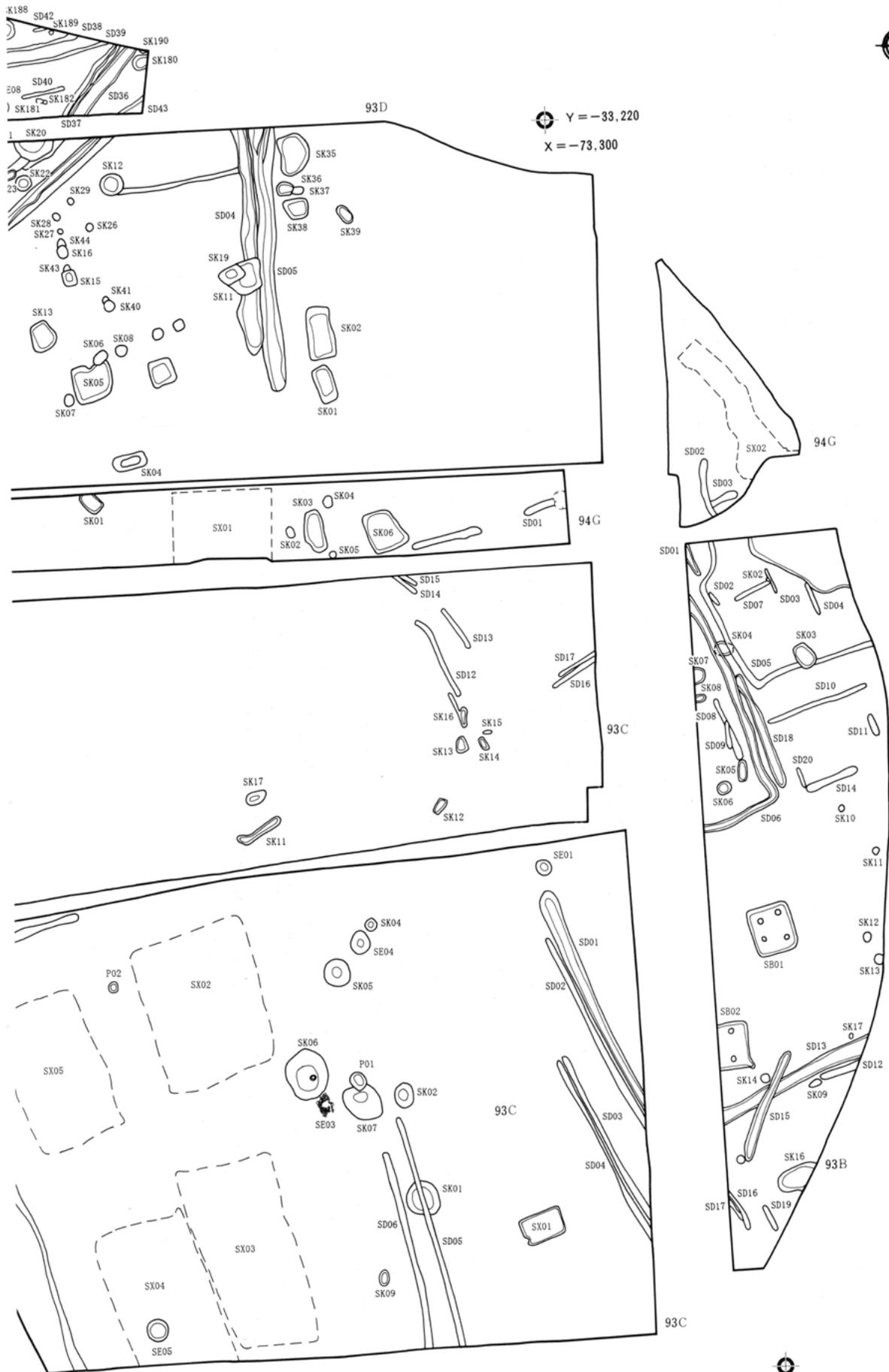
図版4 94H 遺構詳細図(2) S=1/200



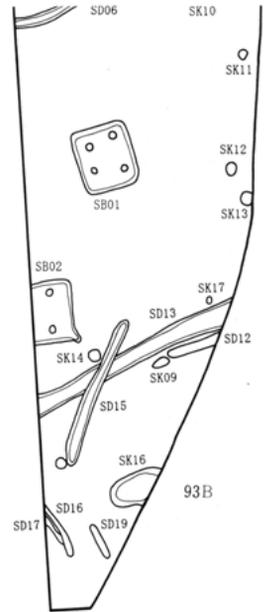
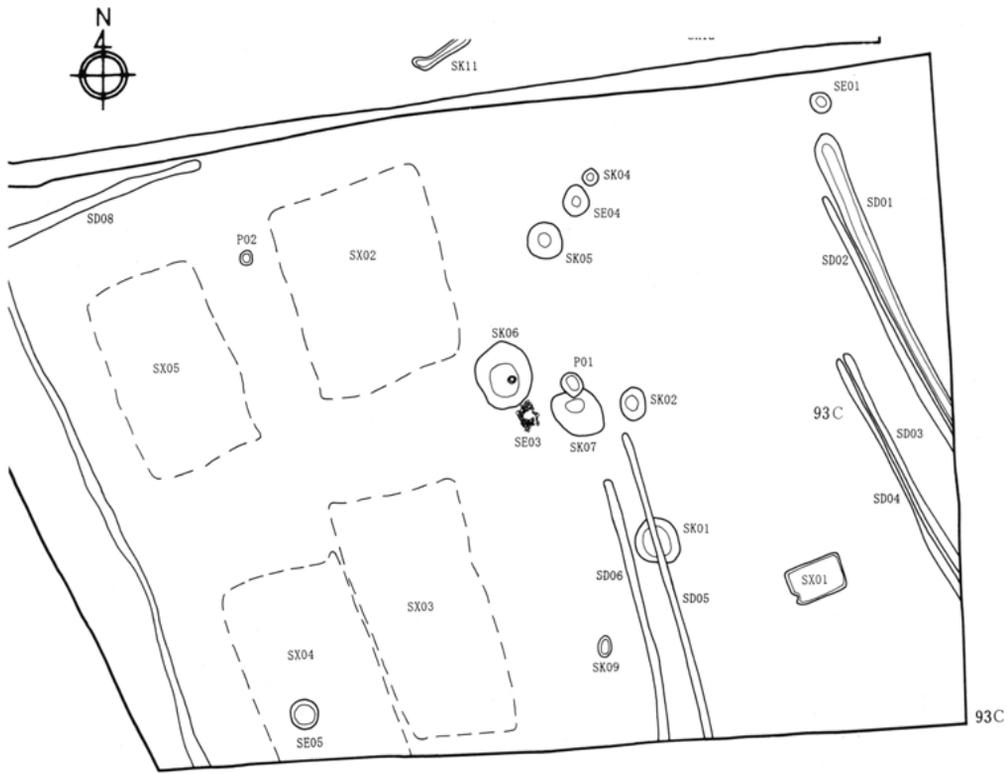
図版 5 遺構基本図(1) S=1/500



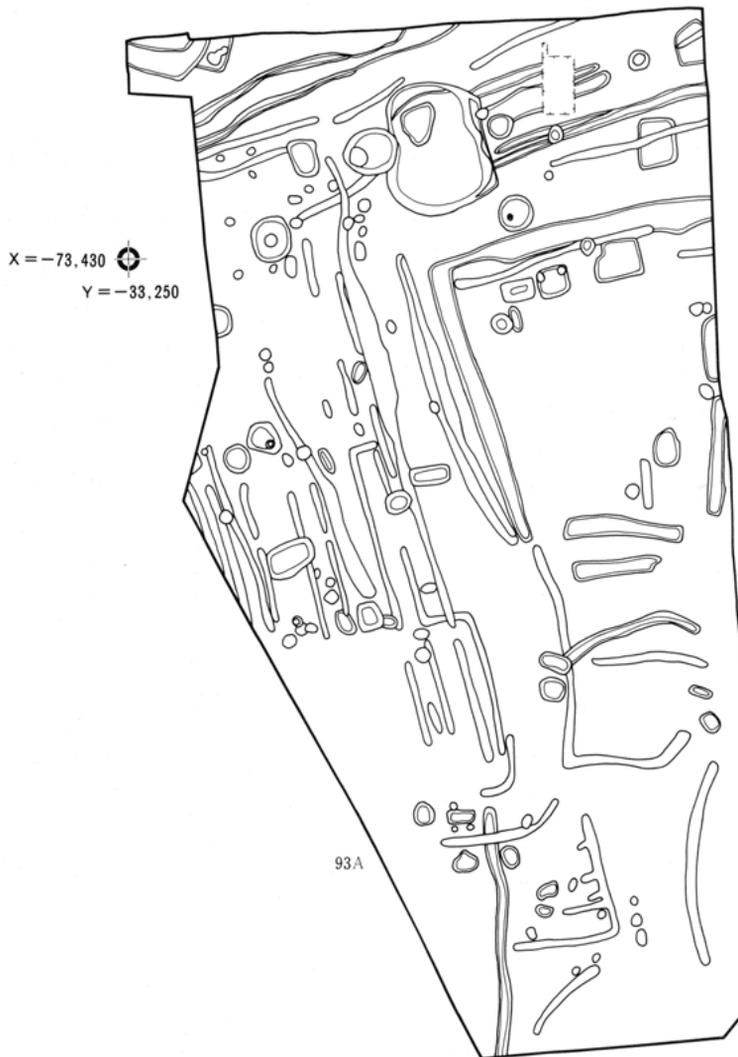
图版 6 基本遺構図(2) S = 1/500



図版 7 基本遺構図(3) S=1/500



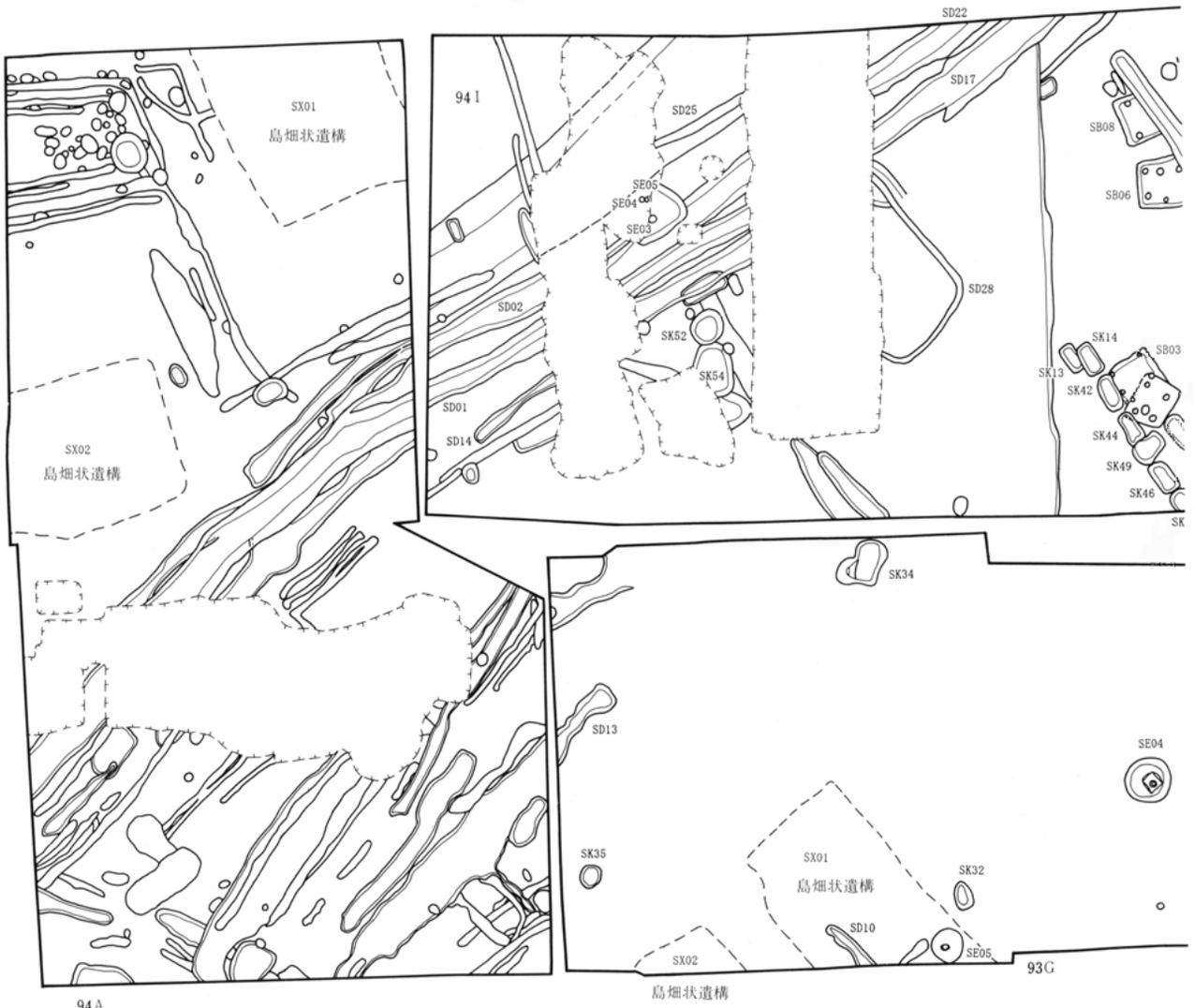
 X = -73.410  
 Y = -33.200



 X = -73.430  
 Y = -33.250

 X = -73.470  
 Y = -33.200

図版 8 基本遺構図(4) S=1/500

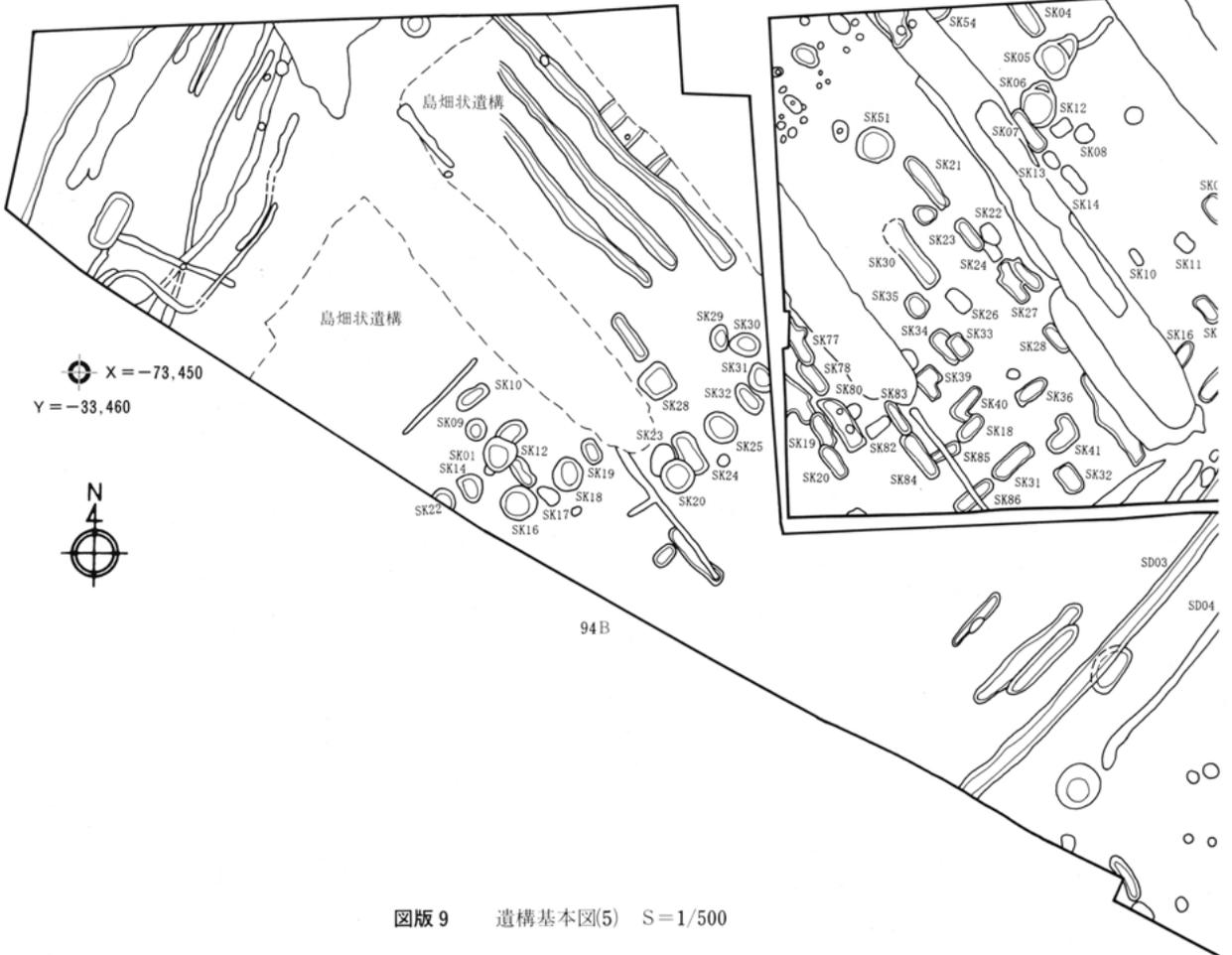


94A

島畑状遺構

93G

X = 73,420  
Y = -33,385



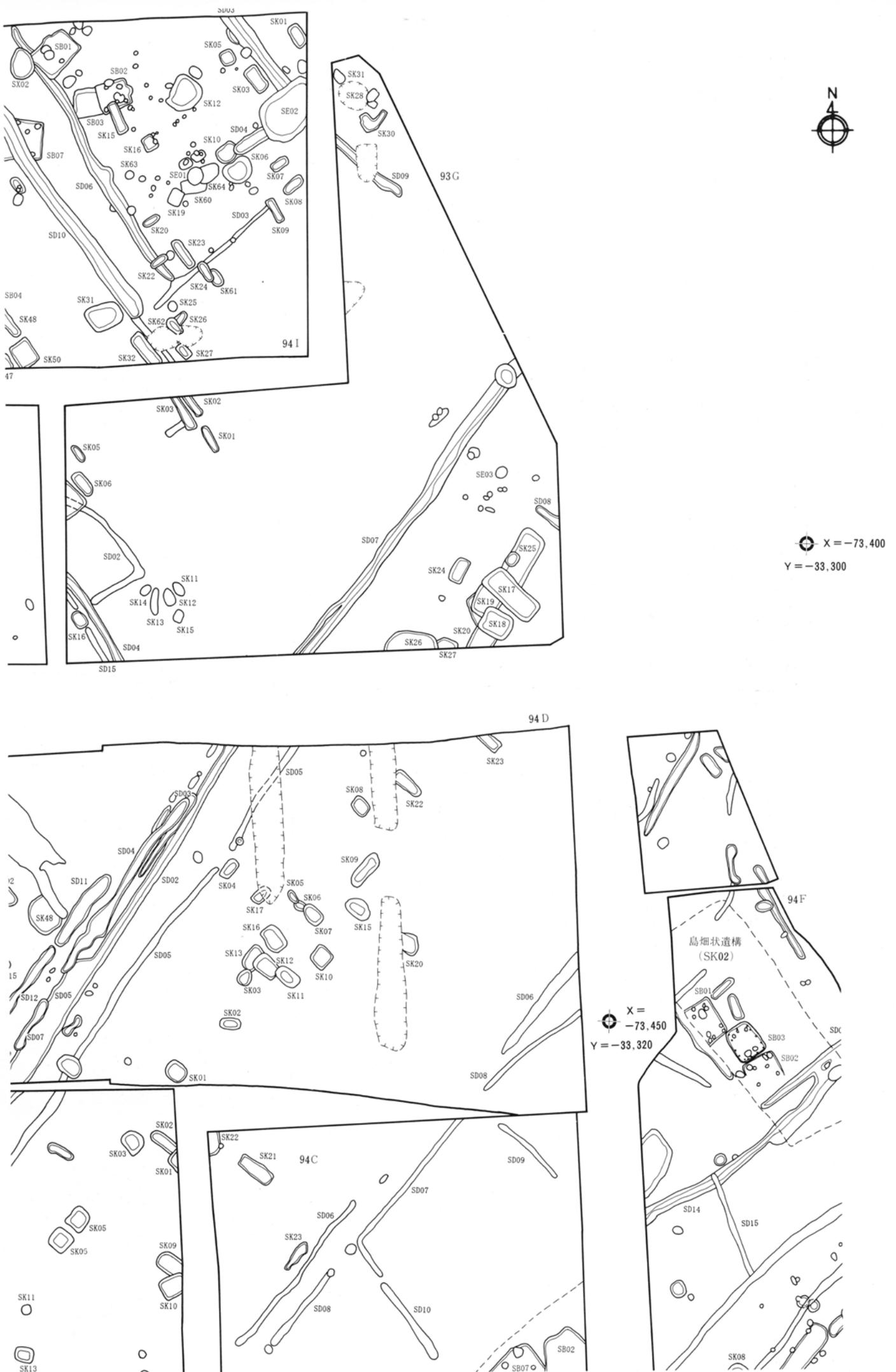
X = -73,450  
Y = -33,460



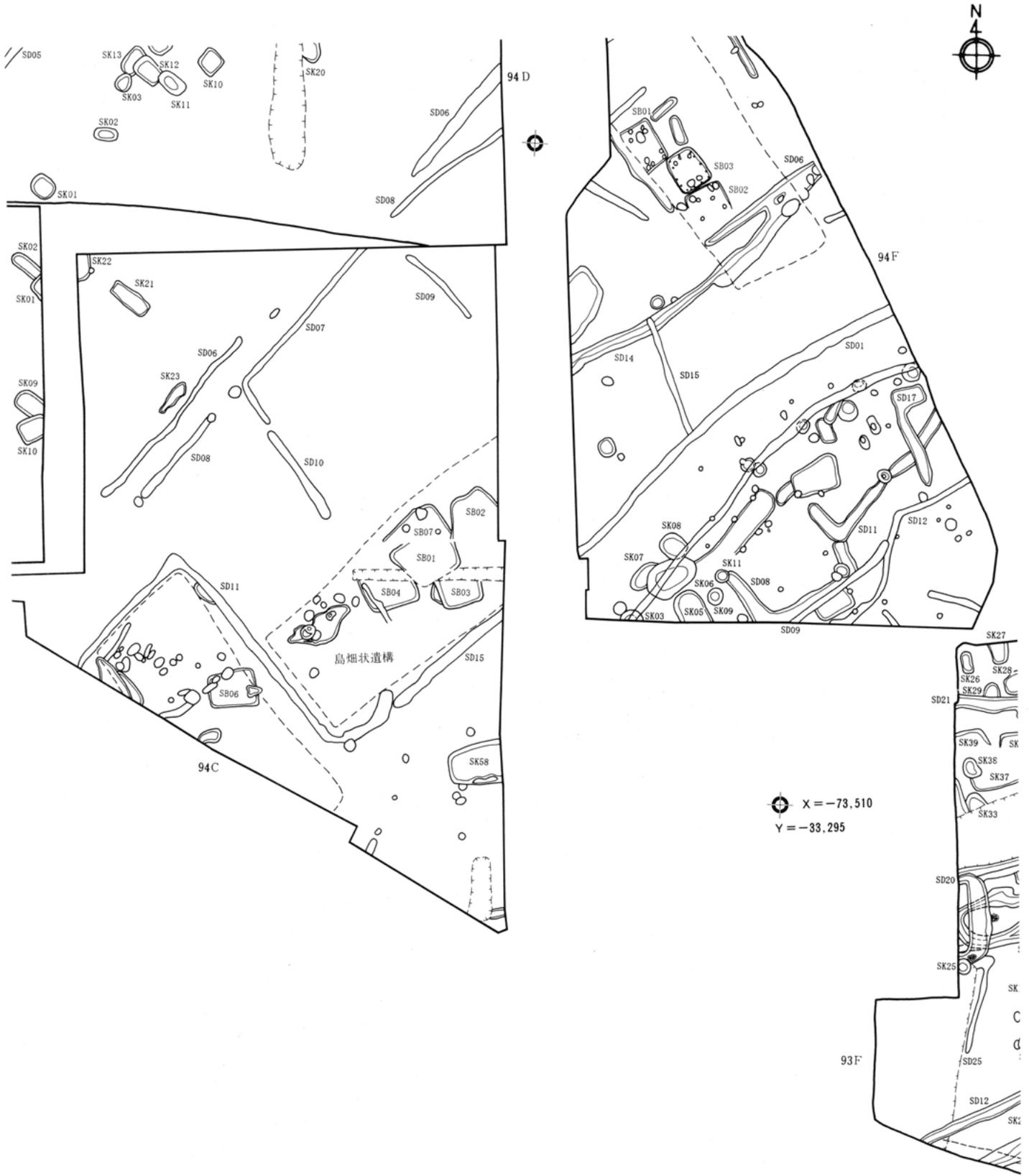
94B

94E

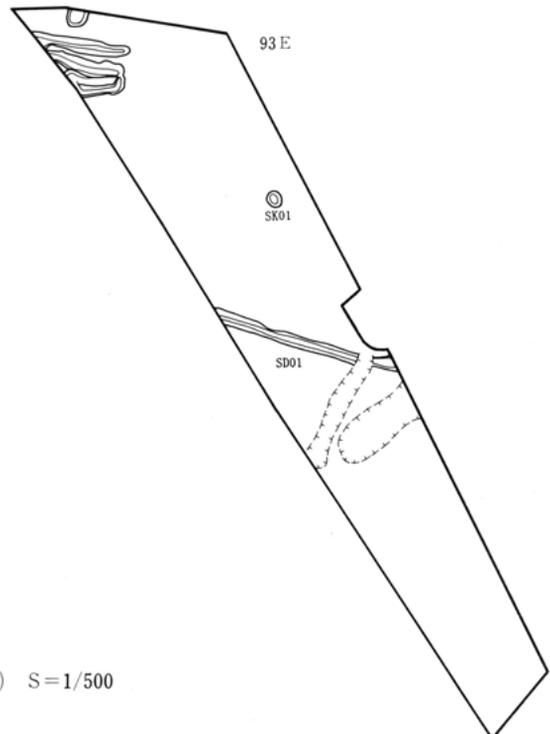
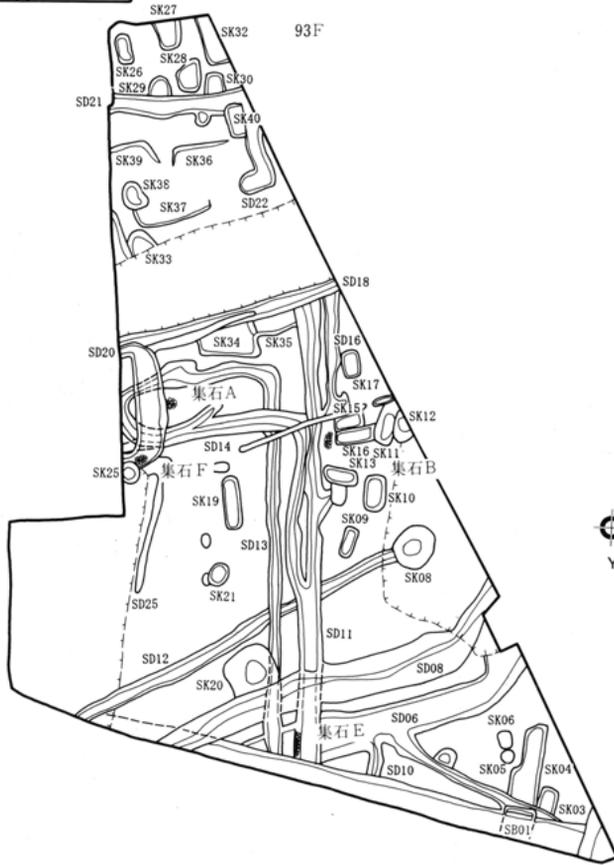
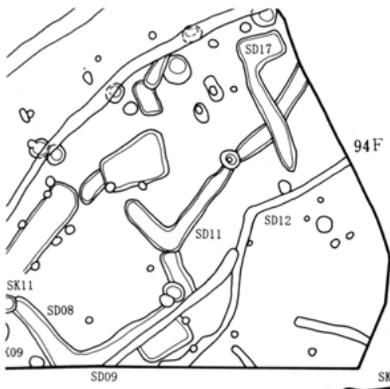
図版9 遺構基本図(5) S=1/500



図版10 遺構基本図(6) S=1/500

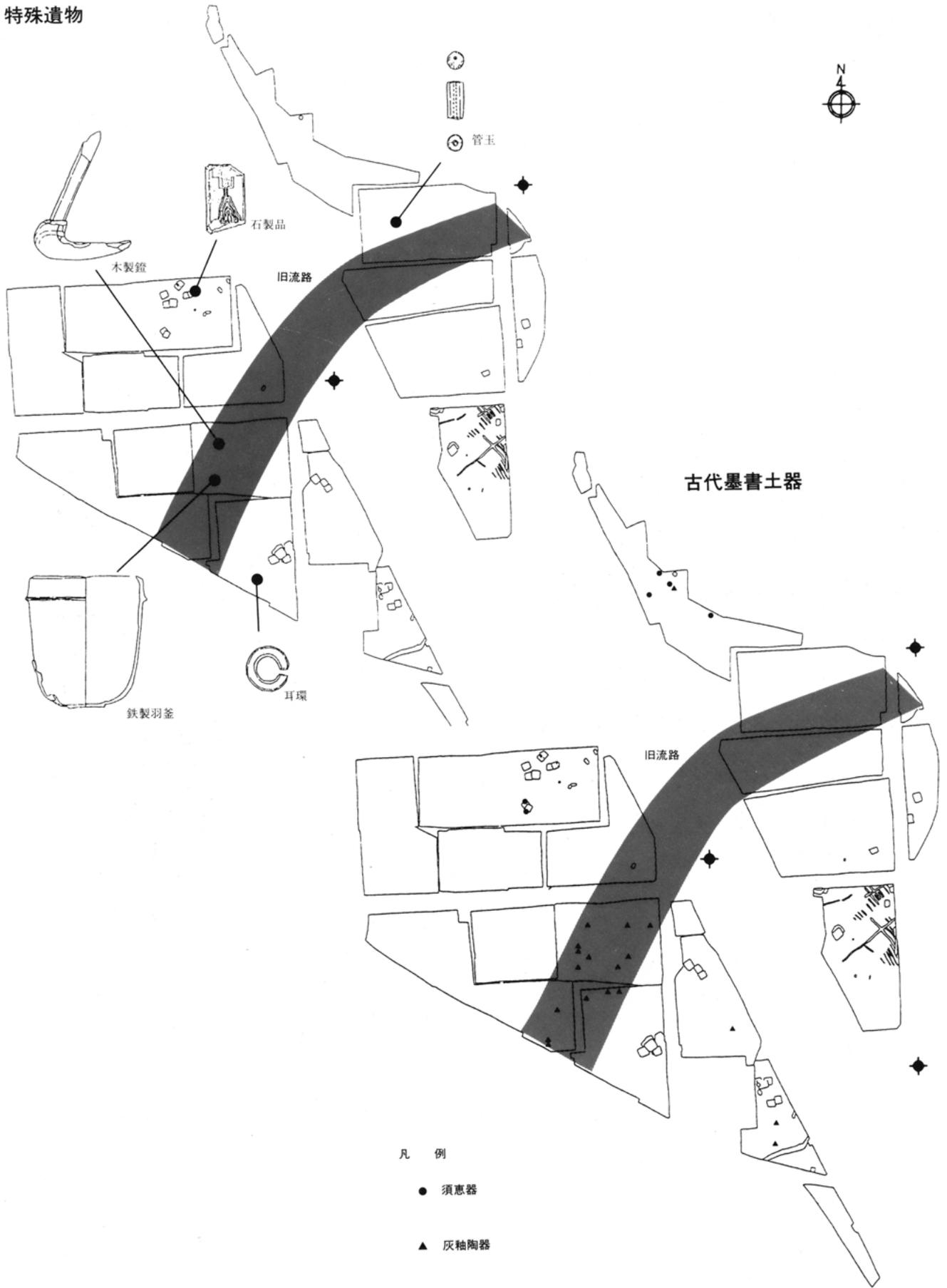


図版11 遺構基本図(7) S=1/500



图版12 遺構基本図(8) S=1/500

特殊遺物



図版13 特殊遺物と古代墨書土器分布図

墨書土器



凡 例

- 中世0期・I期
- 中世II期
- ▲ 中世III期
- △ 時期不明

图版14 中世墨書土器分布图

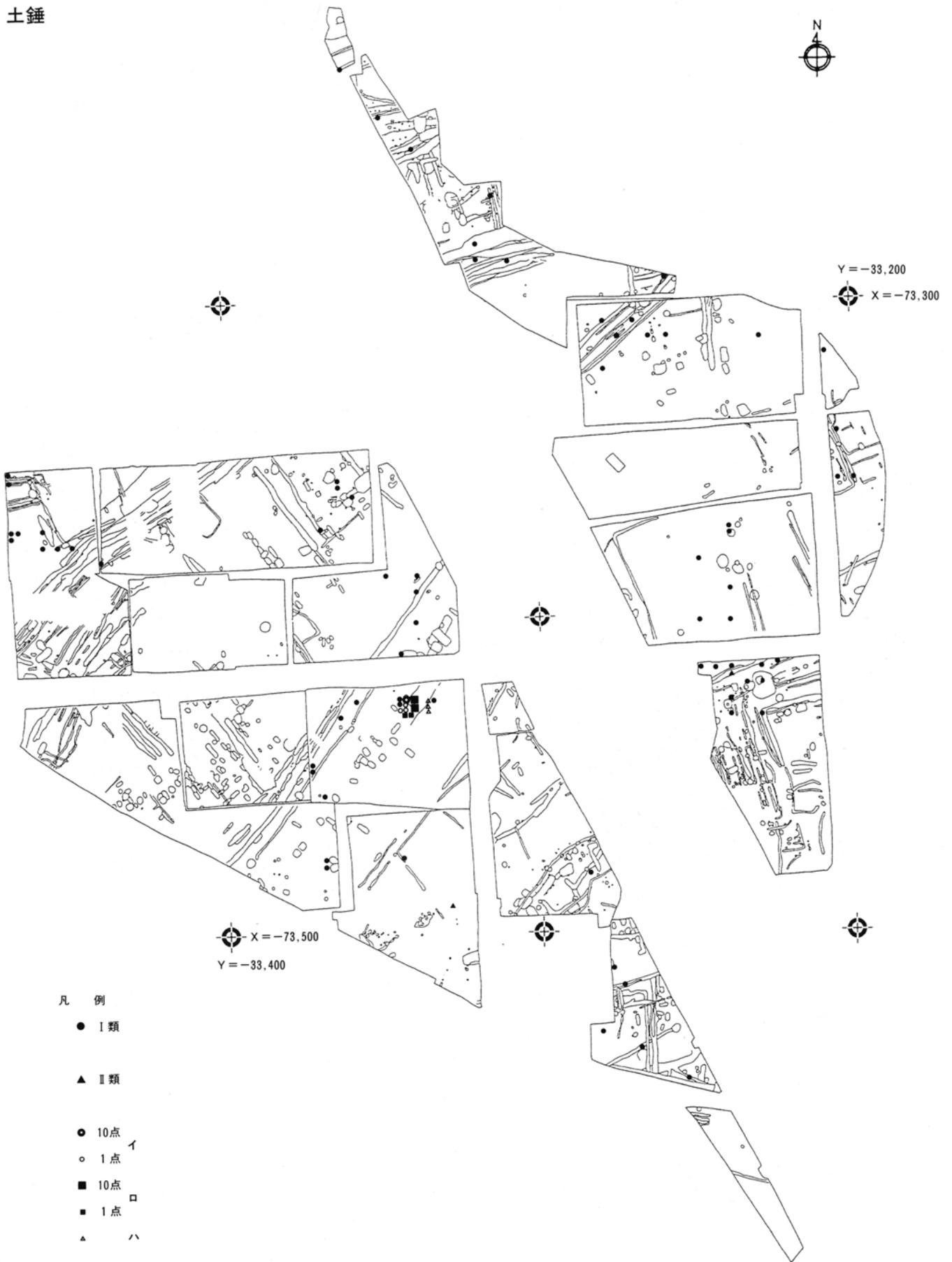
陶丸・加工円盤



- 凡 例
- 1点 加工円盤
  - 5点
  - ▲ 陶丸

図版15 陶丸・加工円盤分布図

土鍾



凡 例

● I類

▲ II類

● 10点

○ 1点

■ 10点

□ 1点

▲ 八

图版16 土鍾分布图

貿易陶磁器

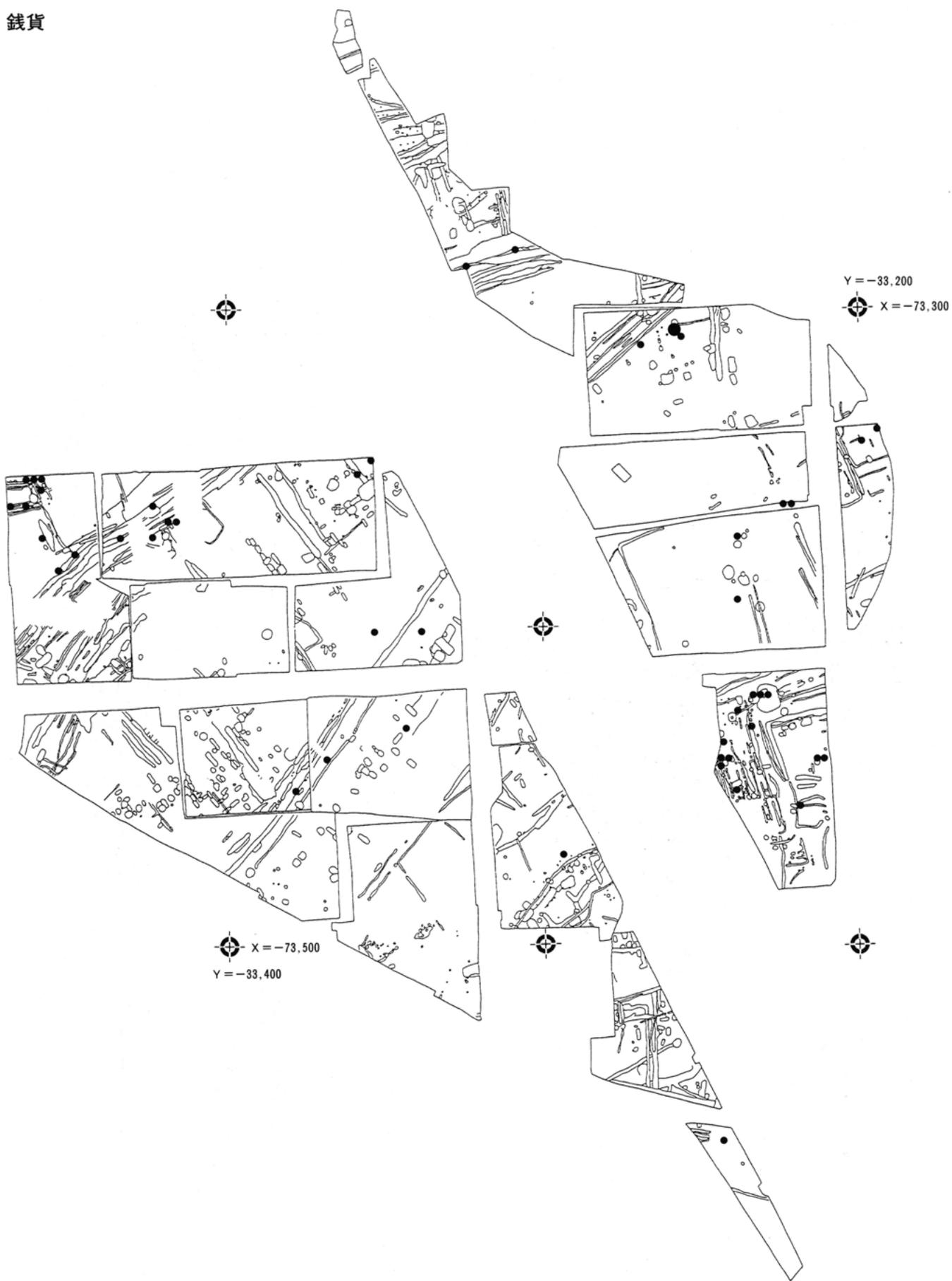


凡 例

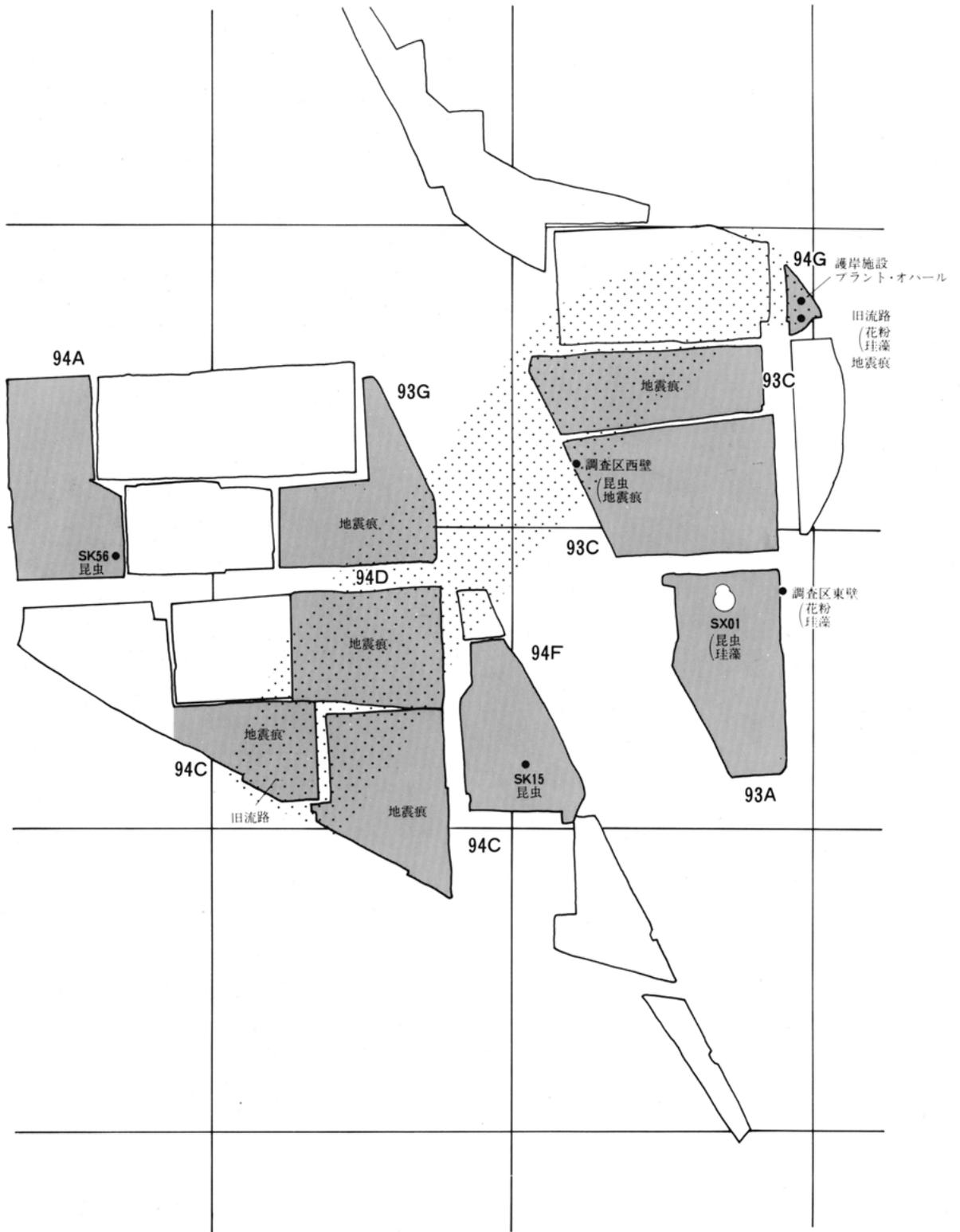
- 1点 青磁
- 5点
- 1点 白磁
- 5点
- ▲ 青白磁

图版17 貿易陶磁器分布图

錢貨



図版18 錢貨分布図



図版19 分析試料採取位置図

# 写真図版

## 写真図版目次

- 写真1 遺跡遠景北から  
写真2 遺跡から北東を望む  
写真3 93A下面全景  
写真4 93ASB08・09  
写真5 94FSB03  
写真6 94ISB04  
写真7 94ISB02  
写真8 94CSB06  
写真9 94ISB02  
写真10 94CSB06  
写真11 93ASB07  
写真12 93ASB01  
写真13 93A居住域Ⅰ全景  
写真14 93A居住域Ⅰ北から  
写真15 93ASX01  
写真16 93ASK04  
写真17 93A畝状遺構  
写真18 93A昆虫土坑  
写真19 94ISE02  
写真20 94HSE02  
写真21 93GSE04  
写真22 93CSE03  
写真23 94D旧流路Ⅱ層除去前  
写真24 94D方形土坑群  
写真25 94DSK13  
写真26 94D旧流路セクション  
写真27 94D旧流路Ⅱ・Ⅲ層除去後  
写真28 94GSX02  
写真29 94GSX01敷葉除去後  
写真30 94GSX01セクション  
写真31 94GSX01木組  
写真32・33 94GSX01敷葉  
写真34-1～3 木製籬  
写真35～44 古代Ⅰ～Ⅱ期出土遺物  
写真45～52 古代Ⅲ期出土遺物  
写真53～63 古代Ⅲ～Ⅳ期出土遺物  
写真64 93ASX01出土遺物集合写真  
写真65 94HSD18出土遺物集合写真  
写真66～76 93ASX01出土遺物  
写真77～88 93GSE05出土遺物  
写真89 中世Ⅳ期土師器皿集合写真  
写真90～92 94HSD09土師器皿  
写真93～95 94HSD18土師器皿  
写真96～102 旧流路出土遺物  
写真103 土錘集合写真  
写真104 陶丸・加工円盤集合写真  
写真105～114 墨書土器  
写真115 呪符状木簡  
写真116 卒塔婆  
写真117-1・2 貿易陶磁器集合写真  
写真118-1・2 鉄製羽釜  
写真119 耳環  
写真120 管玉  
写真121 不明石製品  
写真122 編具  
写真123～126 漆器椀  
写真127 杓子状木製品・箸状木製品集合写真  
写真128・129 杓子状木製品  
写真130 羽子板状木製品  
写真131 下駄集合写真  
写真132・133 下駄  
写真134 93A珪藻遺骸顕微鏡写真  
写真135 珪藻遺骸顕微鏡写真  
写真136-1・2 93A花粉化石(1)・(2)  
写真137 93G花粉化石  
写真138 94GSX01の植物珪酸体顕微鏡写真  
写真139 出土木製品樹種顕微鏡写真  
写真140 濃尾平野南から望む(カラー)  
写真141 旧流路出土遺物集合写真(カラー)  
写真142 木製籬(カラー)  
写真143 胎土中の重鉱物1(カラー)  
写真144 胎土中の重鉱物2(カラー)  
写真145 昆虫化石顕微鏡写真(カラー)



写真1 遺跡遠景北から

写真2 遺跡から北東を望む

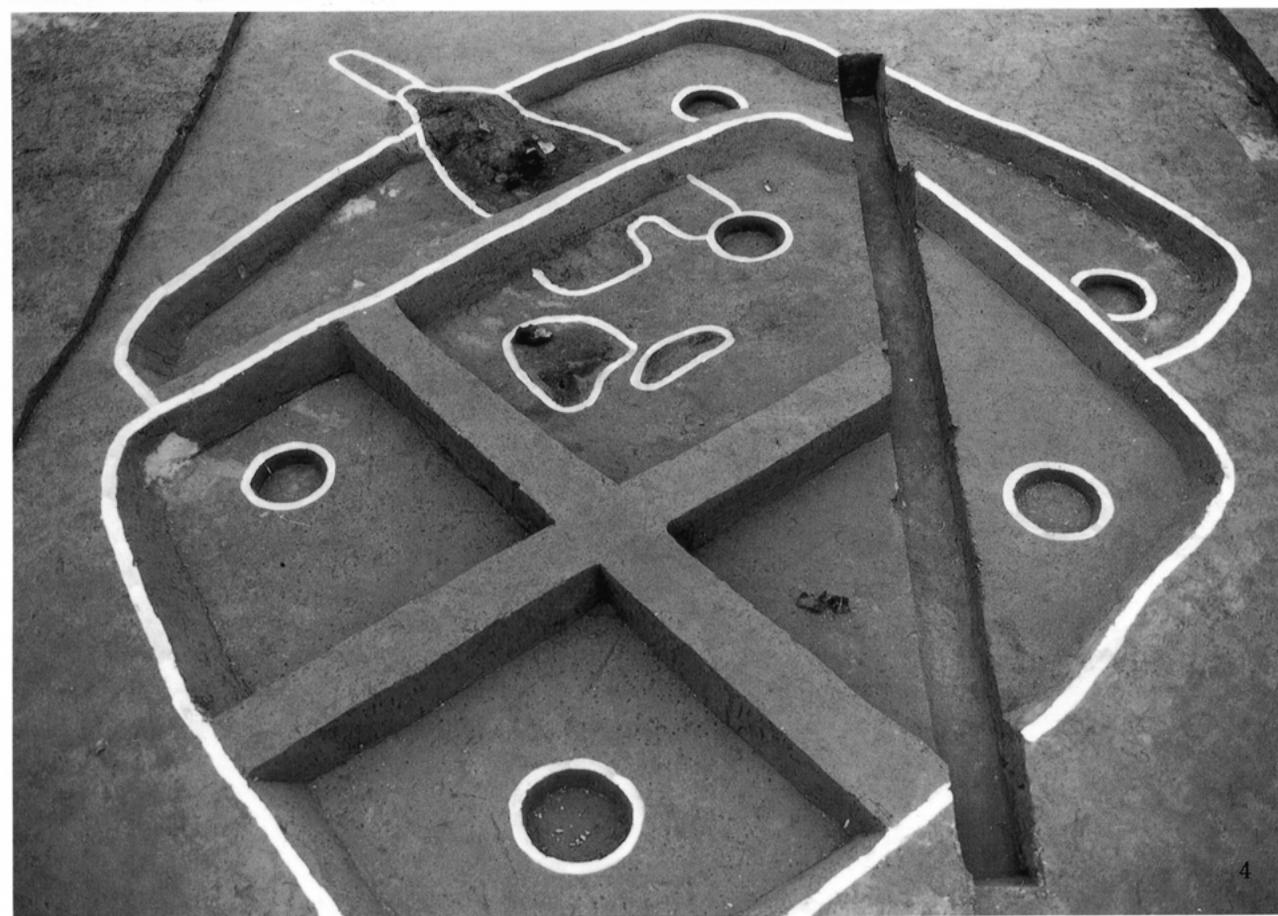


写真3 93A下面全景

写真4 93A SB08・09

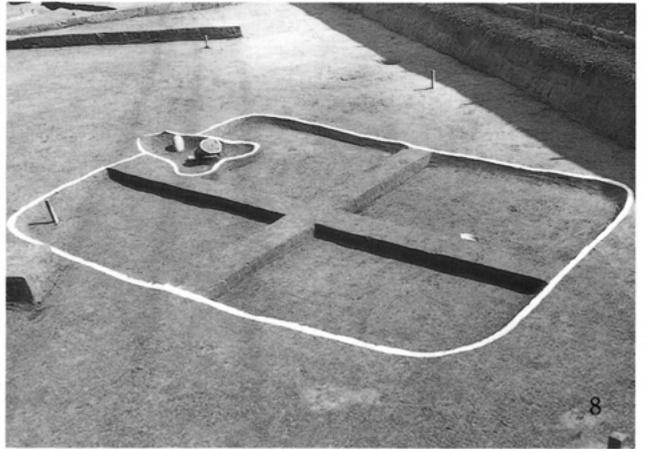
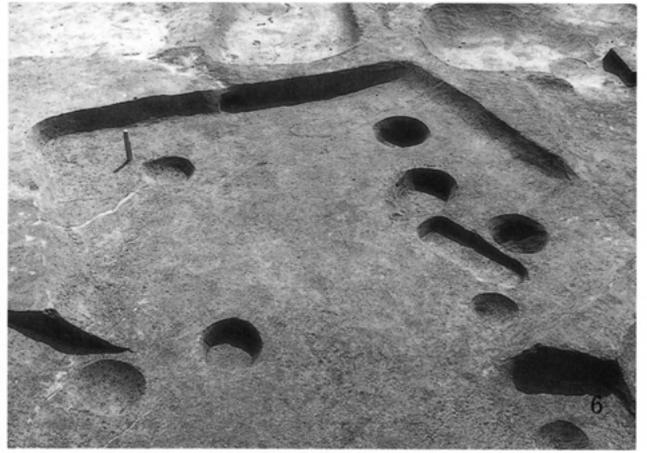
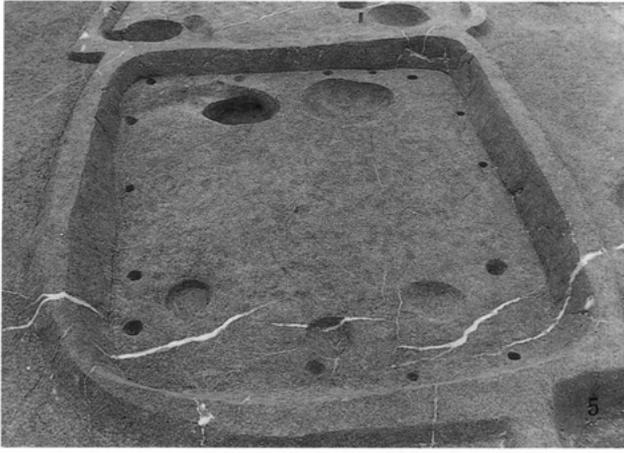


写真5 94F SB03

写真7 94I SB02

写真6 94I SB04

写真8 94C SB06

写真9 94I SB02

写真11 93A SB07

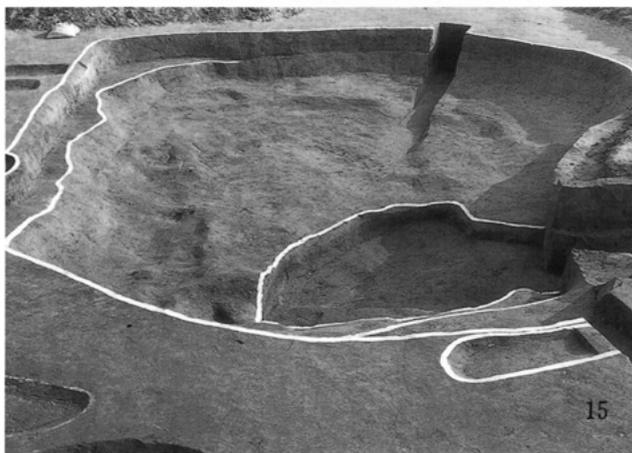
写真10 94C SB06

写真12 93A SB01





14



15



16



17

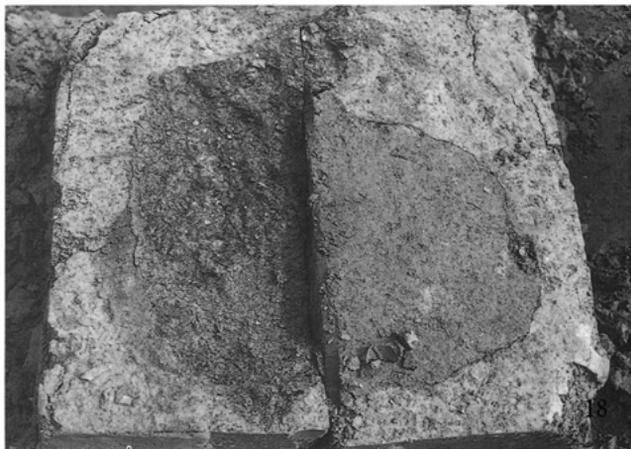


写真14 93A 居住域 | 北から

写真15 93A SX01

写真17 93A 畝状遺構

写真16 93A SK04

写真18 93A 昆虫土坑

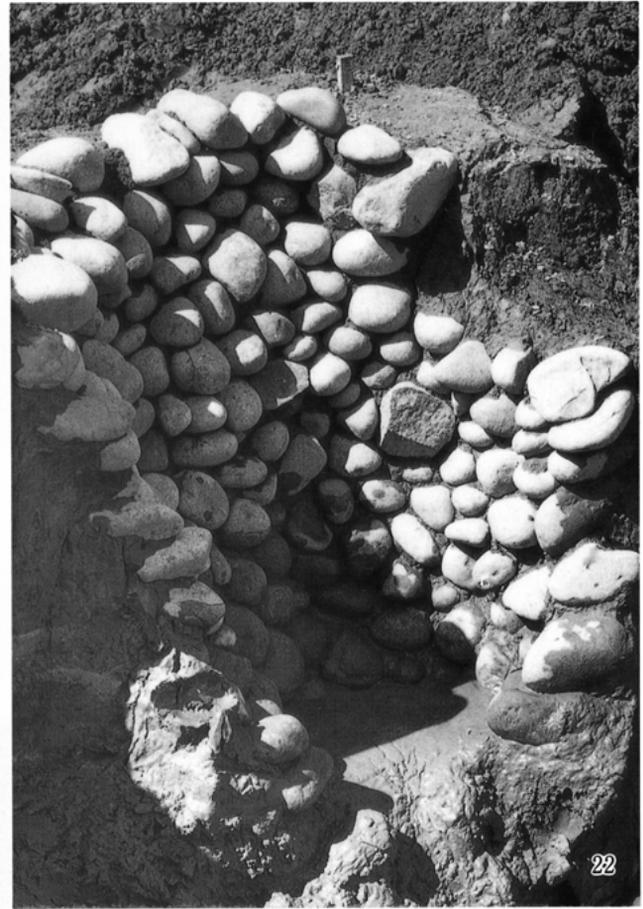


写真19 94I SE02

写真20 94H SE02

写真21 93G SE04

写真22 93C SE03



23



24



25



26

写真23 94D 旧流路Ⅱ層除去前

写真24 94D 方形土坑群

写真25 94D SK13

写真26 94D 旧流路セクション



写真27 94D 旧流路Ⅱ・Ⅲ層除去後

写真28 94G SX02



写真29 94G SX01 敷葉除去後

写真30 94G SX01 セクション

写真31 94G SX01 木組

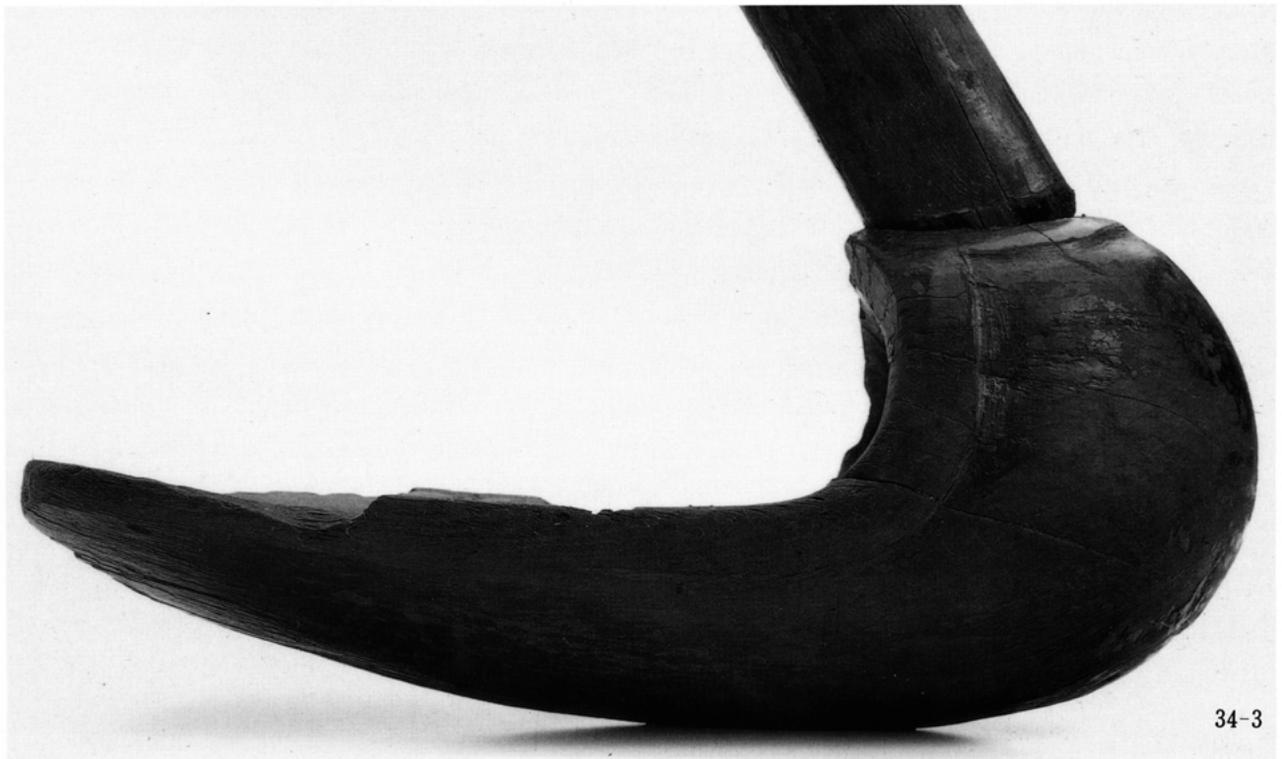
写真32・33 94G SX01 敷葉



34-1



34-2



34-3

写真34 木製鐙

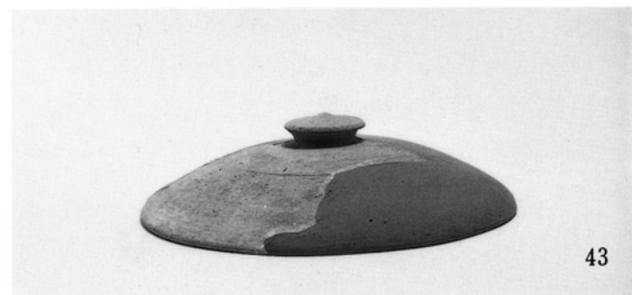
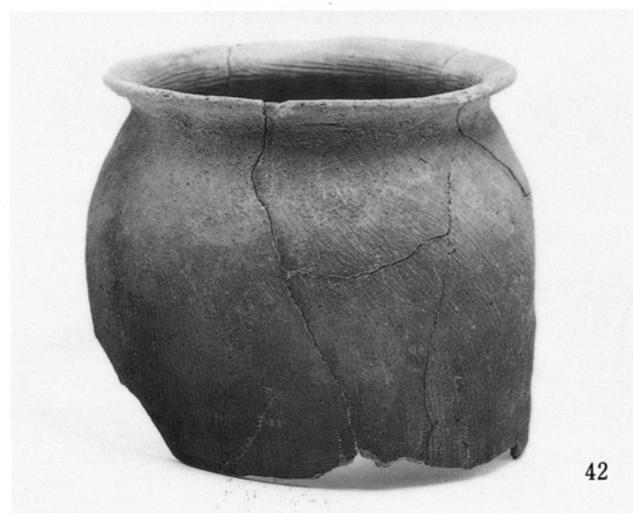
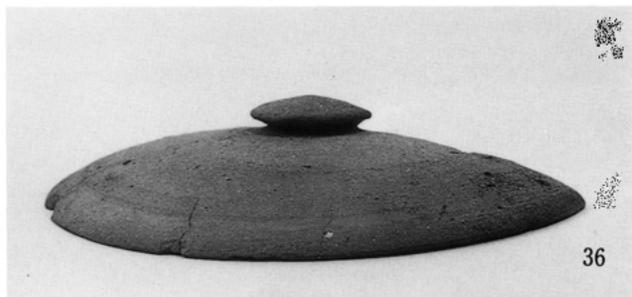
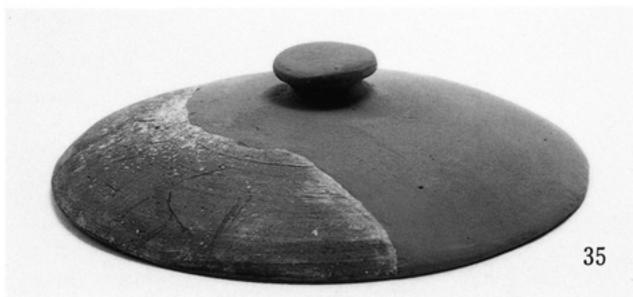


写真35 E-17

写真36 E-11

写真37 E-24

写真38 E-42

写真39 E-23

写真40 E-273

写真41 E-278

写真42 E-43

写真43 E-268

写真44 E-271

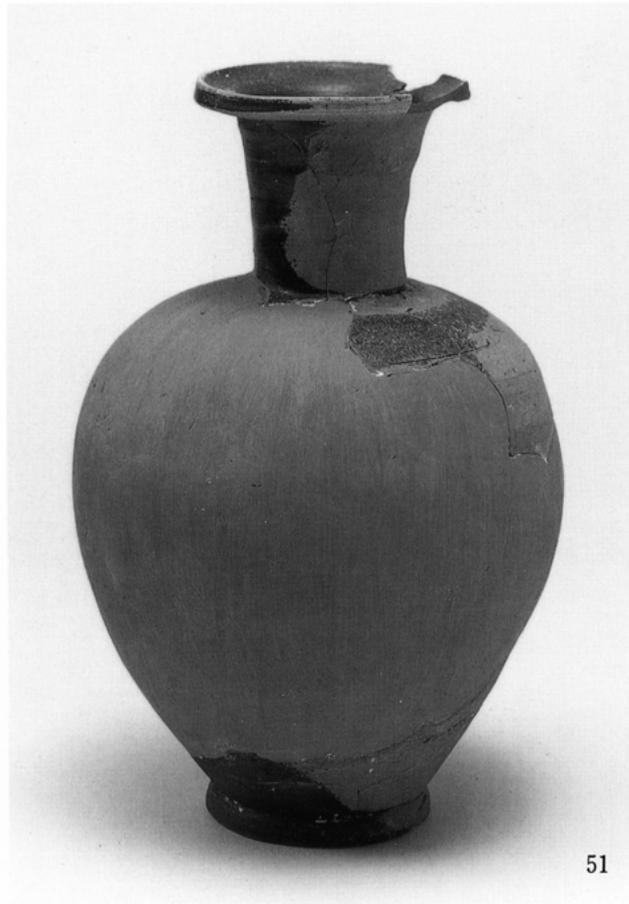


写真45 E-50

写真46 E-52

写真47 E-54

写真48 E-53

写真49 E-104

写真50 E-108

写真51 E-60

写真52 E-56

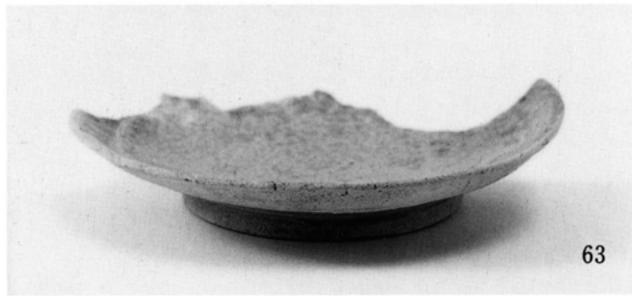


写真53 E-69

写真54 E-70

写真55 E-119

写真56 E-116

写真57 E-294

写真58 E-219

写真59 E-217

写真60 E-218

写真61 E-214

写真62 E-228

写真63 E-210



64



65

写真64 93A SX01集合写真

写真65 94H SD18集合写真

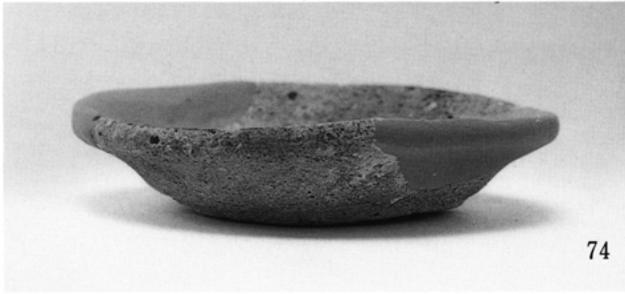
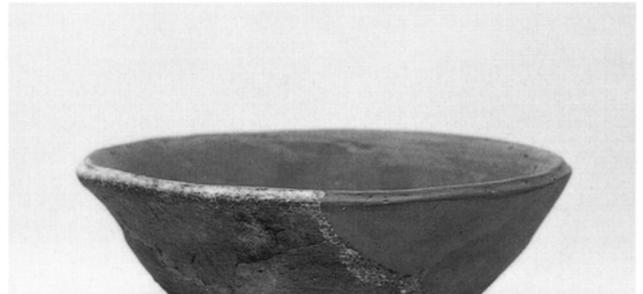
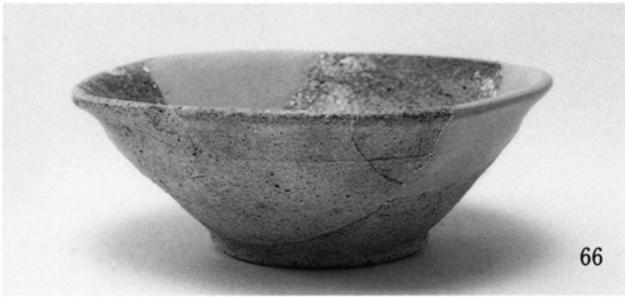


写真66 E-569  
写真71 E-571  
写真76 E-586

写真67 E-578  
写真72 E-551

写真68 E-562  
写真73 E-558

写真69 E-565  
写真74 E-560

写真70 E-572  
写真75 E-582

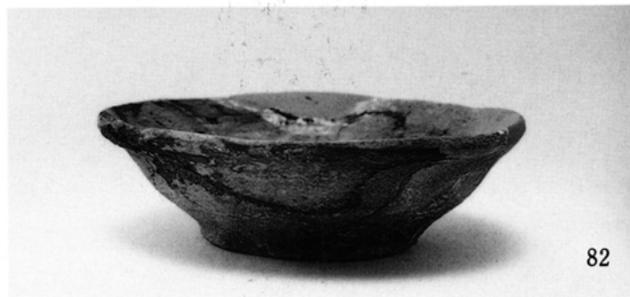
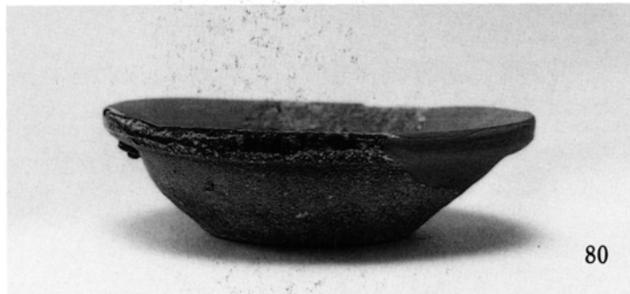


写真77 E-387      写真78 E-362      写真79 E-388      写真80 E-361      写真81 E-371  
写真82 E-360      写真83 E-374      写真84 E-366      写真85 E-373      写真86 E-363  
写真87 E-372      写真88 E-399



89



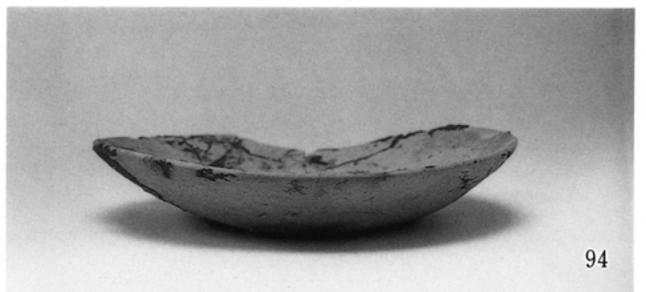
90



93



91



94



92



95

写真89 中世Ⅳ期土師器皿集合写真

写真90 E-648

写真91 E-647

写真92 E-638 写真93 E-696

写真94 E-699

写真95 E-695

※90～92 94H SD09, 93～95 94H SD18

旧流路出土遺物

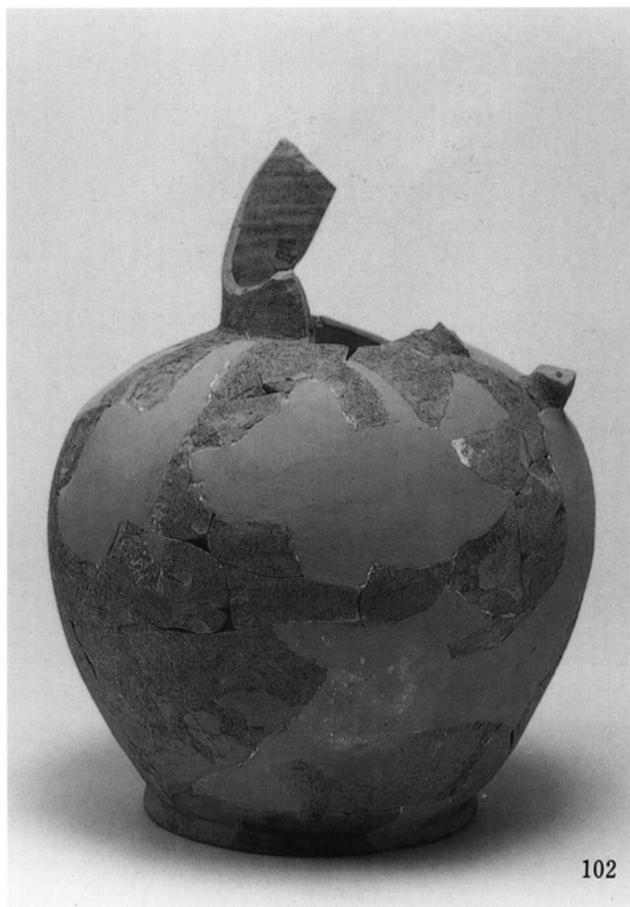
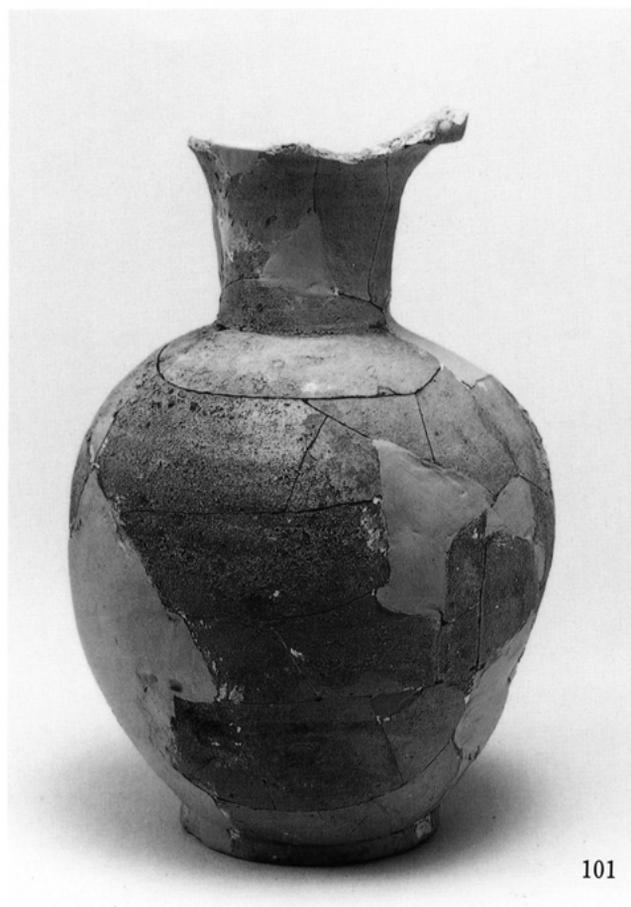


写真96 E-799  
写真100 E-844

写真97 E-782  
写真101 E-862

写真98 E-780  
写真102 E-863

写真99 E-789



103



104

写真103 土錘集合写真

写真104 加工円盤・陶丸集合写真

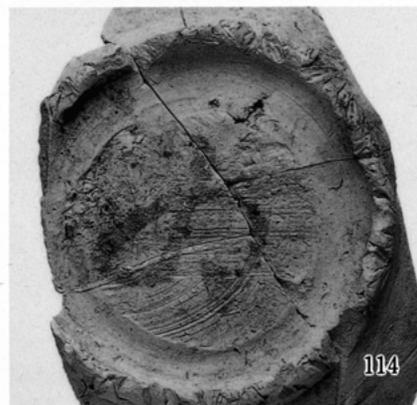
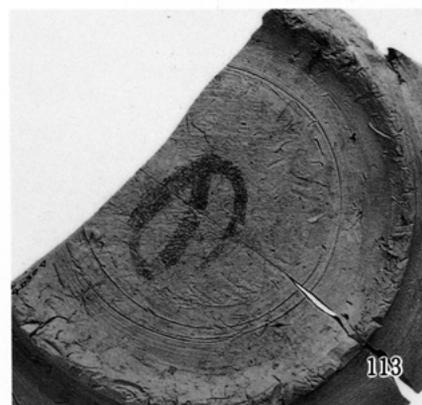
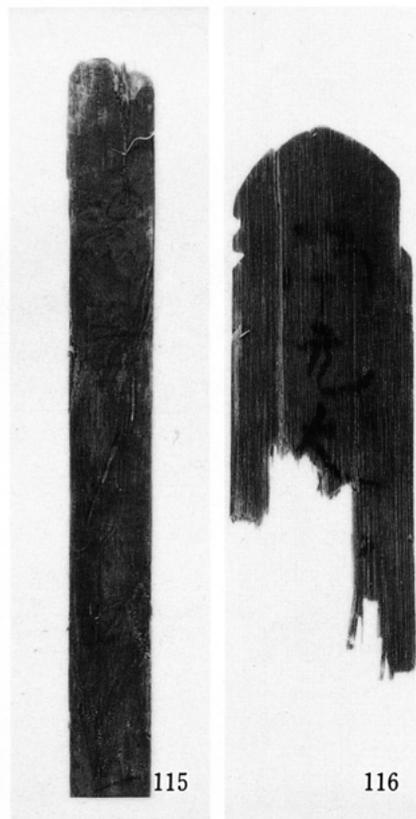
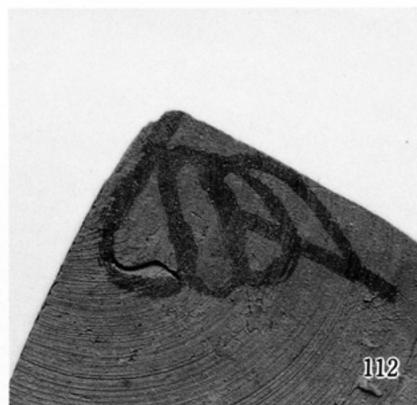
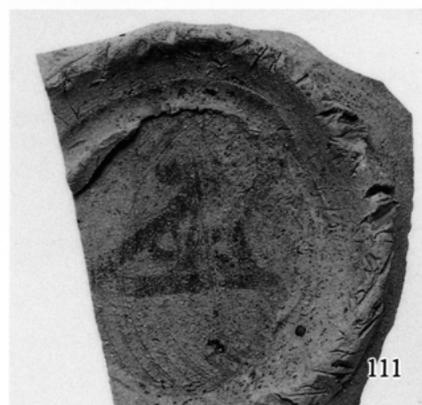
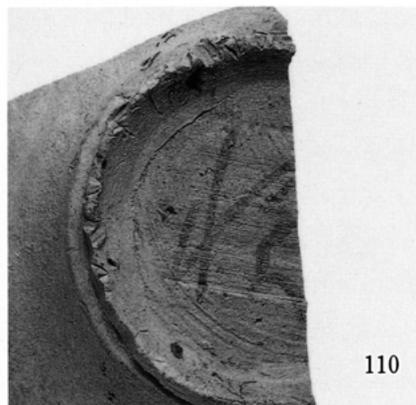
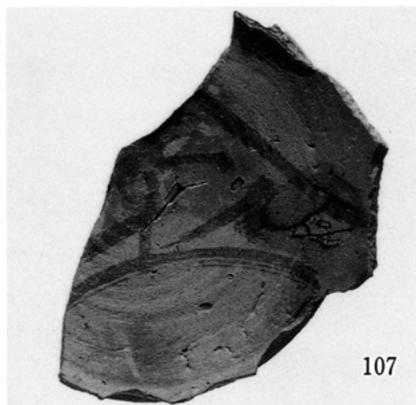
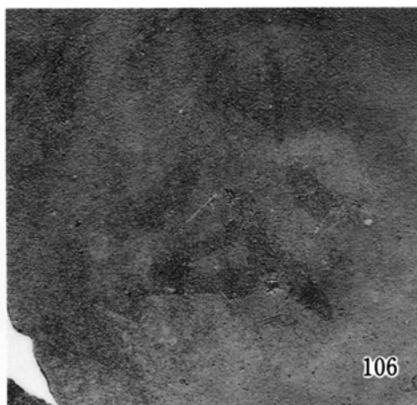


写真105 E-970 「首」

写真108 E-581 「まつ」

写真111 E-965 花押？

写真114 E-962 「ぬ」

写真106 E-969 「公」

写真109 E-973 「まつ」

写真112 E-966 花押？

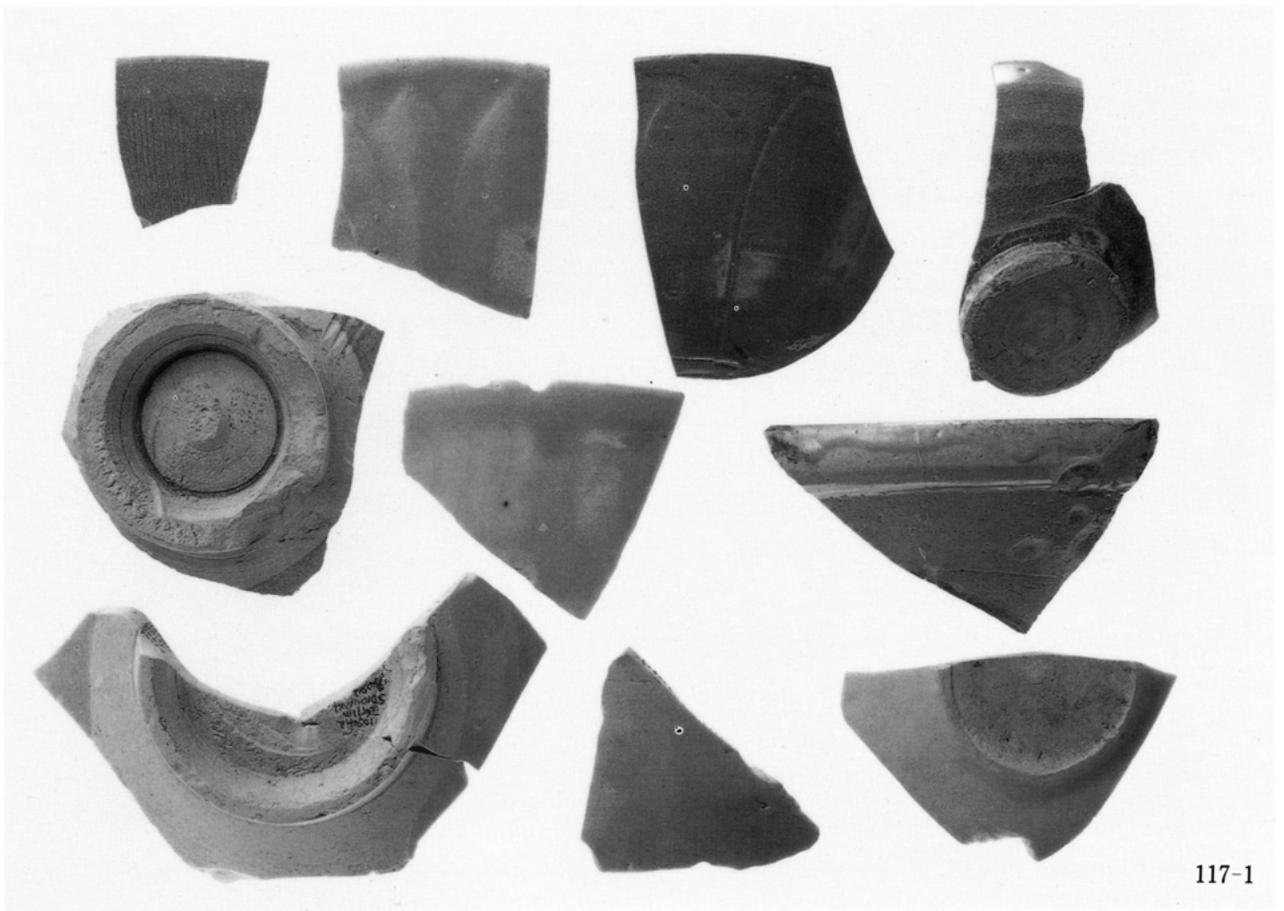
写真115 W-52 呪符木簡

写真107 E-170 「金」

写真110 E-963 「悦」？

写真113 E-959 「の」

写真116 W-53 卒塔婆



117-1

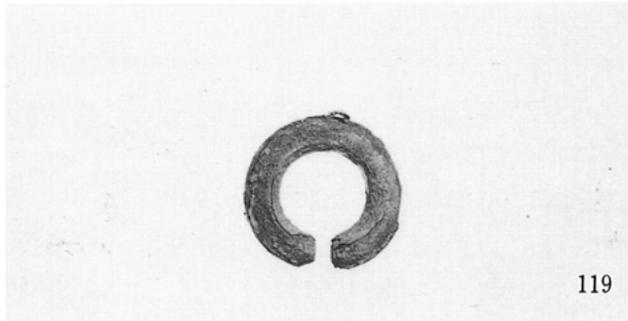


117-2

写真117 貿易陶磁器集合写真



118-1



119



118-2



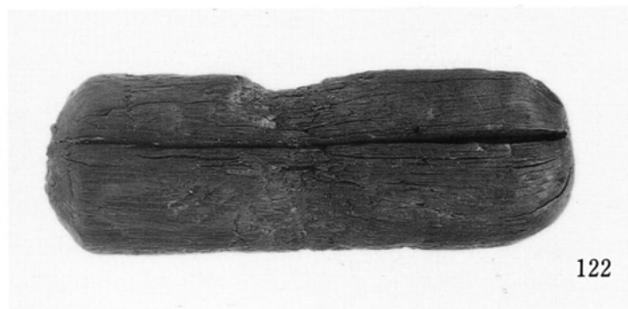
120



121



123



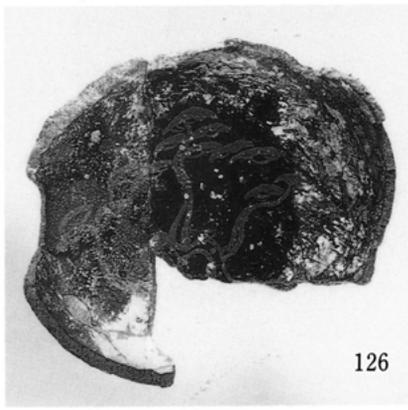
122



124



125



126

写真118 鉄製羽釜

写真119 耳環

写真120 管玉

写真121 不明石製品

写真122 W-41 編具

写真123・124 W-3 漆碗

写真125 W-5 漆碗

写真126 W-2 漆碗

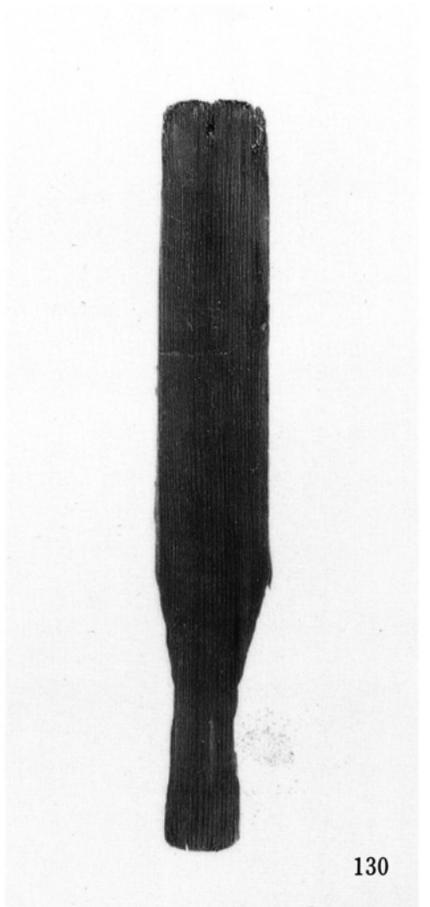
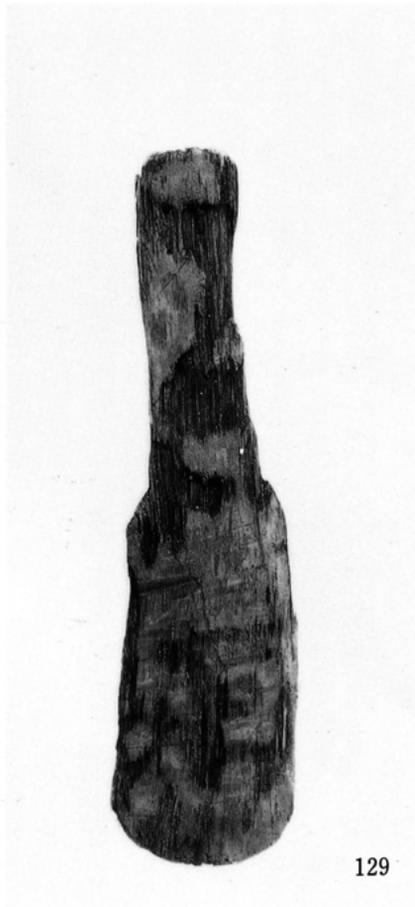
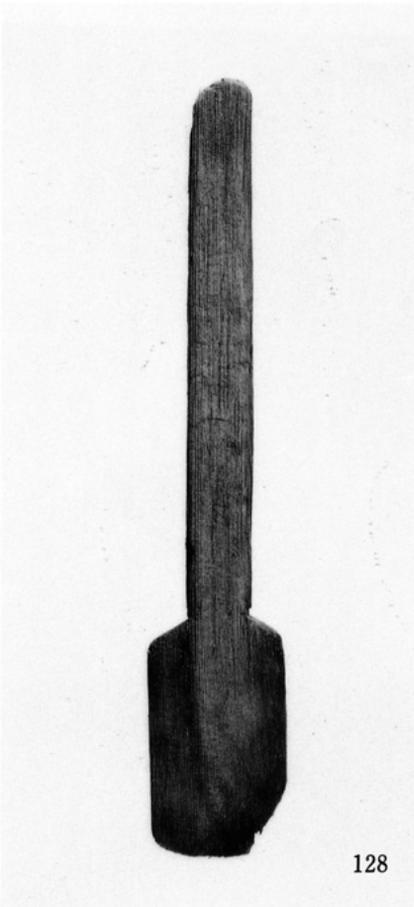


写真127 生活用具集合写真

写真128 W-36

写真129 W-35

写真130 W-49

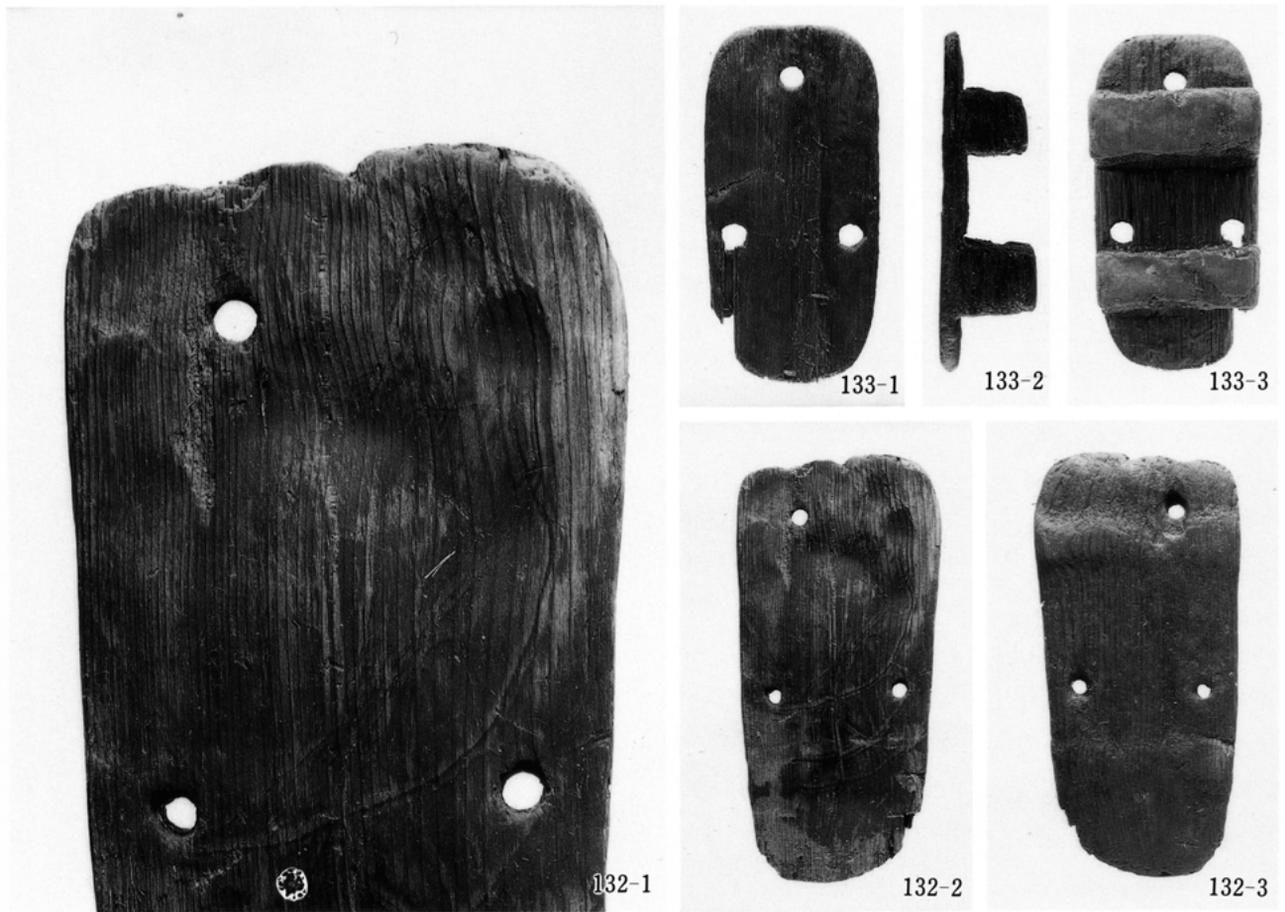
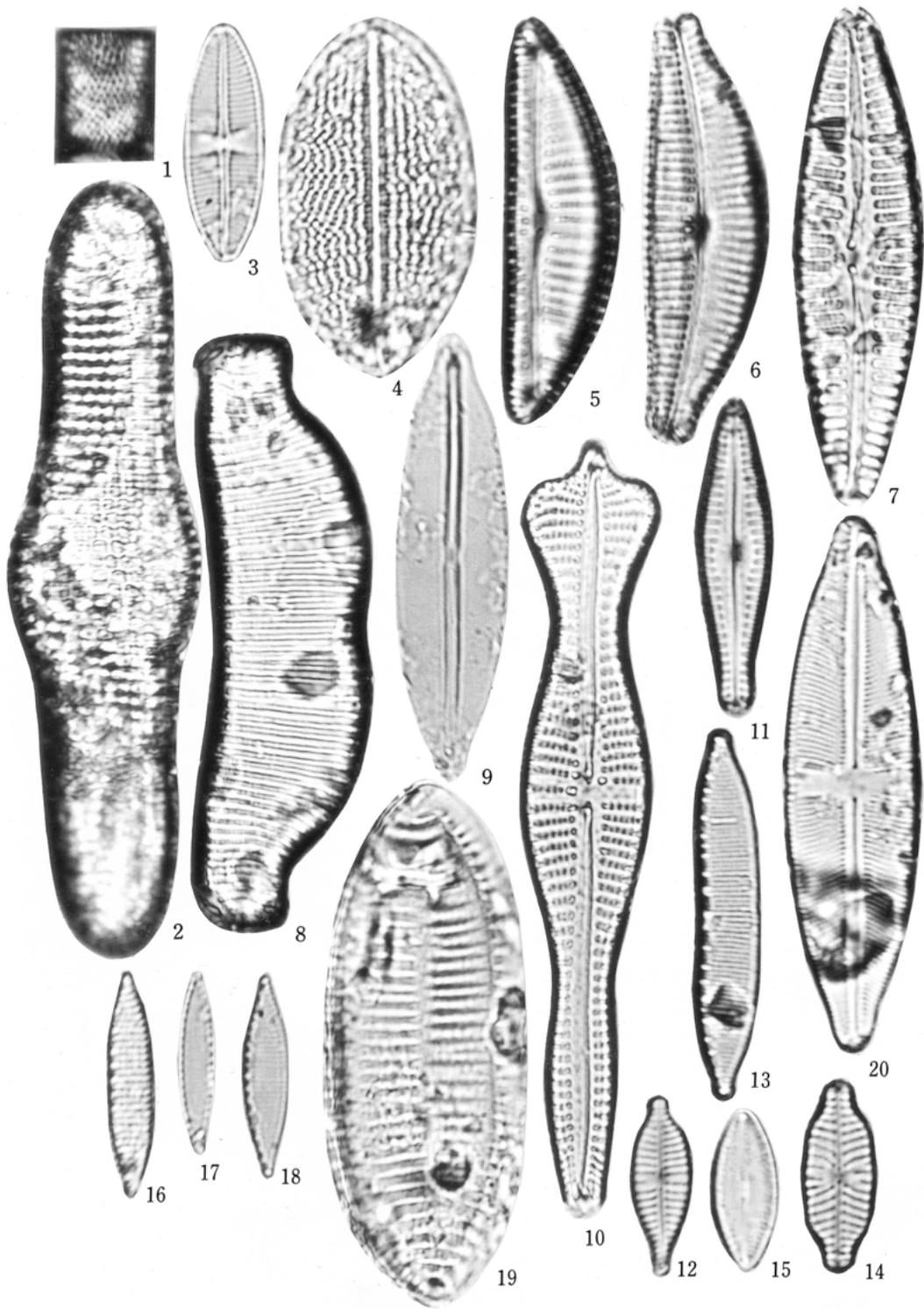


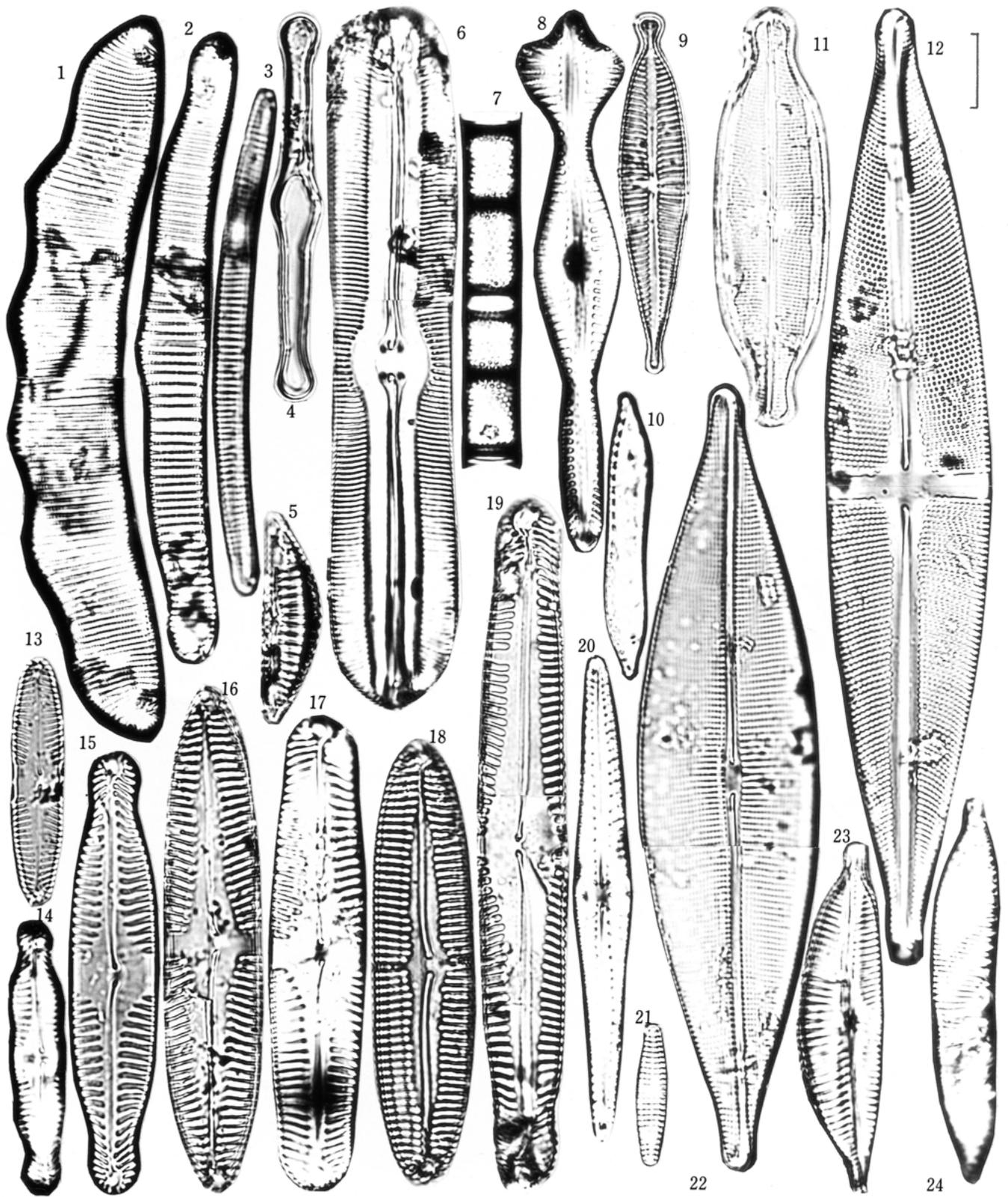
写真131 下駄集合写真

写真132 W-39

写真133 W-37



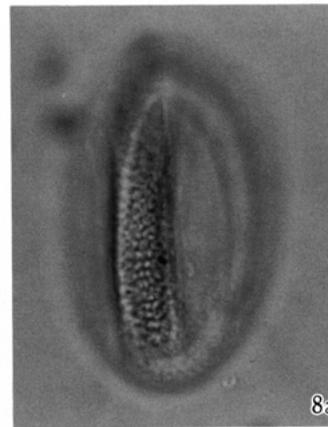
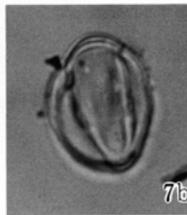
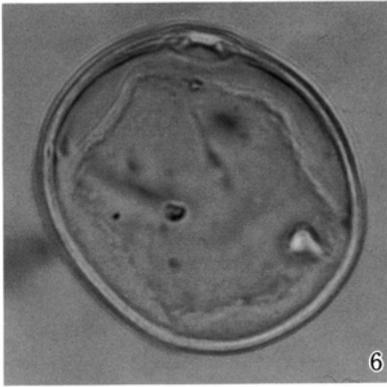
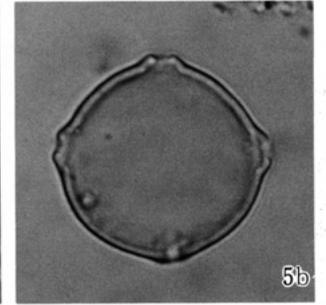
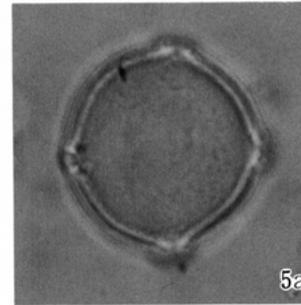
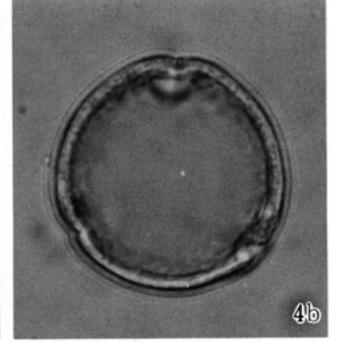
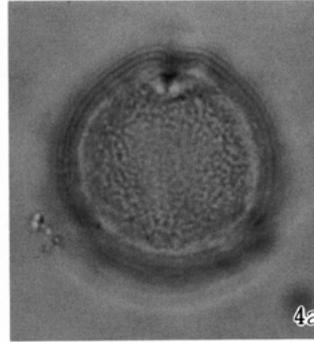
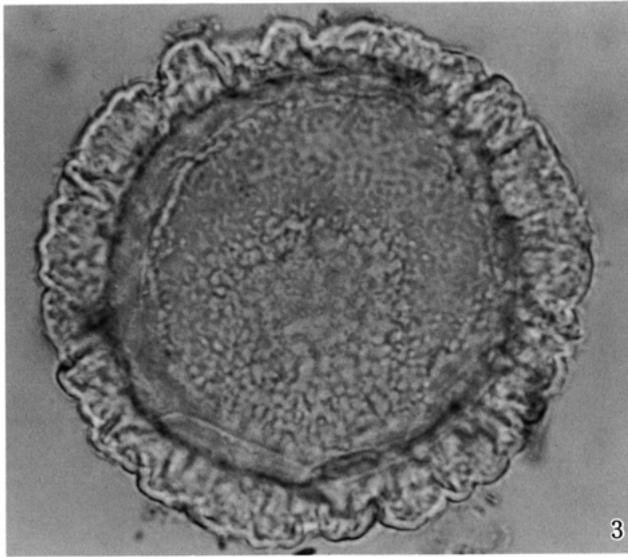
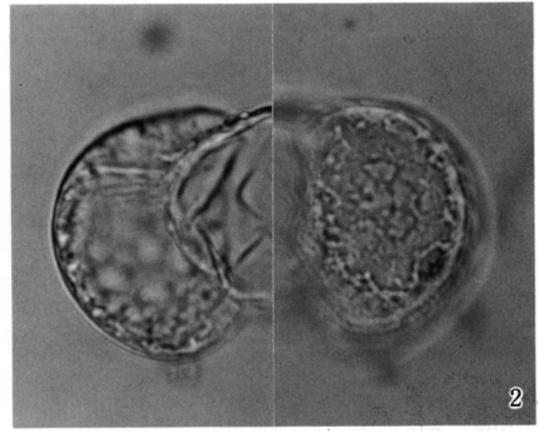
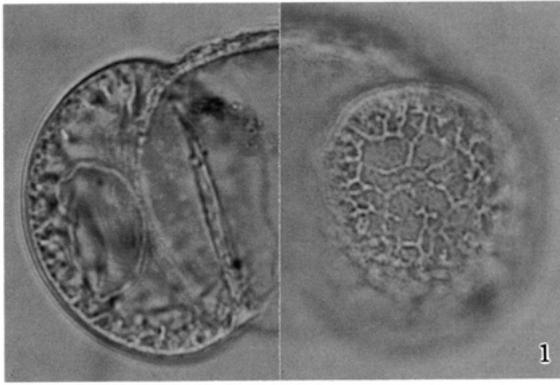
- |   |   |
|---|---|
| 1. <i>Aulacosira italica</i> (Ehr.) Simonsen (A-19)                   | 2. <i>Achnanthes hungarica</i> Grunow (A-19)                            |
| 3. <i>A. inflata</i> Kuetzing (A-3)                                   | 4. <i>Cocconeis placentula</i> v. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve (A-5)     |
| 5. <i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch (93A-1)                          | 6. <i>C. turgidula</i> Grunow (C-2)                                     |
| 7. <i>C. leptoceros</i> (Ehr.) Grunow (C-4)                           | 8. <i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg (C-4)                             |
| 9. <i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i> (Rabh.) Toni (A-23) | 10. <i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg (C-3)                        |
| 11. <i>G. clevei</i> Fricke (C-2)                                     | 12. <i>G. parvulum</i> Kuetzing (A-23)                                  |
| 13. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow (A-18)                  | 14. <i>Navicula elginensis</i> v. <i>negiecta</i> (Kras.) Patri. (A-23) |
| 15. <i>N. confervacea</i> (Kuetz.) Grun. (A-23)                       | 16. <i>Nitzschia amphibia</i> Grunow (A-23)                             |
| 17. <i>N. palea</i> (Kuetzing) W. Smith (A-23)                        | 18. <i>N. fonticola</i> Grunow (A-23)                                   |
| 19. <i>N. tryblionella</i> v. <i>victoriae</i> Grun. (C-12)           | 20. <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehr. (A-23)                |



1. *Eunotia robusta* Raifs
2. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Raben Horst
3. *Eunotia lunaris* (Ehr.) Grunow
4. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kützing
5. *Cymbella minuta* Hilse
6. *Navicula americana* Ehrenberg
7. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) O.Müller
8. *Gomphonema acuminatum* var. *coronata* (Ehr.) W.Smith
9. *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg
10. *Nitzschia obtusa* W.Smith
11. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer
12. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg

13. *Pinnularia subcapitata* Gregory
14. *Pinnularia interrupta* W.Smith
15. *Pinnularia interrupta* W.Smith
16. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Clere
17. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Clere
18. *Pinnularia viridis* (Nitq.) Ehrenberg
19. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
20. *Gomphonema gracile* Ehrenberg
21. *Fragilaria riescens* Ralfs
22. *Naricula cuspidata* (Kütz.) Kützing
23. *Cymbella nariculiformis* Auerswald
24. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow

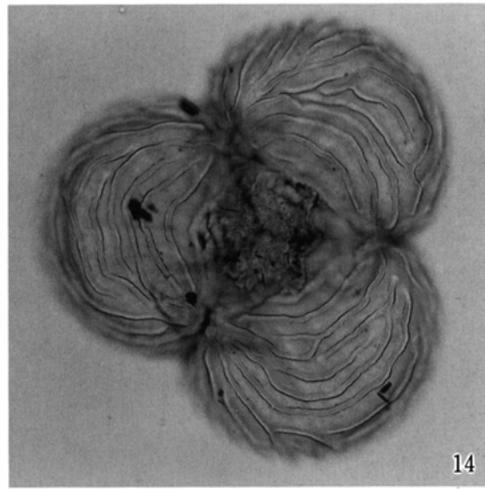
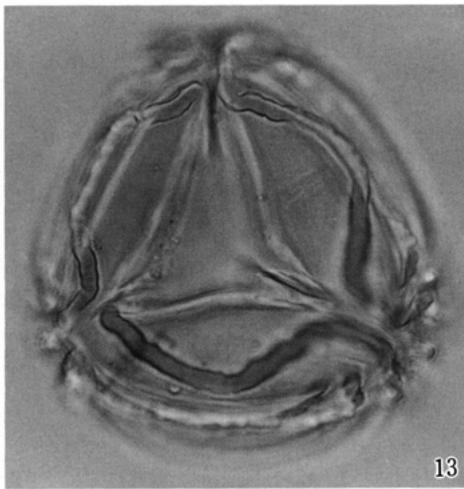
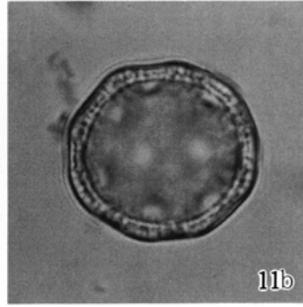
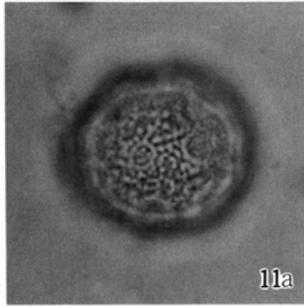
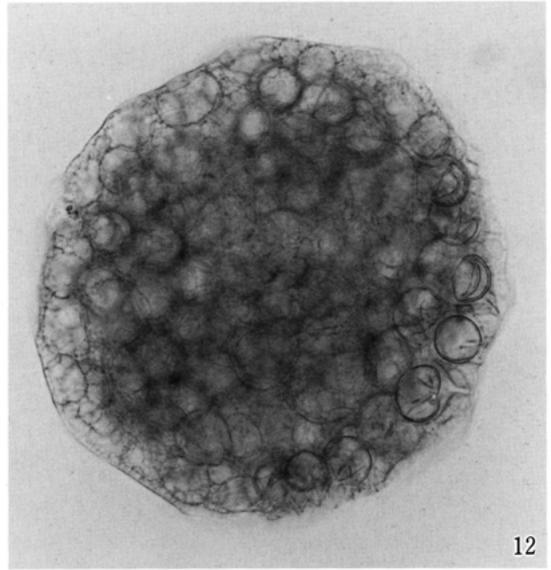
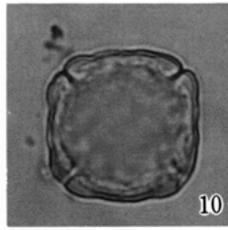
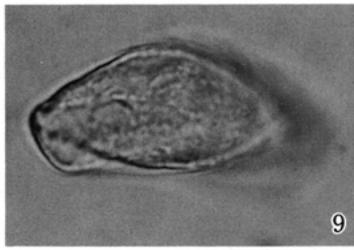
写真135 珪藻遺骸の顕微鏡写真  
(93A区 SX01および94G区、旧流路堆積物)



50 $\mu$ m

1. マツ属複維管束亜属 (試料番号A-21)
3. ツガ属 (試料番号A-19)
5. クマシデ属 (試料番号A-20)
7. キカングサ属 (試料番号A-17)

2. マキ属 (試料番号A-21)
4. ブナ属 (試料番号A-20)
6. イネ科 (試料番号A-21)
8. ソバ属 (試料番号A-19)



50 $\mu$ m

(9-11)

50 $\mu$ m

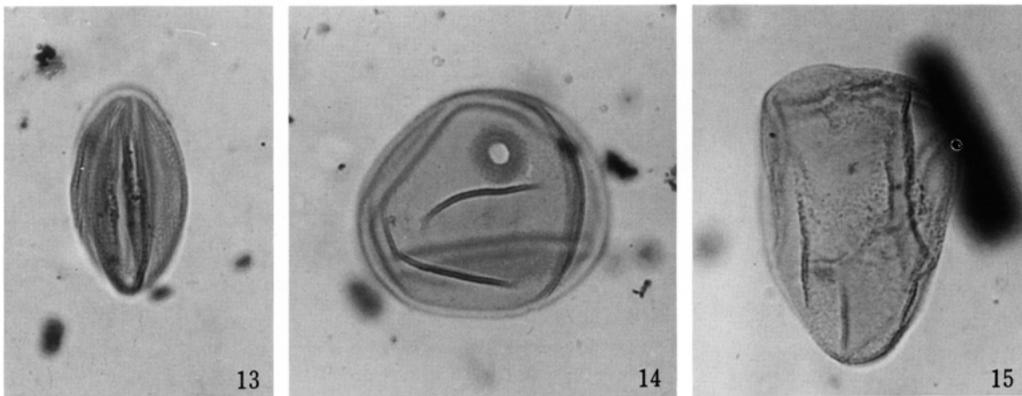
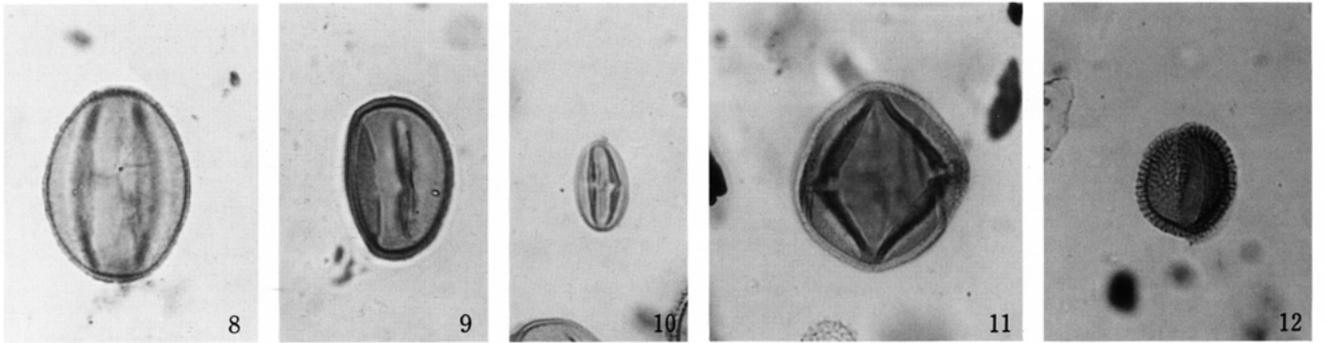
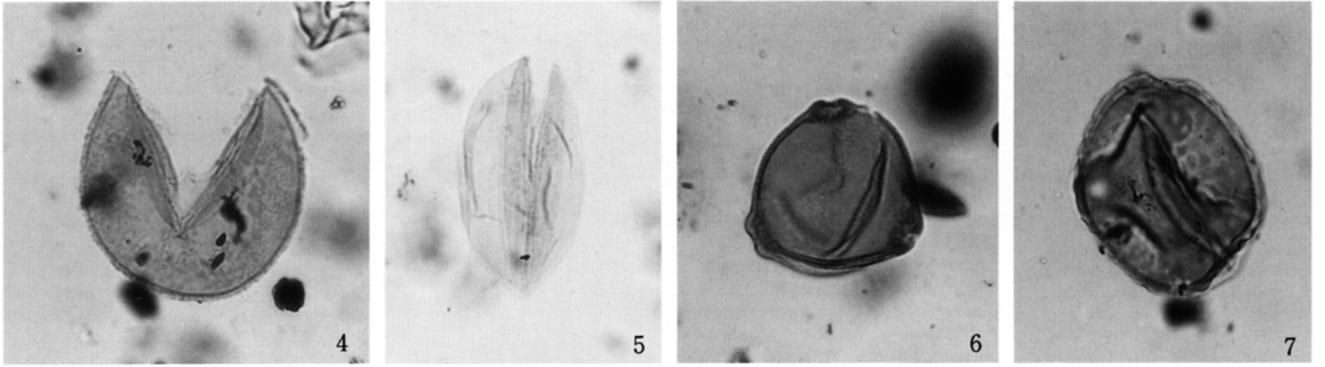
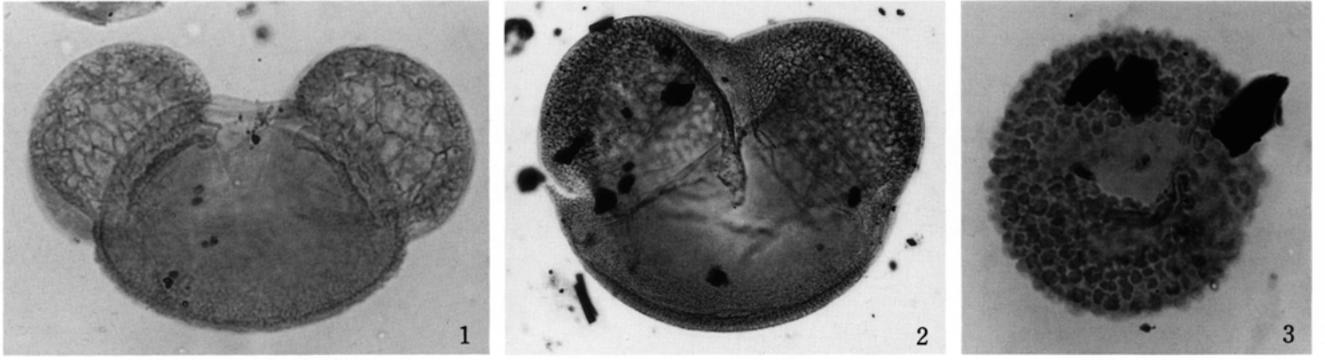
(13)

50 $\mu$ m

(12, 14)

- 9. ミズアオイ属 (試料番号A-17)
- 11. ナデシコ科 (試料番号A-17)
- 13. ミズワラビ属 (試料番号A-19)

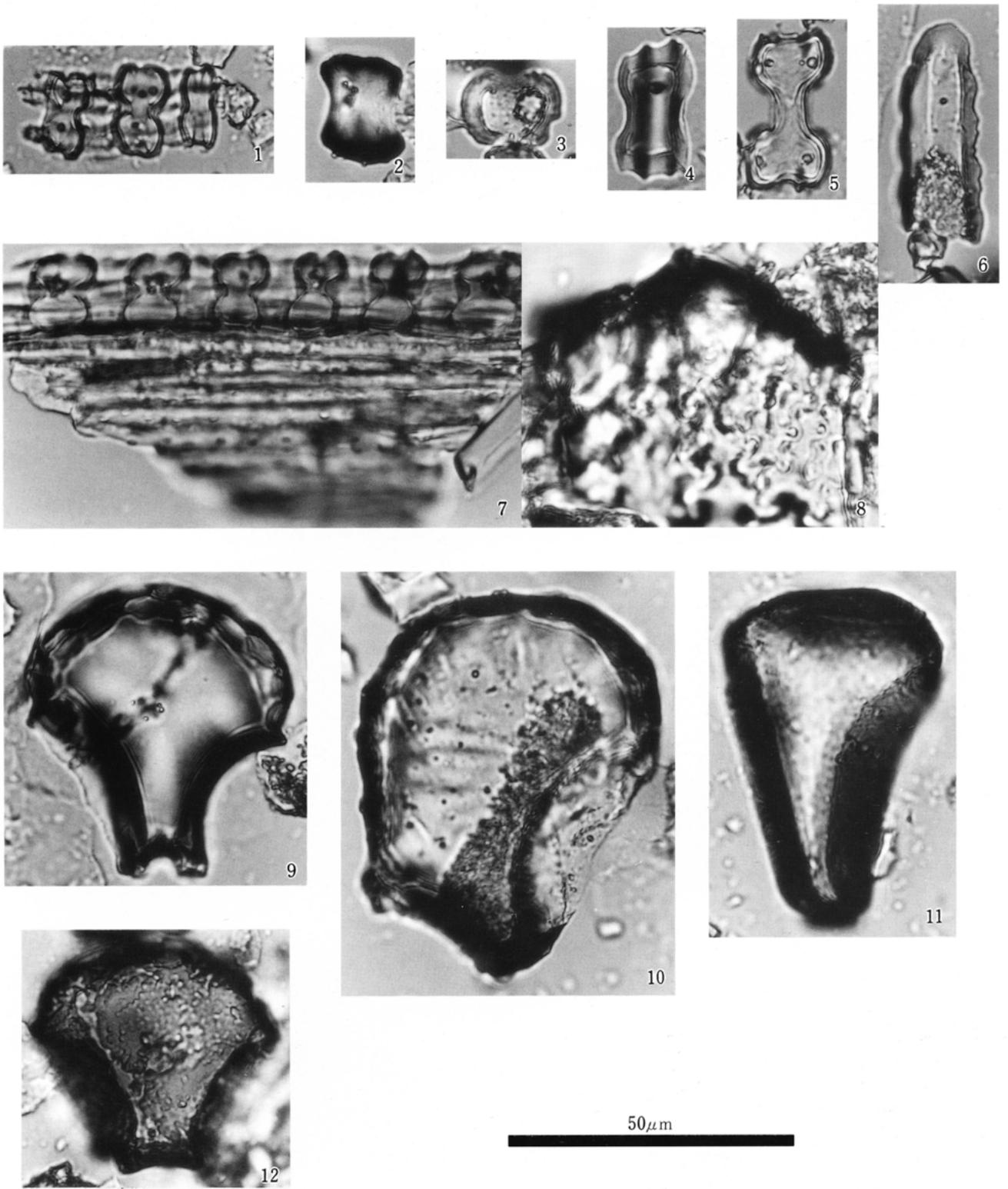
- 10. アリノトウグサ属 (試料番号A-19)
- 12. サンショウモ (試料番号A-21)
- 14. ミズワラビ属 (試料番号A-17)



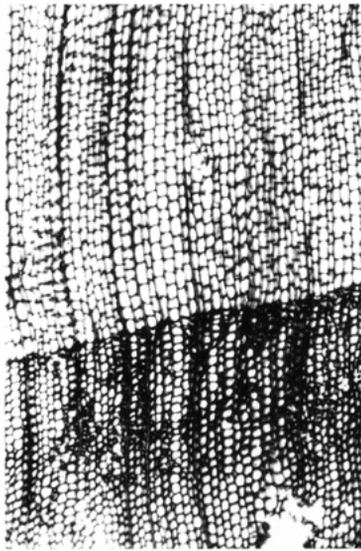
- |                    |             |             |
|--------------------|-------------|-------------|
| 1. マツ属             | 6. カバノキ科    | 11. ツバキ属    |
| 2. モミ属             | 7. ニレ属・ケヤキ属 | 12. モクセイ科   |
| 3. コウヤマキ属          | 8. コナラ亜属    | 13. ウリ科     |
| 4. スギ属             | 9. コナラ亜属    | 14. イネ科     |
| 5. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 | 10. シイノキ属   | 15. カヤツリグサ科 |

100μm 2以外

100μm 2のみ



- |                        |                          |
|------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (C-4)       | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (C-15)     |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (C-15)    | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (C-20)   |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (C-31)   | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (C-14) |
| 7. イネ属短細胞列 (C-19)      | 8. イネ属穎珪酸体 (C-34)        |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体 (C-19)   | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (C-3)     |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (C-3) | 12. タケ亜科機動細胞珪酸体 (C-20)   |



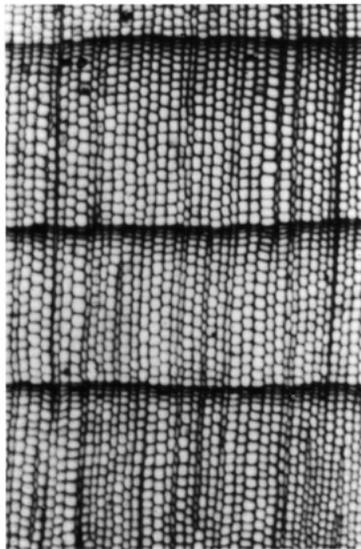
1a マツ属 ×60



1b ×600



×60



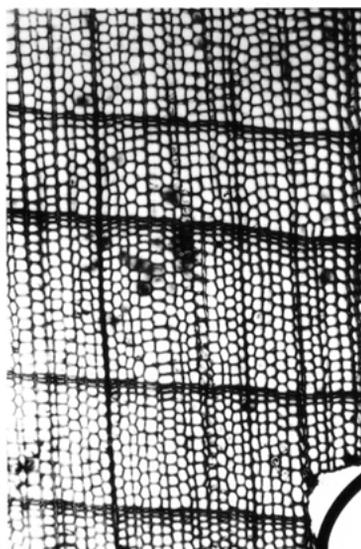
2a スギ属 ×60



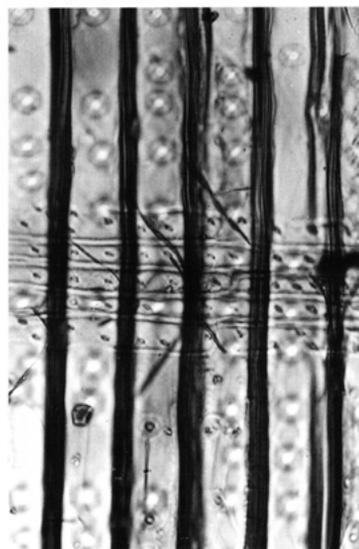
2b ×300



2c ×60



3a ヒノキ属 ×60



3b ×300



3c ×60



岐阜城

木曾川

木曾川町

東海北陸自動車道

大毛沖遺跡

尾西市

一宮市

名神高速道路

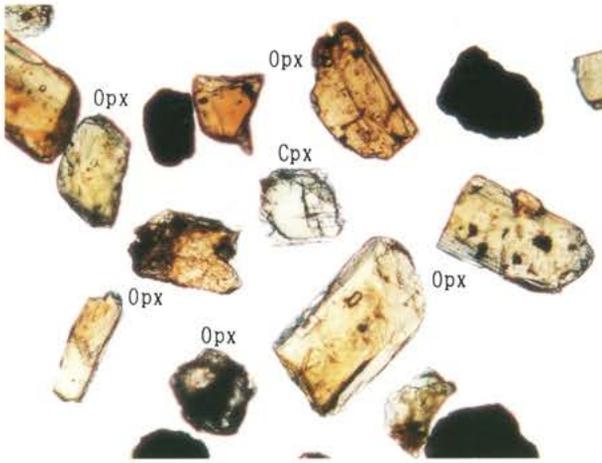
写真140 濃尾平野南から望む (1994年撮影)



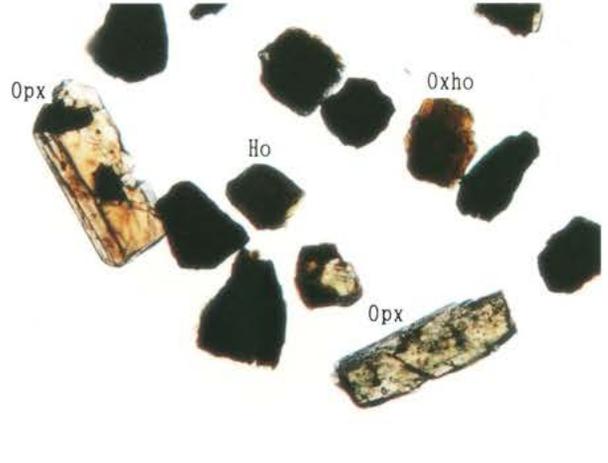
写真141 旧流路出土遺物集合写真



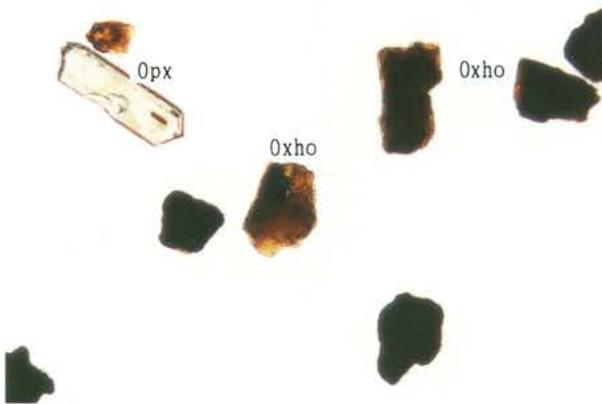
写真142 木製鏡



1. 試料番号31 ( I 1 型)



2. 試料番号51 ( I 2 型)



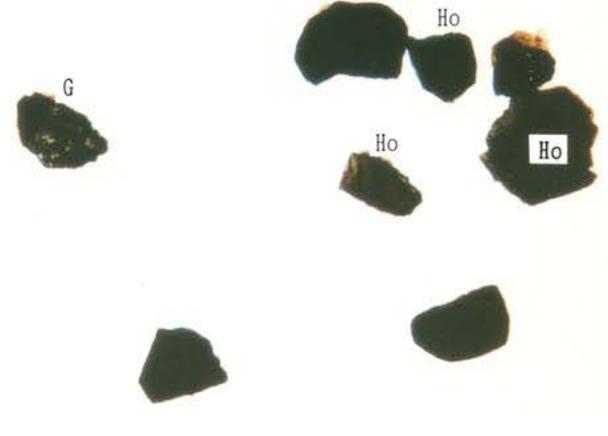
3. 試料番号40 ( I 4 型)



4. 試料番号33 ( II 1 型)



5. 試料番号41 ( II 2 型)



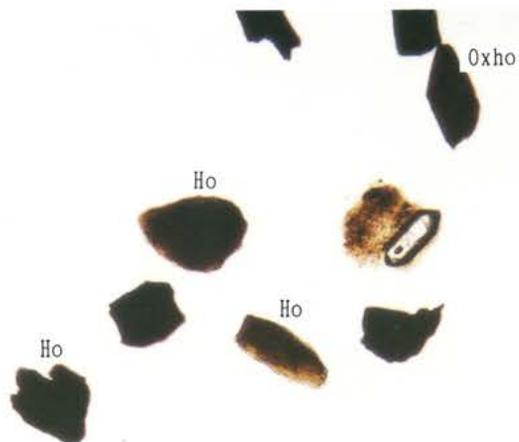
6. 試料番号45 ( III 1 型)

0.5mm

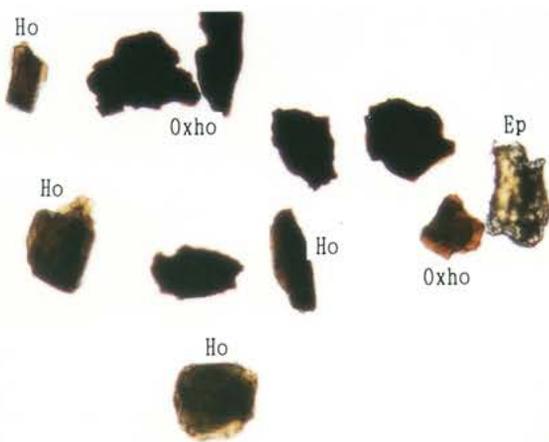
Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, G:ザクロ石, Opxq:不透明鉱物



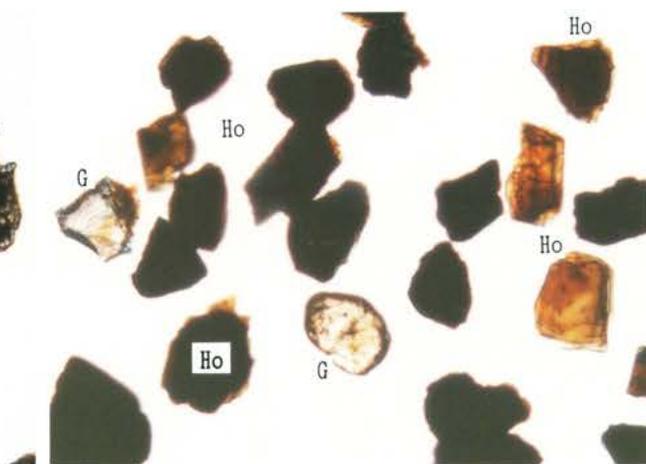
7. 試料番号32 (Ⅲ 4 型)



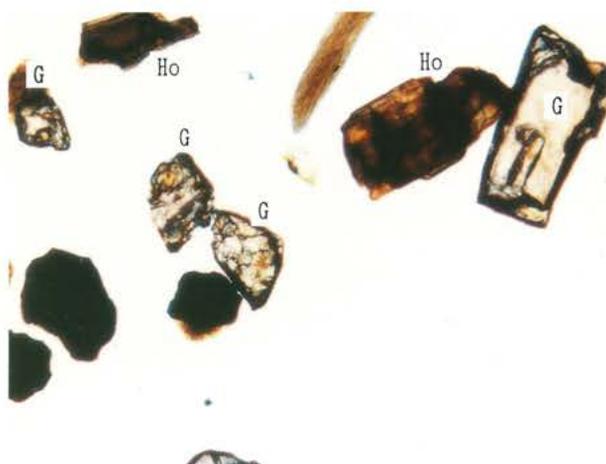
8. 試料番号58 (Ⅳ 1 型)



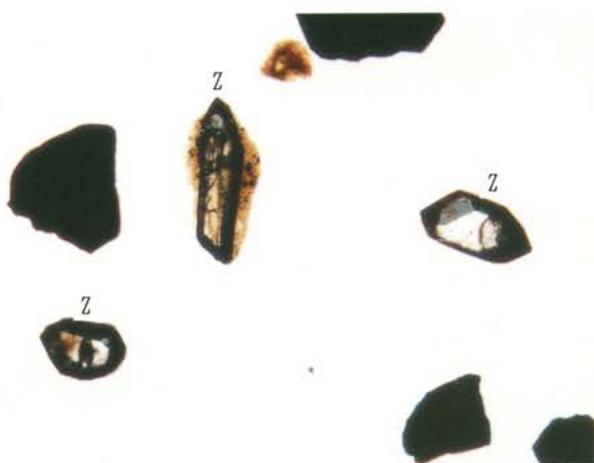
9. 試料番号23 (Ⅳ 2 型)



10. 試料番号1 (Ⅴ 1 型)



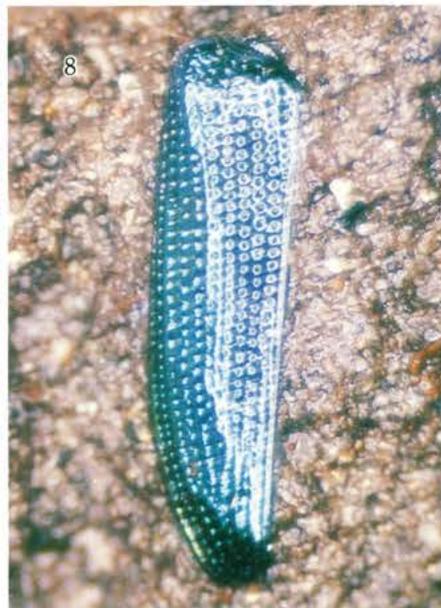
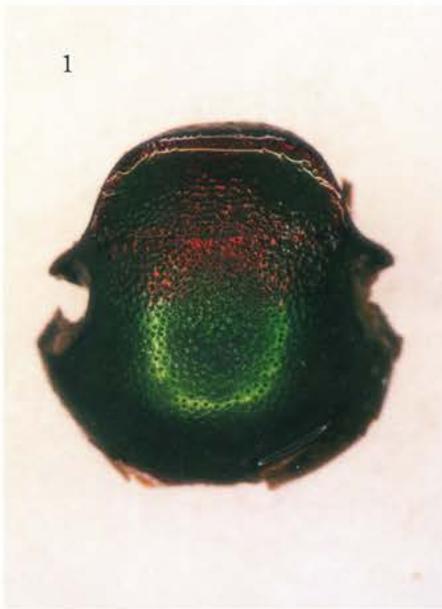
11. 試料番号60 (Ⅴ 2 型)



12. 試料番号57 (Ⅵ 1 型)

0.5mm

Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母, Z:ジルコン, G:ザクロ石, Ep:緑レン石



1. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY (食業性の畑作害虫)  
頭部 幅3.6mm(SK15-標本4)
2. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY (食業性の畑作害虫)  
前胸背板 幅7.6mm(SK15-標本1)
3. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY (食業性の畑作害虫)  
右鞘翅 長さ9.6mm(SK56-標本13)
4. コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* WATERHOUSE (食業性の人里昆虫)  
右鞘翅 長さ4.4mm(SK15-標本37)
5. マグソコガネ *Apodis rectus* (MOTSCHULSKY) (食業性の人里昆虫)  
左鞘翅 長さ3.6mm(SX01-標本40)
6. ヨモギハムシ *Chrysolina aurichalcea* (MANNERHEIM) (陽地性の人里昆虫)  
左鞘翅 長さ8.4mm(SK56-標本84)
7. ミズスマシ *Gytrius japonicus* (SHARP) (淡水性の水生昆虫)  
左鞘翅 長さ5.1mm(A5層-標本6)
8. イネネクイハムシ *Donacia provosti* FAIRMAIRE (湿地性の畑作害虫)  
左鞘翅 長さ4.9mm(A6層-標本28)
9. フトネクイハムシ *Donacia clavareau* GOECKE (冷温帯性の湿地性昆虫)  
右鞘翅 長さ7.8mm(A1層-標本16)

## 報告書抄録

フリガナ	オオケオキイセキ
書名	大毛沖遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第66集
編著者名	高橋信明・小池一徳・栗林典昭・牧謙治・服部俊之・堀木真美子・鬼頭剛 永井宏幸・竹ノ脇智子・久保禎子・森勇一・三辻利一・矢作健二
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1996年 8月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オオケ 大毛沖	イナハシ オオケ 一宮市 大字大毛	23000	025004	35°21'40"	136°48'10"	19930401  19950930	37612	遺跡（東海 北陸自動車 道）建設に 伴う事前調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大毛沖	集落跡	古代	竪穴住居 溝	須恵器・土師器・灰 釉陶器・墨書土器	
		中世	井戸 方形土坑 溝	灰釉系陶器・施釉陶 器・土師器・貿易陶 磁器・銭貨・下駄・ 漆容器・卒塔婆	
		古代	護岸施設	木製鐙・鉄製羽釜 須恵器・灰釉陶器・ 土師器・灰釉系陶器 ・墨書土器・土錘・ 下駄	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集

大毛沖遺跡

1996年8月30日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 正 鶴 堂